富士宮市文化財調査報告書 第23集

滝戸遺跡

— 市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1997

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書 第23集

滝戸遺跡

— 市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1997

富士宮市教育委員会

序

壮大な富士の山麓では、その雪解け水が幾多の年月を経て富士山の地下伏流水となり、地上に湧出する湧水地が各所に見られます。天然記念物に指定されている『白糸の滝』や『湧玉池』などは、その代表であり、また、市内を縦断する芝川や潤井川の水源も然りであります。

このコンコンと湧き出る豊富な水は、悠久の富士山西南麓の歴史の中で、原始、古代より多くのムラを発展させ、その生活の礎となってまいりました。この人々の生活の跡は、富士宮市内でも 200に及ぶ『遺跡』として確認され、古の郷土の歴史を伝える極めて貴重な『文化財』となっております。

滝戸遺跡は、それらの遺跡群の一つで、潤井川右岸の広大な丘稜に展開する遺跡として、昭和の初めから広く知られておりましたが、戦後、市立富士宮第三中学校建設に伴い、膨大な縄文土器や弥生土器が出土したことにより、縄文時代から連綿と続く有力なムラの存在が期待され、この岳南地方を代表する複合遺跡として一躍脚光を浴びるようになりました。

今回の報告は、昭和51年以来、学校の施設改善を主とした各種建設事業に伴う発掘調査をまとめたものでありますが、諸般の事情により最初の発掘調査から約20年の歳月を経て発刊にこぎつけたものであります。

先人が残した貴重な文化財を保護し、将来に伝えていくことは、我々市民の使命でありますが、時は昭和から平成に変わり、中学校も設立50周年を迎えようとするこの時期に、待望久しかった発掘報告書が富士宮市文化財調査報告書第23集『滝戸遺跡』として世に発表できたことは、文化財の保存とその公開ができ、このうえない喜びであり、改めてその使命の重要性を認識しております。

本書につきまして、多く方々のご批判とご指導を承りますとともに、長きに亘って発掘調査から本書の刊行までご協力、ご支援賜りました地元関係者および学校関係者の皆様に対しまして、深く感謝と敬意を表します。

平成９年３月

富士宮市教育委員会
教育長　藤井　國利

例　　言

1．本書は静岡県富士宮市野中658番地外に所在する『滝戸（たきど）遺跡』の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は富士宮市教育委員会が計画した市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴うもので、以下の４次にわたって行われたものである。

第Ⅰ次調査（昭和51年７月23日～８月19日）滝戸遺跡発掘調査団（若林淳之団長）
第Ⅱ次調査（昭和52年７月24日～８月30日）　　同　上
第Ⅲ次調査（昭和54年７月21日～８月11日）富士宮市教育委員会
第Ⅴ次調査（昭和62年５月11日～８月27日）　　同　上

なお、この間の昭和57年６月２日～８月31日まで第Ⅳ次調査として、富士土木事務所より委託を受けた潤井川護岸建設工事に伴う事前の発掘調査を富士宮市教育委員会が実施している。

3．整理作業、ならびに報告書刊行事業は平成５年４月１日より平成９年３月31日まで４年次にわたり富士宮市教育委員会が実施したものである。

馬飼野行雄（富士宮市教育委員会学芸員）
渡井　英誉（　　同　上　　）
芦川美智子・渡辺麻里・望月利恵・藤巻千代子・佐藤節子・川合美枝子・中山民子
山崎芙美子・望月秀雄・内藤裕之（富士宮市臨時職員）

4．本書の執筆、ならびに編集は馬飼野と渡井が行い、植松章八富士宮市文化財保護審議会委員（県立静岡中央高校副校長）に玉稿を賜っている。

序　編 …… 馬飼野行雄・植松章八
弥生・古墳時代編 …… 渡井英誉
縄文時代編 …… 馬飼野行雄

5．地形図、実測図に記す高度は全て海抜高度をもって示している。

6．本書に用いた地形図は昭和45年２月に建設省国土地理院長の承認を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。

7．土器実測図は弥生・古墳時代編が1/3、縄文時代編が1/4、土器拓影図が1/3の縮尺で、石器実測図は小型石器が2/3、中型石器が1/3、大型石器が1/5の縮尺で掲載し、それぞれの図中に縮尺を示してある。

8．土器観察表に記す胎土の略語は以下のとおりである。

粗…粗粒　細…細粒　多…多量　少…少量　微…微量　長…長石　英…石英
雲…黒雲母　金雲…金雲母　砂…角閃石・輝石・カンラン石を混える物

9．土器観察表に記す色調は破片面積のもっとも広い範囲を専有する色合いである。新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局監修）で補っている。

10．本書の印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会文化課文化財係が行った。

11．発掘調査に関する資料は全て富士宮市教育委員会で保管している。

目　　次

序　　編

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1
　A．遺跡の位置と環境 …… 1
　B．周辺の遺跡 …… 2
Ⅱ．遺跡の占有と土層 …… 11
　A．遺跡の占有 …… 11
　B．遺跡の土層 …… 13
Ⅲ．調査の経緯と経過 …… 15
Ⅳ．滝戸遺跡の発見・発掘調査とその研究（植松章八） …… 19
　A．滝戸遺跡と戦前の理解 …… 19
　　1．滝戸遺跡の発見 …… 19
　　2．滝戸人と人種・民族論争 …… 19
　　3．岳南考古学会と郷土研究の隆盛 …… 21
　B．市立富士宮第三中学校の建設・発掘調査と戦後の研究 …… 22
　　1．戦後の考古学ブームと滝戸遺跡の破壊 …… 22
　　2．校舎建設工事に伴う調査報告と『富士宮市史』の研究 …… 23
　C．発掘調査とその成果 …… 25
　　1．民間研究者とＰＴＡ会員による調査（第Ⅰ・Ⅱ次）から行政職員による調査（第Ⅲ・Ⅴ次へ） …… 25
　　2．発掘調査で分かったこと …… 26
　　3．配石遺構をめぐる２・３の問題について …… 28

弥生・古墳時代編

Ⅰ．遺　構 …… 37
Ⅱ．出土遺物 …… 51
　A．分類 …… 51
　B．遺構出土の土器 …… 59
Ⅲ．土器編年 …… 61
　A．基準資料 …… 61
　B．台付甕の型式変化 …… 65
　C．広口壺の型式変化 …… 73
　D．広口壺Ｂと広口壺Ｃの口縁部 …… 81
　E．土器編年 …… 84
Ⅳ．まとめにかえて－滝戸遺跡の時代設定－ …… 92

縄文時代編

Ⅰ．遺　物 …… 155
　A．土器 …… 155
　B．再利用土器片 …… 202
　　1．土器片円盤 …… 202
　　2．土器片錘 …… 204
　C．土偶 …… 210
　D．石器 …… 211
　E．ドングリ類 …… 258
Ⅱ．遺　構 …… 285
　A．縄文第1面の遺構 …… 286
　B．縄文第2面の遺構 …… 286
　C．縄文第3面の遺構 …… 294
　　1．縄文第3面aの遺構 …… 294
　　2．縄文第3面bの遺構 …… 296
　　3．縄文第3面cの遺構 …… 304
Ⅲ．まとめにかえて－縄文時代の変遷を追って－ …… 311

写真図版 …… 323～401

序　　編

挿　図　目　次

図－1　遺跡位置図 …… 3
図－2　岳南地域の縄文時代遺跡分布図 …… 4
図－3　岳南地域の弥生・古墳時代遺跡分布図 … 5
図－4　富士宮市南部地域の地質図 …… 7
図－5　周辺地形図 …… 10
図－6　周辺地形断面図 …… 11
図－7　地層区分と鉱物組成図 …… 13
図－8　発掘調査区域図－1 …… 15
図－9　発掘調査区域図－2 …… 16
図－10　滝戸遺跡第Ⅳ次調査全体図 …… 17
図－11　滝戸遺跡出土硬玉製大珠 …… 20
図－12　滝戸遺跡土層図 …… 23
図－13　富士山南麓地域における縄文時代中・後期の遺跡と生活圏 …… 24
図－14　滝戸遺跡出土の縄文時代晩期の土器 …… 27
図－15　三中ＰＴＡだより NO.14 (3) …… 30
図－16　三中ＰＴＡだより NO.14 (2) …… 31

Ⅰ．遺跡の位置と環境

A．遺跡の位置と環境

滝戸遺跡が所在する富士宮市は静岡県東部の富士山西南麓にあって、東から南を富士市に接し、北は富士山頂から西へ毛無山を隔てて山梨県に連なり、西側は羽鮒丘陵、富士川を境いにして富士郡芝川町ならびに庵原郡富士川町と接している。面積は314.22Km²、長さは東西が19.50Km、南北が20.04Kmと細長く、海抜は35m（石ノ宮付近)から3,776m（富士山頂）と日本最大の標高差を誇っている。

古くより富士山本宮浅間大社の門前町の性格をもって発達し芝川町や山梨県郡内、峡南地方を含む産業、経済、文化の中心的な役割を果たしてきたものである。大正２年（1913)の東海道本線の富士駅を起点とする富士身延鉄道（現ＪＲ身延線）の開通によって、その地位はさらに高まり、昭和30年（1955)以降は周辺の村々を合併して広大な岳麓一帯の産業開発を進めているところである。現在では隣接する富士市との東駿河湾地区工業整備特別地域の一環としての工業化に関連する都市計画のなかで、住宅地域や観光レクリェーション基地としての性格をも位置付け、人口122,246人（平成７年４月１日現在）に達する県内中堅都市として現在でも駿河と甲斐の仲立ち役を努めている。

滝戸遺跡はかつてそうした山梨県峡南地方を繋ぐ「担ぎ屋さん」と呼ばれた行商人達で賑わいを見せた、ＪＲ身延線西富士宮駅より県道富士宮芝川線を1.5Km程南進した小高い丘陵上に位置している。この丘陵を白尾・明星山丘陵と呼ぶが、眼下に潤井川がうねり、背後に白尾山（236m)がそそり立つ風景はかつて西富士宮駅に降り立った人達が当然のように眼にしたであろうし、またこの地に登り北東に仰ぎ見る富士山は駿河湾より山梨県境までパノラマ的景観で迫りまさに絶景というしかない。

県道はそれからＪＲ身延線と併行して羽鮒丘陵と白尾・明星山丘陵の間に生じた安居山断層の低い部分を通って、沼久保から富士川河岸に達している。そこにはかつて富士身延鉄道が開通するまで駿甲交易の大きな担い手であった富士川舟運の沼久保船着場や星山船着場があり、この道が江戸時代から近世まで大宮－沼久保－岩渕－清水－江戸や上方に絡ながる商品流通の経路として大きな役割を果たしていたことは想像に堅いことである。そしてなお、遡る弥生時代中期に対岸の富士川町山王遺跡から安居山別所遺跡を経由して渋沢遺跡に至る弥生文化東進の道であったとすれば（注１)、鉄道の開通以前はもとより、遠く原始の時代よりこの地域一帯が今一方（西口）の文化の出入口であったことは確かな事と言えよう。それで、この安居山の切り通しを越えて開けたところを『福伝』と呼ぶのであるならば、さらに興味も深くなるところである。

しかし、実際には沼久保の細い谷合いに可能な限り並ぶ棚田を見たり、福伝と地続きの大中里や野中でも新たな耕地の拡大は不可能な程開墾の極地に達していて、天明・天保の飢饉の際には百姓一揆までも計画されていたことを知ると（注２)、この往来が必ずしも「福が伝わる」ばかりではなかったであろうことも承知されるのである。

この福伝より降りて沖積地にせり出す舌状台地を占有する滝戸の地にも逸早く開墾が及んでいたであろうことは言うまでもなく、その様子は平成９年２月10日より14日まで実施された市立第三中学校運動場の遺跡確認調査で検出された段状の「地直し」の跡からも知れる。そしてなお、そこには２基の円墳の周濠も確認され、第Ⅱ次調査出土の２基を合わせても最低４基からなる群集墳が存在していたのである。つまりこのことは富士宮市内においても際立った群集墳が存在していたにも関わらず、その存在を後世に伝える余裕さえない経済的にも無論、文化的にも貧窮の状況にこの地域があったことも想像されるのである。

そして、この後にも幾多の土地改良が繰り返えされてきたこの地のほ場景観は昭和24年以降の市立富士宮第三中学校建設によって大きく様変わりして行くのである。この整地工事は地域住民総出で行われ、モッコやトロッコなどで土砂を運んだ様子は現在でも長老の語り草であるが、それよりも至る所より出土する土器や石器のカケラが運んだ土の量より多かった、と言う冗談のような笑い話は、この遺跡に包蔵される膨大な遺物の量を示すものであり、そのことは以後の発掘調査でも充分に納得されたものである。

それからこの時には学校周辺に数軒の旧家が点在するに過ぎなかった沿道も、現在では隙間のない程民家が立ち並び、安居山の切り通しの南側に拡がっていた耕地には企業の社員住宅や高層団地が立ち並んで一種独特の別世界を醸し出し、また眼前の沖積地には製紙工場の煙突がそびえ立つなど、かつて沼久保船着場などから荷受けを負った運搬人達が往来した道の光景は完全に変わってしまっているのである。

B．周辺の遺跡

富士宮市に確認される遺跡は現在181箇所である。その分布は南部に集中して、しかもその大半が富士根地区と市域の南西側に連なる丘陵一帯に限られる特色をもっている。これは富士山の成立過程のなかで、古富士集塊質泥流が不透水性である反面、新富士火山性砂礫層が透水性に富むことから、新富士火山の初期の溶岩流が及ばなかった富士根地区や南西部の丘陵に湧水地が生まれ、それによる小谷の形成などが遺跡占有に好条件になっていたことは再々の指摘があるところである。

現在で知られる181箇所の遺跡の時期的な詳細は以下のとおりである。

縄文	早	前	中	後	晩	計
	21	15	69	34	3	99
弥生	中	後				
	5	18				29
古墳	前	中	後			
	41	4	5			84
高塚古墳						20
歴史	古代	中世	近世	近代	城館	
	7	9	13	7	6	31
遺跡合計						181

※各時代の遺跡数には重複や時期不詳がある。

そして、この遺跡の状況をまとめた『富士宮市の遺跡（注３）』によると次のような特徴が記されているのである。

① 縄文時代早期の遺跡が、比較的多い。

② 縄文時代中期から後期（前葉）までの遺跡が、約80遺跡を数えて圧倒的に多い。

③ 弥生時代中期の遺跡が、少数であるが存在する。弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が、約50遺跡を数えて爆発的に増加する。

④ 古墳時代中・後期の遺跡は、極めて少ない。表で高塚古墳としたものは、後期の小古墳であり、群集墳とみてよいものである。ここでは20古墳と数えたが、中には既に破壊され、文献から「十数基」存在したことが分かる例も「１」として含めた。現状では市内で、前・中期の古墳は、確認も推定もできない。後期の群集墳の極めて少ない。

⑤ 歴史時代遺跡の発見は最近の成果であり、各種の遺跡が見られ、調査されていることは既に述べた。

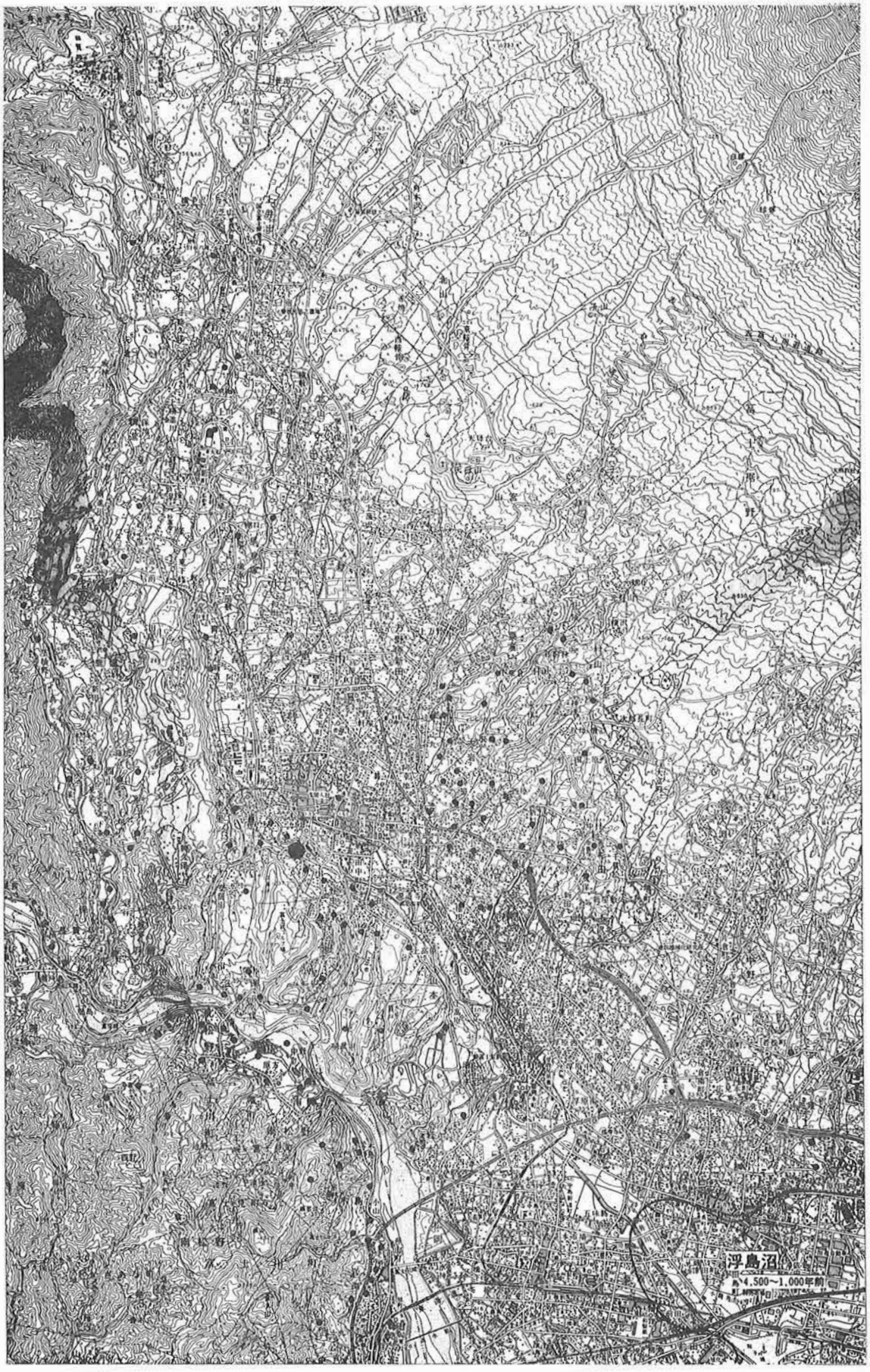
このような遺跡の分布の特徴を理解して見ると、滝戸遺跡の周辺の遺跡は次のとおりであるが（図－１）、ここでは先ず、富士川流域から岳南地域を含めた広い範囲で縄文時代と弥生・古墳時代の遺跡分布を見ようと思う（図－２.３）。

周辺遺跡地名表

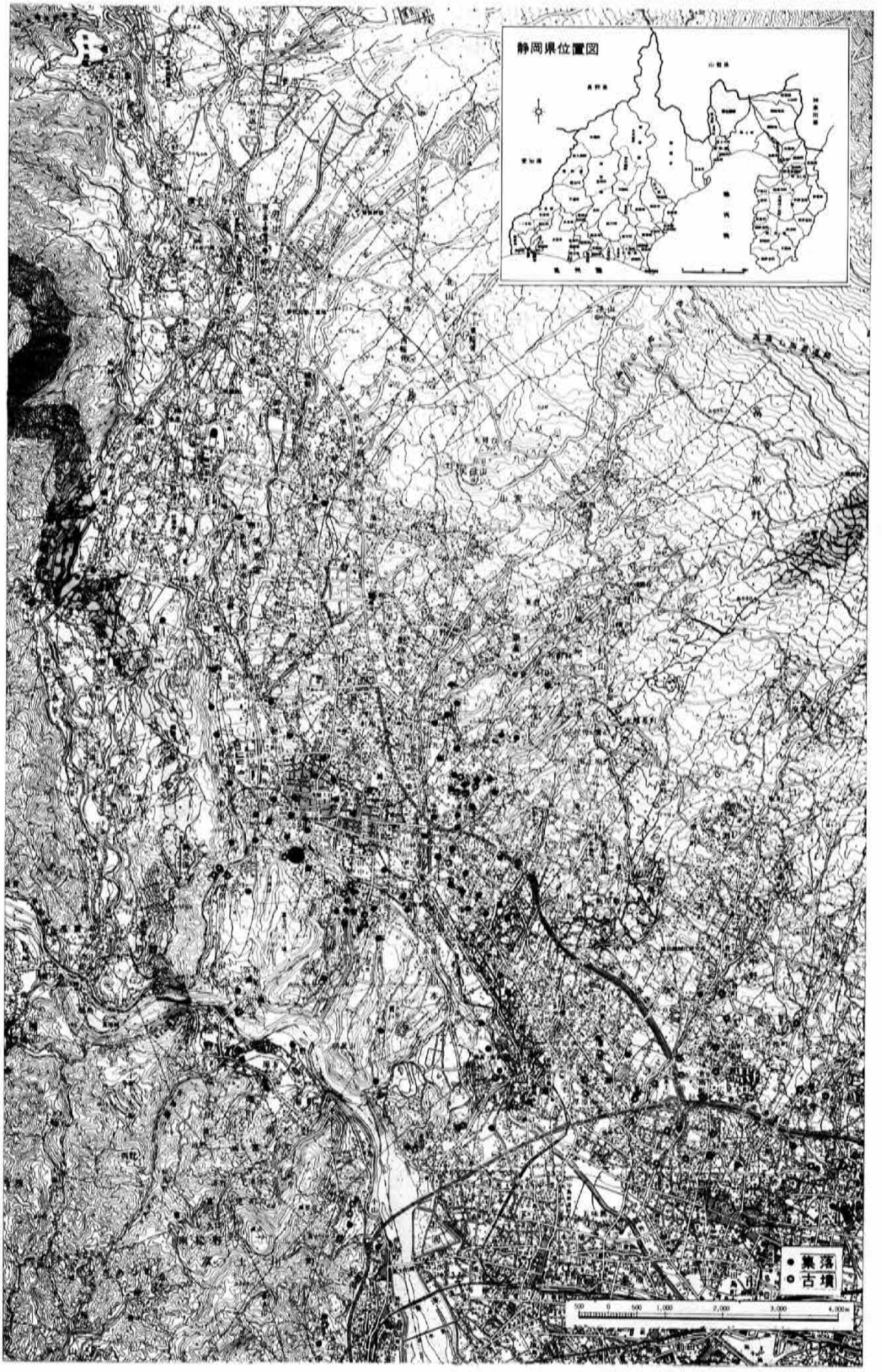
番号	遺跡名	時代	備考
72	琴平遺跡	古墳	
73	渋沢遺跡	弥生(中)	昭和57～58年一部調査
76	浅間大社遺跡	縄文(早)、古墳、古代	浅間神社名称変更の為改称
77	羽衣町遺跡	弥生(後)、古墳(前)	
78	城山遺跡	古墳(前～後)	
80	二ノ宮遺跡	古墳(前～後)	
81	福知神社遺跡	弥生(後)、古墳(前)	
82	西町遺跡	弥生(後)、古墳(前)	
83	貴船町遺跡	古墳(前～後)	旧地名表貴船、貴船小学校を包括して改称
84	甲石遺跡	縄文(中･後)、古墳	
85	福伝遺跡	縄文(後)、古墳	平2年一部調査
86	大中里坂下遺跡	縄文(中･後)、古墳	
87	大中里坂上遺跡	縄文(中･後･晩)	旧地名表大中里遺跡を改称
90	別所遺跡	縄文(後)、弥生(中、後)	
91	上ノ原遺跡	縄文(中)、古墳(前)	
92	別所1号墳	古墳	消滅(東京国立博物館所蔵)
93	別所稲荷塚古墳	古墳	別所2号墳
94	摩利支天塚	江戸	
102	坊地上遺跡	縄文(早･中)、古墳	
103	倭文神社遺跡	縄文(早)、古墳(前)	
104	野中中村遺跡	縄文(中)、古墳(前)	旧地名表野中遺跡を改称
105	泉遺跡	縄文(後)、弥生(後)、古墳、平安	昭59、63年一部調査
106	南部谷戸遺跡	旧石器、縄 文、古 墳	昭45～47旧地名表黒田自証寺を改称
107	月の輪平遺跡	旧石器、縄 文、古 墳	消滅昭45～47･56年一部調査
108	滝戸遺跡	縄文(中･後)～古墳	昭51～57年一部調査
109	野中向原遺跡	縄文(中･後)、古墳	市指定考古資料（昭55.1）
111	五反田遺跡	縄文(中)、古墳	
112	月の輪上遺跡	縄文、弥生、古墳	昭52･55･56･63･平1年一部調査
113	奥山地遺跡	縄文(早･前)、古墳	
114	田中遺跡	弥生(後)	
115	坊地下遺跡	古墳(前)	一部残
116	坊地南遺跡	古墳(前)	
117	月の輪下遺跡	古墳(前)	一部残昭47年一部調査 旧地名表星山温泉を改称
118	塚本古墳	古墳	一部残
119	月の輪法印塚古墳	古墳	消滅
120	王藤内の塚	近世	消滅 昭47年調査
127	大宮城跡	室町	昭59年神田曲輪跡一部調査
128	黒田向林遺跡	縄文(早)	昭60年一部調査
134	石畑遺跡	古墳(前)	

富士宮西高校
青木
淀師
中島町
中里
安居山
白尾山
黒田
富士宮ゴルフクラブ
西小学校
沼久保
0
50
100
200
300

図－1　遺跡位置図



図－２　　岳南地域の縄文時代遺跡分布図



図－3　　岳南地域の弥生・古墳時代遺跡分布図

135	牛ヶ沢遺跡	古墳(前)	
136	根方遺跡	古墳(前)	
137	若ノ宮遺跡	古墳(前～後)、中世	
140	別所蛇塚古墳	古墳	(別所3号墳)
152	上中村遺跡	弥生(後)～古 墳(前)	
153	舞台遺跡	中～近 世	
168	高原城跡	中世	
169	南部谷戸古墳群	古墳	消滅

「富士宮市の遺跡」より抜粋

この分布図には縄文時代の遺跡162箇所、弥生・古墳時代の遺跡100箇所、古墳47基（群も１基に数えてある）が載せられている。これらの分布もかつてより生活圏、いわゆるテリトリーの検討が重ねられ、縄文時代早・前期遺跡では半径３Km、同中・後期では半径1.5ｋｍ程の範囲が捉えられ、それが弥生時代後期から古墳時代初頭にはそれが半径1Km程に狭められる法則性に近いものが捉えられている（注４）。ここでは敢えてそれらに正円を落とさないが、その法則性に似たようなものは充分に見てとれるようである。

ここで改めて縄文時代の遺跡分布に地質図を合わせると（図－４）、先に述べたように古富士火山を基盤とした古富士泥流の分布に一致して成る遺跡の分布が知れ、島状に残った富士根地区への集中と、それを挟む万野原地区と富士市入山瀬地区の皆無の状況ははっきりとしたコントラストで捉えられ興味あるものである。それと富士川から芝川の沿岸に地下茎のように鈴生りとなって連なる遺跡のあり方は住居域に面積をとらずにすむ縄文時代（以下、縄文）の集落の特性によるものであろうか。この沿岸には縄文早期遺跡が目立つこともあるが、それでも縄文中・後期遺跡がポイント的に占めている状況はこのような大・中河川を辿ることが『道』として山梨県境から八ヶ岳山麓に至る手段であったことも確かなことであろう。

こうした交易の結果は上石敷遺跡、滝ノ上遺跡といった縄文中期の遺跡より出土した黒曜石が長野県霧ヶ峰産である同定結果（東都大学原子炉実験所東村研究室分析）からも知れている。

滝戸遺跡が位置する白尾・明星山丘陵にも潤井川沿岸や星山谷を望んで列状に遺跡が配置されている。富士川沿岸や内陸部に位置する遺跡は縄文早期遺跡である場合が多いことから、潤井川沿岸の遺跡の大半は縄文中・後期に滝戸遺跡の影響下にあったものと見て良いと思われる。これらは共通して開けた緩やかな台地を占有している。このためか羽鮒丘陵の急峻な東側斜面は遺跡形成に不利でその間は空白地となり、潤井川と芝川が最も接近した台地上に千居遺跡が形成されてからは、芝川に沿って源頭部の猪之頭養鱒場内遺跡まで数遺跡によって中継されている。これから山梨県群内地方に至って関東ルートと合流したものと思われるが、滝戸遺跡の流通経路もこれに関わっていた可能性は強いものと思われる。

眼を転じて潤井川を下ると、丘陵はまた急峻となって遺跡の占有を拒み、丘陵先端に小規模な遺跡を持つだけとなる。これ以南は富士川による荒涼としたデルタ（三角州）が形成され、また浮島沼も駿河湾と通じていて富士火山扇状地の末端まで押し寄せていたようであり、そこに遺跡が占有する立地条件にないが（注５）、当時その縁辺を流路としていた潤井川河口の左岸の小高い台地には数ヶ所の遺跡が形成されている。そのなかには富士市宇東川遺跡や原田中島遺跡などの縄文中期末～後期前半の大規模遺跡もみられ、これらが山梨県群内地方から潤井川を通じて下る当時の文化の最南端となって、「山」の文化が「海」の情報を得るための最前線基地になっていたことは充分に考えられることであろう。

弥生・古墳時代になるとその最初の段階で富士川河口の富士川町山王遺跡、潤井川中流域の渋沢遺跡、その支流の風祭川源頭部の押出遺跡、芝川源頭部の猪之頭養鱒場遺跡と河川に関連した遺跡の占有を見る。このことは新しい米作りの技術を持った弥生人が船で海を渡り、河川に入り、細流の音を聞きながら尾根を逆上って運んだと言う弥生文化の東進によるものであろうが、縄文時代よりも大・中河川への集中はないようである。それよりも小河川の出口に集約されてくる富士根地区の遺跡や、星山谷の入口の河岸段丘に集中する月の輪遺跡群のように沖積地に近付いてまとまろうとする意識の高さはその生業ならではのこととして充分に理解されるのである。

その傾向は滝戸遺跡の前面に拡がる古大宮湖の縁辺でもはっきりとして表れ、10数ヶ所の遺跡が滝戸遺跡の眼前に並ぶ光景は縄文時代には全く予想もされなかったことである。また羽鮒丘陵の急峻な崖の下の狭い段丘上に遺跡が連なって占有されることも、前面に展開される潤井川の湿地帯が生産視野に入ったためのことであり、縄文生業による遺跡のあり方と完全に違ったものとなっているのである。

この時期になって湖沼化した浮島沼はそうした生業の転換のなかにあって当然のように遺跡が縁辺を取り

巻き、その豊かな生産力は古大宮湖を望む台地に点散する古墳ならびに古墳群が20数基であるのに対し、500基以上のそれらが築かれることからも知れ、文化の中心が富士市側へ移動していったことは幾多の文献によって指摘されてきたことである。

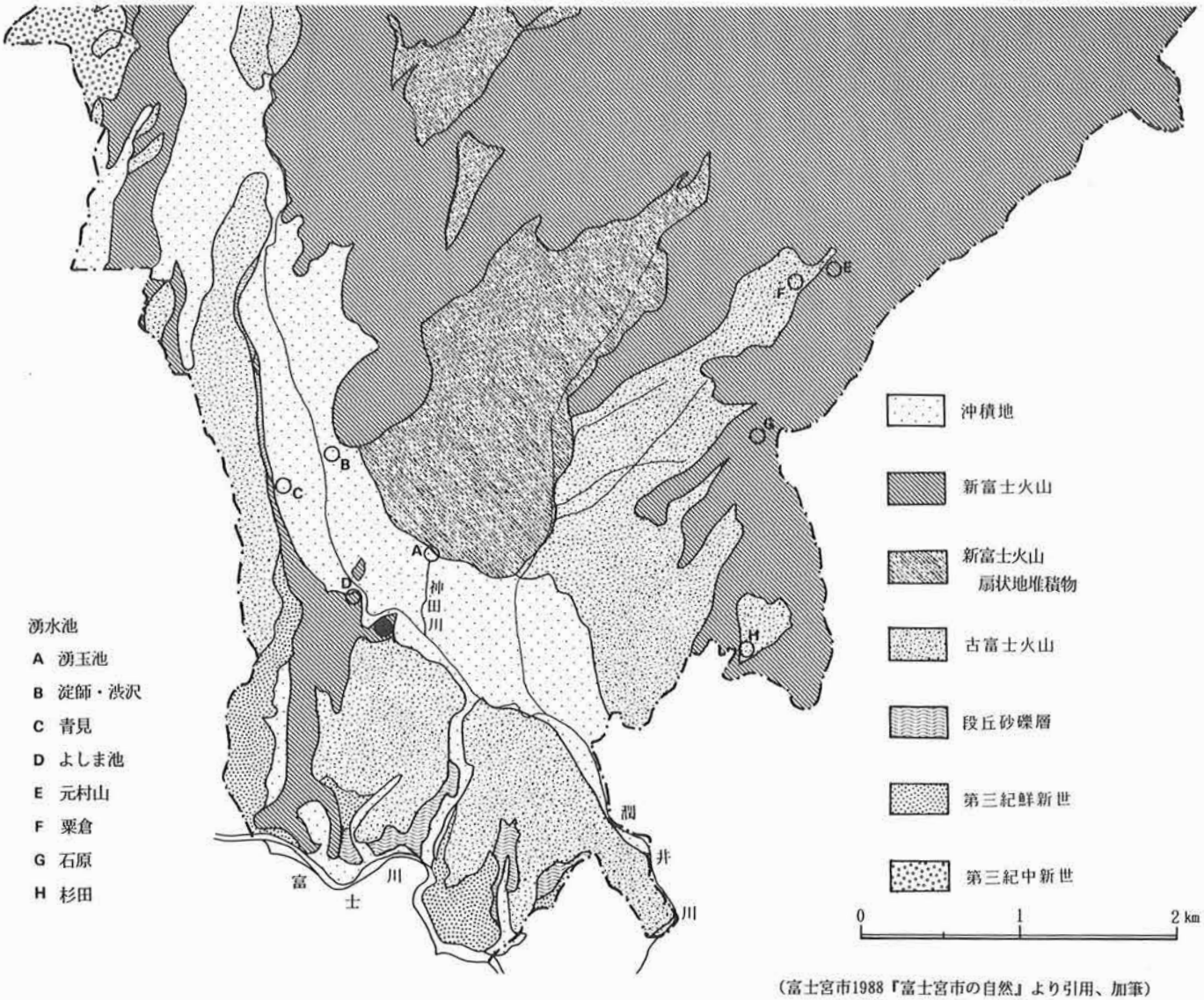
それでは再々の繰り返しになるが、滝戸遺跡の変遷を理解するために周辺の歴史的流れを概観してこうと思う。

本地域の人間活動の開始は古富士火山第Ⅱ期活動中の後期旧石器時代より認められる。それはもはや人間活動を不可能ならしめるほどではなかったことが推察される。

遺跡は沼久保坂上遺跡（富士宮市遺跡番号95号－以下同じ－）、星山周辺の南部谷戸遺跡(106)、月の輪平遺跡(107)、隣接の富士郡芝川町小塚Ａ遺跡、富士市天間沢遺跡が認められ、いずれも新富士火山の溶岩流が及ばない地域に限られている。今後の新発見遺跡もこの地域に限られることが予想されて、新たに若宮遺跡(９)、上石敷遺跡(126)に有舌尖頭器が確認された。しかし遺跡規模は貧弱で包含層が確認されたのは芝川町小塚遺跡以外ない。

縄文時代を迎えて、早期の遺跡占地は旧石器時代を継承しつつも星山、羽鮒丘陵、富士根地区に若干の発展を見せる。

従来、本地域でもっとも古い縄文文化は早期中葉に至って出現するとされ、田戸式系土器群が盛行する時期に押型文土器を伴出することが知られていた。表面採集による資料が対象であったが、代官屋敷遺跡(11)、奥山地遺跡(113)、沼久保坂上遺跡(95)、南部谷戸遺跡(106)、月の輪平遺跡(107)である。これらの資料のうち楕円押型文土器が比較的卓越して、楕円粒も粗大であることから押型文文化の終末期があたえられた。さらに資料の貧弱さも手伝って遺跡は小規模である把握が同時になされて現在に至っていた。



（富士宮市1988『富士宮市の自然』より引用、加筆）

図－４　富士宮市南部地域の地質図

しかし近年早期遺跡の発掘調査が活発化して徐々に内容が明らかにされるように、本地域でも若宮遺跡によって得た竪穴住居跡・炉穴跡・集石跡等によって構成される集落跡は完全に早期遺跡の概念を反転させることになった。

早期後葉の条痕文系土器群の時期になると、浅間大社遺跡(76)、に新たな進出が見られる。奥山地遺跡(113)、沼久保坂上遺跡、茅山上層式に属する良好な資料を出土する坊地上遺跡(102)、地名表による小松原A遺跡(99)、など星山丘陵一帯に発展的となる。それに代官屋敷遺跡、若宮遺跡が西富士道路建設に伴う事前調査で資料を得て加えられる。そして上石敷遺跡にも野島式土器の資料を得るなど、富士根地区に発展の前兆を見ることができる。

前期に至ると星山丘陵一帯の遺跡が影をひそめて富士根地区に発展を見せるが、遺跡数は貧少である。

木島式土器の良好な資料が出土する出水遺跡(37)、隣接して峯石遺跡(38)が挙げられる。以後、中葉に文化が途絶えて諸磯式系文化に至って遺跡の再出現を見る。諸磯式系土器群には北白川下層式土器等を伴出することから、関東系土器文化圏にありながら関西的な要素を合わせ持つことが知れる。遺跡は代官屋敷遺跡、南部谷戸遺跡の早期から再出現する遺跡に加えて、焼畑遺跡(１)、新梨遺跡(６)、寺内遺跡(19)を見る。

中期前葉の文化は勝坂式土器に代表され、その繁栄の中心は中部高地の山岳地帯であり、本地域もその周辺地域として理解することができる。遺跡占地は丘陵斜面の小規模遺跡が多く、中部山岳地方の大規模な集落遺跡の形成と極めて対称的である指摘もなされている。

遺跡は歴代遺跡へと発展していく場合もあるが、単独で存在して以後消滅してしまうものが多い。高原愛宕山遺跡(125)、泉遺跡(105)、神賀町遺跡(75)、坊地上遺跡である。また、近年の発掘調査の増加により、勝坂式期以前の遺跡も明らかに成りつつある。それは五領ヶ台式土器を主体とする、駿東郡長泉町柏窪遺跡の構成を示す一群である。特に上石敷遺跡の調査によってその構成も知れてきて、代官屋敷遺跡竪穴住居跡も注目される。

本地域に特筆は中葉の曽利・加曽利E式期からの爆発的な遺跡増加である。勝坂式期に残存した遺跡はここで大きく転換して規模の大きな遺跡を営む。占地条件も小規模な丘陵斜面から広大な台地の平坦面に位置するようになり、本地域の歴代遺跡、すなわち基地的遺跡に発展する。箕輪A遺跡(35)、同B遺跡、滝ノ上遺跡(３)、滝戸遺跡(108)、それに富士市天間沢遺跡等である。さらに基地的集落とは別々に新たに形成された小規模遺跡が58箇所発生する。縄文時代遺跡84遺跡中、約70%にあたり、この時期には富士西南麓一帯が遺跡と言っても過言でない状況となる。

この分布状況を植松は半径３kmの生活圏を５群想定し、それが、中期社会に至ると旧来の生活圏を半径1.5Km、面積７Km^2の小規模遺跡圏が分割、発展していく過程を見い出し、そうした傾向が中期社会の歴代有力遺跡を中心に、分村と言う形態で移っていく軌跡であり、社会が発展していくと群そのものが大きく移住して、過去の生活圏を打ち壊していくと言う縄文文化発展の普遍性に連なっているとしている。

内容の明らかな遺跡にその状況を求めると滝戸遺跡(108)と千居遺跡(66)が浮かぶ。滝戸遺跡は富士、富士宮を含めた岳南地域において箕輪遺跡や富士市天間沢遺跡と並び称される歴代有力遺跡である。その存在は古くより知られ、昭和51･52･54･57年、さらに昭和62年と5次にわたる発掘調査がなされ、縄文時代早期～晩期、さらに弥生、古墳時代に続く配石遺構、集落跡、方形周溝墓などから成る歴代遺跡あることが確認されたことは本報告書に詳しい。

千居遺跡は昭和45・46年発掘調査がなされ、縄文中期後葉の20棟前後から成ると想定される集落跡と集落廃絶直後に配された帯状および環状配石群の存在が確認される。果たして千居遺跡の基地的集落は何処か、という問題は残るとしても分村的集落、言い換えれば単独遺跡が営まれ、調査者が推察するように富士山の噴火等による自然現象の変化で集落が廃棄され、直後にたぶんに富士山を意識した配石がなされたとしたらそこには中期社会の発展と退潮の現象を見いだせるとともに、本地域における諸遺跡と富士山との関わりを考えざるを得なくなるのである。なお千居遺跡は昭和50年６月に国指定史跡となっている。

以後、いずれの遺跡も堀之内２式期には急激に衰えてしまい、わずかな歴代遺跡を残すだけとなる。この停滞現象について海岸部の漁撈文化の発展が内陸部の文化の発展を妨げたと考えられているがはっきりとした原因を明らかにするまでには至っていない。

晩期の遺跡も辰野遺跡(40)、大中里遺跡(87)、滝戸遺跡に微量の資料が認められずに過ぎず、また前葉に限られることから本地域の文化は弥生時代を迎えるまで中断される。

本地域の弥生時代（以下、弥生）は中期の丸子式土器、石包丁を出土した渋沢遺跡(73)より開始される。渋沢遺跡は西側に潤井川、東側に湧水地を望む台地上に位置する。前面に拡がる湿地帯での農耕が予想されるが、石鏃等の狩猟具も出土することから狩猟、採集の必要性があったことが考えられる。昭和57・58年に小規模な発掘調査が行われ、数基から成る土壙墓、石鏃、甕、壷等を得ている。細片資料であるが別所遺跡(90)も立地状況はやはり潤井川を望む台地上であり、極初期の農耕生産力では生活を維持できずに狩猟、採集に依存せざるを得なかったことが推測される。押出遺跡(142)、猪之頭養鱒場内遺跡(62)も河川の源頭部にあって広域な生活圏は有していない。

これらの遺跡以降になると再びその内容が不明瞭になることから、渋沢遺跡で育った農耕技術が次第に向上して面積も広く生産性も高い富士市浮島沼付近に移動していったことが考えられている。

後期前半を迎えると再び本地域に遺跡が見られるようになり、泉遺跡(105) が挙げられる。後半になると遺跡はさらに活発化して星山丘陵東辺を取り囲む潤井川自然堤防上、あるいは富士山側からの扇状地末端部に羽衣町遺跡(77)、西町遺跡(82)、田中遺跡(114) 等の遺跡の進出が見られる。従来こうした傾向は農耕生産力の向上が遺跡を台地上、あるいは先端部から沖積地内部に下降させ、かつ発展させたと理解されているが、本地域においてはいずれも発展性に乏しく廃絶に等しい状況となってしまう。

そこには本地域の沖積地内に位置する遺跡の発展を妨げた何らかの特徴的な要因を考えなければならないが、さきに近年資料が増加している後期末葉の遺跡を挙げれば、滝戸遺跡、月の輪上遺跡(112) の集落跡の確認、これに野中向原遺跡(109) 等が浮かぶ。しかしこれらもまた星山丘陵東側縁辺部に遺跡が並ぶだけで、末葉に至っても沖積地進出の糸口さえつかむことのできなかった立地状況を示している。逆に言えば台地を占有することが一般的であったとするほうが適切であるかも知れないである。

このような立地の傾向を考えたとき、本来の弥生集落の生業が湿地帯内農耕であれば、潤井川湿地帯（古大宮湖）の存在を見逃す訳にはいかない。この潤井川湿地帯は西岸を羽鮒丘陵、白尾・明星山から星山丘陵に、東岸を富士山扇状地の末端地形によってせり出されているため南北に細長い構造をとらざるを得ない。しかも大宮断層上を流路としているため一種の溺れ谷的性格を持ち、現在でも洪水がたびたび繰り返されている状況である。この状況を当時に設定できるならばこのなかでの遺跡の発展は考えがたく、台地占有に走るのもそうした自然災害からの逃避現象かも知れないのである。しかし弥生時代の高地性集落の発展を考え合わせたとき、一概に自然、ならびに地形条件の不利を設定するだけでは説得力に欠け、その他諸要因が相まってなした現象であるはずで今後の遺跡分布の課題として残ろう。

このような過程を経て古墳時代（以下、古墳）初頭に至る。その文化は先に述べる縄文中期の爆発的な隆盛に匹敵するほどであり、弥生遺跡の発展をあまり見なかった富士根地区でも湧水地を中心に縄文遺跡は古墳初頭遺跡と重複して成ると言っても過言ではないような状況を呈するのである。まして潤井川湿地帯を望む星山丘陵東辺ではさらに濃密となり、表面踏査では遺物が連続して正確な遺跡数さえつかめない程となるのである。あえて遺跡を挙げれば、坊地上、野中中村(104)、南部谷戸、月の輪平、滝戸、野中向原、五反田(111)、月の輪上、坊地下(115)、坊地南(116)、月の輪下(117) の諸遺跡である。一部には前述した弥生終末より継続している遺跡が含まれていることは言うまでもない。

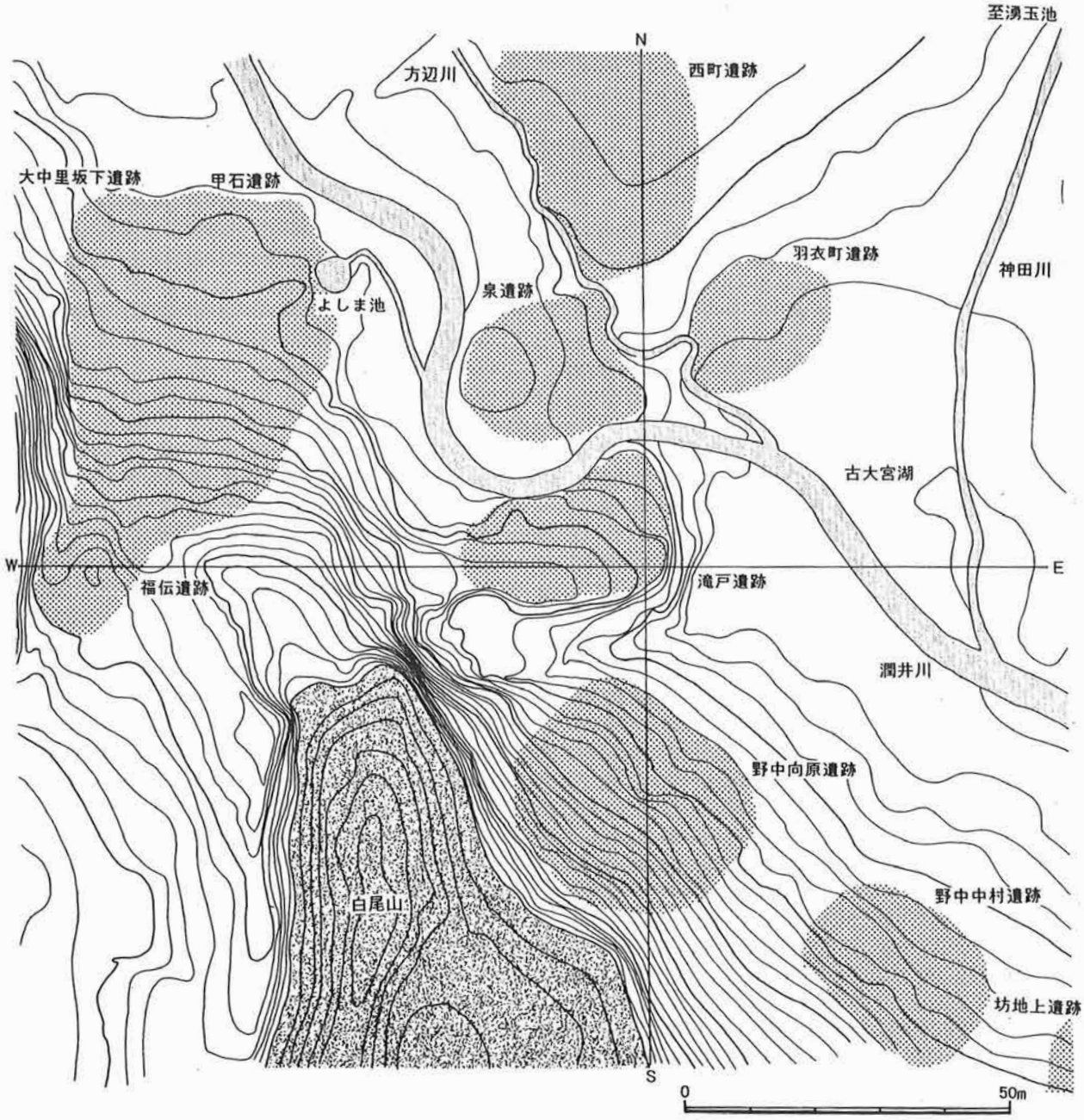
このような爆発的な文化の発展を生む温床となったのは、そうした弥生終末より台地の縁辺部に位置した遺跡のなかで培われていた内陸生産手段によるものであろうか今後の検討課題でもあるが、現在の水田可耕線よりも奥まる富士根地区の遺跡増加を理解するためには、そこにも弥生終末の萌芽的な遺跡の存在を想定しなければならないし、丸ヶ谷戸遺跡(39)や上石敷遺跡(126)、権現遺跡(24)等が果たしていた役割はかなり大きなものであったと思われるのである。

隆盛を極めた古墳初頭遺跡もその後急激に衰退して空白の時間を迎える。新たな営みの開始は7世紀代まで待って泉遺跡、それから8世紀代に入って上石敷遺跡、峰石遺跡を見るが、それでもまだまだ貧弱な感は拭えない。この時期の集落数が古墳数に比例してなっているものとすれば、隣接の富士市の10分の1にも満たない古墳の数は明らかに本地域の遺跡の現象を示すものであろうが、その富士市においても集落数の増加をあまり見ないのも不思議である。

本地域の古墳はいずれも後期に属する小規模な群集墳によるもので、現在まで20数基が滝戸・別所古墳群、南部谷戸・月の輪古墳群、三ツ室・若宮古墳群として

大きく3群に捉えられている。そしてここで気付くことはこれらの古墳の大半がかつての古墳時代初頭遺跡が密集する地域を占有していることである。つまりこのことはかつて集落が占有していた沖積地を望む台地縁辺に古墳群が重複して築かれていったことを示すものであって、その古墳群を築いた集落がそこに重複している訳ではないのである。とすればこの時にはすでに潤井川両岸の微高地も安定を始めていて集落の活動が可能となったためのことと考えても良いことであり、依然としてそれらを築く集落の数は足りないままではあるが、滝戸の台地に築いた古墳を仰ぎ見る位置で泉遺跡の集落が営まれていたことは、潤井川両岸の微高地もようやく生活の領域に組み入れられてきたことを示すひとつの例であろう。

注1. 富士宮市教育委員会 1989 『渋沢遺跡』
注2. 若林淳之 1971 『富士宮市史』 上巻 富士宮市
注3. 植松章八 1993 『富士宮市の遺跡』 富士宮市教育委員会
注4. 植松章八 1971 『富士宮市史』 上巻 富士宮市
注5. 富士市立博物館 1996 『浮島沼』 第32回企画展



図－5　周辺地形図

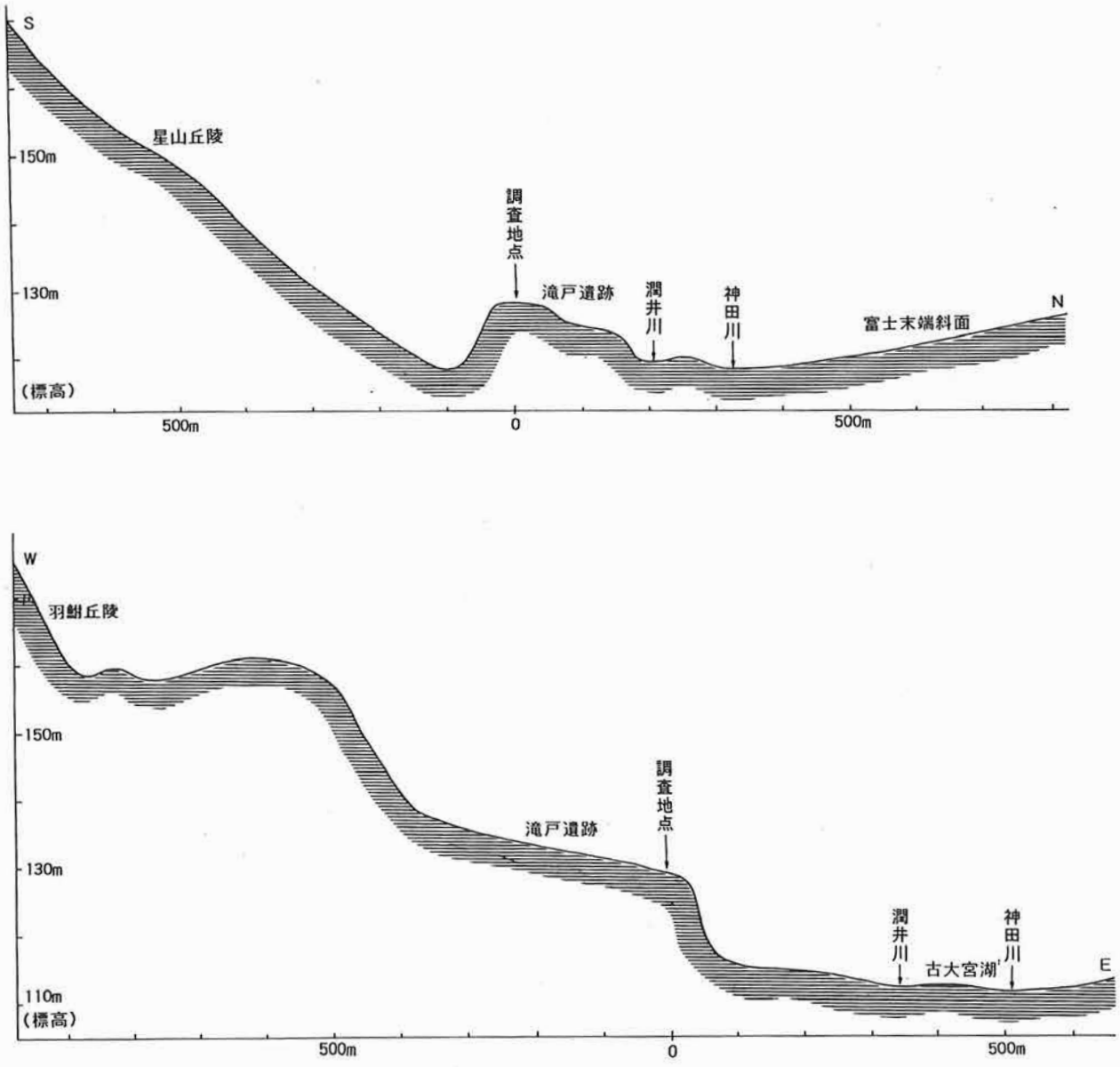
Ⅱ. 遺跡の占有と土層

A. 遺跡の占有

富士宮市は海抜3.776mの富士山から平均傾斜約6度程で山麓に広がっている富士山の富士山区域、山梨県との県境に沿って毛無山地・天守山地・上野台地・羽鮒丘陵と南北に続く山地の天守・羽鮒丘陵区域、南側に白尾山や明星山の丘陵を主として東西に連なる丘陵の白尾・明星山丘陵区域、さらにこれらの3区域の接合部にできた裾合谷の芝川・潤井川沖積区域の4区域に分けることができる。

滝戸遺跡はこのうちの白尾・明星山丘陵に位置しており、この丘陵と眼下の潤井川沖積地を取り巻く微高地に遺跡が集中することが本地域の遺跡分布の特徴であることは前章で述べてあることである。この丘陵は白尾山(238m)や明星山(225m)が主となって東西に連なるものであるが、これを安居山谷や星山谷、貫戸谷等の断層が切断するような形となって富士川への出口となっているものである。これらの谷にはそれぞれに河岸段丘が形成されて、これもまた遺跡の占有に有利であることは月の輪遺跡群のあり方などで充分知られているところである。

羽鮒丘陵から白尾・明星山丘陵の裾を流下する潤井川は富士山大沢扇状地を源頭部にして駿河湾田子の浦



図－6　周辺地形断面図

港に注ぐ延長25kmの河川で、市内では市域の南西端をかすめて下る富士川に次ぐ大型河川である。先に述べるように富士山末端部を南西側の丘陵にせき止められるように下る潤井川は、途中富士山の浸食谷を源にする風祭川や弓沢川、さらに神田川の各河川を合流させている。これらは富士宮市にとって自然的排水路の役割を果たすとともに、そこで運び出される土砂は外神付近より狭いながらも沖積平野を築くなど、過去より一般生活や生業等あらゆる面で不可欠なものとなっている。またそこには富士山末端部に形成されるいくつかの湧水地の存在も忘れてはならない（図－４）。

滝戸遺跡はそうした自然的好条件に囲まれた白尾・明星山丘陵の北西端で東に向けて沖積地に大きくせり出した舌状台地を占有し、北側はそこで流路を東に転じられた潤井川によって侵食された崖縁が「滝戸渓谷」として景勝の地にもなっている。南側も白尾山腹まで深く抉られた入合谷によって完全に独立した景観となっている。前面は言わずと知れた古大宮湖（潤井川湿地）である。遺跡中央で標高130m、沖積地までの比高は15mで、遺跡は東西350m、南北200mの範囲を推定されているものである。この舌状台地の基盤は新富士火山の最古期に噴出した富士宮溶岩流であって、それは古富士泥流を基盤とする星山丘陵（白尾・明星山丘陵を広く捉えた呼称）のなかにあって一種の独立丘陵となっているらしい（図－５・６）。この一帯が羽鮒丘陵と星山丘陵が「く」の字状に接する地点で、地質的にもポイント地区として先学諸氏に論を進められているところでもある。先に羽鮒丘陵を主にして『富士宮市史』(注１)から紹介すれば以下のとおりである。

「芝川と潤井川及び富士川に挟まれて南北に連なる丘陵は、羽鮒丘陵といわれている。狩宿、上条、下条を通って南にのびる丘陵は田尻で一度狭くなるが、再び幅が広くなり富士川で終わっている。両端は芝川と安居山、沼久保の谷に挟まれ広いところでは２kmぐらいあった幅も次第に狭くなっている。

富士川岸でいったん終わったかのように見えるこの丘陵も、地形的、地質的には富士川対岸に連続している。ここはかつては連続していたのだが、富士川の浸食により切断されたものである。

羽鮒丘陵は、富士宮市と芝川町との境界にあたり、境界線を境にして芝川町側は緩傾斜であるが、富士宮市側は急斜面（断層崖）となっているので人々の交流の障害となっていた。最高海抜は青木西方で326mあり、ここから富士宮市側は約30度、芝川町側は約10度の傾斜で徐々に下っている。

この丘陵の南部は、洪積前期の岩淵火山群噴出物で北部にいくにしたがい基盤は別所礫層となり、その上に古富士集塊質泥流がのったもので、古富士集塊質泥流の噴出後、断層運動が起こり安居山断層が羽鮒丘陵東縁を切断し、約250mの断層崖を形成し安居山谷をさらに深いものとした。

その後の新富士噴出物の溶岩流は、断層崖でくいとめられたため大中里踏切付近では万野風穴などで見られる溶岩が崖にのりあげている。また大部分の溶岩流は別所を通り安居山、さらに沼久保まで続いている。

白尾山(238m)、明星山(225m)を主とした白尾・明星丘陵は潤井川と富士川との間を北西から東南に小高く連なっている。この間、安居山、沼久保、星山、貫戸の４つの谷が富士川側から入りくんでいる。

白尾山を始め大部分は、羽鮒丘陵と同じ古富士集塊質泥流で形成されている。いっぽう明星山は、羽鮒丘陵南部と同じように岩淵火山の噴出物が富士川を渡り堆積したものである。

明星山の岩淵火山噴出物の下層には凝灰岩の層があり、昔、海であったことが考えられる。この地域の中の明星山西部や星山谷の東側、および富士川沿いには別所礫層の露頭があるが、別所礫層と岩淵火山の噴出物との関係は不整合である。点々と存在する別所礫層から考えると、古富士集塊質泥流の基盤は別所礫層であったらしい。

前記の４つの谷のうち、安居山谷だけに新期富士溶岩流が流れ込み、沼久保谷、星山谷、貫戸谷に見受けられないのは、溶岩流噴出前に北側に大宮断層ができたので、断層崖でくいとめられ、これを乗りこえることができなかったためであろう。」

次に星山丘陵を『富士宮の自然』（注２）から紹介しよう。

「星山丘陵は、富士宮市街地の南側に位置する高原状の地域で、幅(NE～SW)約4.75km、長さ(NW～SE)約６kmを占め、丘陵の西縁は、富士川を境に、庵原東部の第四紀前期洪積世の山地に隣接している。隣接地域との境界部に大河の存在することは、左右岸域間に、生物相に異相が現れたり、交通の障害になったり、経済や文化の交流の障害となって、社会生活伸展の上にも大きく影響している。

このような現象の基底には、地学上の要因が横たわっているので、それらの要因について概説を試みた。

星山丘陵域は、富士宮市域地形区のうえでは、IEす

なわち、富士火山麓性の孤立した１地形区を形成している。その理由は、まず、丘陵の四周が、断層によって切断され、北西～南東性の、長方形のブロックになっていることである。

これらの主断層のうち、南東側の入山瀬断層は、落差約90mの断層崖を形成する正断層である。北東側の大宮断層は、北北東（石の宮付近）で落差約80m・山本付近で落差約90m・野中付近で落差約80mで、この間に大宮断層を形成している。しかしながら、この断層の北西側の延長部は断層の特徴が著しく弱まり、おそらく撓曲して断層崖の性格が著しく失われている。これらの特殊な現象は、大宮断層がヒンジフォールト（ちょうつがい断層）の性格を持っているからにほかならない。北西側の安居山断層は、落差約180m（水沼）～130m（別所）～150m（青見）で、水沼付近から馬見塚方向に断層崖を形成している。南南西側の富士川第１断層は、左横ズレ断層の性格を強く現しているので、断層崖の発達は著しくない。

このほかにも、幾つかの小断層が丘陵を切っているが、巨視的には、富士川に向かって緩傾斜した一種の傾動地塊を形成して、高原状のフラットな面を持つ丘陵が出来上がっている。

星山丘陵は、元来、富士山麓とひと続きの溶岩原の末端であったから、表部には、当時の富士火山の放射谷の痕跡が、数条残されている。従って、現在、潤井川に合流している富士山の放射谷の幾つかは、かつては星山丘陵を南流して、富士川に注いでいた。例えば、潤井川～沼久保～星山放水路、弓沢川～貫戸、滋眼寺川（副泉川）～カジガ窪、天間沢～湯沢平などである（いずれも推定）。また、富士川左岸には、岩淵火山の溶岩流の岩本山、同じ溶岩流の坊主山の明星山、地塁性の白尾山などが、比較的単調な地貌にアクセントをつけている。

白尾山をはじめ、大宮断層崖上の丘陵からは、富士山の雄大にして端麗な容姿や、富士宮市域の眺望が見事である。

更に、丘陵面は開発されて、かつての二次林帯は早くから茶園に変貌し、あるいは住宅地となり、文教地となり、一部地域ではゴルフ場などに利用されるなど土地利用・開発などが急テンポで進んでいる。」

以上、羽鮒丘陵、星山丘陵の地学的説明を終え、滝戸遺跡の土層の細部について見ていきたい。

B．遺跡の土層

滝戸遺跡の土層は昭和52年実施の第Ⅱ次調査において、当時、県立吉原高等学校教諭であった増島淳氏によって分析がなされ（図－７）、以後この地域の土層把握の基礎となっているものである。以下ここに紹介する（注３）。

１．各土層の特徴

本遺跡の地質的基盤は、新富士火山の旧期活動により流出した玄武岩溶岩（大宮溶岩＝約１万年位前）であり、遺跡及び遺物は、溶岩上に堆積する火山性降下物層中に埋没している。

この火山性降下物各層について発掘作業中に観察また採集した試料は、中に含まれる砂粒鉱物の検鏡を行った。以下に各層の特徴及び時代等について記述する。

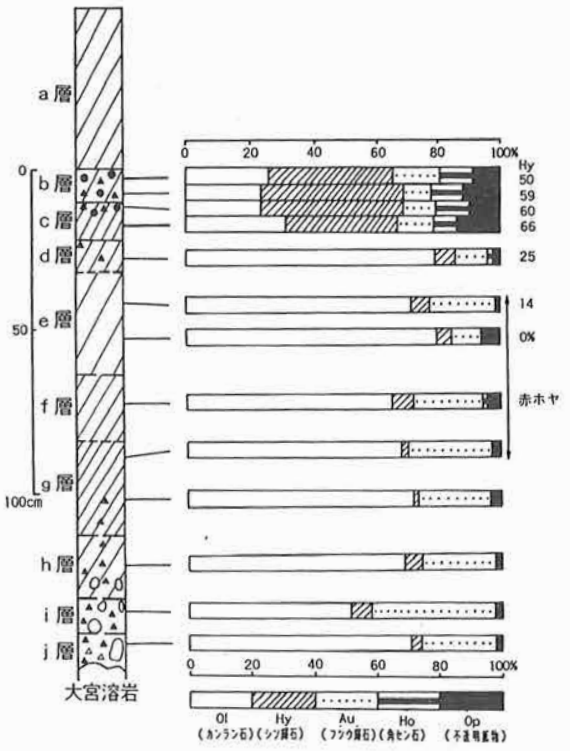
本地点は古富士泥流を主体とする丘陵の末端部にあたるため、各層は他地域に比して厚い傾向がある。

ａ．暗褐色表土（50cm）

人為的な要素が大きく、自然堆積の様子はあまり見られない。

ｂ．暗褐色ラピリ層（10cm）

いわゆる大沢ラピリ層に当り、淘汰の良い2～4mmの円礫が集中する。



図－７　地層区分と鉱物組成図

c．極暗褐色土層（12cm）

比較的よくしまり、1～2mmの白色パミス（カワゴ平パミス）を散在させる。顕微鏡観察結果もカワゴ平パミス由来の鉱物（ガラスを付着させたシソ輝石、角セン石、磁鉄鉱など）を多量に含んでいる。

d．暗褐色土層（10cm）

上下層の漸移帯に当り、3～5mmの赤色スコリアが散在する（同スコリアは、千居ラピリ＝赤田貫に相当するものと思われる。同層以下の各層は、検鏡下でカンラン石が圧倒的に目立ち、フツウ輝石がこれに次ぐ点で一致している）。

e．暗褐色土層（32cm）

上下層に比して若干脱色している。いわゆる栗色土層に当り、赤ホヤ（鬼界が島カルデラ起源の火山ガラス）由来と思われる茶色の火山ガラスが混入している。

f．暗褐色土層（20cm）

上下層の漸移帯、上層同様茶色ガラスを混入する。

g．極暗褐色土層（30cm）

いわゆる富士黒土層に該当し、全体に粒径2～3mmの赤色スコリアが点在している。上部には、茶色ガラスも混入している。

h．暗褐色土層（20cm）

上下層の漸移帯、同層から下部の各層には、基盤の風化礫が浮き上がり混入し、また全体にj層のスコリアの混入も多い。

i．褐色土層（10cm）

下層の風化帯、2～5mmの新鮮な赤色スコリアを多量に含む。顕微鏡下では、フツウ輝石の量が増加することから、本層がいわゆる休場層の最上部に該当するものと思われる。

j．スコリア層（10cm）

基盤に直接乗る（調査地点によっては、同層と基盤の間に若干の褐色土層を挟む場合もある）新鮮な、発泡の悪いスコリア層で、粒径は2～5mm、淘汰良い。

2．遺構及び遺物の包含層について

本遺跡は縄文時代早期から弥生時代後期末にかけての複合遺跡である。各時代遺構及び遺物の出土量について以下に記述する。

① 弥生時代後期末

遺物はa層（暗褐色表土）下部を中心に分布し、その遺構はb層（大沢ラピリ層）を切る。

② 縄文時代後期前葉（堀之内式）～中期後葉（加曽利EⅢ式）

遺物はc層（極暗褐色土）からd層（漸移層）にかけて分布するが、遺構はd層を主体に存在する。

③ 縄文中期前葉（勝坂～加曽利EⅠ式）

遺物はe層（栗色土層）下部を中心に分布する。

④ 縄文時代前期～早期中葉

遺物はg層（富士黒土層）を中心に分布する。

3．各層の時代

本遺跡に堆積する火山性降下物層中には、Ｋｅｙになる堆積物が含まれている。それら各層の堆積時期を記述する。

① b層＝大沢ラピリ層は富士火山西麓に広く分布し、各地域の調査結果から、その堆積時期は、B.P.（1950年を0年とする）約2700年前とされている。

② c層（極暗褐色土）中に含まれているカワゴ平パミス（天城火山群のカワゴ平火口由来の安山岩質軽石）の噴出時期は、B.P.2880±120年前とされている。

③ d層（極暗褐色土と栗色土層の漸移帯）中に散在する赤色スコリア粒は、富士宮市千居遺跡や田貫湖周辺に標式的に見られる。千居ラピリ（赤田貫）に該当するものと思われ、その噴出年代は、千居遺跡における調査結果では、およそB.P.3500年前後と考えられる。

④ e層（栗色土層）からf層（漸移帯）及びg層（富士黒土層）上部にかけては、鬼界が島カルデラ起源と思われる茶色の火山ガラスが混入しているが、その噴出時期はB.P.6000年くらい前とされている。

⑤ g層（極暗褐色土）はいわゆる富士黒土層に該当し、富士山東麓においては、その堆積時期がB.P.6000～8000年くらい前とされている。

⑥ i層（褐色土層）はフツウ輝石を多量に含む点から休場層の最上部に当るものと思われ、その堆積時期は洪積世最末期から沖積世初頭（B.P.1万年くらい前）と考えて良い。

注1. 塩川隆司　1971『富士宮市史』上巻 富士宮市
注2. 小川賢之輔 1988『富士宮史の自然』
注3. 増島 淳　1978『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅱ次)概報』

Ⅲ. 調査の経緯と経過

滝戸遺跡は富士宮市野中 658番地に位置する市立富士宮第三中学校敷地をほぼ中心にして約70,000m²の広がりをもつものと推定される。遺跡の発見は昭和初年前後の故佐野武勇・佐野要吉氏らを中心とする岳南考古学会の遺跡踏査によるものと伝えられる。

そしてそれが広く知られるようになったのは昭和24年以降の市立富士宮第三中学校（以下、市立第三中学校）校舎建設による整地工事に伴って膨大な縄文・弥生時代の遺物が出土したことによるものであった。あたかも時は静岡市登呂遺跡の発掘をその端緒とするいわゆる「考古学ブーム」のなかで、本遺跡は県内各地の高校郷土研究部をはじめとする多くの研究者の踏査をうけ、遺物の大部分を散逸してしまった。当時、縄文・弥生時代の住居跡をはじめ、優れた多くの遺物が出土したと伝えられるが、昭和51年に本格的調査を実施する以前に地元で確認でき得る資料はダンボール箱１個分ほどの土器、石器が郷土資料館に保管されていたに過ぎなく、遺跡内容を明らかにすることはほとんど不可能な状況であった。

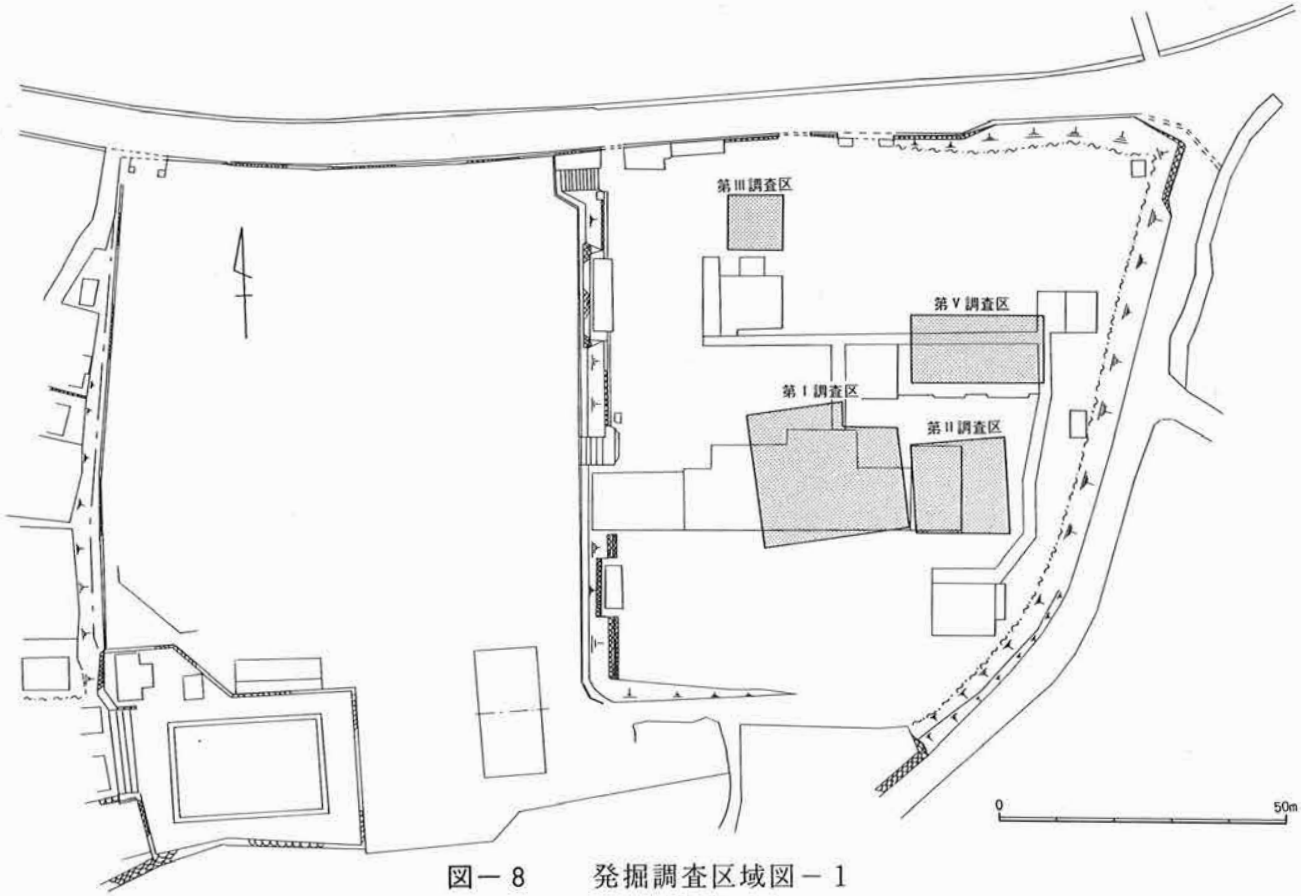
本遺跡が本格的な調査をうける端緒となったのは、昭和50年３月、学校がゴミ穴として穴を掘った際、縄文時代中期の広口壺の完形土器が出土したことにあった。つまりそれは過去の校舎建設のため遺跡は破壊されているという認識を改めねばならぬ結果となったのある。そして昭和51年度に改築予定の校舎建設予定地内には包含層の残存する可能性が充分指摘されることになったのである。ここから教育委員会、ならびに発掘調査関係者による協議が再三重ねられて、昭和51年７月下旬より第Ⅰ次の発掘調査を着手することが決定されたのである。

その後、校舎改築の第２期工事のため昭和52年７月に第Ⅱ次調査、屋内体育館建設のため昭和54年７月に第Ⅲ次調査が実施されるに至り、この後の昭和57年６月には滝戸渓谷の河川改修工事に伴って第Ⅳ次調査が実施され、そして再度、学校増改築事業のなかで技術科室の建設が計画され第Ⅴ次調査が昭和62年５月より実施されたのである（図－８・９）。

以下、それぞれの調査の経緯と結果の概略を記し、詳細についてはそれぞれの概報を参照していただきたいと思う。なお遺構の把握についても調査経過の記載上、それに従っている。

第Ⅰ次調査（昭和51年７月23日～８月19日）

第Ⅰ次調査は昭和51年７月６日に、調査範囲を確定するための予備調査が実施され、その対象範囲を20×25m程としたうえで、７月23日から約１ヶ月間、滝戸遺跡発掘調査団（調査団長若林淳之静岡大学教授）が



図－８　　発掘調査区域図－１

結成され発掘調査が実施された。弥生時代後期後半の住居跡４棟、方形周溝墓５基、土壙21基、縄文時代中期後葉～後期前葉と中期前葉の２面の遺構が検出された。住居跡はいずれも若干胴張りにつくる隅丸長方形を呈し、床面の二重構造が認められた。方形周溝墓はすべてで５基を数えたが、うち２基が円形を呈するものである（後に古墳と判明）。住居跡との重複関係を有する例はすべて方形周溝墓がより新しいことが指摘できた。第１号円形周溝墓から古墳期の坏身、石製模造品が検出された。縄文時代配石遺構は上下２面に分かれて、明瞭な時期差を有するものであった。ともに地山の礫を用いて、整然とした規則性を欠くことがその特徴であった。それに伴う土器・石器も豊富で、中期、後期の土器のすぐれた一括資料が数多く検出された。以上、第Ⅰ次調査により本遺跡の性格をはじめて明らかにするとともに、第２期の校舎改築予定地にも充分に包含層が残存することを確認したのである。

第Ⅱ次調査　（昭和52年７月24日～８月30日）

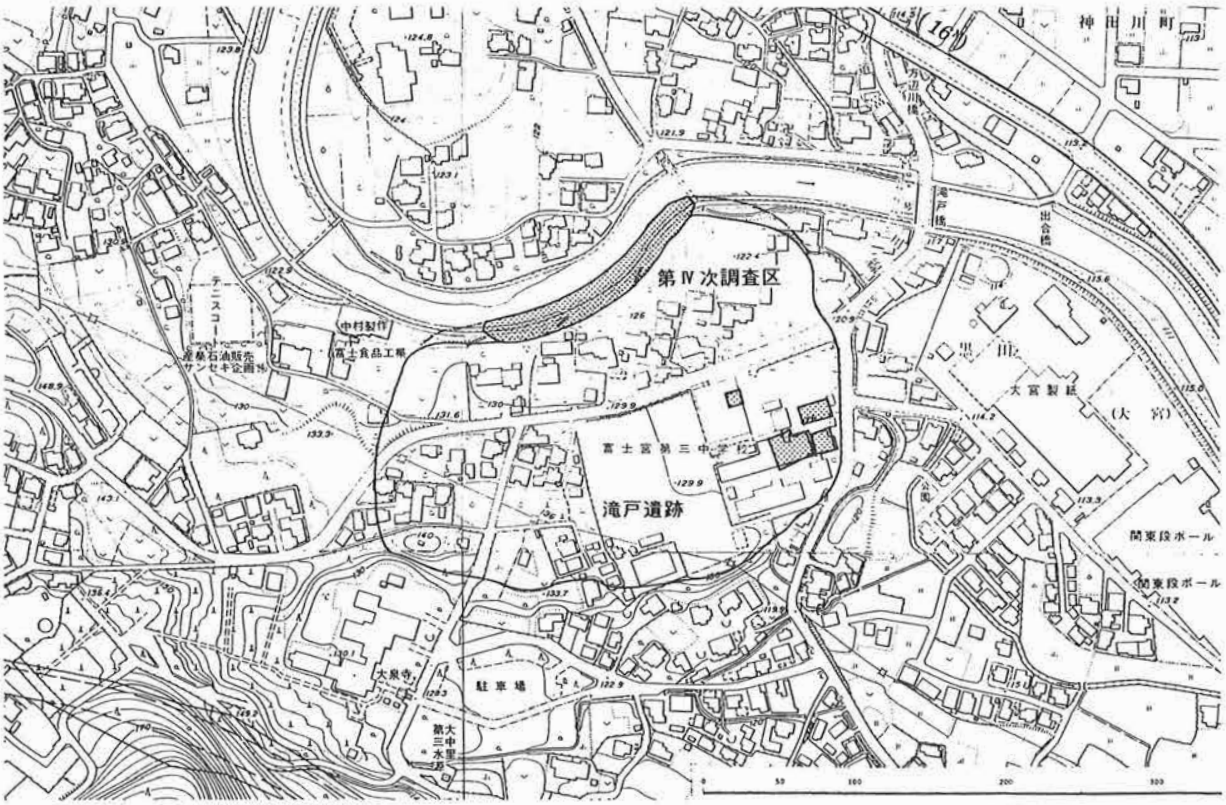
第Ⅱ次調査は第Ⅰ次調査対象地東側の約400m²を第Ⅰ次調査に続き滝戸遺跡発掘調査団の手で着手した。その結果第Ⅰ次調査で確認した弥生時代遺構・縄文時代上層面の遺構・縄文時代下層面の遺構に、縄文時代早・前期の遺構を追加し４層にわたる遺構面を確認した。弥生時代の遺構としては、住居跡２棟、方形周溝墓１基、溝状遺構１基、土壙、及び円形ピット11基を加えた。縄文時代上層面の配石遺構は１～数個の大礫を中心に小礫を集積してつくる小石組の各単位が、径30m前後の大円形配石とその外側帯状配石とに分かれ全体を形成する可能性が指摘された。縄文時代下層面の配石遺構はケルン状石組など良好な保存状況であった。上・下層両面に伴う埋甕が９基発見されている。さらに富士黒土層を包含層にもつ縄文時代早・前期の配石遺構が確認し得たことは大きな成果であった。

（滝戸遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査団　渡井一信）

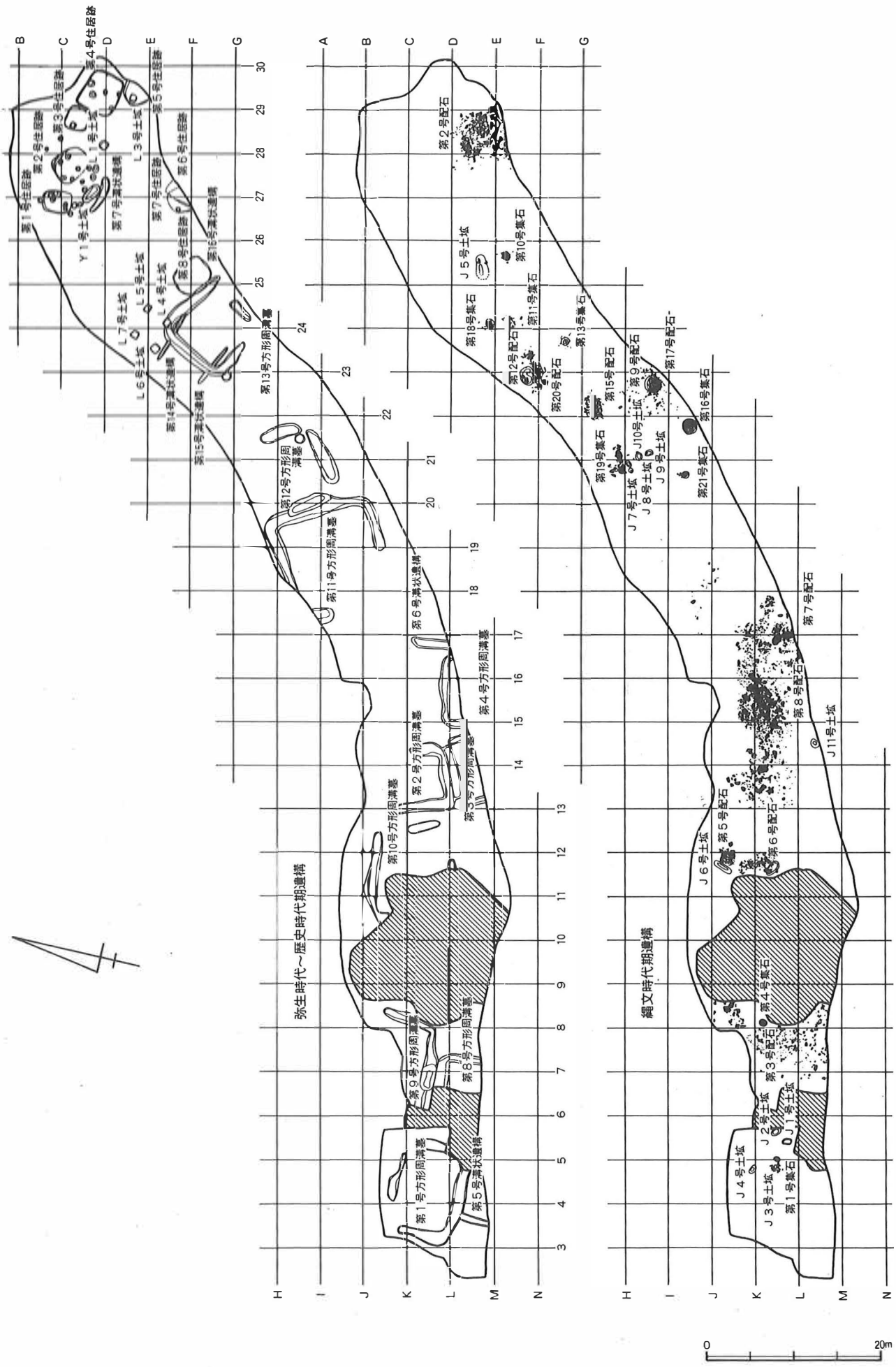
第Ⅲ次調査　（昭和54年７月21日～８月11日）

第Ⅲ次調査は第Ⅰ・Ⅱ次調査区より北側へ30m程向かった場所に建設が予定された屋内体育館によるものであった。昭和53年度に建設計画が提示され、同７月に予備調査が実施されたもので、その後教育委員会内で協議がなされて遺跡への影響の最も少ない建設用地が選定され、10×10m程の調査範囲となったものである。調査は本年度より富士宮市教育委員会が携わることとなり、当時、静岡県考古学協会員であった石川篤氏の協力を得て実施されたものである。

確認された遺構は縄文時代中期後半の埋甕２基、焼土を内包する土壙１基等で、弥生時代の遺構は包含層が削取されていたこともあり、はっきりしたものを捉えるまでにはいかなかった。また第Ⅰ次調査より確認



図－９　　発掘調査区域図－２



図－10　滝戸遺跡第Ⅳ次調査全体図

されてきた2面に重なる遺構面も追求したが、これもまた包含層が薄く明確な分離を果たすまでにはいかなかった。

第Ⅳ次調査　（昭和57年6月2日～8月31日）

第Ⅳ次調査は潤井川護岸建設工事の事前調査として静岡県富士土木事務所の委託を富士宮市が受け、調査を富士宮市教育委員会が実施したものである。この地点は市立第三中学校の校舎増改築事業に伴う一連の調査地点より北側へ100m程離れているものであるが、「滝戸」という同一遺跡であるという認識から第Ⅳ次調査として把握したものである（図－9）。

遺跡の状況を第Ⅳ次調査概報から拾うと次のようである。

滝戸遺跡は東西に約350m、南北に約200mの広がりをもち、このうちの約3分の1が市立第三中学校敷地で占められ、残る3分の2を県道富士宮芝川線沿いに立ち並ぶ民家と、その合間を縫った畑地で構成されている。第Ⅳ次調査区は潤井川に沿って河岸より30～50mの幅で畑地が続くところであるが、河岸は溶岩肌が露出して地元では「滝戸渓谷」と呼ばれ、調査区西端約60m間は身の丈30mを越えるような欅の大木が林立するところでもあった。調査はこの欅の抜根で撹乱された部分や溶岩露出部分を除き、約2.000mが対象となった。

その結果、第Ⅳ次調査区も例外なく重複した遺構が検出される複合遺跡の中にあった。先ず歴史時代の溝状遺構3基、土壙7基の下に、弥生時代後期後半の竪穴住居跡8棟、方形周溝墓11基、溝状遺構2基、土壙1基、ピット群が検出された。そして縄文時代包含層には配石・集石遺構20基、土壙11基が検出されたが、それは上下2面にわたるものではなく、中期後半から後期前半を主体にしたものであって、この時期に集中した遺跡の拡がりを示すものであった（図－10）。

第Ⅴ次調査　（昭和62年5月11日～8月27日）

第Ⅴ次調査は第Ⅱ次調査区の北側10mのところに計画された技術科室建設に伴う事前調査で約300㎡が対象となった。調査は富士宮市教育委員会が主体となって実施されたもので、これが一連の校舎増改築事業の最終工事計画地であった。

調査区は学校敷地のもっとも東寄りの崖に近い部分であり、過去の学校造成のための盛土で深く覆われて遺跡の包含層はそのままの状態で残っており、隣接の第Ⅱ次調査区に比べても劣ることのない遺構、遺物の出土を見たものである。その結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡19棟、古墳時代初頭の方形周溝墓1基、掘立柱建物跡1棟が調査区全面にわたって複雑に重複して出土し、その下層からはそれらの遺構に掘削を受けながらも縄文時代後期の配石1基、配石土壙1基、埋甕2基が最良の状態で検出されたのである。ここでは縄文時代の遺構面は後期前半の1面が認められたに過ぎなかったが、これによって配石の単位的なあり方、つまり時期によって異なる配石、ならびにその範囲のあり方が知れ、滝戸遺跡には都合4面に重なる縄文配石の存在が知れたのである。

整理作業　（平成5年度～8年度）

過去、5次にわたって実施されてきた滝戸遺跡の発掘調査で得た遺物はこれまでに記してきたように膨大なものとなった。そしてこの整理作業が本教育委員会の最大の懸案事項となったことは言うまでもなく、昭和62年に実施した第Ⅴ次調査終了後直ちに整理計画が実行されるはずであった。しかしこれより平成4年度にかけて実施された34箇所の遺跡発掘調査（確認調査を含む）や、それに関わる8件の報告書刊行事業はその度にこの計画の変更を強いることとなり今日に至った次第である。

この整理作業には第Ⅰ次調査よりその発掘作業に携わった同僚の渡井一信学芸員の協力を得、さらに愛知大学講師加納俊介氏、県立静岡中央高校副校長植松章八氏（富士宮市文化財保護審議会委員）の指導を賜って実施されたものである。またこの3氏以外にもその場その場でいろいろな方々にご教授をいただいたものである。

第Ⅰ次調査から20年たった今、それぞれの人々に感謝を申し上げるとともに、以上をもって本報告書を平成9年3月31日に刊行し本事業の遂行を終えるものである。

1. 富士宮市教育委員会 1977 『滝戸遺跡発掘調査(Ⅰ次)概報』
2. 富士宮市教育委員会 1978 『滝戸遺跡発掘調査(Ⅱ次)概報』
3. 富士宮市教育委員会 1980 『滝戸遺跡発掘調査(Ⅲ次)概報』
4. 富士宮市教育委員会 1983 『滝戸遺跡発掘調査(Ⅳ次)概報』

－追記－

この発掘調査と整理作業に携わって戴いた皆様の芳名は巻末に掲載させて戴いているが、その170余名の他に、富士宮市教育委員会庶務課、市立第三中学校教職員・ＰＴＡ関係者、地元高校の生徒の皆様、さらに地元の皆様と、約300名に及ぶ人々の手によって完遂されたこの事業が、富士宮市の歴史のなかで大きな足跡を残したことは間違いのないことだと思います。

Ⅳ. 滝戸遺跡の発見・発掘調査とその研究

植　松　章　八

A．滝戸遺跡と戦前の理解

1．滝戸遺跡の発見

滝戸遺跡が初めて文献に現れるのは、佐野武勇（宮町佐野病院の初代院長）の「静岡県大宮町及其の附近石器時代遺跡に就いて」（佐野1928）である。この論文の末尾に遺物を採集した地名表があり、現在の滝戸遺跡に当たるものは次の2地点である。

○白土（しらつち）より大宮町野中に接する滝戸の桑畑　多数の縄紋土器　少量の弥生式土器　石小刀

○大宮町野中　切通し路の上段の畑　極めて多量の縄紋土器　極めて少数の弥生式土器　石臼　打製石斧　手持砥石

前者は、中里南端部の白土から野中に向かう道路の一部が現在も残されており、現在の道路範囲の西北側を指すものとみられる。後者は、現在の市立富士宮第三中学校の校地内で、当時は小径が西側の高くなる斜面を登りながらほぼ東西方向に走り、その上段となった畑地から多量の遺物類が出土したと理解できるのである。

実は、佐野武勇の記録する2地点が共に現在の滝戸遺跡に含まれるものであるという結論に至るまでには、多少の検討を要した。ここで、柴田常恵（じょうえ）「富士の遺跡」（柴田1929）及び『静岡県史』第一巻（静岡県1930）と比較検討したのであった。その結果、前者の「大宮町滝戸遺跡」及び「大宮町野中遺跡」並びに後者の「大宮町滝戸」及び「同町野中区」が、佐野武勇論文の2地点とそれぞれ整合するものであり、共に現在の滝戸遺跡における異なった2地点の把握であると判断したのである。

さて、結論を先に述べたが、改めて佐野武勇論文により、滝戸遺跡発見までの経緯をみておくこととする。佐野武勇が「地上採収」（地表面に散布する遺物類を採集すること。）を始めた契機を見ると、やや長くなるが、次のとおりである。

> 最近にも東京から社史編纂（浅間大社の社史編さん事業…筆者注）の柴田先生が見えたが、何か此の辺の考古学的遺物の見るべきものはないかと云って来られたので、遺物は持ち合わせないが、とて大宮町野中区の、土器の破片出土の地を紹介して置いた。且、同業の先輩、野尻睦男氏は、親ら採収して保存して有る筈なりし為め、同氏に紹介した処、篤学なる氏は、即日親ら採収に出かけて、将た土器を携えて柴田先生を梅月楼旅館に訪れた事がある。此の野中区の土器の破片は、最初、大正十四年、吉田文俊氏が発見したものであって、大宮町史編纂の主事をして居られた、前町長、土屋勝太郎翁も大変に喜ばれた事であった。
>
> 柴田先生東帰の後、考古学研究行脚の桑原氏が訪問せられて何か此地方に於ける考古学的材料はないかと尋ねられたので其野中の地点を紹介した所翌日、同氏は多量の縄紋土器や弥生式土器の破片及砥石の破片を採収して自分に示された。
>
> それに刺戟せられて又、昨年（昭和2年…筆者注）の中央史壇の記事を開いて後藤氏の論文を見、且、先住民族が常に住居とするは、先ず水の豊かなる地であると云ふ常識から出発して、この大宮町の様に水の豊富なる地域に於て、先住民族の遺跡か遺物のない筈はないと思ひ、浅間神社湧玉池の、湧水の源泉地を中心として、地上採収を初めた。

要するに、滝戸遺跡（野中区）の発見は、大正14年(1925)で吉田文俊によるものであること、佐野武勇の調査は、柴田常恵を初めとする中央学者の調査に刺激されるとともに、後藤粛堂が駿河国は縄紋土器や弥生式土器の「たゞ一ツ、一寸角のたゞ一つの土器さへも発見されて居らない。こんな不思議な国は外にあまり類はなからふ」と断言したのに反発して地上採収を始めたというのである。この結果報告が、前期佐野武勇論文で、浅間神社を中心にして約8kmほどの地域を採集して30か所の遺跡をまとめたのである。すなわち、中央学者の調査に影響されて始めた遺跡確認調査という基礎資料の収集活動は、大正14年(1925)の滝戸遺跡の発見に始まり、昭和3年(1928)の佐野武勇論文の発表で世に開かれたものとなったのである。富士南麓地域における考古学研究の“あけぼの”と表現しておきたい。滝戸遺跡の発見により、この地域の考古学研究が始まったのである。

2．滝戸人と人種・民族論争

ところで、滝戸遺跡の発見を報じた佐野武勇論文を受けた前述の「富士の遺跡」及び『静岡県史』第一巻におけるその取扱いについてもみておきたいと思う。

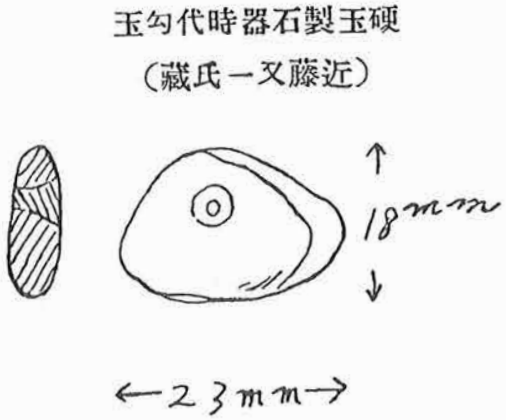
まず、それぞれの全容からふれてみよう。

『富士の研究』は、官幣大社浅間神社（現浅間大社）が大正11年(1922)９月に社史編さんを決定して翌12年(1923)４月１日から６年計画で事業に着手し、計画のとおり昭和３年(1928)３月31日に完成させ、同３年９月から翌４年(1929)３月末までの半年の間に全６巻を刊行したものである。内容は、富士・浅間神社の歴史、信仰、文学・美術・遺跡、地理と地質及び動物・植物にわたる総合的な研究であり、その遺跡分が柴田常恵による「富士の遺跡」である。この対象地域は、駿河国富士郡・駿東郡、甲斐国北都留郡・南都留郡・西八代郡に及び、時代は先史時代から歴史時代まで（その歴史区分については後述する。）を含んでいる。頁数も 175頁を有する大量なもので、今までに例をみない画期的な成果が示されたことになる。著者柴田常恵(1877～1954)は内務省嘱託の肩書きで編さんに参加しているが、その以前には東京大学理学部人類学教室に勤務して助手となり、『東京人類学雑誌』の編集に当たった。各地の遺跡・遺物調査に従事し、史跡調査にも優れた業績を残した。静岡・山梨両県にわたる富士山麓地域の遺跡・遺物調査を全国的視野から検討する上で果たした役割は大きい。

次に、『静岡県史』は、大正14年(1924)当時の伊東喜八郎知事が静岡県史編さんを決定し、翌15年(1925)４月には足立鍬太郎を編纂主事として事業が開始された。遺跡については、東京帝室博物館鑑査官高橋健自を顧問、同高橋勇を委員にして編さんが進められた。企画は高橋健自が当たったが、実際の執事は高橋勇が担当した。この原稿を高橋健自が校閲したが、途中で没し、代役は同じく東京帝室博物館鑑査官後藤守一が行った。第一巻は、先史時代から原始時代まで（縄文時代から古墳時代まで）で、全県下の遺跡・遺物について克明に記録している。この資料収集には、各地の在地研究者が全力を挙げて協力し、富士郡からの援助者としては官幣大社浅間神社職員・佐野武勇・赤池長重・寺田良彦・佐野要吉が記録され、いずれも地元在住の研究者であった。

やや詳細に過ぎた感もあるが、両書とも当時では画期的な中央学界のレベルによる我が滝戸遺跡の位置付け、すなわち、滝戸遺跡の時代、出土品の評価などを述べた最初の文献といえるためである。ここでは、その内容を章節名等を用いて整理してみよう。

「富士の遺跡」
i 先史時代



図－11　滝戸遺跡出土硬玉製大珠
―『静岡県史』第一巻(1930)から―

(i)先住民族（石器時代民族）の遺跡
　ア大宮町滝戸遺跡　厚手式土器、打製石斧、石皿
　イ大宮町野中遺跡
(ii)原始日本民族（弥生式土器使用民族）の遺跡
　ア大宮町滝戸遺跡　弥生式土器
ii 原史時代

『静岡県史』第１巻
i 先史時代
(i)石器時代
　ア大宮町滝戸　　厚手式土器、打製石斧・石皿等
　　硬玉製勾玉（図－11）
　イ大宮町野中区　厚手式土器、石鏃・石小刀ほか
(ii)金石器併用時代
　ア大宮町滝戸・野中　弥生式土器
ii 原史時代

まず、先史時代、原史時代という大別では共通し、前者が現在の縄文・弥生時代、後者が古墳時代となるが、滝戸・野中とも先史時代に挙げている。

先史時代とは文字による記録が無い時代を指すが、その内訳についてみると、前者では当時の“民族”を基準に先住民族（石器時代民族）と原始日本民族（弥生式土器を使用する民族）に、後者では石器時代と金石器併用時代に時代区分している。時代区分としては、原始日本民族と金石器併用時代の用語の相違が目立つが、両者とも弥生式土器を使用した時代とするとともに、前者が原始日本民族は「金石両器を併用せる民族」、後者が金石器併用時代の民族は「原始日本民族とか固有日本人」と呼ぶとするとあるから基本的には共通した内容とみてよいようである。

ただし、詳しく比較してみると「富士の遺跡」では、先住民族（石器時代民族）は「所謂アイヌ系に属するもの」、弥生土器を使用した民族は「吾々の祖先の或者でなければならぬ」ことから「此両者は全然別個の系統」というのである。これに対して『静岡県史』第一巻は、縄文式土器を使用した石器時代人として、アイヌ人とかアイヌ系統とかいう表現はせず、更に弥生式土器を使用した金石併用時代人との関係では「体質人類学者などの中には人骨の相違によって両者の関係の離すべからざることを見…両者の関係を同一系統に置くべきものとするものもある。」が、「全然此説に従ふこと」は「両者間に多少の関係あるは十分認め」ながらも無理であるとする。

要するに、滝戸遺跡から出土した遺物類には、石器時代と金石併用（弥生式土器）時代のものがあるが、石器時代の滝戸人は一体我々の祖先であるのかアイヌ系統であるのか、金石併用時代の滝戸人になって初めて我々の祖先になるのかという人種・民族論争が当時の学界の大きなテーマだったのである。

日本列島に居住して縄文式土器を使った石器時代人がアイヌ人であるというアイヌ説を本格的に主張したのは幕末の医師シーボルトであり、特に明治後半になって種々の論争を経ながらも、大正初期にはアイヌ説が学会の通説化した。それは、記紀の所伝を真実とみなし、優秀な「天孫民族」が、低劣な石器使用文化を経たとは考え難く、石器時代人のところに「降臨」して追い払ったとする科学的根拠の乏しい「先住民族」説だったのである。

大正後半になると、浜田耕作が大正10年(1921)に大阪府国府遺跡の分層発掘により、縄文土器と弥生土器の相違は、人種・民族の差ではなく、年代差であるという考えを示した。大正13年(1924)には、形質人類学者の清野謙次が、膨大な人骨計測結果からアイヌ説を批判し、現日本人と現アイヌ人は石器時代人を共通の祖先とし、その後の混血によって現在に至ったとした。石器時代人は原日本人であるという説で、現在までの人類学会の基本的な考え方となっている（清野1924）。

いうまでもなく、「富士の遺跡」及び『静岡県史』第一巻の編さん刊行の時期は、「原日本人説」の発表に併行し、大きな影響を受けることになる。「富士の遺跡」では、清野博士の所説について述べた上で、「未だ縄文土器使用の民族が、やがて弥生式土器使用の民族に移ったと見るには、尚攻究すべき点尠からず、直ちに之を受け入れるには困難なるものがあるから、両者の間には種族的差異があったものと見ねばならぬ。」と反論を強める。『静岡県史』第一巻も、原日本人説に対して「併し全然此説に従ふことは今日なお躊躇せざるを得ない。」「矢張り別個の民族であるとしなければならない。」と微妙に批判する。それでも、前者が“民族”による時代区分をし、後者が石器と金石器という遺物によって区分する相違は、結果的には大きく立場を変えてみせる。滝戸遺跡人の評価は、こうした微妙な違いとともに、地元に還元されたことになるのである。

3．岳南考古学会と郷土研究の隆盛

『静岡県史』第一巻の石器時代のうち、「富士郡に於ける遺跡」の冒頭に、最近大宮町を中心に豊富な遺跡・遺物の発見がみられることは「大宮町佐野武勇・赤池長重・寺田良彦其他岳南考古学会員諸氏」の功績であると記されている。この岳南考古学会については、佐野要吉『富士南麓郷土史談』（佐野1931）の例言にも記され、ここでは「岳南考古会」として前記3人を挙げている。この3人に佐野要吉を加えた4人が中心メンバーで、会の創立は大正15年(1926)とされるが、リーダー（会長）であった佐野武勇の本格的踏査活動が昭和2年(1927)から昭和3年ごろ始まるらしいことは既に述べたとおりでである。

調査の範囲は吉原方面を含めた全富士郡から富士川町にまで及び、その成果は多く佐野武勇によって発表され、学界とも一定の結びつきを有したようである。前述の佐野武勇論文 は昭和3年(1928)であるが、その後も昭和4・5年と続けて報文をよせ、昭和11年(1936)7月に東海考古学会が創立されると佐野武勇が駿河を代表して発起人に加わっている。彼等の活動は、昭和10年代まで続くが、戦争の激化とともに活動不能となったようである。いずれにしても、岳南考古学会は昭和初年の地域活動の中でも目立った存在であり、その成果の大集成されたものが『静岡県史』第一巻といえるのである。

ところで、昭和初年ごろといえば、郷土研究・郷土教育の高揚期であった。『静岡県史』第一巻が、県下各地における郷土研究のいわば集約であり、それらを中央の学者が中央学界のレベルで再検討した成果であるといえることは既に述べたとおりである。これより以前の大正14年(1925)、県庁内に「静岡県史蹟名勝天然記念物調査委員会」が設けられ、足立鍬太郎以下16人の委員が県内各地各界から任命された。報告書は、

大正14年(1925)の第１集から昭和14年の第13集まで継続（第14集は、昭和25年）するが、各地各界の委員とその報告が県内郷土研究の“先達”として果たした役割は評価に値する。また、大正12年(1923)に旧制静岡高等学校が開校され、県立図書館葵文庫も開館された。この両者が果たした役割も大きかったといわれる。

昭和７年(1932)、静岡県教育課内に「静岡県郷土研究協会」が設立された。設立趣意書によると、前年11月には静岡市で郷土研究大会を開催し、参加者 600余人のもとに協会設立が可決されている。会則によると、総裁は県知事、会長は県学務部長、副会長１名は県教育課長という官を主力とする組織であった。『静岡県郷土研究』を昭和８年(1933)の第１輯から昭和18年(1943)の第20輯まで刊行した。会員数は、昭和11年度(1936) 775人、うち個人 198人、他は小中学校等というものであった（飯塚1982)。

こうした状況が県規模で見た郷土研究活動であり、静岡県は「東京に次ぐ積極的かつ活動的な郷土研究県」であるとされ、「県が助成して機関紙」を発行している点が高く評価されるものであったという。(戸羽山瀚「追憶片々」前掲書)　県内各地域においても、郷土研究・郷土教育は大いに活発となった。特に郷土教育のための資料集の刊行が盛行したようで、この地域でみると、浮島尋常高等小学校神田政平による『郷土研究』(浮島尋常高等小学校1931)、富士川尋常高等小学校編『富士川町郷土教育資料』(富士川尋常高等小学校1931) が共にガリ版刷りの約 300頁と 500頁前後で残され、しかも全教職員が分担して作成した（浮島のものについては著者神田政平ともあるから、執筆は神田が当たったという意であろうかと思う。）と記されている。この中に、岳南地域では、前述の佐野要吉による『富士南麓郷土史談』昭和６年(1931)９月があった。本書は静岡市谷島屋書店から刊行された活字印刷のもので定価を付けて広く販売されたが、それは昭和４年(1929)の『有史以前の富士根村』(ガリ版刷り、41頁) (佐野1929) を拡大発展したものであった。

我が滝戸遺跡の発見は、こうした静岡県における郷土研究、中央レベルでの考古学研究の上に成立し、意義付けられたものであったことに注目しなければならない。畑から土器片を拾い上げれば、遺跡の発見というわけにはいかないのである。

B．市立富士宮第三中学校の建設・発掘調査と戦後の研究

１．戦後の考古学ブームと滝戸遺跡の破壊

昭和20年(1945)８月に我が国は敗戦を迎え、戦後日本は未曾有の大混乱を呈することになった。国民の多くは過去の価値観を喪失して食料不足と劣等意識に陥ったが、その中で国民が“自信と誇り”を生み出す上で大きく役立ったものが３つあるといわれる。湯川秀樹のノーベル賞、古橋広之進の水泳及び登呂遺跡の発掘がそれである。静岡市の登呂遺跡は昭和18年(1943)に軍需工場の建設で発見され、一部は調査されたが、昭和22年(1947)から３年間にわたって本格的な発掘調査が行われることになった。当時は食料や物資不足の最中であったが、神話古代史から解放された科学的考古学は関東を中心とする諸大学チームを擁した学際的調査団を組織して日々新たな発見を報道し、国民の期待に答えた。いわゆる考古学ブームの到来である。

静岡県内でも、大学生はもちろん多くの高校生たちがこの調査に参加した。特に県内各地に誕生していた新制高等学校郷土研究部員たちは、調査推進の大きな力となるとともに、新しい考古学調査の知識や方法を学び、後には県内考古学界の指導的役割を果たした者も多い。こうした考古学ブームの中で、県内でも戦後世代の活躍が各地で一斉に始まり、考古学研究者や各高校郷土研究部員たちの遺跡踏査が活発になった。この地域では、県立富士高等学校郷土研究部の小林常定及び小林求巳の２人が、戦後の遺跡踏査の草分けの役割を果たしたようであり、昭和23年(1948)ごろには小野真一もよく同行したという。昭和25年(1950)ごろには、当時田子ノ浦工業高校に在職した日尾正義も星山方面で採集活動を行った。

こうした調査活動はいずれも部分的なものであるが、昭和27年(1952)ごろからいよいよ中野国雄の活動が始まり、昭和28年には「吉原周辺における原始時代の考察（予報)」(中野他1953) を共同執筆し、翌29年には「吉原周辺の原始時代（第二報)」(中野1954) を単名で著している。中野の調査活動は、ある時には佐藤民雄、小野真一両人や稲垣甲子雄とともに共同しながら、富士市、富士宮市から芝川町までを含む富士郡全域を極めて克明に歩いたことに意義がある。これらの成果は、昭和32年度と記入された資料集に 500点を越す遺物類の実測図及び拓本としてまとめられ、多くの写真も添えられている。このうち、滝戸遺跡採集品は75点

以上あり、前記佐野武勇の収集品の内容を含むものとなっている。また、公的には、昭和40年(1965)に刊行された『静岡県埋蔵文化財地図』(「静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表」を含む。)(静岡県教育委員会1965)に盛り込まれて、現地名表の骨格となっている。その後は昭和36年ごろから塩川正男が、少し遅れて遠藤秀男や野村昭光も踏査を始め、特に野村昭光の精密な踏査活動は旧富士郡全域にわたって今日まで継続されているのである。

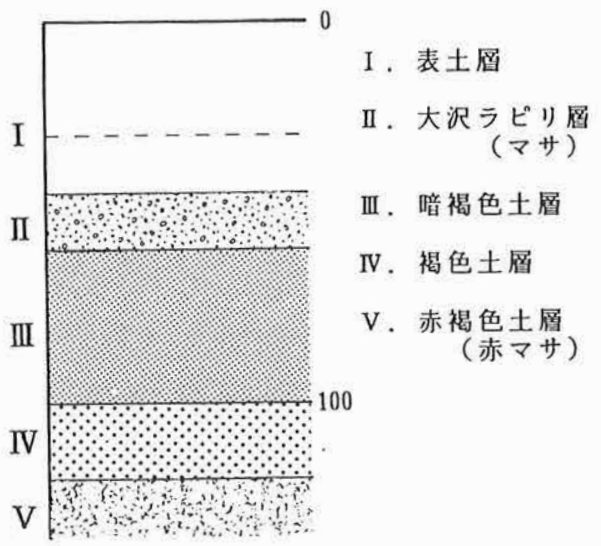
さて、考古学ブームのころ、昭和24年(1949)3月から、滝戸遺跡において、市立富士宮第三中学校の建設のための土木工事が始まった。工事は現校舎面と現グランド面を上下2段に地形変更する内容であり、全体が西を高くする傾斜面であることからそれぞれの高い部分を削平して低い部分に積み上げるものであった。作業には地域の人々の奉仕活動も行われ、削平工事によって膨大な土器・石器類の出土がみられた。当時としては空前の出土量が広く県内に知られ、各地の研究者や高校生が遺跡を訪れてはもらい受けたという。現場では深さ1mもある大箱に土器や石器が投げ込まれていて、高校生たちはリュックサック一杯ずつを持ち帰ったという。そのため、遺物は四散し、わずかの量が市立第三中学校に残されたにすぎないこととなった。

2．校舎建設工事に伴う調査報告と『富士宮市史』の研究

こうした中でも、県下各地から集まった研究者や高校生たちによって部分的な緊急の発掘調査や層位確認などが行われたようである。

県立富士高校郷土研究部の部誌『ふるさと』2号に、「富士宮市滝戸遺蹟報告(1)」(渡辺・小林1950)がある。渡辺繁治及び小林常定の連名であるが、末尾に「五月初旬　－T・K記－」とあるからおそらく昭和24年(1949)5月の記録ということになる。

簡単に内容をみておく。序言では、「発掘に4月初旬(昭和24年…筆者注)参加し発掘及び採集に従事した」概報であるとする。出土状況として層位観察が記録されている。今、掲載された図に若干の加筆補正をして示した(図－12)。第Ⅰ層は、表土層で、上半部には耕作が及んでいる。第Ⅱ層は、厚さ15cm、俗にマサと呼ばれる大沢ラピリ層で硬い。第Ⅲ層は、暗褐色土層と呼ぶべきものかと思われるが、この中、下半部が弥生時代(後期)の包含層となると記録されている。第Ⅳ層は、褐色土層と呼ばれているが、縄文時代(中・



図－12　滝戸遺跡土層図
－『ふるさと』2号(1930)から－

後期)の包含層であるとされている。第Ⅴ層は、赤マサ層であろうか、洪積層である。この記録は、土層としては我々の第Ⅰ次発掘調査区にほぼ共通するもので、滝戸遺跡の高い部分の層位として認めることができる。問題は、出土層位で、我々の所見では弥生期は第Ⅰ層下部、縄文中後期は第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけてであった。緊急発掘のため、特に土器出土量の薄い弥生期については、竪穴住居などの遺構内で観察しているようで、土層認定を誤ったものと考えてよいであろう。また、第Ⅲ層及び第Ⅳ層は、我々が栗色土層として一括した上で、上下に分層し得たのが、第Ⅱ次発掘調査区で良好な層序を得てからであったことを考えると、比較的良好な状況に出会ったことになろう。

出土品についても述べている。土器は図もないが、土器型式により、勝坂式、加曽利E式、堀之内式、加曽利B式、安行式及び弥生式の6種をあげ、注目すべきものとして堀之内式の釣手土器2箇が出土し、以前に発掘された土偶顔面1個があるとする。石器は、実測図を添えて打製石斧、磨製石斧、石錘、石匙、石皿、石鏃、敲石(たたきいし)(擦石か)、石棒、石槍(?)、石錐(?)等について述べている。なお、炉跡2か所もあり、うち1か所は石囲い炉であったとする。

以上が渡辺・小林報文であるが、かなりな知識を有して調査に当たっていることが分かる。当時の高校生、富士高郷土研究部のレベルを示すものとして興味深いと思う。

次に、造成工事当時ではないが、造成時の記録として、昭和32年(1957)に刊行された小野真一の『静岡県東部古代文化総覧』(小野1957)がある。

ここでは、前掲の渡辺・小林報文を引用しながらも、

筆者による昭和30年(1955)1月及び昭和31年10月の2回の踏査知見を付け加えており、校庭の南側に竪穴住居跡が断面観察されたとする。

以上が昭和24年(1949)に始まる市立富士宮第三中学校増改築事業に伴う滝戸遺跡の記録ということになるが、その後の周辺遺跡における踏査成果等を踏まえ、昭和46年(1971)の『富士宮市史』上巻（植松1971）において滝戸遺跡の評価を試みたことがある。ここでは、特に岳南地域における滝戸遺跡の位置付けという観点から検討してみる。

一般に、遺跡は、一つで単独で存在することはない。いくつかがまとまりをもって群をつくり、すなわち、社会をつくって自然に働きかけるのである。こうした遺跡のまとまりを縄文人のテリトリー、生活圏と理解しておく。いま、岳南地域の縄文中後期の遺跡を年代順に並べ、詳しく検討して地図上に示すと、A～Mとしたグループ、生活圏をとらえることができる（図－13)。その各グループをみると、成立が早く、規模が大きく、年代的にも連続してグループの中核となる遺跡（中核遺跡と呼ぶ。）とその周辺で、ある時期に多くは一斉に形成され、土器型式で1～2型式ほどに収まる遺跡とに区分される。中核遺跡としては、Eグルー

図－13　富士山南麓地域における縄文時代中・後期の遺跡と生活圏

プの箕輪遺跡、Fグループの富士市天間沢遺跡及びGグループの滝戸遺跡が典型例として認められる。この3遺跡が相互に1.5kmずつの距離で共通することから、各生活圏の範囲を半径1.5kmの正円で表現してみたのである。

同様に早前期の遺跡で検討してみると、半径3kmでⅠ～Ⅴ群を認めることができ、それらを中後期の図に重ねておいた。ここに早前期から中後期への縄文社会の発展をみることができると考えたいのである。我が滝戸遺跡は、早前期の第Ⅲ群 22遺跡、中後期のGグループ 22遺跡として、共に生活圏の中核遺跡の役割を果たしていることが明らかになった。ただ、このように図式化された縄文社会の生活圏が、狩猟と採集を主力とする縄文社会における何を反映するものであるか、それはまた限りない可能性を持つものとしておこう。

ところで、こうした作業が可能となり、滝戸遺跡の位置付けを岳南地域全体の中で見ることができたのは、昭和20～30年代における前述の遺跡踏査の蓄積を分析した成果であることを強調しておかなければならないと思う。なかでも、前述した中野国雄の資料集に盛り込まれた75点余の拓本及び実測図類は、滝戸遺跡の評価を導く上で極めて大きな役割を果たした。

C．発掘調査とその成果

滝戸遺跡の発掘調査は、昭和51年(1976)の第Ⅰ次から昭和62年(1987)の第Ⅴ次まで、11年間、延 288日間にわたる大発掘として実施された。発掘調査の原因は、第Ⅰ・Ⅱ次が校舎、第Ⅲ次が体育館、第Ⅴ次が技術科室の増改築であり、市立富士宮第三中学校増改築事業と呼ぶ。同様に第Ⅳ次が富士土木事務所による潤井川護岸建設工事である。

ここでは、本発掘調査が持つ問題点や発掘調査で確認された成果についてまとめておきたいと思う。

1．民間研究者とＰＴＡ会員による調査（第Ⅰ・Ⅱ次）から行政職員による調査（第Ⅲ～Ⅴ次）へ

第Ⅰ次調査についての端緒は、昭和50年(1975)3月に学校で塵芥処理のためのピットを発掘したところ、縄文時代中期の完形土器が出土したことにあった。これにより、昭和51年度に校舎増築を予定している箇所に包含層が残存するらしいということになり、7月6日に予備調査を実施した。この結果、約20×25mほどの調査範囲を設定した。第Ⅱ次調査は、その東側に連続する昭和52年度校舎増築用地で、18×17mほどの調査区を設定した。

この第Ⅰ・Ⅱ次調査団は、団長が若林淳之（当時静岡大学教授)、主任調査員が植松章八（当時県立吉原高等学校教諭)、調査員が野村昭光以下の会社員、教員等であり、いずれも市教育委員会から委嘱されたいわゆる民間研究者であった。こうした地域の民間研究者 －ここでは、教員等の本職を持ちながら長期休暇等に発掘を委嘱された研究者をいう。－ に行政上必要な調査を依頼する方式は、静岡県では昭和30年代後半から40年代初めにかけて行われた東海道新幹線及び東名高速道路の発掘調査によって定着したものであり、昭和40年代から50年代初めにかけて県下各地で盛行したのである。

その後、行政や民間開発のための調査が多くなると、本業をもつ民間研究者では対応が困難となり、昭和50年前後から特に各地でのバイパス調査などへの対応を契機に、各市町村が専門職員を採用するシステムが広がり出した。この地域では、昭和53年度に始まる西富士道路建設に伴う遺跡調査への対応のため、富士宮市及び富士市がそれぞれ専門職員を採用し、行政による調査対応を発足させることとなった。民間研究者の中には、所属替えにより、行政の専門職員に移動する者も現れた。

こうした行政による調査体制の発足は、発掘調査の在り方に大きな変化をもたらすこととなった。現象的にみると、民間研究者と学生、高校生、事業関係者などの手伝いによる短期間（長期休暇中など）の小規模発掘から行政職員が作業員を雇用した長期間の大規模発掘に変わったのである。

こうした視点から滝戸遺跡の発掘調査をみると、第Ⅰ・第Ⅱ次調査は、典型的な民間委託方式であり、若林淳之調査団長以下の民間研究者を中心に校舎増改築にかかわる学校関係者、ここでは三中ＰＴＡ会員による労働奉仕や地元高校郷土研究部員の手伝いなどを大きな柱として実施されたのであった。特に三中ＰＴＡの調査協力は、調査期間中の連日にわたり、数十人規模を動員いただき、大きな援助であった。縄文時代から弥生時代にかけて重複する遺構面を比較的短時間で調査終了できた成果は、当時の三中ＰＴＡの協力によるところが大きい。当時の三中ＰＴＡや教職員の方々との暖かいふれあいを思い起こすとともに、改めて深く感謝申し上げる次第である。

ところで、こうした民間研究者に依存する調査体制の最大の欠点は、多く現地調査終了後の資料整理、遺物整理作業を経て報告書を刊行する報告義務の完成過程に現れる。整理報告作業が単なる社会的責任にとどまらず、文化財保護法上の行政機関の責任でもあることはもちろんであるが、調査規模や出土遺物量の増大とともに、それは民間研究者の能力を上回るものとなり、市町村が主体となって実施された発掘調査の成果が広く公開されないまま死蔵されてしまう結果を生むことにある。

滝戸遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査の成果も、実はそうした危険性を十分に有していた。量的には予想を大きく越える膨大な出土品、質的には貴重な発見内容などがあり、民間研究者の片手間には余る実体が生じていたのである。ここに、昭和54年(1979)の第Ⅲ次調査、昭和57年(1982)の第Ⅳ次調査、昭和62年(1987)の第Ⅴ次調査が市教育委員会の専門職員によって実施され、更に平成5年度(1993)から平成8年度の4か年間をかけて『滝戸遺跡発掘調査報告書』の作成事業が進められることになったのである。

こうした富士宮市教育委員会の対応を高く評価するとともに、滝戸遺跡の現地調査や整理報告の事業が時代の変化に対応する在り方を示したことに深い感慨をおぼえるものである。今回の第Ⅰ調査から第Ⅴ次調査にわたる調査内容は、十分な検討を経た成果として滝戸遺跡のもつ価値を明らかにするとともに、地域にもたらす社会的・文化的意義も計り知れないものと思われる。滝戸遺跡は、市教育委員会の適切な対応と専門職員の配置により、その全容を初めて公にすることが可能になったのである。

2．発掘調査で分かったこと

滝戸遺跡のⅠ～Ⅴ次にわたる発掘調査で何が分かったのか、詳細は本文に記されているが、ここではその概要を列記することにする。

ところで、昭和51年(1976)の第Ⅰ次調査及び翌年の第Ⅱ次調査から数えると、本報告書は20年を越えることになる。20年振りの報告というと、まず近年の行政発掘調査ではあまり例がないと思うが、実は発掘調査を担当した立場からすれば若干の“つらさ”が伴う。

要するに、調査レベルが発達して現在の問題意識に対応し得る十分な資料内容が整えられていないことがあるからである。逆に現時点での整理分析によって発掘当時とは異なる判断や内容が現在の研究レベルで取り上げられることも多い。報告が遅れたことにより、発掘資料がより今日的レベルで取り扱われて豊かな内容を誇れるものとなった点も多い。

こうした整理検討の結果を上げておこう。

(1) 弥生時代後期～古墳時代

① 発見された遺構数は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ次調査区で、竪穴住居跡25棟、掘立柱建物跡2棟、方形周溝墓4基、円墳2基である。

② 弥生時代後期（雌鹿塚様式）に第Ⅰ・Ⅱ次調査区から第Ⅴ次調査区東半部に掘立柱建物跡を含む居住域が出現する。遺跡の中でこの時期に当たる墓域は第Ⅳ次調査区の方形周溝墓群である。台地の低い北側に墓域、高くなる南側に居住域ということになるが、相互の距離は約100mを測り、近接して同時期の遺跡もあるので断定は避けておきたい。

③ 古墳時代前期では、まず大廓様式前半期（庄内式併行）の第Ⅰ・Ⅱ次調査区に方形周溝墓群があり、第Ⅴ次調査区西半部の竪穴住居群が対応する。台地の南側が墓域、近接する北側が居住域となるが、100m離れた第Ⅳ次調査区末端部にも同時期の居住域が認められる。前項も含めてこうした居住域と墓域のセット関係が確認された意味は大きい。

④ 大廓様式後半期（布留式併行）のものとして、第Ⅴ次調査区に大型の方形周溝墓1基のみが認められる。同時期の居住域は不明である。

⑤ 第Ⅰ次調査区で発掘当時円形周溝墓として扱った2基を円墳と改めた。時期については、ＳＺ０２溝内出土の須恵器模倣坏を、現状ではその研究が十分なされていないものの、5世紀後半の新しい時期と見ておこう。県内では最古の須恵器模倣坏であるといえることになる。また、剣形の滑石製模造品も伴出している。

ＳＺ０３の時期は明らかではないが、いずれにしても5世紀後半を中心にこの地に群集墳（初期群集墳と呼ぶ。）が成立していたことになる。最近、三中グランドの西側に古墳群が残存するという指摘もあり、同一群とみられる。類例の少ない時期で、市内最古の古墳となる。

(2) 縄文時代

① 土層については、富士黒土層の確認に注目しておきたい。富士山麓地域における基本層序は、1表土層（表土層下部が弥生時代中期以降の包含層） 2大沢ラピリ層（いわゆる富士マサ） 3栗色土層（縄文時代中後期の包含層） 4富士黒土層（縄文

時代早前期の包含層）　5黄褐色土層（いわゆる休場層で先土器時代包含層）というのが、町田洋以来（町田1964）の定説である。ところが、こうした層序が常に確認できるのは富士山東麓であり、南麓では富士黒土層を欠くのが一般的であった。そのため、縄文時代早前期は栗色土層下部にみられたのである。

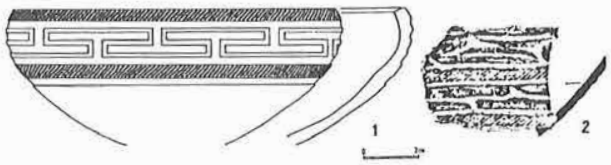
ところが、滝戸遺跡第Ⅱ次調査区においては富士黒土層が良好な状況で確認された。いわゆる斜面堆積によるものであるが、視覚的に確認された層に遺構面を持った意義は大きい。同様に栗色土層についても上下2層に分離でき、その中に縄文時代中後期の遺構面3面が確認されたのである。

② 出土遺物、特に出土土器から見た滝戸遺跡の消長についてふれよう。遺跡の出発は、早期前半の撚糸文・押型文土器に始まるが、早期後半の条痕文土器は見られず空白となる。木島式土器に代表される前期初頭は再び活発な状況を呈するが、中葉から後半にかけて薄くなる。

中期に入ると初頭から急速に隆盛期を迎え、特に中葉から後半にかけては勝坂式、曽利式及び加曽利E式と呼ばれる中部山岳及び関東系の土器群が大量に出土している。こうした隆盛は後期前葉の堀之内式期、特に堀之内1式まで継続する。前述した中期遺跡の爆発的増加は、曽利式の前葉から始まって特に中・後葉に一斉に新しい遺跡が経営されることになる。少なくとも、この地域における縄文社会の大きな発展は、中期、特に中期後半から後期前葉の時期にあるものと認めてよい。

滝戸遺跡における後期前葉の堀之内1式土器は膨大であり、本報告書では縄文土器出土量の約2分の1がこれに当たるとしているが、後続する堀之内2式以降の出土量は激減して本遺跡の繁栄期は終えんを迎える。こうした急激な変化は、滝戸遺跡のみに見られる現象ではない。市内で堀之内2式以降を出す遺跡を数えると縄文時代遺跡99遺跡（富士宮市教育委員会 1993 ）のうち、わずかに4～5遺跡を数えるにすぎなく、量的にも極めて少ない。こうした在り方は、広く中部山岳地方から関東・東海の一部にまで及んだ曽利式系文化に基本的には共通した特色といえる。

問題は、こうした中期文化の衰退の原因を何に求めるかである。地球的規模で見ると、縄文時代前中期は温暖多湿な気候に恵まれ、後晩期は寒冷化、乾燥化すると言われている。日本列島では、中期から



図－14　滝戸遺跡出土の縄文時代晩期の土器（中野国雄作図に加筆）

徐々に寒冷化が進み始め、縄文時代後期に入ったころには決定的な変化が表面化したと考えてよいようである。温暖多湿な気候に支えられた落葉広葉樹林から与えられた植物採集を主として狩猟を従とする食料資源が大幅に減少し、縄文人たちの努力や工夫が限度に達すると、人々は移動によって新しい生活地を求めることになる。この地方でみると、縄文時代後晩期には、遠州灘以西や相模湾以東の海岸部に大貝塚を築いて大きく漁撈に依存する遺跡に人々は移動したと理解しておきたいのである。

こうした縄文社会の大きな転換期に、富士山南麓地域では、富士山の噴火も加わったようである。前述した大沢ラピリ（いわゆる富士マサ）は富士山西南麓に広く分布し、14C年代はB.P.2700年とされるから、後期中葉から晩期ごろの降下とされる。採集生活を不可能とするほどの自然災害とみておきたい。

以上が発掘調査における出土土器の内容であるが、前述中野国雄の資料集に滝戸遺跡の晩期土器2点があり、かつて『富士宮市史』上巻に掲載したことがある。大洞B式及び大洞BC式と認められる晩期前葉のものであり、改めて本書に図示した（図－14）。なお、晩期土器は市内では3遺跡だけにみられる。

③ 調査によって確認された遺構面は、3面5期である。第1面は富士黒土層の下部に包含される早期前半の配石遺構があり、第2面は栗色下層に中期中葉（土器型式では勝坂3式・曽利1式）の配石遺構、埋甕、土壙等があり、第3面aは栗色上層中に中期後半（土器型式では曽利2式）の竪穴住居群があり、第3面bは栗色上層中に中期後半（土器型式では曽利3～5式）の配石遺構、埋甕、土壙等があり、第3面cは栗色土層中に後期前葉（堀之内1・2式）の配石遺構、埋甕、土壙等があった。

第1面とした早期前半の配石遺構は、第Ⅰ次調査区の東側に発見されたもので、調査区全域を発掘することはできなかった。高山寺式併行の無文土器を伴う半円形状石組の北側には環状又は円形と表現し得る配石もあり、配石遺構が早期にまでさかのぼる可能性を不安と期待で調査した記憶がある。下部の

土壙調査も実施したが、土層観察では確認できなかった。本報文がその後の調査例を挙げて検討しているが、現在の見解としては土壙と集石を伴う配石墓とみてよいと考えている。

第2面は、第Ⅱ次調査区概報で栗色下層面の配石と称したものであり、整理作業における第Ⅰ次調査区配石との整合により、地山の高くなる部分の径10mほどの範囲に、10数基の小石組が集合してやや濃密な配石をつくり、その周りに径20mほどの円弧状に小石組が一応連続して外縁をつくる形状となることが明らかになったものである。中央部配石には、ケルン状石組下部などから土壙群と埋甕が伴い、外縁部配石にも埋甕が伴うものがあった。土壙については、配石下部での確認は不可能であり、5×4.5mの範囲を栗色土層から富士黒土層を除去した地山面で確認して多くはその底面を図示したにすぎないが、一部の土壙では土層把握によってその構造を確認している。また、発掘時には各小石組について、ケルン状石組とか環状列石状石組とかの“呼び名”を付けてみたが、本来の小石組はかなり立体的に構築され、それが本遺跡の良好な土層堆積により残ったものと考えたからである。これらの小石組には打製石斧及び磨石が多くは破片で伴っていた。土壙に伴う例もあって注目された。

第3面aは、竪穴住居跡4基からなる集落跡と認められた。現地調査では、炉01・04を栗色上層（本報告の縄文第3面b）の配石遺構、一部と認めたので、住居跡の平面形を確認して壁面等を検出することは行わなかったものである。当時は両配石遺構とも焼土跡や遺構内外の焼土塊等を有し、石囲い炉も厚い灰層が認められたこと等から配石遺構に伴う炉跡として扱ったのであるが、今回の整理作業によって住居跡群として認定する方がよいと判断された。傾斜の低くなる方向に向かって開く馬蹄形集落とも見ることができる。

第3面bは、中期後半の配石遺構とその付属施設である。主体は第Ⅰ次及び第Ⅱ次調査区のほぼ全面に展開される配石遺構で、大円形配石と呼ぶことにする。時期は曽利3式期である。第Ⅱ次調査区の西南に中心を置き、径15mほどを測る中央部の円形配石をつくり、ここに20数基の小石組を密集させる。この円形配石には多くの焼土や焼土塊が伴い、確実に焼土や灰類を含む土壙や埋甕も認められるとともに、埋甕4基、土壙2基を数え、中には偏平な礫をもってあたかも蓋をのせたといえるような例もあった。この円形配石の外周部には、外輪をつくるかのように、幅6～7mで径35mにも及ぶ外周帯が築かれていた。この配石は、円形配石に比べると、小石組や焼土も粗であり、土壙1基、埋甕1基も含んでいたがごく一般的なものであった。こうした種々の相違を持つ中央部と外周部の組合わせが、本配石遺構の特徴であり、その整った形状とともに注目に値するものであった。中央部の円形配石の埋甕は4基であり、1点のみ曽利4式が認められて経営の継続性を証明することになった。なお、第Ⅲ次調査区には、西側を攪乱によって破壊された曽利5式及び加曽利E4式を伴う配石遺構があった。

第3面cは、後期前葉の配石遺構で、第Ⅱ次調査区東端部及び第Ⅴ次調査区西半部（東半部は地山面の礫群とみられるもの）に認めた。第Ⅱ次調査区の配石は長小判形の集石群、第Ⅴ次調査区の配石は環状集石と認め得るかという2配石を中心に小石組が散在した状況であり、埋甕や配石土壙を有していた。以上が堀之内1式期であり、これらと離れて第Ⅱ次調査区に堀之内2式の埋甕があったが、礫を伴ってはいなかった。

3．配石遺構をめぐる2・3の問題について

滝戸遺跡で確認された配石遺構については種々述べてきたが、ここでは本稿で要する点に限って再度列挙しておきたい。

① 第1面　早期前半（撚糸文・押型文土器期）
　小石組の集合で土壙不明

② 第2面　中期中葉（勝坂3式・曽利1式期）
　中央部配石（土壙を含む。）群と環状となるらしい粗略な列石群からなる。共に小石組の集合であり、中央だけでも10数基を数える。土壙、埋甕もある。

③ 第3面b　中期後半（曽利3式期）
　中央部に径15mの円形配石があり、外周部には幅広で径35mほどの配石群があり、大円形配石と呼んだ。共に小石組の集合で、中央部だけで20数基を数える。土壙及び埋甕もある。

④ 第3面c　後期前葉（堀之内1式期）
　長円形の集石、円形と認め得る形状と周辺の散石からなる配石である。小石組の集合とみられ、埋甕が伴う。

第1に、以上3面4期の配石遺構に見る共通点と相違点から検討したい。まず共通点から挙げると、いず

れも小石組が集合していること、調査条件さえ整えば土壙や埋甕を確認できることである。ただし、第1面の早期前半の配石遺構における土壙の有無については、富士宮市の沼久保坂上遺跡（富士宮市教育委員会1985）及び黒田向林遺跡（富士宮市教育委員会1986）が時期や内容で共通し、共に配石下に土壙を伴っていたことから、滝戸遺跡も同様と認めたいのである。以上により、滝戸遺跡の各配石遺構は、いずれも墓地として認められるのである。早期、中期中葉～後期前葉の墓域が1か所で重複して発見されたことになるが、全国的資料を収集し得ない我々はそうした類例を知らない。大変貴重な遺跡であると思う。

逆に相違点を挙げると、早期、中期中葉と中期後半及び後期前葉の各配石遺構は、まず規模及び形状において異なった様相を呈する。早期には、規模も小さく、小石組の配置に全体的な計画性を感じさせない。中期には、中葉と後半の2面に分かれたことは述べたが、前者の規模は約半分、後者は2倍ということになる。ただし、形状は、中心部を円形配石にして外周部にも配石を置く点でよく類似している。後期前葉には密度が高くなるが、規模は把握できないとすべきであろうし、形状では北側の第Ⅴ次調査区から円形、むしろ環状を意識していたと解すべきかも知れないと思う。ここでは、特に中期2面の配石に見られる整然とした計画性さえ感じさせる内外に分離された二重構造に注目し、併せて後期前葉の円（環）状に配意しておきたい。

第2に、配石遺構と居住域との関係である。本遺跡では中期2面の配石遺構の間に竪穴住居群を認めたが、それはいずれの配石面とも共存しないことは既に述べたとおりである。本遺跡における4面の配石遺構では、それらに伴う居住域は確認されなかったことになる。傾斜地における土層堆積の早さが、遺構面の分離を視覚的にも確認可能としたことになる。

近隣にも、広く知られた4遺跡がある。富士宮市の千居遺跡（史跡）、富士市の天間沢遺跡、田方郡中伊豆町の上白岩遺跡（史跡）である。我々が全国規模での情報を入手しにくいことは既に述べたが、配石遺構の場合には特に報告書で状況が把握しにくい例が多いようである。ここでは、県内例を中心にその調査状況等にも配慮しながら遺構の様相を比べてみたいと思うのである。居住域との関係を検討してみる。千居遺跡は、中期後葉で、広大な配石遺構とその周辺に竪穴住居跡20基前後を主体に土壙群も有する遺跡である（小野他1975）。ここでの問題は配石遺構と竪穴住居跡群の併存性、すなわち、同時期性である。種々検討しても明確にはしにくいが、調査時の所見では西側の住居跡は確実に古くて併存性はなく、確実に新しいといえる例は無いようである。たぶん併存はしないといえる。

天間沢遺跡A・B・C・F・G・L地区では、配石遺構と竪穴住居跡18基が土壙ほかを伴って発見されている。配石遺構の時期は、中期後葉から後期前葉に限定され、確実にこの時期といえる竪穴住居跡は5基だけであった。配石遺構は、中央部に3×5mの扇形につくる敷石が設けられてその中心部に高さ20cmの尖頭状立石が認められ（核帯と呼ぶ。）、その外側は小石組の集石や散石があり（内帯と呼ぶ。）、更に外側に弧状列石とか集石とか名付けた礫群が認められた（外帯と呼ぶ。）。この核帯の中心から半径45mまでが配石域、その外側、中心から半径90mまでが居住域という構造を推定している。配石域は核帯を除いて多くの土壙や埋甕が発見され、墓域と判断されている。調査範囲は径90mとする範囲のおよそ4分の1ほどであるが、報告者は諸条件を検討して中心部に墓域、その外側が居住域と推定している（富士市教育委員会1984,1985）。ここでは、墓域と居住域の組合せが認められる。

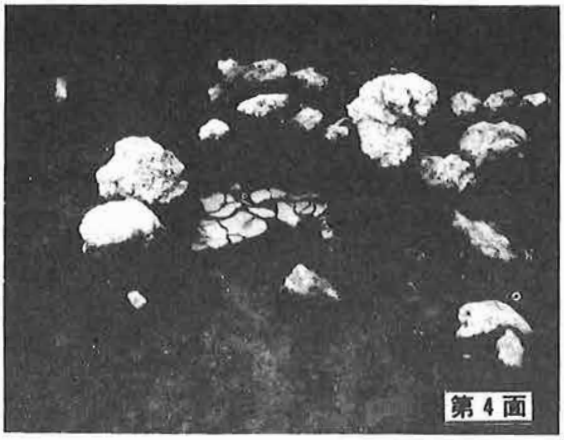
上白岩遺跡は、全国西端の環状列石で広く知られ、中期後葉から後期初頭にかけて配石遺構が造られたとされる。環状列石は、21基からなる小石組の集合体とされ、土壙群は一部年代的に整合するが、竪穴住居跡で同一土器形式となるものは少ない（中伊豆町教育委員会1979）。どうも、居住域は伴う可能性が少ないと見てよいようである。

第3に、土壙について見ておく。滝戸遺跡では、縄文第1面（早期前半）の配石遺構と土壙の推定について既に述べたので、ここでは、中期・後期の土壙及び埋甕について述べる。

縄文第2面（中期前半）配石遺構は、濃密な中央部配石に隣接したトレンチ内で大礫の集積、大型土器片、焼土塊、大型石斧などを伴う土壙6，埋甕1を認めた。また、外縁部でも埋甕を発見したが、配石範囲全面における土壙調査を欠いたことを現在では残念に思う。

縄文第3面の第Ⅰ．Ⅱ次調査区においては、3面bとして中期後半の円形配石と大円形配石からなる二重円環状（藤本1983）の構造をもつ配石遺構を認めた。中央部円形配石下からは埋甕6及び土壙2が、外帯部の大円形配石下からは埋甕2及び土壙1が発見された。本例の、土壙調査は技術的にも極めて困難な状況にあり、特に大円形配石下における検出はほとんど不可能

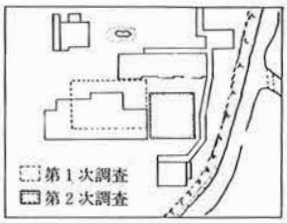
縄文時代中期の配石遺構から出土した埋甕（うめがめ）



滝戸遺跡第二次発掘調査

ベールをぬいだ滝戸遺跡

主任調査員　植松 章八



特集 滝戸遺跡

昨年からひきつづいた二次にわたる発掘調査において、ＰＴＡの皆様には貴い御協力をいただき心より御礼申し上げます。お陰様で当初の予想をうわまわる多大な成果をおさめ、滝戸遺跡が当地方の原始古代文化のなかで占めた意義を明らかに得たものと考えています。以下本年度の内容を中心にしながらその概要を報告します。

滝戸遺跡の発見は昭和初年ごろですが、それが多量の土器・石器を出土して人人に知られるのは戦後、昭和二四年の校地造成によることはわれわれの記憶に残るところです。それはちょうど登呂遺跡の発掘がもたらした考古学ブームのなかで、県下各地の高校生を中心に多くの人々が〝滝戸〟を訪れて、遺物をもち返りました。そのためほとんどの遺物は散逸したのですが、滝戸遺跡の名は広く知られることになったのです。

富士南麓地方でとくに有名な遺跡としては、縄文時代では千居遺跡（上野）や天間沢遺跡（天間）、弥生時代では渋沢遺跡（淀師）、古墳時代では月の輪平遺跡（星山）や南部谷戸遺跡（黒田）等をあげることができます。なかでも千居遺跡は〝配石遺構〟とよぶ石を並らべた遺構を中心にしたたぶん縄文時代の墓地と思われるもので、国の史跡に指定されていますし、渋沢遺跡はこの地方にはじめて〝米づくり〟をもち込んだ人々のものとされていますが、滝戸遺跡はこの配石遺構とならんで、弥生時代後期の集落（ムラ）と方形周溝墓とよばれる墓地とがあって、南部谷戸や月の輪平に共通しわずかに先行する内容をもっていました。

ところで、今年度の調査により滝戸遺跡には縄文時代早・前期から弥生時代後期までの人々が断続的に生活した事実が判明しました。われわれはそれを上層から順番に一～四面と仮称してみました。

第一面

弥生時代後期の住居址と方形周溝墓で、昨年分をあわせるとそれぞれ六軒・七基となり、いずれも住居址が古いことが明らかになっています。弥生時代後期の人々はこの台地の先端をまず集落として、ひきつづいて墓地にかえた様子が知られます。

第二面

縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての配石遺構で、昨年分をあわせみると、半径三〇メートルほどの大きな円形のなかに数十個ほどの石をかためた小石組が多数集っている状況がはっきりしましたし、その外側には帯状の列石が廻るらしいことも推定されました。その規模は円形配石としては県下最大の例になることはもちろんですが、むしろ内部が比較的大きな石を中心として小さな石を組み合せた小石組に分け得ること、しかもそれぞれが石皿片・擦石・石斧等を供えられているらしいことに注目できました。

第三面

縄文時代中期前半を中心とする配石遺構で、昨年度はその内容を十分明らかにできなかったのですが、おそらく県東部の配石遺構ではもっとも古い時期でしかも最大規模になり得るものと考えています。第二面との間に厚い火山灰が堆積していたため保存状態が良好で、ケルン状石組や小円形をつくる一七個所の小石組の状況がはっきり残っていました。ここでは供えられた石器も石皿片がなくなって擦石がめだっていました。また中央部で発見された七基の土坑（埋葬址）も墓地の証拠として特筆すべきものです。

第四面

予想外でしたが、最下層に縄文時代前期とみられる配石遺構があり、なかには早期の尖底土器も含んでいました。多くは雑な並らべ方でしたが、大片土器片の上に半円形にきれいに石を配した部分もみられました。

以上、要点のみのべましたが、この台地の先端は住む人々がかわっても墓地としての利用が多く、生活の跡は台地の上の方に埋まっているものと思われます。

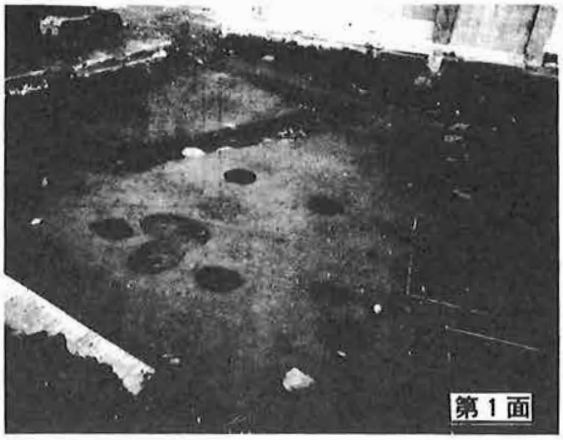
埋めがめは当時のお墓に供えられた埋葬品といわれています。

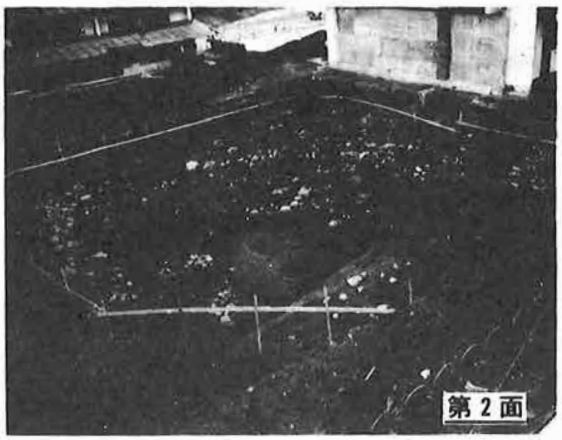
底部がしっかりしていて出土品の中で復元できた最高のものでした。

底がなく逆さにして埋められたためずらしいかめ

この図は縄文時代中期の配石遺構を表わしたもので、半径30メートルの円の中に石が並べられているのがわかります。

図－15　三中ＰＴＡだより No.14 (3)


第1面


第2面

第3面

遺跡発掘のあしあと

第一面

弥生時代後期の住居址と方形周溝墓で一次・二次あわせるとそれぞれ六軒・七基となる。写真は第六号方形周溝墓と土壙群。

第二面

縄文時代中期後葉から後期的前葉にかけての配石遺構。半径三〇㍍ほどの大きな円形の中に数十個ほどの石をかためた小石組が集ってできていた。

第三面

縄文時代中期前葉を中心とする配石遺構。第二面との間に厚い火山灰が堆積していたため保存状態が良好で、ケルン状石組や小円形をつくる十七箇所の小石組が確認された。また中央部で七基の土壙（埋葬址）も確認された。

第四面

縄文時代前期とみられる配石遺構。なかには早期の尖底土器も含まれていた。

水糸を正方形に張って、遺構の実測をする調査主任の植松章八先生（右端）

ご協力ありがとうございました

教育長　塩川隆司

昨年に引き続き本年も、埋蔵文化財発掘に御協力いただきました三中ＰＴＡの皆様に心から敬意を表し、厚く御礼申しあげます。

発掘作業の一番の難しさは、調査をしていただく先生方と作業に御協力いただく人たちの確保であります。

幸い調査団は市内在住の静大若林教授、吉高植松先生を始め第一線の方々に御願いでき、作業の方は三中ＰＴＡの全面的応援を得られましたことが、何よりも高く評価されたことであります。

学会でも長いこと不明であった「幻の滝戸遺跡」の手がかりが出来たことは、学会だけでなく、このような場所にある三中生徒の意識の上に今後発展の大きな糧となることを信じます。

学校長　小林信雄

どなたもまことに御苦労さまでした。ＰＴＡ総動員が軸となり、市教委、調査団、応援各関係の方々一丸となっての働きのお陰で発掘された所用地に校舎増改築工事が着々と進められており心から喜びに堪えません。

天候にも負けず、お盆も返上しての大奮闘、しかも安全に秩序ある研究発掘が行われて所期の目的を達し得たお骨折りに深く感謝いたします。県Ｐ大会の表彰もかくやと感ぜられます。

学校でも皆さんの御厚情を頂き、幾多の労苦をかみしめながら教育活動の障害を克服しつつ建設にまつわる歴史的現実の自覚と認識にたって日常の学業に精励しております。

どうか豊かにしみとおる文化の地・白尾台に、三中の全校舎の完成が一日も早かれと祈ってお礼のことばといたします。

ＰＴＡ会長　望月和男

昨年に引続き、行われています校舎改築第二期２年にともなう、滝戸遺跡の発掘作業には、Ｐ全体で協力すべく協力体制を何回かの常任役員会そして役員総会を経て整えました。初期の炎天下、途中の記録的な長雨の中を「子らがために」という心情がＰＴＡ総動員延数六一七名という大成果を得、所期の目的を達成することが出来たのも、子供のためと、郷土地域の発展という願いが秘められていたならばこそと思います。

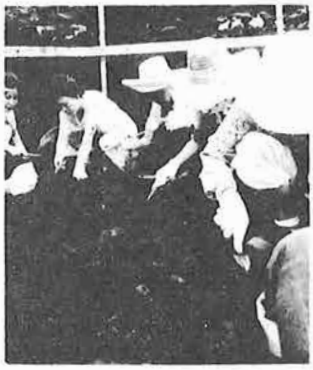
ＰＴＡ会員の皆さんの御協力に心から感謝と御礼を申し上げ、三中ＰＴＡ発展向上を願いたいと思います。

最後に市教育委員会社会教育課の後藤氏の細い配慮と当を得た協力を感謝します。

発掘調査団　長　若林淳之

この夏のある日、市内のあるレストランで食事をしていた時、隣の卓子に座っていた若い二人の婦人の話を盗み聞いたところ、滝戸遺跡の話や明日その奉仕作業に出るとか、出ないとかなどという会話を交していた。この二人の婦人は三中のＰＴＡの方であったらしく、楽しかるべきショッピングや食事の折にも、滝戸遺跡の事が話に出るほど、この発掘が三中ＰＴＡの皆さんの負担となっていたらしい事を察すると、御迷惑をおかけした事に心から御詫び申しあげるとともに、こうした心からの御協力があって、発掘調査が所期の期待以上の成果をあげられた事に、改めて御礼申しあげます。

またこうした多くの方々の理解と協力とがあって、失われつつある文化財の保護も可能であると、つくづく考えさせられている今日このごろです。厚く御礼を申しあげます。


暑い日射しの中で発掘作業に協力する三中ＰＴＡのおかあさんたち

遺跡発掘に参加して

施設部長　大内文人

幻の遺跡ともいわれている滝戸遺跡の発掘奉仕作業が、昨年に続き行われました。

私もＰＴＡとして参加しました。七月十八日、調査関係者会議等の準備会から始まり、奉仕作業第一日目と七月二十六日より、途中天候悪化の降雨のため八月末日までのそれは、大変なハード・スケジュールでした。作業中のムンムンするような熱気、一生懸命な空気。私は参加している時は終始圧倒させられ疲れも忘れるほどの追力でした。おそらく未だかつてこれほどに、計画的に専門家の方々と助手の皆さん、学校側からの先生と父兄、役所の関係者の人達が一心同体となり、和やかに長期にわたる大作業を事故一つなく、作業が無事完了にこぎつけられたことはなかったでしょう。一人一人が、ほんとうに社会に対し、学校に対し、子どもに対する真の理解者であったということ以外のなにものでもないと私は思っています。

泥まみれになった手袋で顔の汗をぬぐい、自分の顔も土で真黒に汚れているのも忘れ、「Ａさん、顔が泥だらけだよ。」と言って、真白い歯を出して笑う仲間。作業服も汗に汚れてさえないが、こんなに美しい健康的な姿は、あまり見られるものではありません。

このような素晴らしいムードの中に、学校の生徒が軽作業にでも参加していただければなあと考えたのは私一人でしょうか。その時その場所での植松先生の説明や、土器の種類、

この滝戸遺跡は県下最大の配石遺構ですよ等の説明に驚いたり感心したり…。我々頭の回転がにぶくなったおとなでさえ感動するものを、中学生がこの場所に実際作業していたらと思ったのです。

とにかく校長先生をはじめ学校側の連絡等の仕事とか、役所の後藤さんのファイトのある指導、そして父兄の皆さんの絶大なる御協力により、第二次発掘作業も無事終了しました。

以上、施設部長として何らお役に立てなかったことをおわびしつつ、ペンを置くことにします。

本当にご苦労さまでした。

出土した遺物に日付や出土場所などを記入するＰＴＡ会員

であった。それにもかかわらず、前者には丁寧に作られた底部穿孔や底部欠損の埋甕が多く、土壙でも、焼土塊を混入したり、平石をフタ状に乗せたりする例が多く、後者は極めて一般的なものであった。円形配石と大円形配石を区分して認めたゆえんである。縄文第3面C（後期前半、堀之内1式期）についても埋甕3、土壙1があった。

天間沢遺跡A・B・C・F・G・L地区には土壙55を有するが、単独性をより強く表現したといえる土壙2がある。第52号土壙は、3.78×3.17mの大型土壙の底面に厚い粘床が認められるとともに土壙の周囲半分に礫を敷き詰め、その周囲に溝を設け、埋甕1、柱穴状ピット2を伴っていた。埋甕から曽利5式期とされ、配石域から大きく離れて距離的には居住域にありながら住居跡群からも距離を測って単独性が強い。あたかも特異な個人墓といえる状況にある。

第53号土壙は楕円形の掘り方にヘギ石を組み合わせて底・側板をつくり、長径0.6mほどの略長方形の石箱を設けていた。時期を証する資料を欠くが、住居跡の重複関係から、中期末とみてよいであろう。土壙であれば、特異な葬法を推定できよう。

他遺跡を検討しよう。千居遺跡では、配石遺構の下部では、まったく土壙確認の調査を行っていない。配石周辺に発見される土壙もあり、存在した可能性は否定できない。また、配石遺壙群の東北方数十メートルを測る一段高くなる台地面におけるトレンチ確認で57基の土壙が発見（小野真一1982）されている。こうした配石遺構とは別に薄い礫群をもつ土壙群が存在することは上白岩遺跡でもあり、多くの類例が見られるようである。こうした土壙群の存在は、決して配石遺壙下の土壙の存在を否定するものではないようである。

第4に、集団墓にみる縄文社会の復元について若干述べ、予察にもふれてまとめとしたい。

① 滝戸、千居、天間沢、上白岩遺跡等の本地域における大型配石遺構を、基本的には墓地を中核とする墓域と認めておく。もちろん、千居遺跡の列石は境界施設、天間沢遺跡の核帯は祭祀施設であることを否定するものではない。

② 配石遺構の基本形状にも注意したい。千居遺跡は列・帯状、他の3遺跡は円形を基本としている。前者は時期的にも後出し、あるいは外来的可能性を認めてよいかも知れない。中期前葉に始まる中核遺跡では円形を基本としているようである。

③ 中期前葉に始まる配石遺構は大型化するようである。こうした大規模な墓域を広域集落群の共同の墓域、すなわち、各集落の死者は核となる集落に運ばれて埋葬（藤本1994）される可能性を今後の検討課題としたい。縄文中期集落の爆発的増加にみられる社会的発展が、一連の集落間における社会的協業や分業を前提とするものであるとすれば、墓制のそうした変化も認められてよいかも知れないと思う。

④ 滝戸遺跡の大円形配石の中央部と外縁部の相違、天間沢遺跡第52号土壙にみる独立性などから、集団墓には“ある種の規制”があったと認められる。一般的には、出身とか年齢とか理解されている（藤本1983）が、集落・集団内における社会的役割を反映したものという方向も検討してみたいと思う。配石下の土壙のすべてを丁寧に掘り上げるよう提案したいところである。

引用・参考文献

飯塚伝太郎 1982「静岡県の郷土研究史」『静岡県郷土研究』第一巻 国史刊行会
植松章八 1971「第一章 千居遺跡や月の輪平遺跡－ふるさと富士宮のあけぼの」『富士宮市史』上巻 富士宮市
浮島尋常高等小学校 1971『郷土研究』
小野真一 1957『静岡県東部古代文化総覧』蘭契社書店
小野真一他 1975『千居』加藤学園考古学研究所
小野真一 1982「富士宮市千居遺跡第3次調査の結果から」『加藤学園考古学研究所報』9
清野謙次 1924『日本原人の研究』岡書院
佐野武勇 1928「静岡県大宮町及其の附近石器時代遺跡に就いて」『人類学雑誌』43-10
佐野要吉 1929『有史以前の富士根村』
佐野要吉 1931『富士南麓郷土史談』谷島屋書店
静岡県 1930『静岡県史』第一巻
静岡県教育委員会 1965『静岡県埋蔵文化財地図』
柴田常恵 1929「富士の遺跡」『富士の研究』官弊大社浅間神社社務所
中野国雄他 1953「吉原周辺における原始時代の考察（予報）」『吉原市史研究資料』第1号
中野国雄 1954「吉原周辺の原始時代（第二報）」『吉原市史研究資料』第2号
中伊豆町教育委員会 1979『上白岩遺跡発掘調査報告書』
富士川尋常高等小学校 1931『富士川町郷土教育研究』
富士市教育委員会 1984『天間沢遺跡Ⅰ 遺構編』
富士市教育委員会 1985『天間沢遺跡Ⅱ 遺物編』
富士宮市教育委員会 1985『沼久保坂上遺跡』
富士宮市教育委員会 1986『黒田向林遺跡』
藤本強 1983「墓制成立の背景」『縄文文化の研究』9 雄山閣
藤本強 1994『モノが語る日本列島史 旧石器から江戸時代まで』同成社
町田洋 1964「Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史－第四期末について－」『地学雑誌』Vol.73-5,6
渡辺繁治・小林常定 1950「富士宮市滝戸遺跡報告(1)」『ふるさと』2号 県立富士高校郷土研究部

弥生・古墳時代編

挿　図　目　次

図－1　器種分類図① …… 53
図－2　器種分類図② …… 54
図－3　器種分類図③ …… 57
図－4　台付甕Ｂ分類図 …… 65
図－5　台付甕の変化① …… 67
図－6　台付甕の変化② …… 68
図－7　台付甕の変化③ …… 69
図－8　台付甕の変化④ …… 72
図－9　広口壺の変化① …… 74
図－10　広口壺の変化② …… 75
図－11　広口壺Ａ３の変化 …… 76
図－12　広口壺Ｃと広口壺Ｅの折衷型式…… 77
図－13　広口壺の変化③ …… 78
図－14　広口壺の変化④ …… 79
図－15　広口壺Ｂ、Ｃ法量比グラフ …… 83
図－16　東駿河の弥生時代後期～
古墳時代前期土器編年図① …… 87
図－17　東駿河の弥生時代後期～
古墳時代前期土器編年図② …… 89
図－18　弥生時代後期初頭の土器 …… 92
図－19　第Ⅰ次調査全体図①
・ＳＢ０６・ＳＺ０５①実測図 …… 112
図－20　第Ⅰ次調査全体図②・ＳＺ０２実測図 … 113
図－21　第Ⅰ次調査ＳＺ０３
・ＳＺ０４・ＳＺ０５②実測図 …… 114
図－22　第Ⅱ次調査全体図
・ＳＺ１７・ＳＢ１９実測図 …… 115
図－23　第Ⅱ次調査ＳＢ１８・ＳＢ２０実測図 … 116
図－24　第Ⅴ次調査全体図・各調査区と遺構分布図 … 117
図－25　第Ⅴ次調査ＳＺ２１実測図 …… 118
図－26　第Ⅴ次調査ＳＢ２２・ＳＢ２３・ＳＢ２４
・ＳＢ２５・ＳＢ３０実測図 …… 119
図－27　第Ⅴ次調査ＳＢ２６実測図① …… 120
図－28　第Ⅴ次調査ＳＢ２６実測図②・ＳＢ２７
・ＳＢ２８・ＳＢ２９・ＳＢ４１実測図① … 121
図－29　第Ⅴ次調査ＳＢ２７・ＳＢ２８
・ＳＢ２９・ＳＢ４１実測図② …… 122
図－30　第Ⅴ次調査ＳＢ３１・ＳＢ３２
・ＳＢ３３・ＳＢ３４・ＳＢ３５実測図 … 123
図－31　第Ⅴ次調査ＳＢ３６・ＳＢ３７実測図 … 124
図－32　第Ⅴ次調査ＳＢ３８・ＳＢ３９
・ＳＢ４０実測図 …… 125
図－33　第Ⅳ次調査全体図 …… 126
図－34　第Ⅳ次調査ＳＺ４２・ＳＺ４３実測図 … 127
図－35　第Ⅳ次調査ＳＺ４４①・ＳＺ４５実測図 … 128
図－36　第Ⅳ次調査ＳＺ４４②・ＳＺ４６実測図 … 129
図－37　第Ⅳ次調査ＳＺ４７・ＳＺ４８
・ＳＺ４９・ＳＺ５０実測図 …… 130
図－38　第Ⅳ次調査ＳＺ５１・ＳＺ５２実測図 … 131
図－39　第Ⅳ次調査ＳＺ５３・ＳＢ６１実測図 … 132
図－40　第Ⅳ次調査ＳＢ５４・ＳＢ５５実測図 … 133
図－41　第Ⅳ次調査ＳＢ５６・ＳＢ５７実測図 … 134
図－42　第Ⅳ次調査ＳＢ５８・ＳＢ５９
・ＳＢ６０・ＳＢ６１実測図 …… 135
図－43　第Ⅳ次調査ＳＢ６２・ＳＫ６３
・ＳＫ６４実測図 …… 136
図－44　第Ⅰ次調査出土遺物① …… 137
図－45　第Ⅰ次調査出土遺物② …… 138
図－46　第Ⅱ次調査出土遺物 …… 139
図－47　第Ⅳ次調査出土遺物① …… 140
図－48　第Ⅳ次調査出土遺物② …… 141
図－49　第Ⅳ次調査出土遺物③ …… 142
図－50　第Ⅳ次調査出土遺物④ …… 143
図－51　第Ⅴ次調査出土遺物① …… 144
図－52　第Ⅴ次調査出土遺物② …… 145
図－53　第Ⅴ次調査出土遺物③ …… 146
図－54　第Ⅴ次調査出土遺物④ …… 147
図－55　第Ⅴ次調査出土遺物⑤ …… 148
図－56　第Ⅴ次調査出土遺物⑥
・野中用水表採遺物 …… 149
図－57　出土遺物（陶磁器、玉類、石製品） …… 150

挿　表　目　次

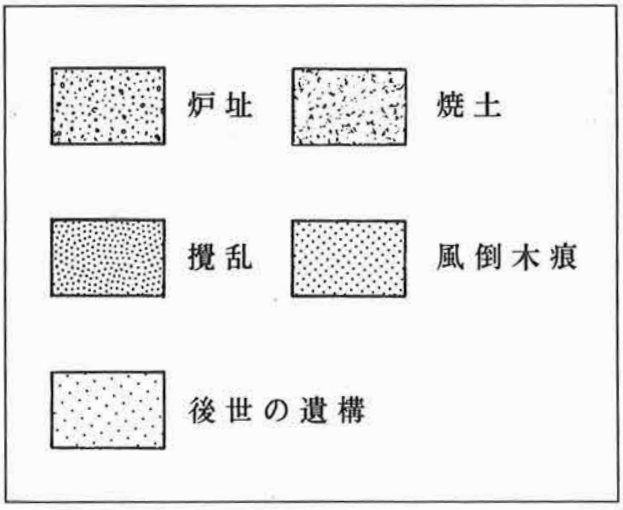
第1表　基準資料一覧表① …… 63
第2表　基準資料一覧表② …… 64
第3表　広口壺の法量比一覧表 …… 82
第4表　土器編年図使用資料一覧表 …… 91
第5表　遺構一覧表① …… 97
第6表　遺構一覧表② …… 98
第7表　遺構一覧表③ …… 99
第8表　遺物観察表① …… 100
第9表　遺物観察表② …… 101
第10表　遺物観察表③ …… 102
第11表　遺物観察表④ …… 103
第12表　遺物観察表⑤ …… 104
第13表　遺物観察表⑥ …… 105
第14表　遺物観察表⑦ …… 106
第15表　遺物観察表⑧ …… 107
第16表　遺物観察表⑨ …… 108
第17表　遺物観察表⑩ …… 109
第18表　遺物観察表⑪ …… 110
第19表　遺物観察表⑫ …… 111

凡　　例

◦遺構の略号は以下のように対応する。

ＳＢ－竪穴住居・掘立柱建物　ＳＺ－方形周溝墓　ＳＫ－土坑

◦挿　図　凡　例



Ⅰ．遺　　構

ここで各遺構の解説を行う。但し、遺構が確認されず、遺物もほとんど出土していない第Ⅲ次調査分については記述しない。また、調査地点の大きく異なる第Ⅳ次調査分については、その説明を最後に回し、関連性が指摘される第Ⅰ次、第Ⅱ次、第Ⅴ次調査の遺構の解説を、まず先に行なう。

遺構については、調査時の原図以外、詳しいデータの分かるものは残っていない。そのため、大きさなどを表す客観的な数値以外、調査者の所見など遺構についての具体的な情報は分からない。

―第Ⅰ次調査―（図－19、図－20）

ＳＺ01（図－19）

調査区のほぼ全域を巡る方形の溝で、内側に12ｍ×16ｍほどの方形区画を形作る。比較的全体に浅い溝で、北溝で幅 2ｍの最大幅を測り、深さ20㎝を測る。北溝は東に行くほどその幅を狭め、その先端で湾曲して消滅する。西溝は、幅 1.5m、深さ20㎝程度を測り、幾分、幅のばらつきを示し、蛇行する。南溝は、幅が1.3m程度で、ほぼ均一であるが、中央やや東部分で南に屈曲し、直線を示さなくなる。深さは、やはり20㎝ほどで浅い。東溝は、溝が浅いことと他の遺構が重複することなどで、明瞭な基盤面が認められず、確認できなかったようである。ただ、溝両端の屈折部分は、どうにか確認されており、それらを結ぶと、南辺の方が広くなる台形の区画が浮かび上がってくる。この台形のそれぞれの角は、屈折が不明瞭で、隅丸となっており、区画自体ぼやけたものである。区画内は、約91㎡の広さを有する。この区画溝ＳＺ０１と他の遺構との関係は、円墳であるＳＺ０３より新出のものであり、その他の遺構との関係は不明とされている（富士宮市教育委員会1977)。しかし、ＳＺ０１はＳＺ０３との関係から、通常の調査で良く目にする径１ｍ前後の土坑との関係は別として、住居、方形周溝墓、古墳のいづれより新しいものと言え、少なくとも、古墳時代後期以後の構造物と認識される。この区画は、その内部の建物の存否が、その性格を探る上で重要となろうが、調査時にその追及はなされていないため、良く分からなくなっている。区画内部に十数個のピットが認められるが、建物址になるような配列は示していない。ピットも径30㎝前後を測るものの、深さは15㎝程度で、柱穴とするには躊躇するもので占められ、積極的に建物の存在を肯定するまでには至らない。

ＳＺ02（図－20）

東西方向における周溝の内側で径 6.3ｍ、その外側で径 7.5ｍを測り、南東側で、同じく内径 5.3ｍ、外径 6.5ｍを測る楕円形の周溝で、円墳の周溝として認識される。マウンド及び主体部は消滅しており、その残存すら認められなかったようである。溝は、断面が浅いU次状を示し北側で幅42㎝、深さ20㎝、南側で幅70㎝、深さ30㎝を測り、北側より南側の方が規模を大きくしている。周溝は、円を基調としているが、その東側で大きく幅や形が乱れる部分が観察される。この部分は、深さが他の箇所とそれほど変わらないが、溝の幅が40㎝から80㎝まで大きく変化している。そのため、幅広の部分は、緩やかの斜面を形成し、ほとんど平坦に近い形状となる。ここは、古墳の前庭部と石室に続く羨門に相当するものと思われる部分である。後述する北側に近接する円墳と思われるＳＺ０３では、ＳＺ０２と同様の方向に開口部が確認されている。

＜遺物出土状況＞

周溝の北東側で、須恵器模倣坏である11の土器（図－44）が出土している。これは、溝の中央のほぼ確認面の高さで確認されており、溝底から25㎝の高さを測る位置にある。この土器と溝底との間には、３層に分けられる遺構の覆土が認められ、ほぼレンズ状の自然堆積を示している。

13（図－44)の有孔石製模造品は、周溝の北西側で出土している。出土地点は、溝の内側に寄っているが、垂直的な位置については、よく分からない。

これらの資料以外に、波状文が認められ高坏と思われる須恵器破片の12（図－44)が、溝覆土中から出土している。

ＳＺ03（図－21）

調査区の北側で検出されている円墳の周溝と思われる溝で、全体の半分が確認されている。溝の幅は１ｍほどで、深さ35㎝を測る。周溝は内径 8.4ｍ、外径 9.2ｍほどの円形のものが想定されるが、南東側において開口部が認められる。開口部は、幅50㎝を測り、ＳＺ０２同様に古墳の羨門部に関連するものと思われる部分である。

ＳＺ04（図－21）

ＳＺ０３の西側で、方形周溝墓の南東コーナーが確

認されている。方形周溝墓の大半は、調査区域外に展開しているため、全体の状況は分からないが、南東コーナーでは、幅１ｍ、深さ20cmの規模を測る。溝の内側の線は、直線的に屈曲しているが、外側は、やや膨らみを持ち、屈曲が不明瞭になるとともに、その西側では、溝の残りが悪く、掘り込みが確認されなくなる。

これは、後述するＳＺ０５と平面的に方向が同一で、時代的な相関性が窺えるものである。

ＳＺ05（図－19、図－21）

第Ⅰ次調査区と第Ⅱ次調査区とに跨がって検出された方形周溝墓で、南東側を開口させる『コ』字状を示して確認されている。第Ⅱ次調査時に確認されている１条の溝は、第Ⅰ次調査時の方形周溝墓が継続するものとして調査時に認識されておらず、両者が同一のものとしては取り扱われていなかったが、「溝は方形周溝墓のものではないか」とする問題意識が強い調査が実施されていたため、東溝の存否に関しては極めて信憑性のあるものである。この場合、東側に向って傾斜する斜面に対応して、東溝は、調査以前に消失していたものとするのが自然であろう。

この『コ』の字状の溝は、対面する溝がある南北方向で、８ｍほどの区画を作る。第Ⅱ次調査で確認された北溝は、幅 1.7m、深さ20cmほどで、それほど残りがいいとは言えない。溝の北側部分は後世の攪乱により破壊されており、残存状態の悪さの要因の一つとなっている。南溝は、幅 1.7m、深さ30cmを測るが、東側ほど浅くなり、掘り込みがはっきりしなくなる。その上、溝の東側において、溝より新出のＳＫ１３と重複しており、その大半が破壊されている。

西溝は、ＳＫ１４、ＳＫ１５、ＳＫ１６と重複しており、本来の形態はよく分からなくなっている。重複の順は、ＳＫ１５→ＳＺ０５→ＳＫ１６→ＳＫ１４で新しくなる。残存部分では、その北側で幅 1.5m、深さ40cmを測り、他に溝より掘り込みが、最もしっかり残っていることが分かる。この西溝でもう一つ注意されるのは、そのほぼ中央に幅30cm程度の開口部が認められることである。この開口部は、方形周溝墓の外側に向って徐々に広がっており、最も狭くなる開口部内側に、幅50cmほどの基盤層である溶岩の露呈が高さ15cm程度で認められる。

次に、少し他の遺構との関連を確認してみると、まず、西溝におけるＳＫ１６との関係が上げられる。西溝とその長軸方向を同じにするＳＫ１６は、溝の外側沿いに重複し、ＳＺ０５を切って構築されている。因みに、ＳＫ１６の覆土中からは、３の壺（図－44)の出土が確認されている。

ＳＺ０５を幅８ｍを測る南北方向の区画を基準として、方形を示すものであるとすれば、第Ⅱ次調査で確認されているＳＢ１８は、その軸方向をＳＺ０５のそれとほぼ一致させ、ＳＺ０５の方形区画に隣接して構築された構造物であると見做され、それぞれ相関する位置にあると言える。

ＳＢ06（図－19）

調査区の南側中央で確認されている竪穴住居址で、3.72m× 3.1mの規模を測り、長軸方位Ｎ－17°－Ｗの方向を示す。校庭整地作業による攪乱のため、住居の壁はほとんど確認できないが、床面は確認されている。壁は、明瞭に残っている東壁と西壁で、深さ６cm程度を測るが、その他は、掘り方まで調査しないとその掘り込みが確認できない。掘り方は、深さ18cmを測り、上下２層に分けて認識されているが、いづれも黒色の橙色スコリヤ混入土を基本としている。掘り方下層は、栗色土がブロック状に入り、その量を増やす。

住居に付属する炉址や柱穴などは検出されていないが、住居址の南東コーナー部に長径1.07ｍ、短径0.57ｍを測る楕円形の土坑状の落ち込みが認められ、いわゆる「貯蔵穴」と呼ばれているものに相当するが、土器や植物遺体などは確認されていない。

ＳＢ07

ＳＺ０２とＳＺ０５との間で確認されている竪穴住居で、それぞれと重複関係にあり、いずれよりも古い。

残存状態はそれほどよくなく、北側はすでに消失している。残りの良い南側では、深さ８cmほどの壁が認められる。現状で確認できる部分では、4.94ｍ×4.16ｍの規模を測り、長軸がＮ－11°－Ｅの方向を示す。

掘り方は、床面から最大10cmの深さを測る浅いもので、張り床を構築する程度の深さでしかない。

この住居に付属する施設は、中央やや北側に炉址が見られ、南東コーナー部分に土坑が確認される。また、ピットが炉の西側と南東コーナー部にそれぞれ１個づつ認められる。炉は、40cm×27cmの大きさを測り、その北側に炉石が設置されている。土坑は、70cm×50cmの大きさで、床面からの深さ18cmを測る。ＳＺ０６同様「貯蔵穴」と呼ばれるものに相当しようが、土坑中からの出土物は認められない。ピットは、その掘り方

が径40cmほどを測るが、深さは15cmほどで浅い。柱穴と捉えることも考えられるが、新出のＳＺ０５により破壊されている部分も考慮され、それぞれ規則的な展開を示さないので確定できない。

ＳＢ０８

調査区の北東隅で検出された竪穴住居で、その遺存状態は極めて悪い。炉址と思われる焼土充填のピットとその周囲の張り床やＳＺ０３の開口部に残存する壁の一部から住居と認定されている。壁は、残存部で10cmほどの掘り込みが認められる。これは、掘り方もはっきりしないが、ＳＺ０５と重複関係にあり、それより古いすり鉢状のＳＫ１５が、その位置から掘り方の一部になる可能性がある。

この竪穴住居に付属する施設としては、まず、炉址が上げられる。これは、径35cmのピットに焼土の堆積が認められるものであるが、炉石などは検出されていない。この炉址とＳＫ１５の周囲には、３個のピット確認されているが、住居との具体的な関係は分からない。ピットは、北より径90cm－深さ37cm、径85cm－深さ20cm、径55cm－深さ30cmをそれぞれ測る。

ＳＢ０９

遺存状態が悪く、炉址のみ確認された住居である。炉址は、南側に２つの炉石が並列して設置されている形態のもので、径35cmほどの大きさを測る。

ＳＫ１０

調査区の中央やや北寄りに位置する土坑で、径1.15ｍ、深さ15cmを測る。形状はほぼ正円で、その底面も平坦なものである。

ＳＫ１１

調査区の中央やや南寄りに位置する土坑で、ＳＺ０１と重複しており、それよりも新しい。形状は正円で、径１ｍ、深さ27cmの規模を有する。

ＳＫ１２

調査区の東側中央に位置する円形の土坑で、径1.35ｍ、深さ12cmの大きさを測る。ＳＺ０５の南溝と重複しており、それよりも新しいものである。

ＳＫ１１やＳＫ１２は、当地の丘陵部に通有の円形土坑として認識されるもので、中世以降の畑作に関連し、樽などを設置した農業施設の痕跡として把握されているものである（富士宮市教育委員会 1994）。畑に関係する施設ならば、畑の区画に沿った規則性をその位置に見いだせるものと考えられるが、今回も明確な展開を示していない。ただ、ＳＫ１１、ＳＫ１２の２基については、いづれも、その北東側４ｍの地点に径 0.8ｍ、深さ10cmほどの円形土坑が認められ、それぞれの相関関係が窺えるものとなっている。更に、この２つの組み合わせは、８ｍほどの間隔を持ってほぼ平行する位置関係にあり、その間の何らかの土地利用により規制され、方向を同一にしていた可能性が窺えるものとなっている。

ＳＫ１３

調査区の東側で検出された不正円形の大型土坑で、長径 2.9m、短径1.75ｍを測る。断面は皿状を呈するようであるが、その大半がＳＺ０５の南溝を切って重複しているが、明確な形状は把握されていない。

ＳＫ１４

調査区の北東側に位置する楕円形になると思われる土坑で、長径1.55ｍ、短径0.95ｍほどの大きさを測る。残存状態が悪く、壁の立ち上がりなど不明瞭な部分が多い。一応、ＳＺ０５とＳＫ１６と重複しており、最も新しいものとされているが、後述のＳＫ１５同様、ＳＢ０８の掘り方あるいは壁部分となる可能性も否定できない位置に構築されている。

ＳＫ１５

調査区の北東側に位置し、その場所からＳＢ０８の掘り方の一部とも捉えられる土坑で、長径 2.3ｍ、短径 1.9ｍを測る不正円形を呈する。その断面形はすり鉢状を示し、深さ17cmほどで浅い。また、これは、ＳＺ０５と重複関係にあるが、それよりも古い。

ＳＫ１６（図－21）

ＳＺ０５の西溝と重複し、それとほぼ平行する位置関係にある土坑で、長径 3.3ｍ、短径1.45ｍを測る長楕円形を呈する。新旧関係では、ＳＺ０５より新しく、方形周溝墓の埋没した溝を意識して構築された様子が窺えるものである。この土坑は、深さ25cmを測り、皿状の断面形を示している。

＜遺物出土状況＞

ＳＺ０５南側の覆土中位において、３の壺が倒位の

状態で、その口縁部を下向きにした状態で検出されている。その胴部の大半は、破片化して土坑の内側に転落しているが、垂直的な位置では、口縁部より深くなることはなく、水平面に対応した出土状況を示している。つまり、ＳＺ０５の溝の掘り込みが、この土器の出土状況に影響を与えていない状況が看取される。

－第Ⅱ次調査－（図－22）

第Ⅱ次の調査区は、第Ⅰ次調査区の東側に隣接している。第Ⅱ次調査では、竪穴住居址２軒、掘立建物跡１棟、方形周溝墓１基と第Ⅰ次調査時に確認されているＳＺ０５の北溝が検出されている。

ＳＺ１７（図－22）

調査区の南側で検出されている方形周溝墓で、その南側１／２は調査区域外に展開している。方形区画は北側で一辺 5.4ｍを測る。そして、その溝は、調査されている範囲において途中とぎれることはない。それぞれの溝は、西溝で幅 1.4ｍ、深さ 30㎝、北溝で幅1.25ｍ、深さ25㎝、南溝で幅 1.7ｍ、深さ 60㎝を測り、その底面は、東側ほど低くなっている。また、溝の平面形も、西溝から北溝にかけてほぼ均等の幅を保っているが、東溝において、その外側が大きく広がる形態を示しており、しっかりした掘削が実施されている様子が窺われる。

溝の底面には、基盤層である地山の溶岩礫の露呈が目立つが、それが溝の深さや規模に影響していることも考えられる。そのため、溶岩礫の多い北西側ほど溝の掘削が弱くなる。東溝においては、その底面に幅70㎝ほどの大きな溶岩の露呈が認められ、それをすべて掘り出すことなく、溝の掘削を終えている。

＜遺物出土状況＞

東溝の溶岩礫の西側で46の甕（図－46)が検出されている。これは、溝の上層から出土しているもので、口縁部を下にして倒位の位置で破片化している。垂直位置では、これらの破片はほぼ水平であり、溝がある程度埋まってから形成された平坦面に対応する状況を示している。

ＳＢ１８（図－23）

長軸 2.4ｍ、短軸2.35ｍを測るほぼ方形の竪穴遺構で、ＳＺ０５とＳＺ１７の間に位置している。これは、他の竪穴住居と比べて規模が極端に小さいことや、炉や柱穴などが確認されないことなどから特異な性格を持つ遺構として捉えられる。これの西壁と南壁の一部は明瞭に残るものの、大半は残りが悪い。掘り方は東から北東部分にかけて、その掘り込みを深くしており、底面で20㎝程の比高差で徐々に低くなる。掘り方の浅い部分では、地山の溶岩礫の露呈が顕著に見られ、掘り方の形態（植松1981）に制限されることなく、床下部分の地質的な状況に左右されていることが看取される。

ＳＢ１８は、ＳＺ１７の傾きとほぼ同一の方向を示し、2.5ｍの間隔を開けて構築されており、相互の関連が想定される位置関係にある。また、前述のようにＳＺ０５との相関性も考慮される建物跡でもある。これは、第Ⅰ次調査や第Ⅱ次調査で確認されている方形周溝墓群に対応する建物として捉えられそうであり、居住域とするより、むしろ墓域内に造られた施設と考えられる。遺構の構造や出土遺物の特異性は、そのような遺構の性格に起因している可能性が強い。

＜遺物出土状況＞

出土遺物は、ほとんど認められないが、住居の中央付近の床面から48（図－46)の壺破片が出土している。

この壺は、平底の小型壺で肩部に波状文と円形の刺突文が施されている。

ＳＢ１９（図－22）

ＳＺ１７と重複関係にある竪穴住居で、調査区の南端中央で確認されている。これは、その大半が調査区南側に展開しているため、調査されているのは全体の1／3程度にすぎない。

この竪穴住居の東側をＳＺ１７の東溝が縦断しているが、ＳＺ１７が後出のものでＳＢ１９が埋没後に構築されている。

ＳＢ１９は、調査された範囲で幅 4.6ｍを測り、北西コーナーの状況では隅丸方形の平面形が想定される。確認されている壁部分は浅く、残りの良い西壁部分で深さ18㎝を測る。床面に付属するものとしては、その西側で柱穴と思われるピットが確認されている。大きさは、径60㎝×40㎝で深さ40㎝を測る。掘り方は、全面に亘って認められ、西側で12㎝、東側で22㎝を測り東側ほど深くなる。また、住居の北側中央には掘り方の一部と思われる不正円形の土坑状の落ち込みが認められ、長径 1.8ｍ、深さ30㎝の規模を測る。この落ち込みの中には、溶岩礫の露呈が見られ、その出土を見て、掘削を止めている様子が窺えるものである。

ＳＢ２０（図－23）

６本柱の掘立柱建物跡であるＳＢ２０は、方形周溝墓であるＳＺ１７の北溝に近接して検出され、南北２間、、東西１間の形態を示し、それぞれ3.25ｍ、4.05ｍの規模を測る。長軸方位はＮ－５°－Ｅを指す。柱穴掘り方の大きさは径70㎝程を測り、その平面形は円形を基調としている。深さは、遺構確認面より30㎝程度を測るが、水平面を基準とすると北側ほど底面の標高が低くなっている。

第Ⅱ次調査区では、このように、竪穴遺構２棟、掘立柱建物１棟、方形周溝墓２基が確認されている。それぞれの前後関係は、直接その関係が理解されるＳＢ１９→ＳＺ１７への新旧関係の他に、親縁性が想定されるＳＺ０５、ＳＺ１７とＳＢ１８の同時性が考えられる。また、その位置関係から同時に構築されたとは考え難いＳＺ１７とＳＢ２０との関係は、ＳＺ１７とＳＢ１９の関係から居住域から墓域への転換が測られたことを重視すれば、ＳＢ２０→ＳＺ１７の関係が想定される。これらは、第Ⅱ次調査区における土地利用の大きな違いとして理解され、第Ⅰ次調査区同様に居住域と墓域の２つの景観を見ることができる。

－第Ⅴ次調査－（図－24）

第Ⅱ次調査区の北側区域を滝戸遺跡第Ⅴ次の調査として実施した。調査地区が相互に近接するので、調査年に関わらず、ここで第Ⅱ次調査に続いて解説する。

第Ⅴ次調査は、第Ⅱ次調査地点の北側９ｍほどの地点を対象として実施されたが、第Ⅰ次、第Ⅱ次調査とは様相を違え、著しく重なり合う竪穴住居群と１基の方形周溝墓が確認されている（図－24）。

ＳＺ21（図－25）

調査区の西側に展開する方形周溝墓で、他の竪穴住居を切る状況で確認されている。これはその北溝が調査区外にあるため、その形態や全体の規模などは分からないが、東西方向で 9.15ｍの長さを測る。

溝は、地山の溶岩が露呈する南東側では、その掘り込みが浅く、幅も一定しない。特に、南東コーナー部分では、幅50㎝と狭く、深さも７～８㎝程度でしかない。溝の南西側から西側にかけては、比較的しっかりした掘り込みで、西溝で幅 2.15ｍ、深さ55㎝を測る。西溝の掘り込み断面は、内側の壁が急で、外側がなだらかな立上がりを示している。

溝の底面は、北東側が最も深く、一番高い南西コーナー部とで比高差50㎝を測り、その掘削が地形的な状況に左右されている様子がよく分かる。そのため、溝の平面形も内側は直線的なラインによる方形が指向されているが、外側は、不規則なものとなっている。

＜遺物出土状況＞

遺物の出土は比較的良好である。西溝の底面で、Ｓ字甕である154と155（図－54）の破片資料が出土している。両者は、互いに接合はしないが胎土や整形技法などが類似しており同一個体と思われるものである。

掘り込みのしっかりしている東溝では、その覆土中から159,160,166（図－54、図－55）などが一括で出土している。小型土器である159と小型器台の160は、東溝の北壁際の覆土下層で確認されている。159は底部穿孔の完形品で、160は脚台部欠損の状態で出土している。

二重口縁壺である166は、底部穿孔の完形品であるが、東溝の中ほどの覆土中層で破片化した状態で確認されている。底部は正位の位置で、土圧によって押し潰されたような状態で出土し、胴部上半がその北側で、また口縁部が方形周溝墓の内側である西側において出土している。これは、その出土層位や各部位の出土位置を考えると、方形周溝墓に対する二次的な行為として、溝がある程度埋没した段階で人為的に設置された状況が窺え、以後溝の埋没に合わせて破片化したものと捉えられる。

土器以外の遺物としては、直接ＳＺ２１から出土しているものではないが、後述するＳＢ３１の覆土上層においてガラス小玉（図－57）が１点出土している。方形周溝墓との関連も考慮しなければならない資料であろう。

ＳＢ22・ＳＢ23・ＳＢ24（図－26）

調査区の北壁の西側に並列している３軒の竪穴住居を一括して説明する。

東側のＳＢ２２は後述するＳＢ２６と重複しており、それよりも新しい。竪穴住居の南西コーナー部が調査区内で確認されているが、緩やかな湾曲を描く平面形である。掘り込みは、深さ25㎝ほどを測り、西側ほど残存状態は良い。床面ではピットが２個確認されている。東側は径40㎝、深さ22㎝を測り、西側が径30㎝、深さ15㎝を測る。掘り方は、8～10㎝程度の深さを測り、全体的に認められる。特に、住居の南西側はその

掘り込みが深く、壁に沿って溝状の掘削が見られる。

ＳＢ２３は、ＳＢ２４と重複しており、それよりも新しい。調査区で確認されているのは、竪穴住居の南東コーナー部で隅丸方形の形状を示している。掘り込みはしっかりしており、残りの良い西側部分で深さ45cmを測る。床面には２個のピットが確認されており、大きい方が径 1.25m、深さ25cmを測り、他方が径55cm、深さ20cmを測る。これらは、いづれも住居の壁際にあり、大型のものであることなどから、掘り方の一部になると思われるものである。これらのピット以外では、深さ10cm程度の掘り方が全体に確認される。

ＳＢ２４は、調査区の北東隅にほんの一部確認された竪穴で、深さ15cmを測る。平面形は扇形の曲線を描く。床下には掘り方も認められ、深さ10cm程度を測る。

＜遺物出土状況＞

遺物は、ＳＢ２２において145と146(図－53)が南東コーナー付近の床面において出土している。145は台付甕胴部破片で、146は高坏のほぼ完形のものである。146 は正位の状態で、坏部を上にして出土している。坏部は破片化して、一部周囲に散らばっているが、脚台部の残りは良い。

ＳＢ25（図－26）

調査区の東壁際において南東コーナー部が確認されている竪穴住居で、隅丸方形を想定させる平面形を示す。竪穴の掘り込みは、深さ15cm程度である。

ＳＢ26（図－27、図－28）

調査区の東側で、ＳＢ２７、ＳＢ２８、ＳＢ２９などと重複しているが、いずれよりも新しい。また、その北側でＳＢ２２と重複し、それよりは古い。平面形は隅丸の長方形で、長軸 6.8m、短軸 4.9mを測る。長軸方位はＮ－10°－Ｅを指す。竪穴の掘り込みは、南側で残りが良く深さ25cmを測り、残りの悪い北側で10cmを測る。

付属する施設としては、炉跡、柱穴、土坑などが確認されている。中央やや北よりに位置している炉は、南側に１個の炉石が設置され、径45cm、深さ15cmを測るほぼ円形のもので、その中に焼土が充填している。また、炉の南側には幅50cm、深さ10cmほどで焼土の明瞭な分布範囲が認められる。炉が作り替えられた可能性も考えられる。柱穴は４個あり、その掘り方の径が70～80cm、深さ50～70cmを測る比較的しっかり掘り込んだもので構成される。

この住居の北側中央には、長軸75cm、短軸70cm、深さ40cmを測る方形の土坑状施設が見られれるが、住居に付属するかははっきりしない。通常の「貯蔵穴」と称されるものにするには、設置位置が疑問であり、入口施設とするのも同様の理由で考えにくい。この中から遺物などは認められず、詳細は分からない。

住居の掘り方は、全体的に深く掘られており、明瞭な掘り方として認識される。地山である溶岩礫の露呈する調査区の南東側に近い住居の南東側では、床面から深さ８cmと急激に浅くなるが、その他は20cm程度を測る。特に、この遺跡の立地する台地の斜面部に近い住居の北側部分では、壁際に馬蹄形の掘り込みが認められ、更に深く掘られている様子が分かる。この部分では深さ40cmを有する。

＜遺物出土状況＞

遺物（図－52,図－53)は、土器を中心に住居の床面より良好な状況で出土している。まず、住居な西壁中央付近で、まとまって出土している139,140 （図－52）の小型土器は、住居の覆土上層で確認されているが、その他のものは大半が床面からの出土である。これらの中で 137,138,141はいづれも小破片であり、137は住居の中央で、138,141が北東側の柱穴付近からそれぞれ出土している。底部を欠損している143と口縁部のない144は、住居の中央で破片化して確認されている。両方とも1.5cmほどの範囲に散らばっており、破損品を床面に廃棄した様子が窺える状況を示している。

脚台部を欠損している142 は、住居の南側中央で、坏部を伏せられた状態で確認されている。これは意図的に置かれていたようで、完形のまま出土している。

土器以外には、人頭大ほどの溶岩礫が南東コーナー部分を中心に床面において確認されている。また 138の台付甕の破片の南西側からは、193（図－57）のガラス小玉が床面から出土している

ＳＢ27・ＳＢ28・ＳＢ29（図－28、図－29）

ＳＢ２６に切られる状況でその南側において確認された３軒の竪穴住居は、ＳＢ２９→ＳＢ２８→ＳＢ２７の順で新しくなる。

ＳＢ２９は、ＳＢ２６とＳＢ２８によりその大半が破壊されおり、一部が残るにすぎない。掘り込みは、掘り方も含めて深さ15cmを測り、住居の内側ほど深くなる。この住居内には２個のピットが確認されている。西側のものは、径30cm、深さ50cmを測り、東側のものが径40cm、深さ８cmを測る。

ＳＢ２７は、掘り方だけの検出で、掘り込みが深さ８cmと浅く、他の遺構との重複部分ではほとんど確認されない状況にあった。確認できた部分は、竪穴住居の北西コーナーであるが、その形状から隅丸方形の平面形が想定され、また、ＳＢ２６やＳＢ２８の掘り方調査中に確認された柱穴の配置からは、東西方向に長い長方形のものであったことが想定される。柱穴はその掘り方が長軸75～110cmを測る方形基調のもので構成されている。因みに、この住居自身の調査で確認されている柱穴は、大きさ80×65cmで、掘り方底面から深さ25cmを測る。この柱穴の北側には、長軸90cm、深さ30cmを測る長方形の落ち込みが見られるが、住居との関連は良く分からない。

ＳＢ２８は、ＳＢ２６、ＳＢ２７よりも古いが掘り込みが深いため、全体の2／3の状況は把握される。竪穴の平面形は小判形で、長軸 7.5m、短軸 5.95mの大きさを測る。長軸方位はＮ－６°－Ｅを指す。床面までの深さは30cmを測り、南東側ほどその残りが良い。付属する施設としては柱穴と炉跡が認められる。炉跡は南側に炉石を持つ円形のもので径50cmの大きさで、深さ８cmを測る。柱穴は、その掘り方が径60cmほど楕円形のもの４本で構成されている。柱穴の深さは30cmほどを測る。

住居の南側には深さ10cmほどのピットが４個集中して確認されているが、具体的な機能については良く分からない。その位置から出入口の梯子掛けに関連したと捉えられるものもあろう。

この住居の掘り方は特徴的で、南側を壁に沿って馬蹄形にそれを形成しない部分が認められ、直接床面としている。それ以外の部分では深さ15cmほど掘り込んで掘り方を形成している。掘り方をはっきり形作るのは、ＳＢ２６と同様に北側部分であり、地形に左右されているようである。この掘り方は壁際を掘り残しているため、いわゆる「周溝」と称されるものが確認されている。入り口部と思われる南側ではそれが途切れているが、その他では幅15cm、深さ８cmほどのものが巡っていたようである。

この住居のもう一つの特徴としては、壁沿いに多量の焼土が検出されたことである。焼土は床面にあり、厚さ15cmほどを測るのものである。この焼土の量に比べて炭化材などはほとんど検出されていない。

＜遺物出土状況＞

ＳＢ２７とＳＢ２８との重複部分において135,136(図－52)の壺が出土している。出土した高さや位置よりＳＢ２７のものとして捉えているが、遺構の重複状況などを加味すると不確実な部分も多い。ＳＢ２７のものとすれば床面直上の土器となる。

ＳＢ２８からは多量の焼土とともに土器類が出土している。出土土器はすべて破片資料で、広口壺、短頸壺、台付甕などが見られる。住居の南西コーナー部では、やや固まって129,130,132(図－52)が焼土中から検出されている。また、南側の中央部では台付甕の脚台部である133が床面より５cmほど浮いた状態で確認されている。

ＳＢ３０（図－26）

調査区の南側中央壁際で確認された竪穴遺構で、その南側が調査区外に展開している。確認されている部分では東西幅 2.65mほどで、隅丸方形を呈する小型のものであることが分かる。掘り込みは深さ５～６cmで、西側ほど残りが良く、東側はそれが確認されない。床面は、張り床状の硬質な部分が竪穴の中央に一部認められる。付属する施設としては、小ピットが２個確認されている。北側のものが径28cm、深さ55cmを測り、しっかり掘り込んでいるものである。中央で確認されているものは、径28cmを測り、その深さは10cm程度と浅い。炉跡は確認されておらず、その規模などとともに、第Ⅱ次調査のＳＢ１８との類似性が指摘できる。

掘り方は全体に確認され、中央部ほど深くなる。その部分では深さ20cmを測る。

ＳＢ３１・ＳＢ３２・ＳＢ３３・ＳＢ３４（図－30）

調査区の南側中央で、４軒の竪穴住居が重複して検出されている。重複関係はＳＢ３４→ＳＢ３２→ＳＢ３１の順で新しく、ＳＢ３３→ＳＢ３２の順で新しくなる。また、この重複する竪穴住居の中央を後出のＳＺ２１が横断している。

ＳＢ３１はこの住居群の中で最も新しい竪穴住居で、長軸 4.8m、短軸 4.2mを測る平面隅丸方形のものである。長軸方位はＮ－62°－Ｗを指す。竪穴の掘り込みは、残りの良い北東壁で深さ20cmを測り、残りの悪い南西壁で10cmを測る。この住居内で確認されているピットは４個あるが、具体的な帰属については良く分からない。４個のピットの内、東側の２つは、それぞれ各コーナー部分に位置しており、他の２つは西側の中央部に位置している。東側のピットは、北側のものが径70×37cmの楕円形で、深さ10cm程度の浅いもので、その南側が方形を基調としており一辺60cm、深さ25cm

を測るものである。また、西側は径48cm、深さ50cmを測るものと50×30cmの楕円形で深さ20cmを測る２つが見られる。いづれかは柱穴の機能を持つものと思われるが、その構成は良く分からない。炉跡は、その位置からＳＺ２１により消失しているようで見当たらない。

掘り方は、全域に亘って認められ、深さ６cmほどで浅い。

ＳＢ３２は他の遺構との重複により1／3ほどが認められるにすぎない。残存部分によれば長軸 4.55m、短軸 3.95mを測る隅丸方形の平面形が想定され、ＳＢ３１と類似する形態を示す。竪穴の掘り込みは深さ15cmを測る。

付属するものとしては、ピットが４個みられるが、いづれも規則的な展開を示さない。中央の２つは、径50cm、深さ35cmを測るものと径45cm、深さ15cmを測るものである。また、ＳＢ３１との重複部では径25cm、深さ40cmを測る小ピットが見られ、住居の南東コーナー部には、方形を基調とする一辺40cmの大きさで、深さ10cmを測るピットが見られる。

掘り方は、深さ８cmほどの掘り込みで全体的に認められる。

ＳＢ３３は、ＳＢ３２の南側でそれと重複しており、ほとんどが消失している。残存部分では、一辺 2.2mほどの隅丸方形の平面形が想定され、比較的規模の小さい竪穴遺構と捉えられ、ＳＢ１８やＳＢ３０などとの類似性が看取されるものである。掘り込みは深さ12cmを測る。掘り方も深さ10cmほどを測り、それが壁際ほど浅くなるように掘削されている。

また、この竪穴の中央には径35cm、深さ５cmの浅いすり鉢状のピットが認められる。この中には拳大の溶岩礫が充填されており、特殊なものであるが、その時代や帰属については分からない。

ＳＢ３４はＳＢ３１，ＳＢ３２の北西側でそれらと重複しており、小判形の一部が想定される曲線的な平面形を示す。確認されている部分での幅は ３mを測る。掘り込みは８cmほどで浅く、残存状況はそれほどよくない。掘り方は10cmほどの深さを測るが、その中央部では、幅 1.4m、深さ25cmを測る土坑状の掘り方が確認されている。

また、このＳＢ３４とＳＢ３１との重複部分にはこれらより後出のピットが見られる。規模は径65cm、深さ40cmを測る。

＜遺物出土状況＞

遺物はいづれの住居とも、それほど多くない。ＳＢ３２の南壁際からは、125(図－51)の台付甕がその床面から出土している。また、ＳＢ３１の北東コーナー部からガラス小玉が１点出土している。これは、住居の覆土上面で確認されたもので、前述のように、ＳＺ２１との関連も考慮されるものである。

ＳＢ35（図－30）

調査区の北壁中央でＳＺ２１やＳＢ３６、ＳＢ３７と重複して確認されている。新旧関係は、ＳＢ３７→ＳＢ３６→ＳＢ３５→ＳＺ２１の順に新しくなる。

ＳＢ３５はその大半が、調査区の北側に展開し、その東側がＳＺ２１に破壊されており、全体の状況は把握されないが、調査区内で確認されている平面形や柱穴の状態では、大型で小判形の平面形が想定されるものである。確認されている部分は、幅５m、深さ30cmを測り、比較的良好な状況で確認されている。

付属する施設としては、この北側に見られる２つの柱穴で、その掘り方は、東側がＳＺ２１と重複しながら、42×85cmの大きさで、深さ37cmを測る。西側のものは、径85cmほどの楕円形で、深さ45cmを測る。これらに伴うかのように、それぞれの南側には径35cmほどのピットが位置しているが、いづれも深さ10cmほどで浅い。

掘り方は、住居の周囲を幅80cmほど掘り残し、床面を直に作り、中央部を深さ10cmほど掘り窪めて、明瞭にそれを形成している。また、掘り方に伴い南側中央部には深さ10cmほどで、径65cmを測る落ち込みが認められる。その位置関係から入り口施設との関連も考えられるが良く分からない。

ＳＢ36・ＳＢ37（図－31）

調査区の中央部で確認されている竪穴住居址で、ＳＢ３７→ＳＢ３６の順で新しくなる。

ＳＢ３６は、その北側をこれより新しいＳＢ３５に切られているが、全体の状況はほぼ把握され、隅丸の長方形の平面形を示すことが分かる。その規模は長軸 4.5m、短軸 3.8mを測る。長軸方位はＮ－37° －Ｅを指す。竪穴の掘り込みは住居の北東側ほどその残りが良く、深さ10cmを測るが、反対に南西側は壁が消失している部分も認められる。

床面には、焼土が散在して確認されているが、その量はそれほど多くない。

付属する施設は、炉と柱穴が認められる。炉は中央やや南寄りに位置しており、その北側に炉石を併設さ

せている。炉石は長さ10～15cmの細長い石３個を２列に並列させて構築しており、本遺跡の中では特異な形態を示す。炉の掘り方は焼土がその中央で顕著に認められ、径55cm、深さ10cmを測るすり鉢状を呈する。柱穴は、住居の南東側に２個のピットが見られ、それに対応するようである。これらは、西側のものが径45cm、深さ35cmを測り、東側のものが径30cm、深さ15cmを測り、両者に若干の形態差が認められる。

この柱穴や炉跡の他に、住居の南東側中央に径60cm、深さ20cmを測るピットが認められるが、その帰属や機能については良く分からない。

掘り方は深さ７～10cmで、ほぼ全域で確認される。

古い方のＳＢ３７は、ＳＢ３５やＳＺ２１などにより切られており、その大半を消失している。確認されている部分には、南東コーナーや北東コーナー部分が認められるが、その状況からは隅丸方形の平面形が想定される。竪穴の規模は、南北方向で幅 4.1ｍを測り、その掘り込みは深さ10cmほどを測る。

付属するものとしては、住居の北側に近接する２個のピットが確認されている。いづれも径45cm、深さ30cmほどを測るものであるが、その機能については良く分からない。

掘り方は床面から深さ10～15cmで、全体的に認められる。

ＳＢ38・ＳＢ39・ＳＢ40（図－32）

調査区の北西側に位置する竪穴住居址で、６軒が重複する竪穴住居が密集して確認された区域の一角を占める。各住居の重複関係は、ＳＢ４０→ＳＢ３９→ＳＢ３８の順で新しくなる。また、これらは前述のＳＢ３６とも重複関係にあり、ＳＢ３９が確実にＳＢ３６よりも古いが、ＳＢ３８とＳＢ３６との関係についてはＳＢ３８の残存状態が悪いため良く分からない。そして、更にこれらの住居址群の西側を新出のＳＺ２１が大きく削去している。

ＳＢ３８は、西壁のすべてがＳＺ２１により消失しているため正確な規模等分からないが、残存していて確認された部分から長軸 4.85ｍ、短軸 4.2ｍの規模で、隅丸方形の平面形を示すことが想定される。長軸方位はＮ－９°－Ｗほど西に傾く。竪穴の掘り込みは、残りの良い北壁で深さ15cmを測るものの、東壁などは状態が悪くすでに消失している。

付属する施設としては、４個の柱穴が確認されている。柱穴の掘り方は円形を基調としているようで、径40cm、深さ50cmほどの規模を測る。また住居の南壁際中央には径40cm、深さ25cmを測るピットが認められるが、その機能は良く分からない。竪穴のほぼ中央に炉跡が確認されている。炉跡には、径55×38cm、深さ10cmを測る楕円形の掘り方が見られ、その東側部分に焼土の顕著な分布が認められる。この炉には通有な炉石が確認されていない。床面には炉跡の南側を中心に焼土や小さな炭化材の分布が認められており、被火災家屋の様相を示している。その他のものとしては、この住居の南壁に、幅20cm、深さ10cmを測る周溝の一部が確認されている。全周するものと思われるが、掘り方まで掘り込んでいるこの部分だけ検出されている。

ＳＢ３９は、その大半がＳＢ３８と重複しているものの掘り方までの掘り込みが深いため、その形態は計測される。規模は長軸 4.75ｍ、短軸 4.28ｍを測り、後出のＳＢ３８と類似し、その平面形も同じ隅丸方形を示す。長軸方位はＮ－26°－Ｅを指す。床面までの竪穴の掘り込みは、残りの良い南側で深さ11cmを測るが、大半の場所はそれが認められず、直接床面が露呈している。そのため、ＳＢ３８の床面とこの床面と垂直的な位置関係にあまり差がない。

付属するものとして、柱穴については明らかに、それと断定できるものは認められないが、東コーナー部分と西コーナー部分の対角線上の、それぞれ対峙する位置に径70cm、深さ40cmほどのピットが検出されている。炉跡はすでに消失している。

掘り方は、その掘り込みが比較的しっかりしており、住居の全域を深さ25cmほど掘り窪める状態で確認されている。また、この掘り方の直下には径３ｍほどの風倒木痕が認められている。

最も古いＳＢ４０は、南側のコーナー部だけ確認されている。その形状によれば、隅丸（長）方形の平面形が想定される。竪穴の掘り込みは、ほとんど認められず、確認面がほぼ床面である。付属するものとしては、中央に径40cm、深さ30cmを測るピットが確認され、柱穴の掘り方として捉えられるものである。住居の掘り方は深さ15cmを測る。

＜遺物出土状況＞

ＳＢ３８の床面から、前述の焼土や炭化材に伴って多く拳大の石が散在して出土している。また、これらと一緒に120(図－51)の台付甕が破片化して、住居の北東側で確認されている。

ＳＢ41

調査区の南東隅で、3個のピットが並列して確認され、その状況から掘立柱建物跡の一部として認識されている。また、最も西側の柱穴は、ＳＢ２８と重複しているが、それよりも新しい。

各柱穴の掘り方は方形を基調としおり、西側が80×70cm、深さ20cm、中央が65×65cm、深さ22cm、東側が幅65cm、深さ15cmをそれぞれ測る。また、柱間はそれぞれ 1.8mほどを測り規則性が窺われるものである。

＜遺物出土状況＞

遺物の出土はほとんど認められないが、西側の柱穴の覆土中から、本遺跡では極めて出土数の少ない平底甕底部破片の147(図－53)が出土している。

－第Ⅳ次調査－（図－33）

第Ⅰ次調査、第Ⅱ次調査、第Ⅴ次調査の各調査区とは大きくその地点を違えているため、その内容も異なる様相を示している。この地区では、それぞれその区域を明瞭に分ける方形周溝墓群と竪穴住居群が確認されている。調査区の中央から東側では11基の方形周溝墓が検出され、西側において８軒の竪穴住居と１棟の掘立柱建物からなる集落の一部が確認されている。

この第Ⅳ次調査の調査区は潤井川の川岸部分であるため、現地表面での掘削が遺構確認面まで相当及んでいる。調査区の西側には、広範囲な攪乱部分が認められるとともに、各遺構もその影響を受け、本来の形態を示していないものが多く存在する。特に、方形周溝墓については、確認された溝を平面的に捉え、その形態をそのまま一般的に類型化された形態と、直接整合させることは難しい。

ＳＺ42・ＳＺ43（図－34）

調査区の西端で確認されて２基の方形周溝墓で、溝の一部を共有している。共有している部分では、溝の掘り込みが深いＳＺ４２と浅いＳＺ４３とに明瞭な違いを示している。溝覆土の観察では、ＳＺ４２の方が新しいとされている。

ＳＺ４２は、その北側の削平が進み消失している部分が多く、全体の形状は分からない。残存する溝の状況からは長軸 9.15m、短軸 6.7mの規模を測り、長方形の平面形を呈する。溝は幅 1.7m、深さ30cmほどで断面が箱型を示す。中央の一部が残存している北側の溝の溝底の標高を南側のそれと比べると、比高差80cmほどを測り大きく下がっていることが分かるが、これは、このＳＺ４２が、もともと川側に向かって傾斜していた斜面地に造営されていたことを表しているものである。このＳＺ４２の中央には、径 4.5mを測る風倒木痕が確認されているが、ＳＺ４２との新旧関係については調査されていない。

ＳＺ４３はＳＺ４２と共有する部分の溝と南北に延びる西溝とを兼ね合わせると、方形周溝墓の北西コーナー部分として捉えられるものであるが、調査時に方形周溝墓と認識されていなかったため、図示したコーナー部の状況など信憑性に欠ける。このＳＺ４３は、その南側と東側が調査区域外に展開するため、全体の状況は分からない。確認されている西溝は幅85cm、深さ20cmを測り、滝戸遺跡で確認されている方形周溝墓の中では比較的規模が小さく、それに相対させると方形周溝墓自体も小規模なもののようである。

ＳＺ44・ＳＺ45（図－35、図－36）

調査区の西側で確認されている２基の方形周溝墓で、それぞれ溝の一部を共有している。この方形周溝墓は、その東西両方向に大きな攪乱が認められことや南北の両側が調査区域外へ展開することなどから、いづれもその形態については良く分からない。

ＳＺ４４は、その南溝がＳＺ４５の北溝と共有しているが、掘り込みのしっかりしているＳＺ４４の方が新しい。ＳＺ４４は南溝で幅 1.8m、深さ55cm、東溝で幅 1.3m、深さ50cmをそれぞれ測る。その東溝の北側は確認面が緩やかな傾斜地となっているため、すでに消失している。また、南東コーナー部は、内側の屈曲が明瞭であるとともに、溝幅を狭めており、そこで幅70cm、深さ15cmを測る。

このＳＺ４４の南溝内には、長軸 3.5m、短軸 1.8mを測る長楕円形の溝内土壙が構築されている。この土壙は深さ90cmでその断面形が箱型を示すもので、方形周溝墓の溝底より更に30cmほど深く掘り窪められている。また、この土壙に大きく規制されて、南溝の中央より溝がその幅を大きく違えている。ただ、方形区画を認識させる内側のラインはほぼ直線的に描かれており、内部区画の形状には影響を及ぼしていない。このことは、土壙の掘削が方形周溝墓構築時に実施されたか、方形周溝墓の溝がある程度埋まった段階で、墳丘などの存在による内部の方形区画に規制されて構築されたかのいづれかと考えられる。土壙に対する詳細な調査は行われていないので、その用途や構造については良く分からないが、その中を中心とした南溝での

土器類の多量な出土を大きな特徴とする。

ＳＺ４５はその北東コーナー部分が確認されている。溝の規模は、東溝で幅 １ｍ、深さ20cmを測り、ＳＺ４４より高い場所に位置しているにも関わらず、比較的溝の規模は小さい。北溝はＳＺ４４との共有しているためその規模は分からないが、東溝より幅を広げている。溝の深さは25cmを測り、浅く幅広の皿状の断面形を示している。

＜遺物出土状況＞

ＳＺ４４南溝で確認されている遺物はすべて土器類で、土壙出土のものを主体としている。土壙の壙底からは、64、65（図－47)の脚台部を欠損している台付甕２点が出土している。64は破片化してない一個体として出土しているが、65は破片化し、土壙内で２～３ヶ所に分かれて出土している。その上、65はその約半分が土壙の西縁近くで確認されおり、全て土壙の壙底に関連しないような出土位置を示している。土壙の縁近くの破片の出土が、土壙の内外かは良く分からないが、検出された部分では溝底から15cmほど浮いた状態で出土している。

土壙底で台付甕が出土しているのに対して、土壙の覆土上層からは底部穿孔の壺が２個体出土している。これらの壺も台付甕と同様に一方が一個体で、もう一方が破片化して確認されている。破片化している68、69（図－47）は同一個体と考えられるもので、土壙の中央で出土している。また、口縁部を欠損している72(図－48)は、土壙の東側において倒立位の状態で確認されている。

土壙の性格を考えると、その覆土は漸次埋まったものではなく、一気に埋められたと捉えられる。そうすると、これらの土器群は、時期差がそれほどなく、土壙での埋葬儀礼の過程で、土器の破片化の決定や形式差により設置場所を変えるなどの行為が意図的に行われものと考えることができる。

これらの土壙関連の土器類以外に、南溝西側覆土上層で壺底部破片(70)（図－47)が、また南東コーナー部分の溝底で壺底部破片(71)（図－48)がそれぞれ出土している。71は、その底部に穿孔の形跡が認められないものである。

ＳＺ46（図－36）

調査区の中央西よりで確認された方形周溝墓で、その西側は攪乱により消失しており、北、東、南の各溝の状況からそれと認定されている。確認面が北東から東に向かって大きく下がっており、そちら側の溝は本来の姿を留めていないものと理解される。

北溝は大きくその幅を狭める北東コーナー部まで確認され、幅 1.45ｍ、深さ35cmを測る。溝は各地点でその幅を変えているが、区画を規定する内側のラインはほぼ直線となり、そのコーナー部の屈曲も明瞭である。この溝に対応する南溝は、攪乱に大きく影響されて、僅かに長さ１ｍが確認されているにすぎない。確認されている部分の幅は95cm、深さは30cmを測る。

東溝はこの北や南溝とその方向を違え、隣接するＳＺ４７の方に方向が合っている点など、直接関連のない溝状の遺構とすることもできる。ここではその位置関係と残存状態の悪い部分であることを加味して、一応ＳＺ４６の東溝としておく。この東溝は幅95cm、深さ15cmと、その残り自体も悪い。

これらの溝の状況から、ＳＺ４６は、長軸 9.2ｍ、短軸 7.75ｍを測る東西方向に長い長方形の区画を呈することが分かる。

ＳＺ47・ＳＺ48（図－37）

調査区の中央で確認されている２基の方形周溝墓で、溝の一部を共有している。新旧関係は、北側の掘り込みの深いＳＺ４７の方が新しいとされている。

ＳＺ４７は、後世の削平が進んでいる北側がすでに消失してため、全体の形状は分からないが、南北に長い長方形の区画を示すもので、短軸 4.95ｍを東西方向で測る。因みに、確認されている東溝の長さは ６ｍほどを測り、南北方向の幅がその程度かそれ以上であることは分かる。溝の規模は、西溝で幅 1.35ｍ、深さ30cm、南溝で幅 1.35ｍ、深さ40cm、東溝で幅 1.6ｍ、深さ25cmを測る。溝の断面は箱型を示すが、比較的浅く底部の幅の広い皿状に近いものとなっている。

ＳＺ４８はその北溝が、ＳＺ４７の南溝と共有しており、相互に関連性が指摘できる方形周溝墓である。その南側の大半は遺構外に展開しており、全体の様相は分からない。

確認されている部分は、ＳＺ４７の南溝やこの北溝の残存状況から判断すると、北東コーナー部分に幅 1.1ｍほどの開口部が設定されていた事が窺われるものである。そして、この開口部に対する内部の区画が東西方向で 6.75ｍの規模を測る。

区画を規定する溝は、北溝が幅広で浅く、東西のそれが幅が狭く深いとする大きな違いを示している。北溝は遺存する部分で、幅 １ｍ、深さ20cmを測り、形

状が類似する東西それぞれの溝が、幅80cm、深さ35cmを測る。北溝と東溝により作られる北東コーナーは、その深さを減じているため、途切れているような状況を示している。開口部かどうかは良く分からない。

ＳＺ49・ＳＺ50（図－37）

ＳＺ４８の東側に隣接して検出された方形周溝墓ＳＺ４９と溝状の遺構ＳＺ５０で、調査区の南壁際で確認され、それぞれの大半は調査区域外に展開している。

ＳＺ４９は東西幅 ７ｍの規模を測る区画を有する。溝自体は、北溝で幅 1.25ｍ、深さ30cm、西溝で幅 １ｍ、深さ35cmをそれぞれ測り、その断面はＵ字状に近い形状を示す。この方形周溝墓の北東コーナー部には、径20cm程度を測る比較的大型の礫が、集中して検出されている。人為的なものか、地山の自然礫（溶岩）の露呈なのか良く分からないが、隣接するＳＺ５０の自然礫露呈の状況を見ると、この周辺が比較的浅い地点で礫層となり、溝の掘削中にそれに当たり、その出現を契機にその溝の掘り下げを完了しているようである。この部分では深さ15cmを測る。

ＳＺ５０は一条の溝だけが確認されているもので、方形周溝墓になるかどうか判断されない。ただ、ＳＺ４９との方向が類似する点から、それに関連する方形周溝墓となる可能性が指摘される。この溝は長さ 4.2ｍ、幅 1.2ｍ、深さ18cmを測り、その北側ほど深さを減じている。

ＳＺ51・ＳＺ52（図－38）

溝を共有するＳＺ５１とＳＺ５２は、調査区の中央やや東寄りで確認されている。

ＳＺ５１は長軸10.3ｍ、短軸10.2ｍを測るほぼ方形の区画を示すもので、この調査では最大規模を測る方形周溝墓である。標高の高い南側部分が消失しているが、この調査地区の方形周溝墓がもともと斜面地に構築されていることを考えると、その部分がいち早く流出している可能性が強い。残存する溝は消失している南側に対応して北側部分で比較的残りが良い。北溝は幅 1.5ｍ、深さ45cm、東溝は幅 1.7ｍ、深さ60cmをそれぞれ測る。全体が確認されていない南溝は幅 1.25ｍ、深さ45cmを測り、東側ほどその深さを減じて途中で消失する。また、西溝は北西コーナー部分が調査区域にあり、その詳細は良く分からないが、幅 1.76ｍ、深さ10cmほどを測る溝で、南側ほど浅くなり、すぐに消失している。また、北溝と南溝との溝底での比高差は 1.15ｍを測り、北側に向かって大きく傾斜している。

ＳＺ５２はその西溝がＳＺ５１の東溝と共有しているが、ＳＺ５２の方が新しくなる時間的な前後関係を示している。比較的溝の掘り込みが浅いため、標高の低い北溝は、更に後世の削平が進んでいるため、確認されないようである。この内部区画の規模は東西方向で 7.25ｍの長さを測る。

この方形周溝墓は、周辺の残存状態を踏まえるとその南側は比較的残りが良いものと認識されるが、そうすると南東コーナー部と南西コーナー部に開口部が形成されていると捉えることができる。開口部は南東部分で幅 1.3ｍ、南西部で幅55cmをそれぞれ測る。

各溝は長楕円の土坑として認識されるものである。南溝は幅 1.8ｍ、深さ20cmを測り、西側ほど溝底が低くなっている。東溝は幅 1.55ｍ、深さ30cmを測り、地形に沿って北側ほど低くなっている。西溝は幅 1.55ｍ、深さ20cmを測り、東溝同様に北側ほど低くなる。

＜遺物出土状況＞

ＳＺ５２の東溝中央部より75（図－48）の口縁端部を欠損する壺が出土している。これは溝底から25cmほど上の覆土の上面で確認されており、口縁部を横にした横位の状態で検出された。

ＳＺ53（図－39）

調査区の東側で確認された方形周溝墓で、ＳＢ６１やＳＢ６２などの竪穴住居址、掘立柱建物跡などと重複関係にある。そして、掘立柱建物跡であるＳＢ６２の方がこのＳＺ５３より新しくなる。また、更に後世の溝が東西方向に２条走り、それらにも切られている。

標高の高い南西部分は残存状況が悪く、溝の掘り方がはっきりしないが、低い北側部分は比較的残りが良い。方形区画は長軸 6.6ｍ、短軸 6.5ｍを測り、正方形に近いものとなっている。方形区画を規定する溝では、北溝が幅 1.55ｍ、深さ30cm、西溝が幅 1.45ｍ、深さ50cmをそれぞれ測り、しっかりした掘り込みが確認される。それに比べて、南溝は幅 1.15ｍ、深さ30cmの規模を測るものの、溝底が東に向かって徐々に上がり、溝が中央部付近で消失している。また東溝はその中央部が土坑状のものとして確認され、幅 1.05ｍ、深さ20cmの規模を測る。そして、この溝底は北側ほど地形に沿って低くなる。南溝や東溝の構築された場所では、地山の自然礫（溶岩）の出土が目立って認められ、その露呈に対して溝の掘削も浅いようである。そのため、北側部分では、断面Ｕ字状に溝を掘り窪めて

いるが、その他は箱型に浅く幅広に掘られる場合が目立つ。

＜遺物出土状況＞

西溝の覆土中から76と77（図－48）の壺が出土している。76は溝の中央で検出されたもので、溝底より40cmほど上の覆土上面から出土している。これは、大型の複合口縁壺の口縁部で、破片化している。77は溝の北側で確認された壺で、口縁端部を欠損している。これは、溝底において正位の位置で出土している。溝底における完形土器の出土は、今回の調査では他に類例のない状況を示している。また、この壺は底部に穿孔が施されていない点も注意される。

ＳＢ５４（図－40）

調査区の東側に集中して確認されている竪穴住居群の最も北側に位置しているもので、長軸 3.3ｍ、短軸 2.6ｍを測る隅丸長方形の平面形を示し、長軸方向がＮ－ 5° 50′ －Ｗを向く。竪穴の掘り込みは残りの良い北側で深さ15cmをを測るが、南側はすでに床面まで消失している。

付属する施設としては、炉跡とピットが確認されている。炉跡は住居の中央やや東寄りに設置されている径40cmほどの地床炉である。前述した第Ⅴ次調査時の各住居の炉のように炉石は確認されていない。

ピットは５個見られるが、具体的な機能は良く分からない。なかには掘り方の一部となるものもあるようである。これらの内、その位置から南東コーナー部と南西コーナー部のものは柱穴となる可能性がある。前者は径34cm、深さ15cm、後者は径50cm、深さ20cmの大きさをそれぞれ測る。

掘り方は深さ10cm程度を測るようであるが、住居の南側で確認されない部分もある。また、掘り方内には土坑状のピットが４個認められるが、その時間的な判断がされておらず、具体的な関係は分からない。

ＳＢ５５（図－40）

ＳＢ５４の東側に位置する竪穴住居で、隅丸長方形の平面形を示す。規模は長軸 4.1ｍ、短軸 3.3ｍを測り、長軸方位はＮ－52° －Ｗを指す。この住居の南側は削平が進み、掘り方まですでに消失している。確認された北側部分では、竪穴の掘り込みが深さ12cmで壁として認められている。

床面の大半が消失しているため、炉跡などは確認されていない。

掘り方については、北側部分において、壁の最大30cm程度内側を深さ15cm程度掘り窪めていると調査時には判断されている。ただ、北西コーナー部と北東コーナーの湾曲と対応させると、２軒の竪穴住居が重複しているものとも捉えられる状況にある。掘り方の調査中に５個のピットが確認されている。柱穴になるかどうかは分からないが、最も深い北東側のものは径60cm、掘り方底面からの深さ50cmを測る。なお、ＳＢ５４とＳＢ５５の周辺にはピットの分布が目立つが、住居との相関関係については良く分からない。

ＳＢ５６（図－41）

調査区の東隅で確認されている竪穴状遺溝で、長軸 2.75ｍ、短軸 2.2ｍを測る比較的小さい竪穴である。一応、長軸方位はＮ－84° －Ｗを指す。竪穴の深さは、残りの良い北側部分で15cmを測る。

確実に伴う施設は認められない。炉などを持たないこの竪穴は、第Ⅱ次調査のＳＢ１８や第Ⅴ次調査のＳＢ３０などの小竪穴遺溝と共通している。

掘り方は、南側で床面より深さ20cm、北側で深さ８cmを測り、南側ほど深く掘り窪められている。

ＳＢ５７（図－41）

調査区の東隅で確認されている竪穴住居址で、長軸 4.8ｍ、短軸 4.2ｍの規模を測る。平面形は隅丸方形で、長軸方位はＮ－76° 50′ －Ｗを指す。竪穴の掘り込みは、住居の西側で20cmを測る。床面には住居の中央部分を中心に、焼土の分布が顕著に認められる。

付属する施設としては、炉跡と３個のピットが認められる。炉跡は径65cm、深さ30cmほどの炉穴に焼土が見られるもので、住居のほぼ中央で確認されている。ピットは、柱穴かどうか判断できない位置で確認されているもので、西側のものが径55cm、深さ12cm、北側が径78cm、深さ35cmとやや大きく、東側のものが径35～55cm、深さ15cmの規模を測る。

掘り方は住居の北東側以外ほとんど掘り窪めない形態のもので、その西側で５cm程度を測るだけである。北東側は住居のコーナー部分を中心に、床面から深さ15cmほど掘り窪められ、なかには深さ30cmほどを測る土坑状の落ち込み部分も認められる。なお、掘り方が全体的に浅いため、一部壁際に周溝の痕跡が確認されている。これは幅25cm、深さ12cmを測り、住居の南東コーナー部分において認められる。

ＳＢ58（図－42）

調査区の東側で確認されている竪穴住居で、その東側の大半が調査区域外に展開している。また、住居の東側には後世の土坑が掘り込まれている。住居の確認されている部分は、特異な楕円の平面形を示し、竪穴の掘り込みは残りの良いその北側で深さ35cm、東側で深さ15cmを測る。

付属する施設は、調査区の壁際で確認されている炉跡がある。炉跡は径80cm、深さ20cmを測る掘り方の中央に焼土の分布が認められるもので、比較的大型の炉が想定される。また、この炉には並列する２個の石による炉石が設置されている。

掘り方は、確認されている範囲では明瞭な掘り込みが確認されない。

ＳＢ59・ＳＢ60（図－42）

竪穴住居の集中する区域の南側で確認されている２軒の竪穴住居址である。その大半は調査区域外に展開するため、全容は分からない。この２軒は重複関係にあり、ＳＢ５９→ＳＢ６０で新しくなる。

ＳＢ６０は、掘り込みが浅く、その床面はすでに消失し、掘り方も住居の南西部で確認されるにすぎない状況である。住居の南西部分での掘り方の深さは６cmを測る。掘り方からは方形の平面形が想定される北西コーナー部分が確認されている。また、そのコーナー部分では径50cm、深さ40cmを測るピットが検出されている。

ＳＢ５９は、ＳＢ６０の掘り方がその床面まで及んでいるため、はっきりした床面は確認されない部分が多い。掘り方は深さ15cmほどを測り、明瞭な掘り込みを有するものであり、中央から東側にかけては更に25cmほど深く掘り窪められ、土坑状を示している。そして、その掘り方により北側コーナー部が確認され、この住居の平面形が方形であると想定させるものとなっている。

ＳＢ61（図－39、図－42）

この竪穴住居群の西側に位置する竪穴住居で、ＳＺ５３と重複する位置関係にある。ただ、重複部分に後世の溝が走るため、その新旧関係については良く分からない。規模は長軸 4.3m、短軸 3.8mを測り、平面形はやや不正な隅丸長方形を示す。長軸方位はＮ－56°50′－Ｗを指す。竪穴の掘り込みは深さ15cmほどを測り、東側ほどその残存状態が良い。

付属する施設としては、炉跡とピットが２個確認されている。炉跡は径65cm、深さ12cmの掘り方が確認されているもので、住居の中央北西寄りに位置している。炉跡の南側には長径30cmを測る偏平な炉石が設置されている。ピットは北側コーナー部と南側コーナー部でそれぞれ確認されている。前者は径35cm、深さ40cm、後者は径30cm、深さ30cmを測る。

掘り方は住居の中央を掘り残し、周囲を掘り窪める形状のもので、深さは最も大きい箇所で22cmを測る。

ＳＢ62（図－43）

ＳＢ６１の西側で確認されている掘立柱建物跡で、その掘り方が方形を基調とする柱穴４個で構成されている。この柱穴の内南側のものはＳＺ５３の北側コーナーと重複しており、それよりも新出のものと判断されている。規模は１間×１間で柱間は 3.3mと 3 mをそれぞれ測る。長軸方位はＮ－76°50′－Ｗを指す。柱穴の掘り方は一辺70～90cmを測る方形で、その東側のもので深さ30cmを測る。掘り方の底面は、ほぼ水平な面が形成され、相互にほとんど高低差を持たない。

ＳＫ63・ＳＫ64（図－43）

ＳＢ５４とＳＢ５５に近接して確認されている土坑で、一部重複して確認されている。

ＳＫ６３は、北側にやや湾曲する溝状のもので、長さ 4.35m、幅95cm、深さ20cmを測る。

ＳＫ６４は、ＳＫ６３より新しい楕円形の土坑で、長さ 2.45m、幅 1.1m、深さ55cmを測る。

これらの土坑以外にＳＢ５６やＳＢ５８の中やＳＢ５５の南側で一辺80～ 100cmほどを測る方形土坑が確認されている。この竪穴住居群よりは新しいものであるが、具体的な時期や機能については分からない。

Ⅱ. 出土遺物

滝戸遺跡で確認されている土器は、弥生時代後期～古墳時代前期が中心で、特に弥生時代のものが多いが、ここでは、それらの編年的な位置付けについて考えて見たい。対象とするのは、弥生時代後期から『駿河型S字甕』(渡井1994a)の出現する直前である古墳時代前期前葉までとする。当然、駿河型のS字甕の見られるSZ21の一括資料は、この対象から外れるものである。

A. 分　　類

対象とする年代は、途中に弥生時代から古墳時代への画期が存在しており、その器種構成も大きく違う。そのため、外来系土器の顕著な出土を見せるようになる古墳時代を主に器種分類も多彩な様相を示している。

ここでは、ある程度の出土数が確認される器種について、その分類を行い、必要に応じて出土数の少ない特徴的なものについて紹介する。

＜甕＞（図－1）

甕は、台付甕と平底甕で構成されるが、その比率は、圧倒的に台付甕が多い。台付甕は、大きく単純口縁の伝統的な台付甕と新たな出現が確認されるS字状口縁台付甕（以下S字甕）とに大別される。

台付甕A

S字甕をここで一括する。

台付甕A1

口縁部の屈曲が明瞭で、屈曲の上段が垂直気味に立上がりその端部を面取りする。口縁部の外面には押引刺突文が見られ、肩部外面にヨコハケメが施され、頸部内面のハケ調整も残る尾張のS字甕A類（赤塚1990）に相当するもの。

台付甕A2

口縁端部に面取りが認められ、頸部内面のハケ調整を大きな特徴とする。肩部外面のヨコハケメは、明瞭で、確実に施される。これは、尾張におけるS字甕B類古段階～中段階（赤塚1990）の型式に対応する。

台付甕Aは、伊勢湾地方をその故地とする外来の形式である。その特徴的な胎土や器壁の薄さから容易に判別されるものであり、成形の段階から独自の技法が駆使されていることが良く分かるものでもある。この独自性の強い形式に対して、口縁部の屈曲や口縁部外面刺突文、口縁端部の面取りなど各型式的な属性を借用するものが、この台付甕A1、台付甕A2に対応して散見される。これらは、本来の型式を逸脱するものであるが、モチーフとしたオリジナルの存在を間接的に表すものとして重要であろう。

口縁部が外反する台付甕は、弥生時代後期～古墳時代前期に普遍的な出土を示すが、その型式差や系統差により以下のように分類される。

台付甕B

口縁部が外方に開き、肩部がほとんど張らないもの。甕の外面全体が一定方向のハケメによって整形されているものが多い。この型式はほとんど口唇部に刺突文が施される。

台付甕C

甕部の肩が明らかに形成される単純口縁の台付甕。口縁部～頸部と胴部のハケメが、各部位を意識して施され、特に、口縁部～頸部に対しては、それを造作するために施され、他の部分と明瞭な違いを見せている。

台付甕C1

口縁部が緩やかに外反し、胴部が無花果型を示すもの。これには、長胴で肩部を明瞭に形成させ、頸部の湾曲がはっきりしているものもある。

台付甕C2

口縁部が緩やかに外反し、胴部が最大径をその中位に持つもの。

台付甕D

口縁に折り返し部が見られ、頸部は緩やかに外反し、胴最大径をその中位に持つもの。折り返し部には普通刺突文が施されている。

台付甕E

口縁部に1～3段の輪積み痕を残すものを一括する。

台付甕F

口縁部が鍵状に屈折するものを台付甕Fとして一括する。

台付甕F1

口縁部が頸部で屈折して外方へ開くもの。その胴部

は、緩やかに屈曲する。基本的には口径が胴径を凌駕している。

台付甕F2

口縁部が頸部で屈折して外方へ開くもの。その胴部は直線的に傾斜して開き、その最大部に緩やかな稜が形成される。この胴径は口径を凌駕することを基本としている。

台付甕G

頸部が鍵状に屈折し、甕底部に向かってやや広がる胴部で、その下位に稜を有するもの。口縁部は短く開き、その端部に刺突文が施される。

台付甕H

口径25cm以上を測る大型のもので、口縁が単純口縁のもの。

台付甕H1

台付甕C1 の大型品。

台付甕H2

台付甕C2の大型品。

台付甕I

口径25cm以上を測る大型のもので、口縁が折り返し口縁を示すもの。これは脚台部もその端部を内側に折り返すものが多い。

平底甕

器種構成の中で主体的な位置を示さないが、弥生時代後期前半を中心に出土例が若干認められる。胴最大径をその上位に持ち、口縁部が緩やかに外反するものが多い。

甕はこれら以外に、畿内系のタタキ成形甕が散見される。タタキ甕はV様式系の平底甕と庄内甕としての丸底甕の両者が認められる。

＜壺＞（図－1、図－2）

壺は、広口壺と短頸壺とが認められる。また、弥生時代後期前半には単純口縁壺などに長頸気味の壺が確認され、一型式を形成している。

広口壺

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて主体的な出土を示し、その量も多い。同時に、極めてバラエティーに富み、多彩に分類が可能な型式でもある。

広口壺A

複合口縁の壺で、他の広口壺の型式より加飾性に富んでいる。器種構成の比率はそれほど多くはないが、普遍的に認められる器種といえる。大廓式の名を有名にしている『大廓式の大型壺』（渡井1994b）は、この型式に属する。

広口壺A1

上方に開く複合部が、頸部から屈曲して形成されるもの。

広口壺A2

上方に開く複合部の内、その下端を突出させるものが付される広口壺。

広口壺A3

大型の複合口縁壺で、口縁端部内面に粘土帯を貼付させるもの。いわゆる「大廓式の大型壺」とよばれるに相当する。

広口壺B

折り返し口縁を有する壺で、折り返し部の形態により細分される。

広口壺B1

折り返し部の断面が方形～長方形で、その端部を明瞭に面取りするもの。この弥生時代後期以後、最も多く確認される型式であり、その面取り部分に縄文や貼付文が施される場合が多く、面取りに対して文様施文とする目的がはっきりしている。

広口壺B2

折り返し部の断面が方形～長方形で、その端部を明瞭に面取りするもの。口縁部はその頸部の下位に弱い屈曲部が形成され、そこから直立気味に立上がり、その端部が大きく外方に開くものを広口壺B2とする。この型式は折り返し部に施文することはあまりないようである。

広口壺B3

折り返し部の断面が長方形で、その端部を明瞭に面取りしないもの。折り返し部は形骸化して、文様を施される事はあまりない。

広口壺B4

折り返し部の断面が三角形で、その端部を幅広に面取りするもの。

広口壺B5

台付甕A

A1

A2

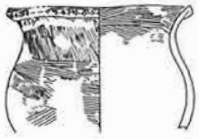
台付甕B

台付甕C

C1

C2

台付甕D



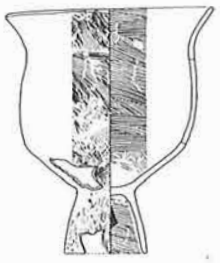
台付甕E

台付甕F

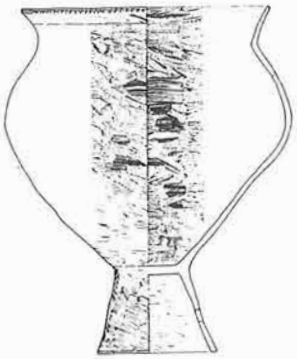
F1

F2

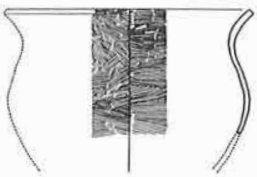
台付甕G



台付甕H

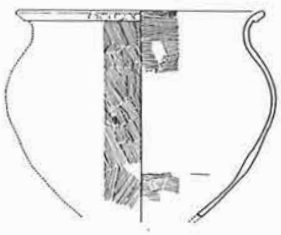


H1

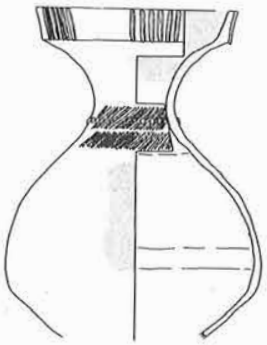


H2

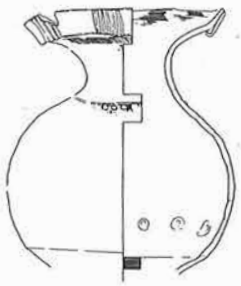
台付甕I



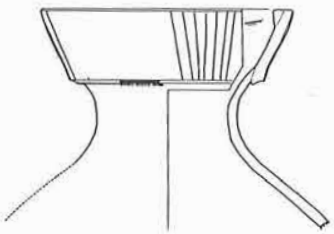
広口壺A



A1

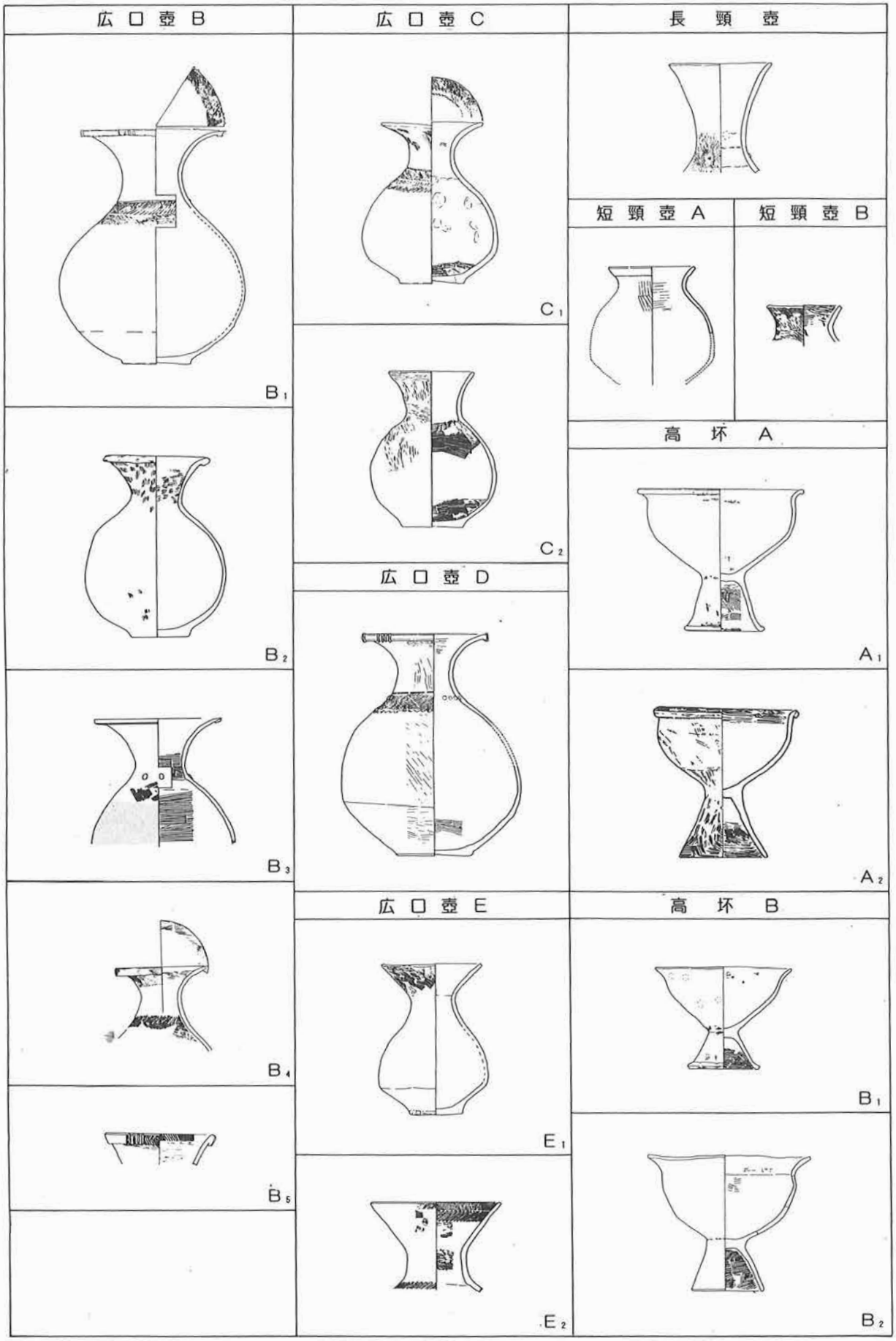


A2



A3

図－1　器種分類図①


広口壺B
広口壺C
長頸壺
短頸壺A
短頸壺B
高坏A
広口壺D
広口壺E
高坏B
B1
B2
B3
B4
B5
C1
C2
E1
E2
A1
A2
B1
B2

図－2　器種分類図②

直線的に外方に開く口縁部の端部に、幅広で断面が縦長の折り返し部が付されるもの。これは、外面に明瞭な文様帯が形成される以外に、その上端も面取りされている。出土例は、それほど多くない。

広口壺C

在来の単純口縁壺を広口壺Cとする。口縁部の型式的な特徴が乏しいため、多彩な基準によって数多い分類が可能である。ここでは口縁端部の整形の違いと頸部の型式差により2つに分けておく。

広口壺C1

頸部が緩やかに大きく外反するもの。その口縁端部を丸く仕上げるものと面取りするものが認められ、更に細分される。

広口壺C2

頸部が胴部との接合部分から一旦垂直気味に立上がり、そこから口縁端部が大きく外方へ開くもの。これは、後述する広口壺E2の口縁部形態を借用しているものと捉えられる型式であり、在地において独自の変化を示しているものである。

広口壺D

単純口縁の壺の内、その口縁端部を肥厚させて明瞭な端面を形成するもの。その端面には、棒状の貼付文や縄文が施される場合が多い。

広口壺E

単純口縁の壺で、口縁部が頸部から直線的に開くもので、その端部を面取りしている。東遠江の菊川様式では普遍的に見られる型式（中嶋1988）であり、頸部の型式差により二分される。

広口壺E1

壺の肩部から頸部の緩やかな屈曲部を経て、大きく直線かあるいは内彎気味に広がる口縁部へ展開する口縁形態のものである。

広口壺E2

口縁部は直線かあるいは内彎気味に広がり、頸部に2段の屈曲部が認められるもの。この型式が広口壺C2の成立に関わっているようである。

長頸壺

確認されている例は多くないが、今回対象とする時代の古い段階に一定の出土を示している。基本的には、単純口縁壺にだけ確認されるようで、口径に比べて頸の長く、口縁の広がりが弱い型式が相当する。

短頸壺

広口の口縁に比べて、頸部の短い壺を短頸壺とするが、胴部の形態は広口壺と類似しており識別できないものである。口縁部の型式差により二分する。

短頸壺A

短く外反する口縁に、幅の狭い断面長方形の折り返し部が付くもの。

短頸壺B

口縁は単純口縁で、その端部を面取りしている。

壺は、このように広口壺、長頸壺、短頸壺がそれぞれ認められ、多彩に型式分類される。その上、これらの壺の中には、広口壺B、広口壺C、広口壺Eなどにおいて、器高12～13cm以下の小型品が認められたり、広口壺Aにおいて、加飾性の際立つ口径25cmを越える大型品が見られたり、土器容量の面でもバラエティーに富むようになる。これらは、大小による型式的な特徴が客観的に認識されるとともに、土器様式設定の一要素を担うもので重要である。

＜高　坏＞（図－2、図－3）

弥生時代後期には出土数の少ない器種で、その器種構成比率は小さい。古墳時代になると外来系土器としてその比率を高めるようになる。また、外来の型式的な属性が如実に反映される器種であるため、時代の画期には特徴的な形式の出現が認められる。このように系統差がはっきりしているため、分類も多種多様なものとなるが、出土数の多少に関わらず、できるだけ取り上げてみたい。

高坏A

折り返し口縁が認められる坏部のもの。坏部は深い鉢状を示し、その坏底部が外方へ直線的に開き体部中ほどから直立気味に立ち上がるもの。口縁部の形態により二分する。

高坏A1

口縁部が短く外反し、その端部に折り返し部が形成されるもの。

高坏A2

口縁端部が僅かに開き、そこに折り返し部が付されるもの。

高坏B

口縁部が外反する単純口縁のもの。深い鉢状を示す坏部の形態により二分する。

高坏B1

高坏Aと同様に底部が直線的に開き、その坏体部中位から直立気味に立ち上がる坏部のもの。

高坏B2

椀状の深い鉢形を呈する坏部を付すもの。口縁部は比較的幅広の面を作り、鍔状を示す。

高坏Aと高坏Bの脚台部は、その端部を折り返すものとそうでないものとが認められるが、資料数が限定されているため、坏部との相関関係は良く分からない。ただ、高坏Aや高坏B1に見られるような体部が形成されるものの内、口縁部が明らかに外反しているものの脚台部には、外側への折り返しが施されるようであり相関関係が窺える。

高坏C

口縁端部を内外に肥厚させて端面を形成させるもの。坏部は椀状を呈し、脚部は直線状に開く台付甕のそれと同一のものが付される。

高坏D

口縁部が稜を形成して大きく外方に開き、幅広の面を形成するもので、いわゆる「鍔状口縁高坏」と称されるものの内、その端部に折り返し部が認められるものを高坏Dとする。

高坏E

高坏Dと同様に「鍔状口縁高坏」と称されるものの内、単純口縁のもの。

高坏Dと高坏Eはいづれも菊川式土器（中嶋1988）にその系譜が辿れるもので、口縁端部以外同調する型式変化を示すようである。東駿河で認められる例は、坏部が深い鉢状を示し、脚の裾部に屈曲が見られるものが多い。

高坏F

有段高坏の内、皿状の体部に外反する口縁部が付されるもので、その口径と稜径の差があまりなく、比較的浅い坏部が形成されるもの。脚部は直線的にハの字に開くか、またはラッパ状に開く。

高坏G

有段高坏の内、坏部が内彎気味に開き比較的深くなるもの。そのため、口径と稜径の差が大きくなる。これは脚台部の形態により細分される。

高坏G1

脚部が内彎気味に開くもので、坏部が深く、その下位に形成されている稜の屈曲がはっきりしているもの。

高坏G2

脚部が直線的に開くかラッパ状に外反するもの。坏部は小さな底部から大きく外方に開くようになる。

高坏H

坏部が直線的に大きく広がり、口縁部が更に外方に屈曲するもの。脚部は円錐形で、三角形の透かし孔が認められる。この型式は鮮明に赤彩されることが多い。

高坏I

坏部の下半が直線的に開き、上半が下半と僅かに角度を変えて直線かあるいは内彎して開くもの。

高坏J

有段高坏のひとつとなるもので、水平気味の底部に屈折を経て外反する口縁部が付されるもの。

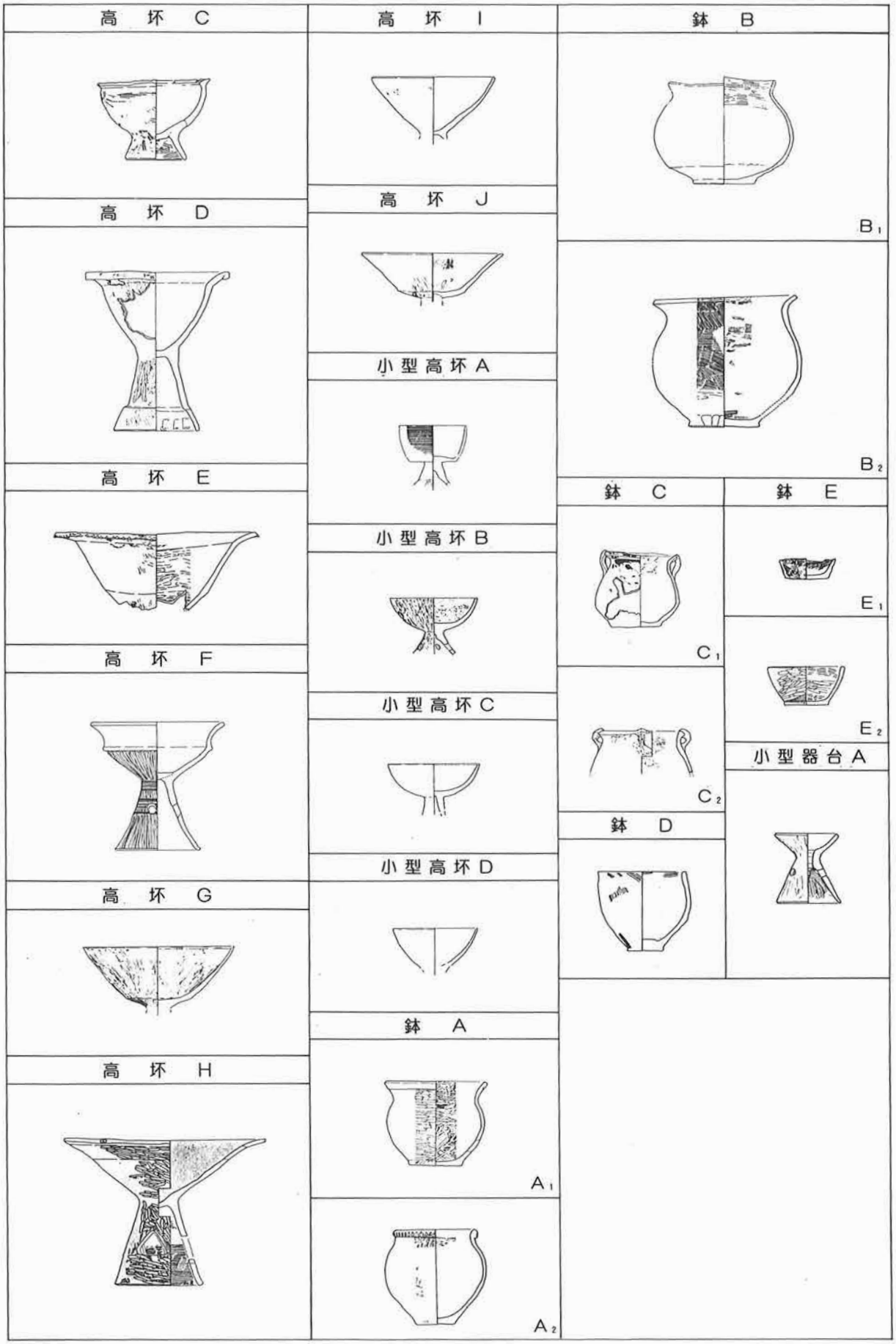
以上の高坏類は、大きく高坏D、高坏Eが菊川式土器として東遠江、高坏Fが西遠江（鈴木1991,1996）、高坏Gが東海西部（鈴木1985）、高坏Hが信濃（小山1990）、高坏Iが信濃を含めた中部高地、高坏Jが畿内（米田1991）にそれぞれその系譜を辿ることができる。

このように、対象とする時代の土器様式が、いかに他系統の土器型式より成立していたか如実に表すものとして、高坏の動向は象徴的である。

＜小型高坏＞（図－3）

高坏と同じく外来系土器として時代を規定する重要な形式である。出土数はそれほど多くはないが、その系譜が多型式に亘り、次の3型式に分類される。

小型高坏A


高　坏　C
高　坏　D
高　坏　E
高　坏　F
高　坏　G
高　坏　H
高　坏　I
高　坏　J
小型高坏A
小型高坏B
小型高坏C
小型高坏D
鉢　A
A1
A2
鉢　B
B1
B2
鉢　C
C1
C2
鉢　D
鉢　E
E1
E2
小型器台A

図－3　器種分類図③

坏部が有段のものを小型高坏Aとする。脚部の形態差により2つに分けておく。原則的にはいづれも脚径が口径を凌駕している。

小型高坏A1

有段の小型高坏の内、脚部が八の字状に開くか、あるいは途中に緩やかな屈折部を持って開くもの。

小型高坏A2

有段の小型高坏の内、脚部の途中に段が付けられ、その端部を面取りするもの。この型式は平行線文や斜線文などで加飾されるものが多い。

小型高坏B

坏部が椀形を示すもの。脚部が大きく広がるもので小型高坏A1と同様に2つに細分されるようである。これも脚径が口径を凌駕するものが多い。

小型高坏C

坏部が椀形を示すもの。脚部は屈折脚で、上半に柱状部が形成される。その下半は内彎気味に大きく開く。

小型高坏D

坏部が内彎しながら外方に開くもので、その口縁端部を尖らせるか丸く仕上げる。口径は脚径とほぼ同じかそれより大きくなるものが多い。

＜鉢＞（図－3）

壺と整形技法が類似しているため、ある程度遺存していないとそれと認識できない形式である。また、鉢状の坏部が付される高坏Aや高坏Bと類似する要素も多々認められる。口縁部の形状の違いを根拠に細分される。

鉢　A

底部が平底で、口縁部が折り返し口縁のものをこの型式とする。口縁部の形態により2つに細分する。

鉢　A1

口縁部が外反し、その端部に折り返し部が付されるもの。

鉢　A2

口縁端部が僅かに開き、そこに折り返し部が付されるもの。

鉢　B

底部が平底で、口縁部が単純口縁のものをこの型式とする。その出土数が少ない平底甕としたものとの区分がはっきりしていないが、ここでは、通常の壺の胴下半と同一の形態を示し、整形技法としてヘラミガキが施されるものを鉢としておく。

鉢　B1

外反する短い口縁の端部を丸く仕上げるもの。

鉢　B2

口縁部が外反し、その端部を面取りするもの。

鉢　C

口縁部に特徴的な把手を付けるものを鉢Cとする。把手を付ける口縁の形態により二分しておく。

鉢　C1

口縁に幅の狭い断面長方形の折り返し部が付され、その折り返し部と肩部を繋ぐようにして把手が付けられるもの。

鉢　C2

口縁部が外反し、その端部がやや肥厚する単純口縁の鉢に、把手が付されるもの。

鉢　D

底部が平底で、直線的に開く胴部が途中から弱い稜を持って直立気味に立ち上がるもの。口縁端部は面取りされている。

鉢　E

平底の底部に外方に開く体部が付される鉢類が散見される。これらは比較的小型のものが多く、粗製なものも目立つようである。これらは、以下の2つに分けておく。

鉢E1

体部が直線的に開くもの。

鉢　E2

体部が緩やかに湾曲して開くもの。

＜小型器台＞（図－3）

対象とする段階では、小型器台の出土例は極めて少ない。そのため、その動向については良く分からない点が多い。一応、2つの型式が確認できる。

小型器台A

受部が内彎しながら広がり、その端部を面取りする

もの。脚部は円錐状を示す。

小型器台B

受部は直線的に広がり、その端部に明瞭な面を形成するもの。脚部は円錐状を示す。

以上が、主な形式の型式分類であるが、途中に大きな画期があるため、土器様式を決定する型式的な要素はこれら以外にも多様な側面を持っている。ただ、それらの多くは、まだ主要な器種にならないものや単一的なものが多いのが現状である。型式分類が煩雑になるので今回は取り上げていないが、いづれその類例が増えれば、型式分類されるものも多い。例えば、手焙形土器や北陸系の『5』字口縁の甕などその例として取り上げられる。

B．遺構出土の土器

滝戸遺跡の各遺構から出土している土器は、その遺構の数に比べて、その量は相対的に多くはない。ただ、第Ⅴ次調査のＳＢ２６や第Ⅳ次調査のＳＺ４４出土資料などのように良好な一括資料も確認されており、その時間的な位置づけを可能なものとしている。ここでは、これらの資料を中心に、遺跡内での土器の構成要素を確認し、それぞれの型式が各地点でどのような傾向を示しているのか検討してみる（第１表）。

－第Ⅰ次調査－

この調査では、各遺構の残存状態が悪いことなどに起因して器種組成を示す良好な一括資料が確認されていない。この地区に関しては、土器自体の出土数も少なく、具体的な時代的な位置付けなど、遺跡の全体像を探るには、なかなか難しい状況にある。その中で、ひとつ注意される土器としては、ＳＫ１６と呼称した土坑から出土した広口壺C2が上げられる。

この土坑は、すでに遺構の解説の項で述べたように、方形周溝墓であるＳＺ０５と重複しており、それより新しいものであるとされている。調査時の見解どおりに、ＳＺ０５がある程度埋まった段階にＳＫ１６が構築されたとするならば、方形周溝墓は広口壺C2が出現する以前につくられたものであると捉えられ、方形周溝墓の時代的な下限を規定する土器型式とすることができる。

また、第Ⅰ次調査では円墳と思われるＳＺ０２の周溝中より、11（図－44）の土師器の坏が出土しているが、いわゆる「須恵器模倣坏」と呼ばれる一群で、その中でも比較的古相を示す型式である。そして、これは滝戸遺跡で築かれた円墳の年代を考えるのに極めて有効な資料とできる。

－第Ⅱ次調査－

第Ⅱ次調査も第Ⅰ次調査同様に、土器の出土数は多くない。方形周溝墓であるＳＺ１７では、台付甕Dが確認されている。また、この方形周溝墓などとの関連が指摘されるＳＢ１８とした小竪穴遺構からは、肩部に波状文と円形の刺突文が施文される小型壺の胴部破片が出土している。これは、その偏平気味の胴部や文様の構成から畿内系の壺として捉えられるものであり、庄内式段階に盛行するものであるとされている（米田1991）。この加飾性の強い壺としては、二重口縁壺が

想定されるが、この段階の類例としては、まだこの駿河の地域で他には確認されていない。

－第Ⅴ次調査－

遺構が密集するこの調査区では、ＳＺ２１、ＳＢ２６、ＳＢ２８などにおいて良好な一括資料が確認されている。

ＳＺ２１では、西溝において在地で創出された駿河型のＳ字甕の新相のものが出土し、東溝において小型精製土器のひとつである小型坩と小型器台、それから籠目を残す東海西部系の二重口縁壺（比田井1995)の出土が認められている。

重複関係を示すＳＢ２６、ＳＢ２７、ＳＢ２８からは、各型式がそれぞれ目立った出土を示し、時間差として認識できる状況にある。

最も古いＳＢ２８では、台付甕C2、広口壺C1、短頸壺Bからなる組成が確認される。台付甕C2 は胴径と口径がほぼ同一の胴部の張りが弱い型式のものである。また、短頸壺Bは、比較的口径の広い型式のものである。

ＳＢ２７は、その大半が後出のＳＢ２６に破壊されており、その残りは悪いが、無文の広口壺C1の出土が認められている。また、この広口壺C1 とする口縁部と一緒に出土し、それの胴部と思われる破片は、胴部の中位にその最大径を持つ、やや球胴気味の大型破片である。

この第Ⅴ次調査で最も良好な一括資料が確認されているＳＢ２６では、台付甕C2、広口壺A1、高坏E、小型の鉢A1などが出土している。また、これ以外に胴部最大径をその下位に持ち、そこに弱い稜線が認められる壺の胴部も同時に出土している。更にＳＢ２６の覆土上面においては、口縁部が「く」字状に屈折する小型の鉢の出土が認められる。鉢B1との類似性も指摘されるが、小型である点や壺の胴下半と同一の形状を示す鉢B1に対して、独自性が窺われる器形である点など別の型式が想定されるものである。これは、その出土位置や型式的な相違などから、その他のＳＢ２６出土の土器群とは直接共伴するものではないと捉えられ、その一括資料には含められないものである。因みに、この小型鉢は、その出土地点から考えると、ＳＢ２６に隣接するＳＺ２１との関連が想定され、小型土器が盛行するＳＺ２１の時代のものとした方が、より認識されやすいように思われる。

これらの遺構の他に、ＳＢ２６を切っているＳＢ２２からは、台付甕C2と高坏Cが共伴して出土しており、また、ＳＢ３２やＳＢ３９においては台付甕C2の出土が認められている。

－第Ⅳ次調査－

第Ⅳ次調査では、方形周溝墓からの出土土器が目立っており、ＳＺ４４やＳＺ５３において良好な一括資料が確認されている。ただ、方形周溝墓の性格上、それらの同時性にはなかなか問題があり、容易に判断されるものでもない。各土器の出土位置や出土状況に十分注意する必要があろう。

ＳＺ４４では南溝の溝内土坑中から台付甕C1、台付甕C3、広口壺B1の出土が認められる。これらは甕類が土坑の下層で出土し、壺がその上層から出土している。また、東溝の覆土中からは台付甕Dの口縁部破片が出土している。

ＳＺ５３からは、その北溝で広口壺A2の大型品が確認されている。

Ⅲ. 土器編年

A. 基準資料

富士、富士宮地区の資料を中心として、東駿河に所在する各遺跡の基準なる一括資料を第1表と第2表に提示する。提示する内容は、滝戸遺跡の型式分類に則したものであり、主要器種である台付甕と広口壺、あるいは外来系土器と認識されやすい高坏や小型高坏を別枠に抽出したものである。

この表を見ると、まず台付甕では、台付甕Bと台付甕Cが主体的な出土を示していることが良く分かる。そして、それに続いて台付甕F1の出土例が目立っていることも指摘できそうである。これとは反対に、胴部上半がほとんど張らない台付甕F2 や台付甕Gなどの出土は、比較的少ない。台付甕F2は西遠江、台付甕Gは静清平野を中心とした西駿河をそらぞれその故地にしている外来系土器であるが、これらの受容は積極的行われていなかった様子が分かる。

また、台付甕Aについては、この丸ヶ谷戸遺跡（富士宮市教育委員会1991)の他に上石敷遺跡（富士宮市教育委員会1985)、月の輪平遺跡（富士宮市教育委員会1981,1982)、泉遺跡（富士宮市教育委員会1993)などの潤井川中流域の諸遺跡や大廓遺跡（小野、笹津1969)、夏梅木遺跡（註1)、山木遺跡（註2）などでS字甕の古相を示すそのA類、B類の出土が認められ、更に月の輪平遺跡第43号住居址や御殿川流域遺跡群の中島西原田遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所1994)などにおいては、S字甕A類をモチーフとして在地の特異な台付甕が創出されている。これらの諸例は、あくまでも大廓様式段階のもので、弥生時代まで溯る例は認められない。このように、外来系土器のS字甕である台付甕Aの出現は、その時代性を反映している型式であるため、弥生時代後期から古墳時代前期前葉までを網羅して時代設定をすると、時間的に偏った出土を示し、その数も限られてくる。今回の基準資料の中では丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡02出土資料が、遺構出土の一括資料として取り上げられる。

広口壺では、広口壺Bと広口壺Cが主体的な出土を示すことが分かるが、それぞれの型式内容もさらに細分され多彩な状況を示している。そして、それらの中でも広口壺B1、広口壺B3、広口壺C1が目立った出土を示している。

広口壺Aは、加飾性の強い在地系の壺であるが、その出土例は広口壺Bや広口壺Cなどより少なく、その器種構成比率も小さく、竪穴住居址からの一括資料としては恵まれていない。広口壺Aについては、壺自体の用途や使用方法による他の型式との違いの有無などから、改めて検討しなければならない要素が多い。そして、特徴的な大型壺である広口壺A3が出現する要因についても、他の広口壺に無い性質が作用していたと思われる。ただ、その具体的な内容についてはまだ良く分からない。

現状で、この広口壺A3の出現は大廓様式段階を溯る例を知られていない。溯る可能性があるものとしては口縁端部内面の突帯が未発達で、複合部外面を縄文と棒状の貼付文で彩る非常に加飾に富んだ型式的に古相を示す破片資料が散見される。ただ、具体的な時間設定がされる類例は、まだ認められない。いずれにしても、広口壺A3が盛行するのを大廓様式でのことで、この様式の主要な一要素を形成している。

広口壺Aの動向を探ると、北神馬土手遺跡1号住居址の一括資料（杉山1979)は極めて重要であろう。この住居址から出土している壺は、その口縁部が11個体公表されているが、その内訳は、広口壺A1が4点、広口壺A2が2点、広口壺A3 が1点、広口壺B1が1点、広口壺B2が1点からなり、その他に広口壺A2との相関関係が窺える複合部の屈折が弱い特異な型式のものが1点確認されている。このように、北神馬土手遺跡例は、竪穴住居出土の広口壺Aとしての重要性と共にその数量や型式差の多さ、更にその中に広口壺A3が含まれるなど、その特殊性が際立っている。

高坏は、バラエティーに富んだ型式分類がされるが、その出土数はそれほど多くない。これらは、高坏Aと高坏Bの在地系の高坏、高坏Dや高坏Eの菊川様式系の高坏、高坏Gとした尾張系の高坏とそれ以外のものに大きく別けて捉えられるが、主要な3つの系統について、その共伴例が認められない点は注意されよう。

特に、尾張を中心とした伊勢湾地方をその故地とする高坏Gが出土している丸ヶ谷戸遺跡や上石敷遺跡などは、台付甕Aや小型高坏なども認められ、大きくその前段階とは器種組成を違えている点も注意され、時代差と認識される大きな要素となっている。

また、八兵衛洞遺跡C－9号住居址（沼津市教育委員会1981)の場合は、この高坏Gと在来系の台付甕である台付甕Cとの共伴が知られる。この高坏は搬入品（註3）と目されるもので、この遺跡の中では極めて特異なものである。

これらの主要器種以外のものでは、短頸壺のAとBが雌鹿塚遺跡（沼津市教育委員会1990）、豆生田遺跡（沼津市教育委員会1989）、瀬戸川遺跡（清水町教育委員会1993）などの平野部の遺跡を主体として、一定量の出土が確認されている。

以上が基準資料における各型式の出土状況の概要である。次に、これらの一括資料の中で、出土頻度が比較的高く普遍的に認められる台付甕B、台付甕C、台付甕Fの具体的な組成について少し検討してみる。

まず、台付甕Bであるが、滝戸遺跡においてはSB26で台付甕Bの出土が確認されている。この住居は他の竪穴住居との重複関係を持ち、他の竪穴住居を切り、また切られる関係を示し、その切れ合い関係から集落の中段階に位置づけられる竪穴住居である。

雌鹿塚遺跡第1号住居址では、口縁部に輪積み痕を残す台付甕Eと台付甕Bとの共伴が知られる。第12号住居址においては、台付甕Bだけが確認されているが、この住居と重複関係にある新出の住居で、口縁部に把手を持つ特徴的な鉢C1 の出土が認められる第13号住居址における台付甕は、台付甕C2に変わっている。また、短頸壺もBからAへと変わっている。第31号住居址と第1号土坑は台付甕Bと口縁部が鍵状に屈折する台付甕Fとの共伴例である。特に、前者は台付甕F2との共伴例であり重要であろう。同様に、豆生田遺跡72号住居址でも台付甕Bと台付甕F1との共伴が知られる。雌鹿塚遺跡竪穴状遺構－1では、台付甕Bと西駿河系の台付甕G、鍔状口縁高坏と称される菊川様式系の高坏Dとが共伴しており、外来系土器の目立った様子が知られる。

次に、台付甕Bと台付甕Cとの共伴例について検討する。確認されている8例の中では、6例が台付甕Bと台付甕C2との共伴例で、この組み合わせが目立っている。但し、良好な一括資料に恵まれている瀬戸川遺跡第24住居址では、台付甕Bと台付甕C1が確認されている。そして、これ以外に台付甕F1 や菊川様式系の広口壺B2や広口壺E2、高坏Dとその影響が窺える広口壺C2の出土が認められ、菊川様式の色彩が強い型式組成を示している。

この台付甕Bは、単独の場合と台付甕Cとの組み合わせのいづれも、それに関連する高坏は、出土土器の時間幅が大きく詳細のよく分からない御幸町遺跡（沼津市教育委員会1979,1980,1981）SD－1例を除くと、高坏Dと高坏Eだけである。在来系である高坏Aや高坏Bあるいは高坏Cとの共伴例は知られない。

台付甕Bを含まない台付甕Cを中心とした組成は、一括資料の中でもその類例は多い。そして、台付甕Bに関連した資料を抽出した遺跡が、雌鹿塚遺跡、豆生田遺跡、瀬戸川遺跡など沖積平野に立地しているものを中心としているのに対して、台付甕Cに関連しているものは、月の輪上遺跡（富士宮市教育委員会1981,182,1994,1996）や八兵衛洞遺跡など丘陵上の遺跡の名が上がるようになる。

台付甕Cについては、まず台付甕C1と台付甕C2の出土数にそれほど差がなく、両者とも普遍的に存在する型式であると言える。そして、月の輪上遺跡竪穴住居跡53や豆生田遺跡21号住居址あるいは八兵衛洞遺跡C－9号住居址、北神馬土手遺跡1号住居址などで認められるように、この2つの型式は共伴している類例が多く認められる。つまり、これは両者が時間差ではなく、同時期の型式差として認識されることを表している。

月の輪上遺跡竪穴住居跡53では、台付甕C1と台付甕C2の共伴が知られるが、さらに台付甕C1 中には肩部が強調され、その下の胴部が長胴となるものも認められ、バラエティーに富む内容となっている。

雌鹿塚遺跡第15号住居跡や豆生田遺跡43号住居址などにおいては、台付甕C2 と台付甕Eとの共伴が知られる。雌鹿塚遺跡第15号住居跡では、これに箱清水様式系の高坏Hが加わっている。

台付甕Fとの関係では、雌鹿塚遺跡第35号住居跡、豆生田遺跡21号住居址、八兵衛洞B－28号住居址、瀬戸川遺跡第4土坑、下長窪上野遺跡第12住居址（長泉町教育委員会1979）などで台付甕F1と台付甕C2との共伴例が知られる。このように、台付甕Cとの関係では台付甕F1との共伴例は多く認められるものの、台付甕Bと共伴する台付甕F2との関係が窺えるものは確認されない。

この事象のほかに、下長窪上野遺跡第12住居址でこれらの台付甕と広口壺B2及び小型高坏Aとが共に出土している点も重要である。

以上の台付甕を軸にした型式組成をまとめると、台付甕B－台付甕E－台付甕F2の関連と台付甕C1－台付甕C2－台付甕F1 の関連が窺える。また、台付甕Bについては、高坏Cあるいは高坏Eとの関連も指摘できそうである。

遺構名	台付甕	広口壺	高坏	小型高坏	その他
SZ02					須恵器模倣坏
SK16		C2			
SZ17	D				
SB18					畿内系小型壺
SZ21	A				小型坩　小型器台　二重口縁壺
SB22	C2		C		
SB26	B	A1	E		鉢A1
SB27		C1			
SB28	C2	C1			短頸壺B
SB32	C2				
SB39	C2				
SZ44	C1　D	B1			
SZ53		A2			

遺構名	台付甕	広口壺	高坏	小型高坏	その他
月の輪上　竪穴住居跡53	C1 C2	B1			鉢E1
竪穴住居跡58		A2 B1 C1 E1			短頸壺A　短頸壺B　鉢B1
溝状遺構20	C1 H2 I	B3 C1 D E2			鉢A2　鉢B2
溝状遺構01	C1 C2	A1 B1 B3 C1			鉢D
上石敷　K－4号竪穴住居跡	H2		G1	C D	平底甕　高坏　小型高坏　小型鉢
M－1溝状遺構	C1 C2 F1		G1		短頸壺B　平底甕(ﾀﾀｷ)　高坏 鉢E2(ﾀﾀｷ)　小型鉢
丸ケ谷戸　前方後方形周溝墓		A1 A2 B	G1 I	A	ヒサゴ壺　手焙型土器　他
竪穴住居跡02	AC2 H F1		G1 J	A	平底甕(ﾀﾀｷ) 小型鉢　他
権現　第1号住居跡		B1 B3 C1 E1	A1 or B1		高坏
泉　溝状遺構1	B C2 F	B1 B4 C1			短頸壺B
的場　A住居跡		B1 B3			長頸壺
雌鹿塚　第1号住居址	B E	B1			鉢A1
第12号住居址	B	B1 B3 C1			短頸壺B
第13号住居址	C2 F1	B1 B5			短頸壺A　鉢C1
第15号住居址	C2 E	B1	H		鉢B1
第28号住居址	B	B1 B2 C1			鉢A1
第31号住居址	C2 F2	A2 B5			
第35号住居址	C2 F1	B3			
第1号土坑	B E F1	B1 C1			短頸壺A
竪穴状遺構－1	B G	C1	D		鉢B2

第1表　基準資料一覧表 ①

遺構名	台付甕	広口壺	高坏	小型高坏	その他
豆生田 21号住居址	C1 C2 F1	B1			
32号住居址	B C2	C1 D			
43号住居址	C2 E	B3			
72号住居址	B C2 F1	C1			短頸壺B 鉢B
八兵衛洞 A－19号住居址	F1	C1			
B－2号住居址		B3 C1			
B－28号住居址	C1 C2				
C－5号住居址	C1 C2	B1			
C－9号住居址	C1 C2		G1		
御幸町 136号住居址	B C	B1 B3			鉢A1
SD－1	C2 D E	A1 A2 B3	A1 B1		長頸壺 鉢B2
目黒身 第1排水溝	E F1	A1 A2 B1 C1			短頸壺A 短頸壺B 鉢A1
二本松 1号周溝墓		A2 B1 B3 C1 E1 E2	A2		内彎口縁台付甕 短頸壺B
北神馬土手 1号住居址	C1 C2 H2	A1 A2 A3 B1 B3 E2			
瀬戸川 第1住居址		C1			平底甕
第11住居址	C1		E		短頸壺B
第18住居址	B C2	C1			
第24住居址	B C1 F1	A1 B1 B3 C1 E2	D		鉢B2 鉢D
第1土坑	B C2				鉢A2
第4土坑	C1 C2 F2				
下長窪上野 第12住居址	C2 F1	B2		A	内彎口縁台付甕
第16住居址	C2 ?			D	

第2表　基準資料一覧表 ②

B．台付甕の型式変化

台付甕Bの型式変化　（図－5）

滝戸遺跡や月の輪上遺跡などの潤井川流域の遺跡では、出土数がそれほど多くないため、その実態が良く分からない台付甕Bは、近年、沖積平野部の調査によって、その内容が徐々に分かるようになっている。ここでは、在来系の台付甕として台付甕Cと共に主体的な出土を示す台付甕Bについての型式分類とその変化について検討する。

台付甕Bはその胴部の形態から以下の4つに細分される（図－4）。

台付甕B1

口縁部の内外面をはっきりしたヨコハケメで整形しているものを台付甕B1としておく。胴部はその最大径をその上半に持つ無花果型を示す。その外面の整形は、上半部において口縁部同様にヨコ及びナナメハケメによっている。

台付甕B2

胴部はその最大径を上半部に持ち、無花果型の形態を示すもの。

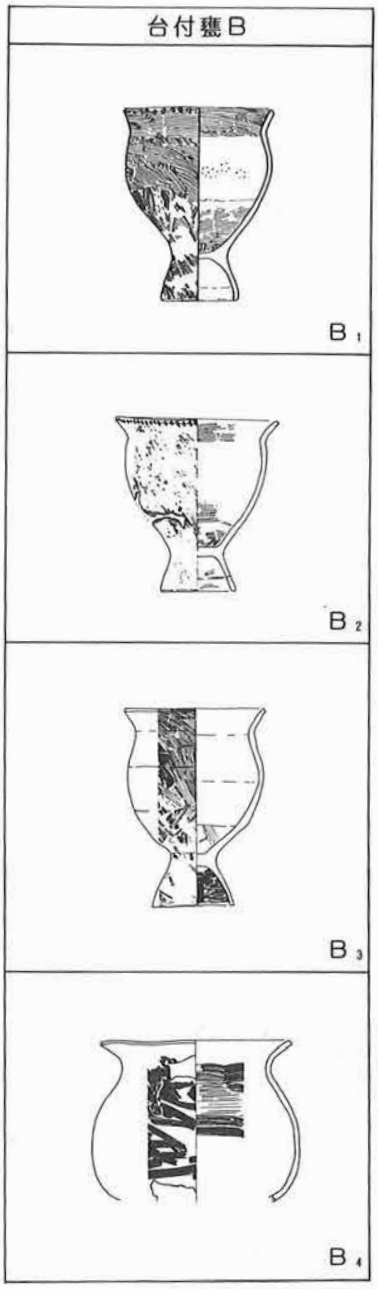
台付甕B3

胴部の最大径がその中位にあり、球胴を指向しているもの。

台付甕B4

胴部の最大径がその下位にあり、やや下脹れ気味を呈するもの。

この4つに細分した台付甕Bは、3段階の変遷が辿れる。主体となるのは台付甕B2と台付甕B3であり、他の型式の動向は良く分からない。また、最も盛行するのは段階1～段階2で、以後は減少傾向にあり段階3か段階4を以て終焉を迎えるようである。



図－4　台付甕B分類図

－段階1－

資料的に恵まれていない段階であるため、その内容は良く分からない。いづれも弥生時代中期の系譜を引く型式と認識される台付甕B1、台付甕B2、台付甕B4が確認される。口縁部が外面ヨコハケで、緩やかに外傾する台付甕B1は弥生時代中期からの系譜が辿れるもの、西駿河や東遠江など当地より西側の地域でその類例が散見される。この台付甕B1や台付甕B2 は、共に無花果型の胴部で胴上位で弱い張りを示す肩部が作られ、口径は胴径と同じかそれを凌駕するもので占められる。この段階の台付甕Bは、内面を全域か口縁部から胴部にかけての広い範囲にヨコハケメを施すものが多い。また、脚台部は内彎しながら広がるものと直線的に広がるものが確認される。なお、口径12～13㎝程度の小型品が、やや目立った出土を示している。

この段階には台付甕B3の祖形となるものの出現が認められる。これは、口縁部外面がヨコ～ナナメハケ、胴部外面がヨコ～タテハケにより調整されおり、台付甕B1と台付甕B2の整形技法が融合したと思われる型式であり、その胴部の最大径は、胴部中位に持ち、口縁部は直立気味で僅かに外傾し、頸部の屈曲が不明瞭なものである。

－段階２－

台付甕B2と台付甕B3が主体を占める。台付甕B1と台付甕B4はこの段階で消失するようである。台付甕B2は口径、胴径とも広がり、甕部が大型化する。胴部の張りもやや増し、緩やかな曲線を描くようになる。台付甕B3 は、外面がタテハケにより整形されるものに定型化する。この段階のものは、口縁部が直立気味に開くか、僅かに外傾するものが多く、頸部の屈曲も緩やかである。その胴部は、その径が口径と同じかそれを凌駕するもので占められ、長胴を呈するものが多い。この台付甕Bの内面整形として、ヨコハケメを口縁部と底部に残し、胴部をナデ整形するものが増える。

台付甕B1は、大型品で脚台部に比べて甕部を大きく作るものが確認される。

台付甕B4は、胴部の張りが弱まり、口縁部の屈曲も緩やかになる。この段階以後台付甕B3と識別できなくなる。

－段階３－

前段階同様に台付甕B2と台付甕B3の２系統が確認される。両者とも胴部が球胴あるいは偏平なものに変化する。台付甕B2 は胴径が増し、口径と同じ位のものが多くなり、胴部の張りが強調されるようになる。口縁部は直立気味か、僅かに外傾するもので、頸部もその屈曲は弱い。台付甕B3は胴径が口径を凌駕するものが多くなり、球胴化が進む。口縁部は台付甕B2と同様にその頸部の屈曲は弱い。

－段階４－

肩部の張りが強まる台付甕B3がこの段階まで残る可能性があるが、はっきりしない。肩部の形成や胴部の張りが強まるという総体的な台付甕の変化の中で、胴部整形の主体は、口縁部と胴部とを違える台付甕Cへと明らかな移行を示す。

台付甕Cの型式変化　（図－６、図－７）

－段階１－

頸部～口縁部を作り出すために、その外面にタテ～ナナメハケを施し、胴部とは明らかに異なる造作を行うものを台付甕Cとした。段階１において、胴部無花果型の台付甕C1 と胴部最大径をその中位に持つ台付甕C2 との両型式が認められる。ただ、台付甕Bに比べてその数は少なく、その具体的な内容はまだ良く分からない。

台付甕C1 は、口縁部が屈曲が明瞭で、肩部が発達したものが確認される。口縁部の開きは大きく、口径が胴径を凌駕するのが一般的である。台付甕C2も口縁部～肩部の屈曲が明瞭で、その胴部の張りも強いものと口縁部が外反し胴部がほとんど張らないものとが確認されるが、いづれも胴部の最大径を中位よりやや下位に持つ。台付甕Cのハケ調整は、口縁部外面をタテ～ナナメで、胴部にそれと方向を違えるナナメハケを施す共通した整形方法が認められる。ただし、内面は、台付甕C1と台付甕C2の中で胴部の張らないものが、口縁部にヨコハケを残すのに対して、台付甕C2の中で胴部の張りが強いものは、内面全域をヨコハケ調整している。これは内外面とも胴部中位の張りを出すためのハケ調整と捉えられるものであるが、それをナデ消すことなく全面に残している。この段階の台付甕Cは、その口唇部に刺突文を施すものが多い。

－段階２－

前段階同様に台付甕C1と台付甕C2で構成される。この内、台付甕C1の中には長胴を指向するものが確認されるようになる。

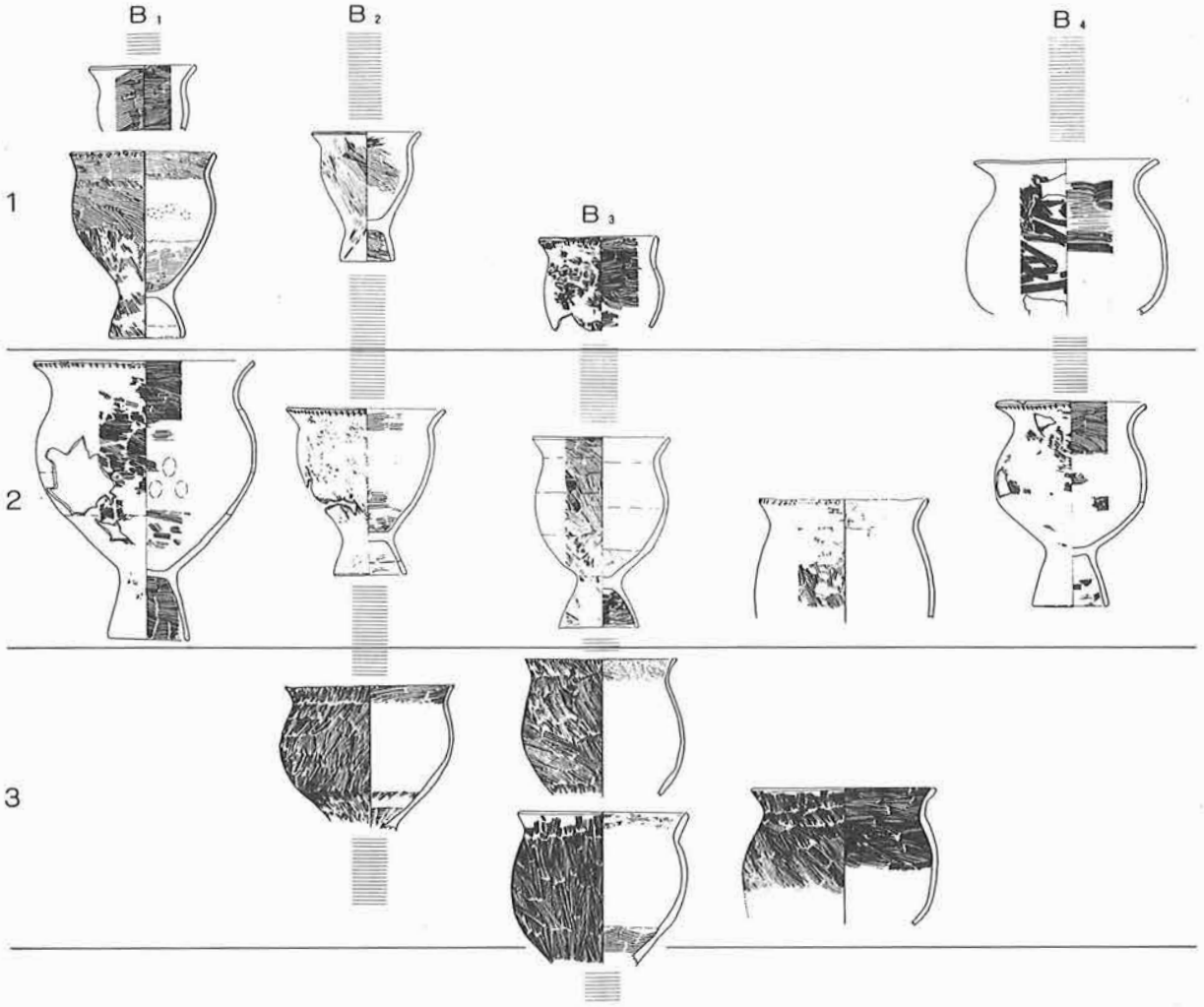
台付甕C1 は口縁部の屈曲が弱くなるとともに、肩部が張りが弱くなる。口径は胴径より大きいものが一般的である。台付甕C2は胴最大径をその中位に持ち、球胴を呈するようになる。そして、この台付甕C2 を中心として、前段階同様に内面全面をハケ調整するものが多く認められる。

この段階では、非常に粗いハケ調整が特徴的な菊川式系の台付甕の出現が確認される。この台付甕は、その外面調整であるハケメを口縁部タテ、胴部上半ヨコとするもので、はっきりとその方向を違えている。また、この段階の多くの台付甕C2がその内面全域にハケメを残すのに対して、内面の一部にハケメをナデ消している部分が確認される。

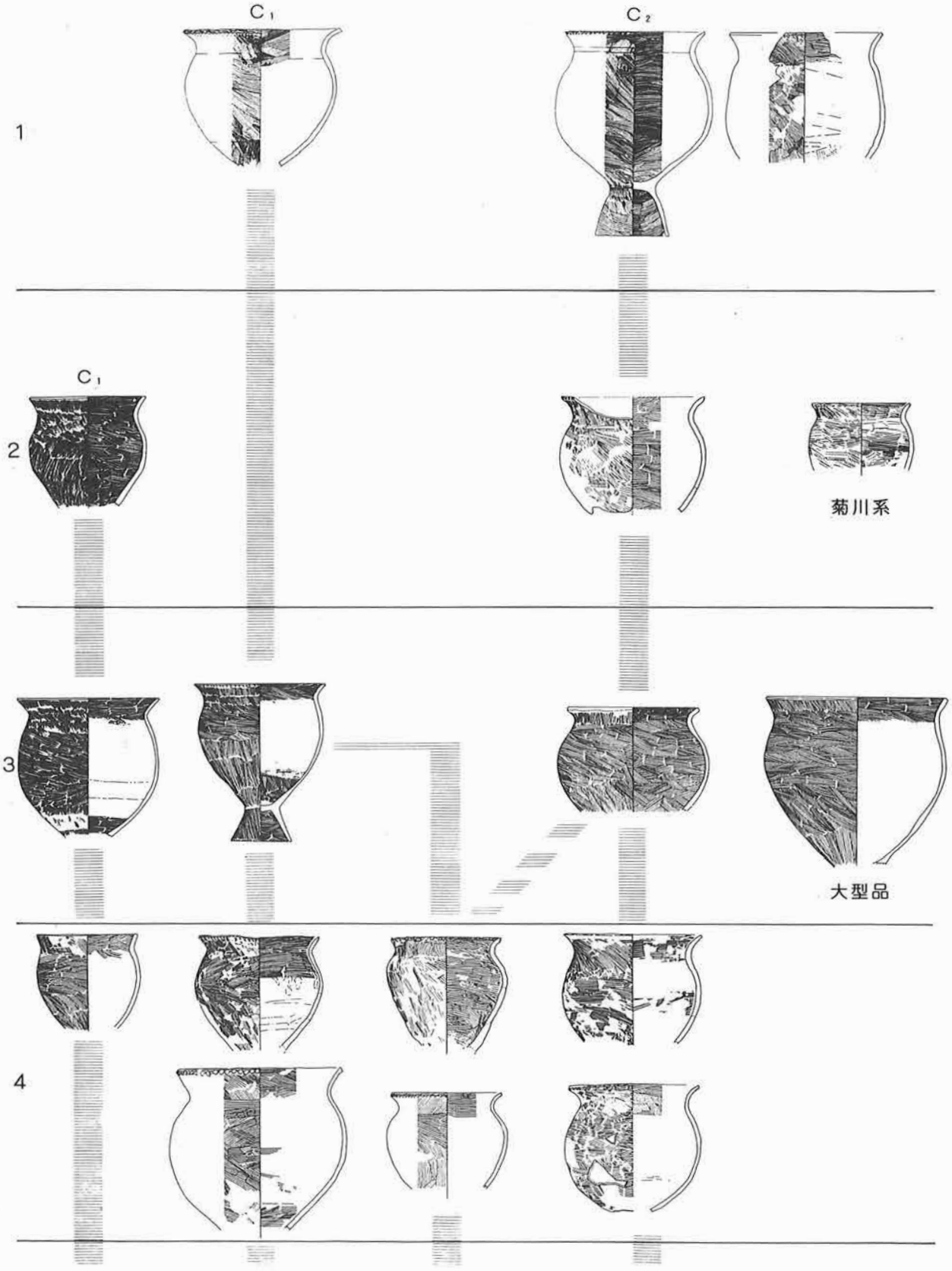
－段階３－

台付甕Cの組成上では、前段階と変わらない。ただし、台付甕Cの大型品である台付甕Hの出現が明らかになる。

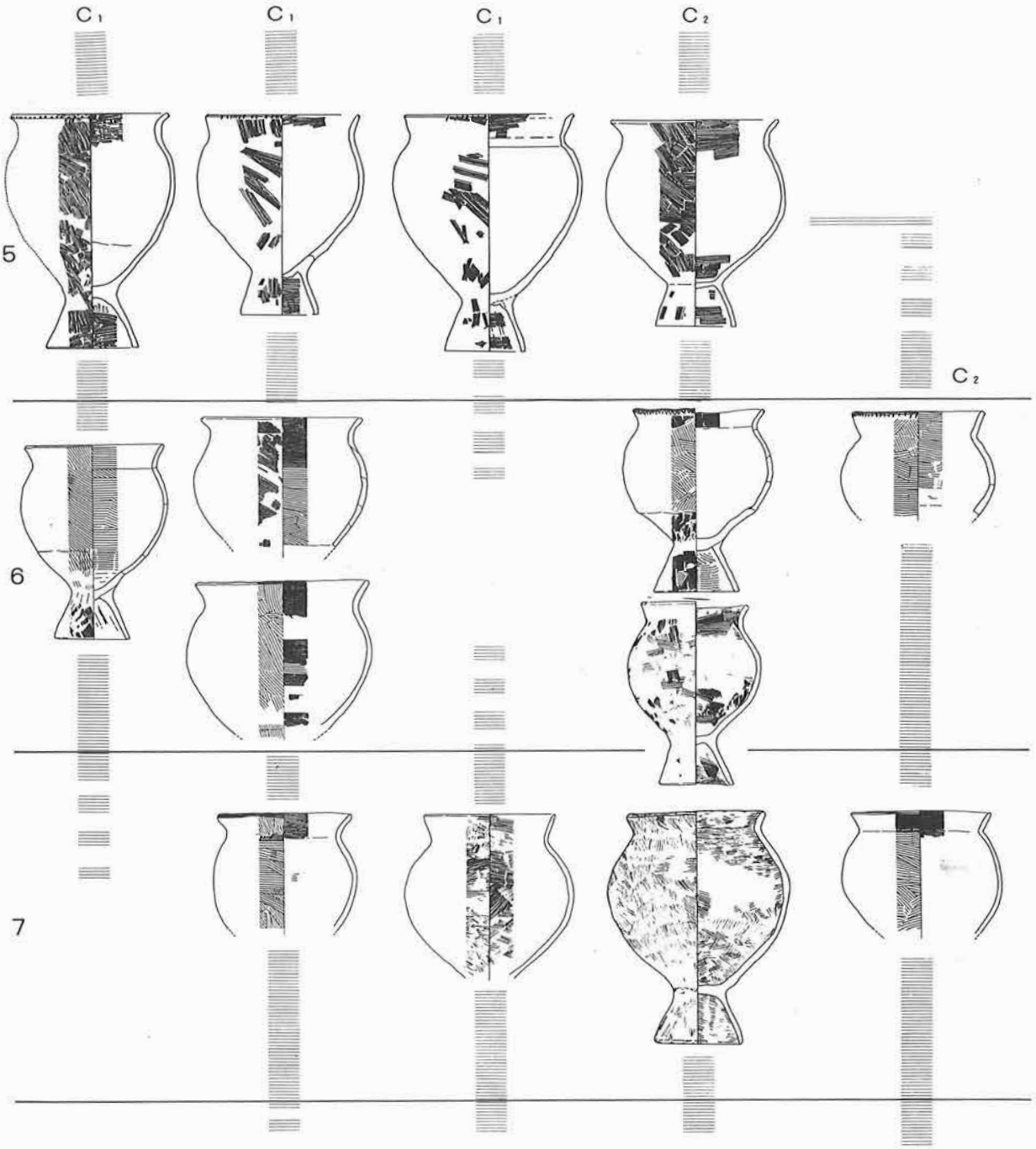
台付甕C1は肩部の張りが弱くなり、口縁部もやや鍵状を呈するものに変化するが、後述する台付甕Fと



図－5　台付甕の変化①



図－6　台付甕の変化②



図－7　台付甕の変化③

型式的に類似し、識別しにくい部分が多い。胴部の張りが口径を下まわる台付甕F1に対して胴部の張りが徐々に強調される台付甕C1とする違いが見られるが、この段階は、その違いが不明瞭である。

この台付甕C1 には前段階同様に長胴気味のものも確認される。これらは、いづれも内面の口縁部と胴部下位にハケメを残し、胴部の大半をナデ整形により調整するものに統一されるようになる。

台付甕C2は、胴部が偏平になり胴部の張りがより強調される。そのため口縁部の屈曲も強いものが目立つ。更に、その胴部を造作するため、内面の全面をハケ調整している。このように、胴部の形態の違いにより、台付甕C1と台付甕C2とでは、異なる内面の整形が確認される。ただ、その外面の整形は、共通しており、口縁部のタテハケと胴部上半のヨコハケからなる技法が確立し盛行する。

－段階4 －

大きく台付甕Cとしては、台付甕C1 と台付甕C2の2系統に分かれることに変化はないが、台付甕C1の型式分化が進み、バラエティーに富んだ内容を示すようになる。

台付甕C1は肩部の張りが増し、口径と胴径が同じ位の数値になるもの多くなる。また、口縁部は肩部の張りが目立つようになる事に相関して、やや直立気味に付されるようになる。それは、特に長胴気味のものでは顕著な変化として認められる。

この段階に台付甕C1からは、長胴気味で、肩部や口縁部の屈曲を強調させるものが創出される。この型式は、肩部をはっきり造作しているため、その張りも目立ち、胴部の上位にある胴最大径が口径を凌駕することを原則としている。この型式は胴最大径を胴部の上位に持つ事で、台付甕C1の一群として位置づけられるが、口縁部の屈曲やそこから肩部への展開などは台付甕C2の形状と類似しており、その型式的な要素も指摘できる。そのため、初源的なものは前段階の台付甕C2 の大きな特徴であった内面全面ハケ調整を採用している。

台付甕C2は、球形胴部に戻り、段階2のものと類似した形状になる。

段階4の台付甕Cは、口縁部分のその作りのやや複雑な箇所で、その内面にハケメを残す以外は、胴部下位に残すものが一部見られるものの、その胴部内面の整形をナデで仕上げるようになる。これは前段階において台付甕C1に採用された技法であるが、この段階より台付甕C2においても採用され、盛行する。つまり、この段階で、台付甕Cにおいて外面の各部位におけるハケメを施す方向を違え、内面の口縁部と底部以外をナデ仕上げするという一定の技法が確立したと言える。そのため、内面を全面ハケ調整するものはその数を極端に減らす。この技法が採用されることにより、台付甕C2における段階2の型式と段階4のそれとを分けることができるようである。

これらの事象以外では、この段階に、口縁端部の刺突文の有無によらず、そこをヨコナデするものが確認されるようになる。

－段階5 －

各型式は前段階を踏襲する。器高に対して、肩部から口縁部にかけての開きが大きくなるとともに、口縁部が直立気味に外方に開くものが台付甕C全体に採用される。また、この段階より、その容量の大きなものが目立つようになり、台付甕Cの大型化が図られるようになる。

－段階6 －

この段階は、台付甕C1と台付甕C2 の2系統に口縁部が「く」字状に屈折するものが新たに加わる。これをここでは、胴部の中位にその最大径を持つ事から、台付甕C2の一つとして捉えているが、良く分からないその系譜が明らかになれば、新たな型式として認定される可能性の強い型式と考えられる。

台付甕C1 は、前段階と器形的にあまり変化がないが、長胴気味のものがその数を減らし、ほとんど見られなくなる。

この長胴甕の減少は、台付甕全体に認められる球胴化傾向を反映したものと捉えられるが、特に、それは台付甕C2 において顕著な変化として確認される。台付甕C2はこの段階になると張りが強い球形の胴部に対して、頸部の締まりを強くし肩部の強調されたものが出現するようになる。台付甕C2はこのように胴部の張りが強く、胴径が口径を凌駕するものと、前段階から続く口径と胴径があまり変わらないものとの2つの型式が確認されるようになる。

段階6では、各型式とも新出の要素が確認されるようになり、器形的なバラエティーが認められるが、調整技法の面でも新たな展開を示すようになる。この段階になると、前段階の口縁部の屈曲に合わせたその内

外面をハケ整形し、胴部の外面は口縁部と方向を違えたハケを施し、その内面はナデ整形で仕上げる一定の方法が崩れ、段階１～３に盛行した胴部内面のハケ整形が復活したり、外面のハケ整形も口縁部タテ、胴部ヨコとする方向が曖昧になり、その区別が不明瞭となるものが登場する。この中には、口縁部外面のタテハケメが肩部まで及び、口縁部に対するタテハケメの原理が消失してものもある。

－段階７－

台付甕の球胴化が進み、胴最大径をその上位に持つ台付甕Ｃ1 はその数が減り、この段階で消失しているようである。この台付甕Ｃ1の長胴気味のものについては、すでにこれ以前に消失しているようで、確認されなくなる。ただ、口縁部が直立気味に立ち上がるものは、これらとは反対にその数を増やし、独自の変化を示すようになる。これは、台付甕Ｃ1の中で段階５まで確認された肩部を強調させ無花果型の胴部を示すものの型式的な要素を受け継いでいる。が、口径を胴径に対して大きく狭め、その口縁部を規格的に幅広く直立気味に立たせる点は、新出の要素として捉えられもので、新たな型式と認定することも可能である。ただ、ここでは台付甕Ｃ1の一群として暫定的に捉えておく。

台付甕Ｃ2 は前段階とそれほど変わらないが、頸部の屈曲がはっきりし、弱い鍵状を示すようになる。胴部の張りは目立ち、口径を大きく凌駕する。

台付甕Ｃ2の新たな型式としての「く」の字口縁のものも一定量を示すようになり、この段階以後その数を増やすようになる。

このように、段階７において主要となるのは、やや幅広の口縁が直立気味に付され、胴部最大径をその上位に持つもの（台付甕Ｃ1 ）、球形胴部に外反する口縁部が付される伝統的な台付甕Ｃ2、球形胴部に「く」の字状に屈折する口縁部が付されるもの（台付甕Ｃ2）の３型式であり、台付甕Ｃはこの段階で、この３型式に集約されるようになる。整形技法の面では、口縁部が「く」の字状に屈折する台付甕Ｃ2以外は内面の全面にハケメを残すものが多くなる。

台付甕Ｆの型式変化　（図－８）

台付甕Ｆは、段階２以後に出現する型式で、西遠江を故地とする外来系のものである。出土数はそれほど多くないが、その型式変化を辿ることができる。

－段階２－

台付甕Ｆ1と台付甕Ｆ2の出現が確認される。

台付甕Ｆ1は口縁部が短く屈折して外方に開き、胴部が垂下してその下半に移行する形態で、肩部とする部分がほとんど見られないものである。口縁部はその外面をヨコナデするものとハケ整形するものとが認められる。

台付甕Ｆ2は頸部の屈折が明瞭な事に加えて、胴部の稜もはっきりしている。この口縁端部には刺突文が施されている。

この段階の台付甕Ｆは、台付甕Ｃに同調して内面全面にハケメを残すものが多いようである。

－段階３－

前段階と同様の構成を示すが、台付甕Ｆ2の数は極めて少ない。

台付甕Ｆ1は、長胴化を示すとともに胴部に僅かな張りが形成されるようになり、その下半の屈曲が不明瞭になる。この胴部内面はナデ仕上げされている。

台付甕Ｆ2は口縁部の屈折及び胴部の稜がやや不明瞭になる。

－段階４－

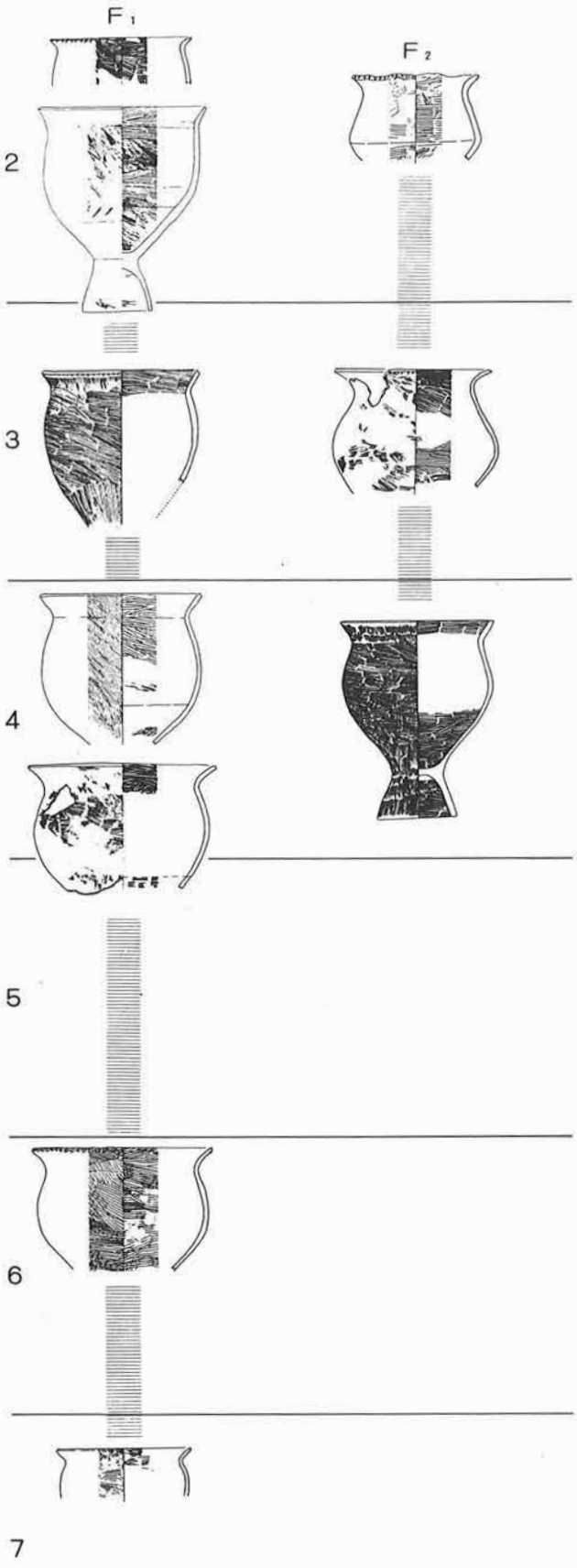
台付甕Ｆ2 は胴部の屈曲部がその上位にあるものが認められるが、その曲りは前段階ほどはっきりしていない。また、口縁部も上方へ開くものに変わって、その屈曲も弱まる。これは、胴部の上位が直線的に傾斜することから、この型式に含めて捉えているが、変容が進んでいる。これは、この型式の出現を最後に、この段階で消失している。

台付甕Ｆ1は、口縁部の幅が広くなり、その開きも強調されるようになる。胴部は球胴のものとやや偏平のものとが確認される。

この段階になると、台付甕Ｆは台付甕Ｃと同様に胴部内面の一部をナデで仕上げるものが一般的となる。

－段階５－

良好な例はまだ見られないが、段階４の台付甕Ｆ1



図－8　台付甕の変化 ④

が存続しているものと思われる。

－段階６－

その数は少ないが、台付甕F1 の出土が確認される。

台付甕F1 は口径が胴径を上回るが、その差が小さくなり、頸部の屈折もやや不明瞭となる。この段階から胴部内面全面にハケメを残すものが再び登場する。

－段階７－

台付甕F1は口径と胴径の差がほとんどなくなり、その口縁部も「く」の字状に屈折するようになる。そのため、台付甕C2との形態的な違いがなくなり、それぞれを識別しにくくなる。この段階で、台付甕F1は、台付甕C2の系統に組み込まれ、その終焉を迎えているようである。

C．広口壺の型式変化

広口壺の主体となるのは、広口壺A、広口壺B1、広口壺B3、広口壺C1、広口壺E2である。この内、広口壺E2は段階2以後その出現が確認される新出の型式で、東遠江の菊川式土器にその系譜が辿れる外来系の土器である。ここでは、口縁端部に面を持つ複合口縁壺（広口壺A）・折り返し口縁壺（広口壺B）と単純口縁壺の型式変化を辿ってみる。

広口壺A・広口壺Bの型式変化　（図－9,図－10）

広口壺Aの内、広口壺A1は、弥生時代中期の受口状口縁壺にその系譜を辿ることができる（加納1981）。

また、広口壺A2は、前段階に出現する複合部外面の中位から下位にかけて粘土帯を付加して幅広の面を造作する口縁形態のものを初源としている弥生時代後期の特徴的な型式である。

広口壺B1は、口縁端部外面に粘土帯を貼付する事で造作されるもので、その技法は、広口壺A2の場合と同様に弥生時代後期に出現する型式的属性で、弥生時代後期を規定している。ただし、その初源的な型式については、まだ良く分からない。

－段階1－

広口壺A1、広口壺A2、広口壺B1、広口壺B3がすでに揃っている。広口壺B3はこの段階に出現するものであろうか。いづれの型式とも胴部の最大径をその下位に持つ無花果型の胴部に長頸気味の長い口縁部が付され、相互に同調した形態を示す。

広口壺Aは加飾性に富んでおり、複合部の縄文と貼付文、頸部から肩部にかけての幅広の縄文帯と貼付文など文様を施すものが多い。複合部は直立気味に立たせ、あまり開かない。

広口壺Bは、胴径の割に、狭く締まった頸部から大きく外方へ開く口縁部が付されるもので、口縁部の極めて発達したものである。そのため、この段階のものの中には、口径が胴径を凌駕するものもある。

広口壺B1は、折り返し部の形成により口縁端部に施文部分としての明瞭な面取りがなされる事からも分かるように、加飾性に富んだ型式と言える。文様は、折り返し部と頸部～肩部、さらに口縁端部内面に縄文と貼付文が施され場合が多い。頸部～肩部の文様は、頸部最小径付近の上下に幅広く施され、その上下の区画もはっきりしていない。また、同時に貼付される円形の貼付文は、縄文帯の下位から中位にかけて付されている。

広口壺B3は、形骸化した折り返し部を特徴としており、広口壺B1に比べて加飾性に乏しく、当初から無文のものが一定量を占めている。文様を施す場合でも、頸部～肩部に縄文と貼付文、折り返し部に貼付文がそれぞれ施される程度のものが多い。

－段階2－

前段階と同じ構成で、広口壺Bが目立った出土を示す。各型式とも、頸部が口径に比して太くなり、器高に対して、口縁部が低くなる短頸化が進む。

広口壺Aは、口縁部が直立気味に立上がり、その上位で大きく外反して、端部に複合部を貼付する。複合部は前段階より外側に開くものが多くなる。

広口壺Bは、胴部が口縁部に対して大きくなり、その最大径を下位に持つものが確認される。

文様は、加飾性の最も強い広口壺Aにおいても省略化が始まり、複合部に貼付文だけ例や縄文だけを施す例などが認められるようになる。また、この段階の中で、S字状の結節文や横線に代表されるような縄文帯の区画が始まる。そして、それに伴うかのように頸部～肩部の文様帯が、頸部最小径部分より下に施文され、その範囲が限定されるようになり、その構成要素となる円形の貼付文が縄文帯の上端に施されるものが多くなる。

－段階3－

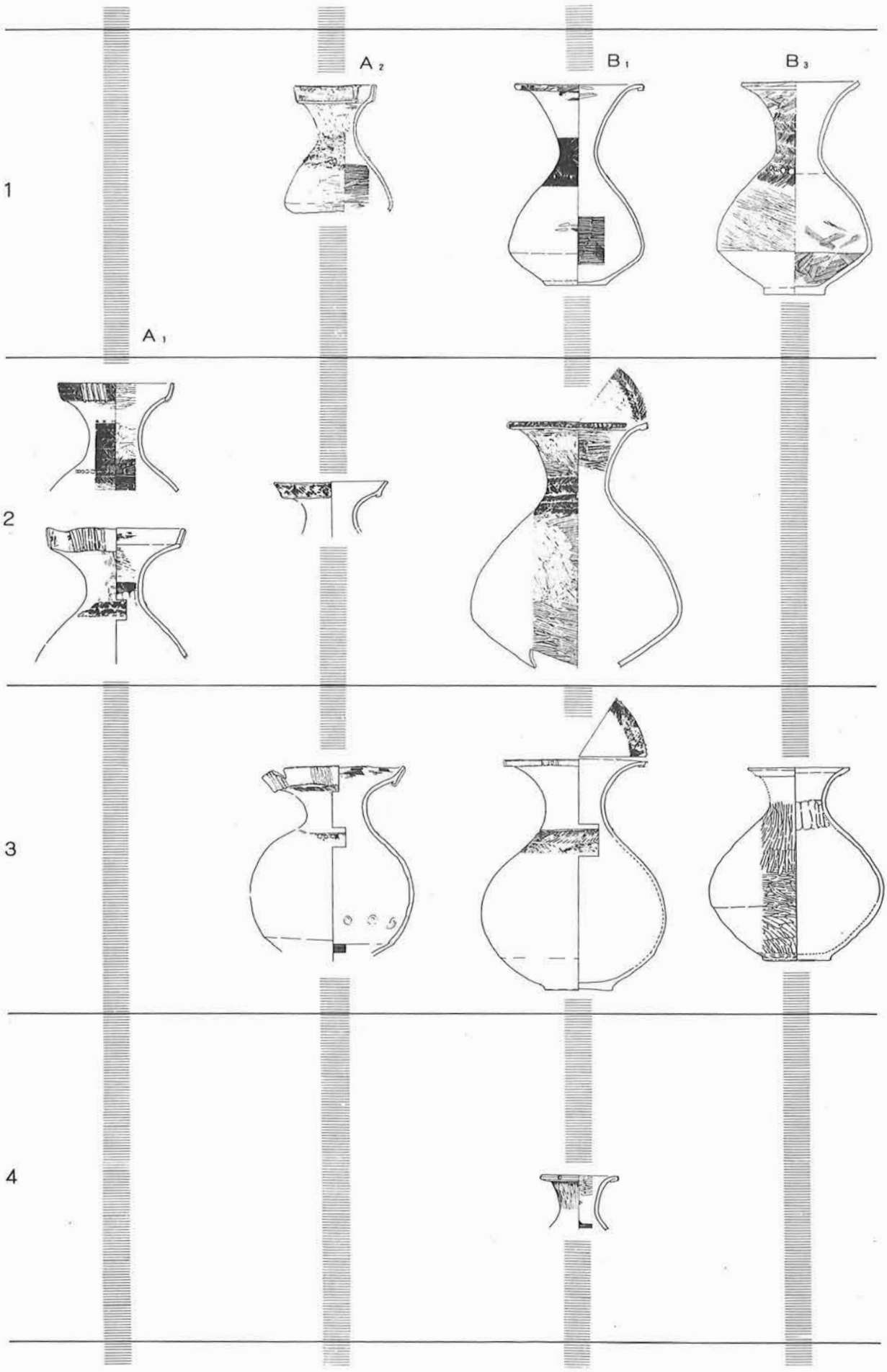
広口壺A、Bの構成に変化はないが、広口壺Aの構成比は小さくなり、その出土数は少ない。

前段階まで頸部の下位に弱い屈折部が形成されていた口縁部は、この段階では、更に短頸化が進み大きく湾曲する曲線を描くようになり、その屈折部分は消える。胴部は、その最大径が中位に上がり、球形あるいは算盤玉状を示すようになる。

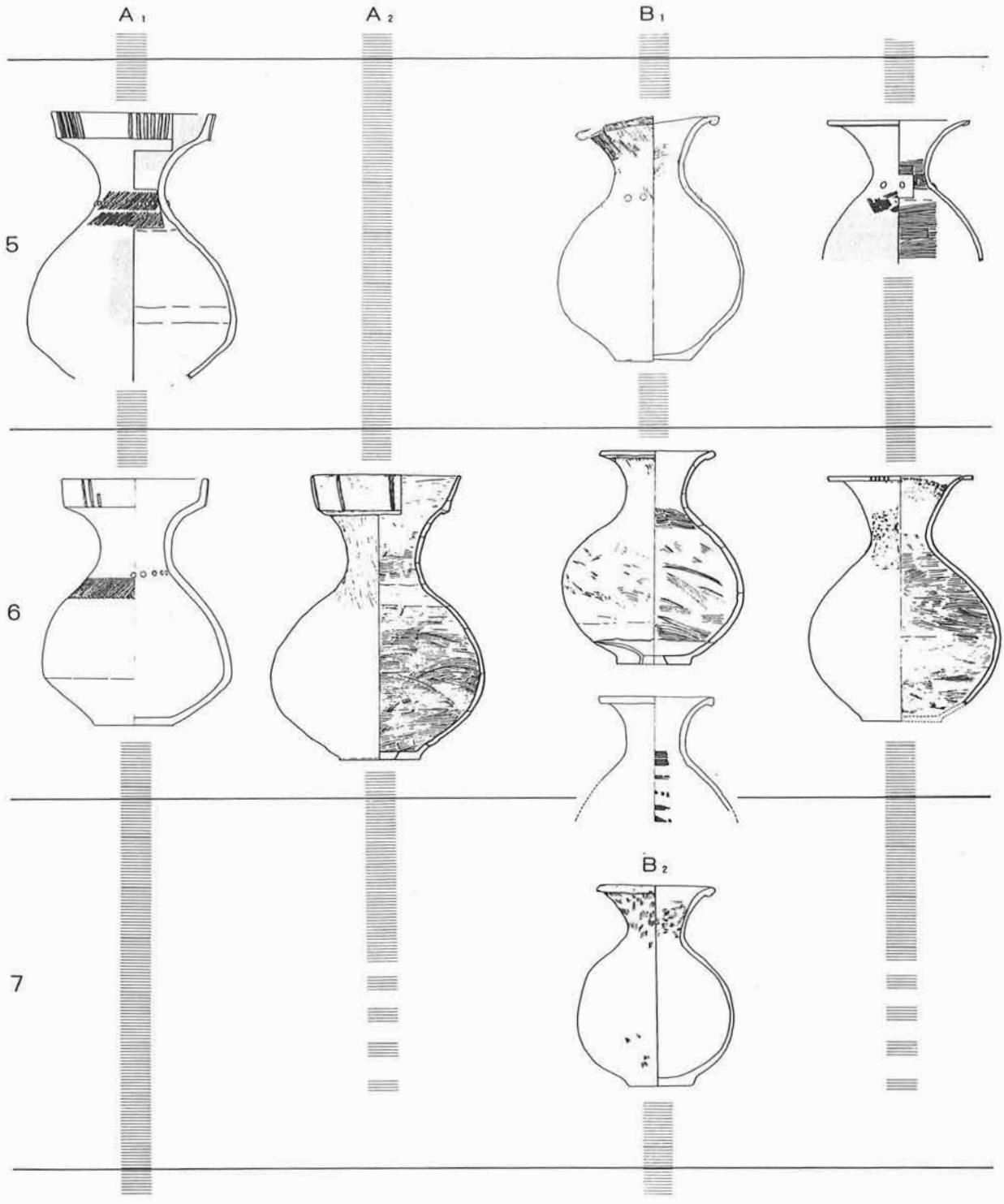
文様は、肩部に施される縄文が、その上端を一条の横線文、下端をS字状結節文により区画される規格的施文原理が完成し、その一部の省略形態が盛行する。また、櫛刺突による横線など菊川様式の文様もその構成要素のひとつとして採用されるようになる。

－段階4－

良好な出土例が無いため、その実態は良く分からな



図－9　広口壺の変化①



図－10　広口壺の変化②

いが、前段階と同じ構成を示すようである。

前段階までの短頸化の変化は、この段階になるとはっきりした変化として指摘できなくなる。また、その頸部の最小径を測る部分も頸部の下位に戻り、口縁部はそこから大きく外反する形状となり、段階2のそれと類似するようになる。ただ、胴部は口縁部に比べて小さくなり、安定した形態になる。

－段階5－

基本的な広口壺A、Bの構成に変化はない。また、各型式とも、頸部下位で最小径を測り、そこから大きく外反する口縁部である点は共通し、前段階と類似する形状を示す。ただ、広口壺B3 はその外反の度合いが強まるとともに、頸部に弱い屈折部が形成されるものが出現している。

胴部は、その下位に最大径を持つ無花果型のものと中位で最大径を測る球胴のものとが確認され、大きく2つに分化する。

文様の構成については前段階と大きな変化が確認されないが、肩部に円形の貼付文だけ施されるものなどが出現しており、その省略化が進む。

－段階6－

前段階以来の4つの型式と新たに広口壺A3の出現が確認される。

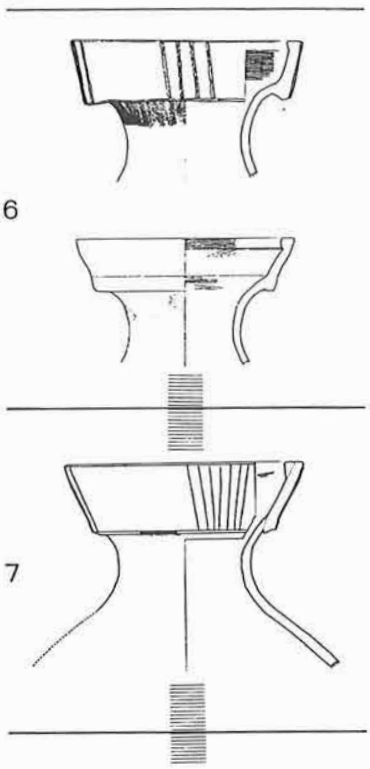
伝統的な型式の中で、球胴のものは、胴部がやや偏平化し、口径に対して胴径が強調されるようになる。

広口壺Aは、口縁部の頸部が直立気味に一旦立上がり、その上位で外反して端部に複合部が付されるやや長頸のものになる。また、その複合部も直立気味のものと外反するものとが認められる。

広口壺B3は頸部に弱い屈折部が形成され、口縁部がそこから大きく緩やかに広がってラッパ状をなすものが主体となる。

新たに出現する広口壺A3は、他の広口壺Aと同じ長頸気味の頸部に幅広の複合部が付されるものである。そして、その端部内面に貼付される粘土帯は、未発達の断面三角形あるいは台形のもので、それにより形成される上端面も、まだ、それほど広くはなく、複合部全体の器厚を著しく上回る事はない（図－11）。

文様は基本的に前段階と変わらないが、羽状文部分を縄文と菊川様式系の擬縄文を融合させて表現するものが登場する。



図－11　広口壺A$_3$の変化

－段階7－

前段階に引き続いて5つ型式に分けて捉えられるが、広口壺A2と広口壺B3が激減する。

広口壺B1はその肩部～胴部の張りが増し、広口壺B2へと型式変化している。また、広口壺B3についても広口壺B1と同調した変化を示していると思われるが、その類例は少ない。

広口壺A3は、頸部の屈曲が強まり、張りの強い胴部が形成されるようであるが、全体の形態の分かる例はまだ確認されていない。複合部は、徐々に外方に開くようになる。口縁端部内面に付される粘土帯は、その幅が広くなり、発達した断面三角形のものが確認される。そして、それにより上端面の幅も複合部の器厚を大きく凌駕するようになり、特徴的な器形へと変化を遂げている。

広口壺C・広口壺Eの型式変化　（図-13,図-14）

単純口縁壺の変化をここでまとめる。単純口縁壺は、在来系の広口壺Cが主体的な出土を示し、その数も多い。外来系の広口壺の中では、菊川式系の広口壺Eについてその型式変化を辿ることができ、一定の出土量が確認される。そして、この広口壺Eは、広口壺Cに対して影響を与え、その融合型式を作り出し、どちら

とも認識しにくい中間的な型式が創出される。

－段階１－

広口壺Ｃと広口壺Ｄの共に在来系土器と捉えられる２つの型式が存在するようである。ただ、広口壺Ｄの出土例は極めて少なく、その系譜については良く分からない。

主体となる広口壺Ｃは、弥生時代中期の単純口縁の長頸壺の系譜を直接引く型式で、長頸気味の口縁部に最大径をその下位に持つ無花果型の胴部が付く形態を示しているものが多い。広口壺Ｃ1の胴部は、その最大径を下位に持つ無花果型と中位から上位に持つ球胴形態の弥生時代中期以来の伝統的な２者が存在しているようであるが、主体となるのは前者のようである。

この段階の広口壺Ｃ1は、口縁部が細長く直立気味に立上がる頸部からその上半が外傾する長頸壺に近いものと口縁部が外傾しながら開く、やや頸部の太いものとが存在する。両者とも、口縁部がナナメ上方に開く点で共通しているが、後者の方が頸部の屈曲を強調させ広口の口縁形態を示す。さらに、後者の中には口縁端部を明瞭に面取りするものが存在するようであるがその例は少ないようである。

口唇部を下方に肥厚させて、明瞭な面を形成する広口壺Ｄは、広口壺Ｂ1と同じ意匠を持たせているものと捉えられるもので、口縁部を大きく外反させてその端面の垂直化を図っている。そのため、この段階では口径が胴径を凌駕している。

文様は、肩部～頸部にかけて縄文＋貼付文が施されるものが多い。貼付文は縄文帯の下位から中位に付されている。

－段階２－

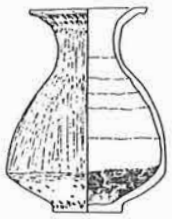
主体となるのは広口壺Ｃ1である。広口壺Ｄの例はまだ知られていない。また、この段階より広口壺Ｅ2の搬入が始まっているようである。

広口壺Ｃ1は、前段階同様ナナメ上方に開く口縁部であるが、その短頸化が指向される。口縁部は長頸気味のものと頸部の屈曲の目立つものとが認められ、後者の中には口縁端部を面取りするものが徐々に増える。広口壺Ｃ1の胴部は、前段階同様に無花果型を主体としている。

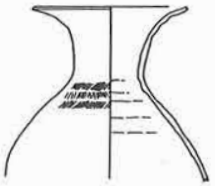
文様は、広口壺Ａ・Ｂと同様の構成を示すものが肩部に施されるが、加飾性にはやや乏しく、無文のものも多く見られるようになる。

－段階３－

引き続き主体となるのは、広口壺Ｃ1である。また、外来系の広口壺Ｅがその数を増やし目立つようになる。



段階３



段階５

図－12 広口壺Ｃと広口壺Ｅの折衷型式

広口壺Ｃ1は、頸部が太くなり短頸化が進むと共に、そのやや直立気味の頸部から口縁部が大きく外反する。そして、大きく外反する事で、口縁端部内面を視覚的に認識される面として、比較的幅広く縄文＋Ｓ字状結節文が施文されるものが増える。

文様の施文部位や構成は広口壺Ｂに準じ、横線や結節文などにより縄文帯を区画するものが多い。また、口唇部を面取りするものの中には、その端部下端に刺突文を施すものが多くなる。

広口壺Ｅは広口壺Ｅ2が多く、僅かではあるものの広口壺Ｅ1の出現が確認される。広口壺Ｅはその下部の発達した細長い無花果型の胴部に、大きく外傾する口縁部が付される形態で、通常、口縁端部を面取りしている。文様は無文のものと有文のものとが見られ、施される文様は、櫛刺突の１段の羽状文が多い。

この段階から、広口壺Ｃと広口壺Ｅとの折衷型式(図－12)が登場し、どちらとも判断し難い特異な型式が増える。胴部を細長い広口壺Ｅのそれを採用し、口縁部は大きく外反するものが付される例などがそれに当たる。

－段階４－

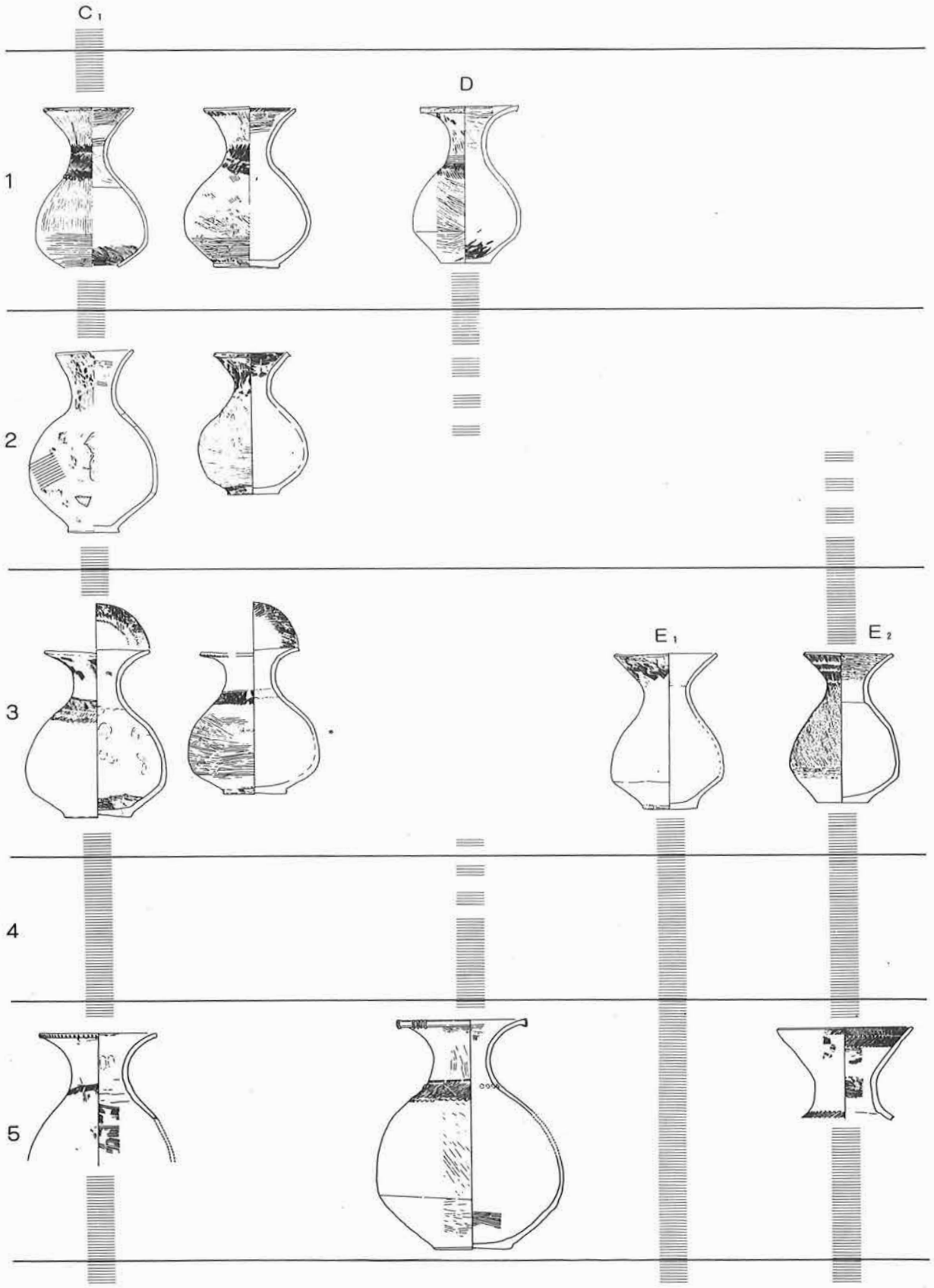
良好な資料に恵まれず、良く分からない段階である。型式の構成は前段階を踏襲していると思われる。

広口壺Ｃは胴部高に比べて、口縁部が低くなる短頸化が進んでいるようである。

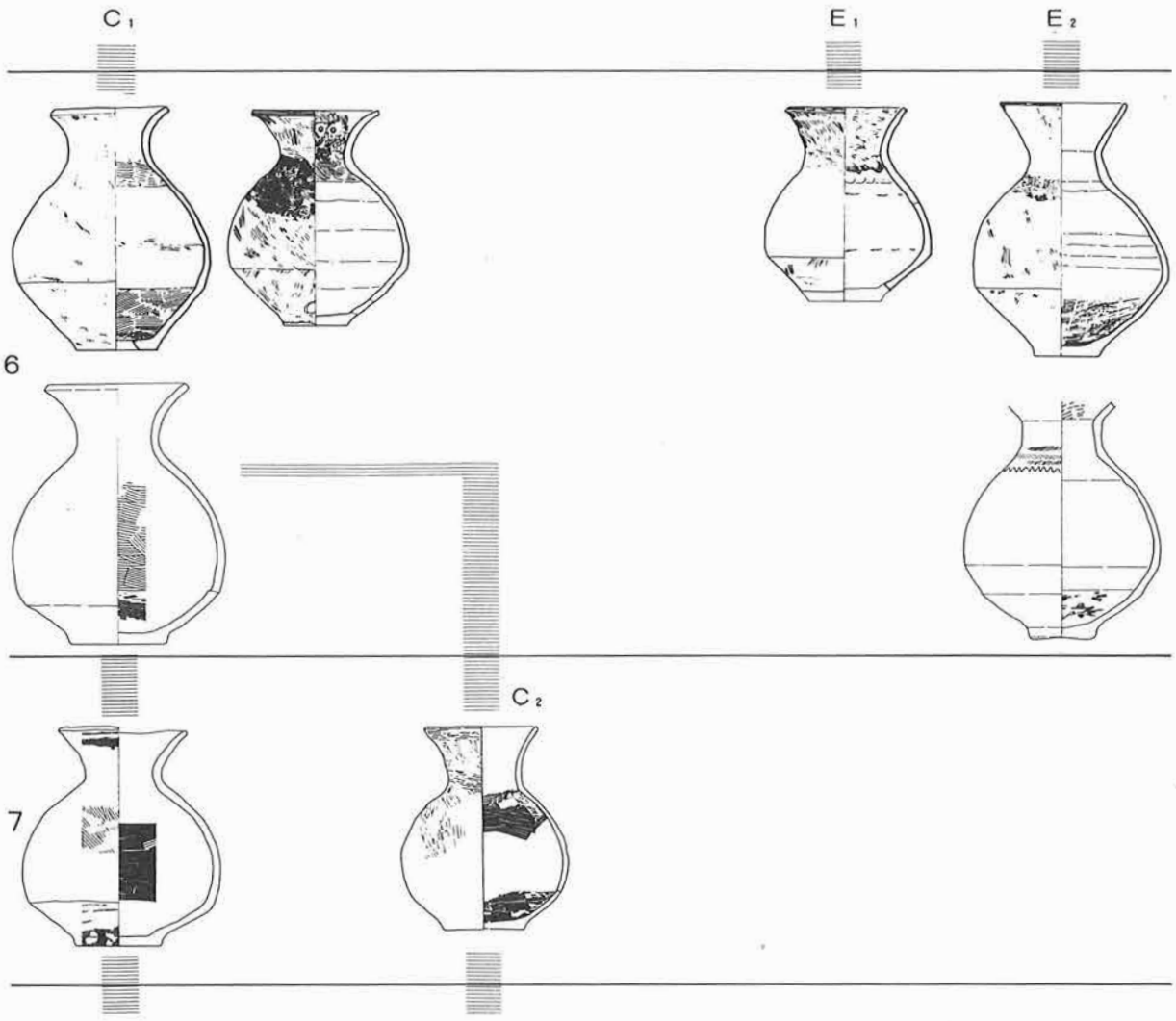
－段階５－

広口壺Ｃ、広口壺Ｄ、広口壺Ｅが確認される。また、前段階と同様に広口壺Ｃと広口壺Ｅとの折衷型式が散見される。主体的に見られるのは広口壺Ｃであり、その数も多い。

広口壺Ｃは、大型化が図られたようで、大型品が目



図－13　広口壺の変化③



図－14　広口壺の変化④

立つようになる。胴部は無花果型か球胴のものであり、前段階を踏襲する。口縁部は、頸部の直立部分がほとんどなくなり、緩やかな曲線を描いて大きく外反するようになる。そして、器高に対する口縁部の比率が小さくなりその短頸化が進む。

広口壺Dは、この段階に段階1以来の存在が確認されるが、その数は少ない。口縁端部以外は広口壺B、広口壺Cと類似した形態を示す。

広口壺Eは、月の輪上遺跡の溝出土資料で壺全体の15%ほどを占めているが、この段階にその数の増加が認められる。この胴部は、屈曲部を下位に持つ無花果型の系統のものであるが、胴部の最大径をその下位から中位に持つようになり、張りの強い肩部を形成するものに変化している。

広口壺Eの中で普遍的に確認される広口壺E2は、頸部から口縁部にかけての屈折が明瞭になる。そして、この中には、口縁部内面と肩部に縄文が施文される加飾性の強いものが登場する。

文様は段階3における文様構成を踏襲している。ただ、菊川様式系の櫛刺突による羽状文をそのまま借用した在来系の広口壺Cが登場し、型式と文様の相関性が大きく崩れていく。

－段階6－

広口壺Cと広口壺Dとで構成され、その折衷型式も多い。また、これらの小型品が急増し、法量の差が大きくなる。広口壺Dは前段階を以て消失しているようで確認されない。

広口壺Cは、胴部下位に屈曲部を持つ無花果型の胴部のものが多いが、その最大径を中位に持つものが増え、肩部から胴部にかけての張りが強調されるようになる。頸部は胴径に対して太くなり、口縁部は頸部がやや直立気味に立上がり、その端部が短く外反するようになるものと頸部の最小部から大きく外反し、その端面を明瞭に面取りするものとが認められる。

広口壺Eは、広口壺E1と広口壺E2が確認されるが、広口壺E1はほとんど見られない。広口壺E2は、胴部の屈折がはっきりすると共に、それが前段階より上位に上がり、細長い算盤玉状を呈するものが登場する。ただし、広口壺Eは、この段階の後半に、在来系と思われる球形胴部に広口壺E2の口縁を付す変容形が認められるのを最後に消失するようである。

文様は、肩部と口縁部内面に縄文、結節文、貼付文などを施文するものが見られるがその数は減り、大半は無文のものとなる。

－段階7－

単純口縁壺は広口壺Cだけの構成となるが、広口壺Cは広口壺C1と広口壺C2に分化する。

広口壺C1の口縁部は、短く直立気味に立ち上がる頸部から口縁部が強く外傾するものと頸部が強い屈曲を示して外反するものとが認められる。胴部は、その下位に不明瞭な屈曲部が見られるものと球胴を示すものが確認されるが、いづれも胴部の張りが強調されたやや偏平な形状となる。

頸部の付け根に弱い屈折部を形成する広口壺C2は、胴部に比べて口縁部が高く、太い形態のものが出現している。これは、頸部下位と口縁端部の外面を部分的にヨコミガキしている。

文様は、施文されるものが激減し、大半は無文となる。施文されるものも円形の貼付文や横線文が単独で使われるものが散見され、その省略傾向が強い。

D．広口壺Bと広口壺Cの口縁部（第3表、図－15）

弥生時代後期～古墳時代の広口壺は口縁部が相対的に太くなり、全体の器高に対して短頸化を指向する。その変化は、口縁頸部の屈曲角度の変化としても捉えること事ができる。そして、この時間的な変化を統計的に処理できれば、客観的な型式変化として認識される。しかし、この場合、当地の土器が曲線を中心とした曖昧な線で設計されもので、型式的な属性を数量化するには、その定点が求め難く、完形品でなければ統計的な属性分析には馴染まないとする大きな難点がある。そのため、良好な資料の出土と蓄積が期待されなければ、正確な型式変化を追うことができないのが現状である。

ここでは、一定の出土数が期待される口縁部破片をその試料とし、その各部位についての数量的な属性分析を試案として試みてみる。

図－15は、主体的な出土を示す在来系の広口壺Bと広口壺Cについて口径（X）に対する口縁部の高さ（Y）と、それから導かれる口径（X）に対する屈折角（Z）をそれぞれ段階毎に分けてグラフ化したものである。Xは口径の半分、Yは口縁端部とそこから垂直に落として胴部内面と交差する点との間の長さ、ZはこのXとYからなる直角三角形のX側の鋭角をそれぞれ表している。X・Yの値の増減が、口縁部の大きさの増減を表し、Xに対してYの値の大きいものほど長頸を指向していると言える。また、Zの屈折角は、それが大きいほどXの値に関わらず長頸を示し、Zの値に対するXの大小が、口縁部の相対的な大小を表していると言える。

広口壺Bは、最小の資料がX4.6cm、Y6.2cm、最大がX11.0cm、Y23.6cmの数値を示している。この数値は、いづれも段階1の資料によって記録されたものであり、段階1における法量での格差が大きいことをよく表している。また、段階1は他の段階に比べXに対するYの値が相対的に大きくなっているが、特に、Xが10cm前後に対してYが22cmを越える数値を示す資料は特筆され、この段階を特徴づける。段階2・3は試料数が少なく評価の対象とはならないが、以後の段階4～7については、Xに対するYの値がほぼ同一の直線上に載り、その比率に大きな違いを示していない。また、それぞれの数値もX7cm・Y9cm～X10cm・Y15cmの段階1よりやや限定された範囲に収まり、規格性が強い製品が多いことが分かる。

この段階1と他の段階との違いは、Xに対するYの数値の違いとして認識されるが、その屈折角を導き出すと、よりはっきりしてくる。広口壺BについてのX－Zの相関図を見てみると、段階1のものは、Zの値が60°以上の領域を示すのに対して、他の段階はそれ以下に集中し、大きな違いを示している。

段階1はZが60°～70°の値を示し、口縁部の開きが極めて緩やかである事がよく分かる。これに対して、段階4以降は、段階4・5がZ50°～60°、段階6がZ55°～60°の範囲に収まり、重複する部分もあるが新しい段階である段階6の方が、口縁部の中心軸に対する傾斜角がやや緩やかである事が分かる。このことより広口壺Bは、単に口縁頸部の屈曲が徐々に強まると言った漸移的な変化を示さないことを表している。

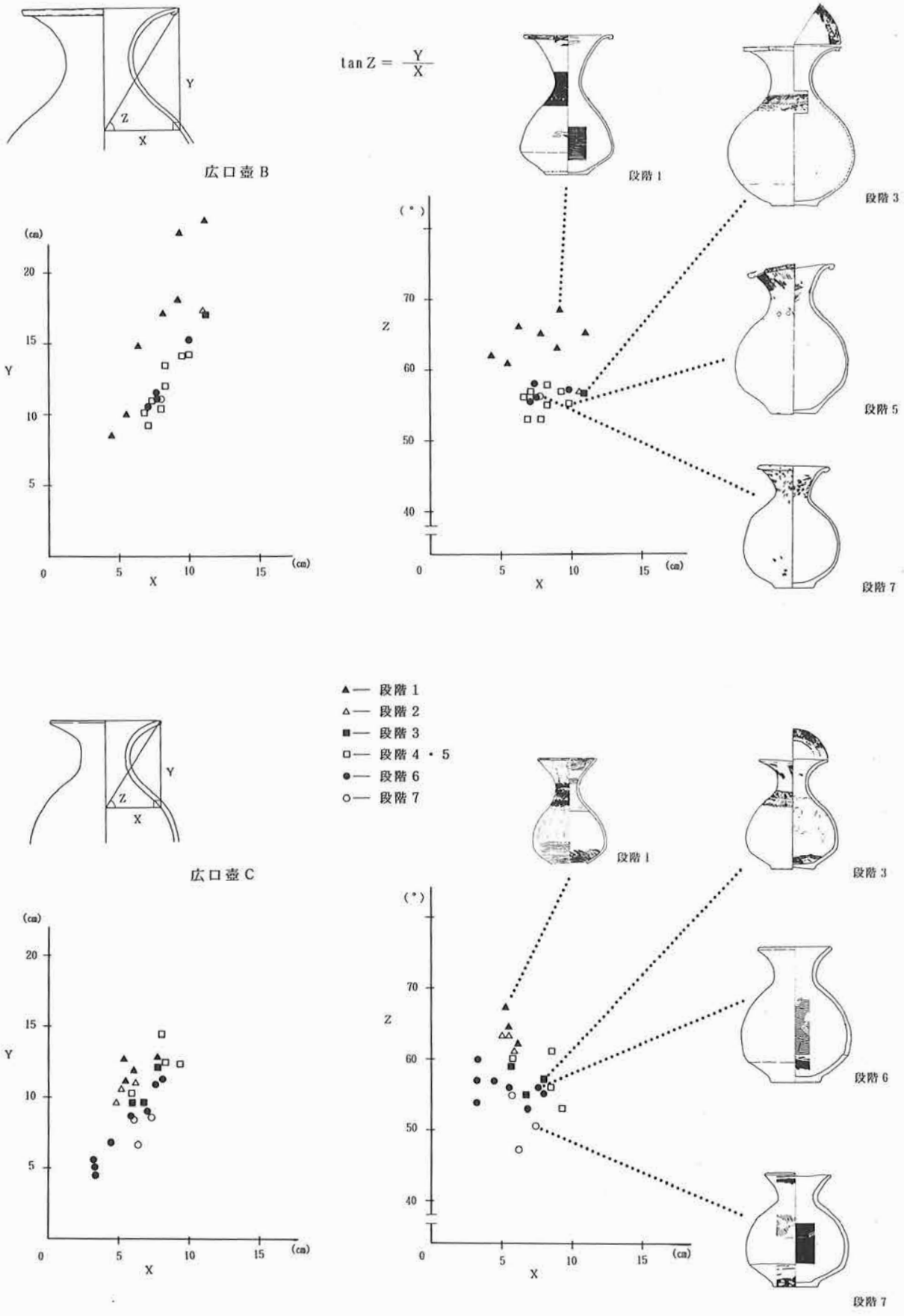
広口壺Cでは、広口壺Bほど段階1をはっきり分ける事はできないものの、段階1と段階2の資料がXに対するYの数値が大きく、段階6と段階7のそれが小さくなる傾向にあることは読み取れる。また、X3.5cm、Y5.0cm付近に集中する段階6の一群があることも注目され、広口壺Cの小型品が限定された段階に出土していることが分かる。

次に、広口壺CのX－Zの関係を見てみると、まず、段階1と段階2は、X（口径／2）が5cm前後の数値を示し、Zが60°以上を示す点が指摘できる。これは、比較的口径が小さい割りに口縁部の屈曲が緩やかで、口縁が長頸志向の強い形態である事を表している。そして、それとは対称的に，段階7の中で口縁部が「く」の字に屈折する広口壺C1が、Zの値を50°前後より小さくなり、他の段階とはやや隔絶するようになる。また、段階3～6の広口壺C1と段階7の広口壺C2については、Xの数値に大小があるものの、Zは50°～60°の範囲に収まり大きな違いを示していない。

このように、X－Zの関係では、Zが60°と50°辺りを境に3つの段階に分けれる事が分かる。ただ、広口壺BはZが60°以上を示すのが段階1のみであるのに対して、広口壺Cでは段階1と段階2の資料が相当しており、広口壺Bの方が早い段階から短頸化と広口化が進行し、型式の違いにより区分された内容に違いを示している。また、Zが50°以下の例は、現状で広口壺C1のみで確認される型式であり、やや特異な状況を示している。これに相当する広口壺B、さらに広口壺Aなどについては良く分かっておらず、今後、この資料が発見されれば、共通した区分と認識されるものである。

NO	遺物	分類	X	Y	Z	段階	備考
1	滝戸 SK16－3	C2	5.9	8.5	55	7	
2	SB26－143	A1	8.7	15.5	60	2	
3	SZ53－76	A2	11.8	13.6	49	6	
4	月の輪上 竪穴住居跡58－12	B1	11.1	17.0	57	3	
5	竪穴住居跡58－13	C1	7.9	12.2	57	3	
6	竪穴住居跡58－15	C1	5.85	9.6	59	3	
7	竪穴住居跡58－16	C1	6.85	9.6	55	3	
8	竪穴住居跡58－17	A2	9.6	12.4	52	3	
9	竪穴住居跡58－14	E1	7.5	13.8	61	3	
10	27	B1	9.8	14.2	55	5	防火水槽地点
11	溝状遺構20－2020	B3	8.45	12.0	55	5	
12	溝状遺構20－2008	C1	8.3	12.5	56	5	
13	溝状遺構20－2015	D	9.25	12.3	53	5	
14	溝状遺構20－2003	E2	4.1	5.2	52	5	
15	溝状遺構01－UC0101	A1	9.8	16.0	59	5	
16	溝状遺構01－UC0108	B1	7.2	11.0	57	5	
17	溝状遺構01－UC0105	B3	9.35	14.2	57	5	
18	溝状遺構01－UC0109	C1	8.2	14.6	61	5	
19	上石敷 M－1溝状遺構M102	C1	6.15	6.7	47	7	
20	権現 第1号住居跡 209	C1	3.35	4.6	54	6	
21	第1号住居跡 210	C1	3.4	5.2	57	6	
22	泉 第1号溝 159	C1	8.65	15.1	60	2	外来系
23	第1号溝 160	C1	5.0	9.6	63	2	
24	的場 A住居跡	B1	6.8	9.9	55	2	外来系
25	雌鹿塚 第12号住居址91	B1	4.5	8.4	62	1	
26	第12号住居址87	B3	6.45	14.8	66	1	
27	第12号住居址88	B3	5.5	10.0	61	1	
28	第12号住居址89	B3	6.0	—		1	完形品測定不可
29	第12号住居址90	C1	6.25	11.8	62	1	
30	第28号住居址 167	B1	9.35	22.6	68	1	
31	第28号住居址 168	B2	4.6	6.2	53	1	外来系？
32	第28号住居址 169	C1	7.85	12.8	58	1？	
33	第31号住居址 199	B5	7.1	11.2	58	3	
34	第1号土坑 305	B1	6.15	8.1	53	2	外来系
35	第1号土坑 306	C1	6.0	—		2	完形品測定不可
36	竪穴状遺構－1 336	C1	5.4	10.6	63	2	
37	遺構外 364	B1	11.0	17.2	57	2	
38	豆生田 21号住居址 6	B1	6.6	9.6	55	4	外来系
39	32号住居址 2	C1	5.3	12.8	67	1	
40	32号住居址 1	D	7.5	—		1	完形品測定不可
41	43号住居址 1	B3	8.0	17.0	65	1	
42	43号住居址 2	B3	9.1	18.0	63	1	
43	72号住居址 1	C1	6.0	11.0	61	2	
44	八兵衛洞 A－19号住居址 1	C1	7.3	8.8	50	7	
45	B－2号住居址 2	B3	7.1	10.6	56	6	
46	B－2号住居址 1	C1	7.5	11.0	56	6	
47	C－5号住居址 1	B1	7.4	11.7	58	6	
48	御幸町 136号住居址 1	B1	11.0	23.6	65	1	
49	SD－1 2	A1	8.0	13.4	59	—	
50	SD－1 1	B3	8.4	13.4	58	—	
51	目黒身 第1排水溝 9	B1	6.8	10.2	56	—	
52	第1排水溝 2	B1	7.0	9.2	53	—	
53	第1排水溝 3	C1	5.8	10.3	60	—	
54	二本松 1号周溝墓 7	A2	9.5	13.8	55	—	
55	1号周溝墓10	B3	9.8	15.2	57	6	
56	1号周溝墓11	B1	7.5	11.2	56	6	
57	1号周溝墓 1	C1	7.0	9.2	53	6	
58	1号周溝墓 3	C1	8.0	11.2	55	6	
59	1号周溝墓12	E1	6.4	8.8	54	6	
60	1号周溝墓13	C1	4.5	6.9	57	6	
61	1号周溝墓14	C1	3.3	5.7	60	6	
62	1号周溝墓 5	E2	6.2	9.1	56	6	
63	1号周溝墓 8	C1	5.8	8.6	56	6	
64	1号周溝墓 2	E2	7.5	11.5	57	6	
65	1号周溝墓 4	E2	6.7	10.8	58	6	
66	1号周溝墓16	E2	4.2	7.8	62	6	
67	北神馬土手 1号住居址 2	A1	8.0	14.2	61	6	
68	1号住居址 1	A2	6.0	9.0	56	6	
69	1号住居址 7	E2	6.2	10.5	59	6	
70	瀬戸川 第1住居址 1	C1	5.5	11.1	64	1	
71	第24住居址 4	B1	4.6	8.8	62	3	外来系（菊川）
72	第24住居址 2	C1	6.4	10.3	58	3	外来系（菊川）
73	第24住居址 3	E2	7.0	11.6	59	3	外来系（菊川）
74	第24住居址 1	E2	5.8	11.3	63	3	
75	下長窪上野 第12住居址11	B2	7.5	11.2	56	7	
76	向山遺跡	B3	8.0	10.6	53	4	昭和53年発見土器

第3表　広口壺の法量比一覧表



図－15　広口壺Ｂ、Ｃ法量比グラフ

この分析は、段階1の型式差と広口壺Cにおける段階2と段階7の型式差の抽出や段階6に広口壺Cの小型品が目立つ事象などが明らかになり、型式変化を辿る際、ある程度の成果が得られ、それぞれの画期を考える上で有効である。しかし、段階3～6に関しては、ほとんど適用できないのが実情であり、それを区分するには、別の属性による数量分析が必要となる。例えば、XとY、それから導かれるZの値がほとんど同じでも、それぞれの段階で、全体の器高に対するYの比率とか、頸部最小径の上下位置などの違いが指摘でき、それを数量化する方法も考えられる。ただ、前者については、まだ全器形の分かる類例の絶対数が意外と少なく、数量分析するまでに至っていないのが現状であり、後者は、頸部における定点が定まらないと言う難点があり、この分析にはなかなか馴染まない。当地の土器資料は、客観的な土器編年確立のために多方面からの数量的な属性分析が必要となる。今回はそのひとつの試案として、量的な部分でその数が期待できる肩部～口縁部の破片について試行してみたが、前述のように各段階ごとに細分するまでには至っていないのが結論である。ただし、今後大規模な調査などにより完形土器資料の蓄積がなされれば、器高に対するYの変移など新しい分析も可能となり、総合的な検討ができる分野として、不可欠なものとなる事だけは指摘できる。

E．土器編年

ここでは、前項で検討した土器の型式変化を軸に東駿河の土器様式を設定する事にする（図－16、図－17、第4表）。

土器様式は、古墳時代前期を学史的に有名な大廓式土器（小野1970）の名を使い『大廓様式』と呼称し、弥生時代後期をその立地は大廓遺跡と大きく異なるものの、同じ地域に所在する雌鹿塚遺跡の名を冠して、新たに『雌鹿塚様式』と呼称する事にする。また、その対象地域を滝戸遺跡の所在する富士山西南麓から愛鷹山南麓を含む黄瀬川扇状地までの東駿河と田方平野を中心とした北伊豆地域の一部までとする。それは、駿河湾最奥部であり、その途中に浮島ヶ原の低湿地を抱えるものの、地形的に開放し遮断するものがない連続性が窺える範囲である。今回は便宜的に『東駿河の土器様式』として取り扱うが、本来は北伊豆地域を含めた名称である点は注意される。

土器様式の各時期は、段階1～段階7にほぼ対応するが、段階4と段階5はそれぞれの広口壺の型式差がよく認識できず、台付甕のそれが不明瞭であることから、同時期の前後を表すものとしておく。そのため、雌鹿塚Ⅰ式期＝段階1、雌鹿塚Ⅱ式期＝段階2、雌鹿塚Ⅲ式期＝段階3、雌鹿塚Ⅳ式期＝段階4・段階5、大廓Ⅰ式期＝段階6、大廓Ⅱ式期＝段階7にそれぞれ対応させて捉える事ができる。以下では各時期について解説するが、主要となる台付甕B・C・Fと広口壺A～Dについての型式変化は、前項の内容に拠り再述せず、その変化を基軸として他の型式組列について述べる事にする。

雌鹿塚Ⅰ式期

台付甕Bが多様に器種分類され、それが比較的盛行する事と長頸気味の口縁部を強調させた広口壺B、広口壺Cの存在により設定される。

基準となる資料としては、雌鹿塚遺跡第12号住居址、同第28号住居址、豆生田遺跡32号住居址、御幸町遺跡136号住居址などの資料が当てられる。また、豆生田遺跡43号住居址の資料も古墳時代中期の高坏や甕が混在しているが、他はこの段階のものとすることができる。

台付甕は、台付甕B、台付甕C以外に口縁部に輪積み痕を残す台付甕Eが一定の出土を示す。また、弥生時代中期以来の平底甕がこの段階まで残るが、その量

はそれほど多くない。

壺は、広口壺A、広口壺B、広口壺Cの他に短頸壺Bの出土が目立つ。短頸壺Bは、無文のものを基本としている単純な型式であり、この段階は口縁部高が器高の1／5程度を測るもので、口縁部を比較的大きく作るものが多い。

高坏は遠江の白岩式土器（弥生時代中期）の系譜を引く長脚で、円錐形のものが存在するようであるが、その類例は少ない。

鉢は、鉢A1と鉢Bから構成されるようである。鉢A1の口縁部に折り返し部を持つものは、この段階から登場しているようである。

雌鹿塚Ⅱ式期

この段階の基準資料は、前段階同様に沼津市～三島市の沖積平野に所在する雌鹿塚遺跡第１号住居址、同第15号住居址、同竪穴状遺構－１、同第１号土坑、豆生田遺跡72号住居址などや瀬戸川遺跡第11住居址の一括資料がこの段階のものと捉えられる。また、泉遺跡第１号溝の良好な資料も相当するもので、この段階から富士山西南麓にも遺構出土の一括資料が確認されるようになる。

この段階の大きな特徴は、この東駿河と駿河湾を介して近接する東遠江の菊川式土器（中嶋1988）を中心として外来系土器の搬入が明らかになることにある。菊川式土器としては広口壺Eの他に、頸部外面をナデ整形し、胴部にハケメを残す菊川式土器特有な広口壺が登場する（立花1993）。この中には、口縁部に広口壺B4や広口壺E同様の屈折部を形成する折り返し口縁壺などが含まれている。また、壺類以外にも、ハケメが非常に粗い台付甕や鍔状口縁高坏と称される高坏D、高坏Eなどの菊川式土器の登場も確認される。

菊川式土器以外にも西遠江伊場様式（鈴木1991,1996）の影響が窺える台付甕Fや高坏F、隣接する西駿河の台付甕G、または中部高地系の鮮明に赤彩されている高坏Hなどが確認されており、各地域からの多彩な土器交流の状況が認められるようになる。そして、これらの中で、台付甕E、広口壺Eが、この段階以後の型式変化を追う事ができ、在地化した型式として捉えられるようになる。この外来系の活発な動きを指標として雌鹿塚様式の中でⅠ式期とⅡ式期との間に大きな画期を想定する事もできる（渡井1993）。

台付甕は、台付甕B、台付甕Cが主体となるが、この段階で、台付甕B1 が消失している。また、台付甕Eもなくなるようである。

短頸壺は、短頸壺Aの出現が確認される。短頸壺Aは下脹れの胴部に大きく開く口縁部が付されるもので、この段階では、その肩部がほとんど張らない長胴気味で、やや大型品から小型品までバラエティーに富んだ容量を示している。短頸壺Bは、器高に対する胴部高が大きくなり口縁部の縮小化が図られる。

鉢は、前段階から継続する型式以外に鉢Cが出現しているようであるが、その数は少ない。鉢Aと鉢Bは、前段階より口縁部の外反が弱まり、直立気味のものも見られるようになる。また、鉢Bは、体部最大径をその上位に持つ無花果型に近い形態のもので占められる。

雌鹿塚Ⅲ式期

この段階の基準資料としては、雌鹿塚遺跡第31号住居址、瀬戸川遺跡第18住居址、同第20住居址、同第24住居址、月の輪上遺跡竪穴住居跡58などの一括資料が上げられる。

台付甕は、台付甕Cが主体となると共に、その大型品である台付甕Hの出現し、その容量での多様化が図られようになる。台付甕Bはこの段階を以て消失するようである。

広口壺は、頸部が一旦直立気味に開いていたものが、この段階になると緩やかな曲線を描いて外反するものが主体となり、弥生時代中期以来の長頸口縁の伝統に終りを告げる。外来系としては広口壺E2がやや目立った出土を示し、その型式変化を辿る事ができるようになる。また、広口壺Cとの折衷型式も明らかになり、その在地化が進んでいる様子が分かる。

短頸壺は、短頸壺Bがこの段階で消失しているようで、その数が激減しており様相がよく分からなくなる。短頸壺Aは、口縁部の強調された形態である点は前段階と変わらないが、胴部の張りが増し肩部がしっかり形成されるようになる。

鉢はいづれも前段階の形式を継承しているようである。鉢B1は、無花果型の体部のもと体部最大径が下方に下がり、体部中位でそれを測るものや下脹れになるものとが認められるようになる。鉢Cは、把手を２ヶ所に付し口縁部がやや幅広の鉢C1が見られる。

雌鹿塚Ⅳ式期

弥生時代の終末段階として、雌鹿塚遺跡第13号住居址、豆生田遺跡21号住居址、瀬戸川遺跡第４土坑、月の輪上遺跡竪穴住居跡18、同竪穴住居跡53、同溝状遺

構01、同溝状遺構20などが基準資料となる。

台付甕は、前段階同様台付甕Cが主体となる。台付甕Cの中には長胴で肩部が強調された型式が創出され、その型式分化が図られる。台付甕E2は、胴部の張りが弱くなり口縁部の屈折が不明瞭になるようであるが、この段階の前半には消失しているようで、その例はあまり見ない。この段階の後半には、各台付甕の大型化が目立つと共に、台付甕H2や台付甕Iなどの大型品が登場し、一定量を占めるようになる。

短頸壺Aは、器高に対して短い口縁が付される短頸化が図られ、胴部の張りも増す。また、これは小型品が数を減らし、容量の規格化が図られ、出土数が目立つようになる。ただし、この段階を以て消失しているようで、以後の段階に継続しない。

高坏は、良好な出土を示す類例が少なく、その型式変化についてはまだよく分からない。この段階に高坏A1と高坏B1の出現が明らかになる。この両型式は鉢状の坏部や口縁部を屈折させる点などそれぞれ高坏D、高坏Eとの関連が窺われ、それらをモチーフとして在地で創出された可能性が考えられる。

鉢は、鉢A1がこの段階で口縁部の外方への屈曲が弱まり、鉢A2へと変化している。鉢C1は体部の最大径が下降し、下脹れのものになる。ただし、この段階を以て消失しているようである。

大廓Ⅰ式期

丸ヶ谷戸遺跡前方後方型周溝墓や竪穴住居跡02出土の一括資料に代表される伊勢湾沿岸地域を主とした外来系土器の顕著な搬入を契機として設定される。基準となる資料は、上記以外に雌鹿塚遺跡第38号住居址、二本松遺跡第1号周溝墓（瀬川・山内・小野1978)、北神馬土手遺跡第1号住居址、築地鼻北遺跡ＳＢ０４(沼津市教育委員会1985)、同ＳＫ０１、八兵衛洞遺跡Ｂ－２号住居址、同Ｃ－５号住居址、同Ｃ－９号住居址、上石敷遺跡Ｋ－４号竪穴住居跡など丘陵部に展開する諸遺跡を中心にその数は多い。

外来系土器としては、台付甕A、高坏G、小型高坏の各型式、小型器台Aなどの伊勢湾沿岸地域のものが目立って認められるが、高坏Jや畿内V様式系の平底甕または庄内甕と称される丸底甕などに代表される畿内系の形式や北陸系、近江系あるいは播磨・吉備系のものまで散見され、その搬入経路は多岐に亘るようである。

台付甕は、台付甕Aの登場が注目されるが、この段階では尾張のＳ字甕Ａ類新相からＢ類古相（赤塚1990)が確認される。大型品の台付甕H2と台付甕Iは、その出土例が増え、盛行するようになる。

広口壺では、定型化した広口壺A3の出現を大きな特徴として上げられる。また、広口壺Cの小型品が顕著な出土を示すようになる。

高坏は、高坏A1から変化した高坏A2などの在地系の型式がこの段階の前半まで継続するが、以後なくなるようである。

鉢は、鉢A2と鉢Bが前段階から継続する。

大廓Ⅱ式期

外来系の形式である小型器台が、器種構成の中で一定量を占める段階として認識される。ただし、東駿河においては、これを含む良好な一括資料はまだ確認されていない。この段階の基準資料としては、八兵衛洞遺跡Ａ－19号住居址、同Ｂ－28号住居址、下長窪上野遺跡第12住居址、月の輪平遺跡第56号住居址、上石敷遺跡Ｍ－１溝状遺構などの一括資料が上げられる。

台付甕は、この段階で台付甕A、幅広の口縁部が直立気味に付されるもの（台付甕C1)、伝統的な台付甕C2、『く』の字に口縁部が屈折するもの（台付甕C2)、大型の台付甕H2の各型式が主体となり次段階に継続される。これらとは逆に、台付甕F、大型の台付甕Iがこの段階で消失しているようであり、伝統的な台付甕C1がその数を大きく減らしている。

広口壺は、広口壺A1、広口壺A3、広口壺B2、広口壺C2が主体となり、広口壺C1も一定量を示す。これら以外は数が減り、その存在がはっきりしなくなる。

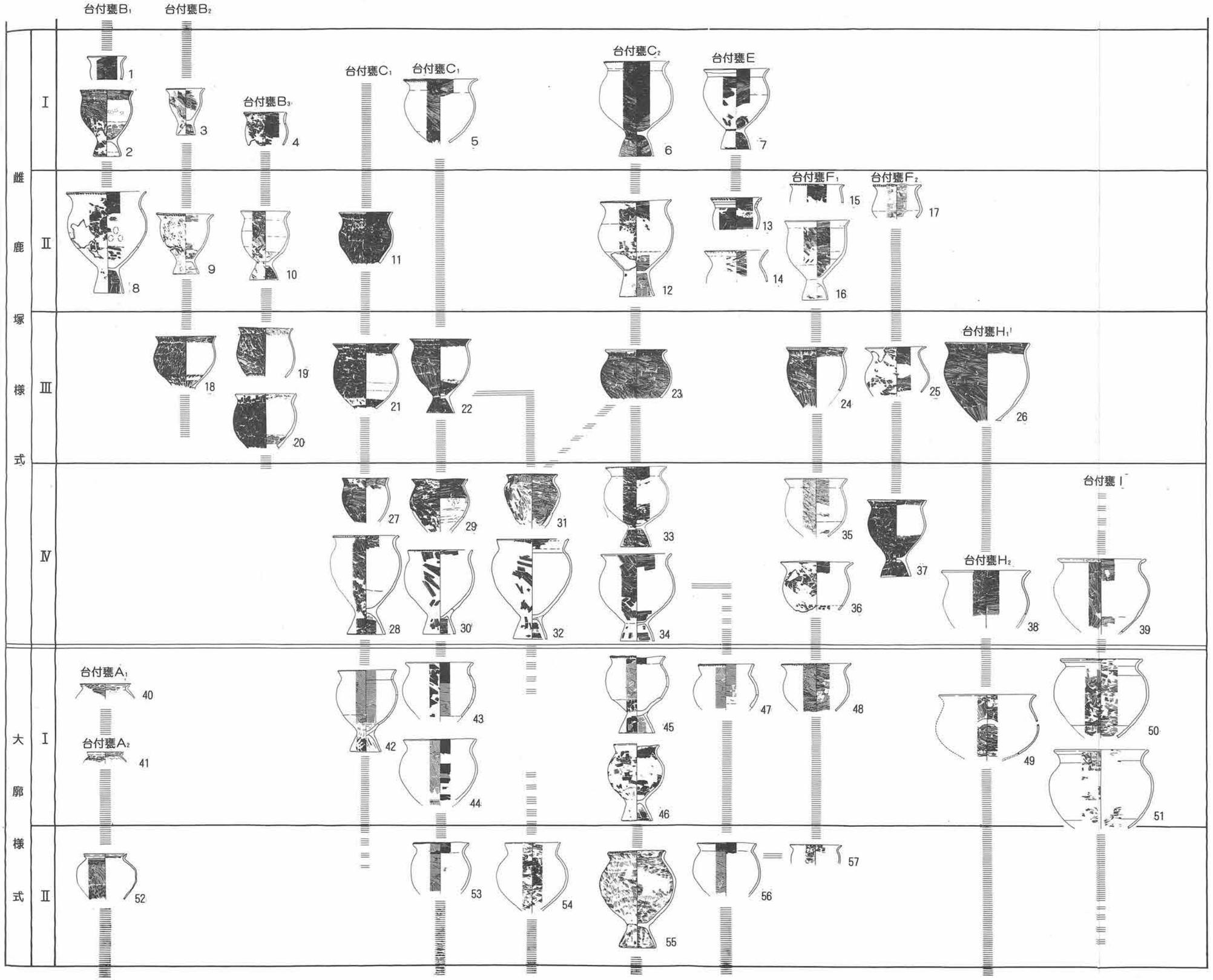
高坏は、高坏Gが主体を示す。これは、坏部が浅くく大きく広がるようになり、口縁が強めに外傾するようになる。

小型高坏は、小型高坏Dがこの段階で消失するようである。

小型器台は、前段階の型式の他に、受部が直線的に大きく外傾するものが登場し、型式的なバラエティーが確認されるようになる。

鉢は、鉢A2、鉢B1、鉢B2 が前段階から継続しているようであるが、主体となるのは鉢Ｂ1のようである。

当地と隣接する西相模で、外来系土器が顕著な出土を示す小田原市千代南原遺跡第Ⅳ地点１号土坑（小田原市教育委員会1897)の良好な資料の大半は、この段階のものと思われる。



図－16　東駿河の弥生時代後期～古墳時代前期土器編年図 ①

雌鹿塚様式

大廓様式

広口壺A₁　広口壺A₂　広口壺B₁　広口壺B₃　広口壺C₁　高杯　短頸壺B　鉢A₁　鉢B₁　鉢B₂

Ⅰ

58　59　60　61　62　63　64

Ⅱ

65　66　67　68　69　71　72　広口壺E₂　短頸壺A　70　高杯D　73　高杯E　74　鉢C　75　76　77　78

Ⅲ

79　80　81　82　83　84　85　86　87

Ⅳ

88　89　90　91　92　93　94　95　高杯A₁　96　高杯B₁　97　高杯B₂　98　99　100　高杯A₂　101　102

Ⅰ

広口壺A₃　103　104　105　106　107　108　109　110　111　112　113　高杯G　114　115　高杯A₂　116　小型高杯A₁　小型高杯B　小型高杯C　小型高杯D　小型器台　117　118　119　120　121

Ⅱ

122　広口壺B₂　123　124　広口壺C₂　125　126　127

図－17　東駿河の弥生時代後期～古墳時代前期土器編年図 ②

遺跡名	出土遺構	編年図番号
滝戸遺跡	ＳＫ１６	125
	ＳＢ２６	66, 74
泉遺跡	第７住居址	41
	第１号溝	71
月の輪上遺跡	竪穴住居跡18	94
	竪穴住居跡53	29, 31
	竪穴住居跡58	79, 80, 82, 84, 87
	溝状遺構01	30, 32, 34, 88, 91
	溝状遺構20	28, 38, 39, 92, 93, 101, 102
	防火水槽工事地点	90
月の輪平遺跡	第56号住居址	52
	第59号住居址	122
	遺構外	40
丸ケ谷戸遺跡	竪穴住居跡02	46, 117
	前方後方形周溝墓	115
上石敷遺跡	Ｋ－４号竪穴住居跡	49, 119, 120
	Ｍ－１溝状遺構	54, 57
向山遺跡	昭和53年発見土器	81, 85
雌鹿塚遺跡	第１号住居址	8, 13, 75
	第12号住居址	4, 62, 63
	第13号住居址	36, 89, 95, 99
	第15号住居址	12, 14, 76
	第28号住居址	1, 59, 64
	第31号住居址	25
	第35号住居址	48
	竪穴状遺構－１	9, 69, 73, 77
	第１号土坑	15, 70
	遺構外	17, 58, 65, 67, 68,
豆生田遺跡	21号住居址	33, 35
	32号住居址	3, 6, 61
	43号住居址	5, 7, 60
	72号住居址	10, 16, 72, 78
御幸町遺跡	136号住居址	2
	ＳＤ－１	96, 97
	Ⅲ－13号住居址	98
瀬戸川遺跡	第11住居址	11
	第18住居址	20, 23
	第20住居址	21
	第24住居址	18, 19, 22, 24, 26, 83, 86
	第１土坑	100
	第４土坑	27, 37
西大久保・奈良橋向遺跡	遺構外	118, 121
二本松遺跡	第１号周溝墓	104, 107, 109, 110, 112, 116
北神馬土手遺跡	第１号住居址	103, 105
築地鼻北遺跡	ＳＢ０４	51, 106, 113
	ＳＫ０１	50
八兵衛洞遺跡	Ａ－19号住居址	124
	Ｂ－２号住居址	111
	Ｂ－28号住居址	53, 56
	Ｃ－５号住居址	44, 108
	Ｃ－９号住居址	42, 43, 45, 47, 114
下長窪上野遺跡	第12住居址	55, 123, 126
	第16住居址	127

第４表　土器編年図使用資料一覧表

Ⅳ．まとめにかえて

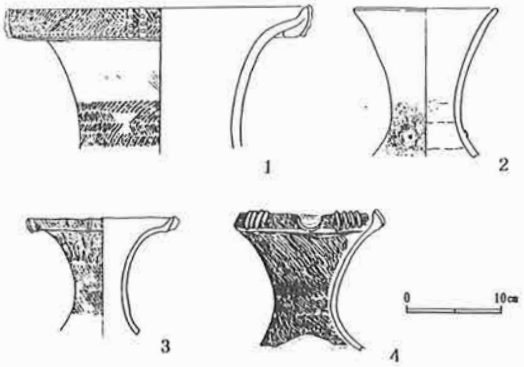
― 滝戸遺跡の時代設定 ―

ここでは、前節の土器編年を踏まえた滝戸遺跡における集落の動向を検討してみることにする。

滝戸遺跡は５回の調査が実施されているが、各調査地点とも第Ⅰ次と第Ⅱ次調査の関連以外、厳密なそれは追及できるものではないし、各地点とも調査面積がそれほど広くないため、集落全体の構造やその変遷などを総体的に考える事は難しい。特に、調査地点が他の箇所と大きく離れる第Ⅳ次調査地点については、潤井川を挟んで隣接する同時期の泉遺跡との関連も考慮しなければならない位置関係にあり、広域的な見地での考察が必要となる。更に、この潤井川流域の弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、ほとんど遺物を内包しないという特徴も作用して、各遺構毎の時間的な変遷を追うこともできない。このような状況の中で、一括資料の出土が認められた遺構を軸に、大概的な集落の変遷を辿ってみることにする。

居　住　域

最も最初に住居が構築されたのは、第Ⅴ次調査ＳＢ２６・ＳＢ２７・ＳＢ２８・ＳＢ２９の重複する部分で確認される。ＳＢ２８は雌鹿塚Ⅰ式期に比定され、ＳＢ２６の一括資料は、雌鹿塚Ⅱ式期の良好な資料と捉える事ができる。そして、これらの住居址により切られているＳＢ２９は、それら以前の住居になる可能性が考えられるが、出土遺物は皆無で実態はよく分からない。東駿河においても雌鹿塚Ⅰ式期以前の状況は、まだよく分からないが、弥生時代中期と雌鹿塚Ⅰ式期を直接結ぶにはまだ型式的な隔絶が大きく、不確実な様式が存在しそうである。それが雌鹿塚様式の中で扱えるのかそれ独自のものなのか、弥生時代後期を考える上で重要な今後の課題である。図－18には、この段階のものと思われる資料を提示してみた。竪穴住居出土例は１の神崎遺跡第４住居址だけで、他は溝中や遺構外のものである。１は大型の広口壺Ａ2に相当するが、複合部の幅がまだ比較的狭い。３は広口壺Ａ1になるものであるが、頸部が長頸気味で、外傾する複合部の幅も狭い。４は複合部が内傾するが、広口壺Ａ2の意匠を備えている。これも長頸気味の頸部で、複合部の幅は１同様に狭い。これら３点は、複合部に縄文＋貼付文、頸部に横位の縄文がそれぞれ施文さており、加飾性に富んでいる点や複合部の幅が狭く未発達である点などが共通している。２は弥生時代中期以来の伝統的な長頸壺の系譜の中で捉えられるものであり、頸部に縄文＋貼付文が施文されている。



1…神崎遺跡第４住居址　2…御幸町遺跡ＳＤ－１
3…西大久保・奈良橋向遺跡遺構外　4…雌鹿塚遺跡遺構外

図－18　弥生時代後期初頭の土器

この雌鹿塚Ⅰ式期以前の弥生時代後期初頭については、暫定的であるが、広口壺の内で口縁部に折り返しの技法が出現する段階と認識され、広口壺Ｂと広口壺Ａ2の登場が弥生時代中期との画期を規定する大きな要素となると考えられる（中嶋1991）。

第Ⅴ次調査では、上記以外の住居の他にＳＢ２２から高坏Ｃと甕部内面の全体をハケ調整している台付甕Ｃ2が共伴しており、大廓Ⅰ式期段階のものとして捉えられる。また、ＳＢ３２やＳＢ３９出土の台付甕は、やや長胴気味の台付甕Ｃ2であるが、口縁端部のヨコナデや内面全体に対するハケ調整、外面の口縁部タテ、胴部ヨコとするハケメの方向性の乱れなどから、これらも大廓Ⅰ式期に比定される。それは、竪穴住居の長軸方位の類似性や、いずれも方形基調の平面形である点などから傍証される。

ＳＢ３２やＳＢ３９の周辺に密集する竪穴住居群は大廓Ⅳ式期（渡井1996）のＳＺ２１の方形周溝墓に切られて、それより古く、ＳＢ３２、ＳＢ３９の重複関係を踏まえると、雌鹿塚Ⅳ式期～大廓Ⅲ式期（渡井1996）の中で、その大半を捉えることができ、その中心は大廓Ⅰ式期～大廓Ⅱ式期に置く事ができる。

第Ⅰ次、第Ⅱ次調査では畿内系の小型壺が出土しているＳＢ１８が大廓Ⅰ式期の竪穴状遺構であり、上記のＳＢ２２、ＳＢ３２、ＳＢ３９などとの方位的な類似性が指摘できる。他の竪穴住居は、後述する方形周溝墓群よりも古い竪穴住居群で、雌鹿塚様式の中で捉えられるものである。ＳＢ２０とした掘立柱建物もこの段階のものであろう。

第Ⅳ次調査で確認されている竪穴住居群は、各住居とも土器の出土がほとんどなく、時代設定がしにくいが、ＳＢ５４出土の小型高坏Ａの破片やこの居住域から採集されている土器に見られる粗製の小型壺である広口壺Ｃ、胴部整形としてヘラミガキが認められる台

付甕の存在などから大廓Ⅰ～Ⅱ式期の年代が与えられる。 そして、ＳＢ６２とＳＺ５３との重複からも確認されるように、隣接する方形周溝墓群よりもこの竪穴住居群の方が新出の居住域である事が確認される。

墓　　域

墓域としては、第Ⅰ次と第Ⅱ次調査で確認されているＳＺ０５の西溝が、大廓Ⅱ式期の広口壺Ｃ2が出土しているＳＫ１６によって切られている事から、ＳＺ０５をそれ以前のものと捉えられるが、相互に関連が窺える畿内系の小型壺が出土しているＳＢ１８の存在を考えると大廓Ⅰ式期に比定されようか。この西溝と同一の方向のＳＫ１６は、ＳＺ０５の溝が埋まってから方形周溝墓を意識して構築されており、この墓群造営段階に機能したものと捉えられ、その葬制になんら関わっていたと思われる施設である。この土坑の年代設定は、ある程度この区域の墓群の造営年代を規定していると思われ、その下限を大廓Ⅱ式期に求める事が可能であろう。また、ＳＺ０４や台付甕Ｄの出土が確認されているＳＺ１７などもその方向性の類似から同一の墓群としてＳＺ０５と近い時期のものと捉えられる。第Ⅰ、Ⅱ次調査区で確認されている方形周溝墓群は、大廓Ⅰ～Ⅱ式期を中心とした段階にその時代を求める事ができる。

第Ⅱ次調査区に近接する第Ⅴ次調査区で確認されているＳＺ２１からは、大廓Ⅳ式期（渡井1996)の良好な土器群の出土を見ている。

第Ⅳ次調査では、ＳＺ４４とＳＺ５２、ＳＺ５３で完形土器の出土が確認されている。ＳＺ４４南溝中の土坑状施設出土の一括資料は、雌鹿塚Ⅳ式期の前半段階に比定され、大型の広口壺Ａ2が確認されているＳＺ５３も雌鹿塚Ⅳ式期段階のものと捉えられる。また、ＳＺ５２から出土している広口壺の胴部は、その滑らかに屈曲する頸部の形状より雌鹿塚Ⅲ式期段階のものとすることができる。

これらの完形土器以外では、ＳＺ４７が位置するＬ－17グリッドにおいて、折り返し部に棒状の貼付文を全周させる広口壺Ｂ1の破片が採取されている。これは、近接する泉遺跡などでも確認されている型式（富士宮市教育委員会1981）で、弥生時代後期の中でも比較的古い段階に認められ、雌鹿塚Ⅰ～Ⅱ式期に対応するものと考えられる。

第Ⅳ次調査地点での遺構の変遷は、まず雌鹿塚Ⅰ式期かⅡ式期に調査区中央のＳＺ４７やＳＺ４８が構築され、以後東西両方向に拡散するように周辺に墓域が広がっていった状況が窺える。それは、例えば、その東側に展開しているＳＺ５１～５３の関係からも確認される事で、土器型式の検討から最も東側のＳＺ５３が雌鹿塚Ⅳ式期で、その西側のＳＺ５２が雌鹿塚Ⅲ式期のものと捉えられ、遺構の重複関係からＳＺ５１→ＳＺ５２の前後関係が確認されていることから、それらの構築は、ＳＺ４９に近いＳＺ５１からＳＺ５２、ついでＳＺ５３の順序を示している。

また、南北に溝を共有するＳＺ４２とＳＺ４３、ＳＺ４４とＳＺ４５、ＳＺ４７とＳＺ４８は、いづれも潤井川に近い北側のものが後出のものであることが、調査で確認されている。

この墓域は、雌鹿塚Ⅰ式期から大廓Ⅰ式期まで造営が窺われる方形周溝墓群であり、調査区域の中央から東西への広がりと南から北へ展開する南北列の最低２基の方形周溝墓とする図式が想定される群構成を示すものである。そして、その東に展開する居住域は、この墓域より後に造られた集落として把握され、その転換の時期を大廓Ⅰ式期の中に求められるものと考えている。

以上が滝戸遺跡における各調査地点の居住域と墓域に分けた遺構群の変遷であるが、それぞれの時間的な相互の関連を確認すると、まず、雌鹿塚様式段階の居住域として、第Ⅴ次調査のＳＢ２６やＳＢ２８などその調査区の東側の竪穴住居群とＳＢ１８以外の第Ⅰ次、第Ⅱ次調査で確認された竪穴住居がそれに相当する。そして、これらは、三つの調査区を通して見ると掘立柱建物を含む竪穴住居群が弧状に展開する様子が窺えるのである。また、この段階の墓域としては、第Ⅳ次調査の方形周溝墓群が当てられるが、第Ⅴ次調査地点から約 100m程の距離を有している。

時代が下がって、大廓様式の前半段階（大廓Ⅰ～Ⅱ式期）になると、第Ⅴ次調査のＳＢ３２やＳＢ３９などの調査区の西側を中心に展開する竪穴住居群と第Ⅳ次調査で確認されている竪穴住居群が居住域と認識され、墓域として、第Ⅰ次、第Ⅱ次調査で確認されたＳＢ１８を含む方形周溝墓群がそれに当てられる。このように、この段階の居住域と墓域は、比較的近接して同一の台地上に展開して造営されていた事が分かる。

第Ⅴ次調査で確認されているＳＺ２１は、大廓様式の後半段階（大廓Ⅳ式期）の方形周溝墓であるが、これに対応する竪穴住居は、この滝戸遺跡においてまだ確認されていない。

第Ⅰ次調査では２基の円墳が確認されているが、その内、ＳＺ０２は、図－44の11の須恵器模倣坏より５世紀後半代の古墳と認識される。これらの古墳が確認された事で、滝戸遺跡が立地する丘陵上に、富士地区では比較的古い段階に相当する５世紀後半から６世紀にかけての群集墳が存在するものと理解される。

＜引用・参考文献＞

赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

足立順司 1995 『長崎遺跡Ⅳ（遺物・考察編）』静岡県埋蔵文化財調査研究所

伊藤淳史 1996 「太平洋沿岸における弥生文化の展開－駿河湾岸中期弥生土器からの検討－」
『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会20回到達記念論文集

植松章八 1981 「Ⅲ住居址床面の二重構造について」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会

小田原市教育委員会 1987 『千代南原遺跡第Ⅳ地点』

小野真一・笹津備洋 1969 「沼津市大廓発見の住居址と土器」『歴史科学』第20輯

小野真一 1970 「第七章　総合的考察」『目黒身』沼津市教育委員会

加納俊介 1981「３　出土土器の編年的位置(2)－月の輪古について－」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会加納俊介 1986「東海地方」『シンポジウム“月影式”土器について　報告編』石川考古学研究会

小山岳夫 1990「第３章　第４節　佐久地方中期後半～後期の弥生土器編年」『赤い土器を追う』佐久考古６号

佐藤由紀男 1996 「遠江・駿河（中期）」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会20回到達記念論文集

静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『御殿川流域遺跡群Ⅱ中島西原田遺跡・八反畑前田遺跡・梅名大曲田遺跡』清水町教育委員会 1993 『瀬戸川遺跡－第３次調査報告書－』

杉山治夫 1979 「北神馬土手遺跡とその遺物」『沼津市歴史民俗資料館紀要』３　沼津市歴史民俗資料館

鈴木敏則 1985 「欠山式の地域性」『転機』創刊号

鈴木敏則 1991 『梶子遺跡Ⅶ』財団法人浜松市文化協会

鈴木敏則 1996 「遠江・駿河（後期）」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会20回到達記念論文集

瀬川裕市郎・山内昭二・小野真一 1978 「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」『沼津市歴史民俗資料館紀要２』
沼津市歴史民俗資料館

立花実 1993 「相模における東海系土器の受容」『転機』４号

長泉町教育委員会 1979 『下長窪上野遺跡』

中嶋郁夫 1988 「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』２号

中嶋郁夫 1991 「東遠江における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第８回東海埋蔵文化財研究会

中嶋郁夫 1991 「駿河における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第８回東海埋蔵文化財研究会

韮山町教育委員会 1972 『田方郡韮山町神崎遺跡緊急調査概報』

沼津市教育委員会 1970『目黒身』

沼津市教育委員会 1979 『御幸町遺跡第１次発掘調査概報』

沼津市教育委員会 1980『御幸町遺跡第２次発掘調査概報』

沼津市教育委員会 1981『御幸町遺跡第Ⅲ次発掘調査概報』

沼津市教育委員会 1981『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』

沼津市教育委員会 1985 『築地鼻北遺跡発掘調査概報』

沼津市教育委員会 1989 『豆生田遺跡発掘調査報告書』

沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』

比田井克仁 1995 「二重口縁壺の東国波及」『古代』第 100号　早稲田大学考古学会

富士市教育委員会 1991 『向山遺跡』

富士宮市教育委員会 1977 『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅰ次）概報』

富士宮市教育委員会 1978『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅱ次）概報』

富士宮市教育委員会 1980 『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅲ次）概報』

富士宮市教育委員会 1983 『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅳ次）概報』
富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群』
富士宮市教育委員会 1981『月の輪遺跡群Ⅱ』
富士宮市教育委員会 1982『月の輪遺跡群Ⅲ』
富士宮市教育委員会 1994『月の輪遺跡群Ⅳ』
富士宮市教育委員会 1996 『月の輪遺跡群Ⅴ』
富士宮市教育委員会 1985『上石敷遺跡』
富士宮市教育委員会 1993「富士宮市遺跡調査報告　7.NO.105泉遺跡　8.NO.24権現遺跡」『富士宮の遺跡』
富士宮市教育委員会 1994『猪之頭養鱒場内遺跡』
三島市教育委員会 1996 『西大久保・奈良橋向遺跡』
米田敏幸 1991 「2　土師器の編年　1　近畿」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器　雄山閣
渡井英誉 1993「　付編　弥生時代Ⅳ－3様式について－弥生時代第Ⅳ様式の画期を模索する－」
『富士宮の遺跡』富士宮市教育委員会
渡井英誉 1994a「月の輪平遺跡第1号住居址出土のS字甕」『庄内式土器研究』Ⅴ　庄内式土器研究会
渡井英誉 1994b「東駿河における庄内式期の様相」『庄内式土器研究』Ⅶ　庄内式土器研究会
渡井英誉 1996 「東駿河における布留式併行期の様相（前）－土器編年の設定－」『静岡県考古学研究』№28
静岡県考古学会

＜　註　＞

註1　夏梅木遺跡については、三島市夏梅木地区の宅地造成に伴う発掘調査が三島市教育委員会によって実施されている。調査担当者の鈴木敏中氏のご厚意により出土資料を実見させていただいた。

文献　三島市教育委員会 1991『夏梅木遺跡群』（概報）

註2　山木遺跡は、1950年以来数次の調査により水田跡やそれに伴う木製品や土器が多量に検出された著名な遺跡で、古墳時代前期を主体とする時代設定が行われている（小野1990）。1995年に県立韮山高等学校のプールの改修に伴い静岡県埋蔵文化財調査研究所が、中世の韮山城跡として発掘調査を実施した際に、水田跡と同時期の集落として竪穴住居24軒、掘立柱建物12棟が調査されており、その出土土器に搬入品と思われる台付甕A1が確認されている。この資料については、静岡県埋蔵文化財調査研究所の羽二生保、笹原芳郎、岩崎しのぶの各氏にご教示いただいた。

文献　小野真一 1990 「山木遺跡」『静岡県史』資料編1考古一
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『静岡県埋蔵文化財調査研究所　年報』ⅩⅡ

註3　沼津市文化財センター山本恵一氏のご厚意により高坏Gが出土している八兵衛洞遺跡C－9号住居址出土土器を実見する機会が得られた。図－17の土器編年図に使用している図は、その際に再実測させていただいたものを使用している。

文献　沼津市教育委員会 1981『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』

＜ 参 考 ＞

野中用水表採資料

野中用水は、滝戸遺跡と野中向原遺跡とを画する谷部から滝戸遺跡の範囲と推定される東側を巡り、潤井川に結ばれている用水路である。図－56に掲載した土器は、野中用水と潤井川とが接続する部分の付け替え工事の際に出土したもので、広口壺B1、広口壺B3、広口壺C1、台付甕、小型鉢などが確認されている。これらの土器は、滝戸遺跡第Ⅳ次調査開始直前に確認されたものであり、また、その工事地点は第Ⅳ次調査範囲の東側に近接しており、第Ⅳ次調査区の東側に展開する集落に関連する可能性の強い地点である。採集土器の内、全体の器形が分かる180は頸部が『く』の字に屈曲する大廓Ⅱ式期段階の広口壺C1であり、集落の時期と整合していることが分かる。

第Ⅰ次

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（ｃｍ）	備　　考
ＳＺ０１	１６．０	１２．０	２０	
ＳＺ０２	６．３	５．３	３０	円墳
ＳＺ０３	８．４	――	３５	円墳
ＳＺ０４	――	――	２０	
ＳＺ０５	８．０	――	３０	ＳＺ０５→ＳＫ１６

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（ｃｍ）	備　　考
ＳＢ０６	３．７２	３．１	６	
ＳＢ０７	４．９４	４．１６	８	ＳＢ０７→ＳＺ０５
ＳＢ０８	――	――	１０	
ＳＢ０９	――	――	――	炉跡のみの確認

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（ｃｍ）	備　　考
ＳＫ１０	１．１５	――	１５	
ＳＫ１１	１．０	――	２７	
ＳＫ１２	１．３５	――	１２	
ＳＫ１３	２．９	１．７５	３５	
ＳＫ１４	１．５５	０．９５	――	
ＳＫ１５	２．３	１．９	１７	
ＳＫ１６	３．３	１．４５	２５	

第Ⅱ次

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（ｃｍ）	備　　考
ＳＺ１７	５．４	――	６０	

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（ｃｍ）	備　　考
ＳＢ１８	２．４	２．２３	２０	
ＳＢ１９	――	――	１８	ＳＢ１９→ＳＺ１７
ＳＢ２０	４．０５	３．２５	３０	

第Ⅴ次

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（ｃｍ）	備　　考
ＳＺ２１	９．１５	――	５５	集落より新しい

第５表　遺構一覧表①

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備　　考
SB22	——	——	25	
SB23	——	——	45	
SB24	——	——	15	SB24→SB23
SB25	——	——	15	
SB26	6．8	4．9	25	SB26→SB22
SB27	——	——	——	
SB28	7．5	5．95	30	SB28→SB27
SB29	——	——	——	SB29→SB28
SB30	2．65	——	6	
SB31	4．8	4．2	20	
SB32	4．55	3．95	15	SB32→SB31
SB33	2．2	——	12	SB33→SB32
SB34	3．05	——	8	SB34→SB32
SB35	——	——	30	
SB36	4．5	3．8	10	SB36→SB35
SB37	——	——	10	SB37→SB36
SB38	4．85	4．2	15	
SB39	4．75	4．28	11	SB39→SB38
SB40	——	——	——	SB40→SB39
SB41	——	——	22	

第Ⅳ次

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備　　考
SZ42	9．15	6．7	30	
SZ43	——	——	20	SZ43→SZ42
SZ44	——	——	55	
SZ45	——	——	25	SZ45→SZ44
SZ46	9．2	7．75	35	
SZ47	——	4．95	40	
SZ48	——	6．75	35	SZ48→SZ47
SZ49	——	7．0	35	
SZ50	——	——	18	
SZ51	10．3	10．2	60	SZ51→SZ52
SZ52	——	7．25	30	
SZ53	6．6	6．5	50	SZ53→SZ62

第6表　遺構一覧表②

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備　　考
SB54	3．3	2．6	15	
SB55	4．1	3．3	12	
SB56	2．75	2．2	15	
SB57	4．8	4．2	20	
SB58	——	——	35	
SB59	——	——	——	SB59→SB60
SB60	——	——	6	
SB61	4．3	3．8	15	
SB62	3．3	3．0	30	

遺構番号	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	備　　考
SK63	4．35	0．95	20	SK63→SK64
SK64	2．45	1．1	55	

第7表　遺構一覧表③

No.	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
I 1	———	台付甕B	18.4 —— ——	胎土　きめは細かく石英、長石が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　橙色	外面　口縁部ナナメハケメ→胴部ヨコハケメ（8本／cm） 口唇部　刺突文	1/4 以下 外面スス付着
2	———	——	—— —— 2.9	胎土　きめが細かく長石が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	外面　タテハケメが残る 内面　ナデ	底部1/3 存
3	SK16	広口壺C2	11.8 22.3 8.8	胎土　きめが細かく黒色砂粒の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　（外～口縁部内）橙色 （内）　黄灰色	外面　ヘラミガキ、口唇部、頸部ヨコミガキのほかはタテミガキ　タテ→ヨコ 内面　胴部上位と底部ヨコハケメ(9本/cm)	2/3 存 口縁部内外面赤彩
4	SZ05	壺	—— —— 9.7	胎土　きめが粗く、φ2～3㎜の小石が多い。 焼成　普通 色調　（外）にぶい黄橙色 （内）灰黄色	内面　胴部ヨコハメ(8本/cm)	底部全周 外面赤彩
5	SZ03	広口壺B3	13.8 —— ——	胎土　きめはやや粗く、φ1㎜の砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　黄橙色	口縁部　内面にハケメが残る（10本/cm）	口縁部1/3 存 口縁部赤彩？
6	———	広口壺C1	14.4 —— ——	胎土　きめはやや粗く、φ1㎜の小石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　ハケメ 文様　口縁部内面縄文(LR)	1/4 以下
7	———	広口壺E	0.2 —— ——	胎土　きめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色		口縁部1/4 以下
8	———	広口壺B1 （小型）	7.1 —— ——	胎土　きめは細いが、φ2～3㎜の小石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	折り返し部刺突文	口縁部1/3 存
9	———	——	—— —— 7.2	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 色調　（外）にぶい橙色 （内）灰黄褐色	外面　ヨコミガキ	口縁部1/4 以下
10	———	——	—— —— 4.2	胎土　きめが粗く、長石の混入が目立つ。 焼成　やや軟質 色調　橙色	外面　タテハケメが残る 底部　ドーナツ底	底部全周 ドーナツ底
11	SZ02	須恵器 模倣坏	10.1 4.8 ——	胎土　非常に緻密な胎土で、混入物が少ない。 雲母が、少量見られる。 焼成　良好 色調　明黄（茶）褐色	体部外面ヘラケズリ→粗い ヘラミガキ 口縁部外面～内面ヨコナデの後粗いヨコミガキ	須恵器模倣坏 ほぼ完存
12	SZ02	須恵器 高坏	—— —— ——	胎土　緻密で、石英が目立つ。 焼成　硬質 色調　灰色	外面　突帯 文様　波状文	須恵器
13	SZ02	石製模造品	長さ 4.2 幅 2.1 厚さ 0.2 重さ3.4g	石質　滑石		石製模造品？ 孔径　0.55 （内）0.30
14	SZ02	広口壺B3	—— —— ——	胎土　きめが細かく、長石、石英が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	文様　口縁部内面ハケ状工具よる押引文	
15	SZ05	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい褐色	外面　タテハケメ→口唇部ヨコハケメ 内面　ヨコハケメ(7本/cm)→口唇部ヨコナデ	外面スス付着
16	SZ05	高坏	—— —— ——	胎土　石英が、目立つ。 焼成　やや硬質 色調　浅黄橙色	外面　ナナメハケメ(7本/cm)→上位ナデ 内面　ナナメハケメ＋端部ヨコハケメ→中位ナデ	搬入品であろう？
17	SZ05	広口壺E	—— —— ——	胎土　細い黒色砂粒の混入が多い 焼成　普通 色調　橙色	外面　タテハケメ(1本/cm) 口縁部内面～端面縄文（LR,RL）	

第8表　遺物観察表①

No	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
I 18	SZ05	広口壺E	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、黒色砂粒が目だつ。 焼成　普通 色調　明黄褐色	文様　内面縄文（RL） 外面．ナナメハケメ(6本/cm)	
19	——	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめは粗く長石、が目立つ 焼成　やや硬質 色調　（外）橙色 （内）にぶい褐色	外面　タテハケメ(9本/cm)口唇部ヨコナデ 内面　口縁部タテハケメ口唇部ヨコナデ 肩部ヨコナデ	
20	——	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　タテハケメ（11本/cm)口唇部刺突文 内面　ヨコハケメ	
21	——	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい褐色	外面　タテハケメ(7本/cm)→口唇部ヨコハケメ 内面　ヨコハケメ→口唇部ヨコナデ	
22	——	台付甕A	—— —— ——	胎土　長石の混入が、やや目立つ 焼成　硬質 色調　浅黄色	外面　粗いタテハケメ(5本/cm)	S字甕搬入品
23	——	広口壺B3	—— —— ——	胎土　きめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色（内）灰褐色	表面肌荒れ、整形不明	
24	——	——	—— —— ——	胎土　きめが粗く、長石を含む。 焼成　普通 色調　（外）明黄褐色 （内）黒褐色	文様　縄文(LR)上部をヨコナデに磨り消す＋連鎖文＋縄文	
25	——	——	—— —— ——	胎土　φ1㎜の小石の混入が顕著 焼成　普通 色調　（外）橙色（内）褐灰色	文様　刺突による横線＋擬縄文＋縄文(RL)	
26	——	——	—— —— ——	胎土　φ1㎜の小石の混入が、目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色 （内）にぶい橙色	文様　擬縄文	
27	——	広口壺B1	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	内外面　ハケ(8本/cm)の後赤彩 口唇部　内面円形貼付文	口縁部　内外面赤彩
28	——	広口壺A1	—— —— ——	胎土　きめが細かいがφ1㎜の小石が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　にぶい黄褐色	複合部　外面棒状貼付文　端面　縄文(LR) 頭部　外面ハケメ(5本/cm)が残る	
29	——	広口壺B1	—— —— ——	胎土　きめが細かく、混入物が少ない。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	内外面　ハケメ(5本/cm)の後ヘラミガキ	
30	SK14	広口壺E	—— —— ——	胎土　きめが細かく、黒色砂粒がやや目立つ。 焼成　やや硬質 色調　橙色	外面　タテハケメ(8本/cm)→口縁部ヨコナデ 頸部タテナデ 口縁部　内面～端面　縄文(RL)	
31	——	——	—— —— ——	胎土　φ1㎜の石英、が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　（外）にぶい橙色 （内）灰黄褐色	外面　口縁部タテハケメ口唇部ヨコナデ 肩部ナデ 内面　口縁部ヨコハケメ(4本/cm)肩部ナデ	
32	——	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめがやや粗く石英、長石が目立つ。 焼成　やや軟質 色調　にぶい赤褐色	外面　ナナメハケメ(9本/cm)口唇部刺突文 内面　ヨコハケメ	
33	——	——	—— —— ——	胎土　やや粗く、石英、が目立つ 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　端部ヨコハケメ→タテハケメ(5本/cm)	脚台端部内面折り返し
34	——	広口壺A2	—— —— ——	胎土　石英、長石、金雲母が含まれる。 焼成　やや硬質 色調　（外）橙色（内）褐灰色	複合部外面　棒状貼付文 外面　ハケメ(8本/cm)	

第9表　遺物観察表②

No.	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特　　徴	調　整　・　文　様	備　考
I 35	———	広口壺Ｂ１	—— —— ——	胎土　長石の混入が少量認められる。 焼成　普通 色調　橙色	文様　口縁端部内面、折り返し部に縄文(LR) 外面　ナナメハケメ(5本/cm)が残る	
36	———	広口壺Ｂ３	—— —— ——	胎土　きめがやや粗く、長石、石英が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	内外面　ハケメの後ミガキ	口縁部内外面赤彩
37	———	広口壺Ｅ	—— —— ——	胎土　ややきめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　（外）明黄褐色 （内）灰黄褐色	文様　口縁部内面縄文(LR)連鎖文	
38	———	——	—— —— ——	胎土　ややきめが細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	文様　縄文(LR,RL)＋円形貼付文 内面　屈曲部	
39	———	——	—— —— ——	胎土　石英、長石、金雲母が見られる。 焼成　普通 色調　橙色	文様　縄文(LR,RL)＋円形貼付文	
40	———	——	—— —— ——	胎土　きめが細かく、石英が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	文様　縄文(LR,)＋円形貼付文	
41	———	——	—— —— ——	胎土　きめが粗く、φ1～2mmの小石が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　（外）橙色 （内）にぶい黄橙色	文様　縄文(LR,RL)＋連鎖文	
42	———	——	—— —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調（外）橙色（内）にぶい橙色	文様　縄文(LR)＋連鎖文	
43	———	——	—— —— ——	胎土　きめは粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色（内）灰黄褐色	文様　縄文(LR)＋連鎖文	
44	———	——	—— —— ——	胎土　小石の混入が目立ち、きめはやや粗い。 焼成　普通 色調（外）橙色（内）にぶい橙色	文様　擬縄文	
45	———	——	—— —— ——	胎土　石英、長石を含む。φ1mmの小石が多い。 焼成　やや硬質 色調（外）橙色（内）にぶい橙色		
II 46	ＳＺ１７	台付甕Ｄ	19.1 —— ——	胎土　きめがやや粗く、砂粒の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　頸部タテハケメ→胴部ヨコハケメ（5本/cm） 折り返し部ハケメ→刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ→胴部ナデ	1/2 存
47	ＳＢ１８	——	—— —— 10.0	胎土　きめが粗く石英、長石が目立つ。 焼成　やや軟質 色調　（外）にぶい黄褐色 （内）橙色	外面　タテハケメ（10本/cm） 内面　ヨコハケメの後ヨコナデ	内面赤彩脚台部1/2存
48	ＳＢ１８	——	—— —— 3.2	胎土　きめが細かく、石英、黒色砂粒を含む。 焼成　普通 色調　（外）にぶい黄橙色 （内）橙色	文様　外面肩部波状文＋円形刺突文 内面　底部ハケメ以外ヨコ方向のヘラナデ	胴部 2/3存 表面剝離 外面赤彩
49	ＳＢ１８	高坏Ｄ	33.7 —— ——	胎土　きめは細かいが、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　浅黄橙色	文様　折り返し部ナナメハケメ（11～12本/cm）＋刺突文	1/4以下
50	———	——	—— —— ——	胎土　きめが、粗く、石英の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	外面　タテミガキ？	接合部全周

第10表　遺物観察表③

No	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
51	———	広口壺B3	19.2 —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　だいだいいろ	文様　折り返し部、口縁部内面縄文(LR) 外面　タテハケメ(7本/cm)	1/4 以下
52	———	広口壺E	9.3 —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　赤褐色	外面　タテハケメ(7本/cm)が残る	1/4 以下 内外面赤彩
53	———	——	—— —— 5.3	胎土　やや緻密で、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　(外)にぶい黄橙色 (内)橙色	外面　ヨコミガキ	胴下半1/2 存
54	———	——	2.0 4.0 1.6	胎土　きめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい橙色	外面　タテハケメ(4本/cm)	1/2 存
55		台付甕	—— —— ——	胎土　やや粗く石英、金雲母、長石が認められる。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ(6本/cm)口唇部面取り 内面　ヨコハケメ	S字甕搬入品
56	———	広口壺A1	—— —— ——	胎土　きめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	外面　ナナメハケメ(7本/cm)＋棒状貼付文	
57	SZ05	広口壺B1	—— —— ——	胎土　黒色砂粒の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ(7本/cm)	
58	———	広口壺E	—— —— ——	胎土　φ1㎜の小石が比較的多く見られる。 焼成　普通 色調　(外)橙色(内)灰黄褐色	文様　口縁部、内面縄文(RL)＋連鎖文	
59	———	広口壺E	—— —— ——	胎土　きめは細かいが、φ1㎜の小石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　ナナメハケメ(6本/cm)をナデ消す。 文様　内面縄文(RL)	
60	———	——	—— —— ——	胎土　きめが細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	口縁部　2段の輪積み痕を残す。 文様　内面縄文(RL)＋円形貼付文	
61	———	——	—— —— ——	胎土　きめが細かく、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　(外)明黄褐色 (内)灰色	文様　刺突による横線＋縄文(LR) 外面　文様帯以外タテミガキ	
62	———	——	—— —— ——	胎土　きめが細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　(外)橙色(内)灰黄色	文様　刺突による横線(2条)＋擬縄文 (羽条文)	
63	———	——	—— —— ——	胎土　石英、長石を少量含む。 焼成　普通 色調　橙色	外面　口縁部タテハケメ　胴部ヨコハケメ (6本/cm)	
Ⅳ 64	SZ44	台付甕C1	14.9 —— ——	胎土　φ2～3㎜の小石を若干含む。 焼成　やや硬質 色調　にぶい黄橙色	外面　口縁部タテハケ→胴部上半ヨコハケ 胴部下半タテハケ(6本/cm) 口唇部ナナメハケメ＋刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ	脚台部欠損 外面スス付着
65	SZ44	台付甕C1	22.3 —— ——	胎土　φ2～3㎜の小石を多量に含む。 焼成　やや硬質 色調　橙色	外面　口縁部タテハケメ→胴部ヨコハケメ (8本/cm) 口唇部ヨコハケメ＋刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ　底部ヨコハケメ 胴部ハケメの後ナデ	脚台部欠損 胴部ハケメの後ナデ
66	SZ44	台付甕D	24.8 —— ——	胎土　小石を多量に含む。 焼成　普通 色調　にぶい橙色～にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ(6本/cm) 折り返し部刺突文 内面　ヨコハケメ	口縁部1/3 存

第11表　遺物観察表④

No.	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特　　徴	調　整　・　文　様	備　考
67	ＳＺ４４	——	—— —— ——	胎土　小石を多量に含み、若干の雲母が見られる。 焼成　普通 色調　（外）橙色 （内）にぶい黄褐色	外面　タテハケメ(8本/cm)	接合部残存 外面スス付着
68	ＳＺ４４	広口壺Ｂ１	19.2 —— ——	胎土　小石を多量に含む。 焼成　普通 色調　橙色	文様　内面　縄文(LR)円形貼付文 口縁部　上位タテハケメ（10本/cm）	口縁部ほぼ完存 内面赤彩が残る
69	ＳＺ４４	——	—— —— 8.3	胎土　小石を多量に含む。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	文様　縄文(LR)２段を連鎖文で区切る＋円形貼付文 底部　木葉痕	胴部ほぼ完存 底部穿孔 68と同一個体の可能性有
70	ＳＺ４４	——	—— —— 7.6	胎土　緻密で小石を含む。 焼成　やや硬質 色調　（外）橙色 （内）黄橙色～灰黄褐色	外面　ヨコミガキ 内面　肌荒れ、下位にヨコハケメ(8本/cm)	胴部下半1/3 存
71	ＳＺ４４	——	—— —— 10.1	胎土　緻密で小石を大量に含む。 焼成　やや硬質 色調　（外）橙色 （内）灰黄褐色	内面　ヨコハケメ(6本/cm) 底部　木葉痕	底部 2/3存
72	ＳＺ４４	——	—— 15.4 10.9	胎土　小石を大量に含み、若干の雲母含む。 焼成　普通 色調　橙色	外面　頸部円形貼付文(1×6)位 底部木葉痕 内面　下位ナナメハケメ上位ナナメ→ヨコハケメ(8本/cm)	胴部完存 底部穿孔
73	ＳＺ４７	広口壺Ｃ１	16.3 —— ——	胎土　きめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色 （内）にぶい橙色	外面　タテハケメ残る（10本/cm）	1/4以下
74	ＳＺ４７	——	—— —— 8.0	胎土　きめがやや粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）にぶい黄橙色 （内）にぶい黄橙色		底部 2/3存
75	ＳＺ５２	——	—— —— 8.3	胎土　小石を多量に含み緻密。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　頸部タテミガキ、胴部ヨコミガキが残る 底部木葉痕　胴部上位ヨコハケメ（12本/cm） 内面　接合部ナデ　口縁部ヨコミガキ	胴部 3/4存
76	ＳＺ５３	広口壺Ａ２（大型）	26.8 —— ——	胎土　小石を多く含み非常に緻密 焼成　普通 色調　（外）にぶい黄橙色 （内）灰黄褐色	文様　頸部　外面縄文（LR,RL,LR）連鎖文、棒状貼付文(5×4) 複合部　縄文(RL,LR）棒状貼付文 外面　頸部タテミガキ 内面　口縁部ヨコミガキ 胴部ヨコハケメ（10本/cm）	口縁部2/3 存 外面～口縁部内面赤彩
77	ＳＺ５３	——	—— —— 9.4	胎土　小石を多く含む。 焼成　普通 色調　橙色	外面　タテハケメが残る　底部　木葉痕 内面　口縁部ヨコミガキ 胴部ヨコハケメ(8本/cm)	胴部完存 外面赤彩
78	———	台付甕Ｃ２	21.6 —— ——	胎土　φ１㎜の小石を多量に含む 焼成　良好 色調　明茶褐色	外面　頸部タテハケメ→胴部ヨコナナメハケメ（8本/cm） 口唇部ヨコハケメの後刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ	
79	ＳＢ６０	広口壺Ｄ	11.6 —— ——	胎土　長石、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）黄灰色（内）橙色	外面　ヨコ→タテハケメ（８本/cm） 口唇部　押し引き状の刺突文	1/4以下
80	Ｋ－２０	——	—— —— 11.3	胎土　石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	外面　ナナメ→タテハケメ(7本/cm) 内面　ヘラナデ	1/4以下
81	Ｌ－１７	——	21.2 —— ——	胎土　小石、雲母を含む。 焼成　普通 色調　（外）青灰褐色 （内）黄褐色	外面　折り返し部連続する棒状貼付文 文様　内面波状文＋縄文(RL,LR）円形貼付文	1/4以下
82	Ｌ－１７	広口壺Ｂ１	21.2 —— ——	胎土　小石、雲母を含む。 焼成　普通 色調　（外）青灰褐色 （内）黄褐色	外面　折り返し部連続する棒状貼付文 文様　内面波状文＋縄文(RL,LR）円形貼付文	1/4以下 81と同一個体か

第12表　遺物観察表⑤

	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特　　徴	調　整　・　文　様	備　考
83	D－4	広口壺B1	—— —— 11.6	胎土　きめは粗く、φ1㎜の小石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　タテハケメ(8本/cm) 内面　下半ヨコハケメ　上半ヨコナデ	脚台部ほぼ完存
84	C－3	台付甕	13.6 —— ——	胎土　小砂を多く含む。	外面　ヨコハケメ→タテハケメ(6本/cm)→胴上半ヨコミガキ　口縁部タテハケメ 内面　ヨコハケメ→胴上半ヨコミガキ 口縁部ヨコハケメ	1/4 以下
85	D－3	台付甕	17.2 —— ——	胎土　きめが粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　やや軟質 色調　褐色	外面　頸部タテハケメ以外ナデ 内面　頸部ヨコハケメ以外ナデ 胴中位接合部棒状工具によるヨコナデ	1/3存 外面スス付着
86	C－3 C－4	鉢A1？	19.0 —— ——	胎土　きめはやや粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	折り返し部刺突文	1/4以下
87	C－3	鉢A1 or 高坏A1？	16.9 —— ——	胎土　きめが粗く、φ1㎜の小石が多い。 焼成　普通 色調　橙色	口縁部　内面ヨコハケメ(7本/cm)	1/4以下 折り返し部～内面赤彩
88	D－3	広口壺C	10.0 —— ——	胎土　きめは細かく、石英、長石が目立つ。 焼成　やや軟質 色調　橙色	口縁部　内外面　指頭痕が目立つ。	1/3存
89	SZ48	——	—— —— ——	胎土　石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色　（内）黄灰色	文様　外面　擬縄文（3 段）	
90	SZ53	高杯D	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）にぶい橙色 （内）明灰褐色	外面　ナナメハケメが残る 折り返し部刺突文 口唇部内面　円形貼付文	
91	SZ53	高坏	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　赤色	口唇部　刺突文	内外面赤彩
92	SB54	小型高坏A	—— —— ——	胎土　石英、長石が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　（外）橙色　（内）灰褐色	内外面　ヨコミガキ 外面　横線文	
93	SB56	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめは細かいが、φ1㎜の小石が多く見られる。 焼成　普通 色調　（外）黒色 （内）にぶい黄褐色	外面　口縁部タテハケメ→胴部ヨコハケメ (10本/cm) 内面　口縁部ヨコハケメ	外面スス付着
94	SB56	台付甕F1	—— —— ——	胎土　きめが粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　口縁部ヨコナデ頸部タテハケメ→ 胴部ナナメハケメ(7本/cm) 内面　口唇部ヨコナデ以外ヨコハケメ	
95	SB56	——	—— —— ——	胎土　石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい褐色	外面　ハケメの後粗いミガキ	断面一部磨滅
96	SB56	広口壺A2	—— —— ——	胎土　きめは粗く、石英、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）褐色 （内）にぶい黄橙色	複合部　縄文(LR)　棒状貼付文	
97	SB56	広口壺B3	—— —— ——	胎土　長石、砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　タテハケメ(8本/cm) 内面　文様　縄文(RL)	
98	SB56	広口壺B1	—— —— ——	胎土　きめは粗い、黒色砂粒が目つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	口唇部にヨコハケメが残る	内外面赤彩
99	SB56	広口壺B1	—— —— ——	胎土　きめがやや粗く、黒色砂粒目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	口唇部　内面竹管文	

第13表　遺物観察表⑥

No.	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
100	SB56	——	—— —— ——	胎土　きめが細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	文様　外面　縄文(LR)連鎖文	外面赤彩
101	SB56	——	—— —— ——	胎土　きめは細かく、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　(外)にぶい黄褐色 (内)灰色	外面　タテハケメ　底部木葉痕 内面　ヨコハケメ→タテハケメ(10本/cm)	断面磨滅 転用土器
102	SB58	台付甕	—— —— ——	胎土　きめは細かく、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　タテハケメ　口唇部押捺文 内面　ヨコケメメ　(7本/cm)	
103	SB58	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめは細かく、石英、長石が目立つ。 焼成　やや軟質 色調　(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄橙色	外面　タテハケメ　口唇部ヨコナデ 内面　ヨコハケメ　(8本/cm)	
104	SB58	台付甕C	—— —— ——	胎土　きめは細かく、長石が目立つ。 焼成　やや軟質 色調　橙色	外面　タテハケメ(11本/cm) 内面　ヨコハケメ	
105	SB58	——	—— —— ——	胎土　石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	外面　ナナメハケメ(12本/cm) 内面　ヨコハケメ	
106	SB60	広口壺B1	—— —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	口唇部　刺突による鋸歯文 内面　ヘラ描による網目文	
107	C－3	台付甕C	—— —— ——	胎土　石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	口縁部　ヨコナデ 胴部　内外面ヨコハケメ(8本/cm)	外面スス付着
108	C－3	広口壺A2	—— —— ——	胎土　きめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	複合部　外面ヨコハケメ(10本/cm)が残る。	
109	C－3	広口壺B3	—— —— ——	胎土　きめが粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色	文様　内面縄文(RL,LR)	
110	C－3 C－4	広口壺B3	—— —— ——	胎土　きめが細かく石英、長石、金雲母が見られる。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	文様　内面縄文(LR)円形貼付文	
111	C－3 C－4	広口壺B3	—— —— ——	胎土　石英、長石、金雲母が目立つ。 焼成　普通 色調　(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	文様　内面縄文(LR)2段	
112	———	広口壺B1	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、石英の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	文様　内面　波状文＋縄文(LR)円形貼付文 折り返し部刺突文	
113	J－14	——	—— —— ——	胎土　きめは粗く、石英、長石など小石が目立つ。 焼成　普通 色調　(外)にぶい橙色 (内)にぶい黄橙色	外面　下位ナナメハケメ(10本/cm)→ヨコミガキ 上位文様縄文(RL)連鎖文 内面　下位ヨコハケメ	
V 114	SB39	台付甕C2	12.7 —— ——	胎土　きめはやや粗く、黒色砂粒長石、石英が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　タテハケメ(8本/cm) 内面　ヨコハケメ	1/2存 外面スス付着
115	SB39	——	—— —— ——	胎土　砂粒を含みやや緻密。 焼成　普通 色調　(外)黄橙色 (内)橙色	外面　タテハケメ(6本/cm)	脚台部 1/4存

第14表　遺物観察表⑦

No	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
116	SB36	——	—— —— 8.1	胎土　きめが粗く、砂粒が目立つ 焼成　軟質 色調　にぶい橙色	外面　タテハケメが残る 内面　下位ヨコハケメ(9本/cm)	脚台部完存 脚台部内外面赤彩
117	SB36	——	—— —— 11.2	胎土　きめが細かく、砂粒がやや目立つ。 焼成　普通 色調　(外) にぶい黄色 (内) にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ(5本/cm)→粗いタテナデ 内面　ヨコナデ	1/4以下
118	SB35 ＋ SB36	——	—— —— ——	胎土　小石（長石）の混入が多い 焼成　硬質 色調　にぶい黄橙色	外面　擬縄文（羽状）＋縄文（RL,LR)連鎖文 内面　下位ナナメハケメ(5本/cm)	1/4以下
119	SB35	——	—— —— 7.9	胎土　きめは粗く、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　(外) にぶい黄橙色 (内) 褐灰色	外面　下位タテハケメ(8本/cm)を残す 不明瞭なドーナツ底 内面　ヨコハケメ	底部2/3 存
120	SB38	——	—— —— ——	胎土　やや粗く，石英，長石が目立つ 焼成　やや軟質 色調　橙色～赤褐色	外面　下位タテハケメ(7本/cm)→ヨコハケメ 内面　下位ヨコハケメ→ヨコミガキ	胴部 1/2存 内外面赤彩
121	SB38	——	—— —— 7.6	胎土　細かい砂粒の混入が目立つ 焼成　普通 色調　黄橙色	外面　粗いタテハケメ 内面　ヨコハケメ（11本/cm） 接合部　上面指頭痕有	脚台部 1/3存
122	SB38	——	—— —— 7.4	胎土　細かい砂粒を多く含む。 焼成　普通 色調　(外) 黒褐色～にぶい黄橙色 (内) にぶい黄橙色	外面　タテハケメ→タテミガキ	底部 1/2存
123	SB30	鉢or 高坏？	14.5 —— ——	胎土　砂粒及び小石を含む。 焼成　軟質 色調　にぶい橙色	外面　胴部にタテハケメが残る 口唇部刺突文 内面　頸部～口縁部ヨコハケメ(5～6 本/cm)	1/4以下
124	SB30	——	—— —— 8.2	胎土　細かい砂粒を若干含む。 焼成　普通 色調　(外) にぶい黄橙色 (内) 褐灰色	外面　下位タテハケメが残る 内面　ヨコハケメ（10本/cm）	底部 1/4存 外面赤彩
125	SB32	台付甕C2	10.8 —— ——	胎土　砂粒の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　胴部ヨコハケメ→タテハケメ(7本/cm) 口唇部　内外面ヨコナデ 内面　ヨコハケメ	胴部 2/3存
126	SB32	広口壺B1	14.5 —— ——	胎土　砂粒を含み金雲母が少量見られる。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	内面　ヨコミガキが残る	1/4存
127	SB32	広口壺B3	15.9 —— ——	胎土　砂粒の混入が目立つ。 焼成　やや悪い 色調　にぶい橙色	表面磨滅	1/4存
128	SB31	広口壺C	12.7 —— ——	胎土　砂粒の混入が非常に多い。 焼成　やや悪い 色調　にぶい橙色	表面の凹凸が目立つ。 口唇部をわずかに折り返す部分がある	口縁部 1/4存 内外面赤彩
129	SB28	短頸壺B	14.4 —— ——	胎土　砂粒、雲母を含む。 焼成　普通 色調　(外) 橙色 (内) 黄灰色	外面　口縁部ナナメハケメ(6本/cm) 胴部粗いヨコハケメが残る 内面　ヨコハケメが残る	1/4以下
130	SB28	広口壺C1	17.4 —— ——	胎土　砂粒を含む。黒色粒が目立つ。 焼成　普通 色調　(外) 橙色 (内) にぶい橙色～黄灰色	外面　ナナメハケメ→タテミガキ (8本/cm) 内面　ヨコナデ 文様　縄文(RL) 2 段＋円形貼付文	1/4以下
131	SB28	——	—— —— ——	胎土　細かい砂粒を含む 焼成　普通 色調　(外) にぶい橙色 (内) にぶい赤褐色	外面　タテハケメ(8本/cm) 内面　ヨコハケメ	1/4以下
132	SB28	台付甕C2	20.6 —— ——	胎土　砂粒、小石を含む。 焼成　やや硬質 色調　(外) にぶい黄橙色 (内) 灰黄褐色	外面　胴部ナナメ→タテハケメ(7本/cm)→ 口縁部ナナメハケメ　口唇部刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ	胴部 1/4存

第15表　遺物観察表⑧

No	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
133	SB28	——	—— —— 9.3	胎土　小石、砂粒を含む。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　タテハケメ→端部ナナメハケメ(7本/cm) 内面　下位ヨコハケメ	脚台部完存 甕部スス付着
134	SB28	——	—— —— 11.8	胎土　砂粒を含む。 焼成　普通 色調　(外) にぶい橙色 (内) にぶい黄橙色	外面　粗いタテハケメ 内面　下位ヨコハケメ(7本/cm)	脚台部 1/4存
135	SB27	広口壺C1	13.4 —— ——	胎土　砂粒の混入が多く、黒色粒子が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ→タテミガキ 内面　ヨコミガキ	口縁部 1/4存 内外面赤彩
136	SB27	——	—— —— 9.4	胎土　砂粒の混入が多い。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　ヨコミガキ 内面　ヨコハケメ (12本/cm) 接合部ヘラナデ	胴部 1/2存 外面タール状の付着外面赤彩 135と同一個体
137	SB26	台付甕B	17.7 —— ——	胎土　砂粒を若干含み緻密。 焼成　やや硬質 色調　にぶい橙色	外面　ヨコハケメ(8本/cm) 口唇部刺突文 内面　ヨコハケメ	1/4以下 外面スス付着
138	SB26	台付甕B	17.8 —— ——	胎土　砂粒の混入が多い。 焼成　やや軟質 色調　(外) 明黄褐色 (内) 橙色	外面　タテハケメ 口唇部刺突文 内面　口縁部にヨコハケメが残る	口縁部 1/4存
139	SB26 (覆土上層)	鉢	8.7 6.6 2.3	胎土　細かい砂粒を含む。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　ヨコハケメが残る	完存
140	SB26 (覆土上層)	鉢	9.4 7.5 3.4	胎土　細かい砂粒を含む。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　タテハケメ(6本/cm) 口縁部ヨコナデ 内面　肩部ヨコハケメ	1/3存
141	SB26	鉢A1	9.2 —— ——	胎土　砂粒を若干含む。 焼成　普通 色調　(外) 橙色 (内) 灰黄褐色	外面　ヨコミガキ 折り返し部刺突文 内面　口縁部ヨコミガキ	1/4以下
142	SB26	高坏E	28.4 —— ——	胎土　砂粒の混入が多く、黒色粒子を少量含む。 焼成　普通 色調　(外) にぶい黄橙色 (内) 褐灰色	外面　タテハケメが残る 口唇部刺突文 内面　ヨコミガキ	脚台部欠損 内面タール状の付着物
143	SB26	広口壺A1	20.2 —— ——	胎土　細かい砂粒を多く含む。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　口縁部タテミガキ　胴部ヨコミガキ 文様縄文(LR)連鎖文、円形貼付文(1×7)複合部ナナメハケメ (10本/cm) 棒状貼付文(6×5) 内面　口縁部ヨコミガキ　頸部ナナメハケメ	頸部以上 2/3存
144	SB26	——	—— —— 8.0	胎土　細かい砂粒を多く含む。 焼成　普通 色調　(外) にぶい橙色 (内) 灰褐色	外面　胴部ヨコナデ　頸部タテナデ 文様縄文(RL,LR,RL,LR,RL)円形貼付文 底部木葉痕 内面　底部と頸部ヨコハケメ(7本/cm)	胴部 2/3存
145	SB22	台付甕C2	—— —— ——	胎土　砂粒と細かい金雲母を含む 焼成　やや硬質 色調　にぶい橙色	外面　胴部ヨコハケメ→頸部ナナメハケメ (7本/cm) 内面　ヨコハケメ	胴部 1/3存
146	SB22	高坏C	15.3 11.2 8.1	胎土　小石、黒色砂粒を多く含む 焼成　普通 色調　褐色	外面　坏部ヨコハケメの粗いヨコミガキ 脚台部タテハケメ(8本/cm) 内面　脚台部ヨコハケメ	ほぼ完存 坏部内面底部剝離 坏部口唇欠損
147	SB41	平底甕	—— —— 6.8	胎土　小石の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　褐色	外面　タテハケメ(7本/cm)	底部 1/3存
148	———	台付甕A	17.3 —— ——	胎土　石英、長石、金雲母が目立つ。 焼成　硬質 色調　橙色	外面　タテ→ヨコハケメ(5本/cm) 口縁部ヨコナデ 内面　口唇部不鮮明な沈線が巡る	1/4以下
149	———	高坏	—— —— ——	胎土　きめがやや粗く、石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい赤褐色	外面　タテミガキ 内面　坏部ヨコミガキ，脚部ヨコハケメが残る	接合部全周
150	———	——	—— —— 11.4	胎土　砂粒、長石の混入が顕著。 焼成　普通 色土　黄橙色	外面　タテハケメ(8本/cm) 内面　ヨコハケメ	脚部台 2/3存

第16表　遺物観察表⑨

No.	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
167	SB28	広口壺A2	—— —— ——	胎土　きめが細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ(7本/cm) 複合部　棒状貼付文	内外面赤彩
168	SB28	広口壺	—— —— ——	胎土　きめが細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　灰黄褐色	外面　上位にタテハケメを残す(9本/cm) 複合部ナナメハケメ 内面　文様縄文(LR)小穿孔	口縁部穿孔あり
169	SB28	広口壺C3	—— —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒を少量含む。 焼成　普通 色調（外）橙色（内）にぶい橙色	内面　文様ヘラ描きによる網目文	
170	SB28	広口壺E	—— —— ——	胎土　φ2～3㎜の小石が目立つ 焼成　普通 色調　橙色	外面　タテハケメ 内面　縄文(RL)	
171	SB31	——	—— —— ——	胎土　φ 1㎜の小石の混入が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　橙色	擬縄文（羽状），刺突による横線	外面赤彩
172	SB36	広口壺A	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く、φ1㎜程の小石が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　にぶい橙色	複合部　棒状の沈線文（8 × ）	内外面赤彩
173	———	広口壺C3	—— —— ——	胎土　きめは細かく、φ1㎜程の小石が目立つ。 焼成　普通 色調（外）橙色（内）にぶい橙色	内面　口唇部刺突による鋸歯文	
174	———	台付甕C or 台付甕F	—— —— ——	胎土　きめは細かく、石英、長石が目立つ。 焼成　やや硬質 色調　灰黄褐色	外面　口縁部タテハケメ→胴部ヨコハケメ(4本/cm) 口唇部刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ	
175	———	台付甕F	—— —— ——	胎土　きめは粗く石英、長石を含む。 焼成　やや硬質 色調　にぶい褐色	外面　口縁部タテハケメ→胴部ナナメハケメ(6本/cm) 口唇部刺突文 内面　ヨコハケメ	
176	———	台付甕A	—— —— ——	胎土　金雲母、石英、長石を含む 焼成　硬質 色調　橙色	外面　タテハケメ→ヨコハケメ(5本/cm) 口縁部ヨコナデ	
177	潤井川河川工事地点	鉢	8.7 5.9 3.3	胎土　石英、長石を少量含む。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ→赤彩 内面　体部上位～口縁部ヨコハケメ(11～12本/cm)	ほぼ完存 外面赤彩
178	野中用水表採	——	—— —— ——	胎土　きめは細かく石英、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）にぶい黄橙色 （内）にぶい橙色	内面　接合部指頭押え	接合部全周
179	野中用水表採	広口壺C3	20.0 —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　上位タテハケメが残る 内面　文様縄文（LR,RL）	口縁部 1/4存
180	野中用水表採	広口壺C1	15.9 —— ——	胎土　きめが粗く、φ1～2㎜の小石の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色 （内）にぶい黄橙色	表面磨滅 内面　頸部接合痕	1/2存
181	野中用水表採	広口壺B1	20.6 —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　ナナメハケメ 内面　口縁端部ナナメハケメ→口縁部ヨコハケメ(9本/cm)	1/4存 外面～口縁部内面赤彩
182	野中用水表採	——	—— —— ——	胎土　きめは細かい、黒色砂粒の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色 （内）にぶい黄橙色	外面　タテハケメ(8本/cm)→横位の刺突による横線(3条) 下位はハケメをヘラミガキで消す	

第17表　遺物観察表⑩

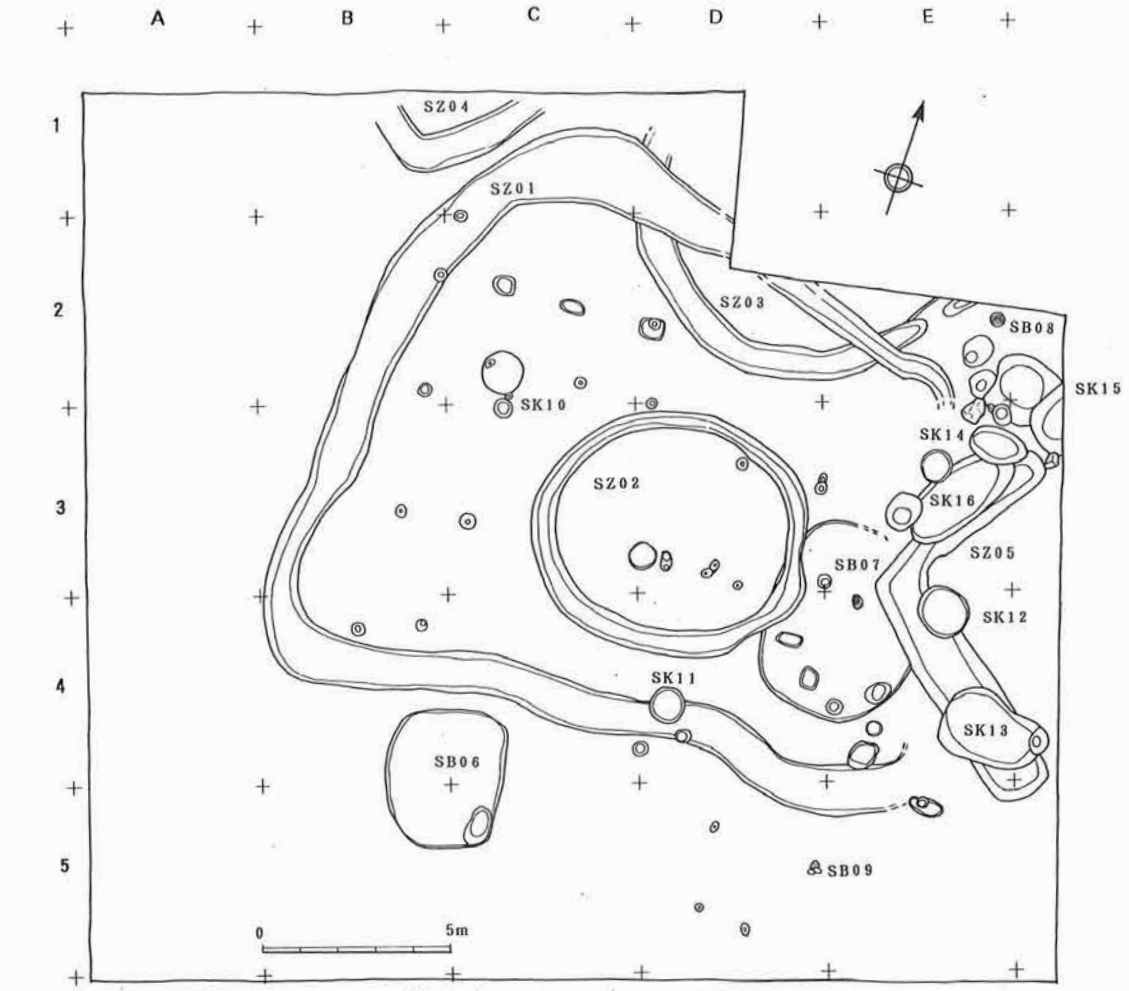
No	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特　　徴	調　整　・　文　様	備　考
151	———	広口壺Ｂ１	12.8 —— ——	胎土　きめは細かく、黒色砂粒が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）にぶい橙色 （内）黄灰色	外面　ナナメハケメ(6本/cm)→ヨコナデ 折り返し部ナナメハケメ	1/4以下
152	———	——	—— —— 8.4	胎土　小石及び黒色砂粒の混入が顕著。 焼成　普通 色調　（外）橙色 （内）オリーブ黄		底部 1/3存
153	———	——	—— —— 6.4	胎土　きめは細かく、石英、長石黒色砂粒を含む。 焼成　普通 色調　（外）橙色 （内）にぶい黄褐色	外面　タテハケメが残る	1/4以下 外面赤彩
154	ＳＺ２１ 西溝	台付甕Ａ	6.3 —— ——	胎土　金雲母、石英、砂粒を含み緻密。 焼成　硬質 色調　にぶい黄褐色	外面　胴部ヘラケズリ→粗いナナメハケメ(5本/cm) 口縁部ヨコナデ	口縁部 1/3存
155	ＳＺ２１ 西溝	台付甕Ａ	—— —— 10.3	胎土　緻密で金雲母、石英を含む 焼成　硬質 色調　にぶい黄褐色	外面　胴部ヘラケズリ→粗いタテハケメ(5本/cm) 脚台部ヨコハケメが残る 上位に粗いタテヘラヘズリ 内面　脚台端部折り返し	脚台部完存 154と同一個体 外面スス付着
156	ＳＺ２１	台付甕Ａ	14.6 —— ——	胎土　砂粒、金雲母、石英を含む 焼成　硬質 色調　黄褐色	口縁部ヨコナデ 外面　胴部ヘラケズリ→ナナメハケメ→肩部ヨコハケメ(5本/cm)	口縁部 1/4以下
157	ＳＺ２１	台付甕Ａ	—— —— 9.2	胎土　金雲母、石英の砂粒の混入が多く緻密。 焼成　硬質 色調　（外）橙色 （内）にぶい黄橙色	外面　胴部ヘラケズリ→タテハケメ(5本/cm) 脚台部上位ナナメハケメ 内面　脚台端部折り返し	脚台部 1/2存 外面スス付着 156と同一個体
158	ＳＺ２１	台付甕Ａ	—— —— ——	胎土　砂粒、石英、金雲が目立つ 焼成　硬質 色調　（外）にぶい橙色 （内）にぶい黄橙色	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ナナメハケメ→ヨコハケメ(7本/cm) 内面　口唇部沈線	1/4以下
159	ＳＺ２１ 東溝	小型坩	9.0 —— ——	胎土　緻密で金雲母を少量含む。 焼成　やや硬質 色調　にぶい黄橙色	外面～口縁内面ヘラミガキ 内面　ヘラナデ	完存 底部穿孔 内外面赤彩
160	ＳＺ２１ 東溝	小型器台	9.8 —— ——	胎土　細かい小石、金雲母を含み緻密。 焼成　やや硬質 色調　橙色	外面　ヘラケヅリ　口縁部ヨコナデ 内面　放射状のヘラミガキ	脚台部欠損 内外面赤彩？
161	ＳＺ２１ 東溝	台付甕Ｈ２	6.0 —— ——	胎土　黒色砂粒、小石を含む。 焼成　普通 色調　（外）にぶい黄橙色 （内）橙色	外面　頸部～口縁部ナナメハケメ(9本/cm) 口唇部刺突文 内面　肩部ヨコハケメ→口縁部ヨコナデ→ 胴部タテハケメ	1/4以下
162	ＳＺ２１	——	—— —— 11.0	胎土　砂粒、小石を含む。 焼成　普通 色調（外）灰黄褐色（内）褐灰色	外面　ヨコナデ　底部木葉痕 内面　ヨコハケメ(8本/cm)	1/4以下
163	ＳＺ２１ 東溝	広口壺Ｂ１	12.8 —— ——	胎土　砂粒を少量含む。 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　タテハケメ(9本/cm) 文様　複合部縄文（LR） 内面縄文(RL,LR) 下端にヨコハケメが残る。	1/4以下
164	ＳＺ２１ 東溝	——	—— —— 9.6	胎土　小石、黒色、砂粒を含む。 焼成　やや硬質 色調　（外）黄橙色（内）褐灰色	底部　木葉痕 内面　ヨコハケメ（10本/cm）	1/4以下 外面赤彩？
165	ＳＺ２１ 東溝	——	—— —— 12.2	胎土　砂粒が多い。 焼成　普通 色調　（外）橙色　（内）灰色	外面　タテハケメ→ヨコナデ 内面　粗いヨコハケメ(4本/cm)	底部 1/2存
166	ＳＺ２１ 東溝	二重口縁壺	22.0 7.8 34.5	胎土　小石、金雲母を含み緻密。 焼成　普通 色調　にぶい橙色	外面　口縁部ヨコナデ　下位ヘラケヅリ 胴部ナナメのヘラミガキ 文様　肩部タテハケメの後ヨコハケメ(7本/cm)ハケメはその下端をヘラミガにより磨り消す部分がある 内面　口縁部ヨコヘラミガキ	

第18表　遺物観察表⑪

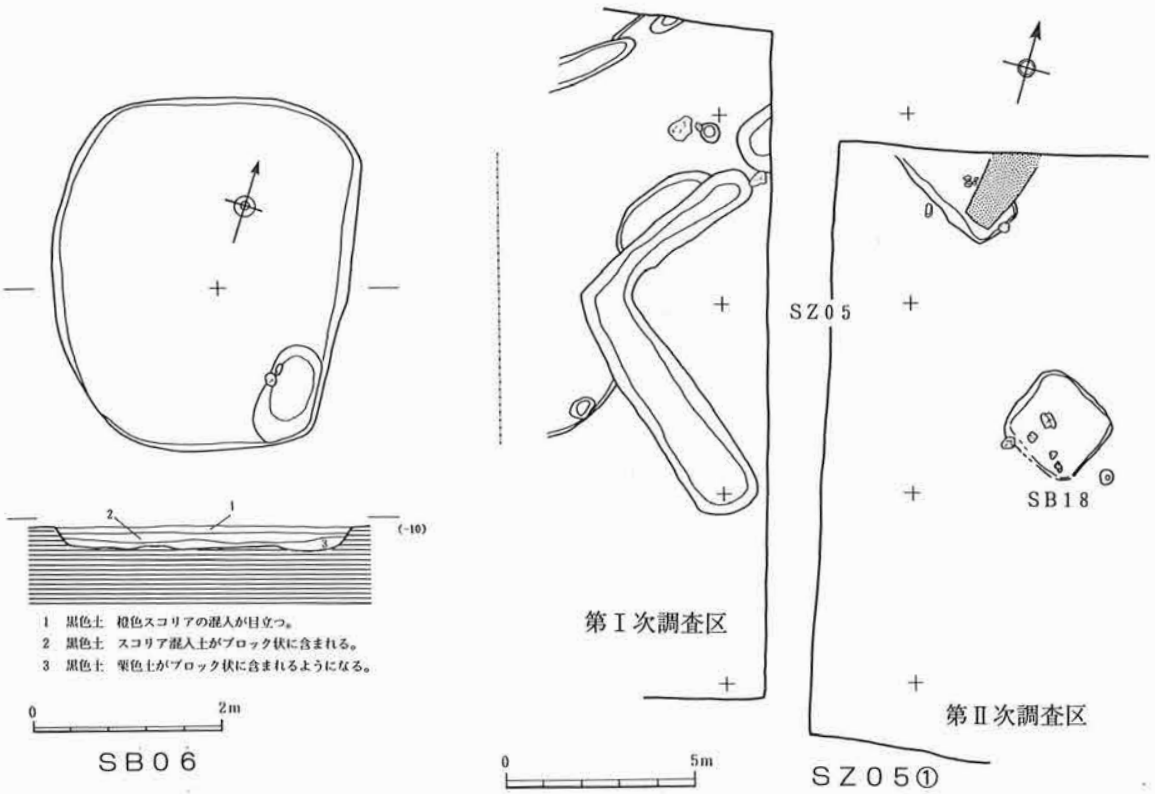
No	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特　　徴	調　整　・　文　様	備　考
183	野中用水表採	——	—— —— ——	胎土　きめは細かく、長石が目立つ。 焼成　普通 色調　（外）橙色 　　（内）灰黄橙色	外面　文様縄文(LR,RL) 内面　ヨコハケメ(5本/cm)	
184	ＳＢ２６	——	—— —— ——	胎土　きめは粗く、長石が目だつ 焼成　普通 色調　にぶい黄橙色	外面　粗いタタキ 　　内傾口縁	製塩土器
185	——	丸碗	10.8 6.6 4.9	胎土　緻密で石英少量見られる。 焼成　硬質 色調　灰白色	ロクロ形成　高台付碗 施釉	瀬戸、美濃 1/2存
186	——	志野皿	11.6 2.2 6.4	胎土　ややきめが粗く、石英が目立つ。 焼成　硬質 色調　灰白色	ロクロ形成　高台付皿 施釉	瀬戸、美濃 1/4存
187	Ⅳ次調査	片口鉢	—— —— ——	胎土　ややきめが粗く、石英、の混入が極めて多い。 焼成　硬質 色調　暗赤褐色	外面　ヘラナデが見られる	常滑 片口部
188	Ⅴ次調査	擂鉢	—— —— ——	胎土　緻密で石英、長石、黒色砂粒が見られる。 焼成　硬質 色調　暗赤褐色	内面　条線(6条単位)	瀬戸　美濃
189	Ⅴ次調査	鉢	—— —— ——	胎土　きめはやや粗く石英、長石が見られる。 焼成　普通 色調　橙色	外面　口縁部肥厚、沈線	内外面スス付着

No	出土地点	種　類	最大長	最大幅	最大厚	孔　径	重　さ	材　質	備　　考
190	ＳＢ３５	磨　石	8.60	3.10	1.25	——	49.9g	硬砂岩	住居址堀り方内出土
191	Ⅴ次調査	有孔円盤	2.80	2.35	0.70	0.40	9.8	蛇紋岩	未製品？　盲孔
192	ＳＢ３１	小　玉	0.90	0.60	0.65	0.30	0.5	ガラス	住居址覆土中出土
193	ＳＢ２６	丸　玉	0.35	0.35	0.25	0.10	0.09	ガラス	住居址床面出土

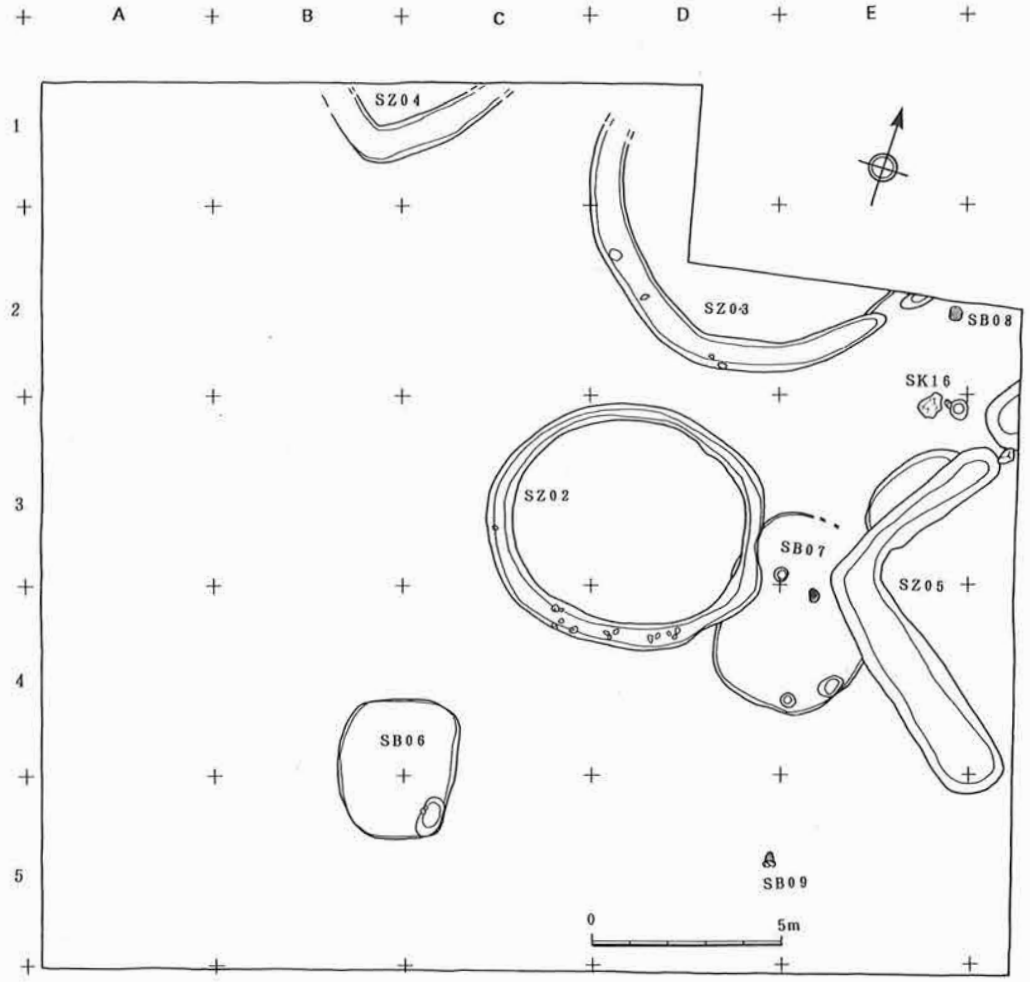
第19表　遺物観察表⑫



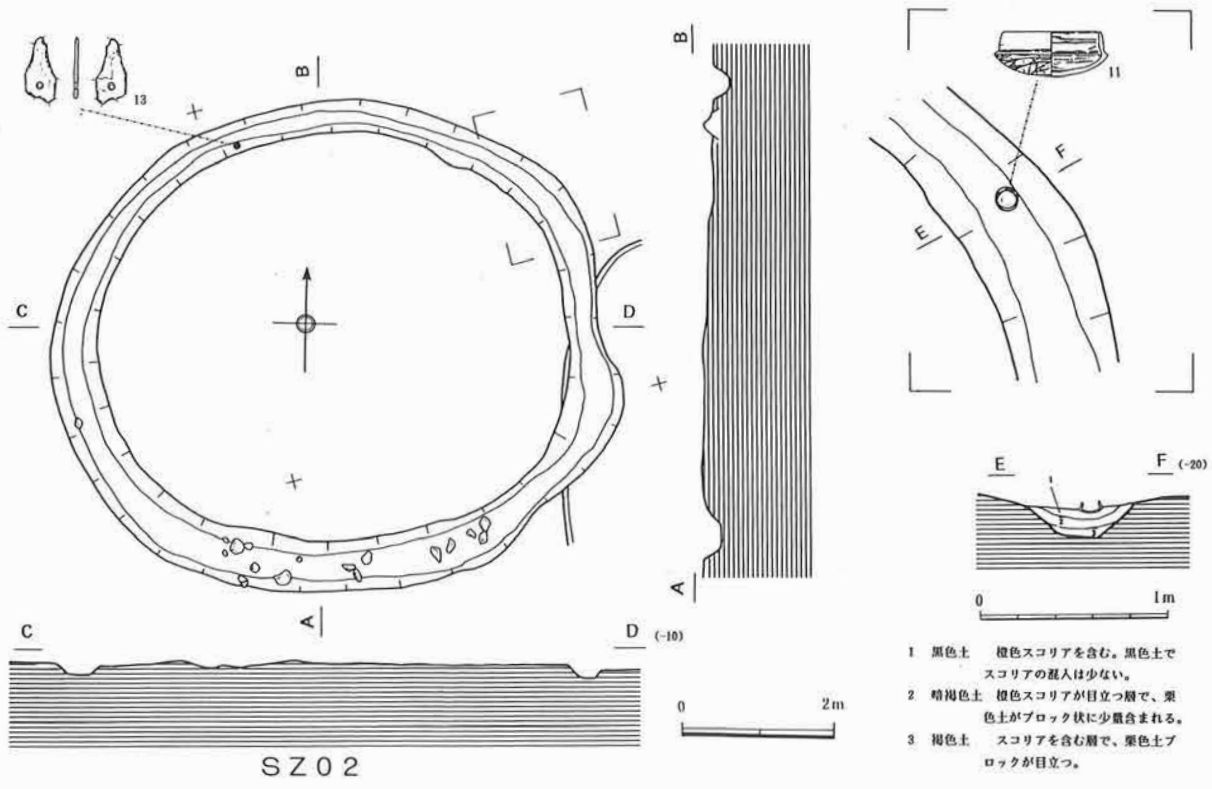
第Ⅰ次調査区全体図①



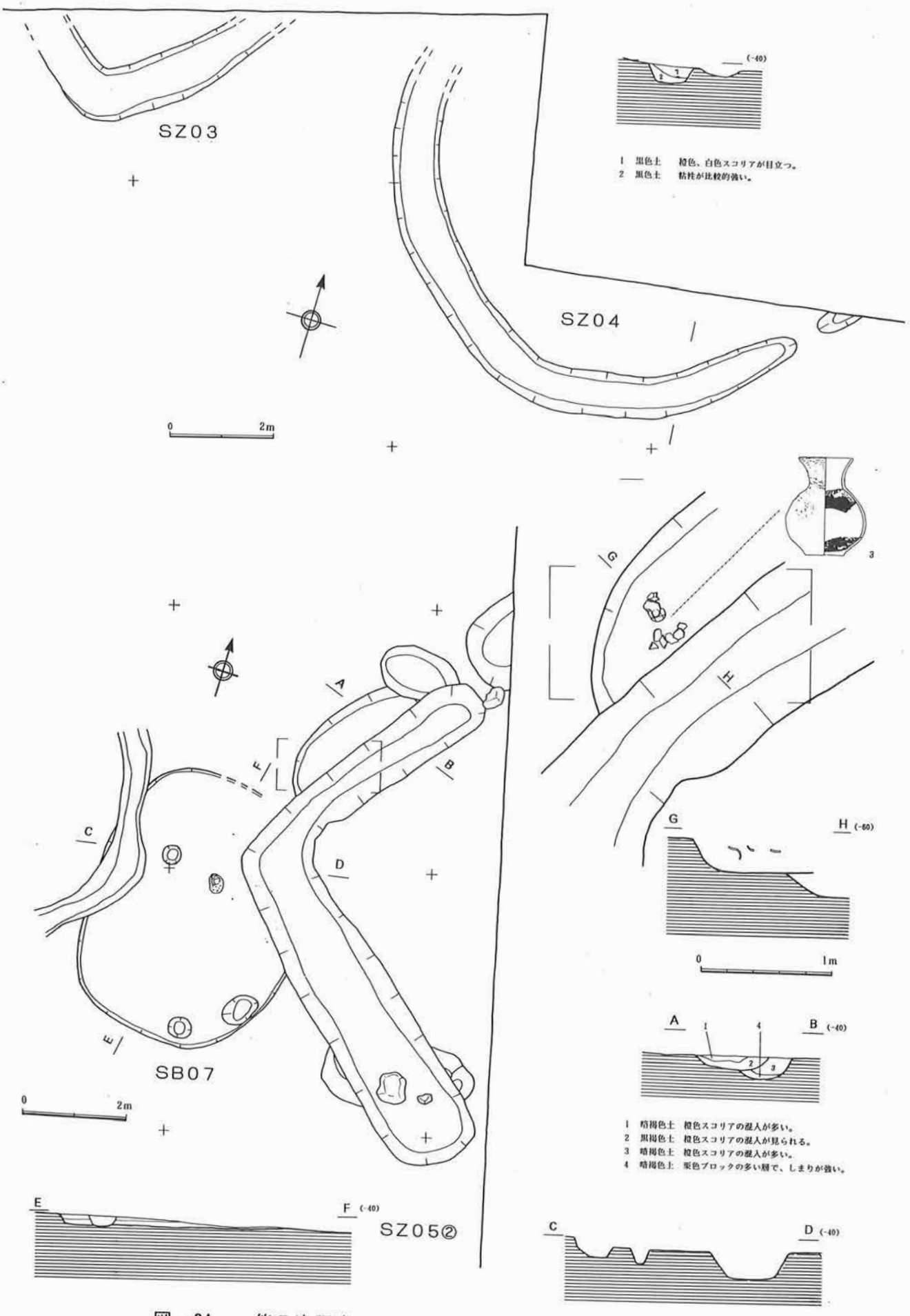
図－19　第Ⅰ次調査全体図①・SB06・SZ05①実測図



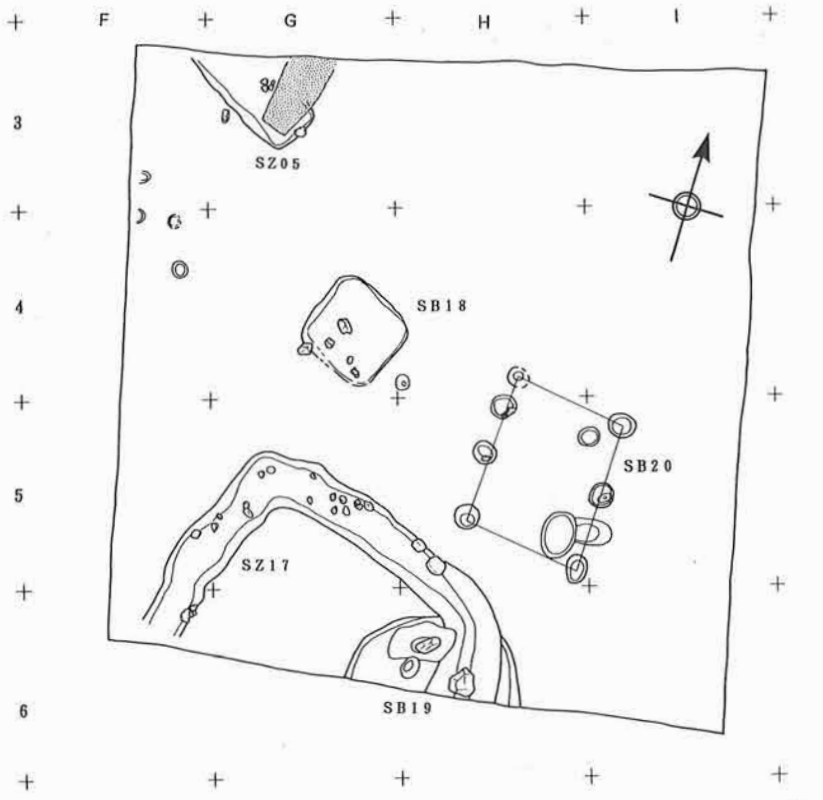
第Ⅰ次調査区全体図②



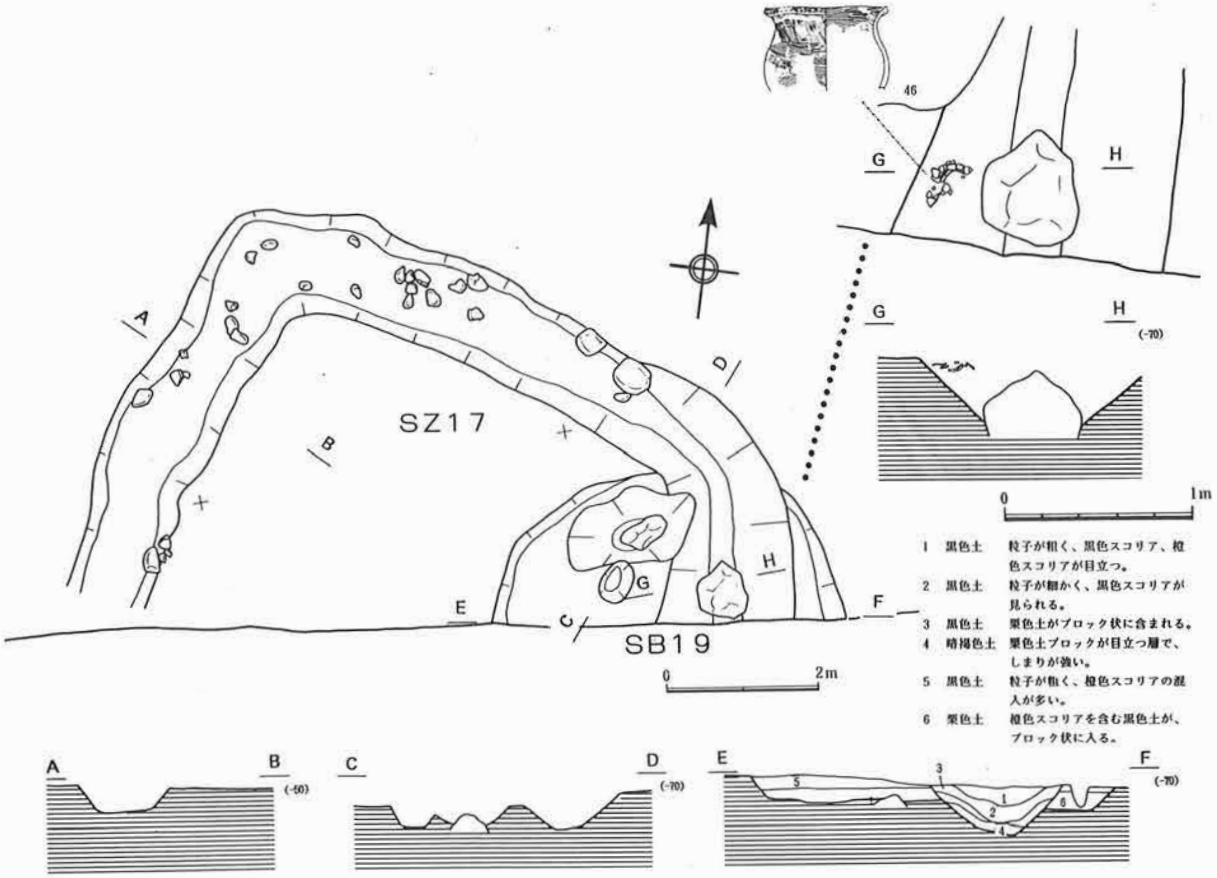
図－20　第Ⅰ次調査全体図②・ＳＺ０２実測図



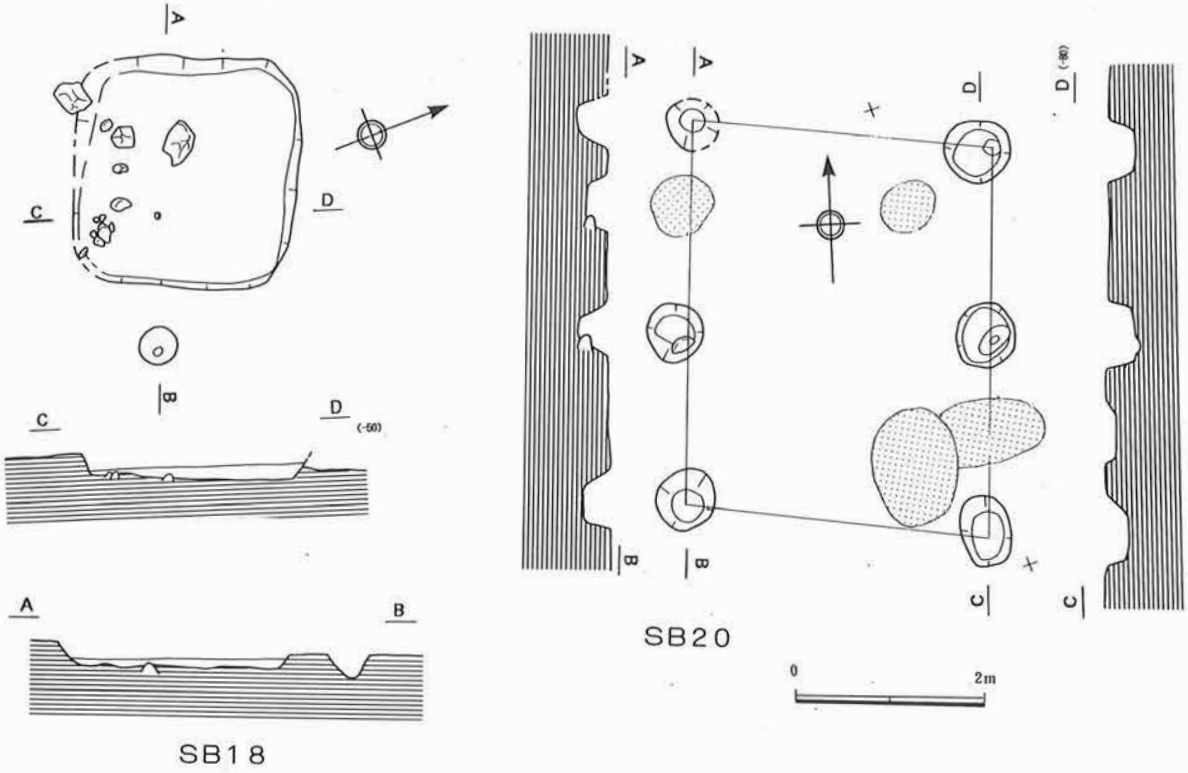
図－21　第Ⅰ次調査　SZ03・SZ04・SZ05②実測図



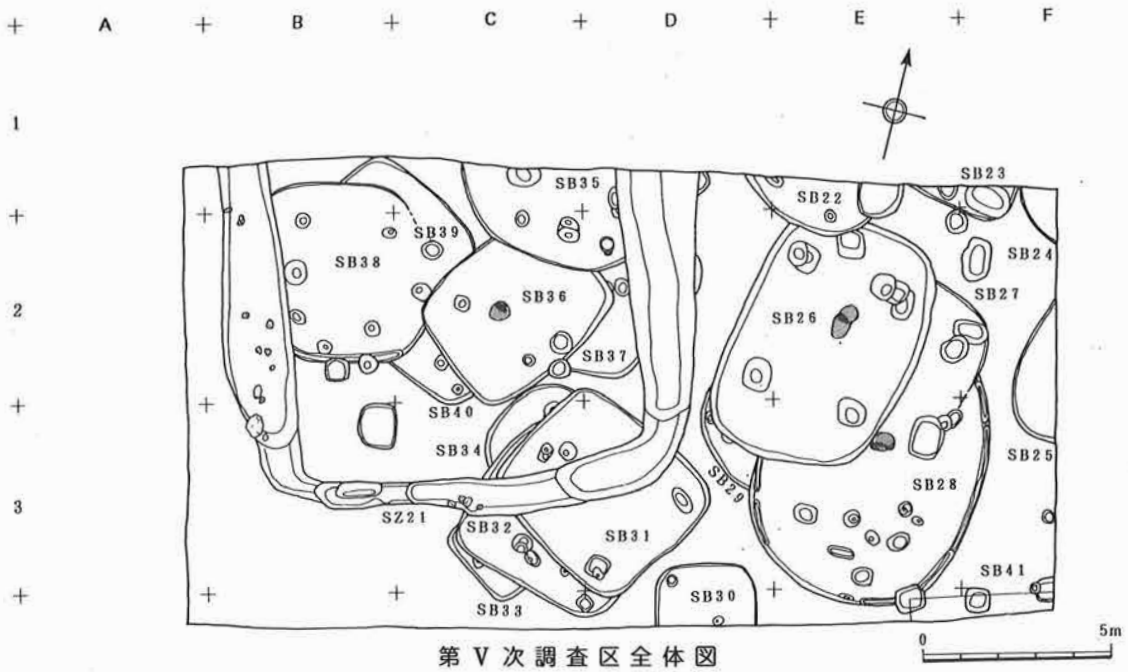
第Ⅱ次調査区全体図



図－22　第Ⅱ次調査全体図　・ＳＺ１７・ＳＢ１９実測図

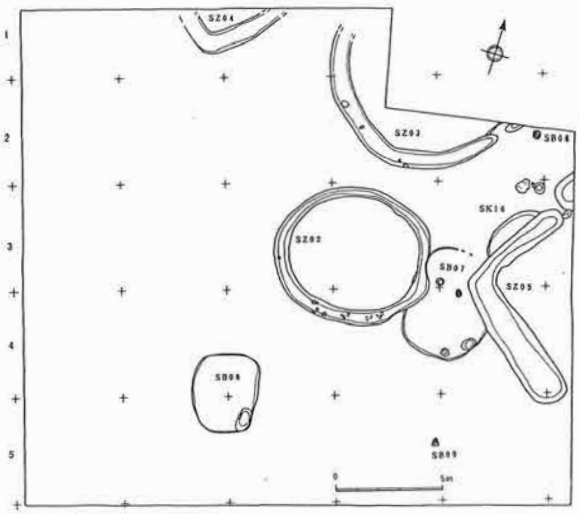


図－23　第Ⅱ次調査　ＳＢ１８・ＳＢ２０実測図

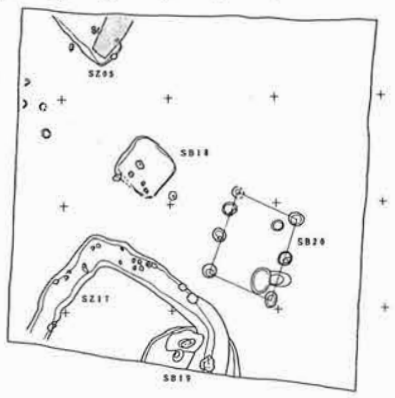


第Ⅴ次調査区全体図

第Ⅴ次調査区

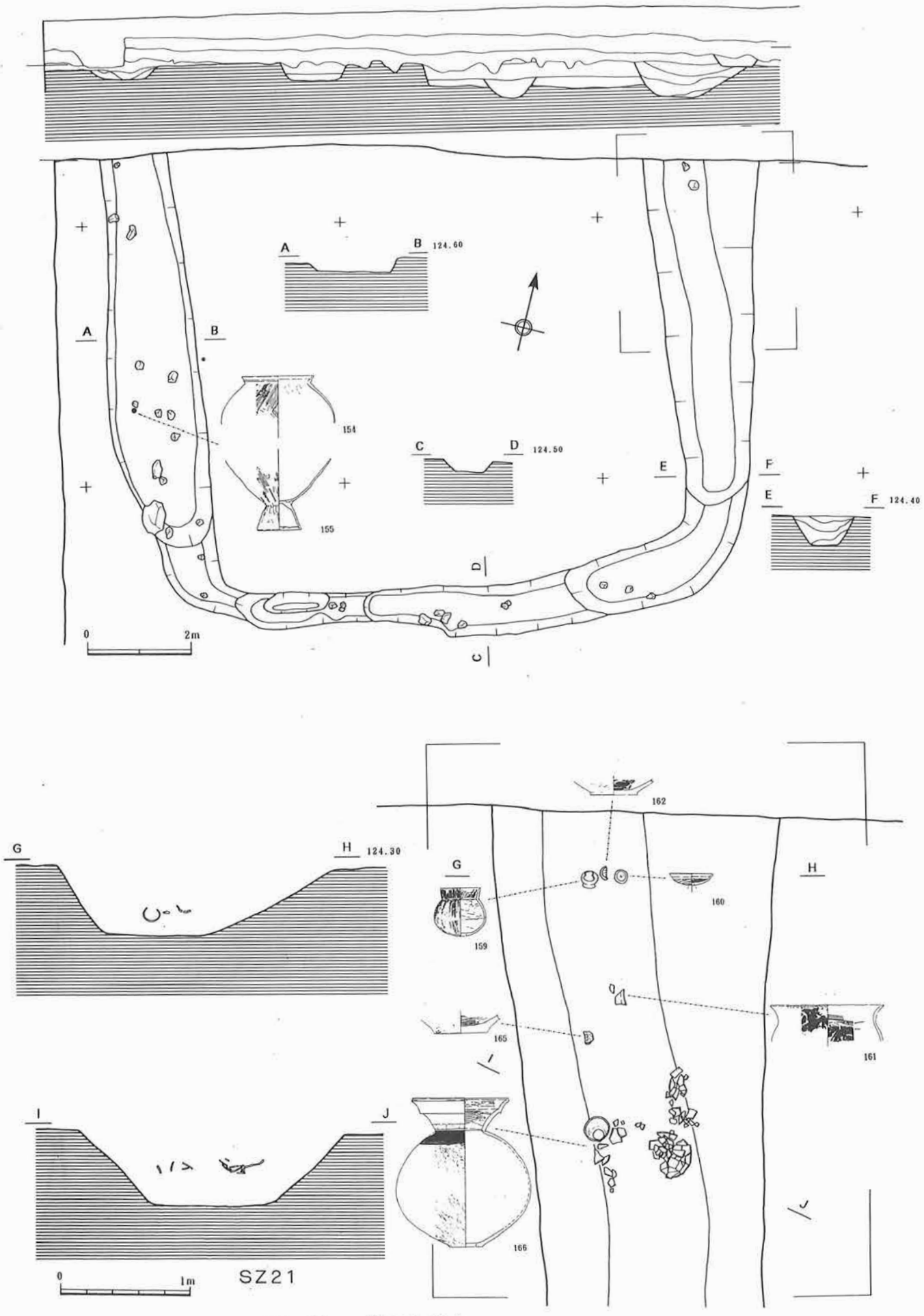


第Ⅰ次調査区

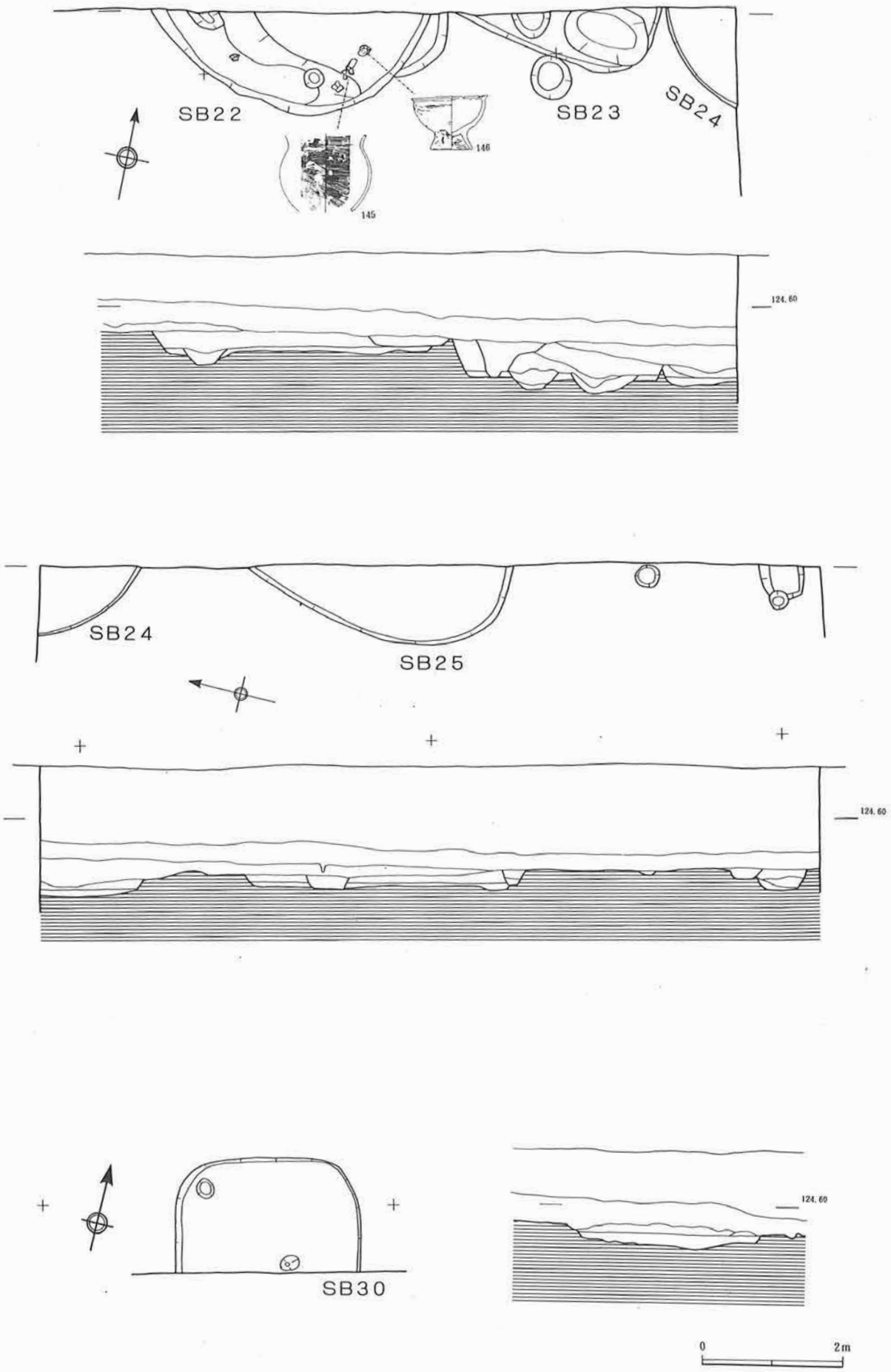


第Ⅱ次調査区

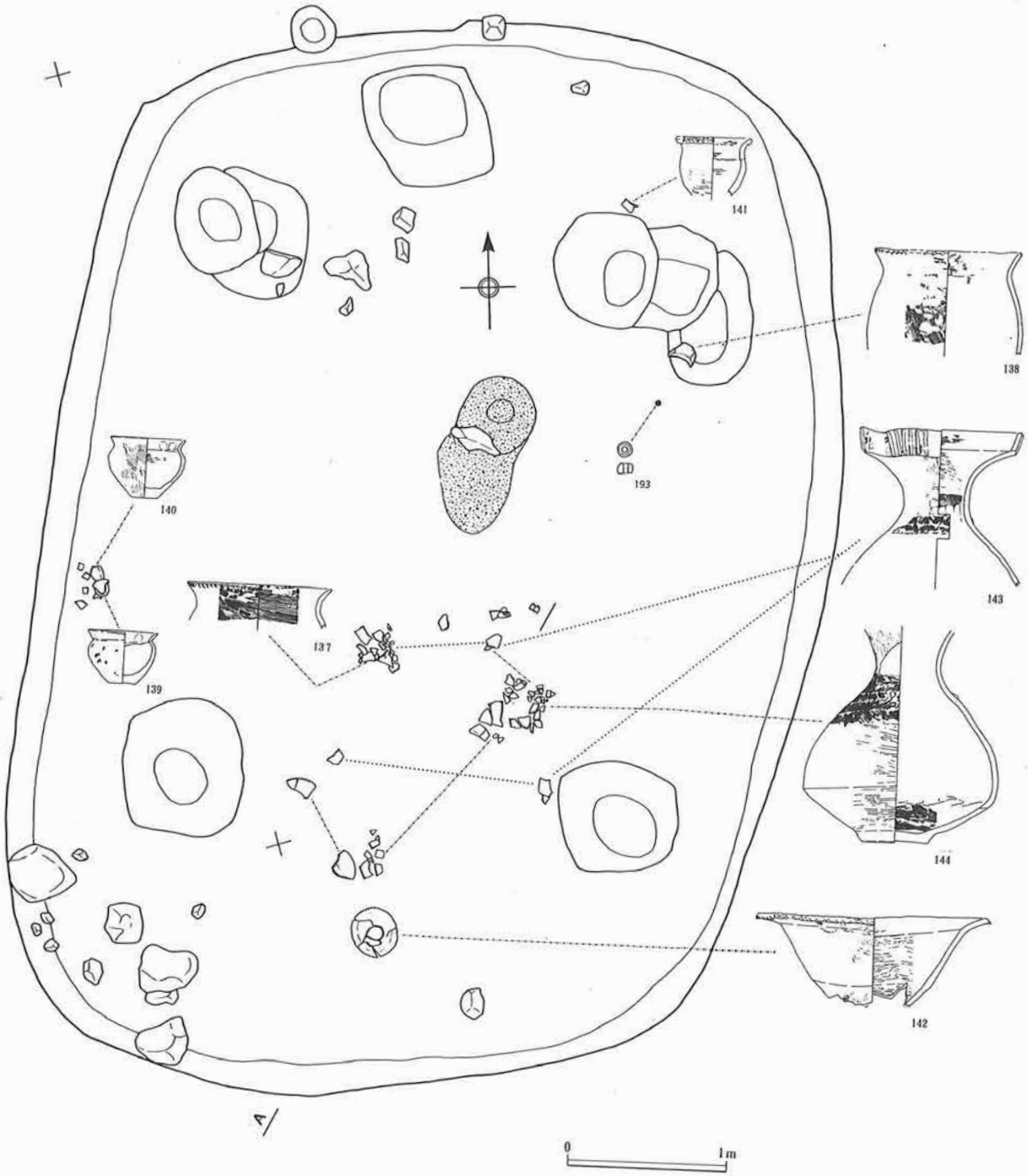
図－24　第Ⅴ次調査全体図・各調査区と遺構分布図

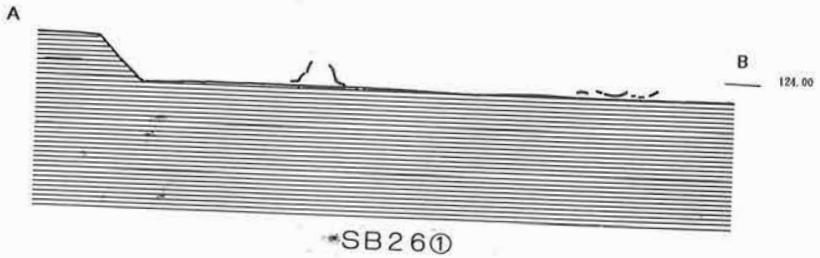


図－25　第Ⅴ次調査　ＳＺ２１実測図



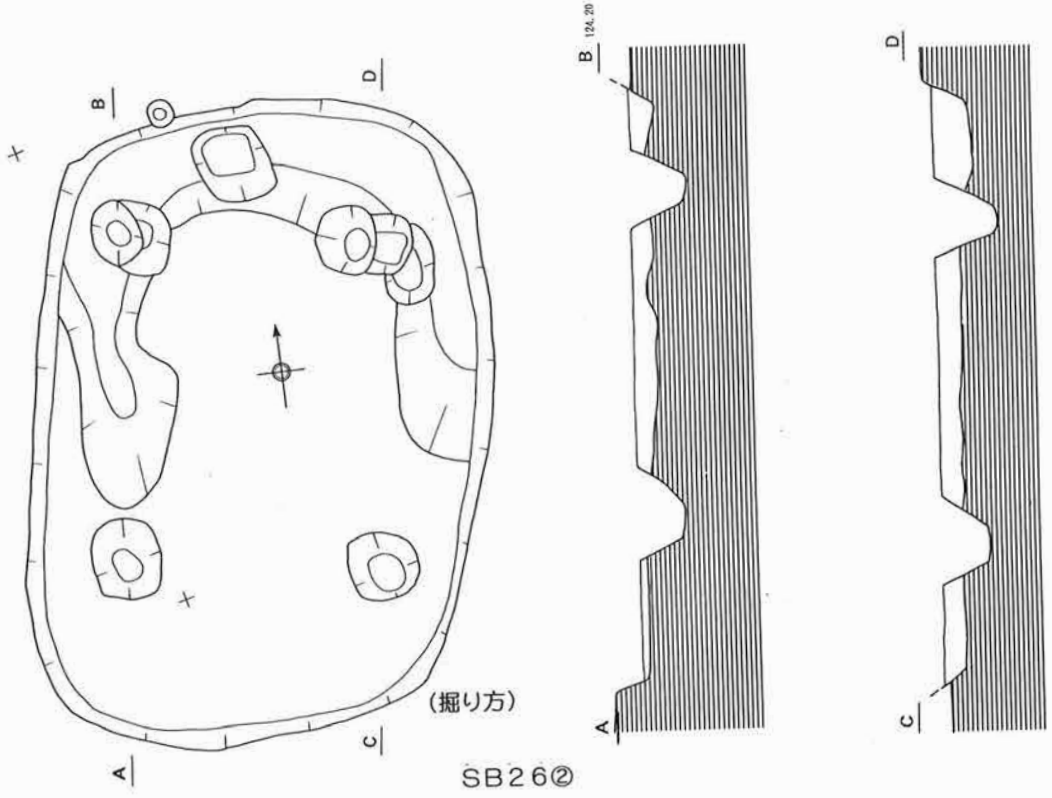
図－26　第Ⅴ次調査　SB22・SB23・SB24・SB25・SB330実測図

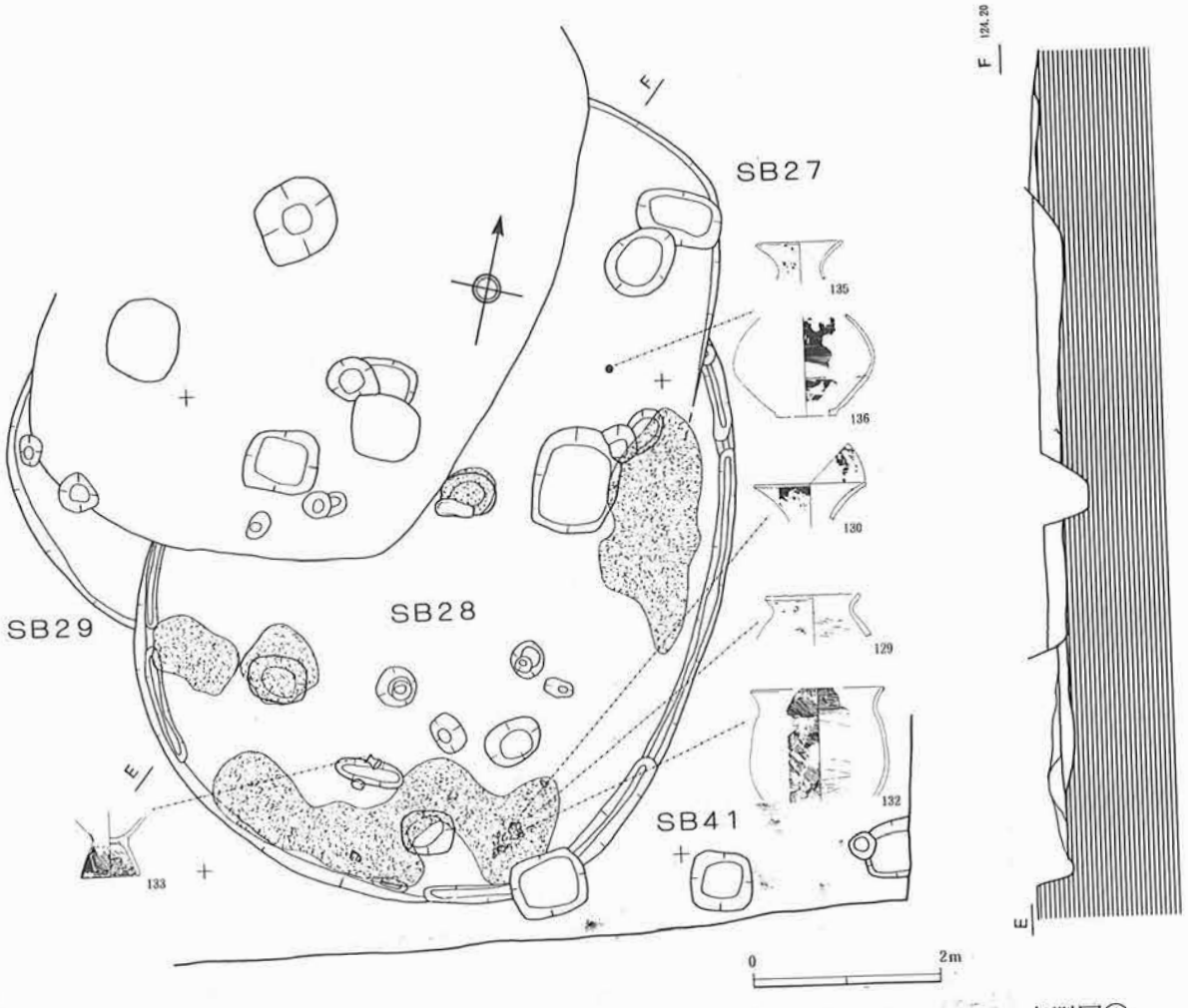




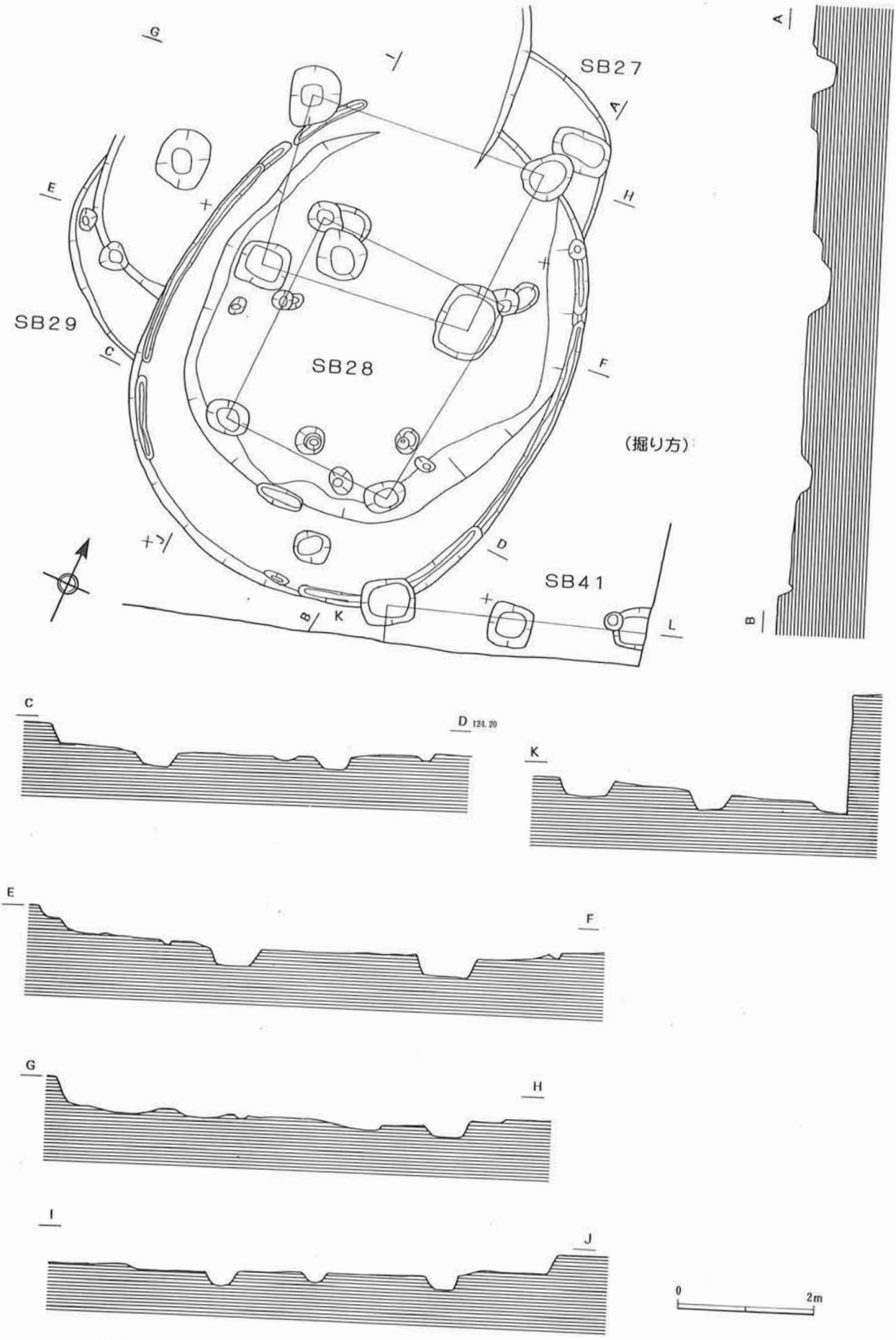
SB26①

図－27　第Ⅴ次調査　ＳＢ２６実測図①

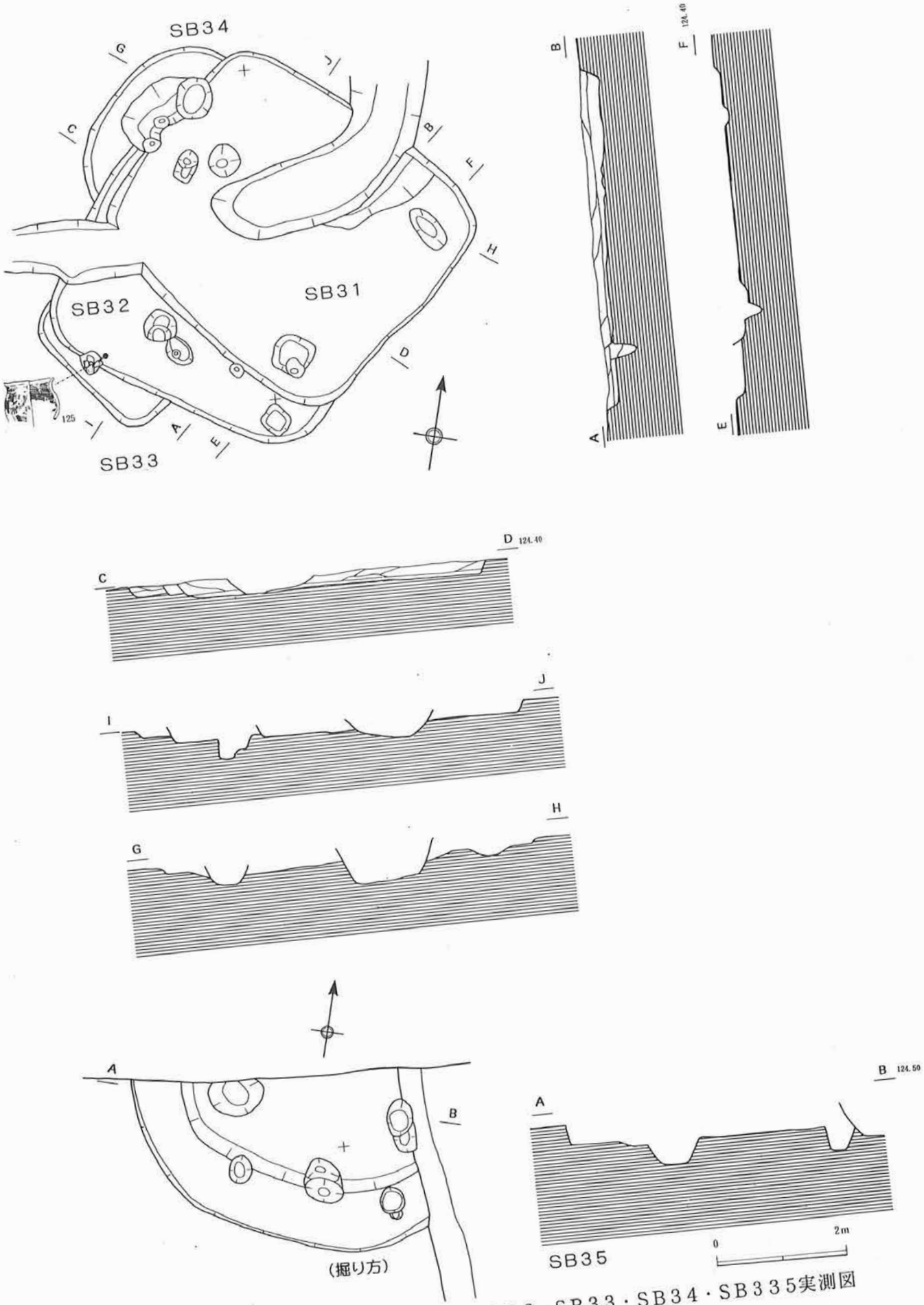




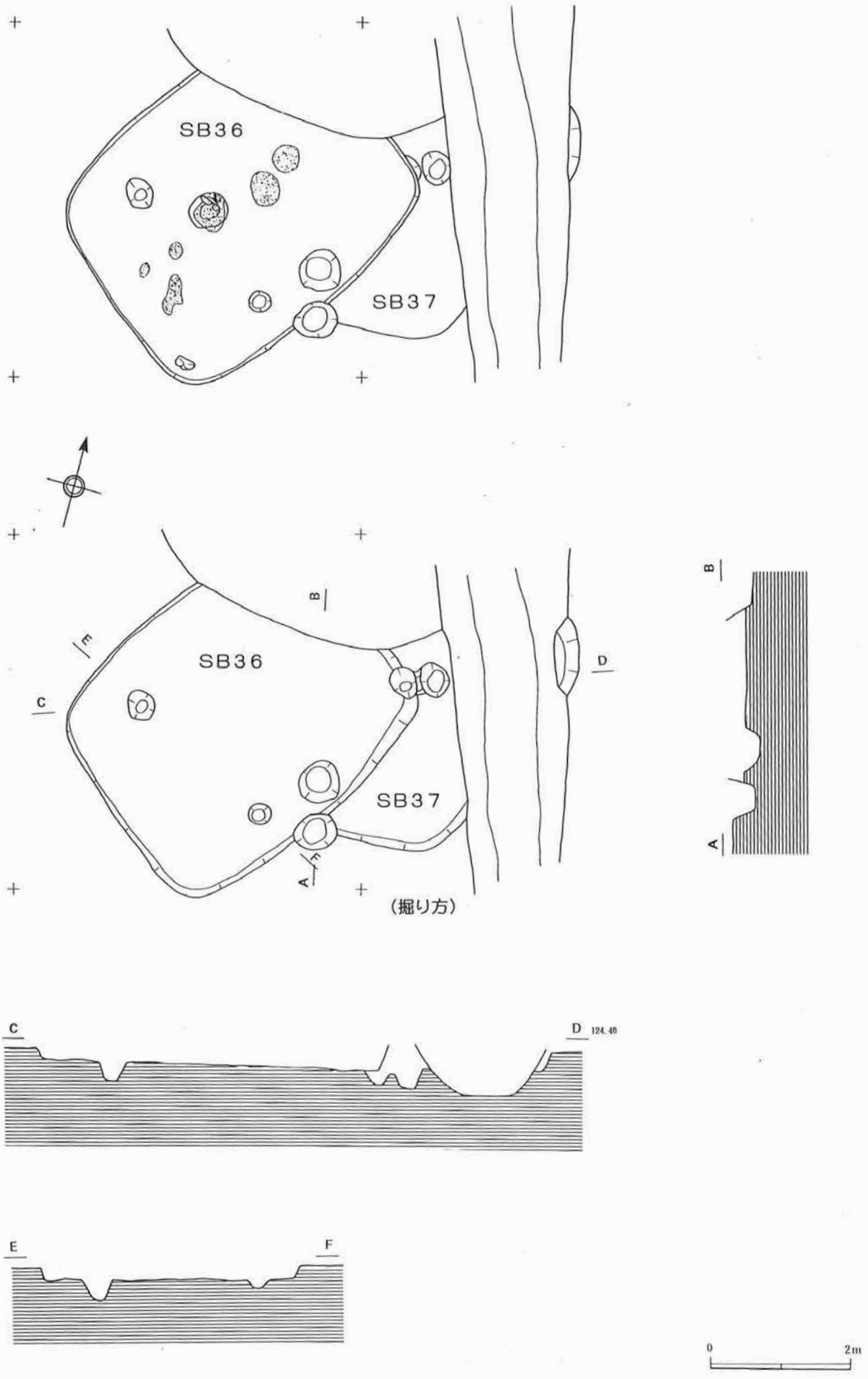
図－28　第Ⅴ次調査ＳＢ２６実測図②・SB27・SB28・SB29・SB441実測図①



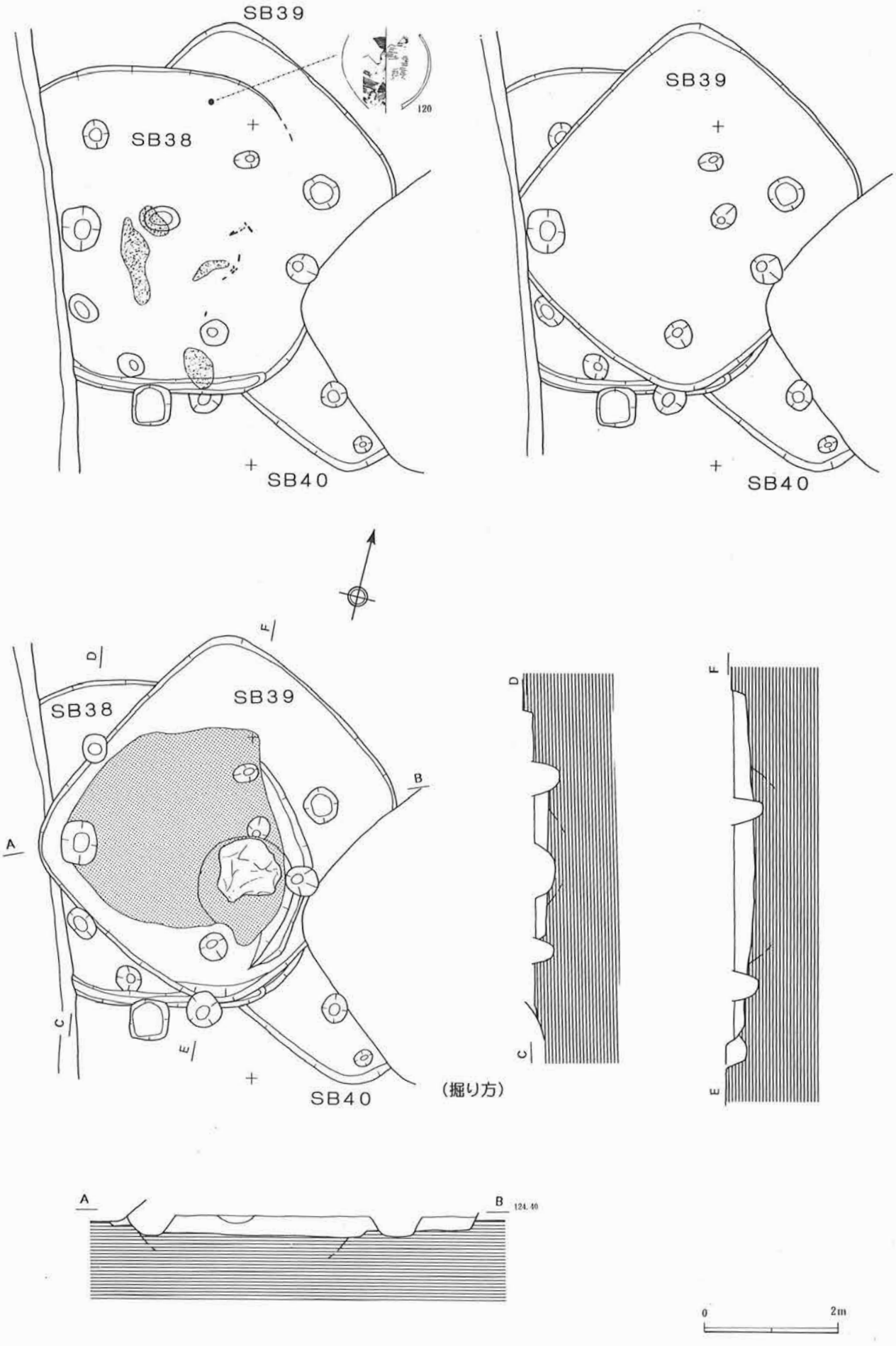
図－29　第Ⅴ次調査　SB27・SB28・SB29・SB41実測図②



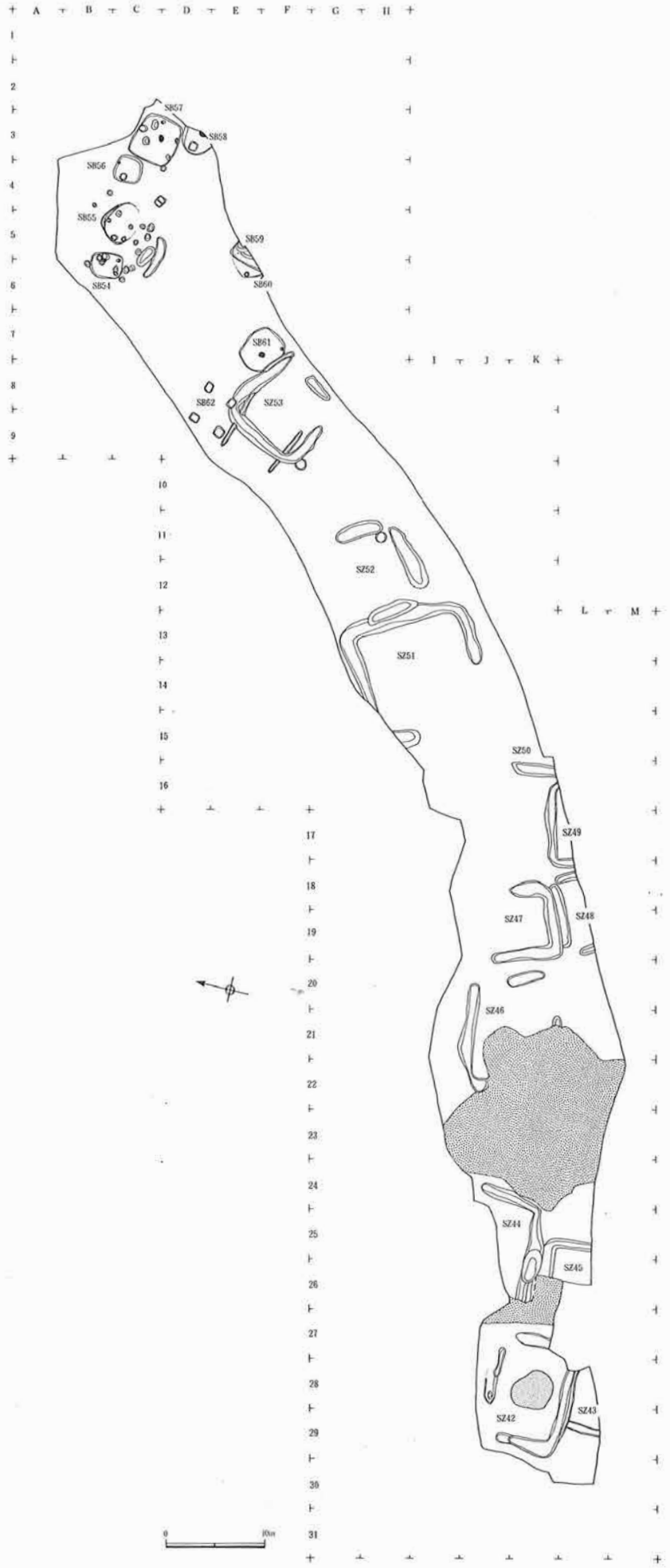
図－30　第Ⅴ次調査　SB31・SB32・SB33・SB34・SB335実測図



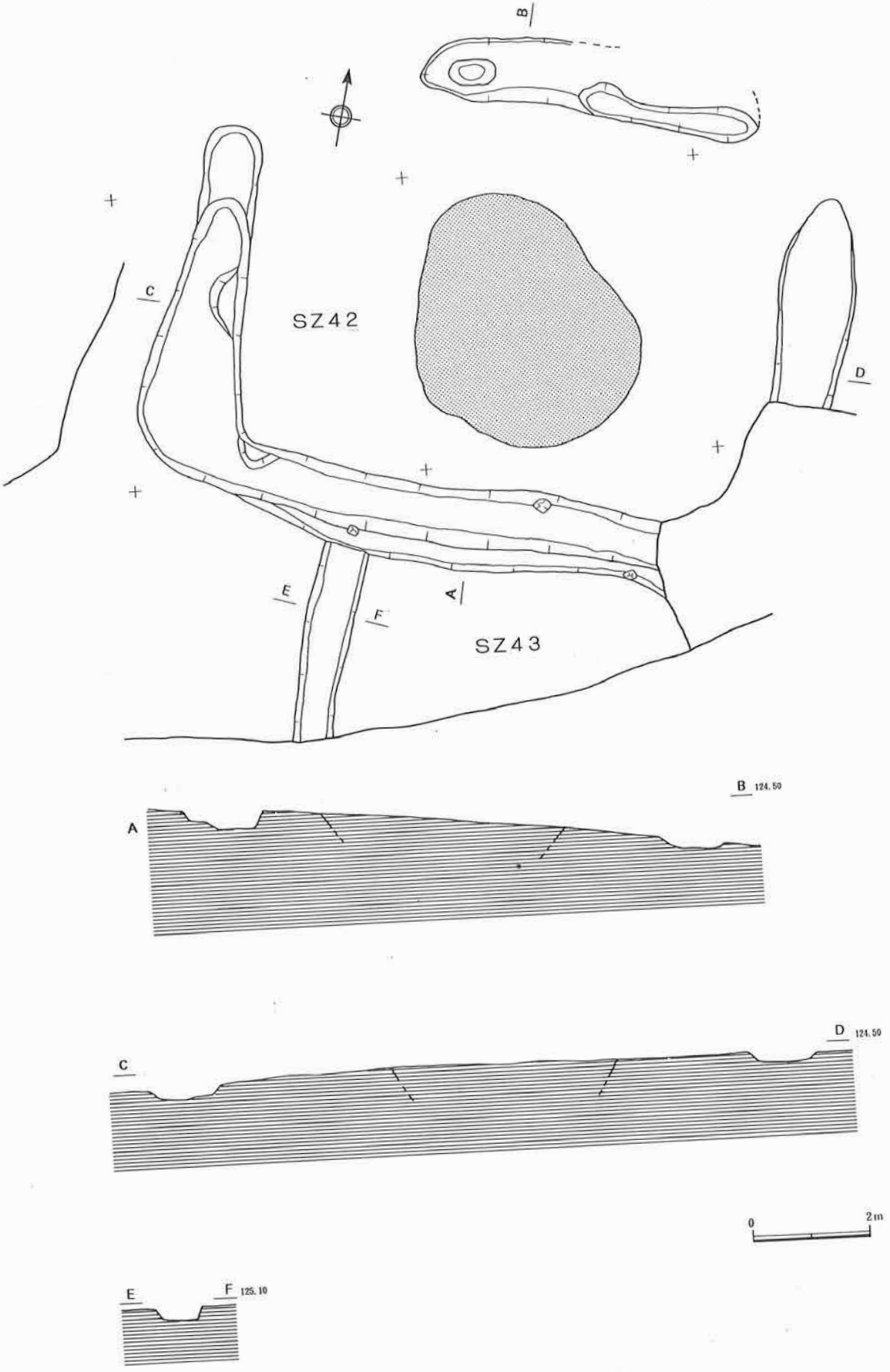
図－31　第Ⅴ次調査　ＳＢ３６・ＳＢ３７実測図



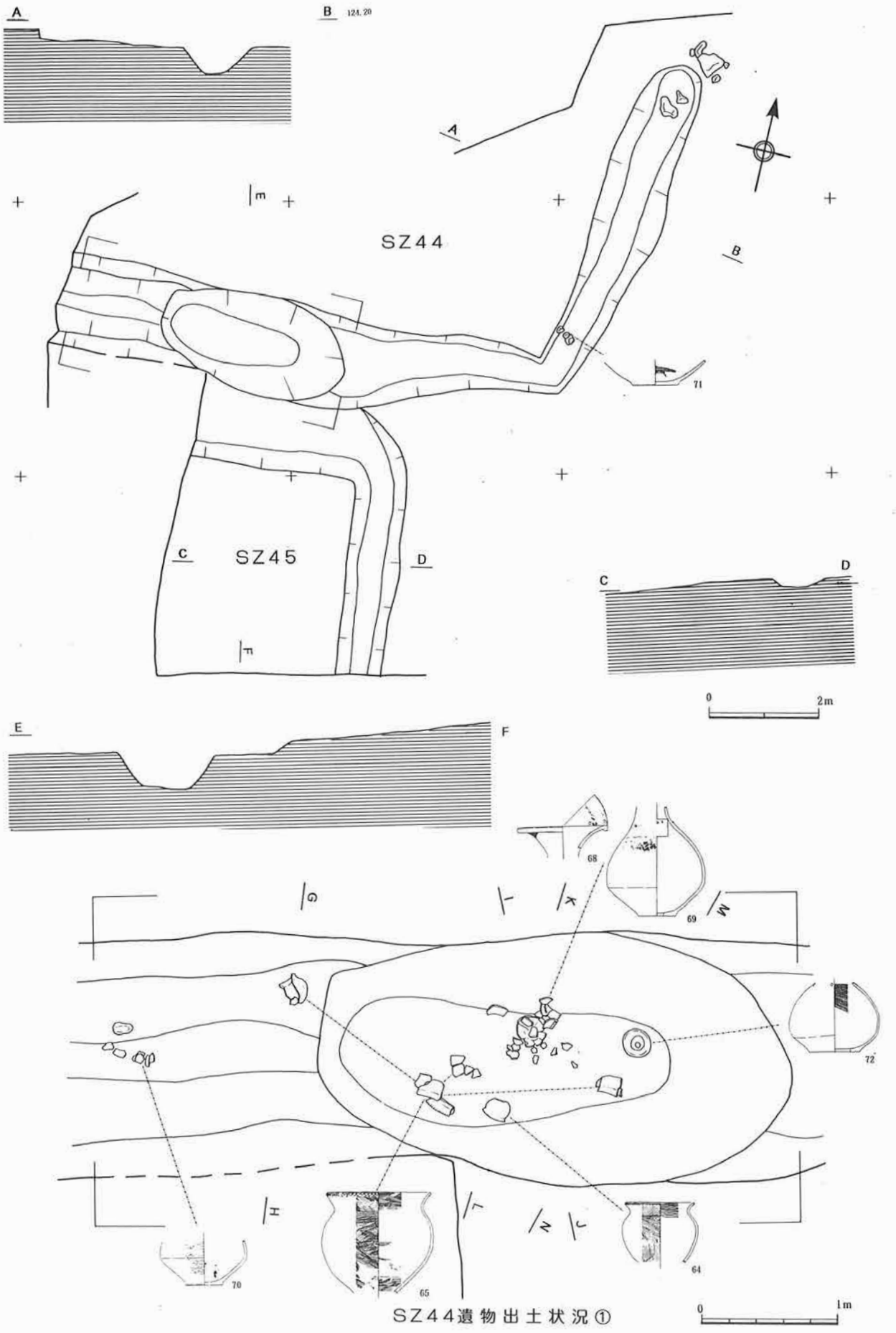
図－32　第Ⅴ次調査　ＳＢ３８・ＳＢ３９・ＳＢ４０実測図



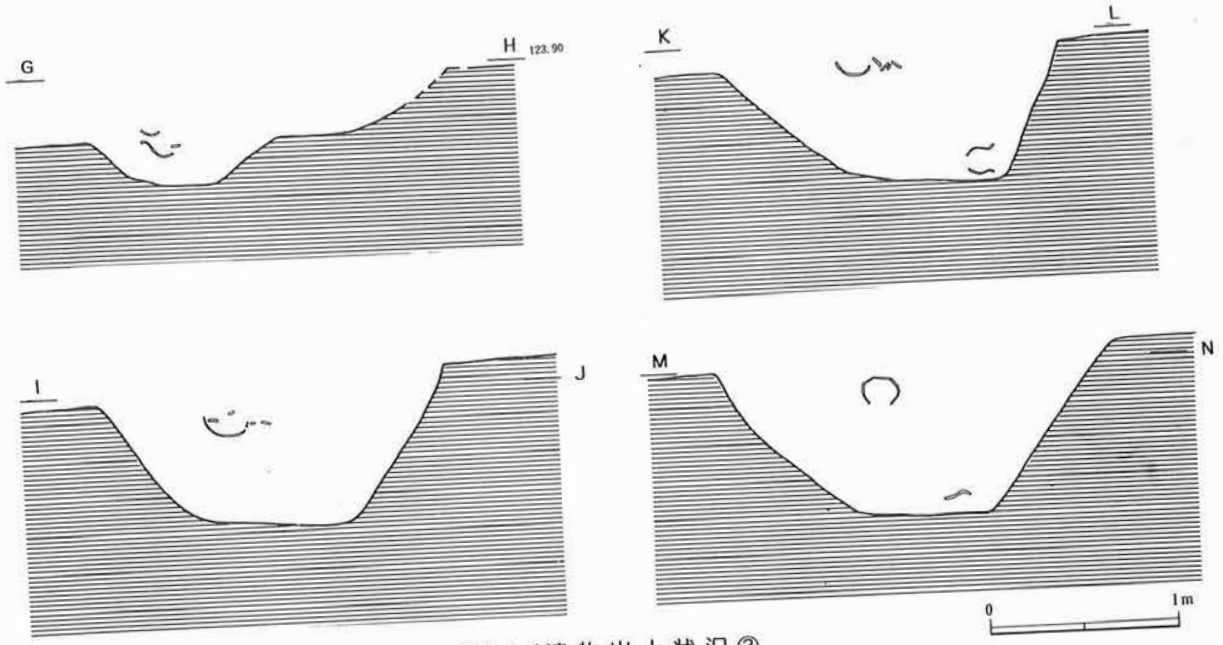
図－33　第Ⅳ次調査全体図



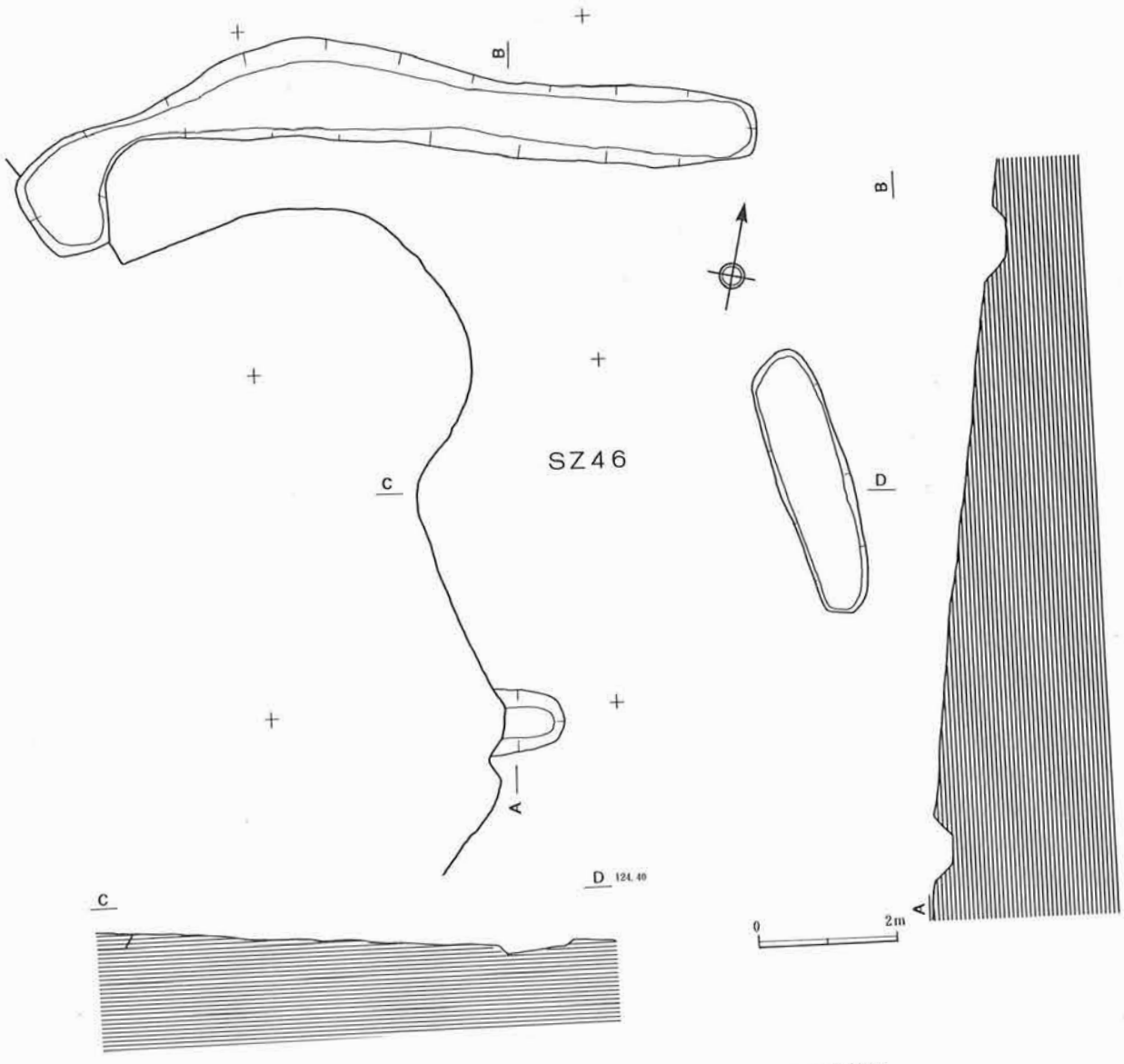
図－34　第Ⅳ次調査　ＳＺ４２・ＳＺ４３実測図



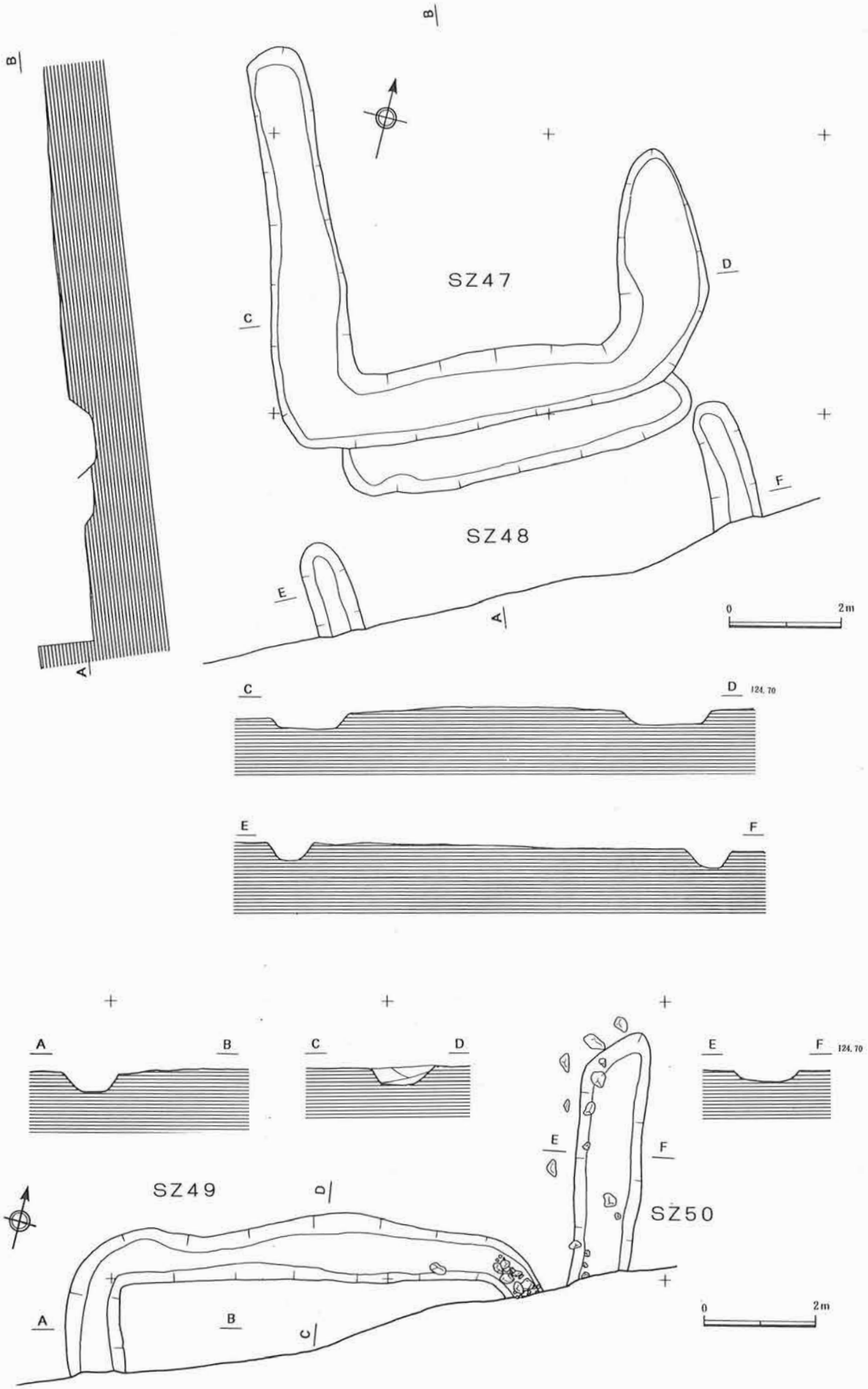
図－35　第Ⅳ次調査　ＳＺ４４①・ＳＺ４５実測図



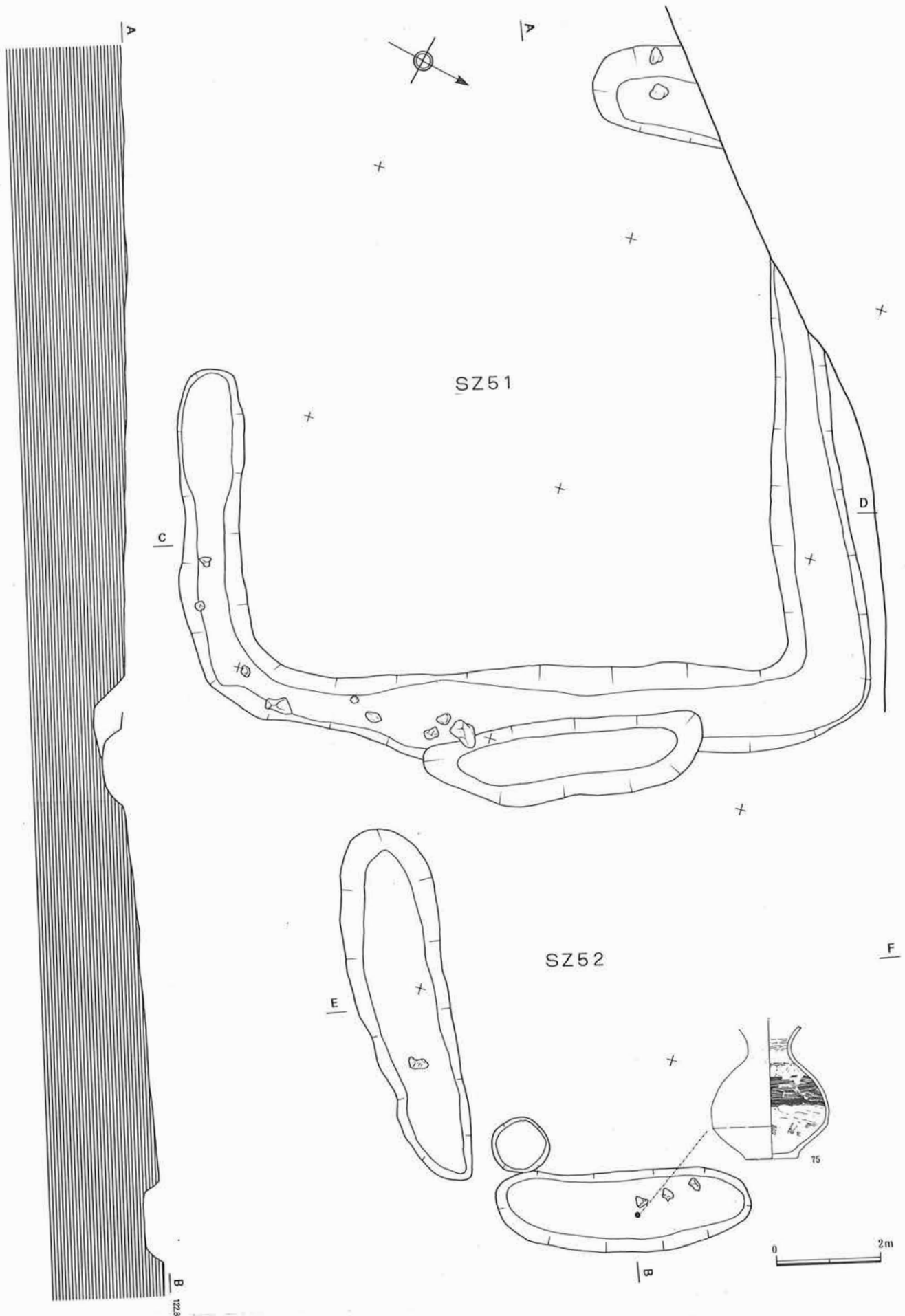
SZ44遺物出土状況②



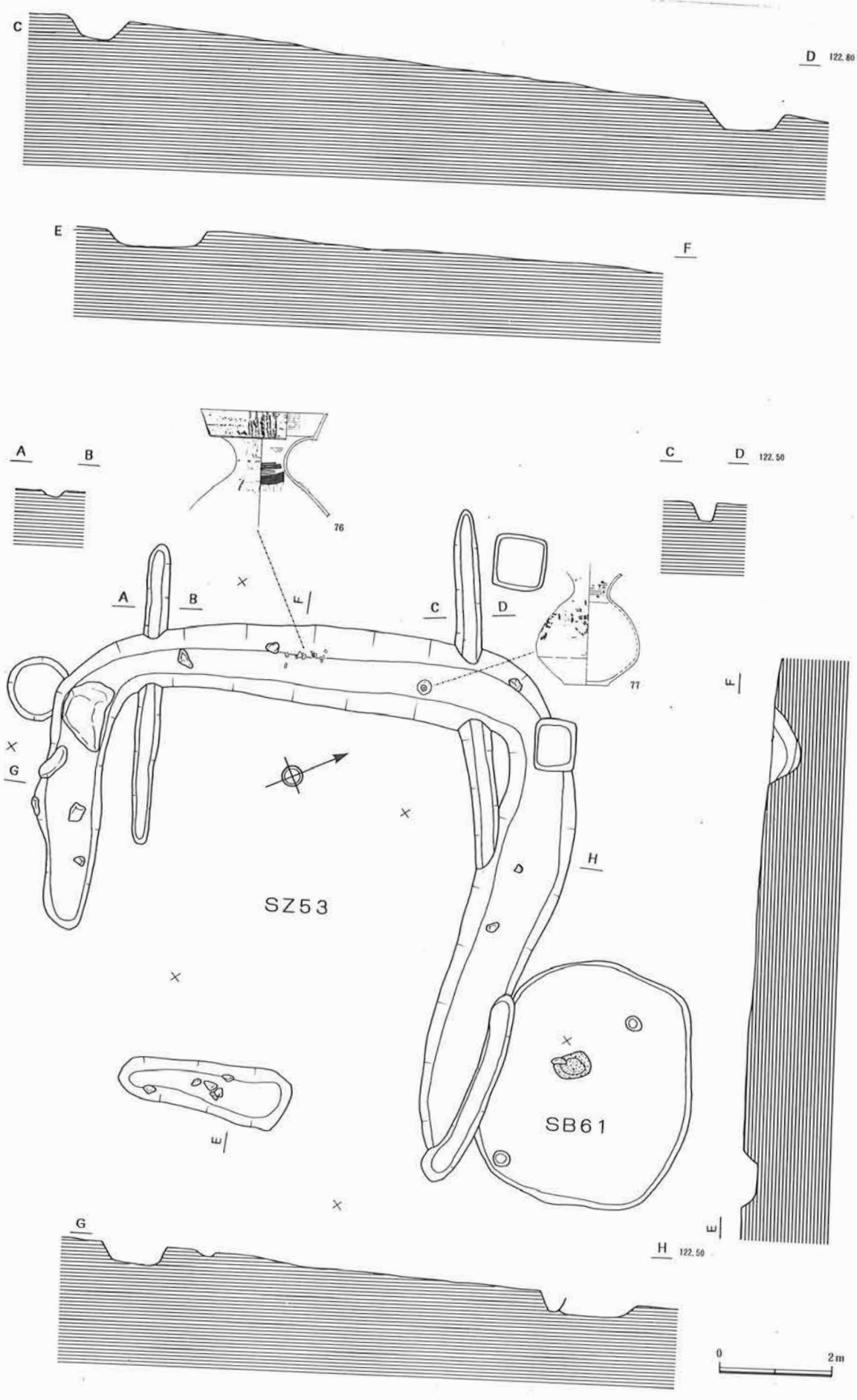
図－36　第Ⅳ次調査　ＳＺ４４②・ＳＺ４６実測図



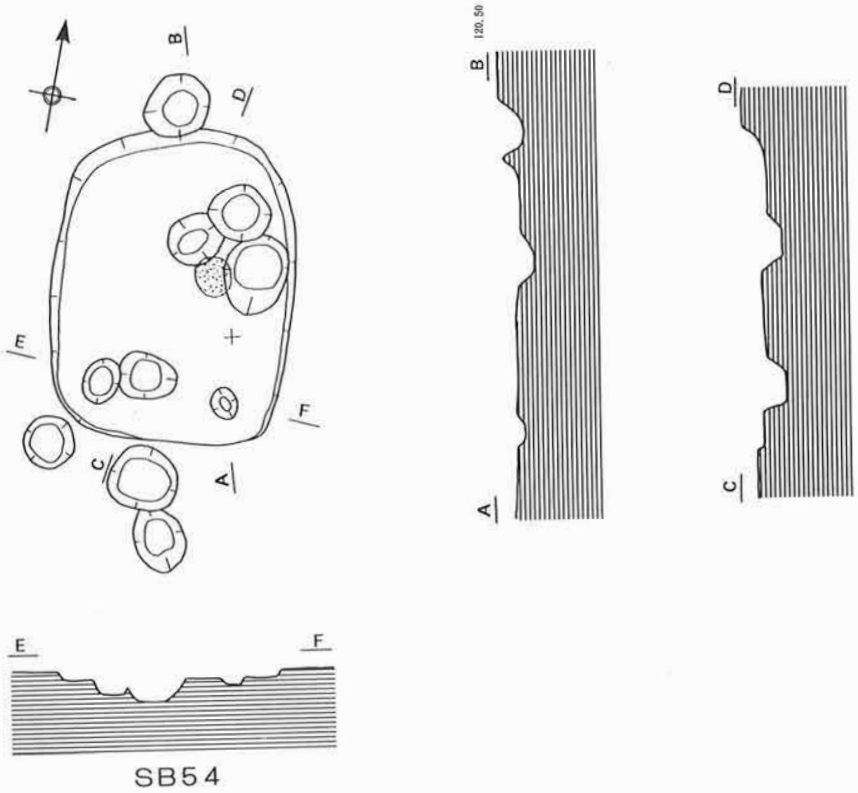
図－37　第Ⅳ次調査　SZ47・SZ48・SZ49・SZ50実測図



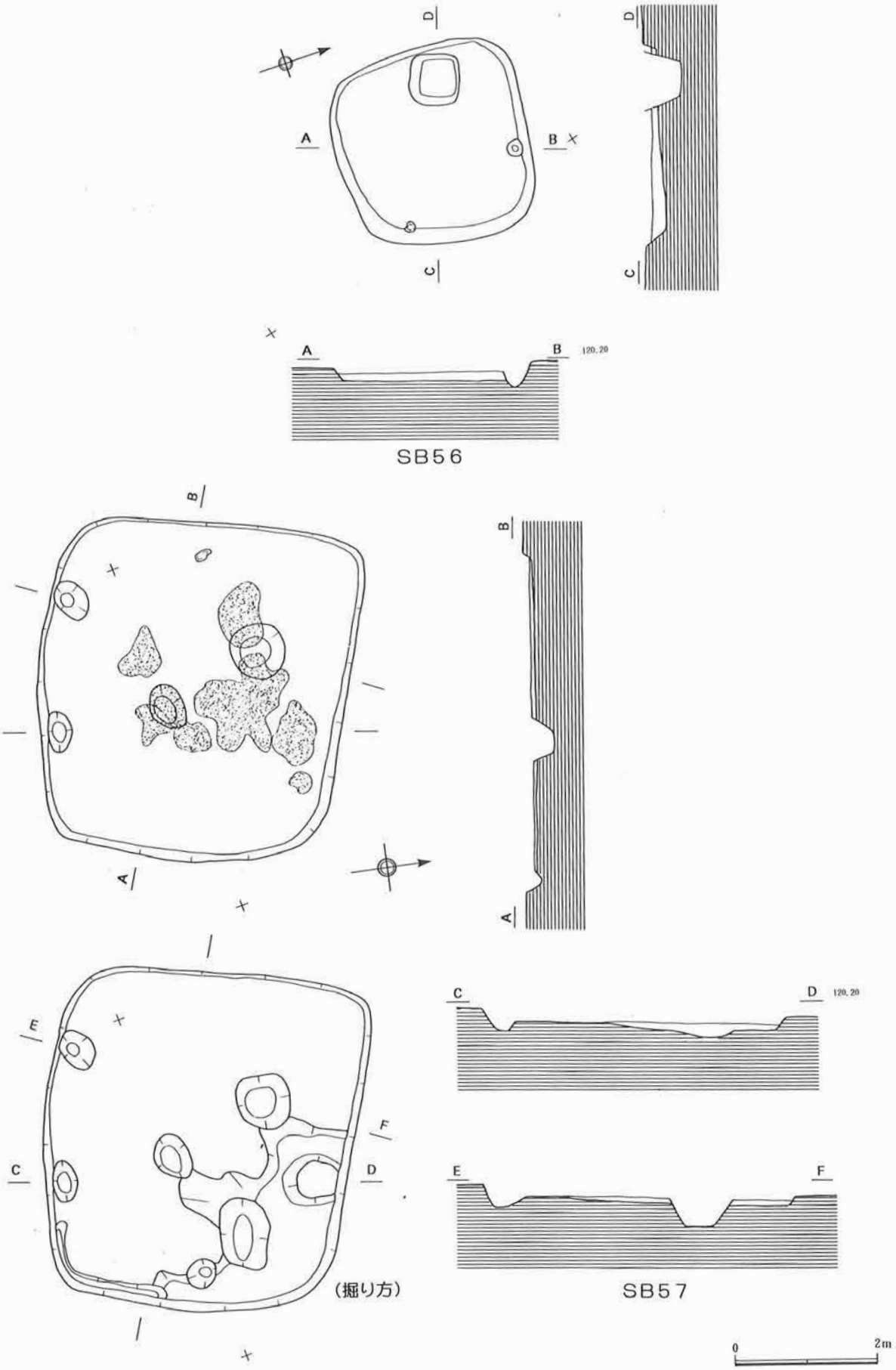
図－38　第Ⅳ次調査　ＳＺ５１・ＳＺ５２実測図



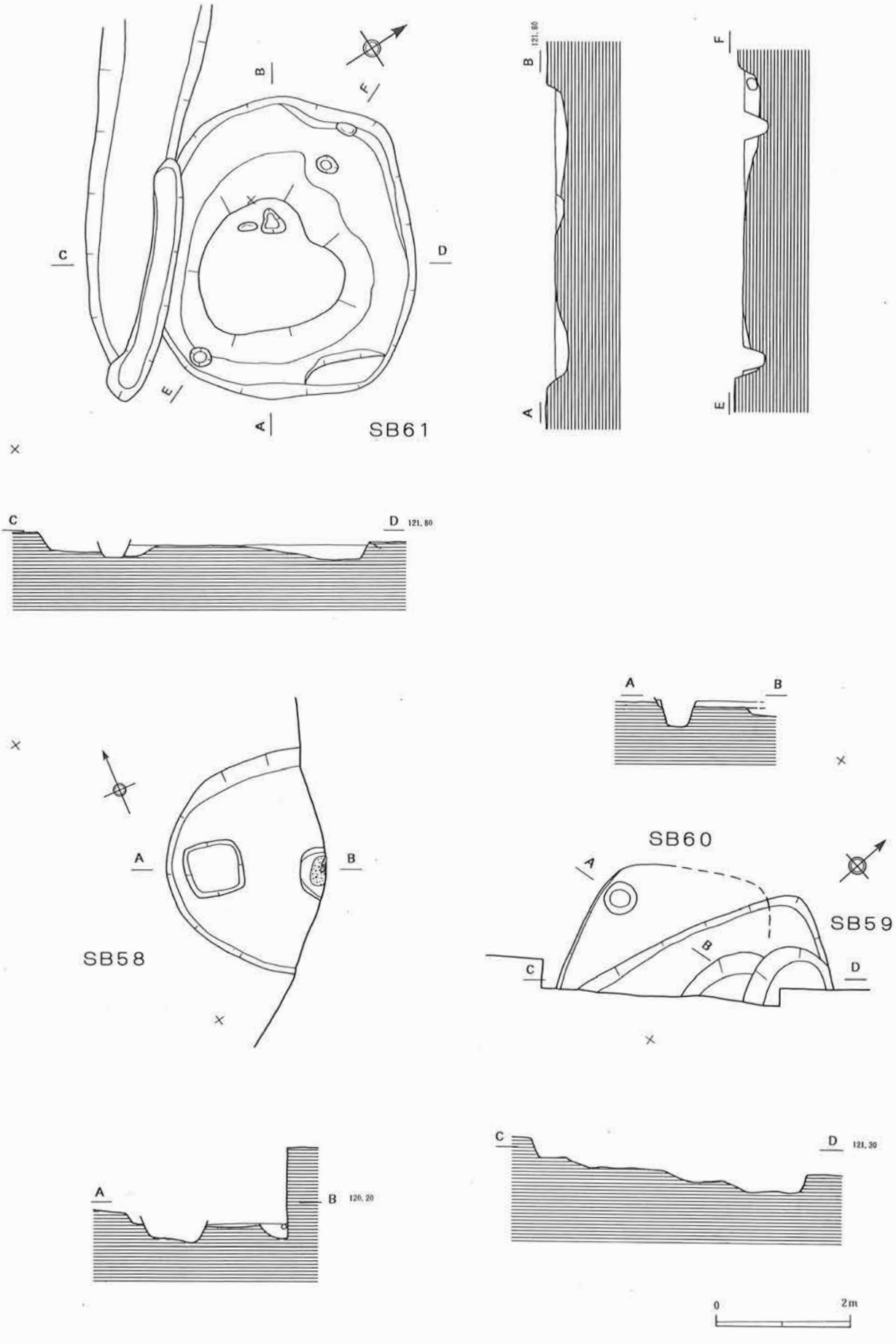
図－39　第Ⅳ次調査　ＳＺ５３・ＳＺ６１実測図



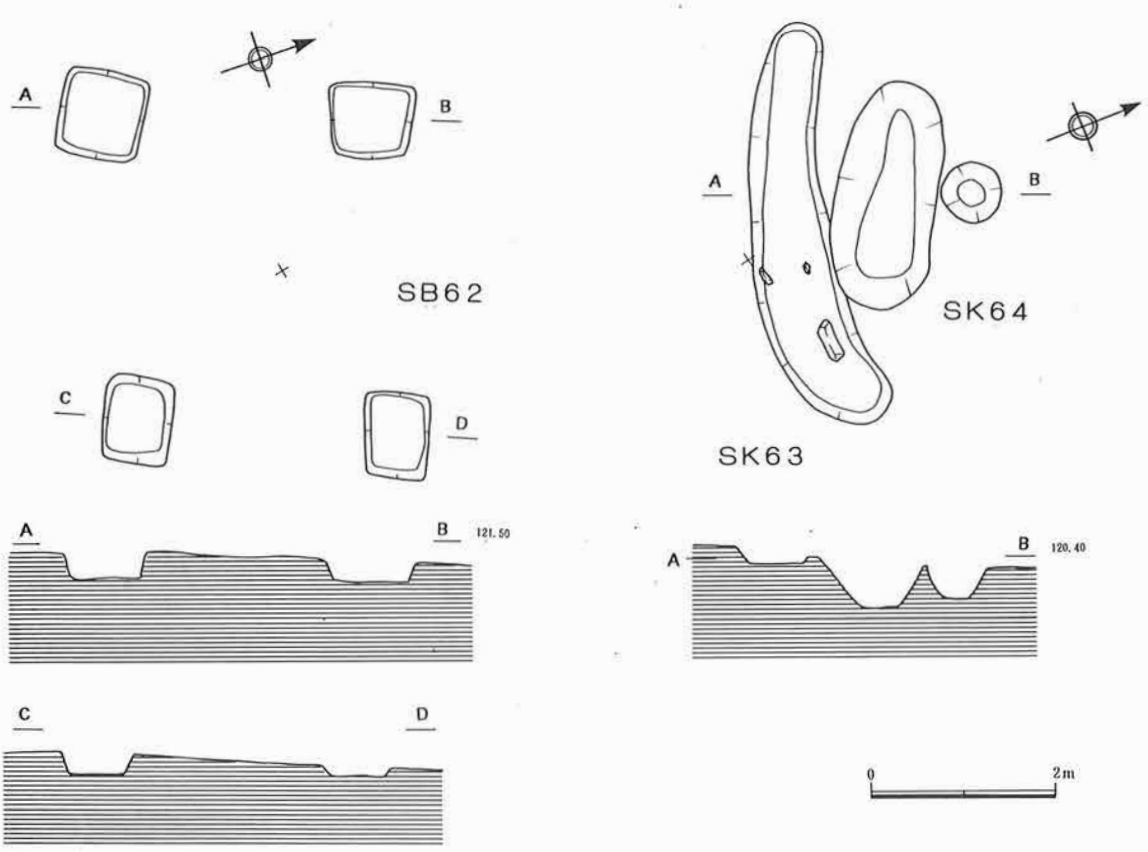
図－40　第Ⅳ次調査　ＳＢ５４・ＳＢ５５実測図



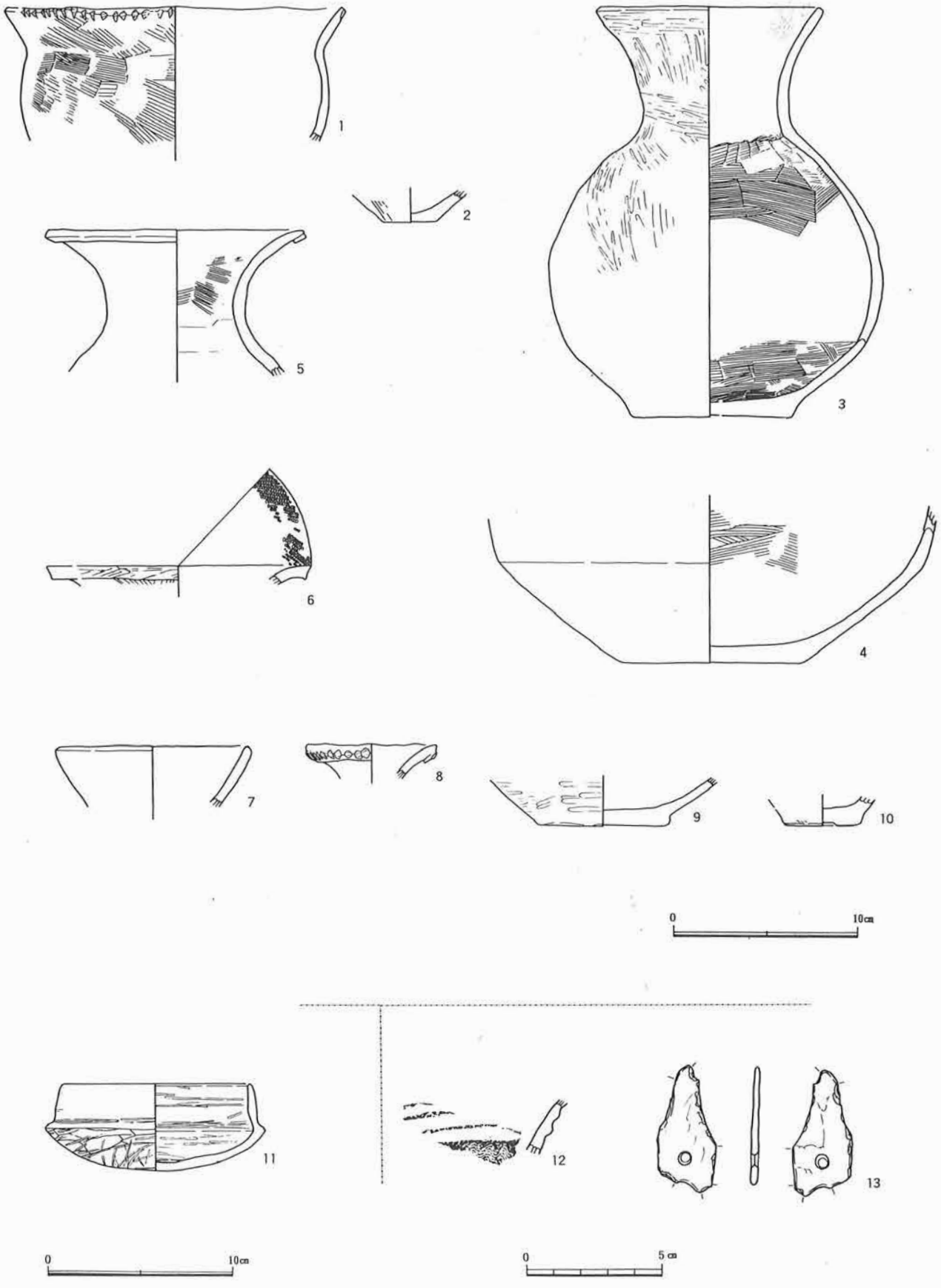
図－41　第Ⅳ次調査　ＳＢ５６・ＳＢ５７実測図



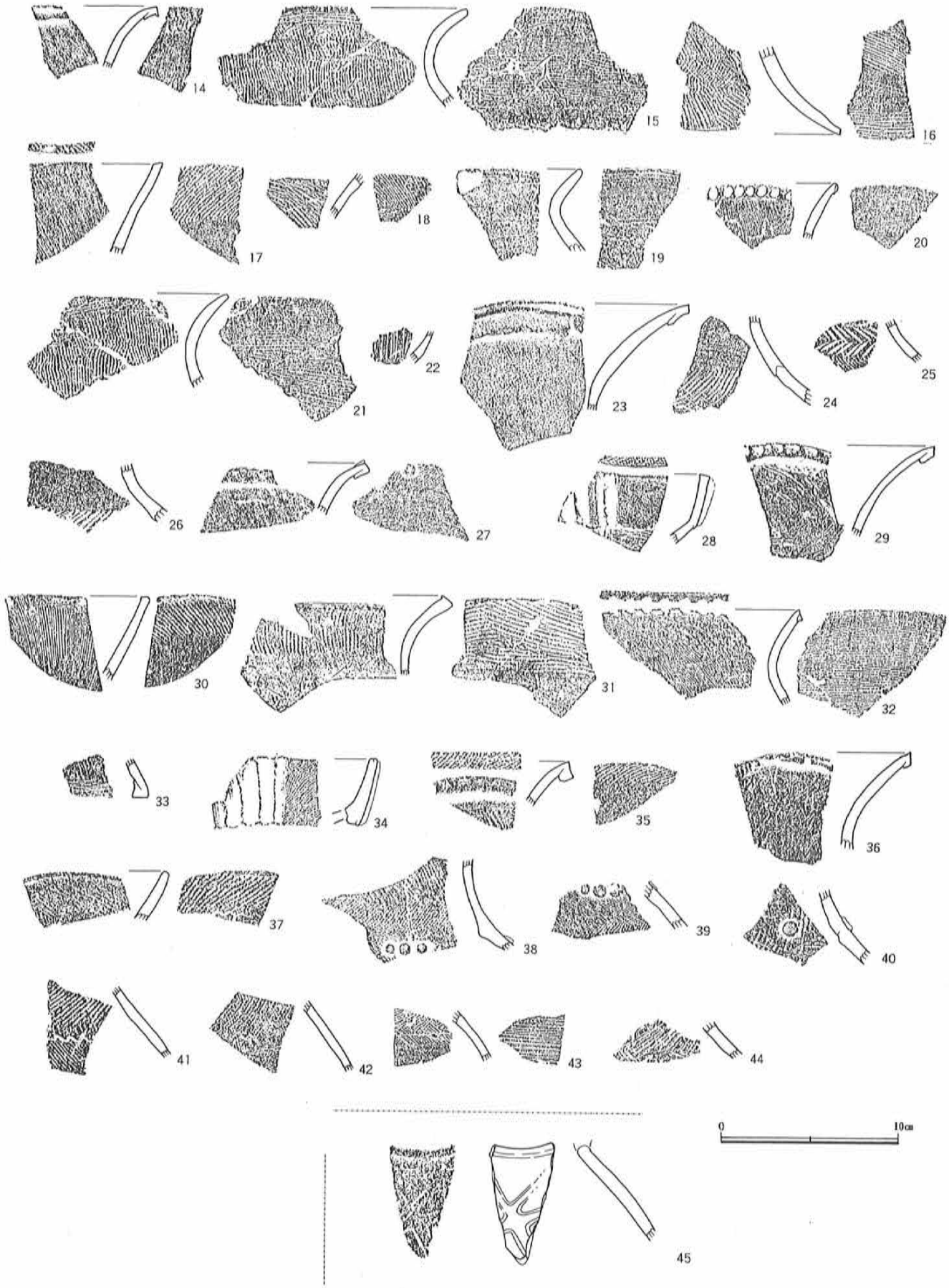
図－42　第Ⅳ次調査　SB58・SB59・SB60・SB61実測図



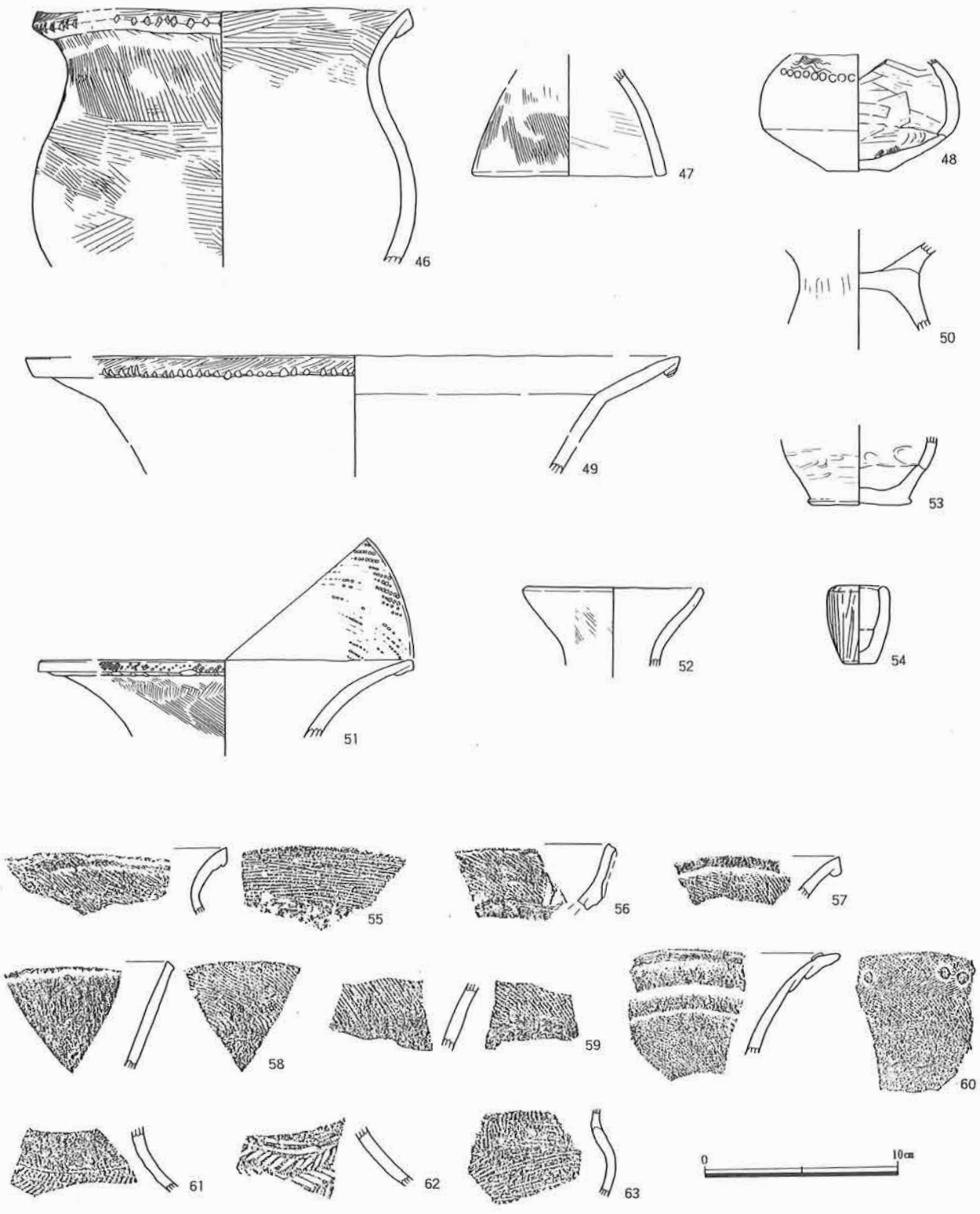
図－43　第Ⅳ次調査　ＳＢ６２・ＳＫ６３・ＳＫ６４実測図



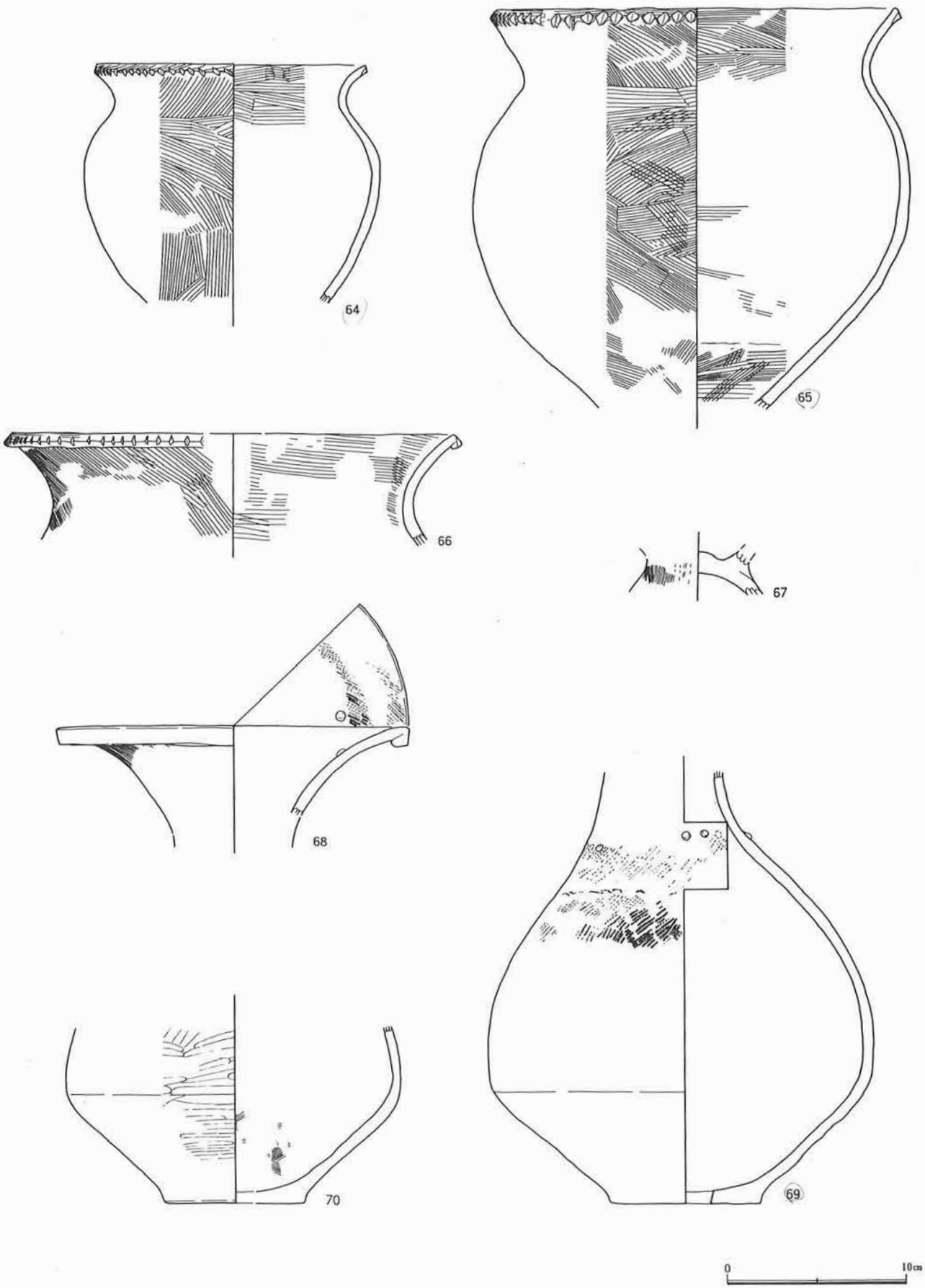
図－44　第Ⅰ次調査出土遺物①



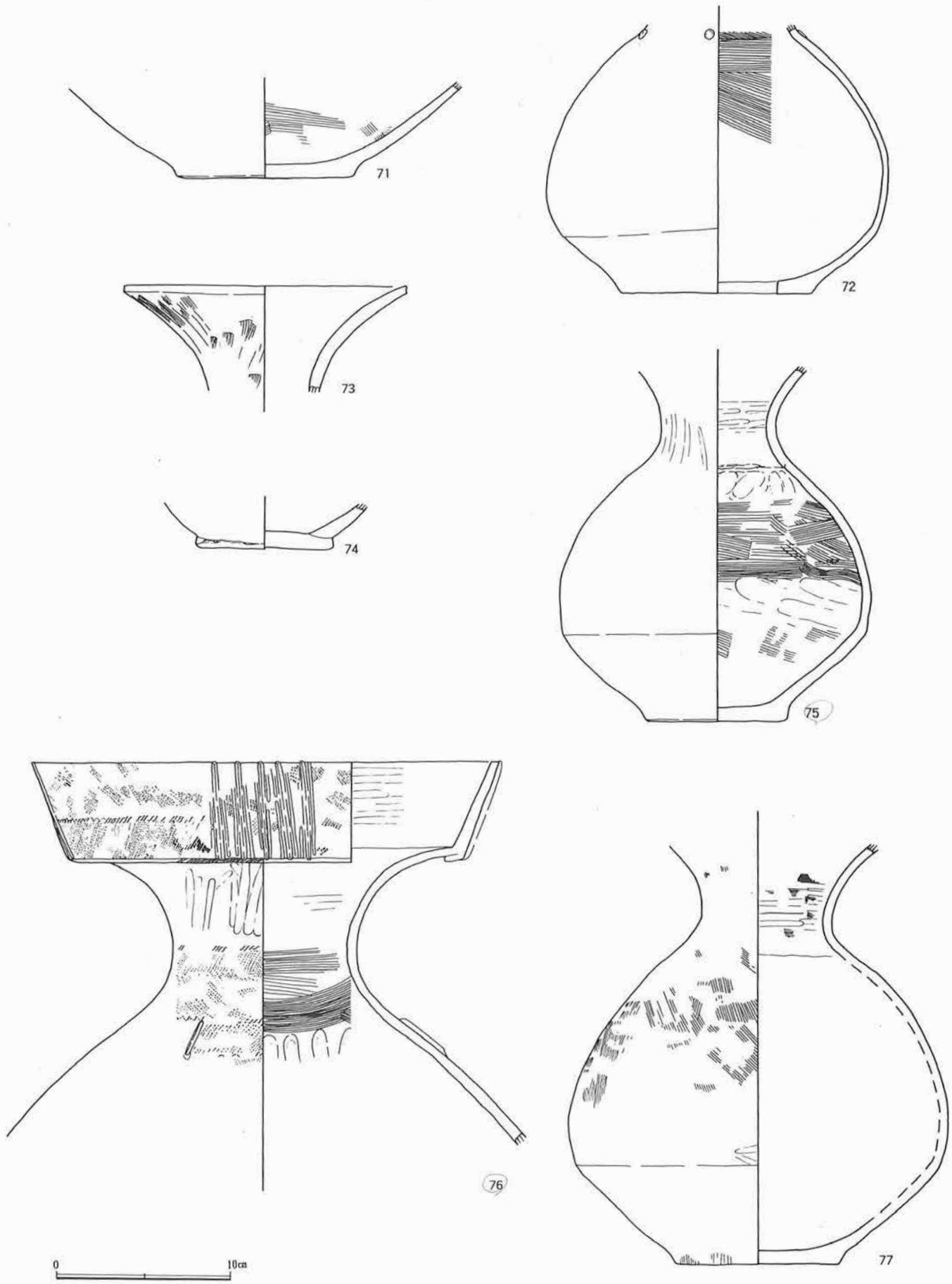
図－45　第Ⅰ次調査出土遺物②



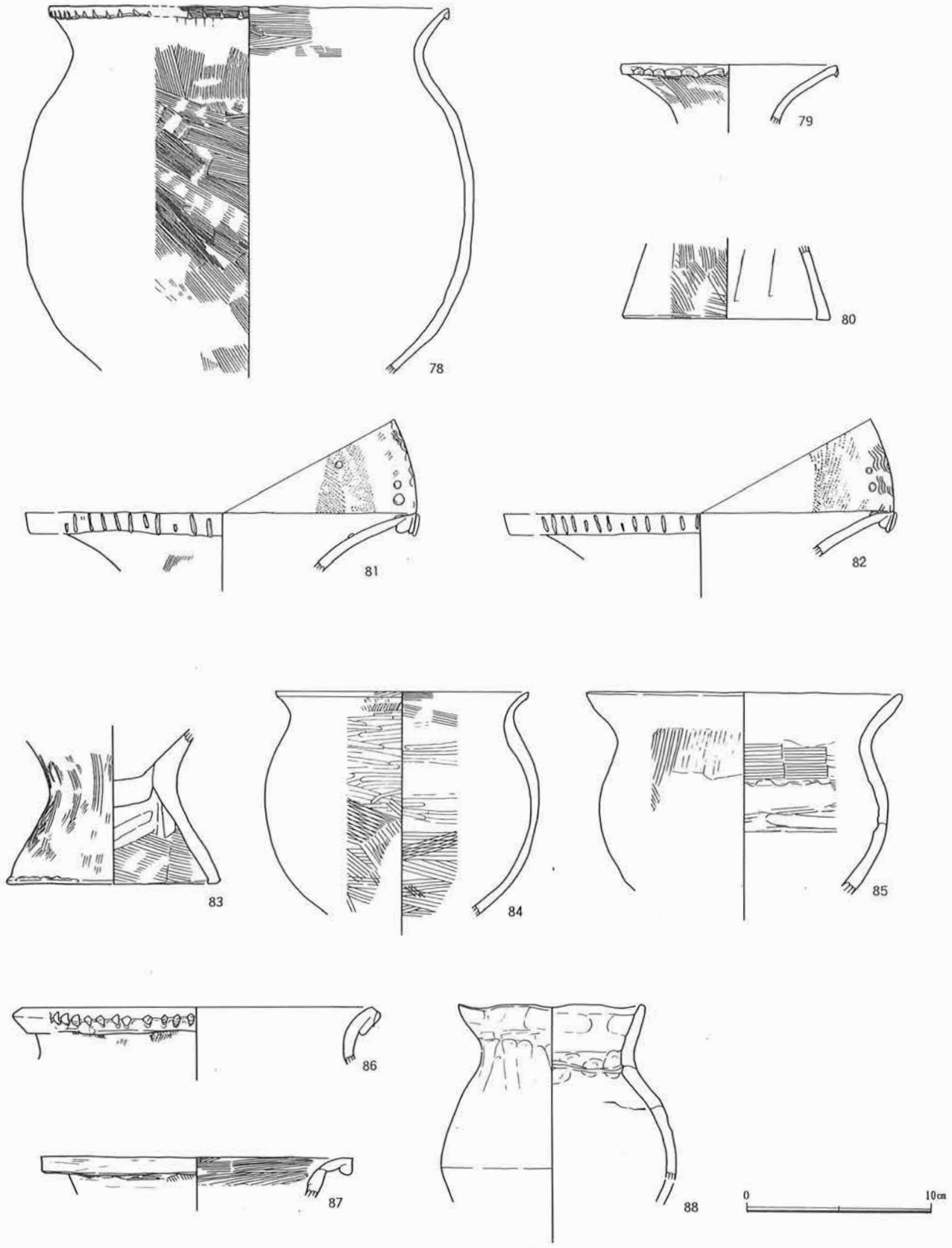
図－46　第Ⅱ次調査出土遺物



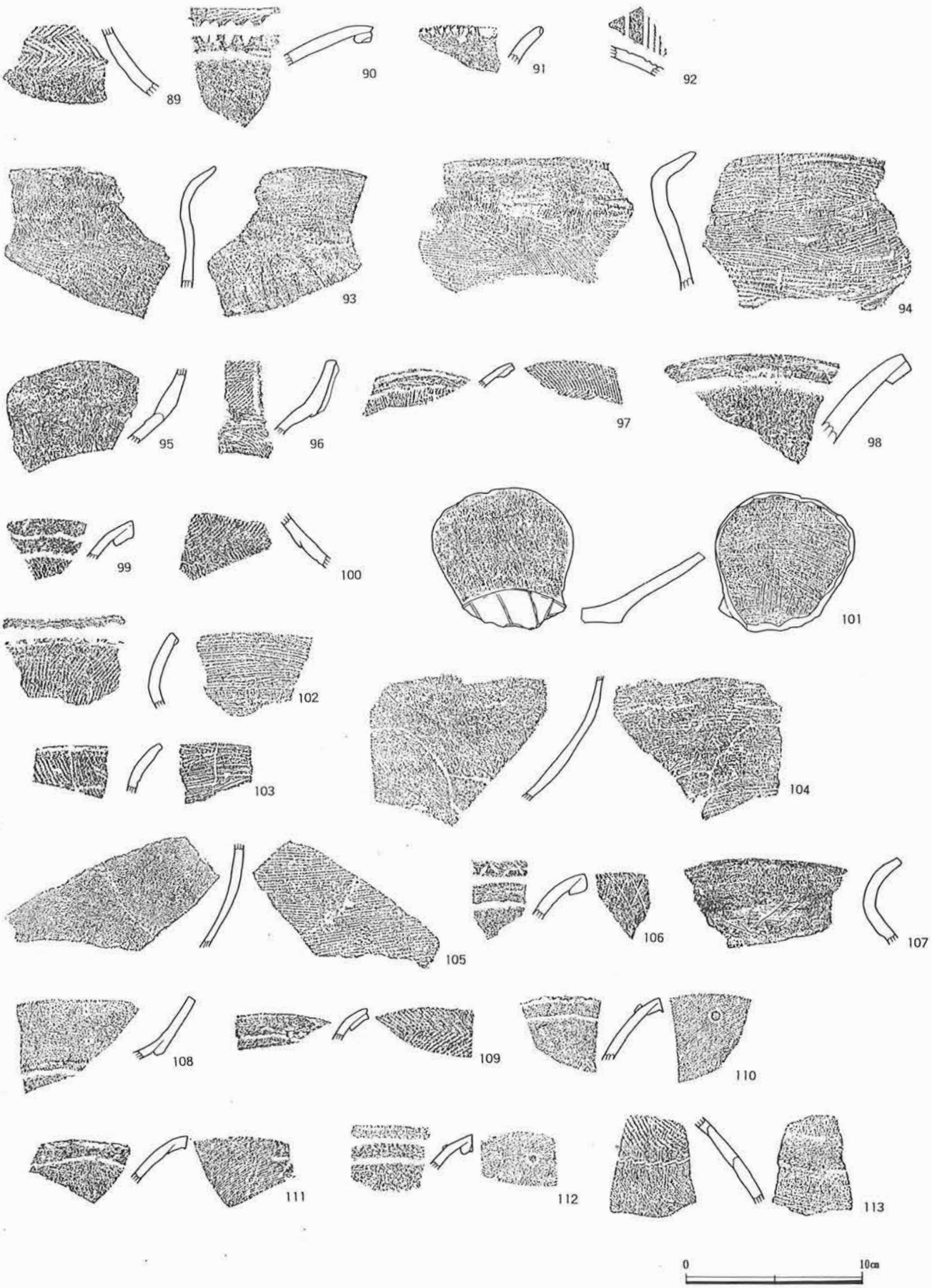
図－47　第Ⅳ次調査出土遺物①



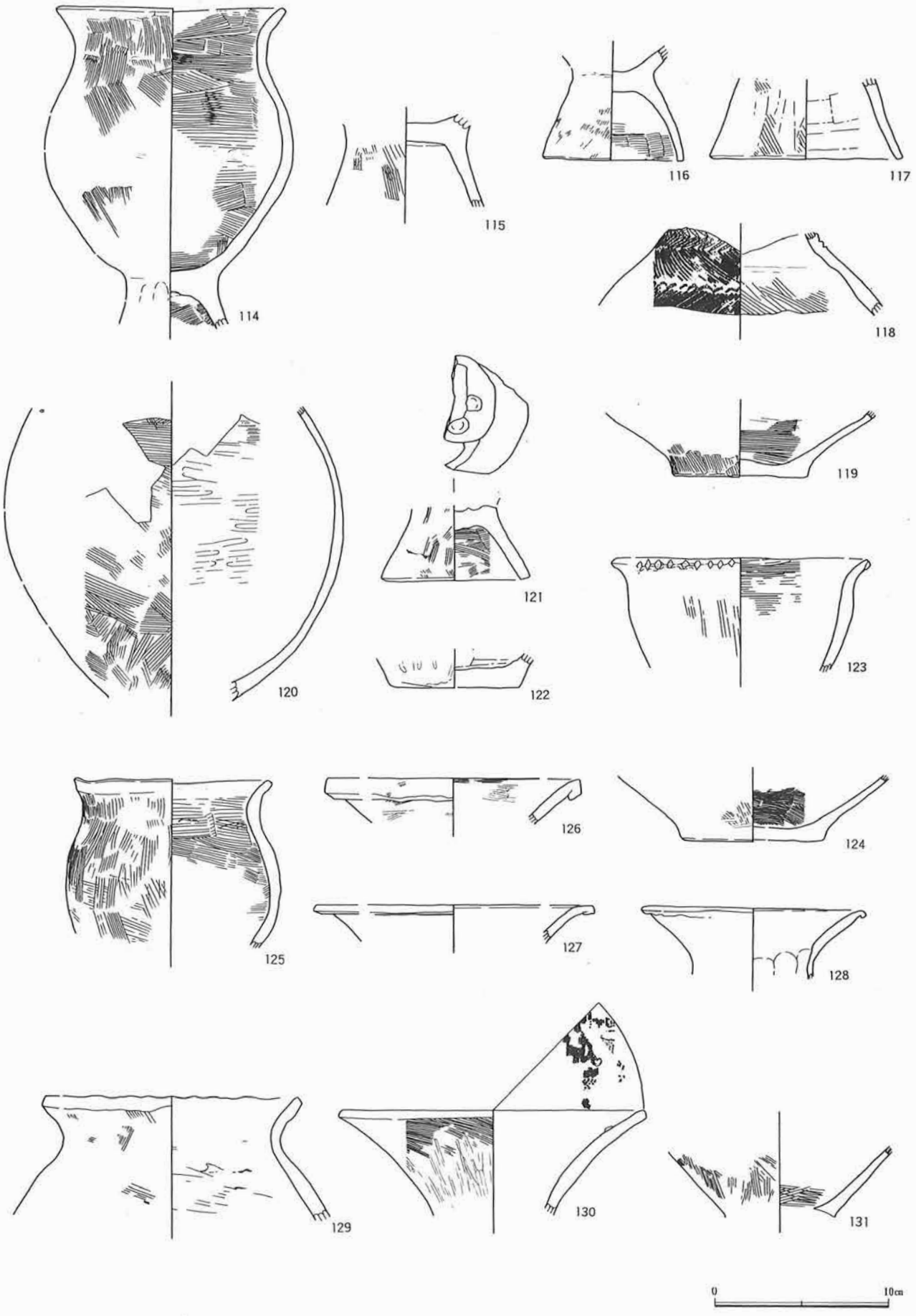
図－48　第Ⅳ次調査出土遺物②



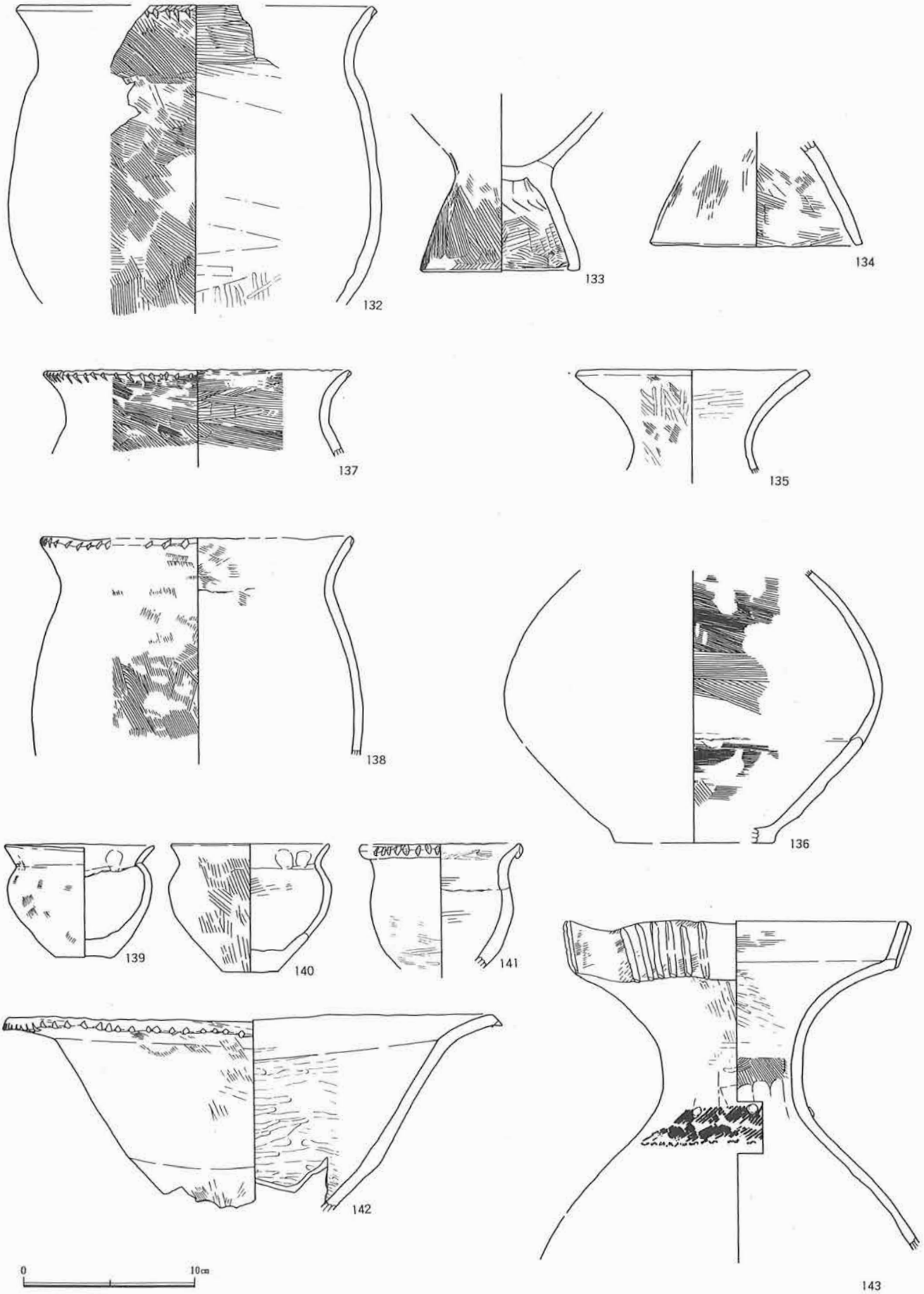
図－49　第Ⅳ次調査出土遺物③



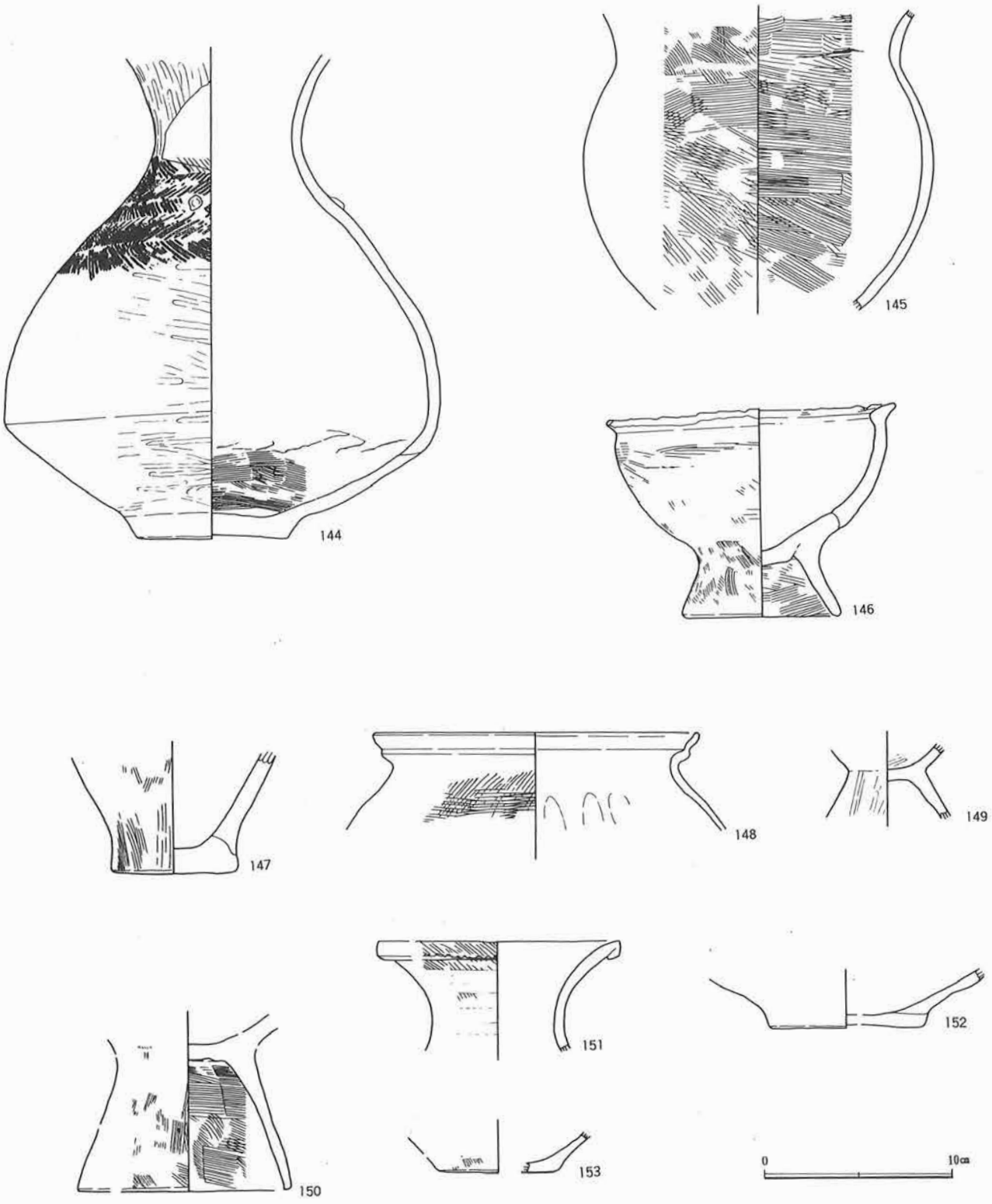
図－50　第Ⅳ次調査出土遺物④



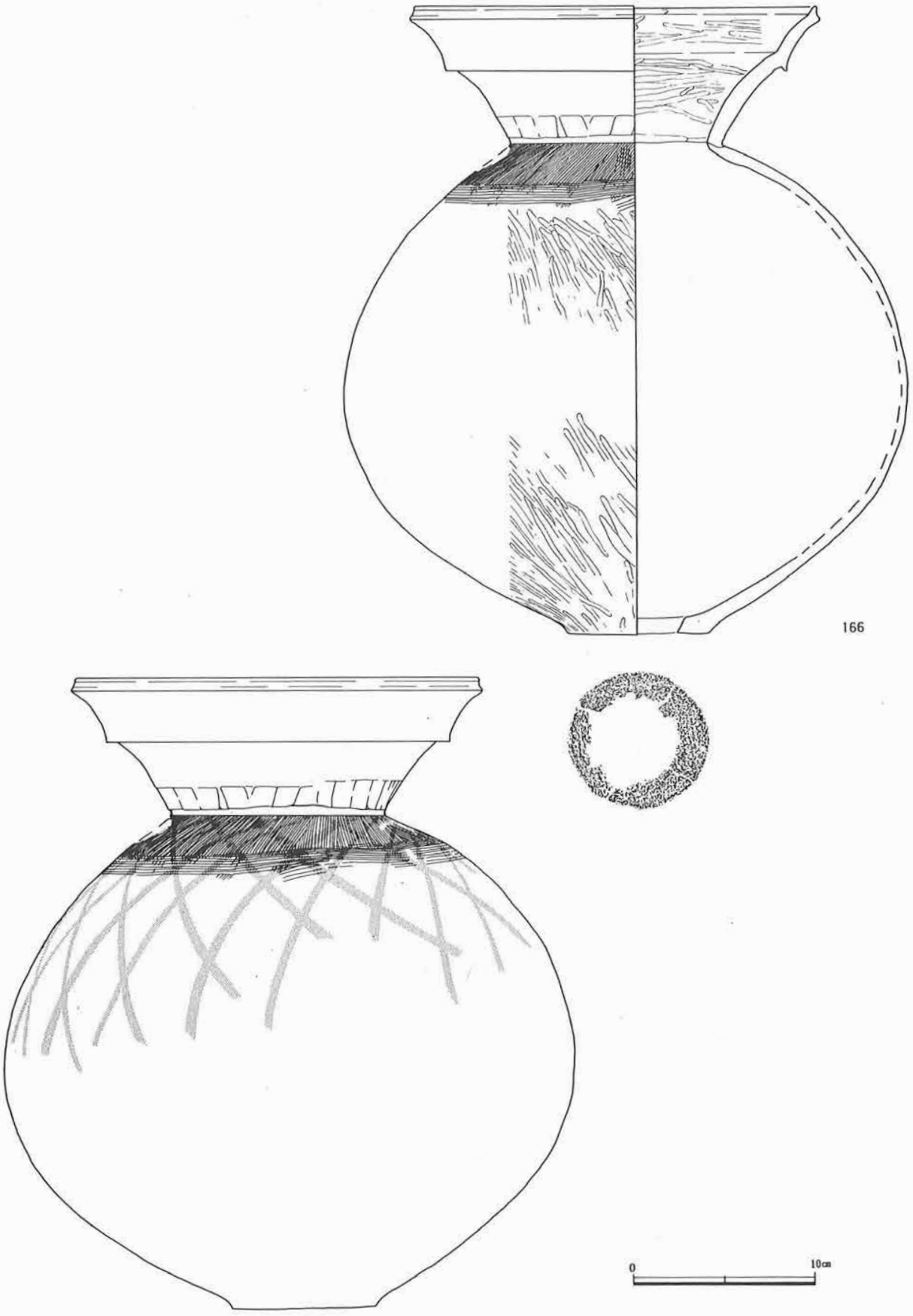
図－51　第Ⅴ次調査出土遺物①



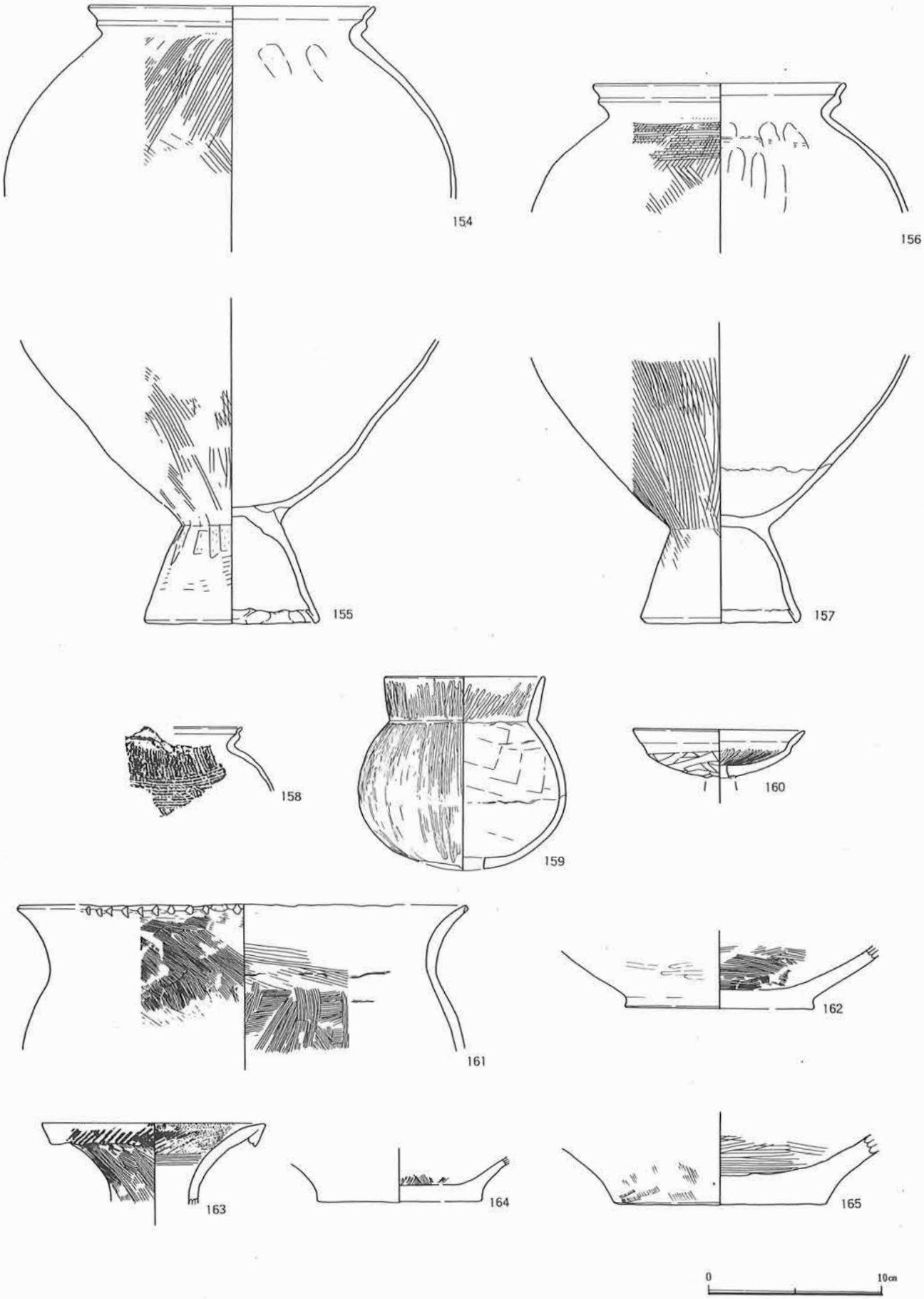
図－52　第Ⅴ次調査出土遺物②



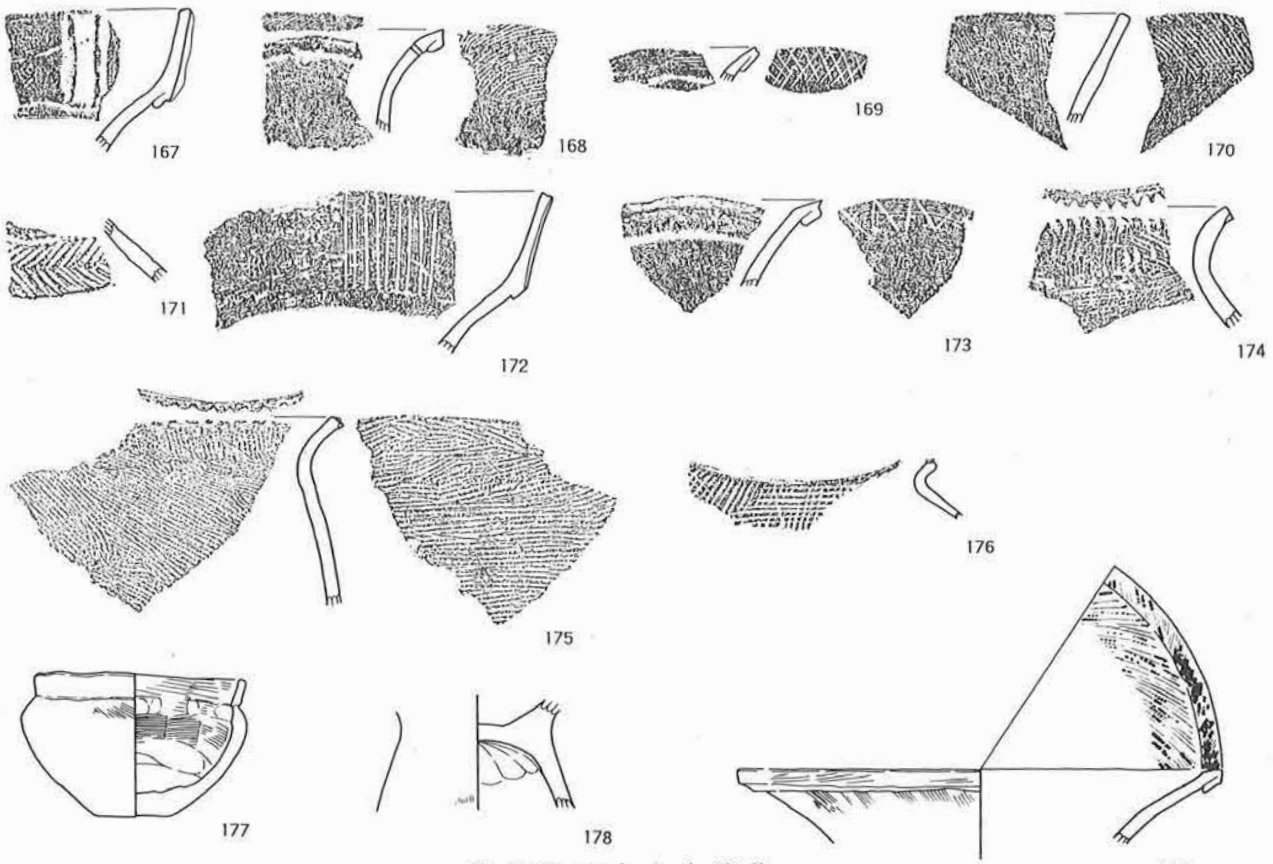
図－53　第Ⅴ次調査出土遺物③



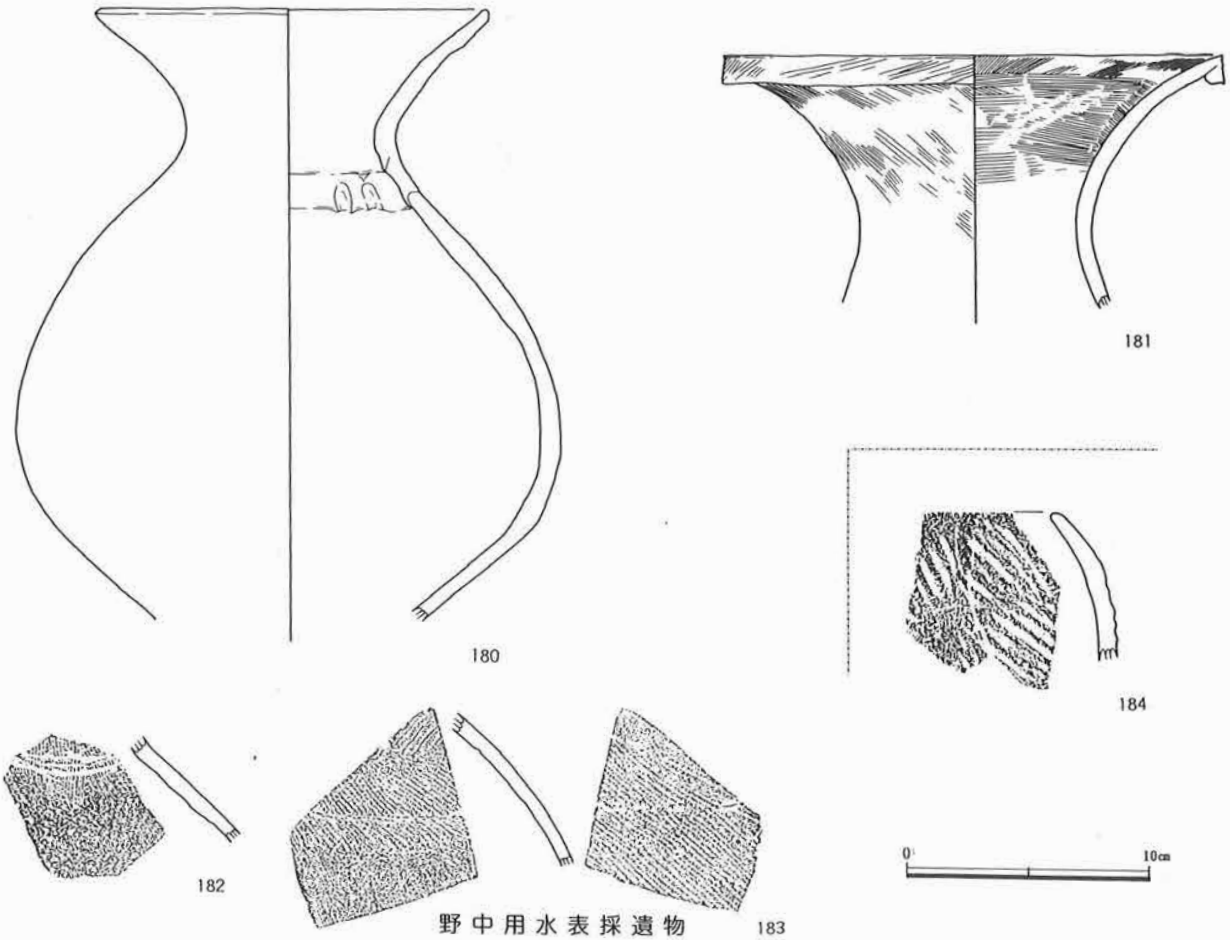
図－54　第Ⅴ次調査出土遺物④



図－55　第Ⅴ次調査出土遺物⑤

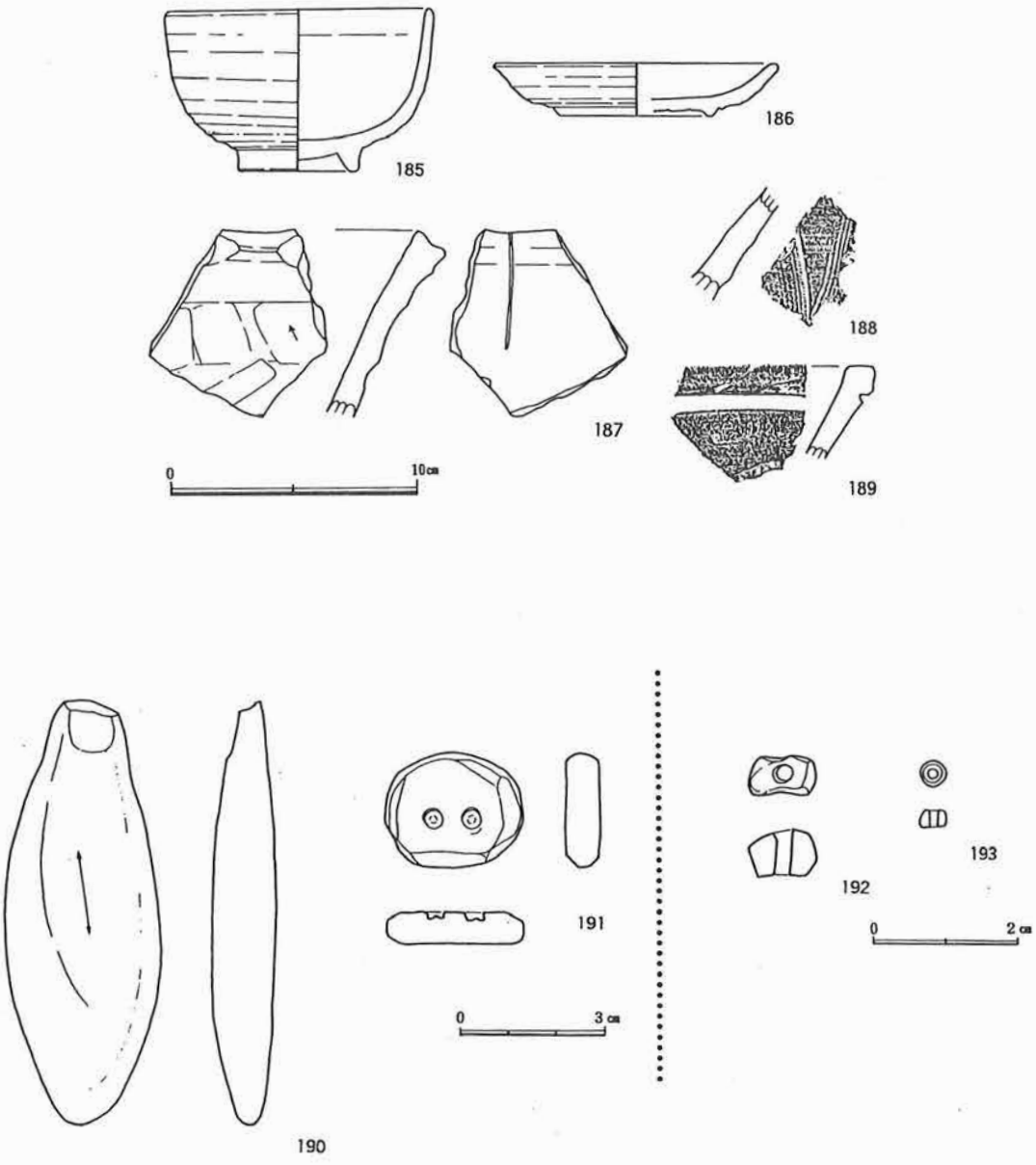


第Ⅴ次調査出土遺物



野中用水表採遺物

図－56　第Ⅴ次調査出土遺物⑥　野中用水表採遺物



図－57　出　土　遺　物　（陶磁器、玉類、石製品）

縄文時代編

挿　図　目　次

図－1　早期前半の縄文土器実測図 …… 155
図－2　早期前半の無文土器実測図 …… 156
図－3　清水ノ上式．木島式
　　土器実測図 …… 157
図－4　関山式土器実測図 …… 158
図－5　諸磯式土器実測図 …… 159
図－6　北裏Ｃ１式土器実測図－１ …… 160
図－7　北裏Ｃ１式土器実測図－２ …… 161
図－8　五領ヶ台式土器実測図－１ …… 162
図－9　五領ヶ台式土器実測図－２ …… 163
図－10　五領ヶ台式土器実測図－３ …… 164
図－11　北屋敷土器実測図 …… 165
図－12　勝坂式土器実測図－１ …… 166
図－13　勝坂式土器実測図－２ …… 167
図－14　勝坂式土器実測図－３ …… 168
図－15　勝坂式土器実測図－４ …… 169
図－16　加曽利Ｅ式土器実測図 …… 171
図－17　称名寺式土器実測図－１ …… 173
図－18　称名寺式土器実測図－２ …… 174
図－19　三十稲場式土器実測図 …… 175
図－20　縁帯文系土器実測図 …… 177
図－21　付加条縄文が施される
　　土器実測図－１ …… 179
図－22　付加条縄文が施される
　　土器実測図－２ …… 180
図－23　加曽利Ｂ式土器実測図 …… 181
図－24　沈線文．縄文が施される
　　土器実測図 …… 182
図－25　文様の施されない土器実測図 …… 183
図－26　口縁部破片と埋甕の時期別分布 …… 187
図－27　口縁部破片調査区別出土比率 …… 188
図－28　曽利式土器実測図－１ …… 189
図－29　曽利式土器実測図－２ …… 190
図－30　曽利式土器実測図－３ …… 191
図－31　曽利式土器実測図－４ …… 192
図－32　曽利式土器実測図－５ …… 193
図－33　曽利式土器実測図－６ …… 194
図－34　堀之内式土器実測図－１ …… 195
図－35　堀之内式土器実測図－２ …… 196
図－36　堀之内式土器実測図－３ …… 197
図－37　堀之内式土器実測図－４ …… 198
図－38　堀之内式土器実測図－５ …… 199
図－39　堀之内式土器実測図－６ …… 200
図－40　堀之内式土器実測図－７ …… 201
図－41　土器片円盤分類図 …… 202
図－42　土器片円盤出土区一覧 …… 202
図－43　土器片円盤文様別分類 …… 203
図－44　土器片円盤法量比較 …… 203
図－45　土器片円盤法量分布 …… 204
図－46　土器片円盤実測図－１ …… 205
図－47　土器片円盤実測図－２ …… 206
図－48　土器片円盤実測図－３ …… 207
図－49　土器片錘実測図 …… 208
図－50　土器片錘集成図 …… 209
図－51　土器片錘法量分布 …… 209
図－52　土器片錘重量分布 …… 209
図－53　土偶片．及び安養寺の
　　土偶実測図 …… 210
図－54　尖頭器実測図 …… 211
図－55　石鏃出土区一覧 …… 212
図－56　石鏃分類図 …… 212
図－57　石鏃実測図－１ …… 213
図－58　石鏃実測図－２ …… 214
図－59　石鏃実測図－３ …… 215
図－60　石錘出土区一覧 …… 216
図－61　石錘法量分布 …… 216
図－62　石錘重量分布 …… 217
図－63　石錘実測図－１ …… 218
図－64　石錘実測図－２ …… 219
図－65　石錘実測図－３ …… 220
図－66　石皿と蜂の巣石Ⅱ類の
　　出土区一覧 …… 221
図－67　蜂の巣石実測図－１ …… 223
図－68　蜂の巣石実測図－２ …… 224
図－69　蜂の巣石実測図－３ …… 225
図－70　蜂の巣石実測図－４ …… 226
図－71　敲石出土区一覧 …… 229
図－72　磨り面をもつ敲石実測図 …… 231
図－73　特殊磨石実測図 …… 233
図－74　両刃石斧の着柄想定図 …… 234
図－75　打製石斧集成図 …… 235
図－76　磨製石斧実測図－１ …… 237
図－77　磨製石斧実測図－２ …… 238
図－78　スクレイパー類実測図 …… 239

図—79　石錐実測図－1 …… 240
図—80　石錐実測図－2 …… 241
図—81　凹石（凹部）集成図 …… 242
図—82　凹石実測図 …… 243
図—83　砥石実測図 …… 245
図—84　石鋸実測図 …… 246
図—85　石匙実測図－1 …… 247
図—86　石匙実測図－2 …… 248
図—87　石匙実測図－3 …… 249
図—88　硬玉製大珠及び
　　石製品実測図 …… 249
図—89　石棒実測図 …… 250
図—90　石器地区別出土比率 …… 251
図—91　ドングリ類実測図 …… 253
図—92　石皿実測図－1 …… 254
図—93　石皿実測図－2 …… 255
図—94　石皿実測図－3 …… 256
図—95　石皿実測図－4 …… 257
図—96　磨石類実測図－1 …… 258
図—97　磨石類実測図－2 …… 259
図—98　磨石類実測図－3 …… 260
図—99　磨石類実測図－4 …… 261
図—100 磨石類実測図－5 …… 262
図—101 敲石実測図－1 …… 263
図—102 敲石実測図－2 …… 264
図—103 敲石実測図－3 …… 265
図—104 敲石実測図－4 …… 266
図—105 敲石実測図－5 …… 267
図—106 敲石実測図－6 …… 268
図—107 敲石実測図－7 …… 269
図—108 台石実測図－1 …… 270
図—109 台石実測図－2 …… 271
図—110 台石実測図－3 …… 272
図—111 台石実測図－4 …… 273
図—112 打製石斧実測図－1 …… 274
図—113 打製石斧実測図－2 …… 275
図—114 打製石斧実測図－3 …… 276
図—115 打製石斧実測図－4 …… 277
図—116 打製石斧実測図－5 …… 278
図—117 打製石斧実測図－6 …… 279
図—118 打製石斧実測図－7 …… 280
図—119 打製石斧実測図－8 …… 281
図—120 打製石斧実測図－9 …… 282
図—121 打製石斧実測図－10 …… 283
図—122 打製石斧実測図－11 …… 284
図—123 縄文包含層掘削状況図 …… 285
図—124 調査区別土層堆積状況図 …… 286
図—125 縄文時代遺構全体図 …… 287
図—126 縄文第1面遺構実測図 …… 289
図—127 縄文第2面遺構実測図－1 …… 291
図—128 縄文第2面遺構実測図－2 …… 292
図—129 縄文第2面遺構実測図－3 …… 293
図—130 縄文第3面a.b遺構全体図 …… 295
図—131 縄文第3面遺構実測図－1 …… 297
図—132 縄文第3面遺構実測図－2 …… 300
図—133 縄文第3面遺構実測図－3 …… 301
図—134 縄文第3面遺構実測図－4 …… 302
図—135 縄文第3面遺構実測図－5 …… 303
図—136 縄文第3面c遺構全体図 …… 305
図—137 縄文第3面遺構実測図－6 …… 307
図—138 縄文第3面遺構実測図－7 …… 308
図—139 縄文第3面遺構実測図－8 …… 309
図—140 縄文時代遺構変遷図 …… 312
図—141 埋甕変遷図 …… 313

Ⅰ．遺　　物

A．土　　器

本調査で出土した縄文土器は以下の22類である。

1．早期前半の縄文土器
2．早期前半の無文土器
3．清水ノ上式土器
4．木島式土器
5．関山式土器
6．諸磯式土器
7．北裏Ｃ１式土器
8．五領ヶ台式土器
9．北屋敷式土器
10．勝坂式土器
11．曽利式土器
12．加曽利Ｅ式土器
13．称名寺式土器
14．三十稲場式土器
15．堀之内式土器
16．縁帯文系土器
17．付加条縄文土器
18．加曽利Ｂ式土器
19．沈線文が施される土器
20．縄文が施される土器
21．無文の土器
22．上記土器の底部

なお、挿図は基本的に拓影図が1/3、実測図が1/4の縮尺で掲載している。

１．早期前半の縄文土器（図－１）

第Ⅱ調査区より２点が出土している。0101は厚手の尖底を呈する底部で富士黒土層内の出土である。ＬＲ縄文が比較的はっきりとしたまま底部端まで至っている。本地域の縄文が施される尖底土器は、はっきりとしない部分が多いが若宮遺跡（注１）や、小松原Ａ遺跡（注２）などで、押型文土器に先行する金雲母を多量に含む表裏縄文土器と、それに続く縄文土器群が知られている。それは金雲母が目立たなくなり、縄文の裏面施文が口縁部付近に狭られたり、無くなったりしてくるもので、伝統的に多いＬＲ縄文と胎土などを考え合わせると、それらの底部にあたりそうである。

0102は濁った薄いピンク色（明褐灰色）を呈し「す」の抜けたような軽い感じの土器で、ＲＬ縄文の節も太く（もっと太いものが目立つ）、これも前述の２遺跡に見られた本地域の特徴的な土器である。0101に続く位置付けが考えられている。

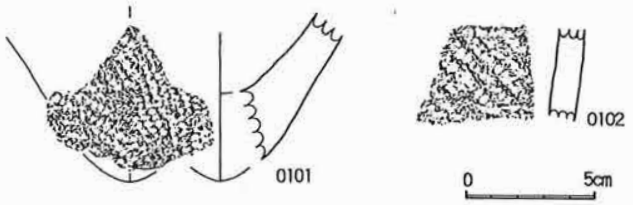
注1. 富士宮市教育委員会他 1983 『若宮遺跡』
注2. 富士宮市教育委員会 1989 『小松原Ａ遺跡』

２．早期前半の無文土器（図－２）

第Ⅱ調査区の富士黒土層内に一括出土した、0201に代表される早期前半の無文土器が見られる。

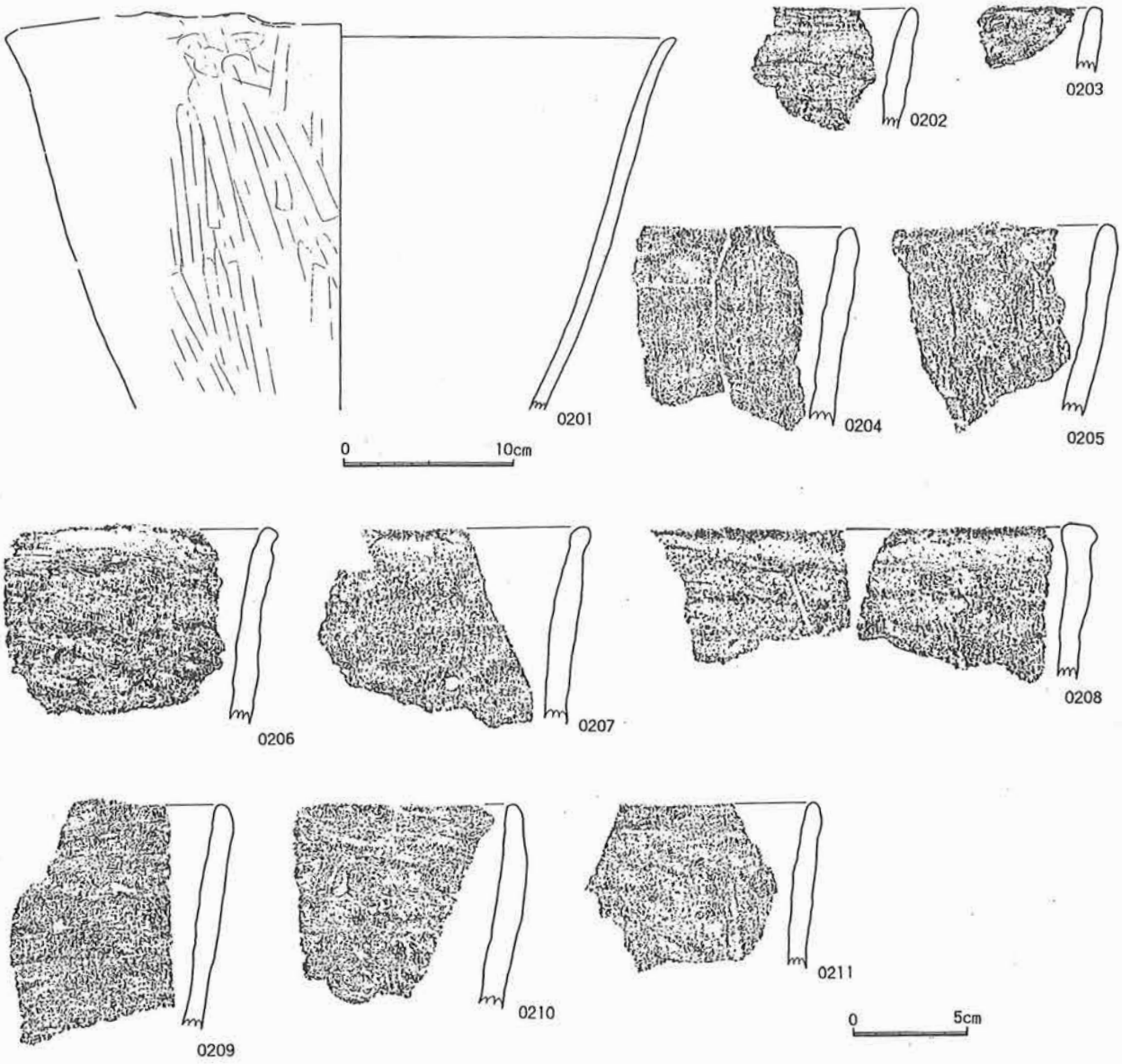
0201は口径39.5cmの尖底土器で、底部から３分の１を欠く。非常に粗い作りで縦のナデが無造作に行われ口縁部付近には指頭によるオサエが目立つ。そのため口唇部は弱い波状になったり、部分的に丸頭や尖頭になったりもしている。全体的な器形は黒田向林遺跡No.191土器（注１）に似て、胎土には少しの繊維と大粒の石英や長石などのガラス質の鉱物を多く含むなど共通点が多く、おそらく高山寺式土器に併行する無文土器に考えても良いと思われる。

0202～0208も同様のガラス質の鉱物を胎土に多く含むもので、0202は0201と同様のナデを横に見る。他は比較的丁寧にナデられて擦痕があまり目立たなく、0206～0208のように口唇部が押さえられて内折れしたり、外折れしたりして特徴的なものもある。



番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
0101	Ⅱ	尖底土器	表裏縄文系？	—	—	尖底	—	1.5	縄文ＬＲ	粗砂.繊維	不良	にぶい褐色	尖底推定厚3.5cm
0102	Ⅱ	尖底土器？	早期縄文	—	—	—	—	1.5	縄文ＲＬ	粗細砂.少繊維	不良	明褐灰色	

図－１　　早期前半の縄文土器実測図



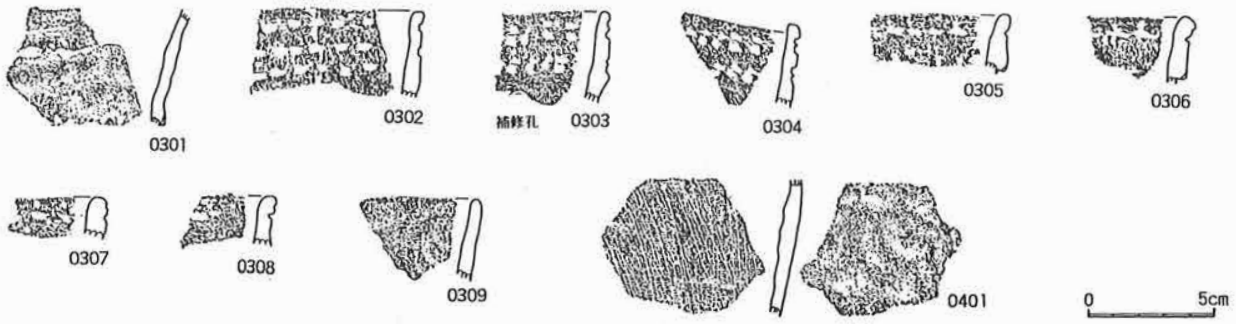
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
0201	II	尖底土器	無文土器群	(35)	39.5	尖底	口縁	0.9	無文	石英、長石、少繊維	不良	にぶい黄褐色	真山寺式土器に類似
0202	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.8	無文	多石英、長石、繊維	良	黒灰色	
0203	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.7	無文	石英、長石、少繊維	良	にぶい黄褐色	0201に類似
0204	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.9	無文	石英、長石、繊維	不良	暗褐色	0205に類似
0205	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.9	無文	多石英、長石、少繊維	不良	にぶい黄褐色	0204に類似
0206	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.9	無文	石英、長石、繊維	良	黒褐色	
0207	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.9	無文	石英、長石、繊維	良	にぶい黄橙色	
0208	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.9	無文	粗礫、石英、少繊維	不良	にぶい黄橙色	
0209	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	1.0	無文	粗礫	不良	にぶい橙色	
0210	I	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	1.1	無文	粗礫、長石	不良	にぶい褐色	
0211	II	尖底土器	無文土器群	—	—	—	—	0.8	無文	粗礫	不良	にぶい赤褐色	

図－2　早期前半の無文土器実測図

0209～0211は粗礫を多く含んだ粗い胎土をもつもので、やはり擦痕はあまり目立たないでいる。

これらを含めて無文土器の帰属は難しいものがあるが、あまり目立たない繊維の混入と上記の胎土のあり方は、早期後半の条痕文系土器群の無文土器のそれとは明らかに異なることは確かである。

そして早期前半の無文土器には平坂式土器が知られるが、それが本地域にどのような関わりを持っているかは全くはっきりとせず、大仁町大平A遺跡で異方向帯状施文山形押型文土器と共伴する無文土器（注2）



番号	出土区	名 称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文 様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
0301	II	尖底土器	清水ノ上I	—	—	—	—	0.5	無 文	細砂、長石、石英	良	にぶい黄橙色	おせんべい的器面
0302	II	尖底土器	清水ノ上II	—	—	—	—	0.5	刺突文	粗礫	不良	暗褐色	
0303	II	尖底土器	清水ノ上II	—	—	—	—	0.5	刺突文	粗礫	不良	黒褐色	補修孔
0304	II	尖底土器	清水ノ上II	—	—	—	—	0.6	刺突文	粗礫	不良	灰褐色	波状口縁
0305	II	尖底土器	清水ノ上II	—	—	—	幅	0.8	刺突文	粗礫多	最不良	にぶい褐色	縁帯部幅2cm
0306	II	尖底土器	清水ノ上II	—	—	—	幅	0.8	刺突文	粗礫、石英、長石	不良	にぶい赤褐色	縁帯部幅2.5cm
0307	II	尖底土器	清水ノ上II	—	—	—	—	0.7	刺突文	粗礫	不良	赤褐色	
0308	III	尖底土器	清水ノ上II	—	—	—	—	0.8	刺突文	粗礫	不良	灰黄褐色	
0309	II	尖底土器	清水ノ上II併行	—	—	—	—	0.6	無 文	粗礫、石英、長石	不良	にぶい赤褐色	0306に胎土、色調類似
0401	V	尖底土器	木 島	—	—	—	—	0.5	細線文	砂、長石	良	灰黄色	裏面指頭圧痕

図－3　　清水ノ上式．木島式土器実測図

も、押型文土器と撚糸文土器の併行関係を論ずるなかで宙に浮いたままとなっている。このような状況にあってさらに近年、関東地方一円では撚糸文系土器群の終末期に無文土器の占める割合が高くなり、貝殻沈線文系土器群との間が飽和状態となって、混迷の度を深めているらしい。一応ここでは、貝殻沈線文系土器に併行する高山寺式土器に関わりを持った無文土器を提示しておきたい。

注1. 富士宮市教育委員会 1986 『黒田向林遺跡』

注2. 漆畑 稔他 1993 『長者原大平遺跡群発掘調査報告書』静岡県大仁町教育委員会

3．清水ノ上式土器（図－3）

0301が胴部で、他の8点（0302～0309）が口縁部である。0301は指頭圧痕が残るいわゆる「おせんべい土器」の胴部上半の縁帯部端に『爪による刺突を器面に対して斜めに加え、浮いた粘土を刺突方向に起こしながら押しつける(注1)』痕跡が認められるもので、木島式土器の中、後半や、清水の上1式土器（注2）に特徴的な作りである。他の胴部資料にも細線文が目立たず「おさえ」や「なで」による無文が多いから、それらの占める面積の多い後出型式の胴部が主体になっているものと思われる。

0302～0308は清水ノ上1式土器の縁帯部の幅が3cm内外に統一され、そこに押し引き状の刺突文や押捺文、爪型文が列状に施される特徴的な清水ノ上2式土器である。本遺跡のものは角棒の単独刺突（0302）やその2枚重ね（0303.0304）、さらに半截竹管によるもの（0305～0308）で、半截竹管によるものは従来より言われる縁帯部の幅より狭く、2～2.5cmの有段のはっきりした縁帯部の両端に一列づつ半截竹管が押し引かれている。

0309は粗い胎土に石英、長石などのガラス質の鉱物が含まれ焼成、色調も0306に似た無文の土器である。

注1. 池谷信之 1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会

注2. 山下勝年他 1976『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会

4．木島式土器（図－3）

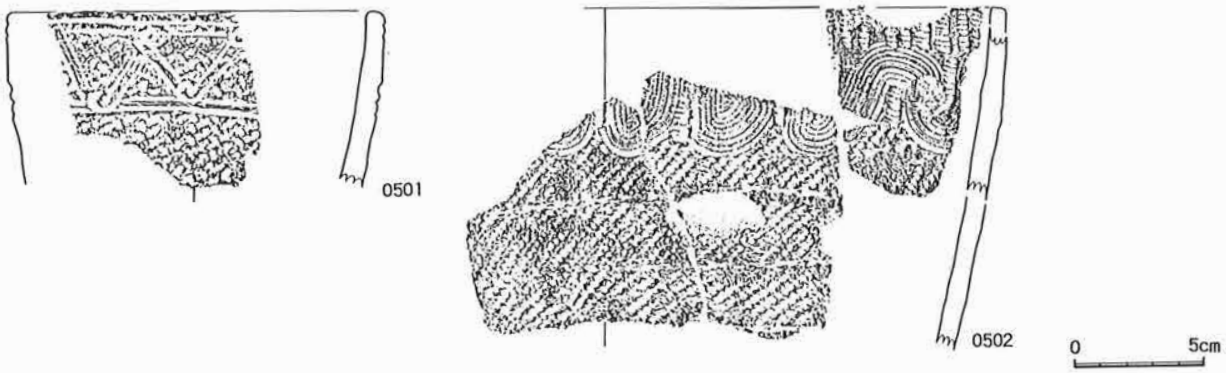
灰色系の薄手の土器（0401）で、表面に半截竹管状の工具による浅く細い沈線が斜め、あるいは交わって比較的ラフに施され、裏面には指頭による圧痕が目立つ。いわゆる木島式土器の終末期に至った「細線文指痕薄手土器」で、関山1式土器と併行関係が捉えられつつある（注）ものである。そしてまたこれは清水ノ上1式土器と共通する部分も多く、型式名の統一も提言されているところである。

注. 渋谷昌彦 1982「木島式土器の研究」『静岡県考古学研究』11 静岡県考古学会

5．関山式土器（図－4）

2点とも直線的に立ち上がる胴部が平口縁に至る深鉢形土器である。

0501は復原口径15cm弱の小形品で、胎土には繊維を多く含む。組紐圧痕文を地文にして半截竹管による沈線を口縁部に3cm幅で巡らせ、その間を鋸歯状に結ぶ



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
0501	I	深鉢形土器	関山II	—	(14.6)	—	口縁部	0.9	組紐文.竹管沈線	細砂.繊維	良	黒褐色	内面丁寧なミガキ
0502	II	深鉢形土器	関山II	—	(32.0)	—	口縁部	0.8	LR縄文.櫛沈線	砂.長石.石英.金雲母	良	にぶい橙色	

図－4　関山式土器実測図

 もので、鋸歯状の基点は竹管を半回転するためにコンパス文風になっている。

0502は円筒状の胴部にＬＲの斜縄文が列状に整然と施され、口縁部の下方６cmのところで幅1.5cmの櫛状工具を波状文風に巡らせ、口縁部文様帯を区別している。そして口縁部の間を連続する刺突文で充填し、また波状の空間も櫛を押捺している。

このようにコンパス文がくずれて波状文風になったり、地文に組紐文が多用されるのは、後出の特徴に挙げられ両者とも関山２式土器とされよう。

６．諸磯式土器（図－５）

平口縁で緩いキャリパー状の胴部が予想される0601は浅いＲＬ縄文を地文として、口縁部に２列で半截竹管の内側を連続して刺突したＣ字状爪形文が巡り、その下方に平行沈線による対角線文が描かれる。この対角線文は水子式土器に系統が認められ、諸磯式土器の成立期(諸磯ａ式)の特徴とされている(注)。

また0602も口唇部まで及ぶＲＬ縄文を地文に波状文が描かれ、これも古式の要素とされる。

注．谷口康浩 1989 『縄文土器大観』 1 小学館

７．北裏Ｃ１式土器（図－６.７）

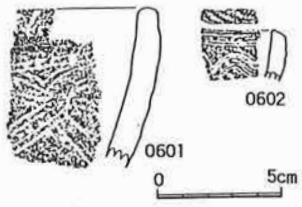
北裏Ｃ１式土器は灰色系の薄手の土器群で、胎土には粗い砂粒と長石系の乳灰色粒の混入が目立っている。文様は刺突や爪形文を多用することを特徴としていて、本遺跡では４類に分けられる。

ａ類（0701～0713）は縄文を地文にして、半截竹管による平行沈線を口縁部と平行に巡らすものである。そのうち0701～0710はヘラ描きや、ヘラ削りによって三角陰刻文が意識され、特に0705～0710は、はっきりしている。また0705．0706には玉抱三叉文風のヘラ描きも見られる。0711．0712はヘラによる部分が丸棒の側面押圧に置き換えられるものである。全体的には平口縁が多いが、内湾、外反と「く」字状に屈曲するものが多く単純に直立する口縁部は殆どない。縄文はＲＬで節が横に細長く硬く撚られたものが目立ち、鷹島式土器や船元１式土器など、粗く硬い繊維を用いた縄文を特徴とする関西系土器群に似た感じを受ける。

ｂ類（0714～0724）は縄文を地文にして連続爪形文を施すもので、波状口縁になるものが多くそれに沿って施されている場合が多い。ａ類と同様に0714～0717が爪形文で区画された内側にヘラによる三角陰刻文が施され、0718～0721が丸棒の押圧によるものである。

0718はそれが交互に押圧されて連続「コ」字状文風となり五領ヶ台２式土器に、0721は唯一、Ｒの一段撚りの縄文が施される浅鉢形土器で、その特徴から鷹島式土器になど、東西に関連を窺わせるものも見受けられる。なお他の浅鉢形土器については、頸部の屈曲が著しく判断されない場合が多い。また口縁部の突起上に縄文が施されて特徴的な0724の口縁部下を巡る３条の爪形文や、0722の大きな爪形文は後述するｄ類に似るものである。

ｃ類（0725～0727）は連続爪形文、平行沈線文、縄文を施すもので、掲載資料はいずれも平口縁である。それは口唇より比較的大振りの爪形文、その下部を２～３条の平行沈線、以下を縄文で構成して共通している。0725は平行沈線下に波状の隆帯が付けられ波頂部にヘラ描き、その内側に三角陰刻文が削られ、また縄文も横に細長いＲＬ撚りのものが施されるなど、ａ、



番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚
0601	II	深鉢形土器	諸磯a	—	—	—	—	0.9
0602	III	深鉢形土器	諸磯a？	—	—	—	—	0.6

文様	胎土	焼成	色調	備考
RL縄文.竹管沈線・刺突	砂、長石、石英、金雲母	良	赤褐色	重量感有
RL縄文.竹管沈線	細砂	良	黒褐色	口唇施文

図－5　諸磯式土器実測図

b類の混合的色彩が強いものである。

d類（0728～0735）は連続爪形文だけで文様が構成されるものである。詳細には0728～0730の口縁部に沿う爪形文の他に、爪形文が施された隆帯が付くもの、0731～0733の口縁部に沿って数条の爪形文が巡るもの、0734．0735の１条のものなどに分けられる（0735の口唇に爪形文が少し残る）。やはり波状口縁となるものが目立ち特に隆帯が付くものはトリッキーで、0730には口縁部内側に蓋受け状の凸帯が巡っている。また数条の爪形文が巡るものは、いずれも口縁部が内湾して共通している。

このような爪形文の多用や器形から、これらには関西系土器群からの変化が予想され（注）、五領ヶ台２式土器との併行関係も捉えられつつある。文様帯が口縁部下に集中し、以下、胴部が無文となる構成は早期の粕畑式土器から断続的でありながら続く東海地方西部の伝統のなかでの受容であり、それは以後の北屋敷式土器にも脈打っているかも知れないのである。

注．増子康真 1981「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版　発行 紅村 弘

８．五領ヶ台式土器（図－８～10）

五領ヶ台式土器は細線文系土器と、集合沈線文系土器のふたつの流れがあり、１式から２式にそれらが互いに影響しながら変遷を辿っていくことはすでに周知されている（注１）。本遺跡の主体は２式で、古式の要素を認めるものは0807～0810の４点に過ぎない。

0808は細線文に充填された区画内に交互に小さな三角印刻文が施されるもので、その外側を横走する沈線は曲面が丸く浅い単沈線で２式に近いと言える。0807.0809.0810は半截竹管による集合沈線文系土器で、信州地方の前期末からの竹管文優勢土器群への系譜も取り沙汰されるものである。0807は円筒状で口縁部に２列の爪形文と平行沈線文を巡らして文様帯を区画し、胴部は縄文を地文にして平行沈線を降ろしている。

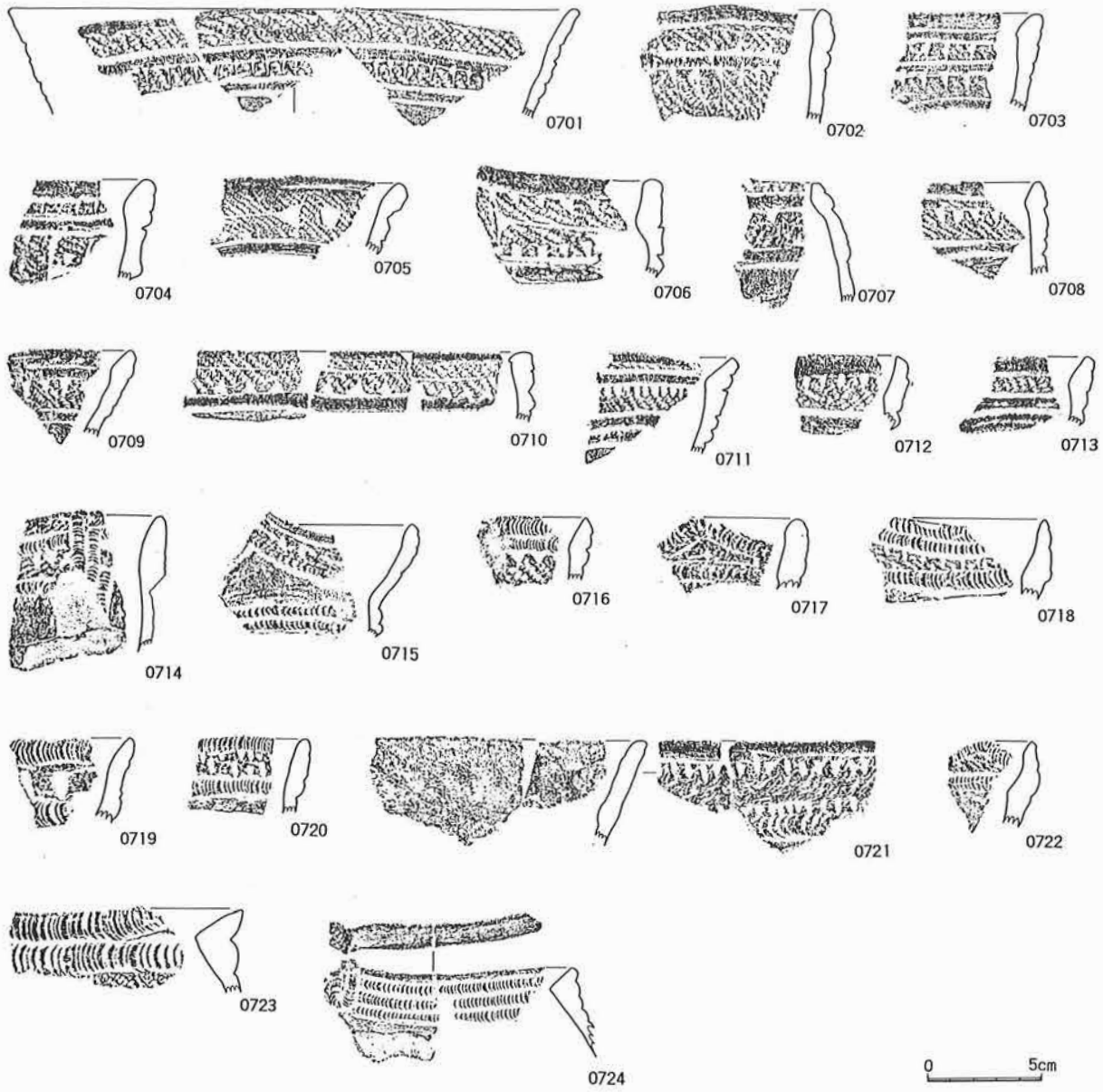
五領ヶ台２式土器は以下に分けられる。

a類（0801.0802.0811～0815）は細線文系土器の２式段階に大きな特徴とされる縄文の全面施文と文様の沈線化によるものである。0801.0802はやや外側に直線的に直立する胴部から急に開いて内湾する口縁部をもつもので、口縁部は太い単沈線を複数で弧状に繋いで、0801はその接点に渦巻の隆帯を配し0802．0814は内部に三角印刻文の発展形ともされる玉抱三叉文も見られる。さらに0801.0802にはＹ字状の隆帯が垂下し、0815のように胴部は結節を伴う縄文が施されて特徴である。

b類（0803．0804．0816．0817）は沈線と連続コ字状（以下、コ字状文）が一周するものである。コ字状文は沈線間を交互に刺突して作られるが、コ字状への意識は高く丁寧で、以下のｃ類とは違いがはっきりしている。0803は富士山様の波状口縁をもつ集合沈線文系土器で、半截竹管による平行沈線とコ字状文を頸部に一周させて上下を区別し、直線的な胴部は縦の平行沈線と円弧状の沈線で埋める。口縁部は波頂部より頸部と同様の文様帯が下がるが無文部の占める割合が増し、貼付文でアクセントをつけている。0804．0817は単沈線で、0817は押し引き状に引かれている。

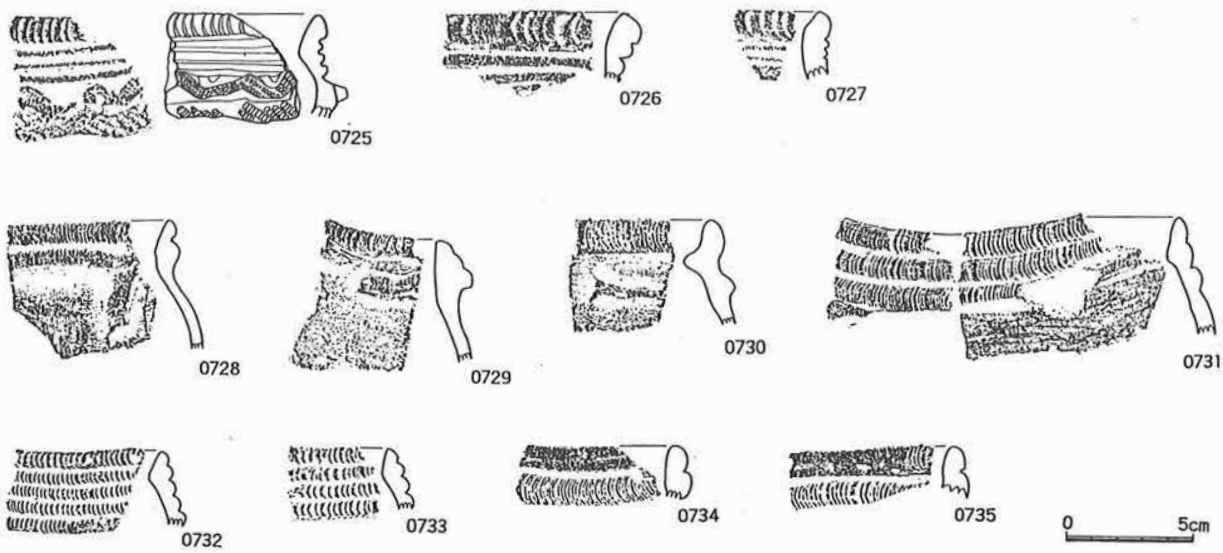
ｃ類（0805．0806．0818～0823．0840）はコ字状文が形骸化して、ただ習慣的に刺突を交互に加えるだけのものである。他の文様も縄文、沈線、爪形文が入り交じることが一般でシャープさに欠ける。0805がその典型で、植木鉢様の口縁部にＲＬ縄文が、その下に凸状爪形文を一周させ、また垂下して文様区画を分割するものである。区画内にはラフな単沈線が横走し、上下にコ字状文を配すがすでに連続性は欠け始めている。それから0823のように完全にポイント化された施文まで退化していく。また0806の沈線も弱々しく完全に鈍化している。0840は唯一の浅鉢で爪形文とコ字状文が口唇を巡る。

ｄ類（0824～0829）は沈線に沿って１列に刺突文が施されるものである。刺突文は横走する沈線の下端をＴ字状に押さえていくものが大半で、コ字状文の一方からの施文と言える。0826はそれを丁寧に沈線内に納



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
0701	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	(25.0)	—	口縁部	0.5	RL縄文、平行沈線、陰刻	石英、長石、粗砂	良	褐灰色	
0702	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.6	RL縄文、平行沈線、陰刻	粗砂、金雲母	良	にぶい黄褐色	緩い波状
0703	V	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.7	RL縄文?、平行沈線、陰刻	長石、粗砂、	良	灰黄褐色	
0704	V	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.6	RL縄文、平行沈線、陰刻	長石、粗砂	良	灰黄褐色	
0705	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.6	RL縄文、平行沈線、陰刻	石英、長石、砂	良	にぶい黄褐色	玉抱三叉文風
0706	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	頸　部	0.7	LR縄文、沈線、陰刻	多粗砂、長石	良	灰黄褐色	波状
0707	V	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	胴　部	0.6	LR縄文、平行沈線、陰刻	細砂、金雲母	不良	灰黄褐色	脆弱
0708	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	頸　部	0.7	RL縄文、平行沈線、陰刻	細砂、石英	良	灰黄褐色	
0709	V	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.7	RL縄文、平行沈線、陰刻	粗砂	不良	褐灰色	
0710	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	頸　部	0.6	RL縄文、平行沈線、陰刻	粗砂	良	褐灰色	
0711	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.5	RL縄文、平行沈線、押圧	細砂	良	にぶい黄褐色	
0712	V	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.7	RL縄文、平行沈線、押圧	長石、粗砂	不良	にぶい黄橙色	
0713	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.7	RL縄文、平行沈線	長石、粗砂	良	にぶい黄橙色	
0714	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.7	LR縄文、爪形文、陰刻	長石、粗砂	良	黒褐色	波状
0715	V	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.4	RL縄文、爪形文、陰刻	粗砂	良	褐灰色	波状
0716	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.6	RL縄文、爪形文、陰刻	粗砂	良	褐灰色	
0717	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	1.2	RL縄文?、爪形文、陰刻	粗礫	不良	にぶい黄褐色	波状
0718	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.8	RL縄文、爪形文、押圧	粗砂	良	灰黄褐色	波状
0719	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.8	RL縄文?、爪形文、押圧	長石、粗礫	良	褐灰色	
0720	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.7	RL縄文、爪形文、押圧	長石、粗砂	良	にぶい橙色	
0721	II	浅鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	口縁部	0.8	R縄文、爪形文、押圧	粗礫、長石	良	にぶい黄褐色	
0722	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	頸　部	0.8	LR縄文、爪形文	長石、石英、砂	良	にぶい褐色	波状
0723	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	胴　部	0.9	RL縄文、爪形文	細砂	良	にぶい黄橙色	球形状胴部
0724	II	深鉢形土器	北裏C 1	—	—	—	胴　部	0.5	RL縄文、爪形文	長石、粗砂	良	灰黄褐色	波状、球形状

図－6　　北裏C 1式土器実測図－1



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
0725	III	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	頸　部	0.7	RL縄文、平行沈線、爪形文、撚糸	長石、石英、砂	良	にぶい黄橙色	
0726	I	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	口縁部	0.6	RL縄文?、平行沈線、爪形文	石英、粗砂	良	灰黄褐色	
0727	V	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	口縁部	0.8	RL縄文、平行沈線、爪形文	石英、長石、粗砂	良	褐灰色	
0728	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	胴　部	0.5	爪形文	長石、粗砂	良	にぶい橙色	球形状胴部
0729	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	口縁部	0.6	爪形文	長石、石英、粗砂	良	にぶい赤褐色	波状
0730	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	胴　部	0.5	爪形文	粗砂	良	灰黄褐色	蓋受け状凸帯
0731	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	胴　部	0.6	爪形文	長石、粗砂	良	にぶい赤褐色	球形状胴部
0732	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	胴　部	0.6	爪形文	長石、石英、粗砂	良	灰褐色	球形状胴部
0733	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	胴　部	0.8	爪形文	長石、粗礫	不良	にぶい橙色	球形状胴部
0734	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	頸　部	0.8	爪形文	長石、砂	良	にぶい橙色	
0735	II	深鉢形土器	北裏C1	—	—	—	頸　部	0.8	爪形文	長石、砂	良	にぶい褐色	

図－7　　北裏C1式土器実測図－2

めている。0827が沈線で、0824～0826が縄文と沈線で帯状に1周し、0828.0829が縄文地文に横の弧状の沈線を重ねるなど横位帯状の意識は残っている。爪形文はない。また0825～0827のように口唇に刻みをもつものが目立ってくる。さらに0824には退化した橋状把手と思われるX状の貼付文も見る。

e類（0830～0839）は上記に伴うことが確認される縄文、沈線文、爪形文が施されるものである（注2）。

0830.0831は肥厚した口縁部にRL縄文を1周させ、くびれた無文部を境に隆帯を巡らせ、0831はそこに再度縄文を施している。0832.0833は口縁裏面にも縄文を見るもので、0832はそこに縄文原体の結び目を当てながら刻みを付けるため、あたかも円形の刺突列に見える。0833は折り返された口縁部の下端を平行沈線で区切り、さらに縄文帯を強調させている。

0834～0835は弱々しい沈線を基調とするもので、いずれも内湾する口縁部の口唇に細かい刻みを施している。0834の頸部をしぼった器形は0830.0831に通じ、また縦の文様帯も見るが全体的には無文化の傾向にある。0836の沈線は押し引きされたものである。

0837～0839は爪形文の施されるもので、そのバラエティーである。0838は口縁部を1周する爪形文をそのまま口唇に施し、刻み目にしている。

0840～0844は浅鉢形土器である。0840が口唇に沿って爪形文と交互の刺突文が巡り、0841～0844が口縁部内面に爪形文が3～4列施されるものである。0841はそれに交互の刺突文が加えられている。

以上、五領ヶ台式土器が2式の段階になると、前述するふたつの流れの折衷型の土器も出現するなど、さらに複雑さを増すこともあって（注3）、2、ないし3段階の細分案（注4）も検討されるが、検討内容の違いを主張する部分もある（注5）。いずれにしても本遺跡の五領ヶ台2式土器は新しい段階を属するもので、連続コ字状文のb類からc類への規範の崩れを2段階に考えると、∞状の貼付文を共通してもつd類をb類と共に前に、c類のポイント的コ字状文が施される0823はa類0802の破片であるから、a類、c類は後に置けて、山口の設定と無理がなくなるのである。

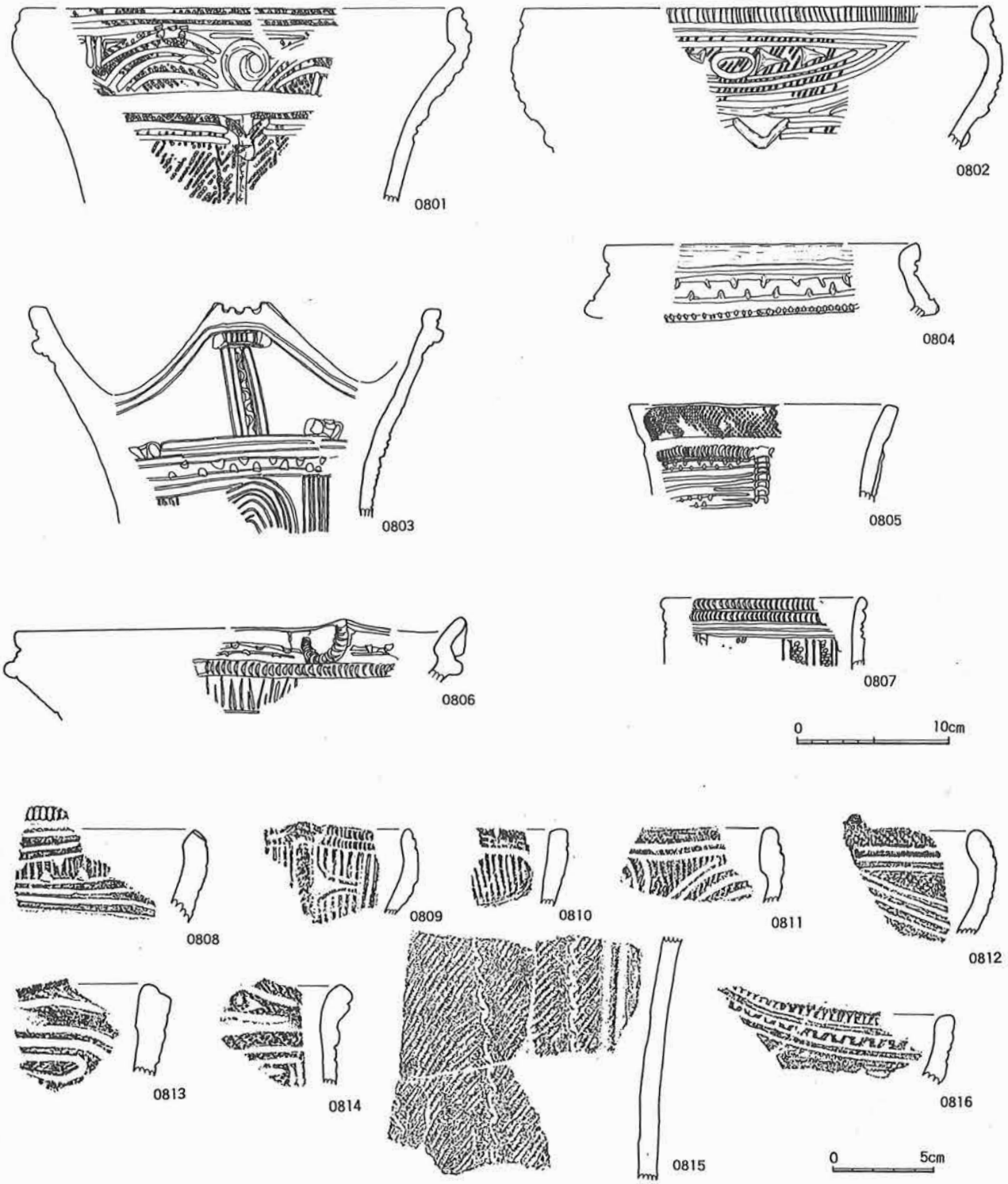
注1. 山口 明 1980「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『静岡県考古学会シンホジューム』4

注2. 富士宮市教育委員会 1985 『上石敷遺跡』

注3. 能登 健 1981「五領ヶ台式土器」『縄文土器大成』2 講談社

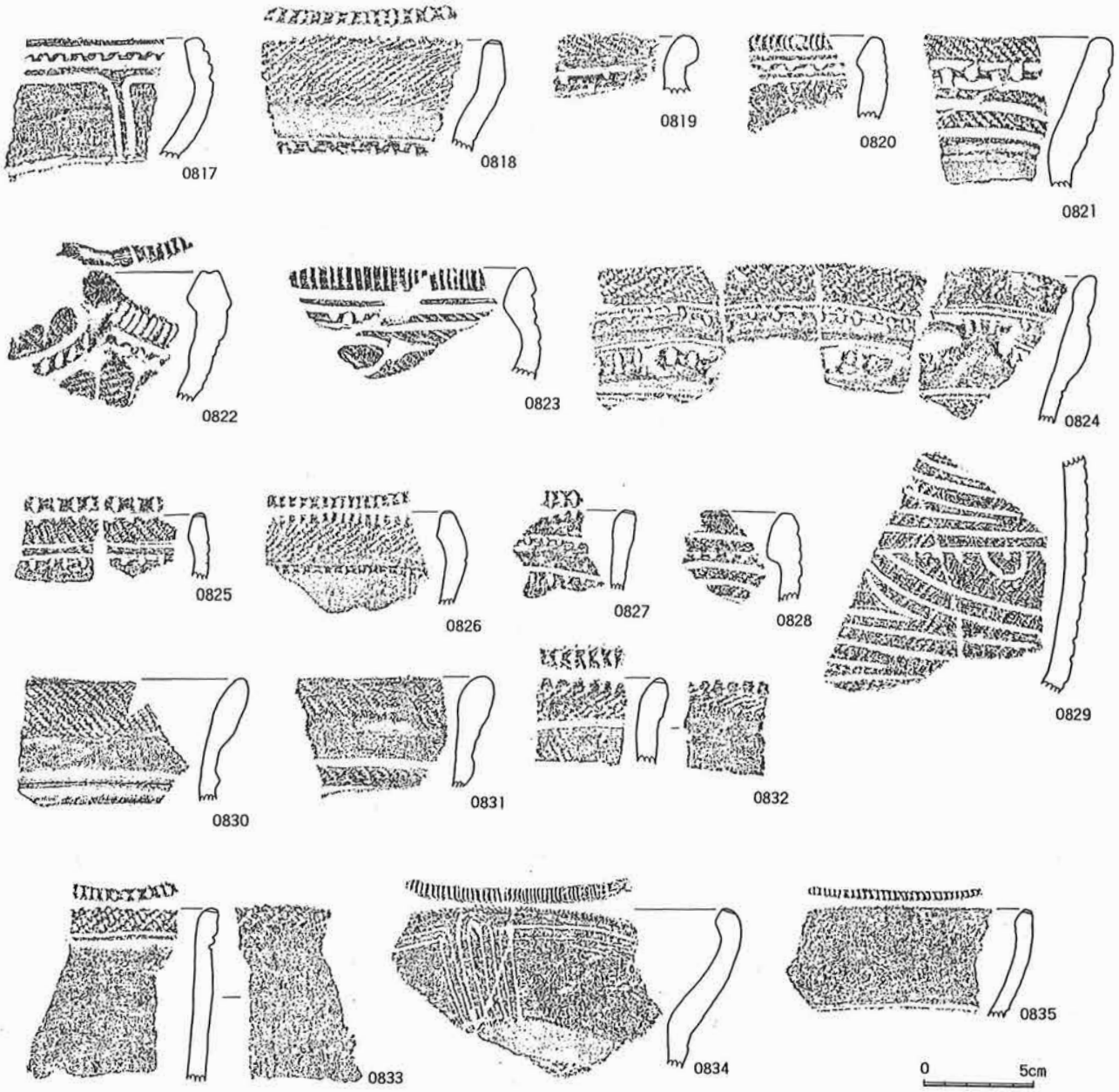
注4. 今村啓爾 1985「五領ヶ台式の編年」『東京大学文学部研究室研究紀要』4

注5. 池谷信之 1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会



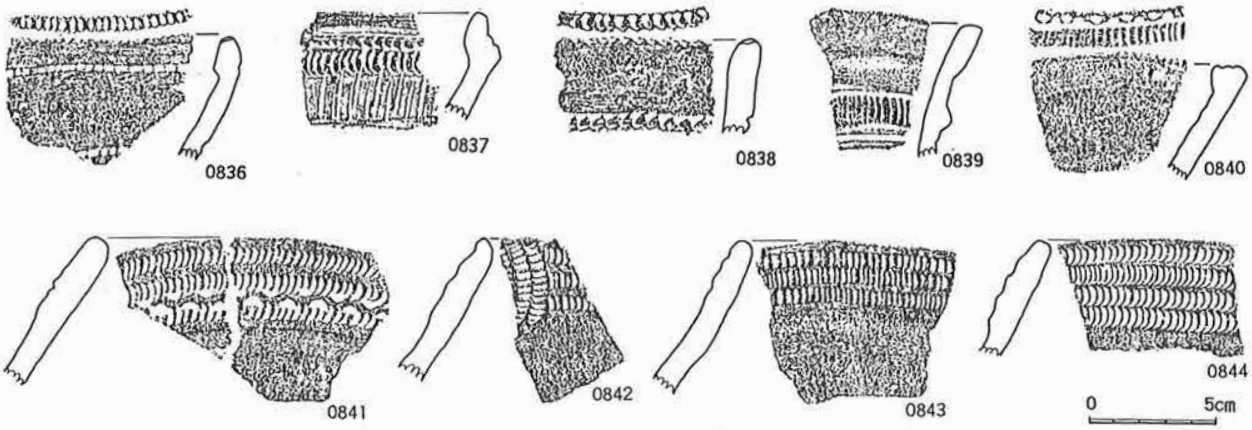
番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
0801	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(29.5)	—	(30.5)	1.0	RL縄文、沈線、隆帯	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	
0802	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(31.0)	—	(32.0)	1.0	RL縄文、沈線、隆帯	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	玉抱え三叉文
0803	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(28.0)	—	口縁部	1.0	沈線	粗砂、金雲母	良	にぶい暗赤褐色	貼付文
0804	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(21.0)	—	(23.8)	1.0	沈線	粗砂、金雲母	良	にぶい赤褐色	
0805	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(18.0)	—	口縁部	1.0	RL縄文、沈線、爪形文	粗砂、金雲母	良	にぶい赤褐色	
0806	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(21.5)	—	(27.5)	0.9	沈線、隆帯、爪形文	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	
0807	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(13.8)	—	口縁部	0.8	RL縄文、沈線、爪形文	粗砂、金雲母	良	極暗赤褐色	
0808	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	沈線、三角印刻文	粗砂	良	灰褐色	
0809	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.6	沈線、爪形文	粗砂、金雲母	良	赤褐色	
0810	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.9	沈線	粗砂	不良	にぶい橙色	
0811	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	RL縄文、沈線	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	
0812	I	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.7	RL縄文、沈線	粗砂、金雲母	良	にぶい赤褐色	こぶ状突起

図－8　五領ヶ台式土器実測図－1



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
0813	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.2	RL縄文、沈線	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	
0814	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	RL縄文、沈線	砂、金雲母	不良	にぶい赤褐色	玉抱え三叉文
0815	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	RL縄文、隆帯	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	S字状結節
0816	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	沈線	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	波状口縁
0817	I	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.9	沈線	粗砂	良	極暗赤褐色	
0818	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	LR縄文、沈線	粗砂、石英	良	にぶい橙色	
0819	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.1	RL縄文、沈線	粗砂	良	赤褐色	
0820	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	RL縄文、沈線、爪形文	粗砂、金雲母	良	にぶい褐色	
0821	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.5	RL縄文、沈線	粗砂	良	にぶい赤褐色	
0822	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	RL縄文、沈線	多粗砂	良	にぶい赤褐色	波状口縁
0823	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.2	RL縄文、沈線	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	玉抱え三叉文
0824	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	(23.0)	—	口縁部	0.9	RL縄文、沈線	砂、金雲母	不良	にぶい赤褐色	貼付文
0825	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	RL縄文、沈線	砂	良	にぶい橙色	
0826	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.7	RL縄文、沈線	粗砂、金雲母	良	赤褐色	
0827	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.6	沈線	砂、金雲母	良	極暗赤褐色	
0828	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.9	RL縄文、沈線	粗砂	不良	にぶい赤褐色	
0829	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	RL縄文、沈線	粗砂、金雲母	良	にぶい赤褐色	
0830	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.7	RL縄文、隆帯	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	
0831	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	RL縄文、隆帯	多粗砂	不良	にぶい橙色	
0832	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	LR縄文、沈線	多砂	良	極暗赤褐色	刻み目RL縄文
0833	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	LR縄文、沈線	粗砂、金雲母	良	暗赤褐色	

図－9　五領ヶ台式土器実測図－2



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
0834	V	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	沈線	多粗砂、金雲母	不良	暗赤褐色	
0835	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	沈線	砂、長石、石英	良	灰褐色	
0836	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.8	沈線	砂、金雲母	良	にぶい赤褐色	沈線押し引き
0837	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	沈線、爪形文	粗砂、金雲母	良	赤褐色	
0838	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.2	爪形文	粗砂、金雲母	良	灰褐色	
0839	II	深鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.7	沈線、爪形文	粗砂、金雲母	良	極暗赤褐色	
0840	V	浅鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.9	爪形文、刺突文	砂、多金雲母	良	赤褐色	
0841	V	浅鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	爪形文、刺突文	砂、長石、石英	良	にぶい赤褐色	
0842	V	浅鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.9	爪形文	砂、金雲母	良	赤褐色	
0843	II	浅鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	1.0	爪形文	砂、金雲母	良	赤褐色	
0844	II	浅鉢形土器	五領ヶ台	—	—	—	—	0.9	爪形文	砂、金雲母	良	赤褐色	

図－10　五領ヶ台式土器実測図－3

9．北屋敷式土器（図－11）

東海地方に特有の灰色系硬質の薄手土器で、角状の突起と、口縁部外面の文様帯に各種の刺突文が施されることに特徴をもっている。各種の刺突文については公蔵免遺跡（注1）に詳しいが、一様に施文具の外側で押し引き文風に突かれることから、文様部が自ら凹んで独立した区画になっている。このことは施文具の内側を使って隆起する爪形文を施す北裏C1式土器とは正負の関係に見える。

この北屋敷式土器は東海地方西部では北屋敷Ⅱa～c式、さらにd式が提唱されているが（注2）、ここではまず本遺跡例を3類して対比したい。

a類（0901～0906）は横位の列状刺突の拘束から解散され他方向（0901）に多様化するもので、0902.0903の刺突列間の半截竹管による半月形連続刺突や、施文具の背（0904）、ヘラ先（0905.0906）などで列点状の文様が付加されている。

b類（0907～0913）は角状の突起をもち大波状口縁となるもので、突起間を押し引き文風に突くことから中央が凹んで多角形状となり、口縁部が強調されている。0907.0908が2列、0909が3列の三角状ヘラ、0910が「Ⅰ」状のヘラで2列にされる複列施文から、0911～0913の「3」状、「Ⅰ」状のヘラによる単列施文までを見る。大波状口縁で多角形になるものは上記c式に始まり、0913のような平縁で上面観が多角形口縁となるものは同d式の目立つ要素であると言う。

c類（0914）は幅2cm程で肥厚する口縁部の表裏面と、口唇部にRL縄文が施されるもので、a．b類に比べると平口縁の単純な器形で、公蔵免遺跡で共伴を見る。

以上のように本遺跡は公蔵免遺跡の内容に極近く、公蔵免第231図2土器や、0902.0903の竹管文併用例をもって北屋敷Ⅱc式の古式な部分から、同d式の終末期まで揃えている。これに広合遺跡（注3）、二ツ洞遺跡（注4）を加えて、東海地方東部における北屋敷式土器終末期のひとつのあり方を提示することになるが、広合遺跡で指摘するように同西部の衰退に比べ角状突起や、爪形文(刺突文)の極みにあるような活発な土器主張の位置付けにはまだ問題が多いように思える。

注1. 漆畑 稔 1990『公蔵免遺跡発掘調査報告書』静岡県大仁町教育委員会

注2. 増子康真 1986「東海西部沿海地域縄文中期土器型式の検討」『知多古文化研究』2 知多古文化研究会

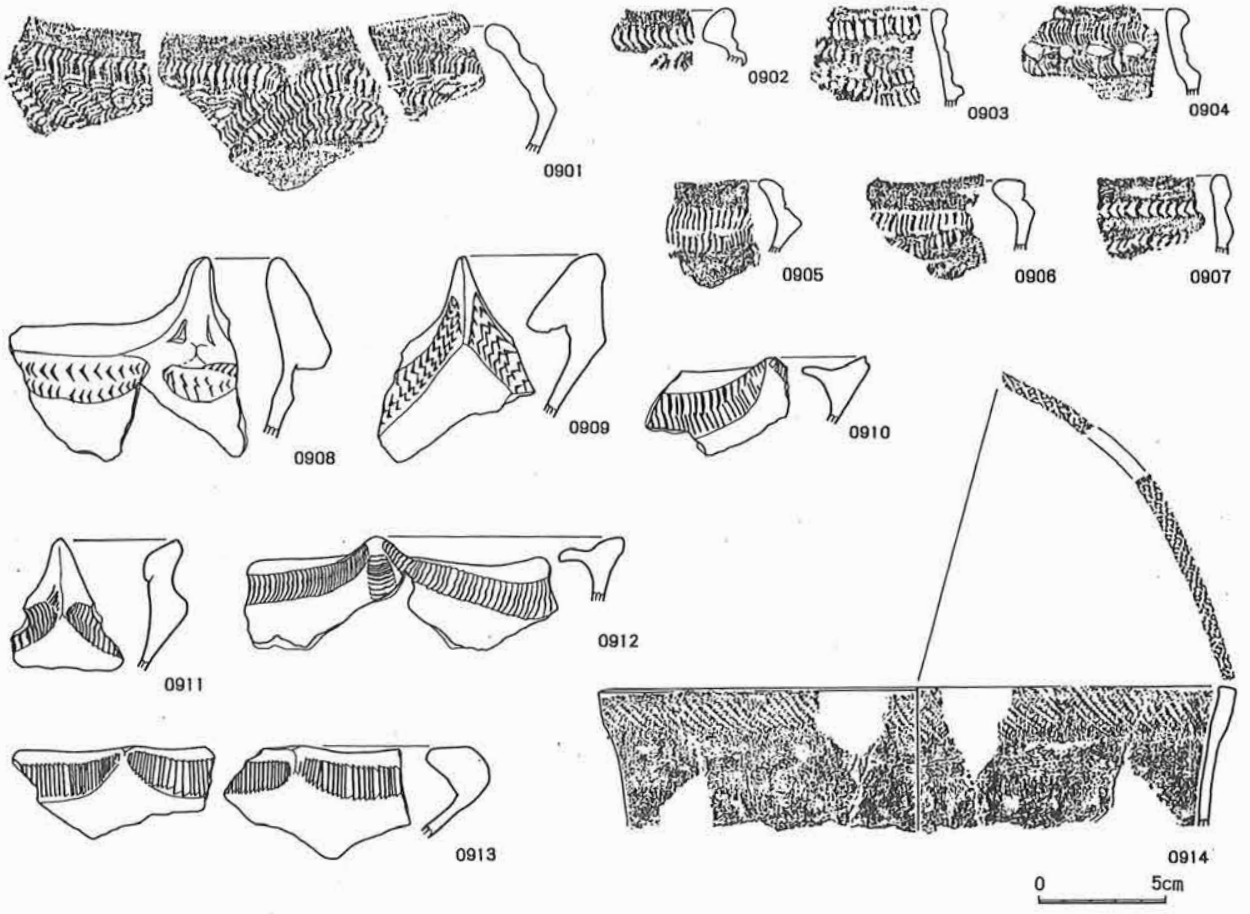
同. 夏目和之 1991「矢作川上流域の縄文文化研究」『古代人』52 名古屋考古学会

注3. 池谷信之 1990『広合遺跡(b.c.d区)・広合南遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会

注4. 同　1991『広合遺跡(e区)・二ツ洞遺跡(a区)発掘調査報告書』沼津市教育員会

10．勝坂式土器（図－12～15）

勝坂式土器はすべて後半のもので、鈴木分類(注1)



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
0901	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	頸　部	0.5	く状刺突文	多粗砂、長石	良	灰褐色	
0902	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	頸　部	0.7	く状刺突文、半截竹管押圧沈線	多粗砂	不良	にぶい赤褐色	
0903	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	頸　部	0.5	半截竹管刺突、押圧	多粗砂	良	にぶい褐色	
0904	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	頸　部	0.5	3状刺突文、指押圧列点	多粗砂	良	灰褐色	
0905	III	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	頸　部	0.4	3状刺突文、押圧列点	細砂	良	にぶい黄橙色	多角波状
0906	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	頸　部	0.5	く状刺突文、押圧列点	多砂	不良	灰褐色	多角波状
0907	V	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	口縁部	0.6	三角状刺突文	粗砂	不良	にぶい黄褐色	
0908	V	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	口縁部	0.5	三角状刺突文	多粗砂	不良	灰褐色	角状突起
0909	I	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	口縁部	0.5	三角状刺突文	多粗砂	良	暗赤灰色	角状突起
0910	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	口縁部	0.4	1状刺突文	多粗砂	良	灰褐色	多角波状
0911	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	口縁部	0.4	3状刺突文	多粗砂、長石	良	灰褐色	多角波状
0912	V	深鉢形土器	北屋敷	—	(17.0)	—	口縁部	0.5	3状刺突文	多粗砂	良	灰褐色	多角波状
0913	II	深鉢形土器	北屋敷	—	—	—	口縁部	0.5	1状刺突文	細砂	良	にぶい褐色	多角波状
0914	III	深鉢形土器	北屋敷併行	—	(25.0)	—	口縁部	0.4	RL縄文	多粗砂	良	黒灰色	口縁表裏、口唇施文

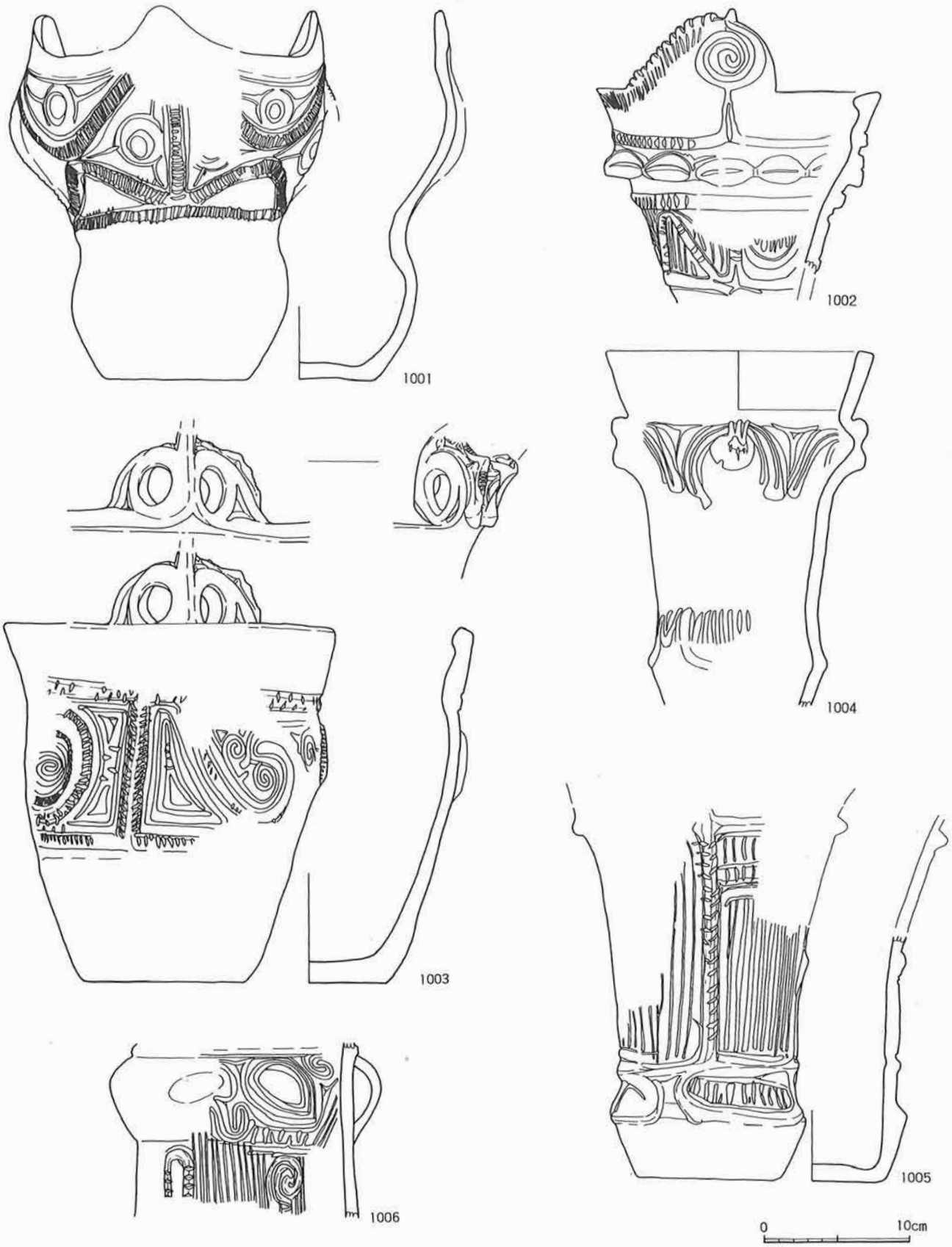
図－11　北屋敷土器実測図

に従えば、2式の中核的モティーフであった抽象文と縦位区画文が失われ、また楕円横帯区画文も見られない3式の最終段階にあたる。従って加曽利E式土器や曽利式土器の最初の部分と重なることが多く、中部高地の井戸尻3式土器から曽利式土器への変遷を捉えて、近隣でもその部分を井戸尻式として呼称するむきもある(注2)。

本遺跡では勝坂3式土器のなかで言う文様モチィーフを基本にして分類しておきたい。

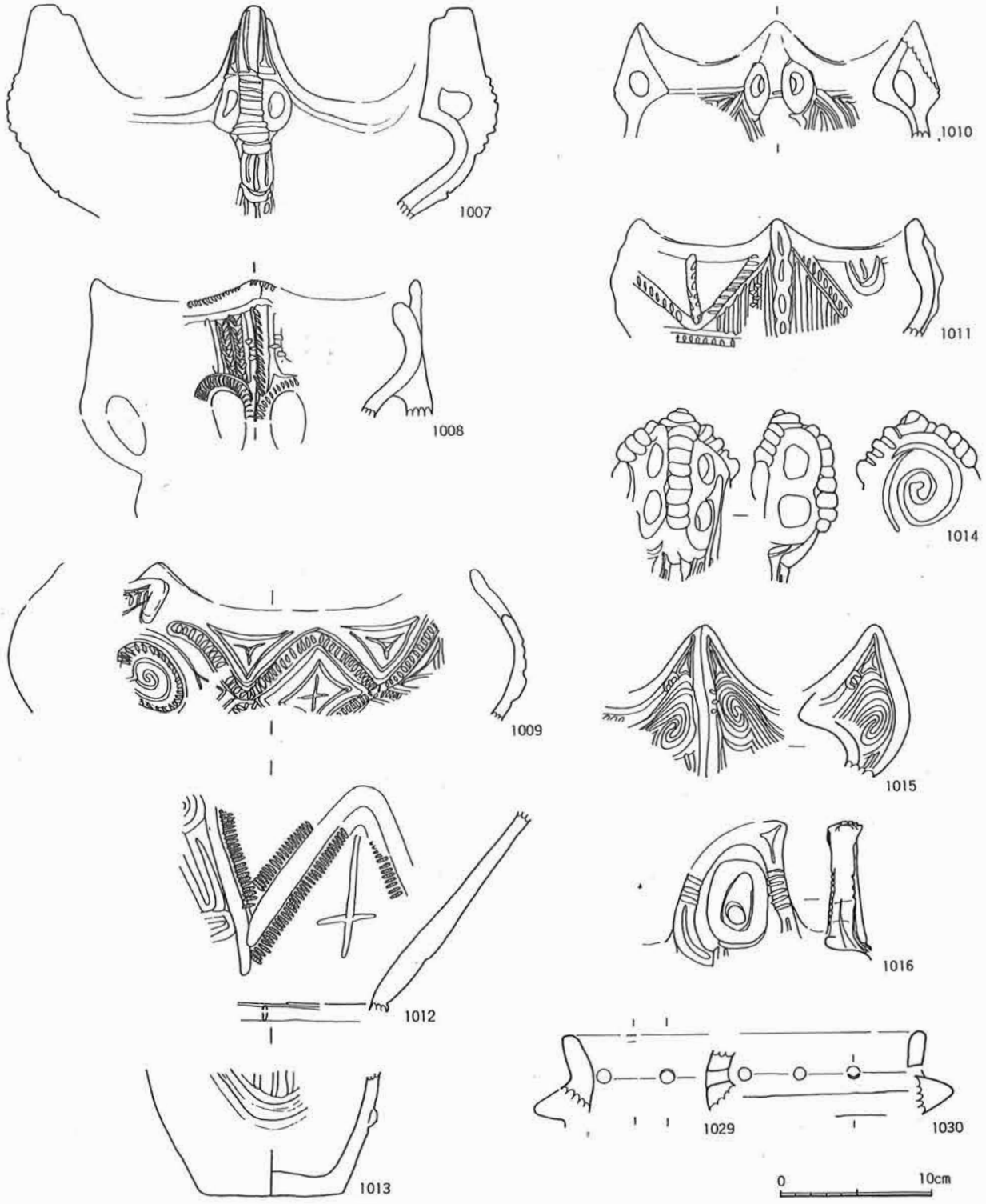
a類（1001. 1007～1016）は4個の大形の把手をもち、胴部で大きくくびれ底部が屈折底となるもので、いわゆる多喜窪重文タイプとして呼ばれるものである。大きく膨らんだ口縁部には三叉文、渦巻文、あるいは曲線状の沈線などを組み合わせ、把手同様に華美に飾り立てている。把手には山形のもの（1001. 1010. 1011）から、それに双孔のみみずく状の小把手が付けられるもの（1007～1009）や、その発展形（1014）、さらに中空の三角錐状の把手（1015）や、横に貫通する大きな孔の開けられるもの（1016）など多種多様で、口縁部資料の3分の1が把手で占められるなど、その圧倒的な量が窺い知れる。

b類（1017～1025）は口縁部から胴上部にかけて、



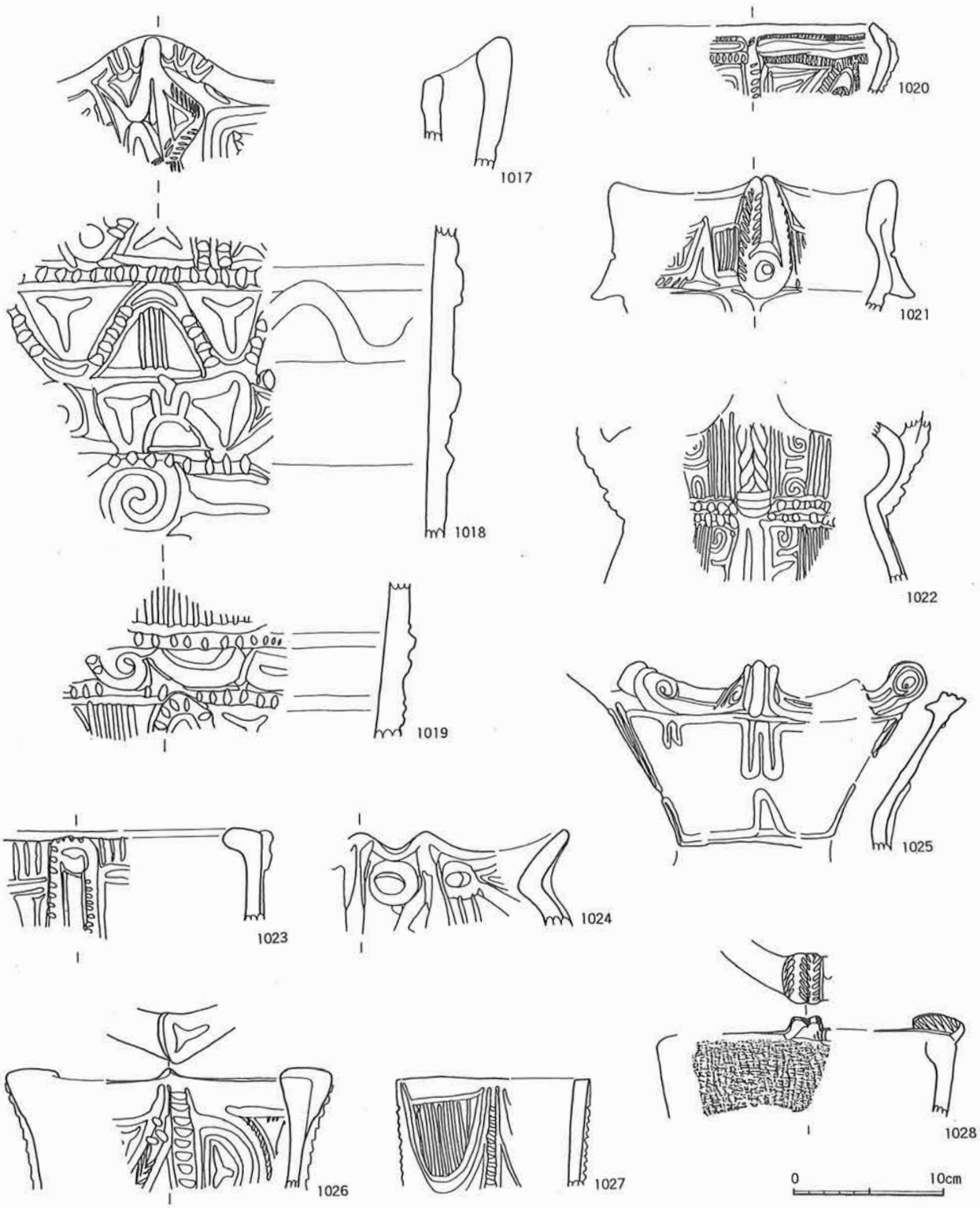
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1001	I	深鉢形土器	勝坂	26.0	19.5	10.4	胴23.3	0.9	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	にぶい褐色	埋甕01
1002	I	深鉢形土器	勝坂	(20.0)	19.8	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	赤褐色	
1003	II	深鉢形土器	勝坂	(29.0)	23.0	10.8	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂	良	にぶい橙色	
1004	II	深鉢形土器	勝坂	(29.5)	18.6	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂	良	暗赤褐色	
1005	I	深鉢形土器	勝坂	(26.0)	—	9.6	口縁部	0.8	隆帯、沈線文	粗砂	良	にぶい褐色	
1006	II	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	0.9	隆帯、沈線文	粗砂、長石、金雲母	良	赤褐色	

図－12　勝坂式土器実測図－1



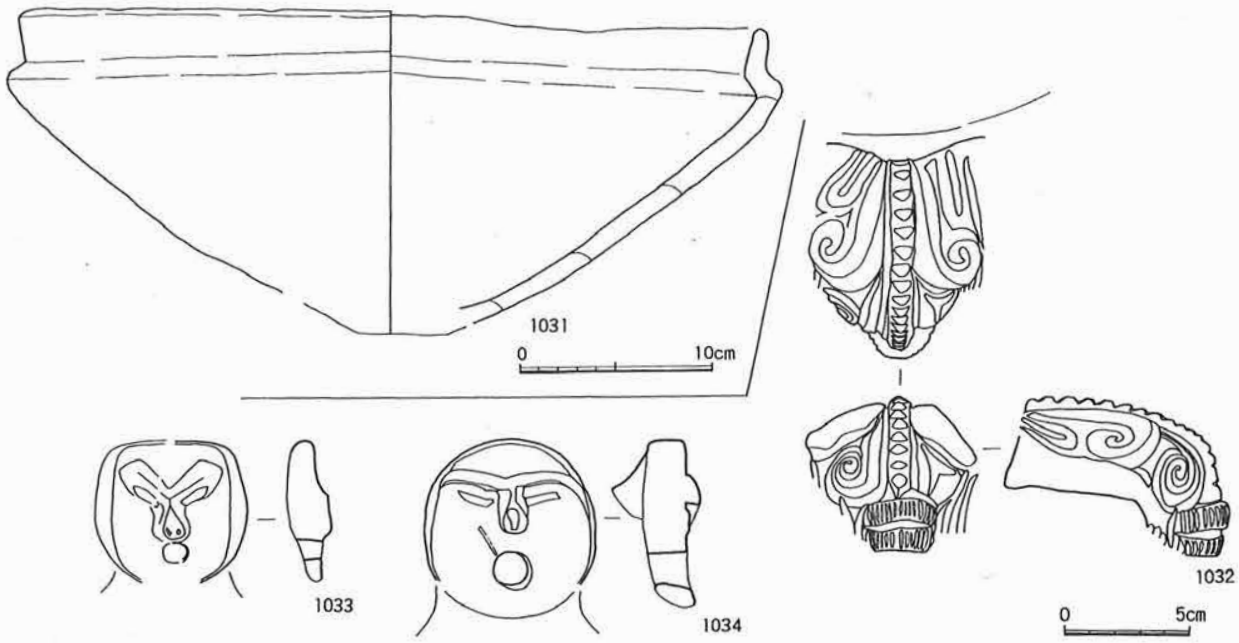
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1007	II	深鉢形土器	勝坂	—	(32.4)	—	口縁部	1.0	隆帯、沈線文	粗砂	良	暗赤褐色	
1008	I	深鉢形土器	勝坂	—	(20.0)	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	灰褐色	
1009	II	深鉢形土器	勝坂	—	(21.6)	—	口縁部	0.5	隆帯、沈線文	粗砂	良	灰黄褐色	
1010	I	深鉢形土器	勝坂	—	(22.0)	—	口頸部	0.8	隆帯、沈線文	粗砂	良	にぶい赤褐色	
1011	I	深鉢形土器	勝坂	—	(34.5)	—	口頸部	0.8	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	赤褐色	
1012	III	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	1.1	隆帯、沈線文	粗砂	良	明赤褐色	
1013	I	深鉢形土器	勝坂	—	—	9.0	—	1.0	隆帯、沈線文	粗砂	良	赤褐色	
1014	III	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	0.9	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	明赤褐色	把手
1015	II	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	1.1	沈線文	粗砂	良	暗灰褐色	把手
1016	II	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	0.7	隆帯、沈線文	粗砂	良	黒褐色	把手
1017	I	深鉢形土器	勝坂	—	(35.6)	—	口縁部	1.1	隆帯、沈線文	多粗砂	不良	にぶい黄橙色	
1018	II	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	1.3	隆帯、沈線文	多粗砂	良	にぶい黄褐色	

図—13　勝坂式土器実測図－2



番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1019	V	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	1.5	隆帯、沈線文	多粗砂	不良	にぶい黄褐色	
1020	II	深鉢形土器	勝坂	—	(26.0)	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	にぶい赤褐色	
1021	V	深鉢形土器	勝坂	—	(28.0)	—	頸部	1.2	隆帯、沈線文	粗砂	良	にぶい赤褐色	
1022	II	深鉢形土器	勝坂	—	(19.0)	—	頸部	0.6	隆帯、沈線文	細砂、金雲母	良	にぶい黄褐色	
1023	II	深鉢形土器	勝坂	—	(22.0)	—	頸部	1.0	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	暗褐色	
1024	I	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	頸部	0.8	隆帯、沈線文	多粗砂	良	にぶい橙色	
1025	II	深鉢形土器	勝坂	—	24.5	—	胴部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂	良	赤褐色	
1026	II	深鉢形土器	勝坂	—	(22.0)	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	にぶい黄橙色	
1027	II	深鉢形土器	勝坂	—	(13.0)	—	口縁部	0.8	隆帯、沈線文	細砂	良	にぶい赤褐色	
1028	I	深鉢形土器	勝坂	—	(21.0)	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文、縄文	細砂、長石	良	褐色	
1029	III	有孔鍔付土器	勝坂	—	—	—	—	1.4	ナデ（有孔）	多粗砂、長石	良	黒褐色	ミガキ有
1030	III	有孔鍔付土器	勝坂	—	—	—	—	—	ナデ（有孔）	粗砂	良	にぶい黄褐色	

図—14　勝坂式土器実測図－3



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1031	V	浅鉢形土器	勝坂	(16.5)	38.6	(4.5)	脹40.9	1.0	無文、肌荒れ	多粗砂	不良	灰黄褐色	底部欠
1032	II	深鉢形土器	勝坂	—	—	—	—	—	隆帯、沈線文	粗砂	不良	橙色	人面
1033	表採	香炉形土器	勝坂	—	—	—	—	—	隆帯、沈線文	粗砂	良	黒褐色	人面、ミガキ
1034	V	香炉形土器	勝坂	—	—	—	頸部	1.0	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	にぶい黄橙色	抽象文（魚）

図－15　勝坂式土器実測図－4

文様帯が集中する口頸部文様帯系土器である。刻み目の施された隆帯などで胴部以下と文様帯が区画されるもので、3式後半には1017～1019のような大形の円筒形土器が、公蔵免遺跡（注3）で代表されるように波及を見せるが、本遺跡ではこれしかない。さらに分類上では口縁部が文様帯となるため、軽い波状で球状となる口縁部では1021. 1023～1035のようにａ類に近く、ここではこのようなａ．ｂ類の折衷形ともとれるような、把手まで達しない波状口縁のバラエティーで大多数を占めていると言える。

ｃ類（1026.1027）は2式後半に現れる小形円筒形土器が、3式後半には口縁部の無文帯に発達していくもので、当該期の土器型式としては最も安定したタイプとされるが､本遺跡における資料は一般的ではない。

ｄ類（1003～1006）はｃ類の無文口縁部がさらに顕著になるに従い、胴部の文様が強調される胴部文様帯系土器である。4点の復原土器が目立つが、破片資料に無文口縁部は以外と認められず、その形状から曽利式土器口縁部に判断されている部分が多いかも知れない。

ｅ類（1028）は縄文の施されるもので、口唇部に小突起が付けられている。右側に向かう帯状の爪形文が認められるから、何らかの抽象文の端部の可能性もある。縄文資料は他の底部資料を含めて全く少ない。

その他、有孔鍔付土器の口縁部破片（1029.1030）と浅鉢形土器（1031）、さらに人面意匠の破片（1032. 1033）と抽象文が施される把手（1034）を見る。

1032.1033の人面土器は円板状で、顎の部分が不明瞭なこと、肩に至る断面ならびに背面の粘土の剥落部分を見ると、土偶よりも香炉形土器の吊り手に付けられた人面に思える。1034は多喜窪重文タイプの把手で、渦巻文、三叉文を目に、細い刻み目の隆帯を口にして、淡水系の魚類を意匠しているように見える。

勝坂式土器と北屋敷土器との併行関係は、近年の発掘成果によって大略は知れてきたが、前項で示すように詳細にはまだ問題を含むようである。ここでは一応東海西部の衰退に反した同東部地方の強烈な角状突起の発達が、多喜窪重文タイプの土器との接触の結果なのか、富士・愛鷹地域に見る併存状況と、そうしたタイプの全くない伊豆半島公蔵免遺跡のあり方に焦点をおいて、井戸尻式土器を含めた勝坂式、北屋敷式土器の3者のあり方を今後は注目して行きたい。

注1. 鈴木保彦 1981「勝坂式土器」『縄文土器大成』2 講談社

注2. 沼津市教育委員会 1993『二ッ洞遺跡(b.c区)発掘調査報告書』など

注3. 漆畑 稔 1990『公蔵免遺跡発掘調査報告書』静岡県大仁町教育委員会

11. 曽利式土器（図－28～33）

曽利式土器は中部高地を中心に集成作業が進み、関東一円の加曽利Ｅ式土器との対比も検討されている

(注１)。本地域も曽利式文化圏の外縁にあたり、その資料も他に比べて優位にあるから、それに従っていきたい。便宜状ａ～ｅ類に分類するが、これは曽利１～５式に対応するものである。

ａ類（1101～1111）は口縁部で３種に分けられる。

ａ－１種は1101.1102.1111の把手が付くもので、1101は長さが30cmに及ぼうとする大形の豪華把手の逸品で、戦後の学校建設の際よりの収集品である。1102は粘土紐の剥落が著しく文様は不明である。1111は勝坂式以来の環状把手が変化して、この時期より確立されるχ把手が付けられている。

ａ－２種は1103～1107の無文口縁のもので、折り返しのないもの（1103～1105)、あるもの（1106. 1107）に分けられる。胴部は円筒状で深く粗い平行沈線を地文にすることが普通であるが、1105は撚糸を押圧して特徴である。頸部は前者が隆帯上に爪形の刺突文が施されて勝坂式（井戸尻式）の残影が感じられる。後者は曽利式の基本パターンに発展している。胴部の懸垂文は隆帯で釣り針状に貼付されている。

ａ－３種は1108～1110の極端に湾曲された口縁部に褶曲文が施されるものである。曽利式土器と分布を異にする唐草文土器の影響の成立とされ、曽利式と分離される場合もある（注２)。本遺跡の資料は比較的多い。

なお、曽利１式土器と勝坂３式土器の新しい部分の併行関係が箕輪Ａ遺跡で知られている（注３)。

ｂ類（1112～1123）は竹管による沈線に頼る従来よりの曽利系統のものと、地文に縄文が施される曽利縄文系に分けられる。

ｂ－１種は1112～1115で、竹管による沈線を特徴として、1112. 1113は籠目文土器系の斜行文の施されるもので、図化されないが格子目、重弧文の例が多い。1112の頸部は斜格子文が並列されて古い要素を見る。1114は無文口縁が減少していく過程の一例である。1115は粘土紐を弧状に繋ぐもので、その接点が渦巻状となっている。渦巻つなぎ弧文として加曽利Ｅ式土器の影響とされる。

ｂ－２種は1116～1122の曽利縄文系とされるもので、曽利２式のなかで半数近くを占める。1116は1115と同じ渦巻つなぎ弧文を見て、口縁下部より結節縄文風のＳ字状沈線が下る。1117. 1118は口縁文様帯のアレンジで地文が縄文のものである。1119～1122は縄文を地文に、２式の特徴的な粘土紐による頸部横位蛇行から、胴部の懸垂文が貼付されるものである。1123は浅鉢型土器で器面の磨きが著しい。口縁部の立ち上がりから２式ないし１式のものと思われる。

ｃ類（1124～1130）は地文が竹管から主に条線に変わって行くもので、縦、横、斜、羽状、綾杉文と変化が多い。口縁部と胴部に文様を主にすることで分けられる。なおその文様区画は、前類の粘土紐の貼付によるものから、両側に太い沈線を用いた低隆帯に変わってきている。

ｃ－１種は1124.1126.1127で、口縁部に渦巻つなぎ弧文や、Ｓ字文、円文などが施されるものである。胴部は縦割りが始まり、1124はその中央を蛇行懸垂文が太い沈線で描かれる。地文を縄文に置き変えると加曽利Ｅ式といった折衷形土器の典型である。他にもそれぞれの口縁部横帯文は加曽利Ｅ式色が強い。この種の口縁部破片はかなり目立った出土量を見る。

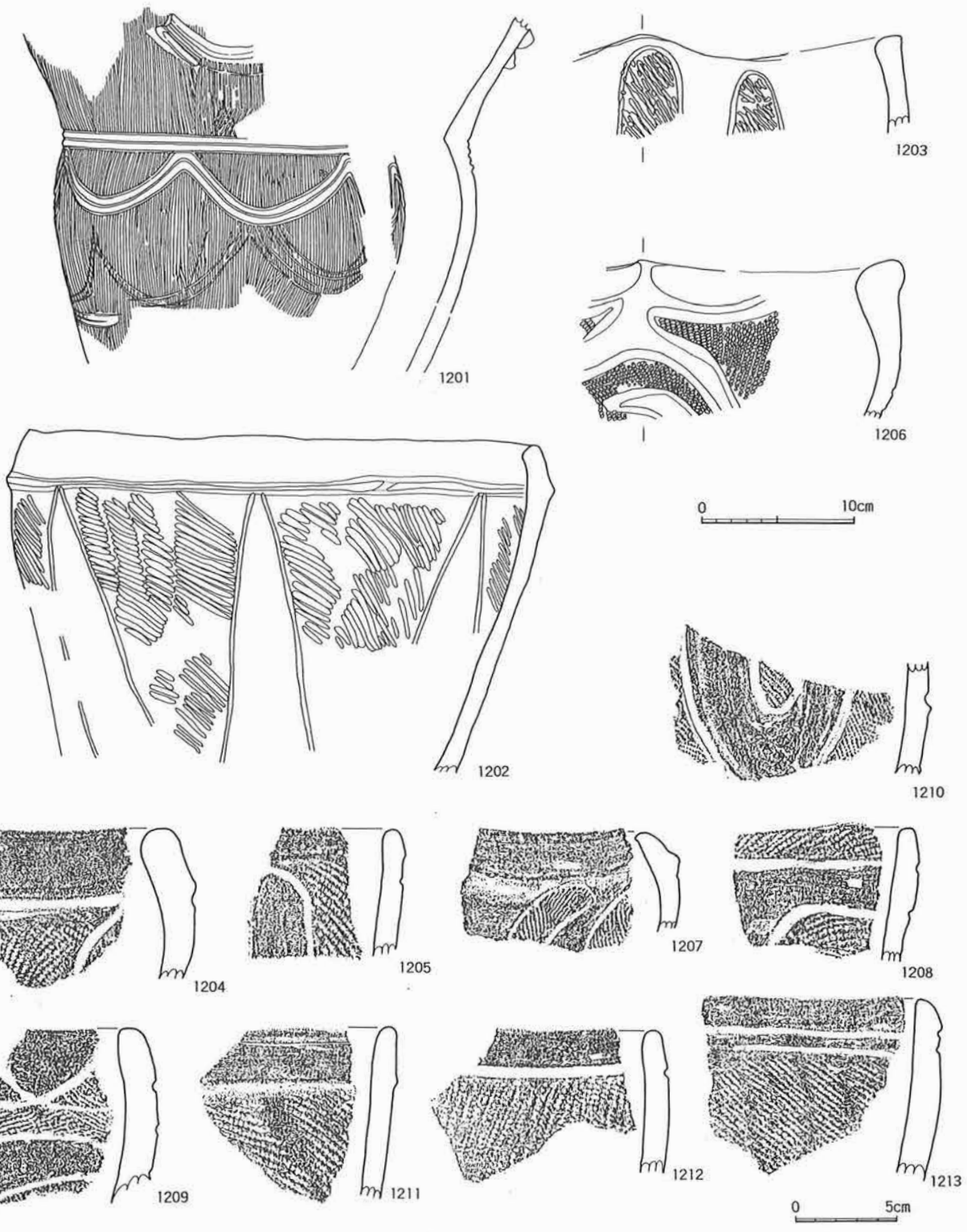
ｃ－２種は1125.1128.1129で、胴部にχ把手から横Ｓ字文、さらに大柄な渦巻文が施される1125を代表に、蕨手状懸垂文（1128)、Ｈ形懸垂文（1129）が胴部に展開されている。1130はχ把手をもつ鉢形土器で所属は不明な部分も多いが、口縁部を巡る低隆帯と弱い竹管沈線がｃ類に近い要素としておきたい。

ｄ類（1131～1134）は地文が完全に条線となり、胴部のくびれも弱くなってきている。口縁部横帯文の残影が残る1134と、口縁部に太い沈線が横走するだけになる1131. 1132に分けられよう。胴部は沈線、または低隆帯で冂区画がはっきりしてきて、1131のような蛇行懸垂文によるものもある。1133は小形土器で条線のみで全体が埋められている。その条線はｄ類のものに似る。

ｅ類（1135～1143）は曽利式土器の終末にあたり、冂区画内の地文も綾杉文から、より簡素化されていわゆる連八文、雨垂文などを主にするもので、そのなかに加曽利Ｅ式の影響の大きいものも含まれる。

ｅ－１種（1135）は加曽利Ｅ式の影響下に登場する四耳広口壷形土器で、χ把手土器の衰退に反してこの類の土器が盛行する。曽利５式に対する加曽利Ｅ４式の盛り返しに関わるものか興味が持たれる。

ｅ－２種は1136～1143で、冂区画がはっきりして、そのなかの連八文はかつて千居遺跡で有名をはせた特徴的な一群である（注４)。1136の渦巻文、1137の楕円文とΩ状の低隆帯による口縁部文様のあり方は、前類の退化で、まるでコントラストを感じないものである。このような古式な部分から、1138のように冂区画文だけのものも発生して、益々退化の傾向を見る。



番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1201	II	深鉢形土器	加曽利E	—	(30.0)	—	口縁部	1.0	条線、隆帯、沈線	多粗砂、長石	良	にぶい赤褐色	連孤文土器
1202	I	深鉢形土器	加曽利E	(27.0)	33.8	—	胴36.3	1.2	磨消縄文R、沈線	多粗礫	不良	にぶい黄褐色	埋甕10
1203	II	深鉢形土器	加曽利E	—	(36.0)	—	頸部	1.3	磨消縄文R、沈線	多粗砂	良	にぶい橙色	弱い波状口縁
1204	II	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	頸部	1.3	磨消縄文RL、沈線	多砂、長石	良	明赤褐色	
1205	II	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	口縁部	1.0	磨消縄文RL、沈線	多砂	良	にぶい橙色	
1206	I	深鉢形土器	加曽利E	—	(34.0)	—	口縁部	1.1	磨消縄文RL、沈線	多粗砂	良	暗赤褐色	弱い波状口縁
1207	V	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	頸部	0.9	磨消縄文R、沈線	多粗砂、長石	良	黒褐色	
1208	I	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	口縁部	0.9	磨消縄文LR、沈線	細砂、長石	良	明赤褐色	弱い波状口縁？
1209	II	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	肩部	1.6	磨消縄文R、沈線	多粗礫	不良	にぶい赤褐色	
1210	I	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	—	1.1	磨消縄文LR、沈線	多粗砂、長石	良	暗赤褐色	
1211	I	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	口縁部	1.0	縄文LR、微隆起線	多砂	良	にぶい橙色	
1212	V	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	肩部	1.1	縄文LR、沈線	粗礫、長石	良	にぶい赤褐色	
1213	I	深鉢形土器	加曽利E	—	—	—	口縁部	1.5	縄文LR、沈線	粗礫	良	にぶい橙色	

図－16　加曽利E式土器実測図

以上、本遺跡の曽利１～５式土器の資料的な流れを見ると、１式より３式にかけて順次発展傾向にあるが、４式で若干の衰退が見られ、５式で加曽利Ｅ式の手助けか復活気味となるがそれも以前ほどではない。岳南地区において本遺跡と対峙する富士市天間沢遺跡（注５）も同様の傾向が窺える時、千居遺跡の発生は曽利式３式期における『飽和』の状態から、その打開を図るための分村対策のひとつの例か、今後の検討も必要となろうが、いずれにしても千居遺跡の廃絶と時を同じくして曽利式土器も終篇を迎えている。

注1. 長崎元広他 1997『中部高地縄文土器集成』1中部高地縄文土器集グループ
注2. 末木　健 1981「曽利式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
注3. 富士宮市教育委員会 1993「箕輪A遺跡」『富士宮の遺跡』
注4. 小野真一編 1975『千居』加藤学園考古学研究所
注5. 富士市教育委員会 1985 『天間沢遺跡』

12. 加曽利Ｅ式土器（図－16）

加曽利Ｅ式土器は曽利式土器圏にあって完全に従の立場で、曽利式に包括される部分も多い。そのなかにあって1201は連弧文土器として独立呼称もされる特徴的なものである（ａ類）。

ａ類は条線を地文に口縁部に２本の隆帯、頸部とその下端を深い半截竹管で３本の沈線、さらにその頂部より浅い半截竹管による沈線で弧線文を重複させるもので、桐生（注１）の言うＢ1型式にあたる。そこでは加曽利Ｅ式４段階分類をとらないが、４段階分類にあてれば加曽利Ｅ２式後半に出現し、同３式に最も盛行し、神奈川県に主体を持つとされる。1201も加曽利Ｅ３式のなかの所産とされるが、口縁部に貼付される２本の隆帯が曽利２式の縄文系土器の渦巻つなぎ弧文の隆帯に似て、その影響が窺い知れる。口縁部の欠損と隆帯の剥落が残念である。なお、この時期には連弧文土器の盛行の反面、加曽利Ｅ式土器の減少が言われるが、本遺跡でもそれに対応する土器は見当たらない。

連弧文土器の出自については東海西部の咲畑文化圏から中間地域を通過し、そこで唐草文系、曽利系の要素も加わるが、それは主体文様とはならず、連弧文のモチィーフだけが西関東で在地化したものとされる。その中間地域にあたる富士岳南地域で、本遺跡と双壁とされる天間沢遺跡（注２）に加曽利Ｅ２式との折衷形の良好な資料がある。しかし、ここで言う連弧文土器はない。ということは天間沢遺跡が西関東へ連弧文の橋渡しをして、本遺跡に連弧文土器が逆輸入されたとするべきか、知多半島に搬入品と思われるものがあれば、全くそれは里帰りであり、そのようなワンポイント的な出土の状況が本土器の性格でもあり、分布の西域におけるあり方かも知れないのである。

加曽利Ｅ式は同４式より見る。口縁部の文様帯が殆どなくなり磨消縄文が発達してくるものである。

ｂ類（1202～1205）は磨消懸垂文が施されるもので、1202.1204.1205は微隆起線文を口縁部に巡らして前式を残影している。1203は弱い波状で口縁部文様帯を全くもたない。地文と磨消部分の施文が1204. 1205と逆になったり、地文がヘラ書きに置き換えられたりして、曽利式土器と判断つかない折衷的なものが目立ってくる。また、1202.1203のような１段撚りが目立つのも特徴である。

ｃ類（1206～1210）は磨消縄文が曲線的に展開されるもので、1201は太い沈線を微隆起線文で縁取っている。口縁部も微隆起線文、縄文、弧状沈線文などバラエティーに富み、球形気味の器形が多い。

ｄ類（1211～1213）は口縁部に沈線文が巡り、以下、縄文が施されるもので資料的には多い。これも単線、複線、それに微隆起線文を加えたものを見るが、単線のものが一般的である。

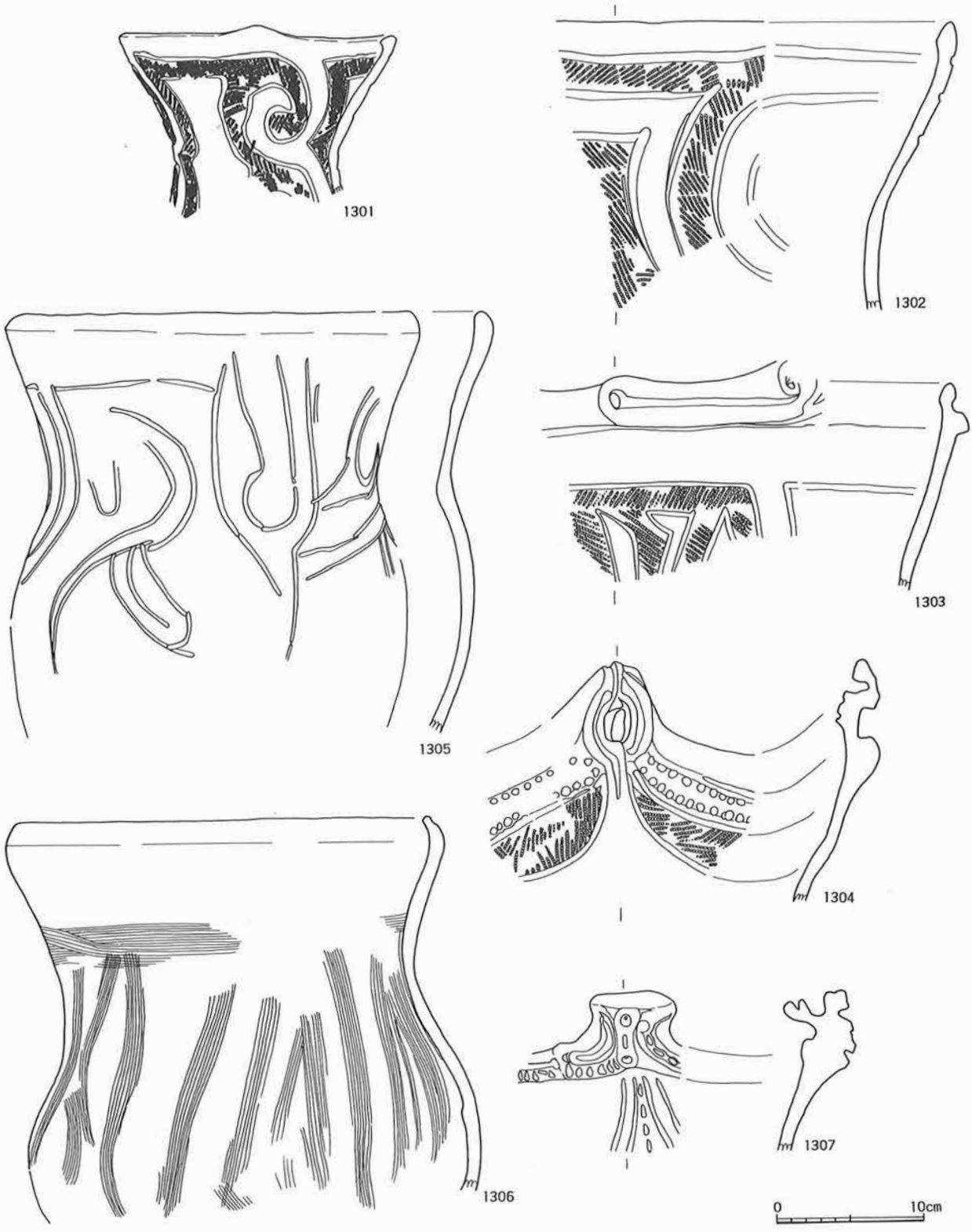
注1. 桐生直彦 1981「連弧文土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
注2. 平林将信 1985『天間沢遺跡』富士市教育委員会

13. 称名寺式土器（図－17.18）

昭和51年の第Ⅰ次発掘調査当時は、不明な部分が多かった称名寺式土器が調査例の増加とともにその実体が見え始めて来た時で、本遺跡もそうした資料の追加を果たした遺跡のひとつであった。しかし依然として絶対量に欠け、その成立過程についても未だ論議が続いている（注１）。本遺跡のあり方についても前後の曽利式や堀之内式土器に比べると貧弱感は拭えないが、一型式を画することは確かである。

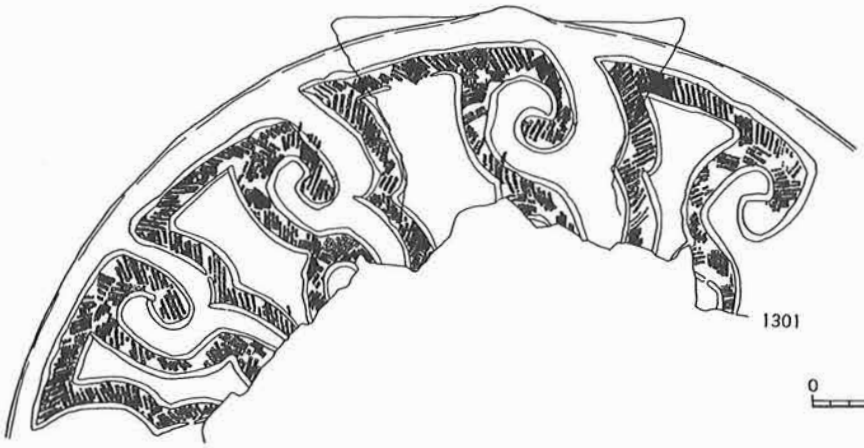
それらは沈線によって文様区画が描かれ、その中を充填する方法によって分類される。

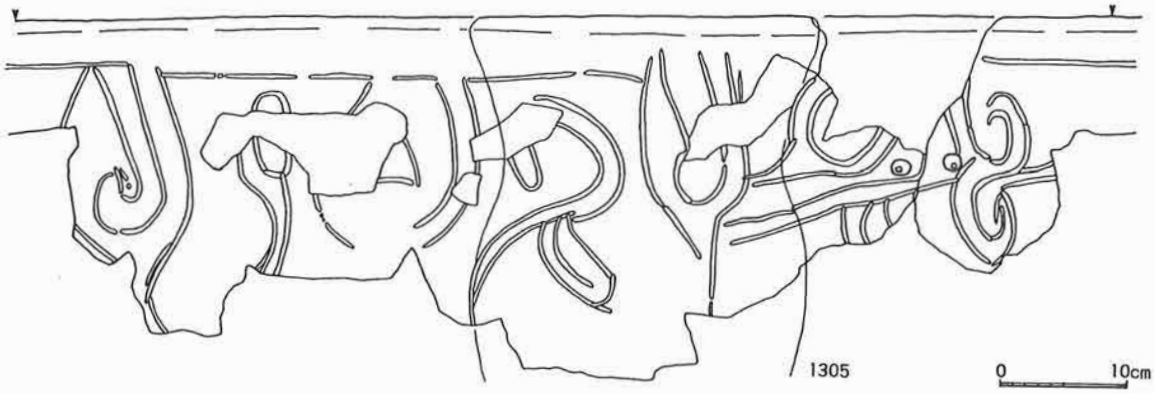
ａ類（1301～1304. 1308～1310）は区画内を縄文で充填するもので、いわゆる磨消縄文を施すものである。全形を知れるものは1301以外ないが、それでも口縁部より垂下するＪ字状文の一部が見て取れる。1301はＪ字状文が上下に連鎖されている。また、1301は頸部のくびれた小形の土器であるが、1302～1304は口径が40cmを超える大形の深鉢形土器で、1303.1304の口縁部には貼付文が付けられ、1304はＣ字状を組み合わせてＳ字状の貼付文に近い。貼付文間は口縁部の波状に沿っ

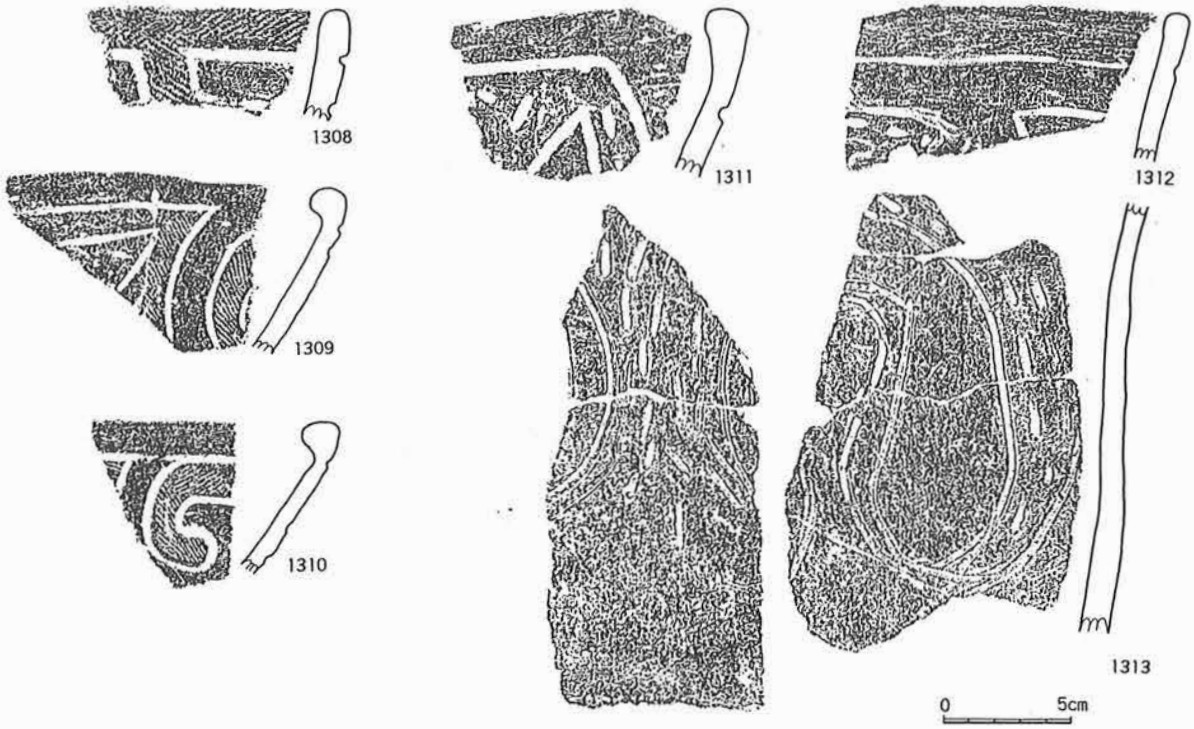


番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1301	V	深鉢形土器	称名寺	—	18.6	—	口縁部	0.6	RL縄文、沈線文	多砂	良	黄褐色	口縁小突起1
1302	II	深鉢形土器	称名寺	—	(46.0)	—	口縁部	0.9	LR縄文、沈線文	多粗砂	良	にぶい黄褐色	
1303	II	深鉢形土器	称名寺	—	(50.0)	—	口縁部	1.0	LR縄文、沈線文	多粗砂、長石	良	にぶい黄褐色	貼付文
1304	I	深鉢形土器	称名寺	—	(32.0)	—	口縁部	0.8	LR縄文、沈線、刺突文	多粗砂、長石	良	にぶい黄橙色	C字状貼付文
1305	II	深鉢形土器	称名寺	—	26.5	—	胴部	0.8	沈線文	多粗砂、長石	良	にぶい赤褐色	
1306	II	深鉢形土器	称名寺	—	29.8	—	胴部	0.8	条線文	多粗礫	良	にぶい褐色	
1307	I	深鉢形土器	称名寺	—	(31.0)	—	口縁部	0.8	沈線、刺突文	多粗砂、長石	良	灰褐色	把手
1308	I	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	口縁部	1.0	LR縄文、沈線文	多粗砂、長石	良	にぶい赤褐色	
1309	I	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	口縁部	0.7	RL縄文、沈線文	多砂	良	にぶい橙色	
1310	I	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	口縁部	0.8	RL縄文、沈線文	多砂、長石	良	にぶい褐色	

図－17　称名寺式土器実測図－1

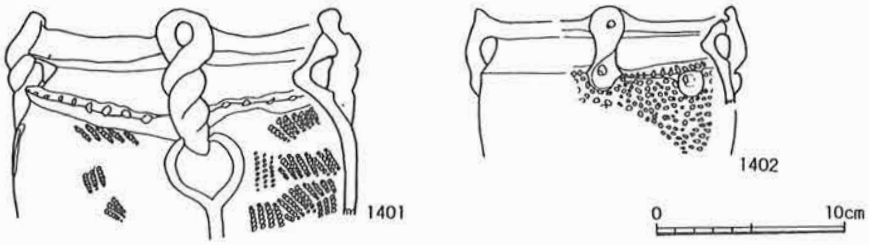






番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1309	I	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	口縁部	0.7	RL縄文、沈線文	多砂	良	にぶい橙色	
1310	I	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	口縁部	0.8	RL縄文、沈線文	多砂、長石	良	にぶい褐色	
1311	II	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	口縁部	1.0	沈線文	多粗礫	良	にぶい橙色	弱い波状口縁
1312	II	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	口縁部	0.9	沈線文	多砂	良	にぶい橙色	補修孔
1313	I	深鉢形土器	称名寺	—	—	—	—	0.9	沈線文	多粗砂	良	にぶい赤褐色	

図－18　称名寺式土器実測図－2



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎土	焼成	色調	備　考
1401	II	深鉢形土器	三十稲場	—	16.2	—	胴部	0.6	沈線、RL縄文、刺突文	多粗砂	やや不良	暗褐色	ねじれ橋状把手
1402	V	深鉢形土器	三十稲場	—	(11.5)	—	胴部	0.5	刺突文	多粗砂	やや不良	暗褐色	8状橋状把手

図－19　三十稲場式土器実測図

て半截竹管を回転させて円形にした刺突文を連続させている。1308は口縁部に窓枠状の区画文をもち、古い部分に属するものである（注２）。区画文に縄文、さらにはっきりしたＪ字状文が施されるａ類は称名寺式土器１式に対応されよう。

ｂ類（1305. 1307. 1311～1313）は沈線によって区画を描くもので、1305を除くと、沈線間には同じ施文具で列点状の刺突が施される。称名寺２式に対応されよう（注３）。1305は列点をもたないことで新しい部分に属するものとされるが、Ｊ字状文もはっきり残り、Ｒ字状文の萌芽を感じさせる部分もあり（欠損部分が多く、見当違いの可能性も高いが）、終末期に見られがちな退廃感はない。1307は把手をもつもので、８字状文風のモチーフが認められ、堀之内式に近いことを窺えさせる。

ｃ類（1306）は条線が施されるものである。器形は1305に近いが歪みが著しい。条線は口縁下部を横位に一周させた後、帯状に垂下される。統一性は感じられないが、一部にＪ字を彷彿させる部分もある。ｂ類同様２式内の所産である。

本遺跡において関連が取り沙汰される西日本系中津式土器は認められないが、関東地方全域でしばしば共伴が認められる三十稲場式土器が伴出しており、広域な文化の交流を再度認識される。

注1. 横浜市埋蔵文化財センター 1990「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」『調査研究集録』7

注2. 鈴木徳雄 1994「称名寺式の形制と施文域」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4 東海大学校地内遺跡調査委員会
1995「称名寺式の文様施文過程と伝統」『縄文時代』 6 縄文時代文化研究会

注3. 安孫子昭二 1981「称名寺式土器の成立」『縄文土器大成』3後期 講談社

14. 三十稲場式土器（図－19）

称名寺２式土器に共伴が認められる三十稲場式土器が３点認められる（注１）。新潟県から福島県を中心とする極めて地域色の濃い土器で（注２）、器形も頸部が強く外反して蓋受け状の形態を呈し、もちろん蓋も付随するものである。本遺跡では蓋は発見されていない。刺突文を多用することも特徴で、1402の胴部に全面に施されている。1401の胴部は粗いＲＬ縄文が施された後、ナデられるが所々に縄文が残る。

両者とも器形は殆ど同じで、４単位の橋状把手のねじれが多い1401は、それをつまむように沈線が垂下している。1402は「８」字状となり、それは新しい段階には「Ｓ」字状の貼付文に変わって行くらしい。それから肩部には刺突をもつ弱い三角状の凸帯を巡らすために怒り肩風となり、頸部のしまりがなお強調されている。

新潟県姫川流域が翡翠の産地であり、中期以降その製品が東日本一円に分布されることは周知され、本遺跡の硬玉製品の出土も広域な「交易」を物語るものと捉えられるが、それに付随して動いたであろうこの土器のあり方と、有蓋で小形の特徴的な器形は興味深いものである。

注1. 柿沼修平 1981「称名寺式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣

注2. 宮尾　亨 1994「三十稲場式土器の型式構成」『季刊考古学』48 雄山閣

15. 堀之内式土器（図－34～40）

堀之内式土器は口縁部破片数（以下同じ）1,616点を数え、第２位の曽利式土器710点を圧倒して、本遺跡の主体を成すものである。１式と２式が認められ、それぞれに関連するものを挙げると以下である。

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
堀之内１式	322	612	53	403	1,390
堀之内２式	18	145	2	61	226
注口土器	1	27	0	2	30
付加条縄文	111	234	5	143	493

詳細に見ると、堀之内１式土器の膨大な出土量が再

度確認され、本遺跡の隆盛期を窺い知ることができる。同2式期に量が減り衰退へ忍び寄る影を知るが、併行する付加条縄文の施される土器の493点を見ると、まだそれ程ではなかったように思える。なお、それらは第Ⅲ調査区に全く及んでいないことも特徴のひとつである。

堀之内1式土器はいわゆる磨消縄文のもの、地文に縄文が施されるもの、沈線のみのものの3形態に大きく分けられるようであるが、本遺跡では縄文と沈線文の2類にしている。深鉢形土器が圧倒して浅鉢形土器ははっきりせず、他に注口土器30点（1点は加曽利B式？）を伴っている。

a類（1501～1512）は縄文が施されるものである。

a－1種は1501～1506で、あまり意識のない磨消縄文が施されるものである。器形は球形に近く、頸部が「く」字状に屈曲することを特徴としている。口縁部は無文で、口唇には3～4単位で1526. 1527や、1501に見られるような華美な装飾把手が付く場合が多く、このような把手の出土量は口縁部資料の半数近くを占めている。1501が埋甕11に使用されたもので、甕内には曽利式土器片が混入したりして、本遺跡の極度の重複状況を知れるものである。1505は「8」字貼付文が橋状の把手として四方に付くもので、三十稲場式土器との関連も取り沙汰される。

a－2種は1507～1512で縄文を地文として沈線が描かれるものである。器形は1507. 1508のように頸部が少しくびれるものがあるが、殆どは1509～1512のようにストレートに若干開き気味に立ち上がるものである。従って頸部によって文様帯を区切ることなく、口縁部から直接垂下させる場合が多い。1509.1510が蕨手文、1511が蛇行沈線文を縦位列点文で囲んで垂下させるなど、東北系色彩を感じさせるものである。1512は複数の沈線によって文様を描くもので、垂下した単位をジグザグに繋いで充填させる手法は1528に関連が窺えるものである。なお、この1512は埋甕12（1535）内より出土したものである。

以上、縄文の施されるa類を説明するが、その出土量は後述する沈線のみのb類の10分の1にも満たない状況であり、完全に客体的立場をとって、そのあり方は関東地方西南部に近い（注1）。

b類（1513～1532）は沈線文のみのもので、a類で分けられた器形を踏襲して2つに分けられる。

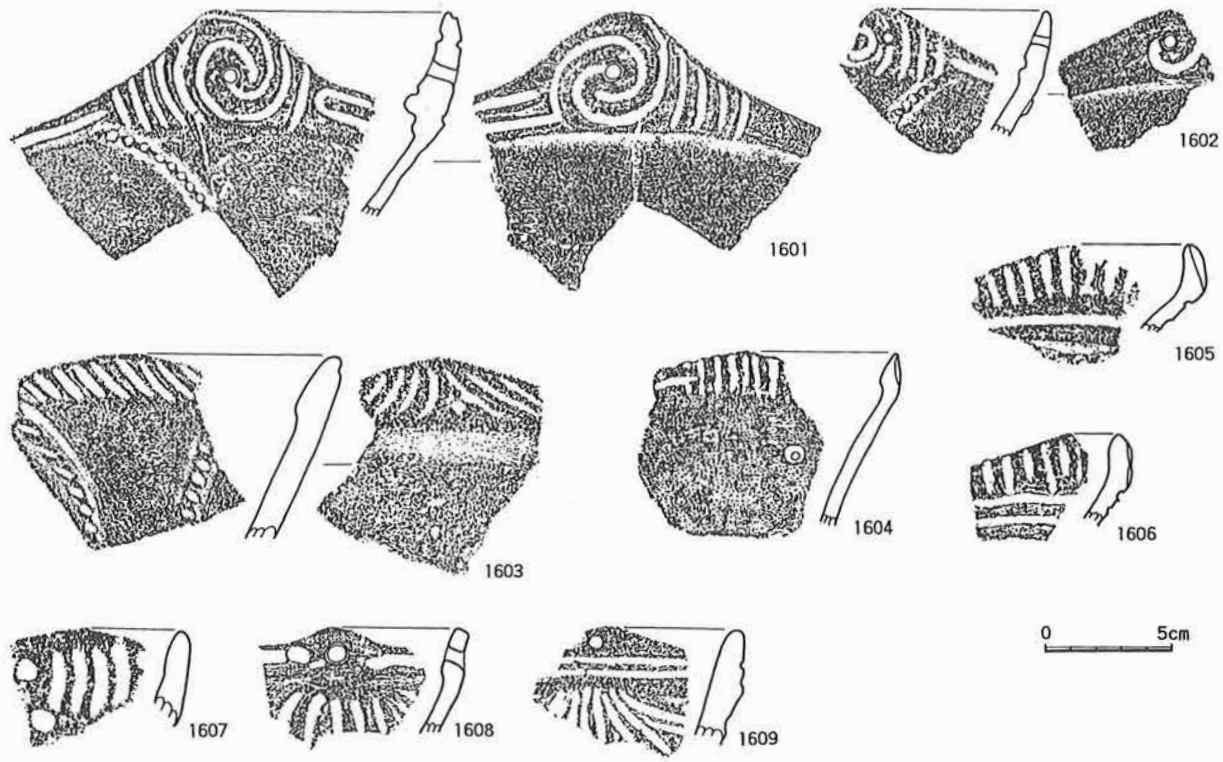
b－1種は1513～1527で、球形に近い胴部とくびれた頸部、無文の口縁部と口唇の過度とも思われる装飾が特徴のものである。圧倒的な出土量を誇る堀之内1式土器のなかでもおよそ80%がこの種で占められ、口縁部破片は各種の把手の見本と言っても良い程、多種多彩である。1526. 1527や箕輪A遺跡第1号住居跡出土の人面把手付き土器に見られるように、これらの土器のあり方は、この地域における地域的な繁栄がそのまま土器に表現されているかの様である。

1513～1515は口唇と頸部の横帯を縦の隆帯で繋ぐもので、橋状把手や「8」字貼付文が接点に付けられている。1516. 1517は渦巻文を基本にして、1516はその渦巻文の間を集合沈線で充填している。1520. 1521はX字状文とその変形のものが描かれ、これらは前者を含めモチーフを全て3本の沈線で描き、その接点に「8」字貼付文を付けることを特徴の第一義としている。1523.1524になると胴部の沈線はあまり目立たないものとなり、1525のようにミガキだけのものも見られるようになる。

b－2種は1528～1532で、頸部のくびれがあまり目立たないものである。具体的には口唇部に文様帯をもつものが直線的で、1530のように文様をもたないものが若干のスロープを描いているといえる。この1530や1531. 1532に描かれるH字状文が、称名寺式土器のJ字状文からの関連を取り沙汰されるもので、関東地方西部を主体にして下北原式土器が提唱されているらしい（注2）。1531. 1532の口唇の刺突は1518に通じて両種の融合を知れるものである。1528. 1529は4、ならびに3本の沈線で、懸垂文を降し、それをジグザグの斜行文で繋ぐもので、これもまた港北ニュータウン内遺跡など、関東地方西南部に特有のものである。しかし資料全体に占めるb－2種の割合はa種と同様におよそ10%程を占めるに過ぎず、b－1種の圧倒的な優位性のなかでは従の立場を取らざるを得ないでいるのである。つまり縄文の施される土器（a類）に対する比率は関東地方西南部に変わらないでいるものの、沈線文のみが施される土器（b類）の内容は1種、2種でそのあり方が異なり、そこには地域性のようなものが示されているかも知れないのである。

その他にナデ、ミガキが施された無文の土器（1533～1535）がある。1533. 1534が口縁部形態から堀之内式に、1535は埋甕12で、甕内に混入していた1512より帰属が知れるものである。

続く堀之内2式土器の貧弱な状況はすでに知れているが、内容も小形品に限られて、大形品が全く目立たなくなる。この部分については後述する付加条縄文が



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1601	II	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	0.7	沈線、刺突隆帯	粗砂、長石	良	にぶい黄褐色	
1602	II	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	0.6	沈線、刺突隆帯	砂、長石	良	にぶい橙色	
1603	I	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	1.1	沈線、刺突隆帯	砂多、長石	不良	にぶい橙色	
1604	V	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	0.6	沈線	粗砂多	不良	にぶい赤褐色	補修孔
1605	V	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	0.5	沈線	粗砂多	不良	にぶい橙色	
1606	V	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	0.6	沈線	砂、石英	良	にぶい黄橙色	
1607	V	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	1.1	刺突、沈線	粗砂多	不良	にぶい黄橙色	
1608	V	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	0.8	刺突、沈線	粗砂多	良	にぶい橙色	重量感有
1609	II	深鉢形土器	縁帯文系	—	—	—	—	1.1	刺突、沈線	粗砂多、長石	良	にぶい黄橙色	

図－20　縁帯文系土器実測図

施される土器が併行して、大形深鉢形土器の担う分を賄っていたようである。

資料は底部から直線的に立ち上がって反り気味に口縁部に至る、いわゆるバケツ形の深鉢形土器（1536～1538）と、胴部中位が若干くびれた浅鉢形土器（1539.1540）を見る。いずれも磨消縄文による文様が施されるもので、1536と1539が長円形のものを数段重ね、1537.1538は独特の三角形のモチーフを基本にして、文様も鋭利で幾何学的構図がはっきりしているものである。1537は菱形状に残る空白部分をさらに斜線で埋めている。1538は埋甕13に使用されたもので、比較的厚手で重量感がある。

1539.1540の浅鉢形土器はいずれも顕著なミガキがかけられ、1540の底部には細かく編まれた網代痕が見られる。

注口土器（1541～1560）は30点が破片で出土して、全く形状は窺えない。大半が堀之内式のものであるが、1552の磨消縄文は加曽利B式のそれに近い。注口部が円筒状に長いもの（1541～1546）が多く、把手と連続していないことから堀之内2式の注口資料が多いようである。この他に注口部が口縁部に直接付けられた1549、円孔だけの1551がある。この1551の胴部に施される縄文帯は三条の沈線で構成されるもので、浜松市蜆塚遺跡など県西部との関連を取り沙汰されるものである（注3）。これも堀之内2式併行期のものらしい。1553～1560は把手のバラエティーである。

なお、これら注口土器の破片は30点中、27点が第Ⅱ調査区の出土である。この異常とも思える出土量と大方のものが堀之内2式の所産であるとすれば、そこには今まで同じレベルで考えていた第Ⅱ調査区と第Ⅴ調査区の配石遺構にも時期的な差や、性格的な差も考えなければならない重要な問題が隠されていることを認識しておかなくてはならないと思われるのである。

注1. 市立市川考古学博物館 1982「シンポジウム堀之内式土器資料集」

注2. 安孫子昭二 1981「関東.中部地方」『縄文土器大成3』後期 講談社
注3. 向坂 鋼二 1992「縄文時代」『静岡県史』資料編3 考古三 静岡県

16. 縁帯文系土器（図－20）

圧倒的な堀之内式土器の資料のなかに西日本的要素をもつ一群､いわゆる縁帯文系土器が23点認められる。口縁部に文様が顕著に施されることが特徴のひとつでもあり、その方法によって４類にされる。

ａ類(1601～1604)は口縁部が肥厚して帯状を意識するもので、1601～1603に見られる裏面の施文も特徴である。佐久間町半場遺跡（注１）に類似資料がある。渦巻文や同心円文の中心に透し孔が施され、口縁部文様帯の下面は幅広く開け、そこに頸部を巡る横帯まで刺突された隆帯で弧状に繋ぐ1603.1604の沈線は太く直線状になっている。

ｂ類（1605. 1606）は「く」字状の口縁部が屈曲するもので、そこには縦の沈線を連続して施し、屈曲部分の下には２本の沈線を巡らす。

ｃ類(1607)は弱い波状ならびに弱く屈曲した文様帯に大きな刺突の円孔を弧状の沈線で囲むもので、ａ類1602に近い。しかし沈線は圧倒的に太い。厚手で胎土は粗く、焼成も最悪で堀之内式のそれらとは最も異質なものである。

ｄ類(1608.1609)は弱く屈曲する口縁部に、先ず、1608は透し孔を挟んで堀之内式風の「８」字を彷彿させる沈線、1609は刺突孔と２列の沈線が巡り、その下部より充填される沈線に特徴をもち、それは北白川上層式のものに似るものである。

以上、本遺跡における縁帯文系土器を説明するが、貧少な資料のなかで不明な点は多い。かつて県西部で袋井市大畑遺跡（注２）を中心に大畑Ⅰ式土器が設定され、静岡県史（注３）にも編年されている。おそらく本遺跡の内容もそのうちにあるものと思われるが、県西部から信州地方で知られるあり方からすれば、天竜川以東の縁帯文系土器の波及度合いはこれ程のものでしかなかったのであろう。

注1. 佐久間町教育委員会 1982『半場遺跡1978年度発掘調査報告書』
1985『半場遺跡1981年度発掘調査報告書』
注2. 袋井市教育委員会 1981 『袋井市大畑遺跡』
注3. 向坂 鋼二 1991「第2章 縄文時代」『静岡県史』資料編3 考古三

17. 付加条縄文が施される土器（図－21.22）

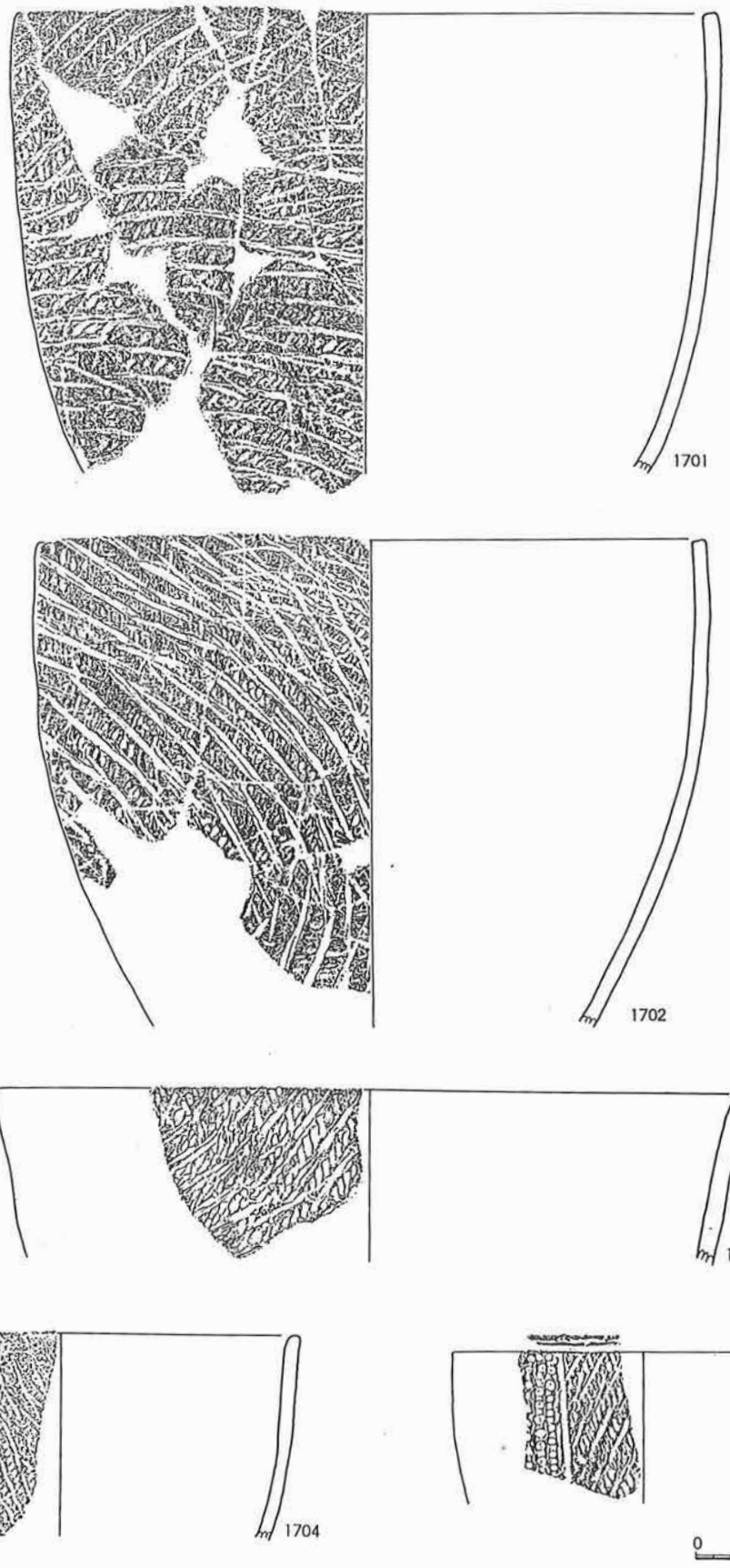
付加条縄文の施される土器の口縁部破片(以下同じ)が493点認められる。この付加条縄文の施される土器の帰属については、近年、修善寺大塚遺跡（注１）、三島市北山遺跡（注２）などで堀之内２式土器を主体にした共伴が認められ、従来より言われていた縄文中期末から加曽利Ｂ式期までの時間幅も大分限定されてきたようである（注３）。また分布についても伊豆半島が主体地域とされてきたが、富士市原田中島遺跡（未報告）や、富士川を越えた富士川町浅間林遺跡（注４）、同中野遺跡（注５）でも確認され、その西域もかなり拡大してきている。

この付加条縄文の施される土器は、1703の推定口径43.9cmが示すように40cm前後の大形のものが目立ち、胎土は粗く焼成も良好のものは少ないが、器厚は薄いものが多い(1701.1702)。施文原体は「つる」状のものをそのまま撚ったような大形のものから、繊維質がはっきり残るしっかりした撚りのものまでがあるが、概して前者の粗い撚りがその特徴の第一義としている。元来、他の文様要素と併用されて施文されることは少ないが、1705には口唇端部に沈線が一条が巡り、懸垂する数本の沈線の外側１列を残し、内側の沈線の凹面に竹管の先で、「◎」状に刺突を連続している。堀之内式の縄文系土器に見る縦位列点文に通ずるか、今後の類例の増加を待ちたいが、沈線と竹管の刺突は堀之内式に好まれる技法であることは確かである。

ここで関連を取り沙汰される土器の地区別出土数を挙げると以下である。

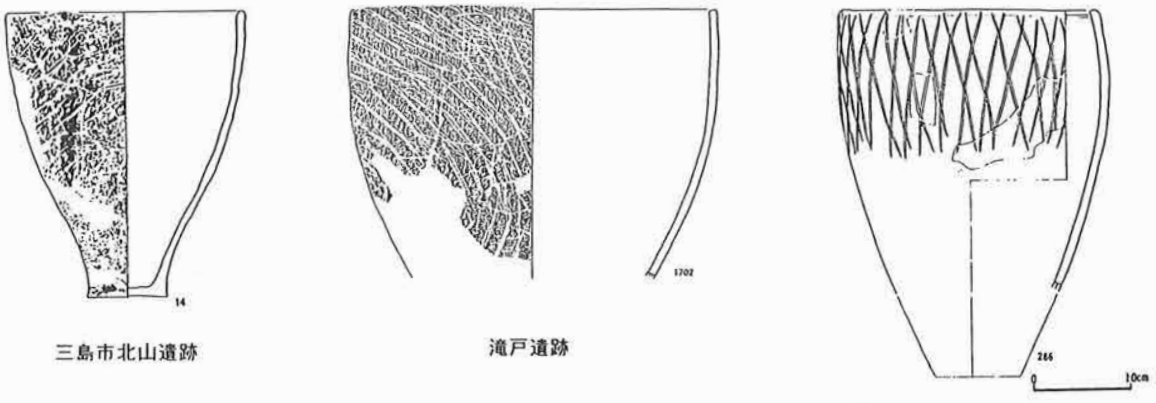
	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
曽利式	121	299	164	126	710
称名寺式	54	42	5	5	106
堀之内１式	322	612	53	403	1,390
堀之内２式	18	145	2	61	226
付加条縄文	111	234	5	143	493

先ず、付加条縄文の施された土器の出土比率からすると、堀之内式土器のそれと全く同じで、やはり曽利式や称名寺式土器には関連しないことが知れる。次にその出土量であるが、縄文や無文の時期不明な口縁部破片を除くと堀之内式・曽利式土器に次ぐ第３位を占め、もはや１画期を占めるような驚異的な数値を示しているのである。つまりそれは堀之内２式土器の226点が小型の精製土器片数に限られるなか、大型深鉢の機能を果たすに充分な数値と言えるかも知れないのである。1705に堀之内１式的な古式な部分も見るが、その主体的な波及時期はやはり同２式期であり、堀之内２式から加曽利Ｂ式土器に至る間の大形深鉢形土器のはっきりしない部分を賄っていた本地域独特の土器と



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1701	II	深鉢形土器	付加条縄文	—	(40.8)	—	口縁部	0.9	LR付加条縄文	多粗礫、長石	不良	にぶい橙色	
1702	II	深鉢形土器	付加条縄文	—	(39.1)	—	口縁部	0.9	RL付加条縄文	多粗砂、長石	良	にぶい赤褐色	
1703	V	深鉢形土器	付加条縄文	—	(43.9)	—	口縁部	1.1	LR付加条縄文	多粗砂	良	暗赤褐色	
1704	V	深鉢形土器	付加条縄文	—	(28.0)	—	口縁部	0.8	RL付加条縄文	多粗礫	良	極暗褐色	
1705	I	深鉢形土器	付加条縄文	—	(22.3)	—	口縁部	0.8	LR無節縄文、沈線、縦	多砂	良	褐色	口唇沈線

図－21　付加条縄文が施される土器実測図－1



三島市北山遺跡　　滝戸遺跡　　神奈川県綾瀬市宮久保遺跡（加曽利Ｂ１式併行）

堀之内２式併行

図－22　付加条縄文が施される土器実測図－２

して良いのであろう。

この時に関東地方南西部では特有の朝顔形、またはバケツ形と称される深鉢形土器が大小揃っていて、そのサイズに関する論考さえ行われていたりするが（注６）、続く加曽利Ｂ１式期には格子目文を意図する付加条縄文土器に同形の粗製深鉢形土器を見たりもするのである（注７）。その地域でその間における付加条縄文土器の動向は知らないが、本地域におけるこの土器の特徴は、滝戸遺跡に隣接する福伝遺跡の外縁で打製石斧と共に単独で出土したり（注８）、西富士道路建設に伴う発掘調査で富士市伝法Ｂ地区に新発見されるなど（注９）、従来の核から飛び出したような出土状況にあり、それが文化の飽和状態を打破しようと懸命に拡散しようとする姿を写し出しているのであれば、箱根山を越えることもあながち不可能には思えないのである。

注1. 修善寺町教育委員会 1982『修善寺大塚』
注2. 三島市教育委員会 1986『北山遺跡』
注3. 瀬川裕市郎 1990「縄文土器-東海地方-」『考古学ジャーナル328』ニュー・サイエス社
注4. 富士川町教育委員会 1981『浅間林発掘調査概報』
注5. 富士川町教育委員会 1984 『中野遺跡』
注6. 綾瀬市教育委員会 1993 『上土棚遺跡(縄文時代編)、上土棚南遺跡』綾瀬市埋蔵文化財報告書3
注7. 神奈川県埋蔵文化財センター 1978『宮久保遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書15
注8. 富士宮市教育委員会 1993『富士宮市の遺跡』
注9. 富士市教育委員会 1981『西富士道路(富士地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』

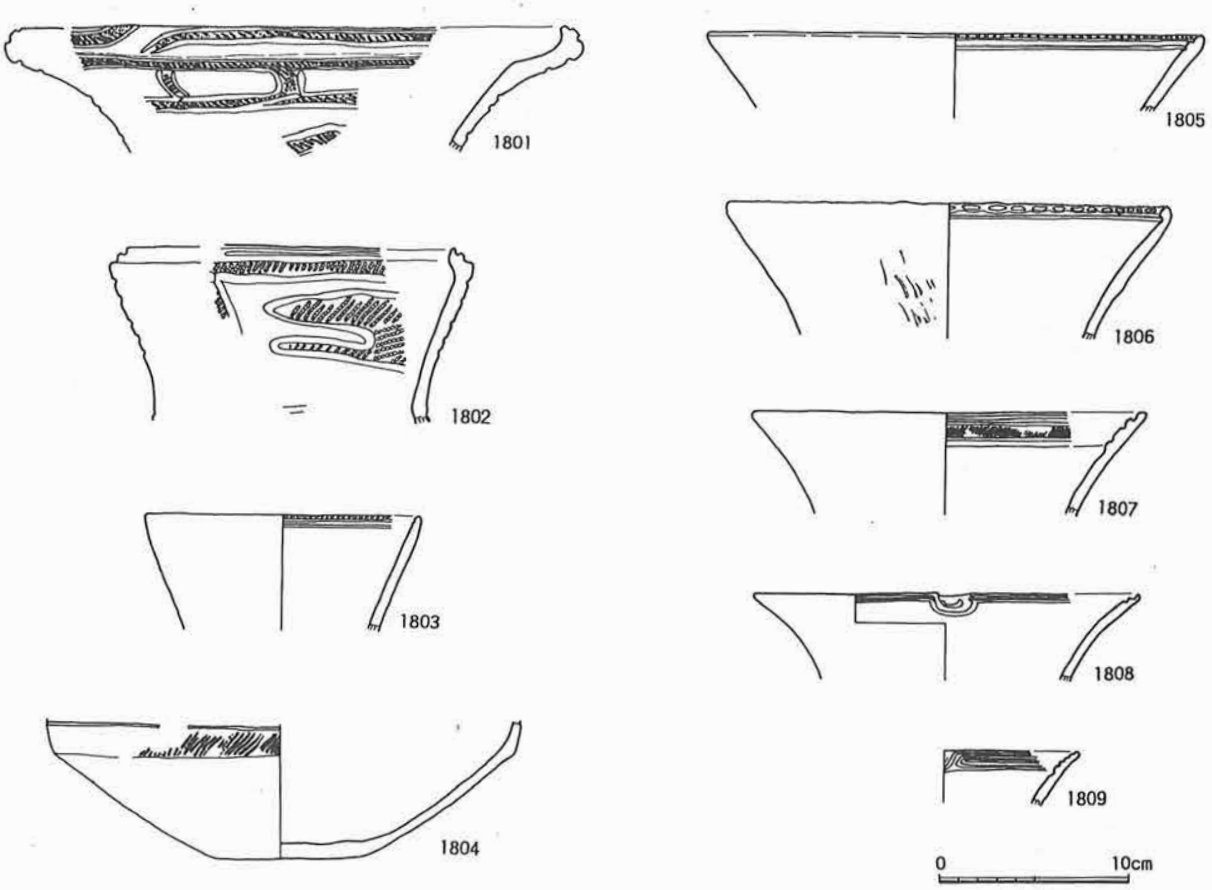
18. 加曽利Ｂ式土器（図－23）

加曽利Ｂ式土器はＢ１式の範疇に納まり、それに後続するものは見当らない。資料点数も34点と堀之内式土器1,616点の足元にも及ばず、当該期の一気の衰退状況を如実に表している。数点が深鉢形土器片の他は浅鉢形土器片で占められ、一応浅鉢の比率が高い。注口土器はおそらく1552だけと思われる。また深鉢形土器には付加条縄文の施される土器も継続されているものと思われるが、、それを判断するだけの資料はない。

深鉢形土器は比較的小形であり、サラダボール状の球形の鉢が特有であるようにおそらく深さをあまりもたないものと思われる。1801. 1802が外面に磨消縄文を施すもので、縄文は細かく磨きも丁寧である。1801は口縁部が大きく開き、1802は「く」字状に閉じられ特徴的である。1803は外面に施文はなく、口縁部内側に1804と同じ刺突列と２本の沈線が巡っている。

浅鉢形土器は外反する口縁部をもつものが目立つ。文様はいずれも口唇から口縁内側に単列で施されて、それ以下に及ぶものはない。その内容は1804. 1805が刺突列と横の沈線（以下、横線）、1806が縄文帯を横線で挟み、1807.1808が横線を集合させ、接点部にポイントを入れるもので、それぞれにバラエティーはあるものの施文の状況は殆ど同じである。1809は唯一の底部資料で網代痕が見られる。

以上の加曽利Ｂ１式土器を出土区別に見ると、34点中31点、およそ90％以上の高率で第Ⅱ調査区に集中している。このことは縄文中期前半から後期前半まで連綿と着実に発展を重ねてきた滝戸遺跡が、その終焉を向かえ殆ど極地的に小規模化された生活の跡を見せているのであろう。中部山岳地方がそうであったように、その外郭を形成する本地域でも確実に文化は衰退し、潤井川を対峙して両輪をなしてきた富士市天間沢遺跡（注１）では逸速く生活の姿はなく、文化の主体は伊豆半島や富士川以西等の海岸部へ移ってしまうのである（注２）。



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1801	II	深鉢形土器	加曽利B1	—	(30.9)	—	口縁部	0.7	RL縄文、沈線	粗砂、長石、石英	良	暗灰黄色	
1802	V	深鉢形土器	加曽利B1	—	(19.1)	—	口縁部	0.7	LR縄文、沈線	細砂、長石	良	にぶい黄褐色	
1803	II	深鉢形土器	加曽利B1	—	(14.6)	—	口縁部	0.6	刺突、沈線	粗砂、長石、雲母	良	褐色	
1804	II	浅鉢形土器	加曽利B1	—	(26.4)	—	口縁部	0.6	刺突、沈線	砂、長石、雲母	良	にぶい黄褐色	
1805	II	浅鉢形土器	加曽利B1	—	(23.4)	—	口縁部	0.5	刺突、沈線	粗砂、長石	良	暗赤褐色	
1806	II	浅鉢形土器	加曽利B1	—	(21.3)	—	口縁部	0.6	RL縄文、沈線	粗砂	不良	にぶい黄褐色	
1807	II	浅鉢形土器	加曽利B1	—	(20.3)	—	口縁部	0.5	沈線	砂、長石	良	にぶい赤褐色	
1808	II	浅鉢形土器	加曽利B1	—	—	—	口縁部	0.5	沈線	細砂	良	にぶい赤褐色	
1809	II	浅鉢形土器	加曽利B1	—	—	7.4	—	0.5	LR縄文、沈線	粗砂	良	暗赤褐色	網代底

図－23　加曽利B式土器実測図

注1. 富士市教育委員会 1985 『天間沢遺跡』 II

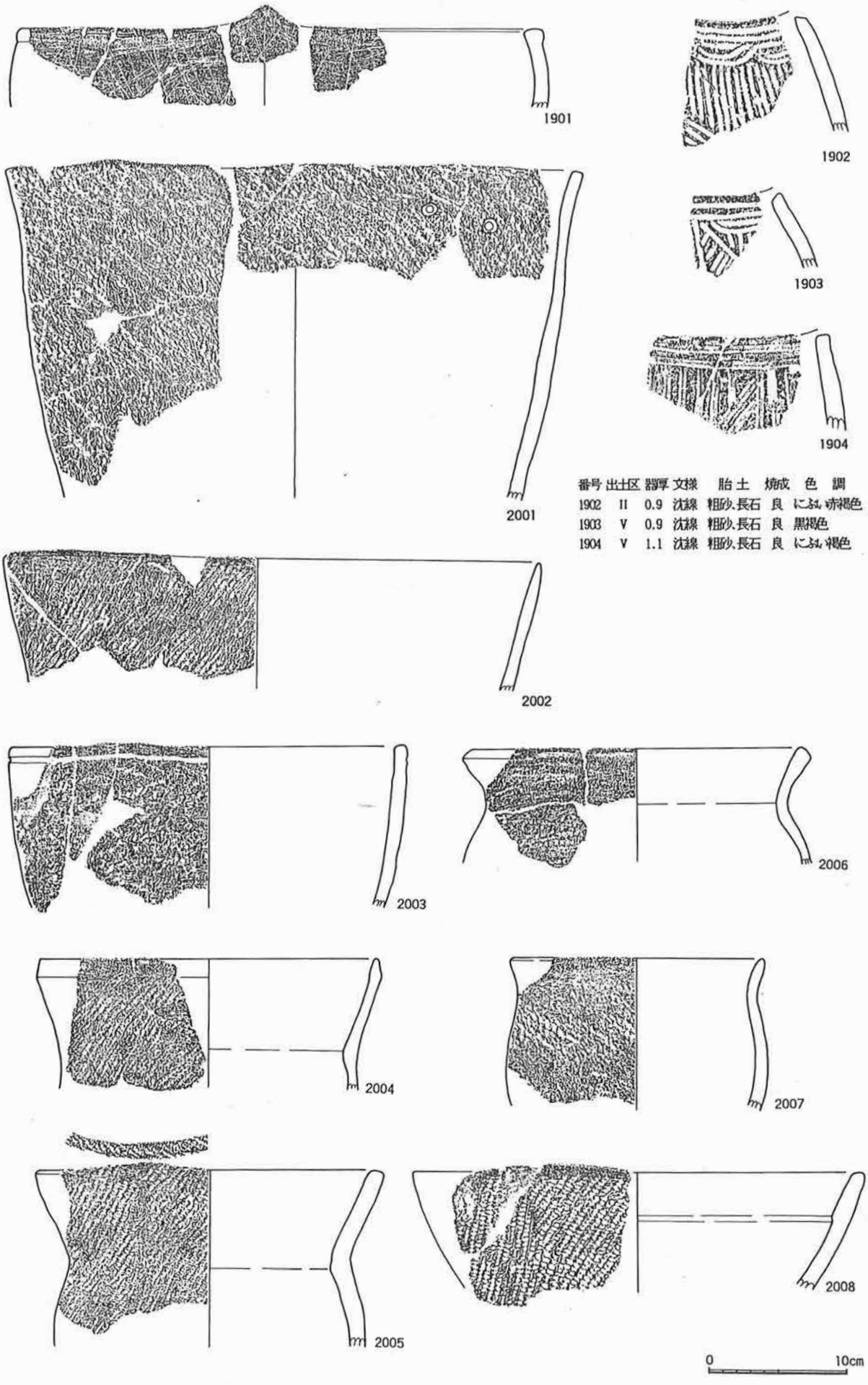
注2. 静岡県 1990 『静岡県史』 資料編1 考古1

19. 沈線文が施される土器（図－24）

沈線文が施される土器は資料を口縁部破片に限ったこともあり、口縁部辺にかなり特徴的な文様の抽出がない限り、不明なままのことが多い。これらは大きく①太い沈線が単、複数で横位に巡るもの、②沈線が集合して施されるもの、③細い沈線が無雑作に施されるものに分けられる。①. ②は前述してきたそれぞれの土器の口縁部と思われるが、なかにそれらと胎土、色調を異にした黒灰色で分厚い円頭状の口縁部が認められる。波状口縁と思われその縁に沿って３条の太い沈線が巡るもので、おそらく後期後葉の東海から関西系の粗製深鉢形土器と思われるが、１個の資料ではあまりに貧弱過ぎる。

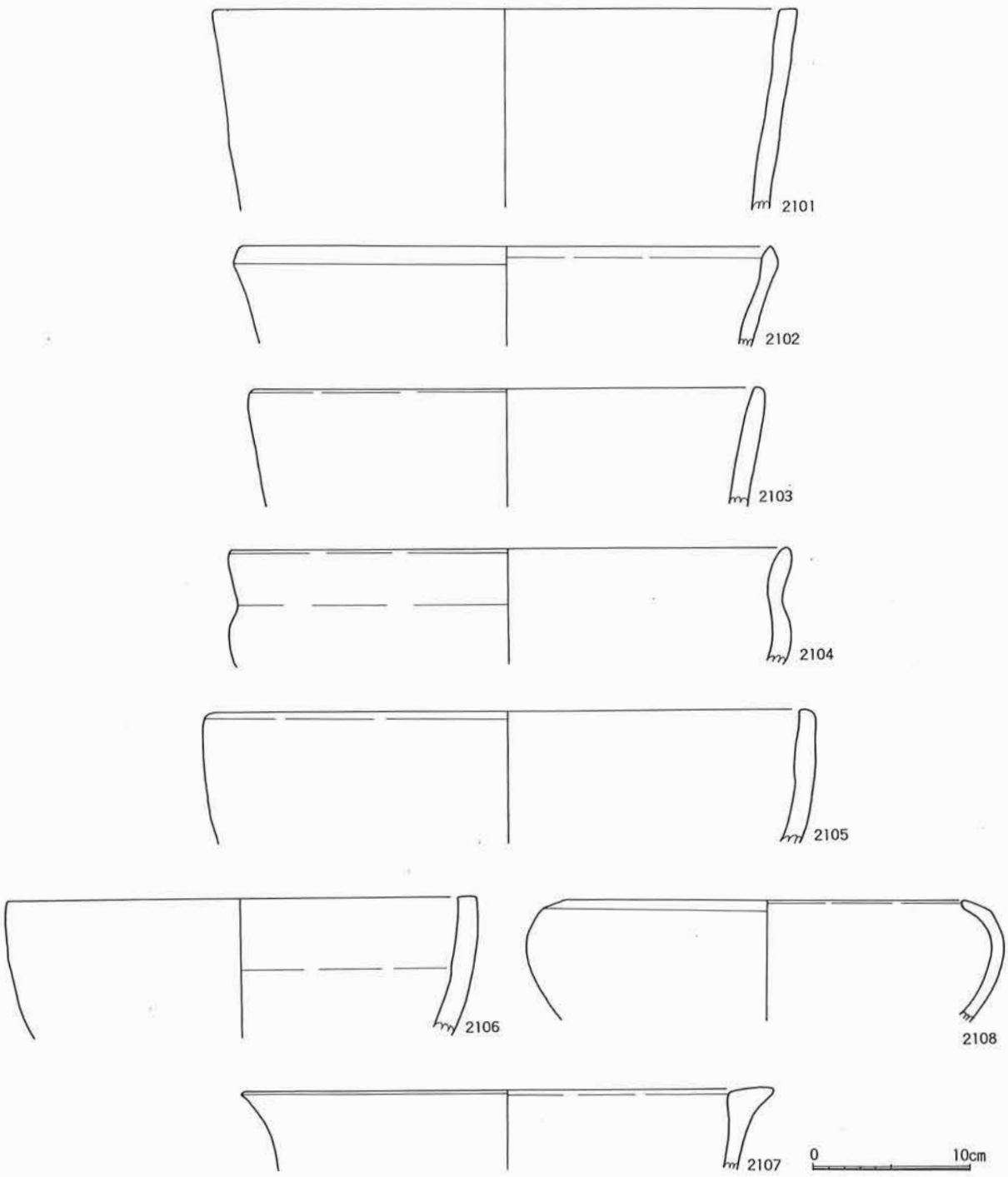
これらのなかで唯一器形が知れるものが③の1901である。口径40cmを超える大形の胴張り深鉢形土器で、胴部をナナメに規制なくなぐり書いた細いヘラ状の沈線で埋められるものである。口縁部は肥厚して、何単位かで小突起が付けられているようである。この突起のあり方や、赤褐色の色調と内外面の丁寧なミガキは堀之内式のそれと似ているものである。

なお、過去に本遺跡より後期後葉から晩期資料も出土したと聞くが（注１）、本調査の資料のなかでは、それとはっきり判断されるものはなかった。比較的はっきりとした清水天王山式土器や大洞系統の土器を出土する辰野遺跡を比較すると、それは斜面のごく狭い平



番号	出土区	器厚	文様	胎土	焼成	色調
1902	II	0.9	沈線	粗砂、長石	良	にぶい赤褐色
1903	V	0.9	沈線	粗砂、長石	良	黒褐色
1904	V	1.1	沈線	粗砂、長石	良	にぶい褐色

図－24　沈線文．縄文が施される土器実測図



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1901	II	深鉢形土器	堀之内?	—	(40.8)	—	胴部	1.1	細沈線	粗礫、長石	良	赤褐色	三角突起付
2001	II	深鉢形土器	——	—	(41.9)	—	—	1.2	RLR3段縄文	多粗砂、長石	良	にぶい赤褐色	補修孔
2002	II	深鉢形土器	——	—	(41.2)	—	—	1.0	R縄文	多粗礫	良	にぶい黄橙色	
2003	I	深鉢形土器	——	—	(29.1)	—	—	1.0	R縄文押圧、沈線	多粗礫	不良	にぶい黄橙色	
2004	V	深鉢形土器	——	—	(25.2)	—	—	0.8	LR縄文	多粗礫	不良	にぶい黄褐色	口縁部ナデ
2005	I	深鉢形土器	——	—	(25.5)	—	—	1.4	RL縄文	多粗礫、長石	良	にぶい黄褐色	口唇部施文
2006	II	深鉢形土器	——	—	(25.2)	—	—	0.8	LR縄文	多粗砂、長石、石英	不良	にぶい黄橙色	
2007	II	深鉢形土器	——	—	(18.5)	—	—	1.0	RL縄文	多長石、石英、砂	良	にぶい赤褐色	重量感有
2008	II	浅鉢形土器	——	—	(33.0)	—	—	1.1	RL縄文	多細砂	良	にぶい赤褐色	内面ミガキ
2101	V	深鉢形土器	——	—	(36.8)	—	—	1.1	ナデ	多粗礫	不良	にぶい赤褐色	内面ミガキ
2102	I	深鉢形土器	堀之内?	—	(34.4)	—	—	0.9	ミガキ	多粗砂	良	灰褐色	
2103	II	深鉢形土器	堀之内?	—	(32.6)	—	—	1.2	ナデ	多粗砂、長石	良	赤褐色	内面ミガキ
2104	V	浅鉢形土器	——	—	(35.8)	—	—	1.1	ナデ	多砂、長石	良	にぶい赤褐色	
2105	V	鍋形土器?	——	—	(38.8)	—	—	1.2	ナデ	多粗砂	良	にぶい赤褐色	
2106	II	鍋形土器?	——	—	(29.8)	—	—	1.3	ナデ	多粗礫	良	にぶい赤褐色	
2107	II	鍋形土器?	——	—	(33.6)	—	—	0.8	ナデ	多砂、長石	良	暗赤褐色	
2108	V	鍋形土器?	——	—	(25.3)	—	胴30.0	0.8	ナデ	砂、長石	良	暗灰黄色	

図－25　文様の施されない土器実測図

坦地を居住域にするなど、本調査区との立地条件の差は歴然としているもので（注２）、加曽利Ｂ１式の局地的な占地状況などからすると、それ以降はなおさらワンポイント的なものであったと思われるのである。

注1. 加藤学園考古学研究所 1983『駿豆地方の縄文土器集成』

注2. 富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の遺跡』

最終整理段階において沈線文が施される土器のなかに、特徴的な沈線が集合する３点の土器（1902～1904）が抽出された。時間的制約のなかで充分な検討ができず、ここに掲載してご教示を願う次第であります。

1902. 1903は波状口縁で口縁部が詰まったキャリパー状の器形が予想され、口唇が外側（1902）、内側（1903）から殺ぐように削られて特徴的である。1904もやはり波状口縁で口唇も角頭状に削られるが、湾曲度合いは前者より少ない。３点とも地文に条線は持たずに沈線を集合させるもので、口縁部の２本の横線を基本にそれ以下は弧線文風の円弧を並べたり、縦、斜めの区画を沈線を集合させて埋めたりもしている。1903の沈線は丸棒状の工具の先端で最もはっきり描かれ、1902はバラケ気味、1904は完全にバラケたハケ状の沈線となっている。器厚は１cm内外、胎土は粗砂中に長石粒を混じえ、色調も黒褐色から暗褐色でこの地域の曽利式や加曽利Ｅ式土器に近いものである。

20. 縄文が施される土器（図－24）

縄文が施される土器はこの時代の代名詞にされるように全般に亘って存在し、本遺跡における資料点数（口縁部破片、以下同じ）も多い。資料の大半は直線的に外方に開いていく単純な平口縁のもので、口径が40cmを超えるものも目立ち（2001. 2002）、その予想される容量は煮沸用容器にふさわしい。また以外にバラエティーに富んだ器形にも及んでいて「く」字状に外反する口縁をもつものや（2004～2007）、浅鉢（2008）の例もある。この浅鉢の内面は外面の縄文の凸凹した感じと反比例するように非常に良く磨かれている。このようななかには2004のように堀之内式、2005のように曽利式に似た器形を窺えるものもあるが、その殆どが前述するような単純な器形のため、帰属関係を探るのは困難ではっきりしないことが多い。従来、こうした土器は後述する無文土器と共に煮沸用の粗製土器に判断されて、精製土器への関心に比べ等閑視され、また単純に後期から晩期にかけて存在が一般化されるものとしてきたが、近年では早、前期まで遡って認知しているケースもあり、中期後半の存在も伊豆地方で追求されている（注）。とすれば、本遺跡の隆盛時においてもそうした粗製土器の使用も充分予想され、縄文の施される土器と文様の施されない無文の土器を併せた数字が、型式の知れる資料点数とおよそ対等していることもうなずける。つまり数字から見ると、決して従属的な立場にあるものではなく、また調査区別分布状況にも隔たりがないことから、これらはそれぞれの時期に万遍なく併存していたと思われるのである。

注. 金子浩之 1996「伊豆地方における縄文時代中期後半の粗製土器」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会

21. 文様の施されない土器（図－25）

ナデ、ミガキなどで器面を調整して、意図的な文様が施されない土器（以下、無文土器）である。これらは擦痕が残り、あたかも粗製土器を語れるものが大半であるが、丁寧なミガキが施されるものもあり一様ではない。また口縁部だけを対照にしていることもあり、曽利式土器の優勢地域である第Ⅲ調査区に出土比率が高くなるなど、器形の特徴にも左右されている。そうした特徴的な部分を除くと縄文の施される土器より量的には下回り、粗製土器内における縄文が施される土器との比率はそれに及ぶことはなかったようである。

このなかで最も資料を占めるのは平口縁の大型深鉢形土器である。しかし40cmの口径を超えるものはなく、沈線、縄文の施される土器のそれらより幾分小振りである。2101が器面をナデによって調整する最も一般的なもので、2102に擦痕が残り、2103が内外面とも丁寧にナデられるものである。2102の口縁部のヨコナデ、2103のミガキは堀之内式土器のなかに似たものを見る。この無文土器の特徴は2104のような浅鉢の資料が多いこともあるが、その中間形と言うべきか、深鉢より浅いいわゆる鍋様の土器が目立つこともある。いずれも小破片で全体を捉えられないが、2105.2106のように「サラダボール」状の球形の胴部のものが一般形で、2107のように口縁部を厚く縁取りしたり、2108のように口縁部が内湾してつぼむものなど、バラエティーに富むものである。後期後半から晩期にかけて深鉢の丈が短くなる傾向にあるが、おそらくその時期まで下らないこれらの土器が煮沸用の土器であるとすれば、これまでに言われた深鉢型土器一辺倒の食物調理に一考を投げかけているのかも知れないのである。

22. 底　　部

確認される底部は0101の尖底を除くと、全て平底で

2,075点（完存、破片を全て含める）である。小破片ではっきりしないものも多いが、それらは全て円形のものと思われる。第Ⅱ調査区の出土が全体のおよそ47％を占め半数近い。以下、第Ⅴ調査区、第Ⅰ調査区と続く。これは第Ⅰ調査区の包含層が薄いこと、第Ⅴ調査区の弥生時代遺構が縄文時代包含層に深く及んでいることなど、遺物包含層の容量の差と思われる。それぞれの内容は平らにナデられているもの（以下、平滑底）が1,437点およそ70％、網代底が601点およそ30％と、殆どこの両者で占められ、木葉痕の残る底部は37点、２％にも及ばないでいる。このなかには第Ⅲ調査区のように網代底が皆無に近い地点があるなど、網代底の占めるパーセンテージが本遺跡全体のなかに占める後期の土器のあり方を暗示しているのか、興味深い数字を示している。

	平滑	網代	木葉	計
Ⅰ区	273	101	6	380
Ⅱ区	625	324	16	965
Ⅲ区	140	8	2	150
Ⅴ区	399	168	13	580
計	1,437	601	37	2,075

ここで2,075点の底部片から何個体の土器が復原されるか検討して見たい。資料数の多い第Ⅱ調査区を例に挙げたい。第Ⅱ調査区より出土した底部の完存品は８点、その略完存品が12点で、20個体はすでに数えられる。残りの945点の破片を１個体のうちに占める割合で数を拾い、それらが１個体になった個数を拾うと以下である（小数点以下、四捨五入）。

破片割合	× 点数	＝ 個体数
3／4	36	27
2／3	18	12
1／2	43	22
1／3	92	31
1／4	203	51
1／5	115	23
1／0	87	15
1／8	143	18
1／10	58	6
1／12	113	9
1／12以上	37	—
計	945	214

第Ⅱ調査区の945点の底部破片は214個体に復原できる。これに除いていた完存、略完存の20個体を加えると、965点中234個となり、つまりこれは4.12破片で１個体が復原されることになる。これを本調査で知れた2,075点の底部破片にあてると、503個体の土器が復原されるのである。

第Ⅰ調査区　380点÷4.12＝ 92個体
第Ⅱ調査区　965点÷4.12＝234個体
第Ⅲ調査区　150点÷4.12＝ 36個体
第Ⅴ調査区　580点÷4.12＝141個体
計　2,075点÷4.12＝503個体

23. 土器の出土について（図－26.27）

本調査で得た土器片は通常のポリコンテナに200箱以上で収蔵されている。そのなかから先ず、復原可能な土器を探し、そして、マッチ箱以上の大きさで口縁部破片と底部破片を全て拾い出した。その数値が以下である。（胴部）

型式名	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
1.早期前半縄文		(2)			(2)
2.早期前半の無文		1	14		15
3.清水ノ上		7	1		8
4.木 島				(1)	(1)
5.関 山	(1)	(1)			(2)
6.諸 磯			1	1	2
7.北裏Ｃ１	2	35	1	7	45
8.五領ヶ台	4	93	2	42	141
9.北屋敷	4	19	8	6	37
10.勝 坂	78	186	28	72	364
11.曽 利	121	299	164	126	710
12.加曽利Ｅ	40	91	5	45	181
13.称名寺	54	42	5	5	106
14.三十稲場	1	1		1	3
15.堀之内	340	757	55	464	1,616
16.縁帯文系	2	8		13	23
17.付加条縄文	111	234	5	143	493
18.加曽利Ｂ	2	31		3	36
19.沈線文	36	80	20	57	193
20.縄 文	132	370	41	295	838
21.無 文	127	276	67	110	580
22.底 部	380	965	150	580	2,075
計	1,435(1)	3,509(3)	553	1,969(1)	7,456 (5)

これを発掘調査区別に発掘面積をあてると以下の割合になる（胴部破片を除く）。

	面積㎡	（％）	土器出土数	（％）
Ⅰ区	540	(46)	1,435	(19)
Ⅱ区	250	(21)	3,509	(47)

Ⅲ区	100	(9)	553	(8)
Ⅴ区	280	(24)	1,969	(26)
計	1,190	(100)	7,456	(100)

これを見ると先ず、第Ⅲ・Ⅴ調査区が面積、土器量とも数値が近く平均的であることに比べ、第Ⅰ・Ⅱ調査区の変動が大きいことに気付く。これは第Ⅰ調査区の発掘容量が足りなかったためと（注）、第Ⅱ調査区が第Ⅴ調査区と同じような発掘面積にも関わらず、2倍近い土器量をもつのは、第Ⅴ調査区が全面に亘って弥生時代遺構に重複を受けているのに対して、第Ⅱ調査区はそれ程ではなく、遺物包含層の残存容量が多かったためのものと思われる。

従って単純に調査区面積と土器出土量は比較できないことを知り、次に上記の口縁部破片出土量と復原された底部個数をあたると以下の結果を得る。

	口縁部数（%）		底部個数（%）	
Ⅰ区	1,055	(20)	92	(18)
Ⅱ区	2,544	(47)	234	(46)
Ⅲ区	403	(7)	36	(7)
Ⅴ区	1,389	(26)	141	(28)
計	5,391	(100)	503	(100)

ここで知るように口縁部破片数と底部復原個数の比率は殆ど同じである。つまり、このことは口縁部破片が発掘された遺物包含層の容量（発掘容積）のなかで、それに内蔵されている土器そのものの実体を表していると理解するべきであり、それらの実数が調査区毎の発掘容積の差を御破算にした、本遺跡のそれぞれの時代の消長を反映しているものとして良いと思われるのである。

なお、この後は帰属のはっきりしない沈線文、縄文、無文の土器を除いた3,780点の口縁部破片を対象とする。

先ず、全体の出土量は前述してあるから100点以上の出土量をもつ7位まで拾うと、①堀之内式土器1,616点（43%）②曽利式土器710点（19%）③付加条縄文土器493点（13%）④勝坂式土器364点（10%）⑤加曽利E式土器181点（5%）⑥五領ヶ台式土器141点（4%）⑦称名寺式土器106点（3%）である。ここでは改めて堀之内式土器の圧倒的な出土量を知るばかりではなく、それに併行する付加条縄文土器を合わせると56%に達して全体量の過半数を占めるなど、このあまりの異常な高値に限度を超えた文化の隆盛が崩壊寸前の飽和状態にあることも感ずるのである。

そして、これらを調査区別に分けると次の結果も得る（○内番号は上記土器番号と同じ）。

Ⅰ区 760点 ①340点(45%) ②121点(16%) ③111点(15%) ④78点(10%) ⑤40点(5%) ⑥4点(0.5%) ⑦54点(7%)

Ⅱ区 1,818点 ①757点(42%) ②299点(16%) ③234点(13%) ④186点(10%) ⑤91点(5%) ⑥93点(5%) ⑦42点(2%)

Ⅲ区 275点 ①55点(20%) ②164点(60%) ③5点(2%) ④28点(10%) ⑤5点(2%) ⑥2点(0.5%) ⑦5点(2%)

Ⅴ区 927点 ①464点(50%) ②126点(14%) ③143点(15%) ④72点(8%) ⑤45点(5%) ⑥42点(5%) ⑦5点(0.5%)

この結果を調査区毎にまとめると、

第Ⅰ調査区　称名寺式土器の出土率が高く、五領ヶ台式土器のそれが低い。

第Ⅱ調査区　全体比率と殆ど同じである。

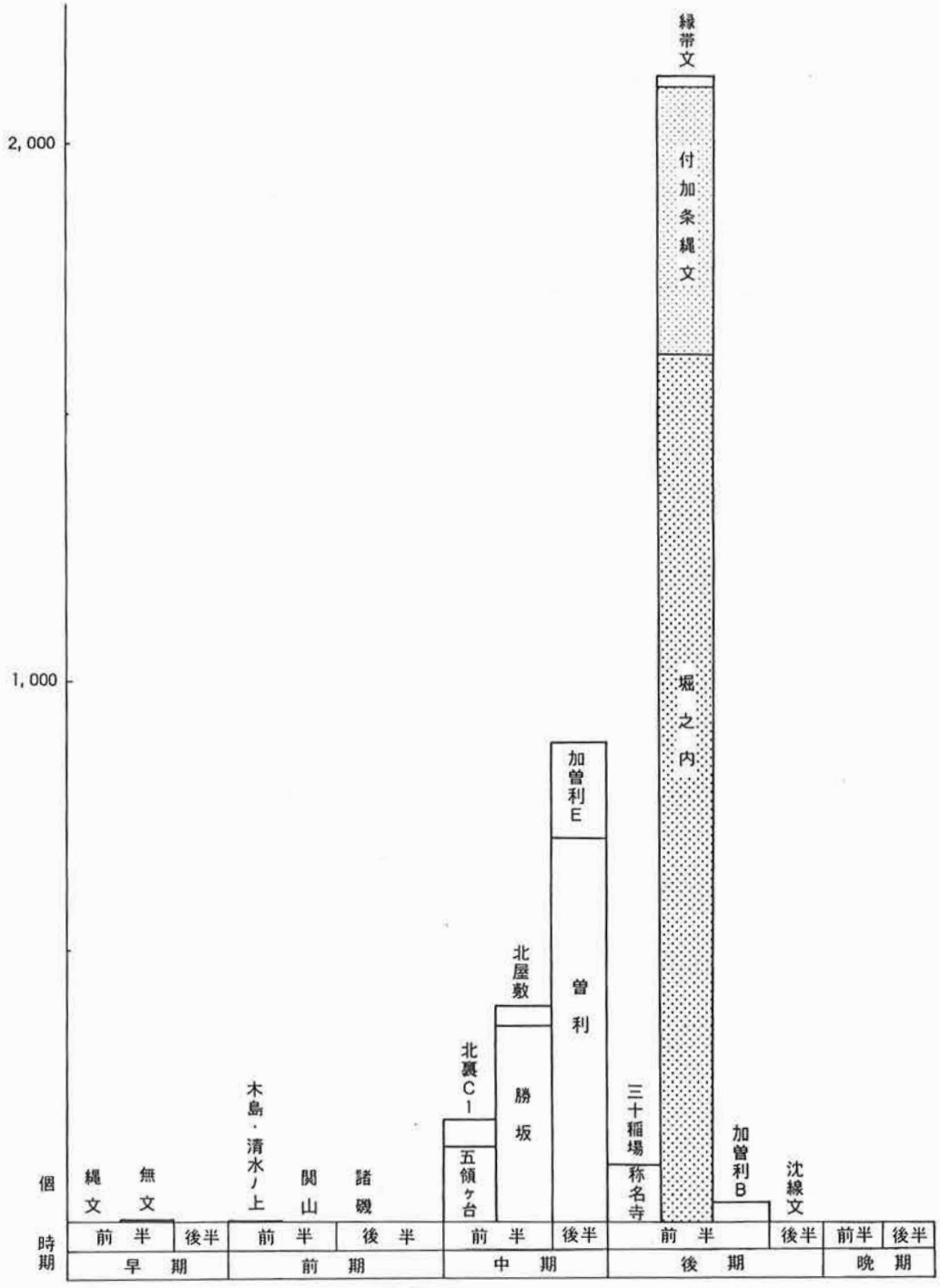
第Ⅲ調査区　曽利式土器と勝坂式土器の出土比率が異常に高い。

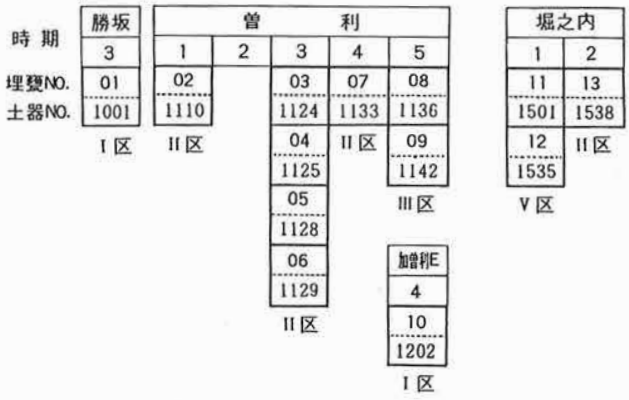
第Ⅴ調査区　堀之内式土器が半数を占め、勝坂式土器、称名寺式土器の出土比率が低い。

と言うようにそれぞれの調査区でそれぞれの違いを見出すことができる。そしてこれを総括すると、先ず第Ⅰ調査区の発掘調査が下層面まで達していなかったことを、上層の堀之内式土器から勝坂式土器まで平均的な出土比率を示していながら、五領ヶ台式土器で急に途絶えることから知れ、それから曽利式土器から勝坂式土器が第Ⅴ調査区にあまり影響せず、逆に堀之内式土器が第Ⅲ調査区に殆ど影響しないと言う分布状況の違いもはっきりしてくるのである。

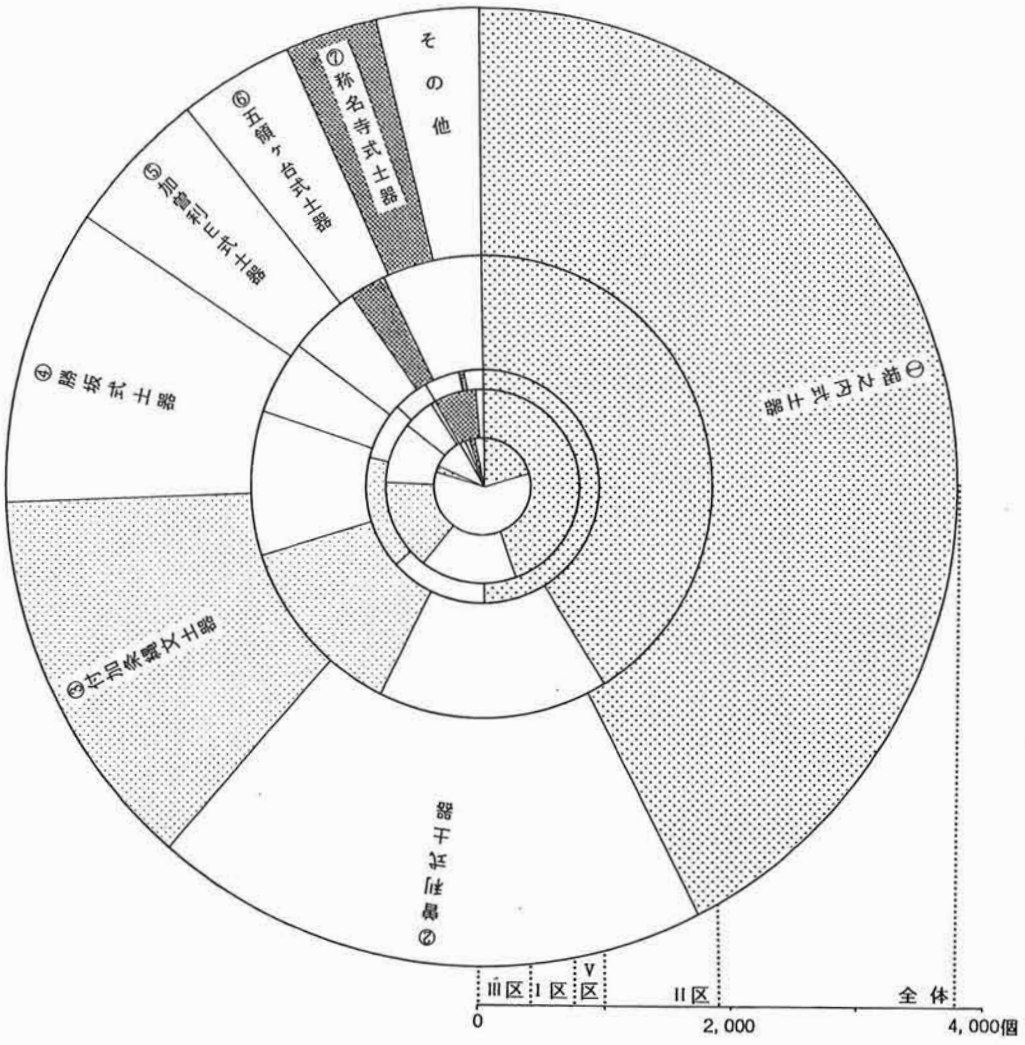
埋甕の分布も、勝坂式土器を使用するものが第Ⅰ調査区に埋甕01、曽利式土器を使用するものが第Ⅱ調査区で埋甕02～埋甕07、第Ⅲ調査区で埋甕08．09。加曽利E式土器を使用するものが第Ⅰ調査区で埋甕10。堀之内式土器を使用するものが第Ⅴ調査区で埋甕11．12、第Ⅱ調査区で埋甕13というように土器の分布状況に完全にならって構築されているのである。

注．富士宮市教育委員会 1977 「滝戸遺跡発掘調査(第Ⅰ次)概報」
「D 縄文期遺構 ロ、下層面の配石遺構ぎに縄文期下層面についてみよう。…… 本下層面は､残念ながら期日等の関係で全域の調査ができなかったが､…… 」

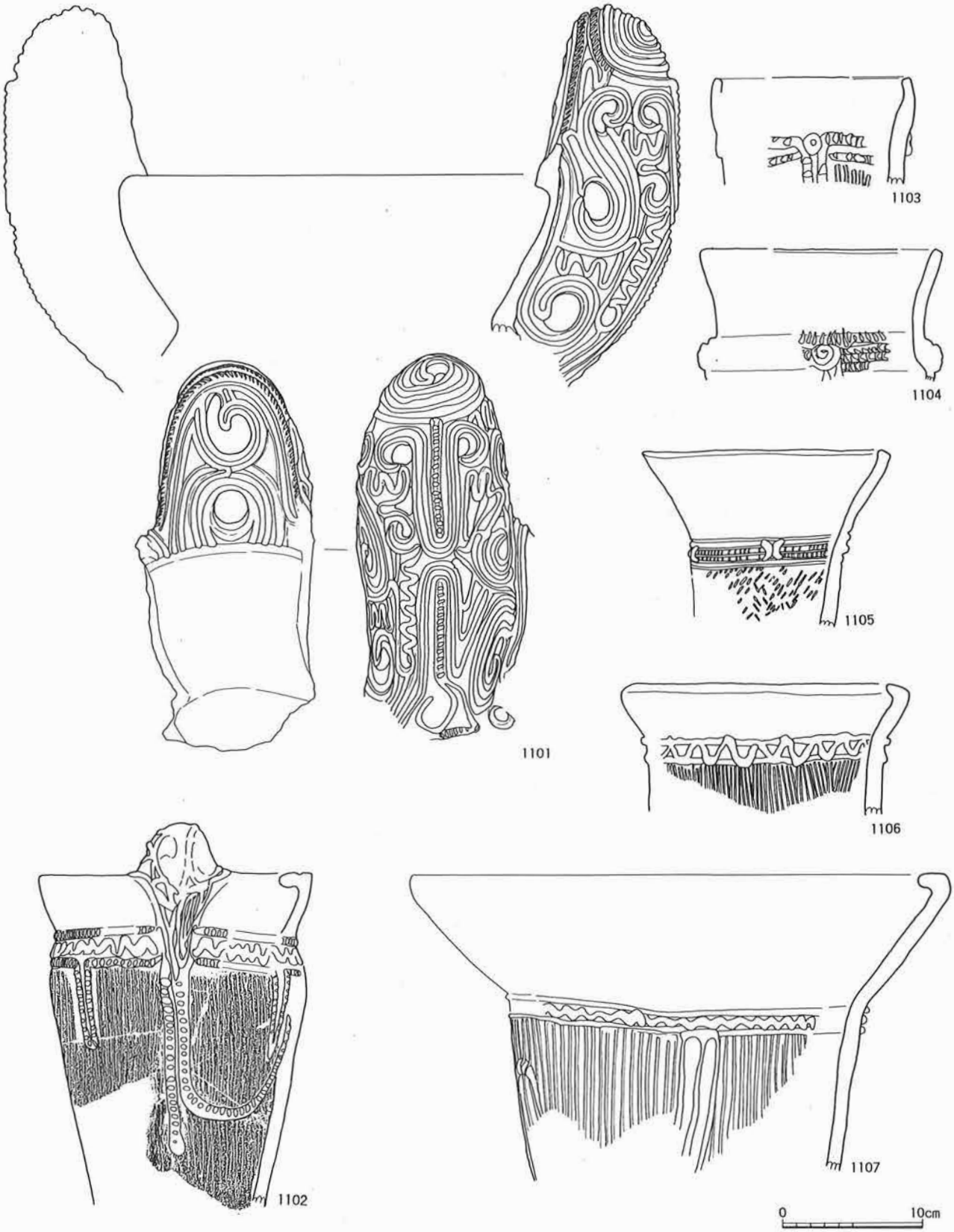




図－26　口縁部破片と埋甕の時期別分布

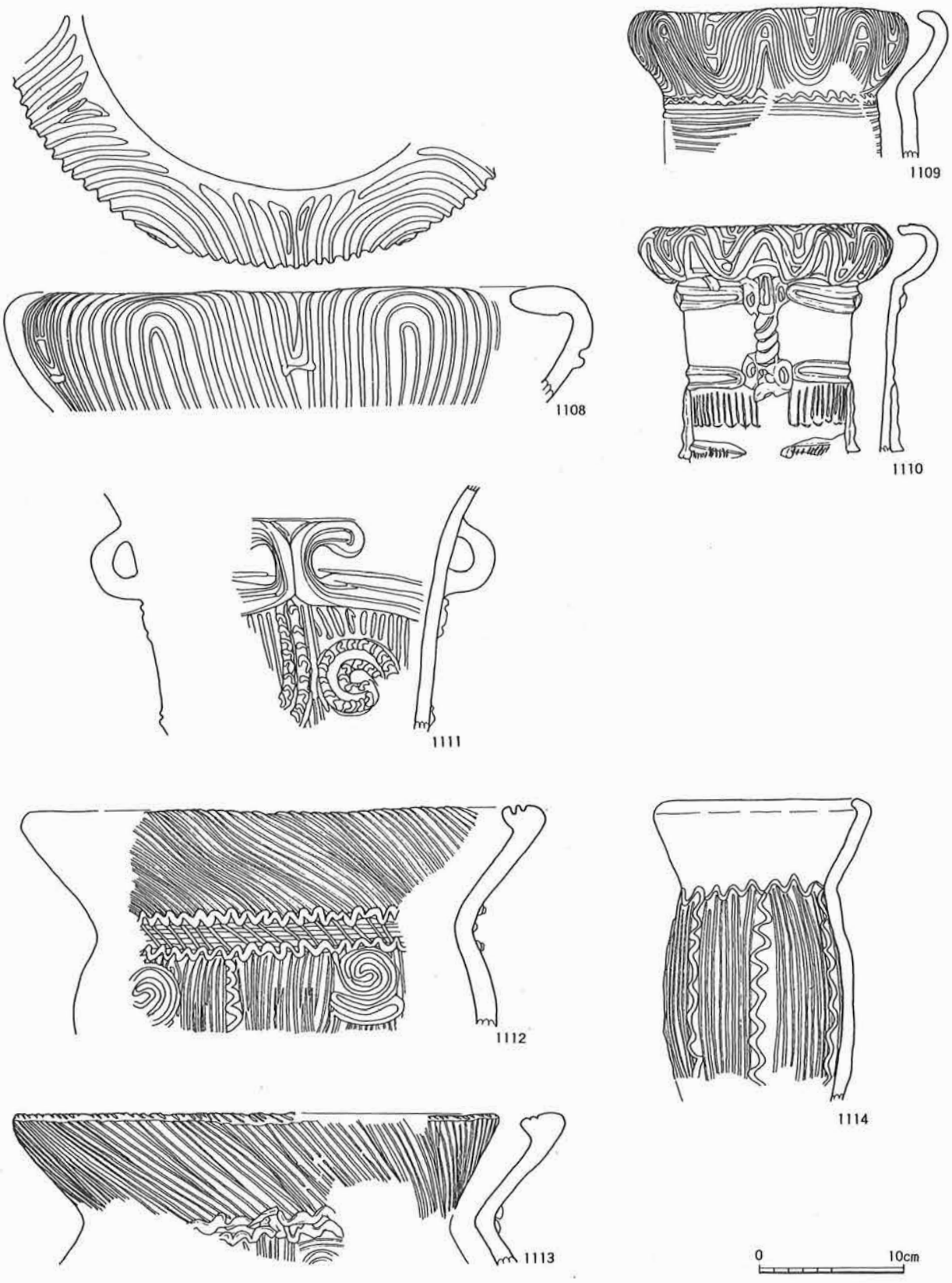


図－27　口縁部破片調査区別出土比率



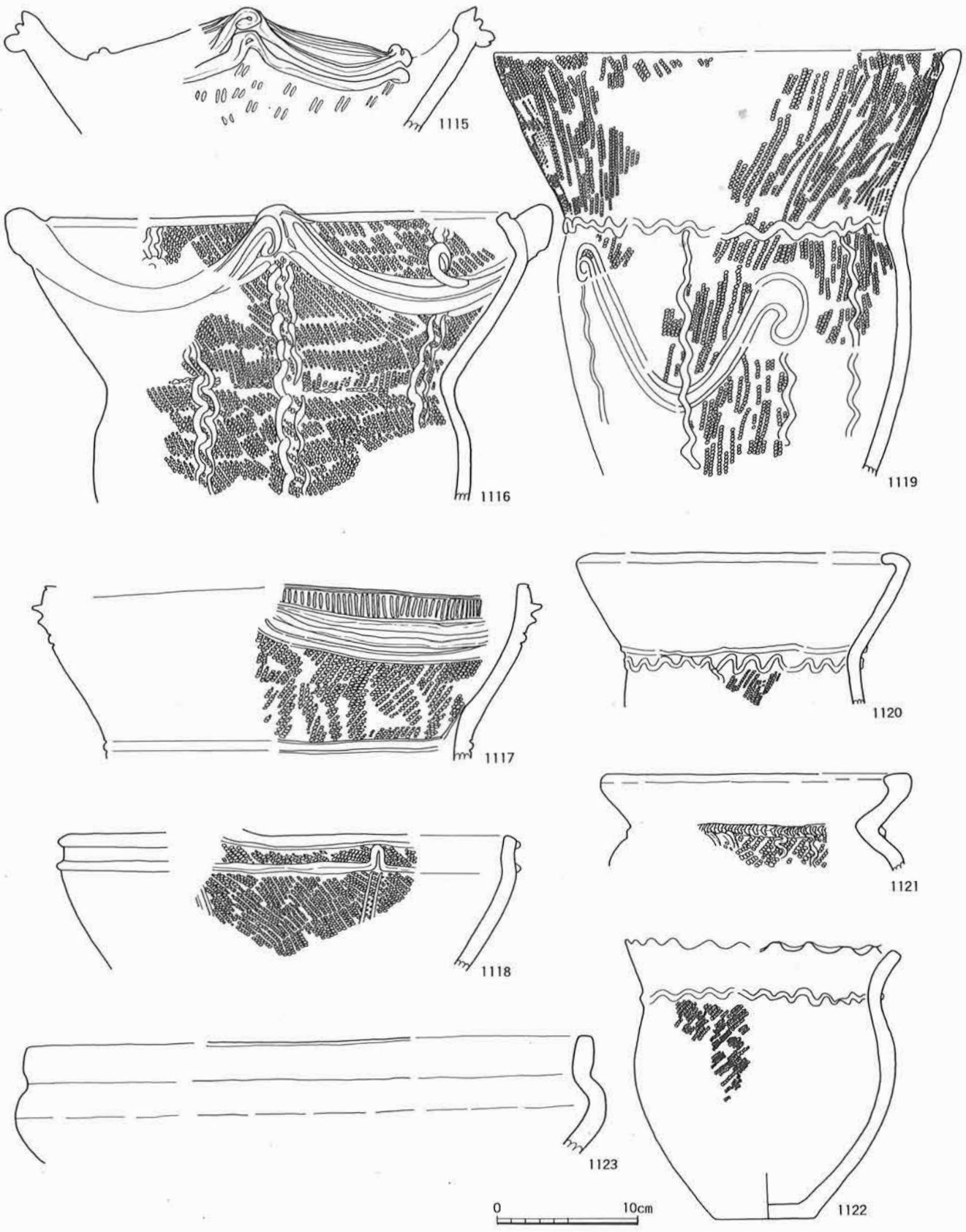
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1101	表採	深鉢形土器	曽利	—	(31.0)	—	口縁部	1.4	隆帯、沈線文	多粗砂	良	にぶい褐色	戦後表採大把手
1102	I	深鉢形土器	曽利	—	(19.5)	—	口縁部	1.0	隆帯、条線文	砂(精選)	良	にぶい赤褐色	把手付
1103	V	深鉢形土器	曽利	—	(15.0)	—	口縁部	1.1	隆帯、沈線文	細砂	良	にぶい褐色	
1104	III	深鉢形土器	曽利	—	(17.4)	—	頸部	1.0	隆帯、刺突文	粗砂	良	暗赤褐色	
1105	I	深鉢形土器	曽利	—	(18.0)	—	口縁部	0.8	隆帯、沈線、撚糸圧痕	細砂	良	にぶい赤褐色	
1106	III	深鉢形土器	曽利	—	(20.8)	—	口縁部	1.1	隆帯、沈線文	細砂	良	にぶい橙色	
1107	I	深鉢形土器	曽利	—	(38.4)	—	口縁部	1.1	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	暗赤褐色	

図－28　曽利式土器実測図－1



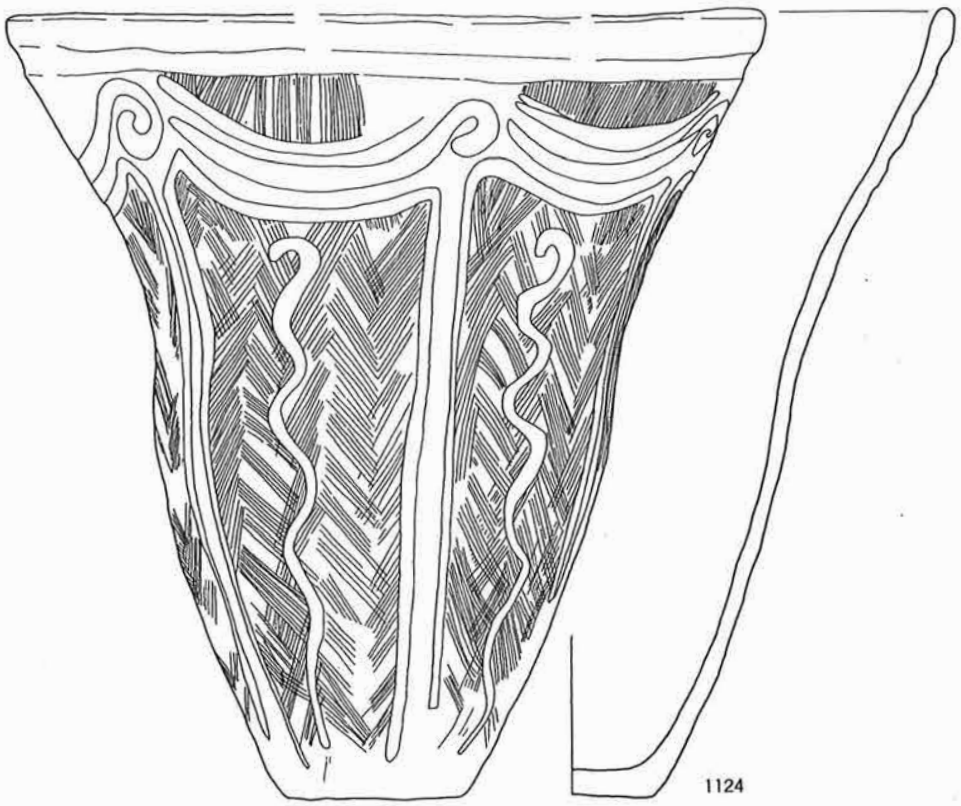
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1108	II	深鉢形土器	曽利	—	(40.0)	—	口縁部	1.1	隆帯、沈線文	粗砂	良	にぶい黄橙色	
1109	II	深鉢形土器	曽利	—	(19.0)	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	細砂	良	暗赤褐色	
1110	II	深鉢形土器	曽利	—	18.0	—	口縁部	0.8	隆帯、沈線文	細砂	良	暗赤褐色	埋甕02
1111	III	深鉢形土器	曽利	—	—	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	粗砂	良	赤褐色	
1112	V	深鉢形土器	曽利	—	(36.5)	—	口縁部	1.4	隆帯、沈線文	細砂	良	にぶい黄橙色	
1113	II	深鉢形土器	曽利	—	(33.5)	—	口縁部	1.1	隆帯、沈線文	粗砂、長石	良	にぶい橙色	

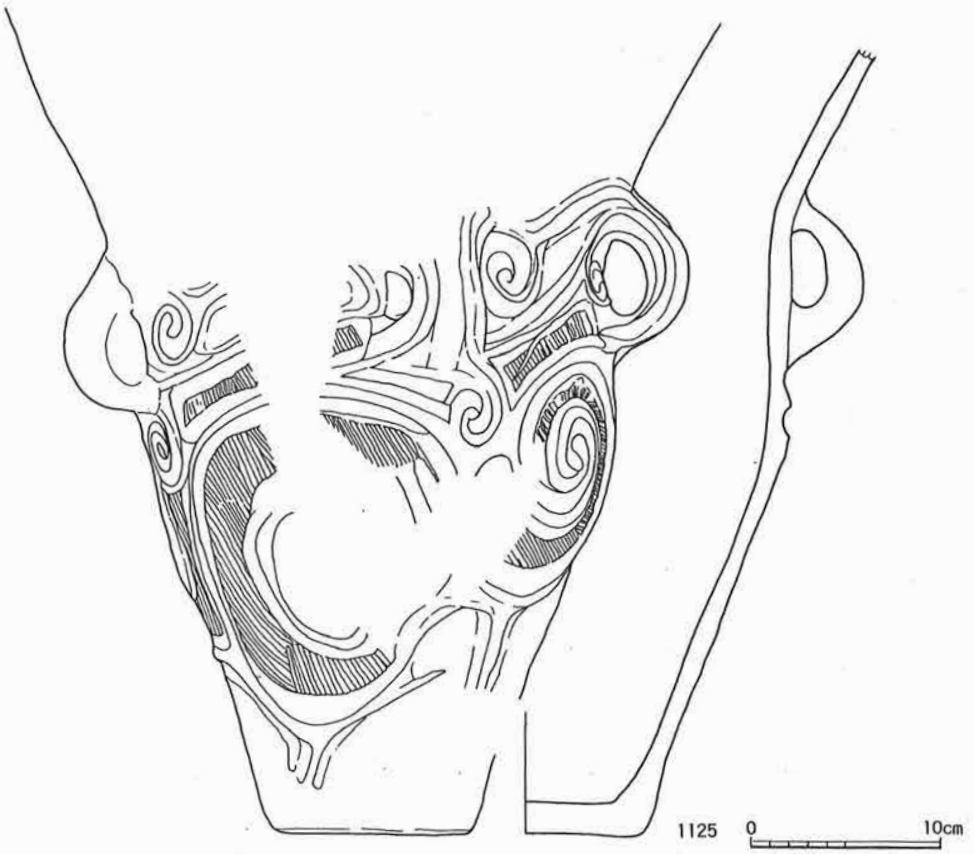
図－29　曽利式土器実測図－2



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1114	I	深鉢形土器	曽利	—	15.2	—	口縁部	0.9	隆帯、沈線文	細砂	良	にぶい橙色	
1115	III	深鉢形土器	曽利	—	(34.0)	—	口縁部	1.1	隆帯、沈線文	多粗砂	良	にぶい赤褐色	
1116	V	深鉢形土器	曽利	—	(38.5)	—	口縁部	1.0	隆帯、沈線文、縄文RL	多砂	良	暗赤褐色	
1117	I	深鉢形土器	曽利	—	(36.0)	—	口縁部	1.2	隆帯、沈線文、縄文RL	多粗砂	良	にぶい赤褐色	
1118	V	深鉢形土器	曽利	—	(33.0)	—	口縁部	1.0	隆帯、沈線文、縄文LR	多粗砂	不良	にぶい黄褐色	
1119	I	深鉢形土器	曽利	—	33.3	—	口縁部	1.0	隆帯、縄文RL	細砂	良	暗赤褐色	
1120	V	深鉢形土器	曽利	—	(24.0)	—	口縁部	0.8	隆帯、縄文LR	細砂	良	にぶい褐色	

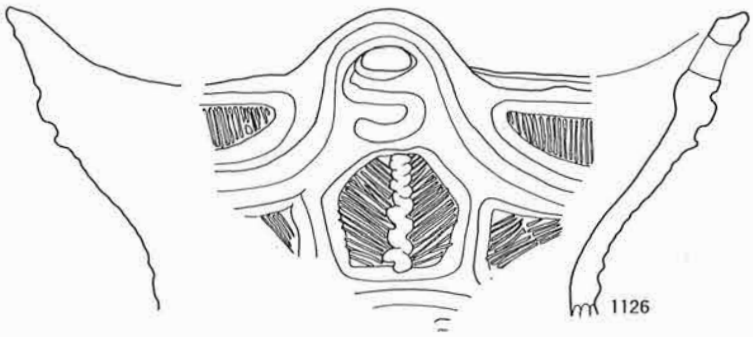
図－30　曽利式土器実測図－3

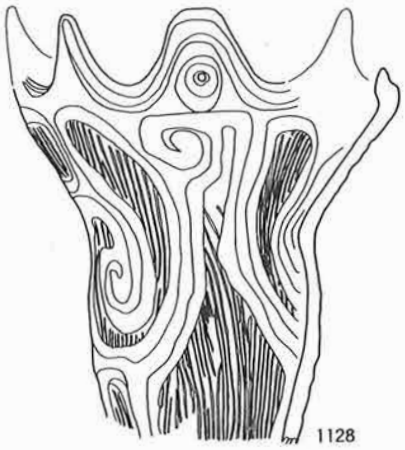


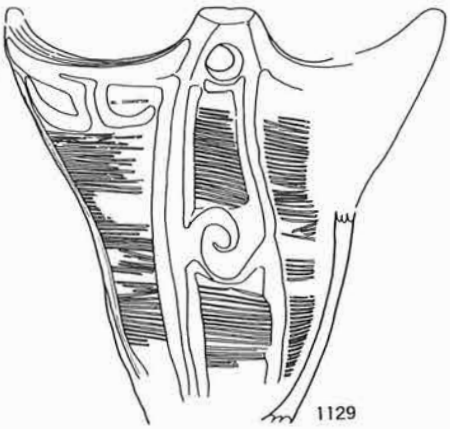


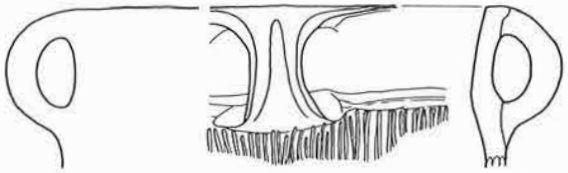
番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1121	V	深鉢形土器	曽利	—	(22.0)	—	口縁部	1.0	隆帯、縄文RL	粗砂	良	にぶい橙色	
1122	I	深鉢形土器	曽利	20.0	19.7	7.2	口縁部	0.9	隆帯、縄文RL	粗砂	良	暗赤褐色	
1123	I	浅鉢形土器	曽利	—	(20.2)	—	肩部	1.3	無　文	多粗砂	良	暗赤褐色	
1124	II	深鉢形土器	曽利	41.6	40.4	9.5	口縁部	0.8	低隆帯、条線文	多粗砂	良	暗赤褐色	埋甕03
1125	II	深鉢形土器	曽利	—	—	10.7	口縁部	1.0	低隆帯、条線文	多粗砂	良	極暗赤褐色	埋甕04
1126	II	深鉢形土器	曽利	—	(39.0)	—	口縁部	1.1	低隆帯、沈線、条線	多粗砂、長石	良	明赤褐色	

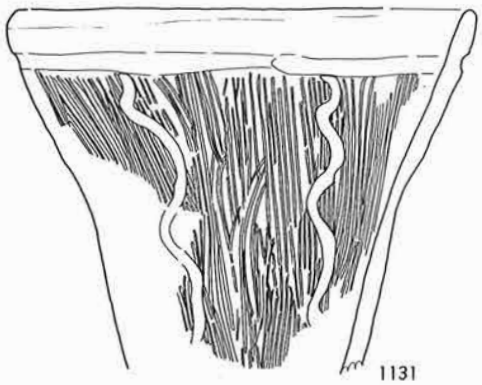
図－31　曽利式土器実測図－4

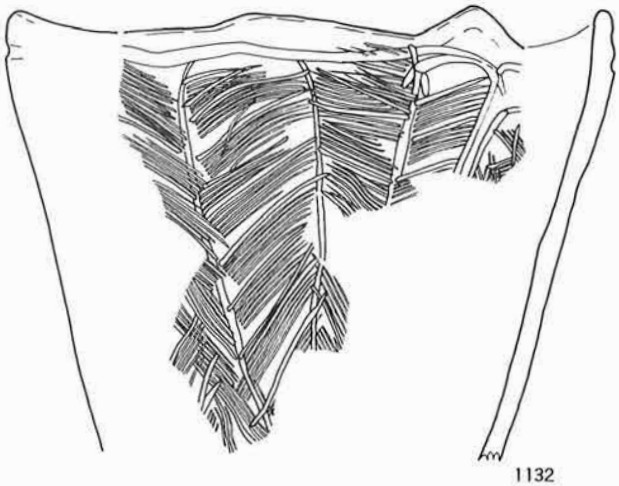


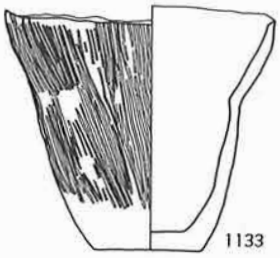






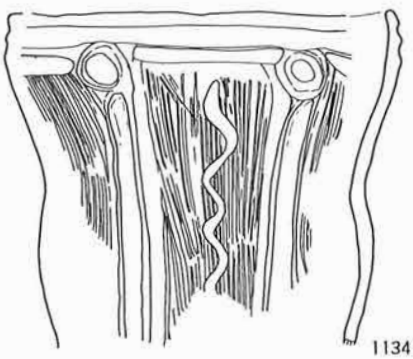


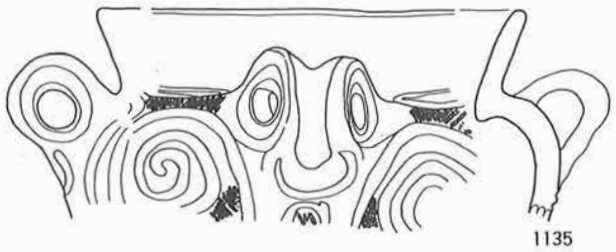


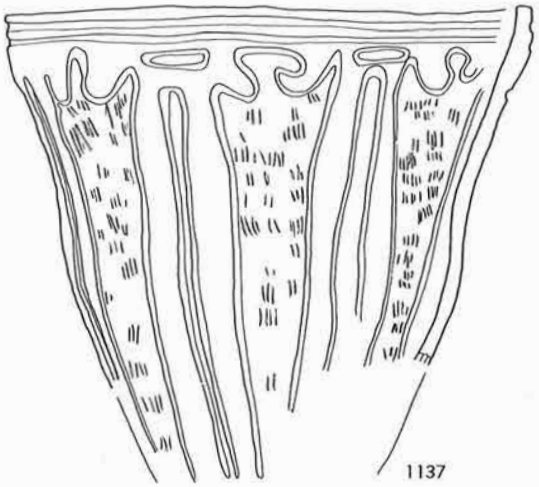


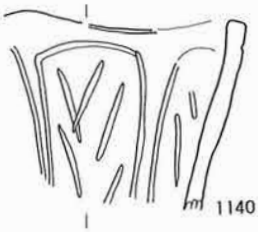
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1127	II	深鉢形土器	曽利	—	(22.0)	—	口縁部	0.8	低隆帯、沈線、条線	多砂、長石	良	暗赤色	
1128	II	深鉢形土器	曽利	(25.0)	20.9	—	口縁部	0.9	低隆帯、条線文	多粗砂	良	にぶい赤褐色	埋甕05
1129	II	深鉢形土器	曽利	(23.0)	23.3	(7.5)	口縁部	0.8	低隆帯、条線文	細砂	良	暗赤色	埋甕06
1130	III	鉢形土器？	曽利	—	(23.5)	—	胴部	1.0	低隆帯、沈線文	粗砂	良	にぶい赤褐色	
1131	I	深鉢形土器	曽利	—	(25.0)	—	口縁部	1.0	太沈線、条線	粗砂	良	にぶい橙色	
1132	V	深鉢形土器	曽利	—	(32.0)	—	口縁部	1.0	沈線、条線	多粗砂	良	にぶい褐色	
1133	II	深鉢形土器	曽利	13.0	14.3	5.5	口縁部	0.7	条線	多粗砂	良	暗赤褐色	埋甕07

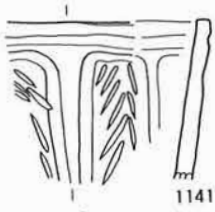
図－32　曽利式土器実測図－5

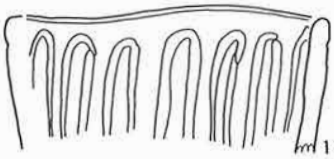


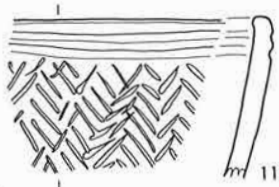


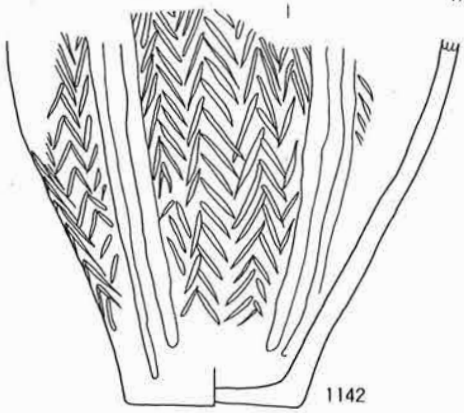


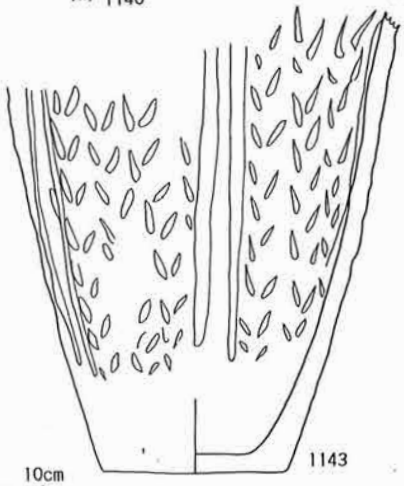






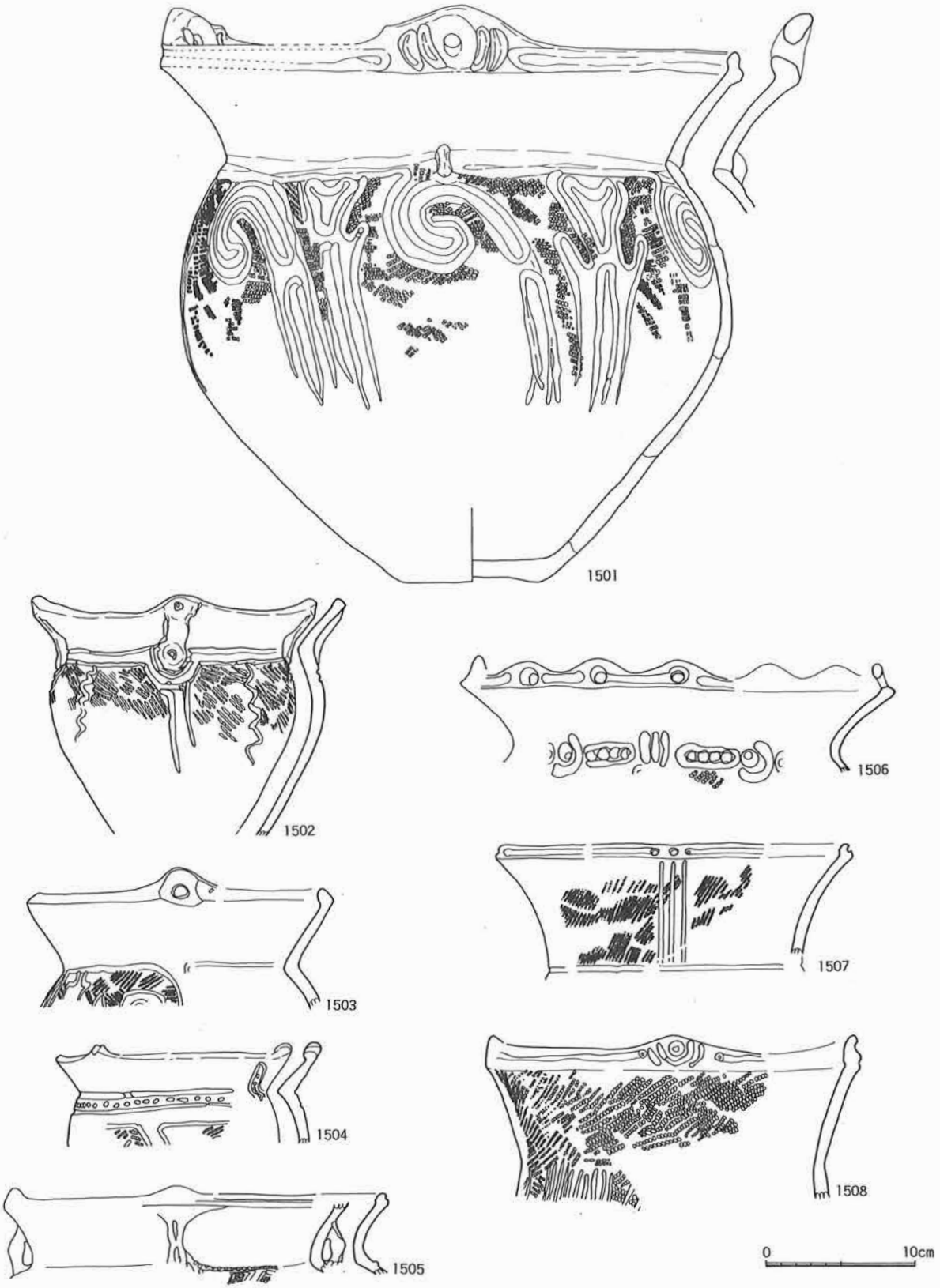






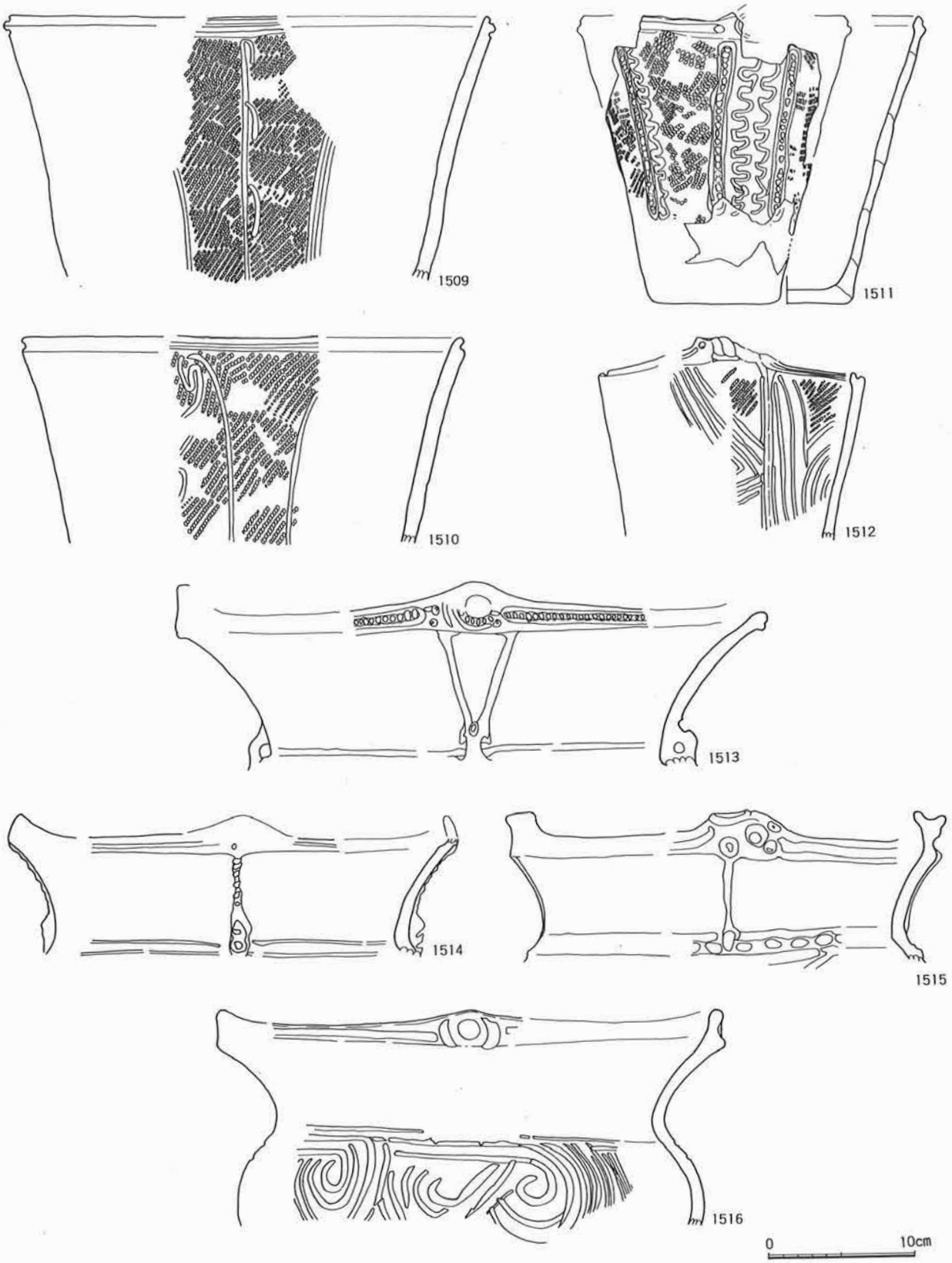
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1134	II	深鉢形土器	曽利	—	(21.0)	—	口縁部	0.6	低隆帯 条線	多粗砂	良	にぶい赤褐色	
1135	III	広口壷形土器	曽利	—	(22.5)	—	口縁部	1.1	太沈線、縄文LR	粗礫、長石	良	赤褐色	
1136	III	深鉢形土器	曽利	(27.0)	23.3	(7.5)	口縁部	1.0	太沈線、綾杉文	多細砂	良	暗赤褐色	埋甕08
1137	V	深鉢形土器	曽利	—	28.0	—	(32.0)	0.8	低隆帯、沈線、櫛描	多粗砂	良	にぶい褐色	
1138	III	深鉢形土器	曽利	—	(17.0)	—	口縁部	0.8	太沈線	粗砂	良	にぶい赤褐色	
1139	II	深鉢形土器	曽利	—	—	—	口縁部	1.1	太沈線、綾杉文	多粗砂	不良	にぶい黄褐色	
1140	II	深鉢形土器	曽利	—	—	—	口縁部	0.9	沈線、連八文	多粗砂、長石	良	赤褐色	弱い波状口縁
1141	V	深鉢形土器	曽利	—	—	—	口縁部	0.9	太沈線、連八文	粗砂	良	赤褐色	
1142	III	深鉢形土器	曽利	—	—	8.6	—	1.1	太沈線、連八文	多粗砂、長石	良	にぶい褐色	埋甕09
1143	II	深鉢形土器	曽利	—	—	9.4	—	1.0	太沈線、連八文	多粗砂、長石	良	にぶい暗赤褐色	

図－33　曽利式土器実測図－6



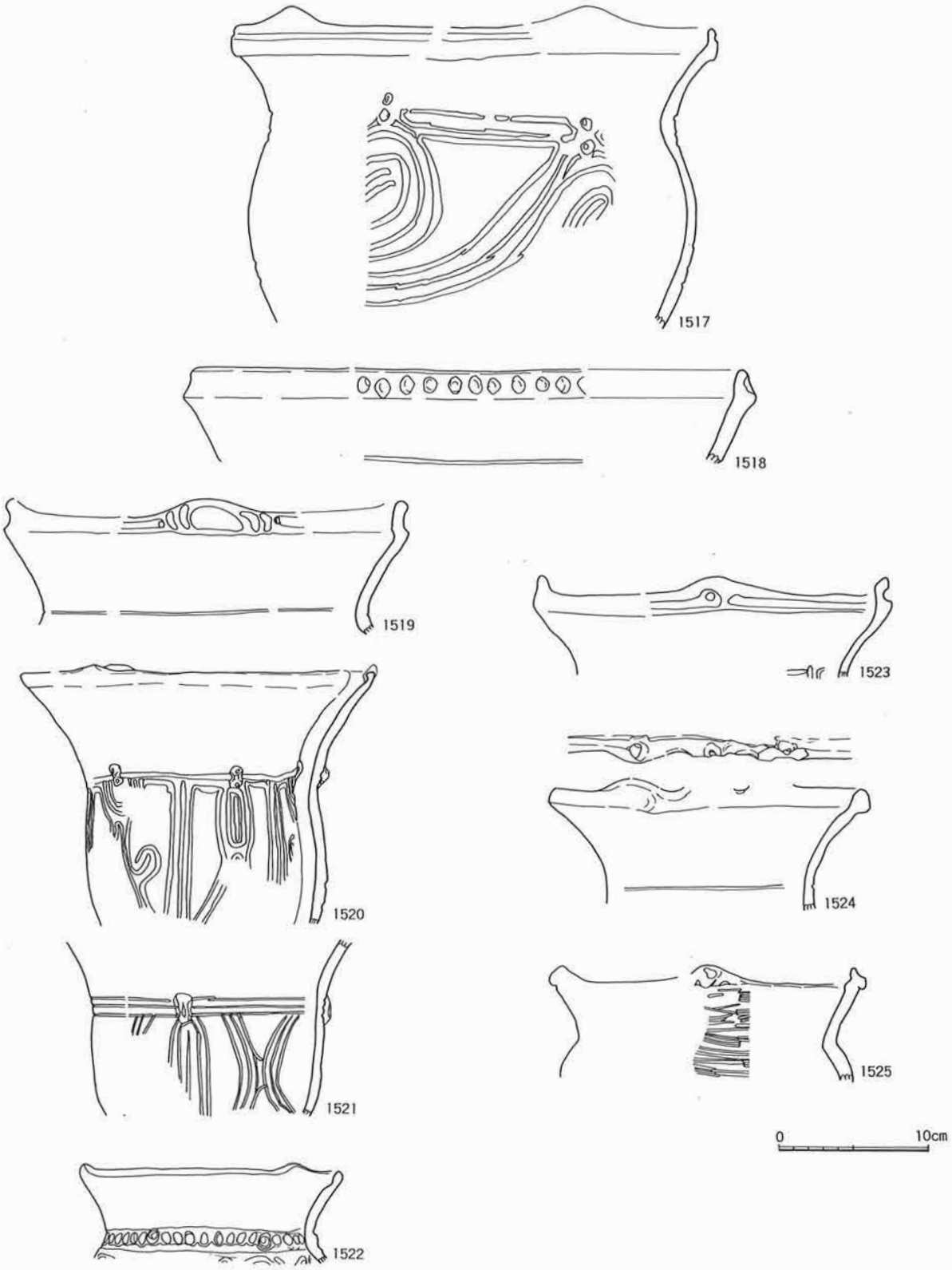
番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1501	V	深鉢形土器	堀之内	38.6	38.5	9.7	口縁部	1.1	沈線、RL縄文、貼付文	多砂、長石	良	赤褐色	埋甕11
1502	I	深鉢形土器	堀之内	—	19.1	—	口縁部	0.7	沈線、L縄文、貼付文	多細砂	良	暗赤褐色	
1503	II	深鉢形土器	堀之内	—	(20.5)	—	口縁部	0.8	沈線、LR縄文	多細砂	良	にぶい褐色	
1504	I	深鉢形土器	堀之内	—	(15.6)	—	口縁部	0.8	沈線、縄文	細砂、長石	不良	赤褐色	
1505	I	深鉢形土器	堀之内	—	(23.8)	—	口縁部	0.6	沈線、RL縄文	細砂	良	にぶい赤褐色	橋状把手
1506	II	深鉢形土器	堀之内	—	(29.1)	—	口縁部	0.4	沈線、RL縄文	細砂	良	黄褐色	
1507	V	深鉢形土器	堀之内	—	(24.0)	—	口縁部	0.7	沈線、LR縄文	多粗礫	不良	にぶい黄褐色	
1508	II	深鉢形土器	堀之内	—	(25.1)	—	口縁部	1.0	沈線、LR縄文	粗砂、長石	良	にぶい褐色	

図一34　堀之内式土器実測図－1



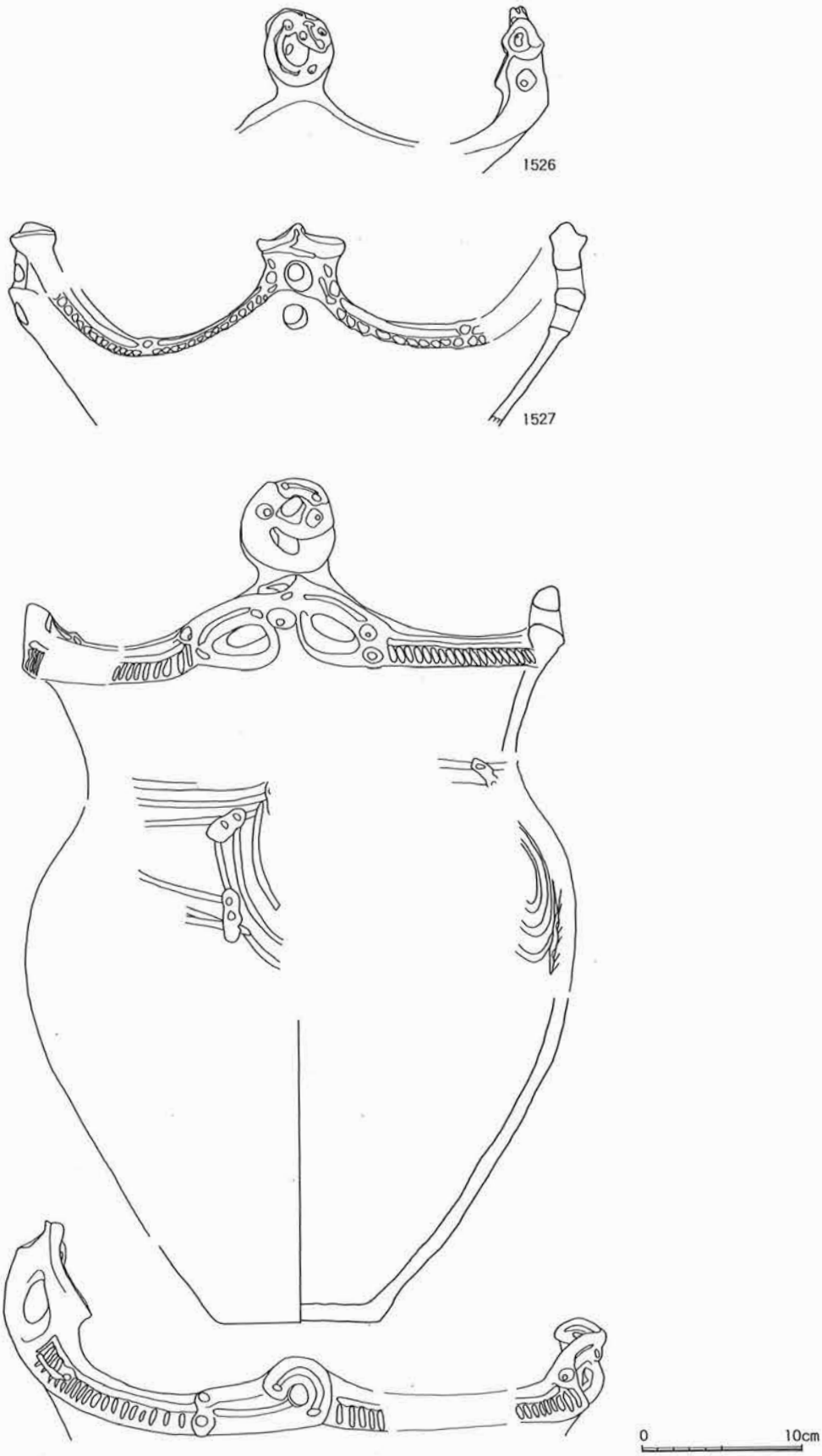
番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1509	V	深鉢形土器	堀之内	—	(32.8)	—	口縁部	1.0	沈線、LR縄文	多粗礫、長石	良	にぶい黄褐色	
1510	V	深鉢形土器	堀之内	—	(30.3)	—	口縁部	1.1	沈線、LR縄文	多粗砂	良	にぶい黄橙色	
1511	V	深鉢形土器	堀之内	19.5	(18.8)	8.8	口縁部	0.8	沈線、RL縄文	多砂	良	にぶい黄橙色	
1512	V	深鉢形土器	堀之内	—	(18.3)	—	口縁部	0.8	沈線、LR縄文	多粗礫	良	暗灰黄色	埋甕12甕内出土
1513	II	深鉢形土器	堀之内	—	(42.0)	—	口縁部	1.0	沈線、隆帯	多砂	良	にぶい黄褐色	
1514	V	深鉢形土器	堀之内	—	(30.6)	—	口縁部	0.7	沈線、隆帯、貼付文	多粗砂	良	にぶい黄褐色	
1515	III	深鉢形土器	堀之内	—	(29.8)	—	口縁部	0.9	沈線、隆帯	多粗砂、長石	不良	にぶい赤褐色	
1516	V	深鉢形土器	堀之内	—	(34.8)	—	口縁部	1.1	沈　線	多粗礫、多長石	不良	にぶい黄褐色	

図－35　堀之内式土器実測図－2



番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1517	V	深鉢形土器	堀之内	—	(36.9)	—	口縁部	0.9	沈線	多粗礫	良	にぶい黄褐色	
1518	II	深鉢形土器	堀之内	—	(37.8)	—	口縁部	0.9	沈線	多粗礫、長石	良	にぶい黄褐色	
1519	V	深鉢形土器	堀之内	—	(26.5)	—	口縁部	0.8	沈線	多粗砂	良	黒褐色	
1520	V	深鉢形土器	堀之内	—	22.1	—	口縁部	0.7	沈線、貼付文	多細砂	良	にぶい黄橙色	
1521	II	深鉢形土器	堀之内	—	—	—	口縁部	0.6	沈線、貼付文	多粗礫	良	にぶい褐色	
1522	V	深鉢形土器	堀之内	—	18.6	—	口縁部	0.6	沈線	多粗砂、長石	良	黒褐色	
1523	II	深鉢形土器	堀之内	—	(24.7)	—	口縁部	0.5	沈線	多粗砂、長石	良	にぶい黄橙色	
1524	I	深鉢形土器	堀之内	—	(21.3)	—	口縁部	0.8	沈線	多細砂	良	黒褐色	重量感有
1525	II	深鉢形土器	堀之内	—	(21.0)	—	口縁部	0.9	ミガキ	細砂	良	にぶい橙色	

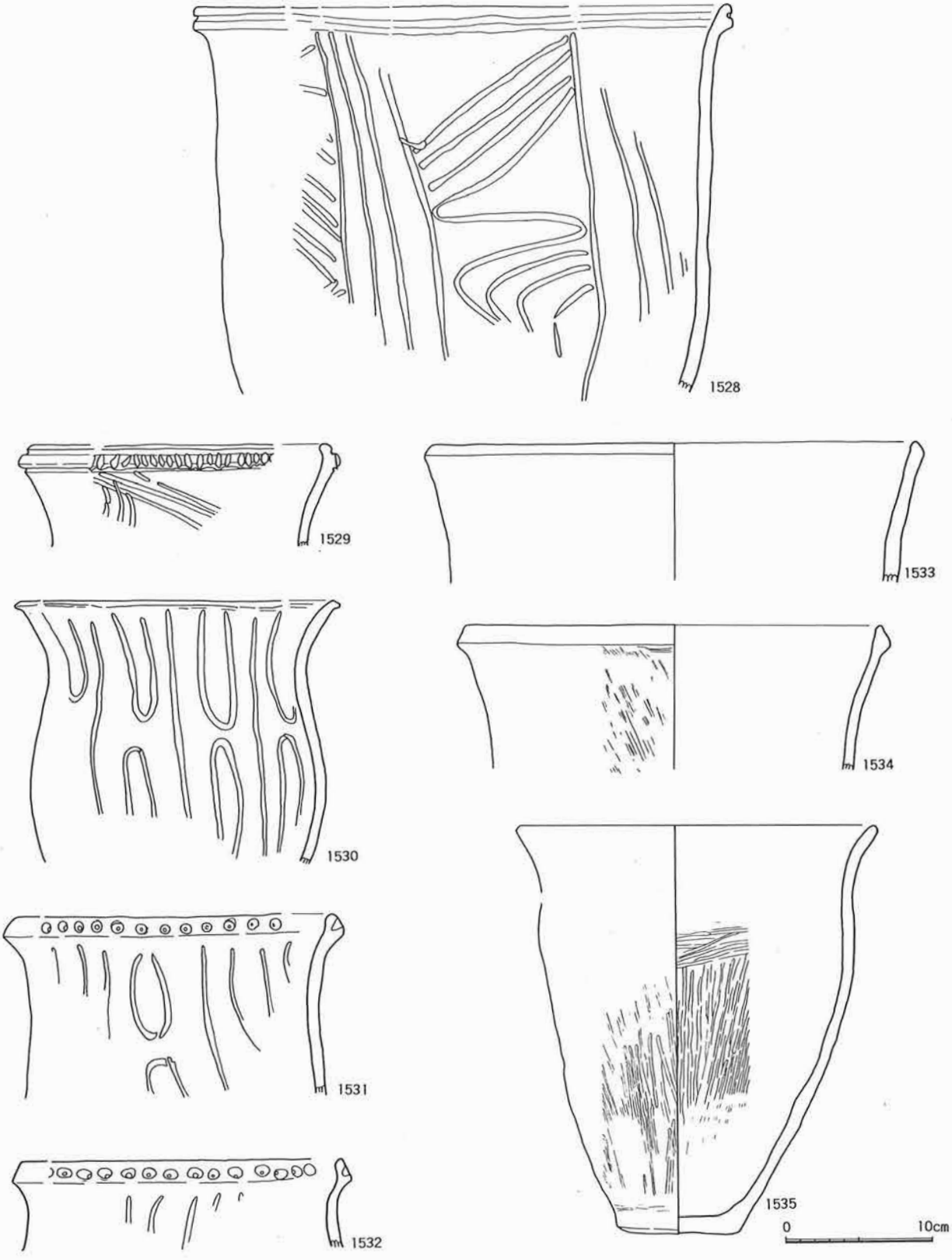
図－36　堀之内式土器実測図－3



箕輪A遺跡第1号住居跡出土土器

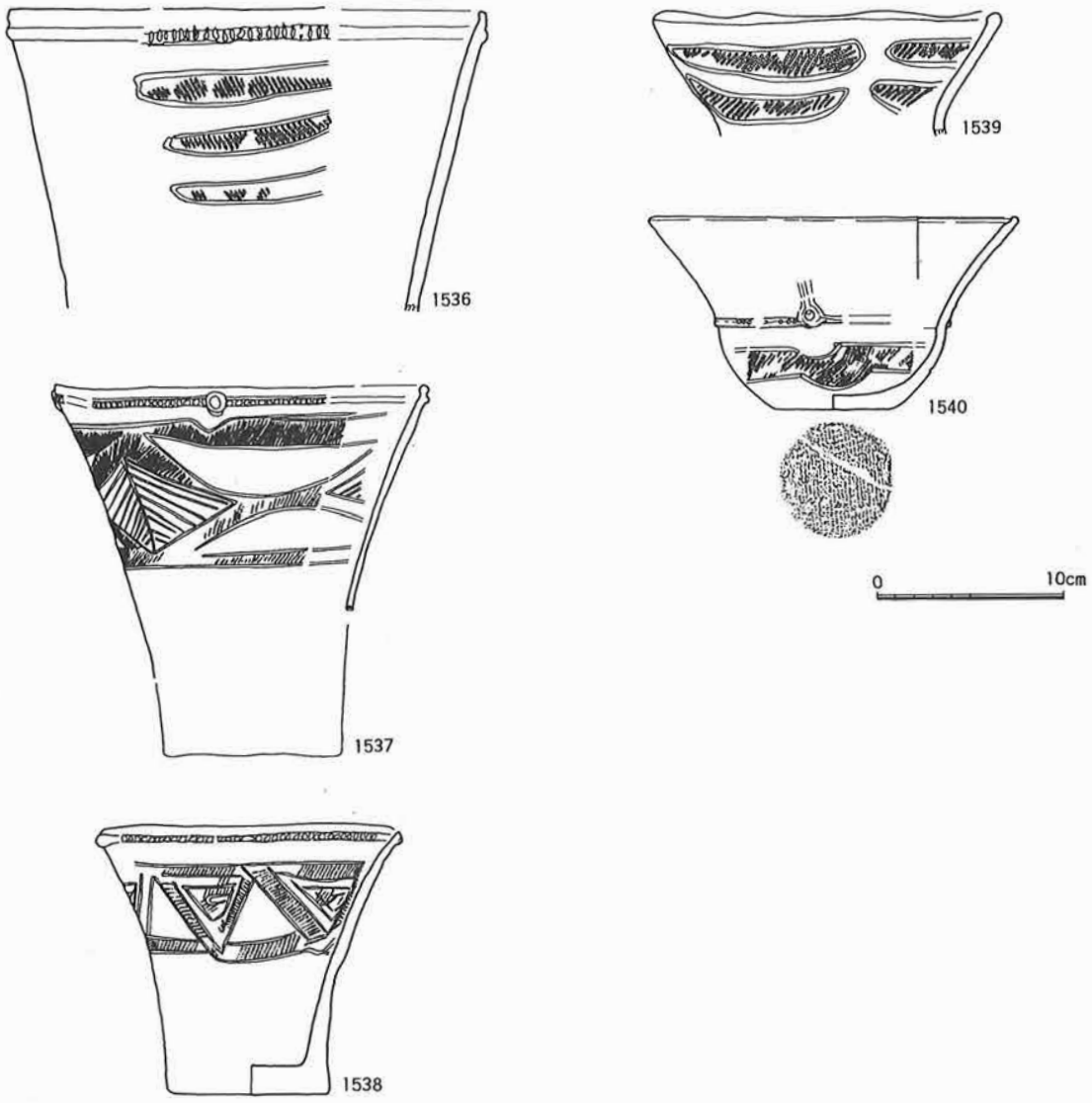
番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1526	II	深鉢形土器	堀之内	—	—	—	—	0.8	沈線、刺突	多粗砂、長石	良	にぶい黄橙色	人面？ 把手
1527	V	深鉢形土器	堀之内	—	(35.8)	—	口縁部	0.8	沈線、刺突	多細砂	良	にぶい黄褐色	把手

図－37　堀之内式土器実測図－4



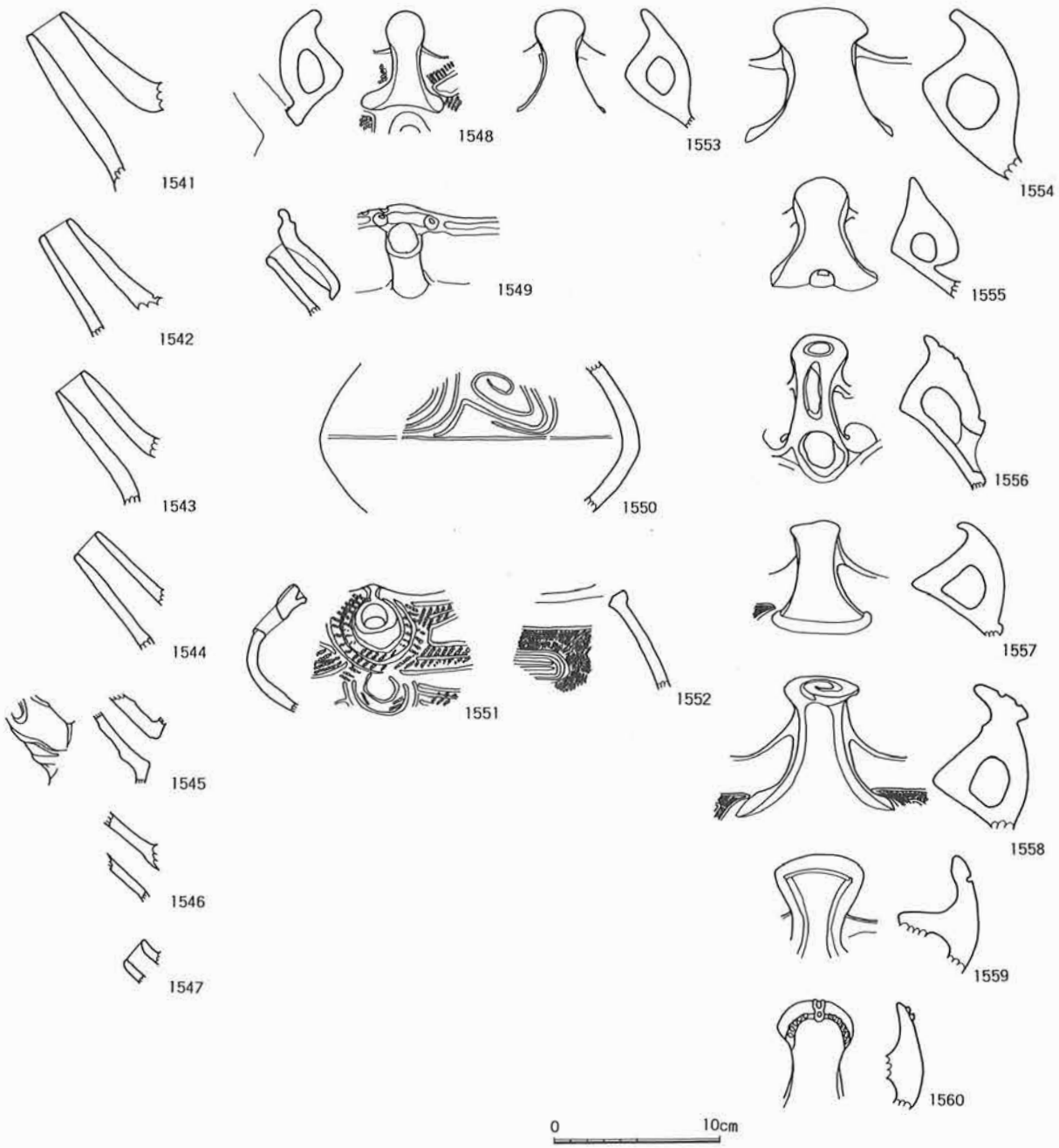
番号	出土区	名称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1528	I	深鉢形土器	堀之内	—	(36.2)	—	口縁部	1.0	沈線	多粗砂、長石	良	赤褐色	
1529	II	深鉢形土器	堀之内	—	(21.8)	—	口縁部	0.7	沈線	多粗砂、長石、石英	良	黒褐色	
1530	II	深鉢形土器	堀之内	—	(22.4)	—	口縁部	0.8	沈線	多細砂	良	にぶい黄褐色	
1531	II	深鉢形土器	堀之内	—	(23.0)	—	口縁部	0.8	刺突、沈線	多細砂	良	にぶい褐色	
1532	II	深鉢形土器	堀之内	—	(23.2)	—	口縁部	0.8	刺突、沈線	多細砂	良	にぶい褐色	
1533	V	深鉢形土器	堀之内	—	(34.0)	—	口縁部	1.0	ナデ	多砂	良	にぶい黄褐色	
1534	II	深鉢形土器	堀之内	—	(29.4)	—	口縁部	0.8	ナデ	多粗砂、金雲母	良	にぶい黄褐色	
1535	V	深鉢形土器	堀之内	27.7	24.7	8.4	口縁部	0.8	ミガキ	多砂	良	赤褐色	埋甕12

図－38　堀之内式土器実測図－5



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1536	II	深鉢形土器	堀之内	—	(26.0)	—	口縁部	0.8	隆帯、沈線、RL縄文	多粗礫、長石	良	にぶい黄橙色	
1537	II	深鉢形土器	堀之内	(20.0)	20.1	(9.6)	口縁部	0.5	隆帯、沈線、RL縄文	多砂	不良	黄褐色	
1538	II	深鉢形土器	堀之内	19.4	16.3	9.1	口縁部	0.8	隆帯、沈線、RL縄文	多砂	良	にぶい黄褐色	埋甕13
1539	V	浅鉢形土器	堀之内	—	18.6	—	口縁部	0.6	沈線、LR縄文	多細砂	良	褐色	ミガキ顕著
1540	II	浅鉢形土器	堀之内	14.2	(19.8)	6.2	口縁部	0.6	隆帯、沈線、LR縄文	多細砂	良	褐色	ミガキ顕著

図－39　堀之内式土器実測図－6



番号	出土区	名　称	型式名	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色　調	備　考
1541	II	注口土器	堀之内	—	2.4	—	—	1.6	無	多細砂	良	灰褐色	注口部
1542	II	注口土器	堀之内	—	2.2	—	—	1.0	無	多細砂、長石	良	灰褐色	注口部
1543	II	注口土器	堀之内	—	2.2	—	—	0.8	無	多細砂、長石	良	赤褐色	注口部
1544	II	注口土器	堀之内	—	2.1	—	—	0.8	無	多細砂、長石	良	にぶい赤褐色	注口部
1545	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.9	隆　帯	多細砂、多長石	良	にぶい黄褐色	注口文様有
1546	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.8	無	多細砂	良	にぶい赤褐色	注口部
1547	V	注口土器	堀之内	—	1.7	—	—	0.6	無	粗砂	不良	にぶい黄褐色	注口部
1548	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.6	沈線、LR縄文	多細砂	良	にぶい褐色	口縁部
1549	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.7	沈　線	多砂、長石	良	黒褐色	口縁部
1550	II	注口土器	堀之内	—	—	—	(19.2)	0.8	沈　線	多砂、長石	良	にぶい赤褐色	胴部
1551	I	注口土器	堀之内併行	—	—	—	—	0.7	沈線、LR縄文	多粗礫	不良	にぶい褐色	口縁～胴部
1552	II	注口土器	加曽利B？	—	—	—	—	0.7	沈線、LR縄文	多細砂	良	にぶい橙色	口縁部
1553	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.6	無	多砂	良	にぶい黄橙色	口縁把手
1554	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	1.2	無	多砂、長石	良	灰褐色	口縁把手
1555	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.9	無	多砂、長石	良	灰黄褐色	把手
1556	V	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.8	沈　線	多粗砂	不良	にぶい褐色	把手
1557	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.5	沈線、LR縄文	多粗砂、長石	良	黒褐色	口縁把手
1558	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	0.9	沈線、LR縄文	多粗砂、長石	良	明赤褐色	口縁把手
1559	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	—	沈　線	多細砂	良	にぶい赤褐色	把手
1560	II	注口土器	堀之内	—	—	—	—	—	隆帯、刺突	多細砂	良	にぶい橙色	把手

図－40　堀之内式土器実測図－7

B．再利用土器片

土器片を再利用したものに土器片円盤と土器片錘がある。土器片円盤は従来より言われる「土製円板（盤）」を指している（注１）。

土器片円盤119点、土器片錘17点が出土している。

出土状況はいずれも散在的で直接遺構に関わるものはない。

１．土器片円盤（図－41.46～48）

土器片円盤は土器片の周縁を打ち欠いたり研磨したりして、全てが円形であるように意図されている。これらは通例の如くその加工法によって、以下の３類に分けられる。

Ⅰ類　打ち欠きによるもの（001～079）。

Ⅱ類　打ち欠き後、一部研磨によるもの(080～110)。

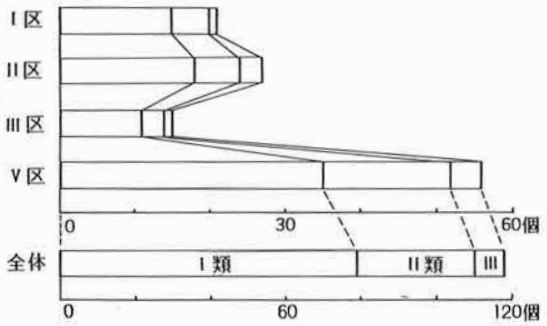
Ⅲ類　打ち欠き後、周縁研磨によるもの(111～119)。

Ⅰ類79点、Ⅱ類31点、Ⅲ類９点で、Ⅰ類の圧倒的な量とⅢ類の希少なあり方が注目される。なおまたⅡ類に脆弱な資料が多く、Ⅰ類の風化資料や洗浄作業によるものの混在があるとすると、Ⅲ類の希少感はさらに増すものと思われる。

これを出土地区別に分けると、以下にまとまる。

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
Ⅰ類	15	18	11	35	79
Ⅱ類	5	6	3	17	31
Ⅲ類	1	3	1	4	9
計	21	27	15	56	119

調査区の包蔵容量の差から第Ⅴ調査区の出土量が目立つが、ここでは出土地区別に見るⅠ．Ⅱ．Ⅲ類の類



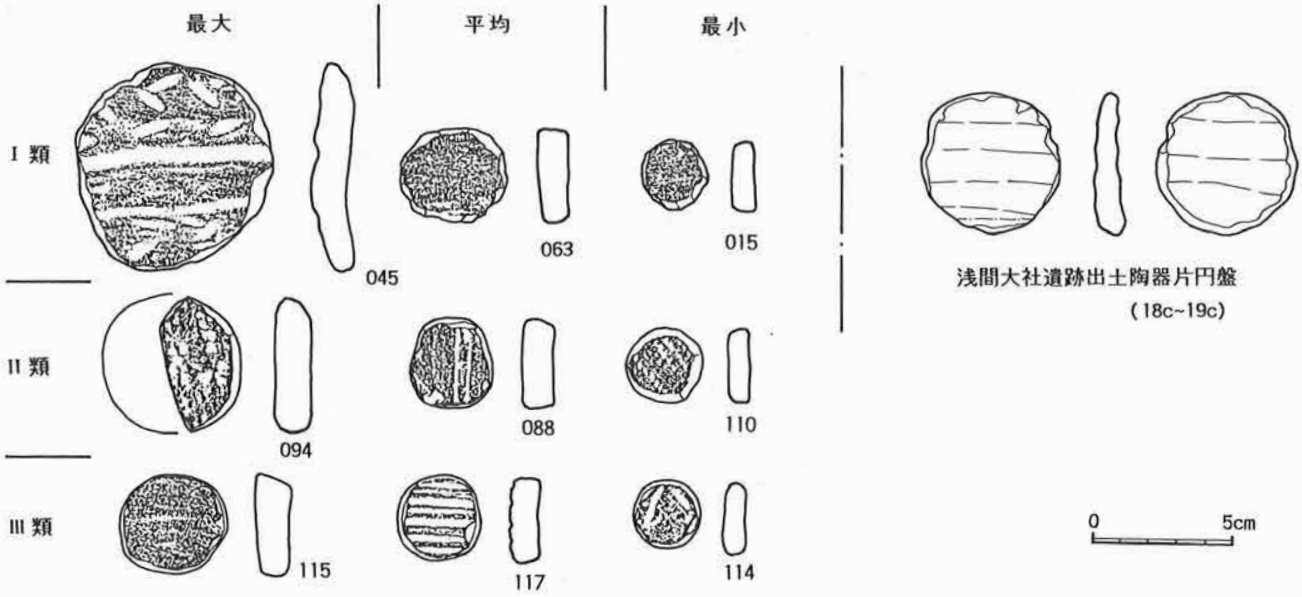
図－42　土器片円盤出土区一覧

似性の高いパーセンテージから（図－42）、地区別に差のない出土状況を知り、それぞれの個性がそれぞれの出土地区に反映されない、総体的なあり方の部分抽出であることを確認しておきたい。

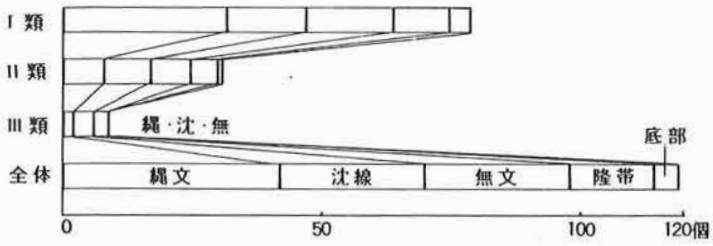
利用部位は95％が胴部で占められ、他は口縁部１点(061)、底部６点（002. 018. 046. 049. 055. 100）である。そのうち100がⅡ類の他はいずれもⅠ類の加工がなされ、底部資料は全て平滑である。胴部破片も以下のとおり、縄文、沈線、無文など凹凸の少ないものが80％以上で選ばれている（図－43）。

	縄文	沈線	無文	隆帯	底部
Ⅰ類	31	15	17	11	5
Ⅱ類	8	9	8	5	1
Ⅲ類	3	4	2	0	0
全体	42	28	27	16	6

ここで言う隆帯の多くは曽利式や加曽利Ｅ式のなぞりによる低隆帯であり極端な凹凸を感じないが、隆帯資料のないⅢ類から見ると、Ⅰ・Ⅱ類の打ち欠けによる利用土器片の選び方は幾分ラフに感じる。このことは周縁研磨するⅢ類が当初より凹凸の少ない資料を選んだとも言えるが、それではなぜ、そうした資料が選



図－41　土器片円盤分類図



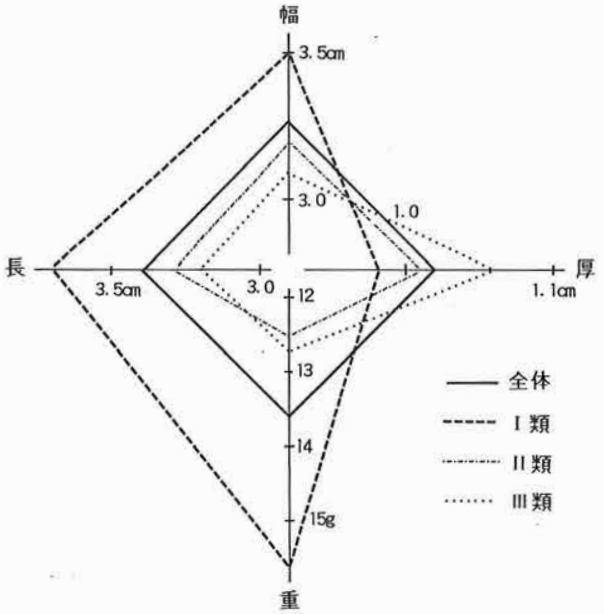
図－43　土器片円盤文様別分類

ばれて研磨されなければならなかったのか、その因果関係の検討も必要となろう。

次に、出土地区別に利用土器片の時期を探ると、第Ⅰ調査区に勝坂式（003）、第Ⅰ・Ⅱ調査区に加曽利E式に関連する撚糸文（030. 076. 110. 前述の統計資料には縄文に含めてある。）、第Ⅴ調査区に堀之内式に伴う付加条縄文（066. 069. 072. 073）を見るなど、それぞれの地区で卓越した土器形式資料が含まれるから、おそらく「その場」にある土器片が再利用されたものと言える。

以上、個々の特徴を把握して全体的な法量分類に移ると、以下のとおりである。

		長	幅	厚cm	重g
Ⅰ類	平均	3.7	3.5	0.98	15.6
	最大	7.6	6.9	1.5	77.8
	最小	2.4	2.3	0.7	5.5
Ⅱ類	平均	3.3	3.2	1.01	12.5
	最大	4.5	3.9	1.4	23.5
	最小	2.7	2.5	0.7	5.7
Ⅲ類	平均	3.2	3.1	1.06	12.7
	最大	3.9	3.6	1.3	20.7
	最小	2.4	2.4	0.7	4.1
全体	平均	3.4	3.3	1.02	13.6
	最大	7.6	6.9	1.5	77.8
	最小	2.4	2.3	0.7	4.1

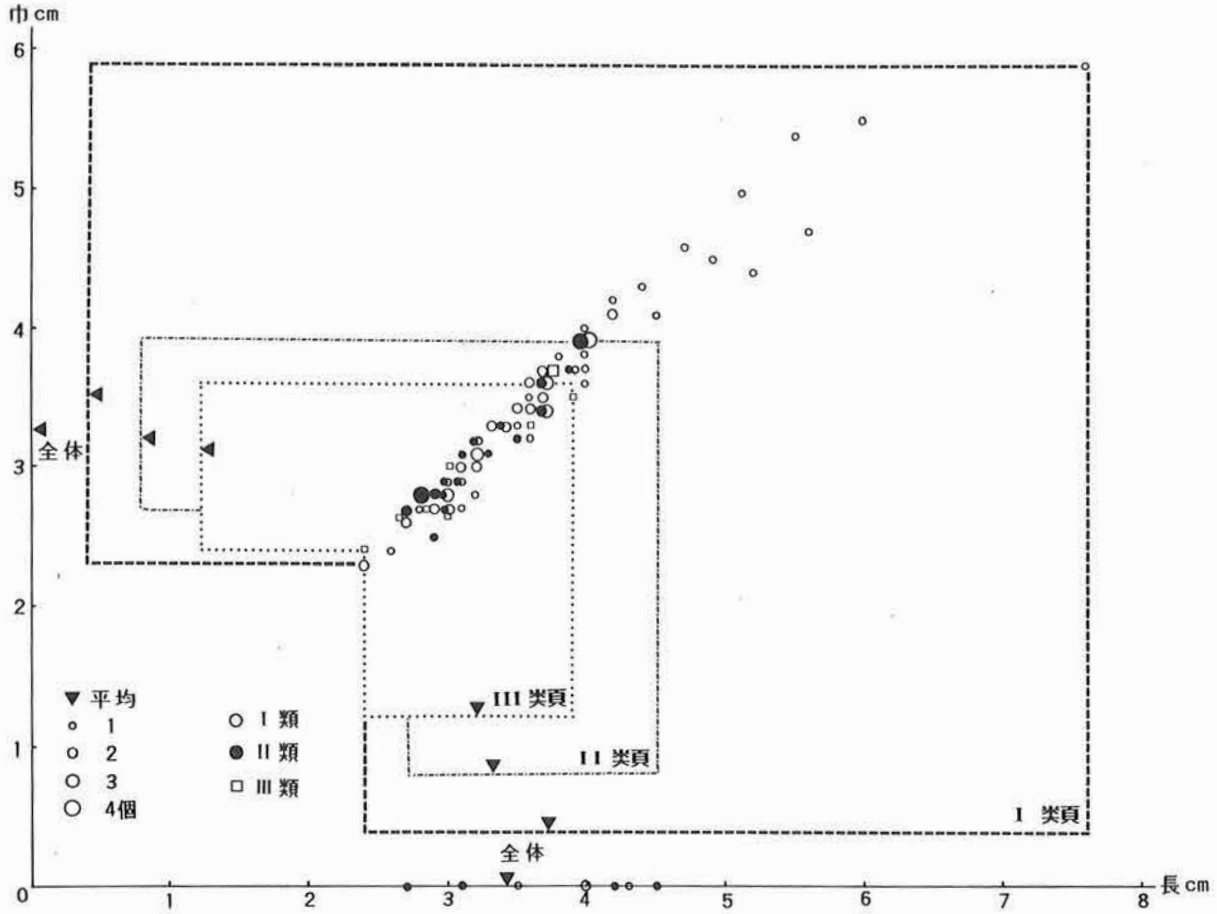


図－44　土器片円盤法量比較

Ⅰ類が量的に圧倒することもあって、最大値から最小値まで幅広い分布を見せるが（図－45）、4cm前後を境にして見ると、それ以下の分布状況にはⅠ・Ⅱ・Ⅲ類という加工法の差がお互いの法量から逸脱することなく、90%近い数値でそこに集中している。このことは土器片円盤が加工法を重視しているのではなく、その形状や法量に対して打ち欠いたり研磨したりして作られていたとするべきであり、Ⅲ類の希少な存在を性格の逸脱にまで発展させる必要はなさそうである。

土器片円盤、いわゆる土製円板（盤）は縄文時代から近世に至るまで連綿と出土するが、その性格については諸説がありいまだ明らかではない。ここで兵庫県高砂市高砂町近世遺跡（注２）を例に挙げると、113点の土製円板のうち、本遺跡分類で言うⅠ類が84点、Ⅱ類が26点、Ⅲ類が３点で、殆ど同様のパーセンテージを示している。土師質土器、瓦質土器、瓦等の破片が利用されるが、Ⅲ類の加工が瓦破片であったことを知ると、特徴的な厚さを示すⅢ類は（図－44）、その厚さ故に、円形に加工するためには必然的に研磨せざるを得なかったと言えるかも知れないのである。とすれば逆にⅠ類の薄さは高砂町遺跡の土師質土器や瓦質土器の加工と同様に、容易に円形に打ち欠けた結果なのかも知れないのである。

次に、法量について見ると、全体で径2.8～7.4cm、厚さ0.6～2.2cm、重さ６～140gの数値に納まるらしいが、これもまた利用する素材の大半が瓦破片だったと言う素材自身の厚さ、重さの直接的な反映を除くと後の内容は殆ど同じなのである。そう言えば土製円板のアレンジ形であろう土製三角板を修善寺町大塚遺跡などで見ることもあるが（注３）、利用素材の表裏が研



図－45　土器片円盤法量分布

磨されることは管見になく、縄文時代から近世に至ってもなお、厚さ、重さに対して無関心でいられるあり方が、この土器片円盤の性格を暗示しているのかも知れないのである。

つまり土器や瓦の破片を「円形」という形の道具にするという単純な製作行為であるが故に、それぞれの文化にあっても共通の法量を生み出しているものと言えるかも知れないのである。そして、それ故にそれぞれの文化や地域のなかで、それぞれの用途が語られることになり、ここでも新たに薩摩灘における引き網漁の投てき用威嚇具が検討のひとつに加えられているのである。以前よりの土製紡錘車、有孔円板の未製品、計量具、換算具、研磨具、土器の補修具ならびに混和剤、蓋、錘、泥面子、冥銭、さらに中、近世遺物として独立させ小型円板の名称で燈明皿の燈芯を押さえる具とするもの（注４）など、先学諸氏の充分な検討にも関わらず、その用途が確定しないのもそうしたことが原因して致し方ないことかも知れないのである。

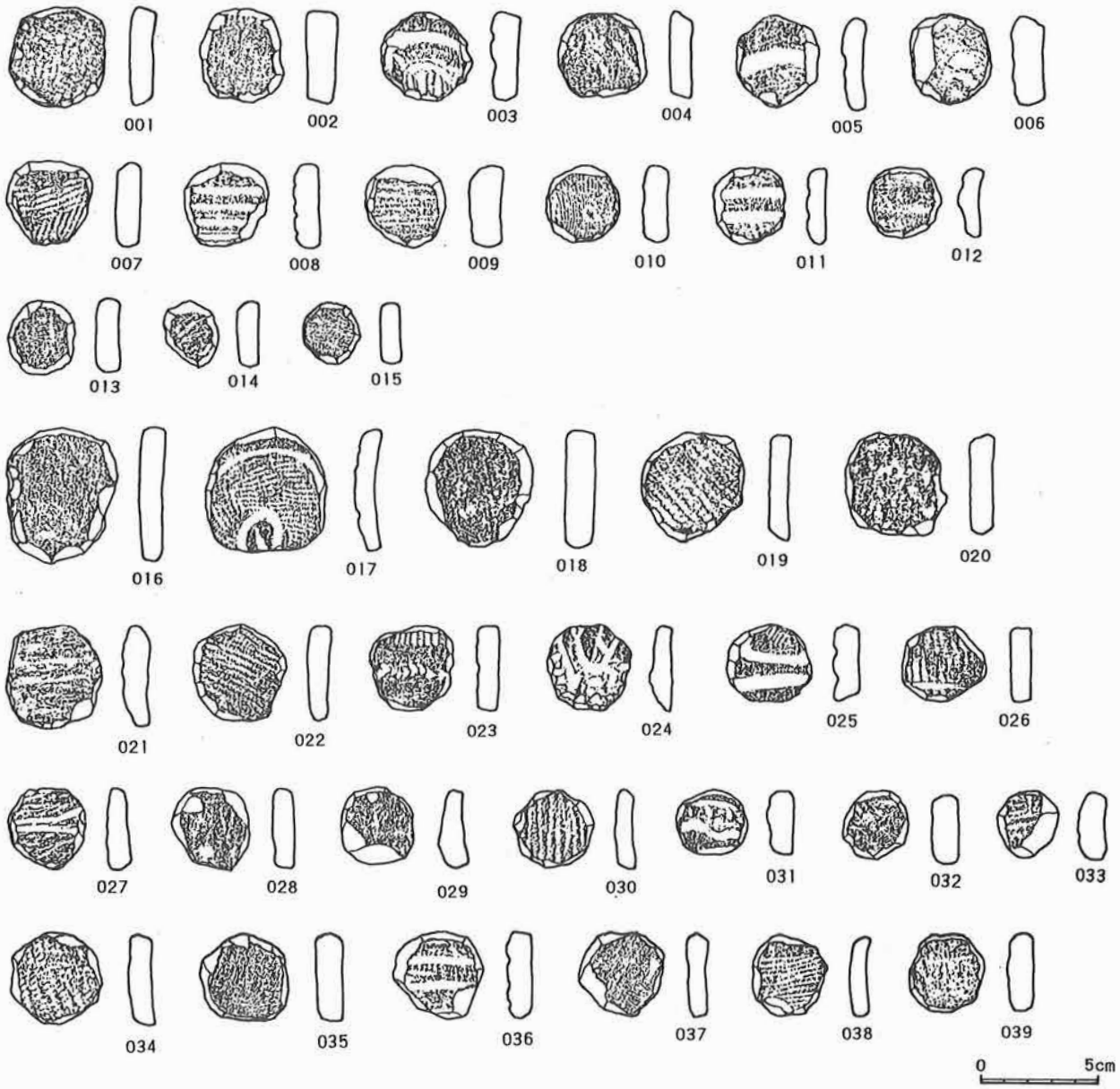
土器の誕生後、その破片が再利用されることは必然的であろうが、同じ再利用土器片の土器片錘の消長、つまり、土器片錘が有溝土錘や管状土錘に進歩、発展していくことと比べると、あまりに連綿としていすぎており、それぞれの文化のなかで、果たして生産や消費とかの直接的な生活のなかに関わっていたか疑問も湧くところである。

縄文時代にはそのような直接的な生活に対して、機能や用途を想像できない道具を「第二の道具（注５）」と呼び、いわゆる呪術や儀礼などの精神生活に関わり、実用の道具の生産への限界を祓う発展的遺物として位置づけている。しかし土器片円盤が第二の道具に対等するような遺物でないことは、その器量からも明らかである。こうしたなかで生態人類学的立場から、「縄文時代は兎にも角にも保守的で、第二の道具の発生も収入を増やすことよりも遊ぶことばかりが派手になる」ことの結果であるとする提言（注６）は、土器片円盤が第一の道具でも第二の道具でもない、ただ遊ぶものであった可能性を指摘しているのかも知れないのである。

２．土器片錘（図－49・50）

土器片錘は有孔の１点（01）と、土器片の側片に縄掛けの刻みをもつものが16点(02～17)ある。

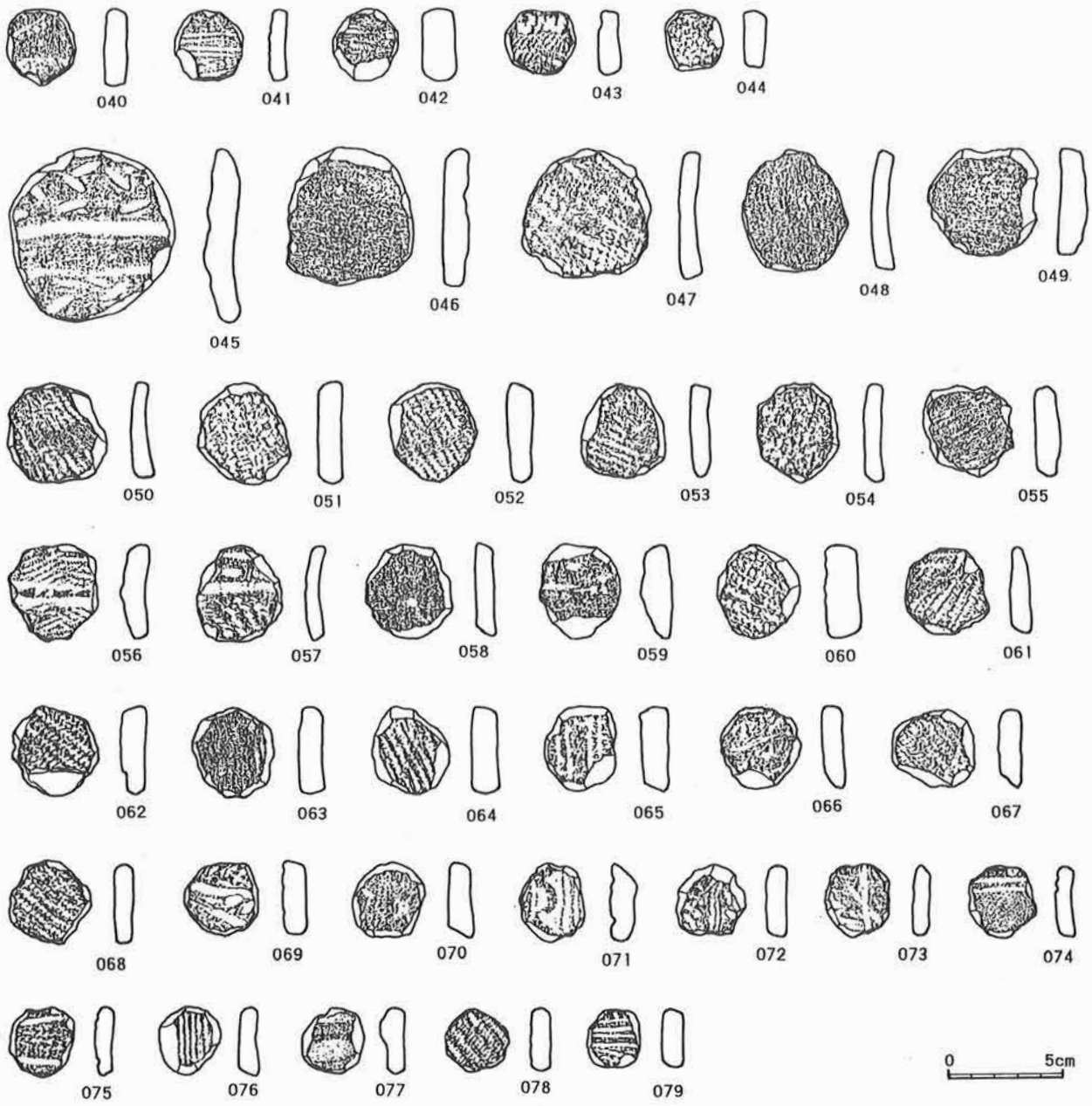
有孔の資料は台形状に打ち欠けられた本体の中央やや上寄りに径0.4cmの孔が両側から開けられている。



番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
001	I	I	4.2	4.1	1.0	19.2	
002	I	I	4.0	(3.4)	1.4	(23.4)	4/5底部
003	I	I	3.7	3.6	1.3	15.6	
004	I	I	3.7	3.4	0.9	13.6	
005	I	I	3.7	3.5	0.9	13.5	
006	I	I	3.6	3.4	1.4	19.7	
007	I	I	3.5	3.4	1.0	15.8	
008	I	I	3.6	(3.5)	1.1	(14.7)	5/6
009	I	I	3.5	3.4	1.4	18.8	
010	I	I	3.2	3.1	1.0	11.6	
011	I	I	3.2	3.1	0.7	7.8	
012	I	I	3.2	3.0	0.9	7.7	
013	I	I	3.0	2.8	1.0	9.7	
014	I	I	(2.7)	(2.3)	0.9	(4.7)	1/2
015	I	I	2.6	2.5	0.9	5.5	
016	II	I	5.6	4.7	1.0	32.7	
017	II	I	5.1	5.1	0.9	27.8	
018	II	I	4.9	4.5	1.3	34.0	底部
019	II	I	4.6	4.4	0.9	19.5	
020	II	I	4.2	4.2	1.0	22.3	

番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
021	II	I	4.3	4.1	1.1	19.1	
022	II	I	4.0	4.0	1.0	16.5	
023	II	I	3.6	3.6	1.0	15.3	
024	II	I	3.6	3.6	1.0	9.8	
025	II	I	3.6	3.4	1.2	16.6	
026	II	I	3.5	3.3	0.9	12.0	
027	II	I	3.5	3.4	1.0	11.5	
028	II	I	3.3	3.3	1.0	10.1	
029	II	I	3.3	3.1	1.2	12.5	
030	II	I	3.4	3.2	0.7	8.8	
031	II	I	3.0	2.7	1.2	9.9	
032	II	I	2.9	2.8	1.1	9.9	
033	II	I	2.8	2.6	1.2	8.7	
034	III	I	3.9	3.8	1.0	18.1	
035	III	I	3.7	3.7	1.2	22.6	
036	III	I	3.8	3.6	1.0	15.6	
037	III	I	3.6	3.5	0.9	12.4	
038	III	I	3.4	3.2	0.7	9.1	
039	III	I	3.2	3.1	1.1	12.1	

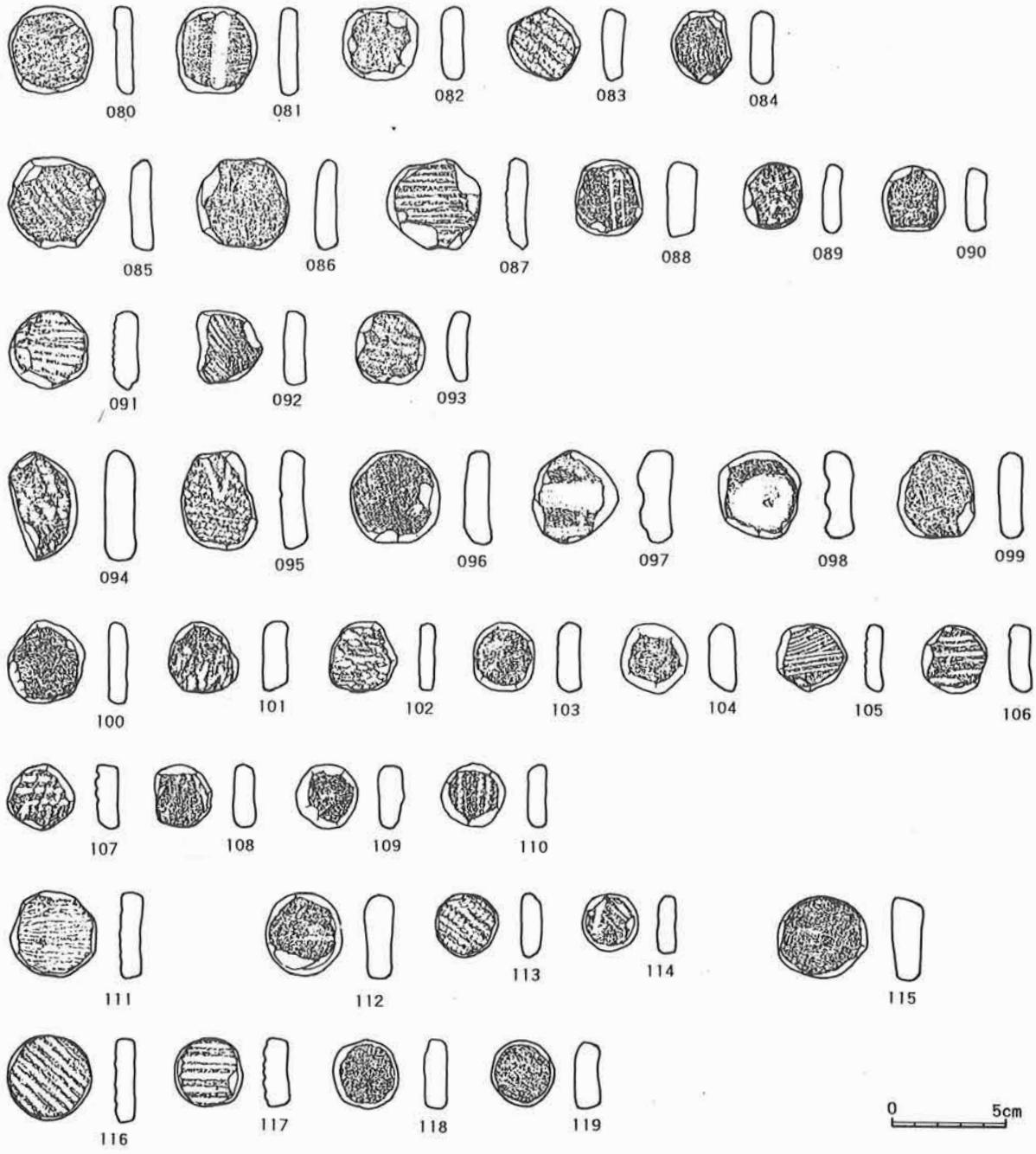
図－46　土器片円盤実測図－1



番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
040	III	I	3.4	3.0	1.0	10.7	
041	III	I	3.1	3.0	0.8	8.6	
042	III	I	3.2	2.8	1.5	14.9	
043	III	I	3.1	2.8	1.0	8.6	
044	III	I	2.6	2.5	1.0	8.3	
045	V	I	7.6	7.1	1.4	77.8	
046	V	I	6.0	5.5	1.1	47.5	底部
047	V	I	5.5	5.5	0.9	27.3	
048	V	I	5.3	4.5	0.7	22.3	
049	V	I	4.6	4.5	1.1	28.6	底部
050	V	I	4.4	4.4	0.9	16.5	
051	V	I	4.5	(3.9)	1.1	(20.5)	4/5
052	V	I	4.3	3.9	1.2	15.8	
053	V	I	4.0	(3.6)	0.9	(11.7)	4/5
054	V	I	4.3	3.6	0.8	12.9	
055	V	I	4.0	3.8	1.1	18.9	底部
056	V	I	4.0	3.8	1.1	18.4	
057	V	I	4.1	3.7	0.7	11.9	
058	V	I	4.0	3.8	0.8	14.5	
059	V	I	4.0	3.6	1.3	17.4	

番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
060	V	I	4.0	3.6	1.5	24.7	
061	V	I	3.7	3.7	0.8	11.5	口縁部
062	V	I	3.8	3.8	1.1	14.7	
063	V	I	3.9	3.5	1.1	17.3	
064	V	I	3.6	3.4	1.2	18.2	
065	V	I	3.7	3.1	1.2	17.8	
066	V	I	3.5	3.5	0.9	10.7	
067	V	I	3.5	3.4	1.1	12.5	
068	V	I	3.6	3.5	0.9	11.9	
069	V	I	3.2	3.1	1.0	8.6	
070	V	I	3.3	3.0	1.1	13.3	
071	V	I	3.5	2.9	1.1	9.6	
072	V	I	3.1	3.0	0.9	8.6	
073	V	I	3.1	2.9	0.7	6.4	
074	V	I	3.1	2.8	0.7	7.1	
075	V	I	3.0	2.7	0.7	6.3	
076	V	I	3.0	2.7	0.9	6.8	
077	V	I	2.8	2.7	1.1	9.1	
078	V	I	2.7	2.7	0.9	8.0	
079	V	I	2.4	2.3	0.9	6.4	

図－47　土器片円盤実測図－2



番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
080	I	II	3.8	3.6	0.9	15.4	
081	I	II	3.7	3.5	0.8	13.8	
082	I	II	3.2	3.2	1.0	12.6	
083	I	II	3.2	3.1	0.9	11.4	
084	I	II	3.1	(2.6)	1.0	(8.9)	4/5
085	II	II	4.3	4.0	1.0	18.8	
086	II	II	4.0	4.0	1.0	18.5	
087	II	II	4.1	4.0	0.9	16.0	
088	II	II	3.4	3.0	1.2	14.7	
089	II	II	3.0	2.5	0.7	6.9	
090	II	II	2.8	2.8	0.8	5.7	
091	III	II	3.5	3.4	1.2	13.5	
092	III	II	3.2	(2.7)	1.0	(10.3)	3/4
093	III	II	3.1	3.1	0.9	10.2	
094	V	II	4.8	(2.8)	1.4	(17.6)	1/2
095	V	II	4.8	(3.2)	1.0	(12.4)	3/4
096	V	II	4.0	4.0	1.1	23.5	
097	V	II	4.0	3.7	1.5	23.4	
098	V	II	3.8	3.6	1.3	19.7	
099	V	II	3.8	3.4	1.1	12.5	

番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
100	V	II	3.7	3.4	0.9	11.5	底部
101	V	II	3.1	3.1	1.1	8.6	
102	V	II	3.1	3.0	0.7	6.4	
103	V	II	3.0	2.7	1.0	9.1	
104	V	II	3.0	2.9	1.2	11.3	
105	V	II	3.0	3.0	0.8	8.7	
106	V	II	2.9	2.9	0.9	9.1	
107	V	II	2.9	2.9	1.0	8.7	
108	V	II	2.8	(2.4)	1.0	(7.7)	4/5
109	V	II	2.9	2.7	1.2	8.3	
110	V	II	2.8	2.7	0.8	7.5	
111	I	III	3.8	3.7	1.0	17.2	
112	II	III	3.6	3.3	1.3	18.5	
113	II	III	2.8	2.7	0.9	7.5	
114	II	III	2.5	2.4	0.8	4.1	
115	III	III	4.0	3.5	1.4	20.7	
116	V	III	3.8	3.7	0.9	12.7	
117	V	III	3.0	3.0	1.2	13.6	
118	V	III	3.1	2.9	1.1	9.6	
119	V	III	3.0	3.0	1.1	10.1	

図－48　土器片円盤実測図－3

曽利式後半の胴部破片の再利用である。

後者の土器片錘はいずれも胴部破片を再利用した隅丸の長方形を基本とし（05.17が略正方形）、縄掛けの方向は13の短軸例を除いて全て長軸である。利用土器片は無文、縄文など凹凸の少ないものが主体に選ばれ、05の爪形文、02.14の沈線文によって勝坂式、曽利式などと知れる。これらは縄掛けの刻みによって以下の3類に分けられる（図－51）。

Ⅰ類　擦り切りによるもの（02～05）。

Ⅱ類　打ち欠きによるもの（06～13）。

Ⅲ類　打ち欠き後、周縁研磨によるもの(14～17)。

これらを法量の平均値で対照させると、以下のとおりである。

	長	幅	厚cm	重g
Ⅰ類	3.6	3.0	0.9	13.4
Ⅱ類	4.0	3.6	0.9	17.0
Ⅲ類	4.7	3.7	1.1	23.1
全体	4.1	3.4	1.0	17.8

Ⅰ類の擦り切りによるものが、からげる縄の太さを象徴しているのか小型化を指摘できるが、02のように突出したものもある。Ⅱ類の打ち欠けによるものが本遺跡の土器片錘の平均的あり方を示しており、大まかにはそのうちの小型の部分をⅠ類が、大型の部分をⅢ類が占めていると言える。Ⅲ類には丁寧な研磨によって14と15のように同形を作りながら、素材の厚さから重さに大きな差をもつものもある。

このことから、縄掛けの刻みの違いによる形状や法量の規制はそれ程ではなく、錘の性格が「重さ」にあるとすれば以下の3群を抽出できる（図－52）。

A群　10g前後（03. 04. 05. 12. 13）

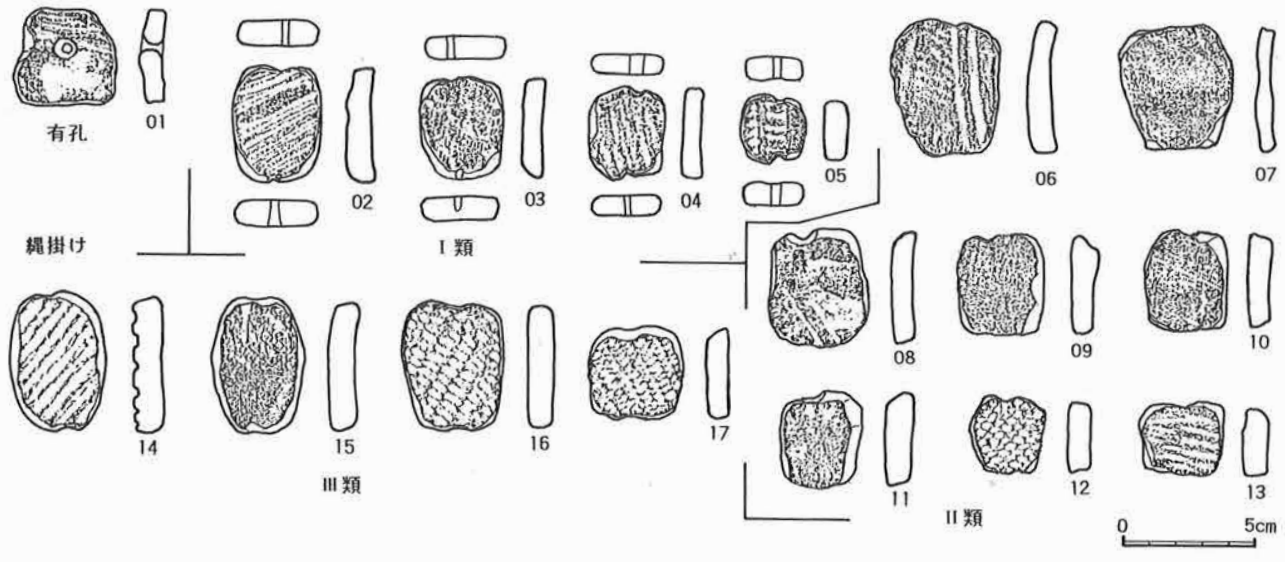
B群　20g前後（02. 06. 07. 08. 09. 10. 11. 15. 16. 17）

C群　30g以上（14）

そしてここで一般的な土器片錘が長さ4cm前後、重さ30g台（注7）とすると、本遺跡では16点中、14の1点しか一般的に言われる土器片錘に対応しないのである。その用途については漁網錘、あるいは編機の錘具の可能性が指摘されて久しいが（注8）、本遺跡のA群やB群などに代表される、あまりにも軽い錘のあり方に対して、常々疑問が投げかけられているのも確かなことである。

そのうちのひとつに、埋甕内やその上部からの出土例から、呪具、装飾具類などの副次的な性格を示唆する向きもあるが（注9）、類似する遺構をもつ本遺跡で、それを積極的に支持する資料には恵まれないでいるし、その支持率も一般には低いものと言えよう。

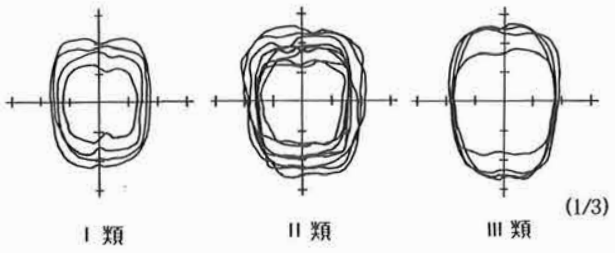
あとは、賀茂郡東伊豆町宮後遺跡などで指摘される



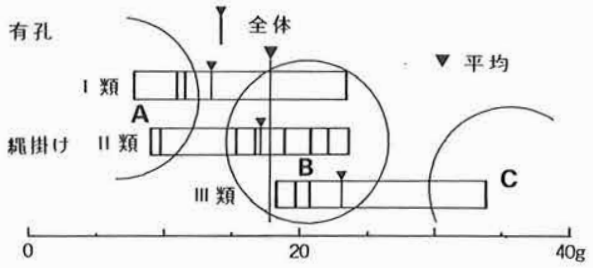
番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
01	Ⅰ	有孔	3.5	3.8	0.8	14.1	
02	Ⅱ	縄掛けⅠ	4.6	3.4	1.2	23.5	曽利
03	Ⅱ	Ⅰ	3.6	3.2	0.7	11.5	
04	Ⅴ	Ⅰ	3.7	2.8	0.8	10.9	
05	Ⅴ	Ⅰ	2.6	2.5	1.0	7.8	勝坂
06	Ⅴ	縄掛けⅡ	5.2	4.3	1.0	23.7	
07	Ⅴ	Ⅱ	4.8	4.1	0.6	16.7	
08	Ⅱ	Ⅱ	4.6	3.9	0.9	22.1	
09	Ⅴ	Ⅱ	4.2	3.6	1.1	20.8	

番号	出土区	分類	長	幅	厚(cm)	重(g)	備考
10	Ⅱ	縄掛けⅡ	4.0	3.3	0.9	18.8	
11	Ⅴ	Ⅱ	3.7	3.0	1.1	15.2	
12	Ⅴ	Ⅱ	3.0	3.0	0.9	9.0	
13	Ⅴ	Ⅱ	2.8	3.3	1.0	9.7	
14	Ⅱ	縄掛けⅢ	5.2	3.6	1.4	33.8	曽利
15	Ⅱ	Ⅲ	5.2	3.5	1.0	18.2	
16	Ⅴ	Ⅲ	4.9	3.9	0.9	20.7	
17	Ⅰ	Ⅲ	3.6	3.6	1.0	19.7	

図－49　土器片錘実測図



図－50　土器片錘集成図



図－51　土器片錘法量分布

ように、「住居址内から使用痕のある資料が出土している点を考えると、漁撈以外で住居内で使用した可能性も考慮に入れておきたい。」とするもので（注10）、これはおそらく石錘を漁網錘として、屋内における編機の錘具の可能性を慎重にしているものと思われるのである。

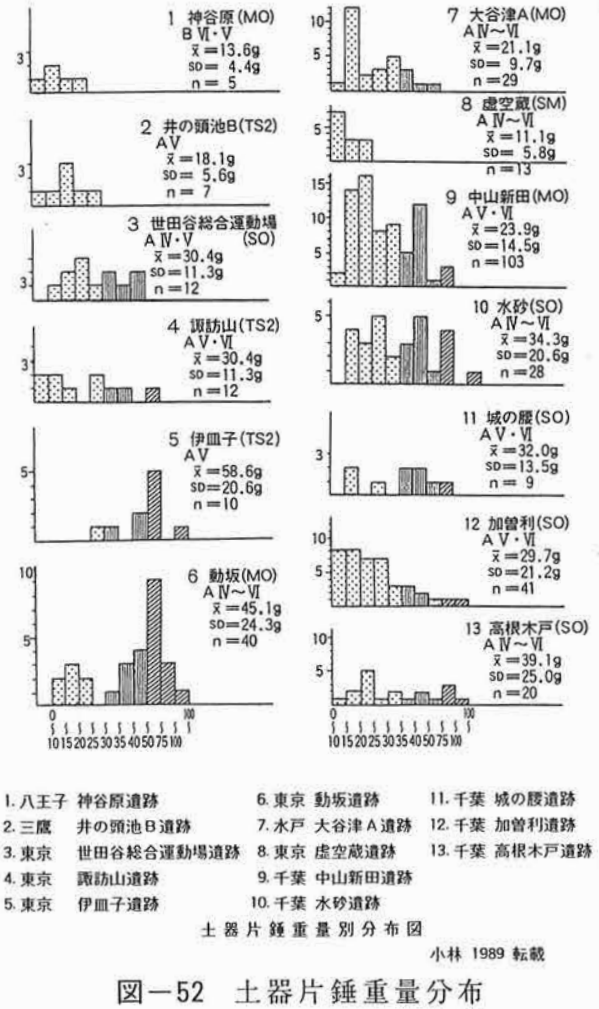
このようななかにあって、敢えて石錘を編布用のモジリ編み錘として限定し、海岸部から内陸部に向かって土器片錘の平均重量が軽くなっていく事実から、内湾沿岸性と内水面河川湖沼性の漁業活動の差を説くものもある（注11）。これは霞ヶ浦周辺に展開される阿玉台式の土器片錘の隆盛と、多摩から諏訪湖周辺に至る勝坂文化圏での貧弱なあり方から推測されたものであり、それによれば、「勝坂文化圏の土器片錘は、小型のものが大きさ的にまとまつて少量ずつ散在している。また、おそらくは大量に必要とする為であろう阿玉台文化の整形の施されない土器片錘に対し、整形という工程を経る勝坂文化の土器片錘は、バランスをとる必要がある『投網』に用いたものと考えたい。」としているのである。

また、そこでは霞ヶ浦から多摩周辺に至る各々の遺跡から出土する土器片錘の重量の統計を挙げ（図－52）20g前後と70g前後にふたつのピークをもつ遺跡が多くあることを指摘し、それを漁法の異なるふたつのセットを常備していたホームベース的遺跡とし、内陸部に向かうに従い、20g前後に限られてくるものに対しては、環境に応じた重さの錘を持たざるを得なかったキャンプサイト的遺跡としているのである。

これに従えば、本地域を代表する有力歴代遺跡（注12）の本遺跡はキャンプサイト的遺跡に分類されるが、それを云々することよりも、先ず果たしてそこで言う本遺跡の土器片錘の有り方は、眼下の滝戸渓谷におけるひとつの「魚を取る網」を想像させてくれているのであろうか。

確かに阿玉台文化圏の礫の希少な地域性が、70g前後の「錘」としての重さに対して、整形の施されない大型破片で漁網錘に対応していたであろうことは充分に納得されることである。しかし、それが地域を越えて波及するにはあまりにも先細りであり、海岸部と内陸部の遺跡で共通して持つ20g前後の土器片錘が何であったにしても、礫の豊富な内陸部、つまり勝坂文化圏では70g前後の「錘」の重さを石錘で担っていたとすれば、「錘」として生産目的に使用するふたつのセットは、どの遺跡にも常備されていたと言え、その統計結果には何ら違いは出てこないように思われるのである。

福井県鳥浜貝塚出土の簀（す）が4～7mm間隔で丹念に絡み編みされている（注13）などの事実を知るとやはり小型の錘は必要不可欠のものであったであろう。そして、それが木や骨で賄われていたとしても、「錘」として重さの異なるセットのなかに、土器片錘



1. 八王子 神谷原遺跡
2. 三鷹　井の頭池B遺跡
3. 東京　世田谷総合運動場遺跡
4. 東京　諏訪山遺跡
5. 東京　伊皿子遺跡
6. 東京 動坂遺跡
7. 水戸 大谷津A遺跡
8. 東京 虚空蔵遺跡
9. 千葉 中山新田遺跡
10. 千葉 水砂遺跡
11. 千葉 城の腰遺跡
12. 千葉 加曽利遺跡
13. 千葉 高根木戸遺跡

土器片錘重量別分布図

小林 1989 転載

図－52　土器片錘重量分布

や石錘とともに利用されることは何ら不思議はないし、それこそ素材は何であれこの重さの異なる『ふたつのセット』こそが「錘」としての用途の大きなヒントになるかも知れないのである。

注1. 岡村　淳 1981「再利用土器片について」『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書』 同調査団
「土製円板という名称は、土器片を再利用したものをさす上で必ずしも適当なものとは思えず、「土器片盤」等の名称により妥当性を感じるが・……」を支持する。

注2. 川吉謙二 1995「高砂町遺跡出土の土製円板」『のじぎく文化財だより』第34号(財) のじぎく文化財保護研究財団

注3. 小野真一他 1982『修善寺大塚』修善寺町教育委員会

注4. 兼康保明 1988「中・近世の小型円板とその用途」斎藤忠先生頌寿記念論文集『考古学叢考』吉川弘文館

注5. 小林達雄 1977 『日本原始美術大系』 1 講談社
1988 『古代史復元』3 講談社

注6. 西田正規 1989 『縄文の生態史観』東京大学出版会

注7. 戸沢充則 1994 『縄文時代研究事典』 東京堂出版

注8. 渡辺 誠 1973 『縄文時代の漁業』 雄山閣
1976 「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』 26

注9. 注1に同じ

注10. 小林謙一 1989「縄文時代中期前葉段階の土器片錘にみる生業活動」『古代文化』 第41巻第4号

注12. 植松章八 1971『富士宮市史』上巻 富士宮市

注13. 小笠原好彦 1983「編物・布」『縄文文化の研究』7 雄山閣

C．土　　偶

土偶の右足の欠損品を１点見る（図－53)。第Ⅱ調査区の出土で、長径3.2cm、短径2.5cmの楕円柱状のもので、およそ3cmが残っている。赤褐色で焼成は良好であるが、胎土には砂、長石、石英などが混じり、精選された感じは受けない。出土地点は第Ⅱ調査区のなかでは堀之内式土器の卓越した場所にあり、おそらく当該期のものと思われる。

本市には「安養寺の土偶」の逸品があり、実測図を『静岡県史（注１)』説明を『富士宮市の文化財（注２)』より紹介しておきたい。

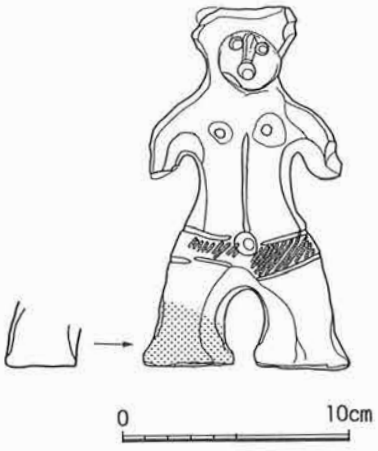
安養寺の土偶

昭和57年８月25日　市指定有形文化財
考古資料
杉田中村遺跡

幕末の頃、用水の施設工事中に３体の土偶が出土したと言う。現存するものは１体のみであるが、一般に土偶は破片で発見されることが多く、完形のものはきわめてめずらしい。県内では榛原郡中川根町上長尾遺跡出土例（晩期）とともにわずか２例を数えるに過ぎない。縄文後期前葉堀之内Ⅰ式期のものと思われるが、顔を突き出して円形につくった非写実的なモチーフに特徴がある。全面朱で塗彩したらしい痕跡を残し、縄文人が祈りを込めた呪術具にふさわしいものと言える。
全長16.5cm

注1. 静岡県 1992 『静岡県史』 資料編3 考古三

注2. 富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の文化財』 第三刷



図－53　土偶片．及び安養寺の土偶実測図

D．石　　器

本調査で出土した石器は以下の20類である。

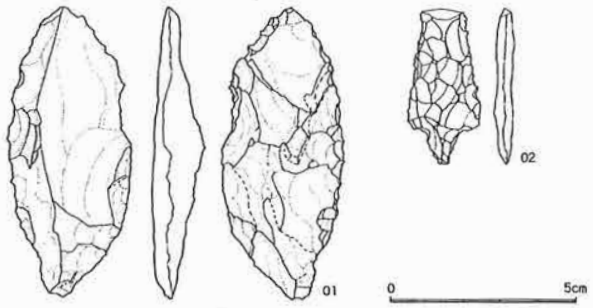
1．尖頭器
2．石　鏃
3．石　錘
4．石　皿
5．蜂の巣石
6．磨石類
7．敲　石
8．磨り面をもつ敲石
9．台　石
10．特殊磨石
11．打製石斧
12．磨製石斧
13．スクレイパー類
14．石　錐
15　凹　石
16．砥　石
17．石　鋸
18．石　匙
19．硬玉製大珠
20．石　棒

なお、掲載される挿図の縮尺は次のとおりである。

2／3　尖頭器．石鏃．石錐
1／3　石錘．磨石類．敲石．磨り面をもつ敲石．特殊磨石．打製石斧．磨製石斧．スクレイパー類．凹石．石鋸．石匙．硬玉製大珠
1／5　石皿．蜂の巣石．台石．砥石．石棒

1．尖頭器（図－54）

尖頭器は2点が出土している。01は第Ⅱ次概報（注1）に紹介される。「富士黒土層出土の石器．9尖頭器（E d）両面加工の粗製葉形尖頭器であり、基部に若干の舌を作り出す。風化強。縄文時代早期の所産であるとしておきたい。」頁岩製で、法量は長さ7.7cm、幅3.3cm、厚さ1.4cm、重さ285gを測る。さらに実測図の所見欄には表面は風化が進み黄褐色のパチネーションを吹いている。若干柄を作り出している。と付記されている。02は有舌尖頭器である。第Ⅴ調査区の栗色土層から富士黒土層にかけての部分より出土して浮遊状況にあり、関連遺物もない。硬砂岩製で両面より丁寧な調整がなされ、側縁は直線的にはっきりとした鋸歯状となる。尖頭部を欠くがかなりの長身が予想され、舌部も長く基部の返しもしっかりしていて全体的にシャープな感じを受ける。法量は長さ(4.1cm)、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ4.0g、長さを復原すると6.5cm位である。



図－54　尖頭器実測図

とにかく本地域の旧石器時代は全く不透明で、土器で遡ると若宮遺跡の表裏縄文系土器群の終末までである。有舌尖頭器にははっきりとした併出遺物がつかめないことが多く、遺跡と出土土器の上限を挙げておくと以下である。

遺跡名	出土土器	数量
1．滝　戸	縄文尖底土器	1
2．若　宮	表裏縄文土器	4（注2）
3．月の輪平	撚糸文・押型文	1（注3）
4．上石敷	撚糸文土器	1（注4）

注1．富士宮市教育委員会 1978 『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅱ次)概報』
注2．富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』
注3．富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群』
注4．富士宮市教育委員会 1985 『上石敷遺跡』

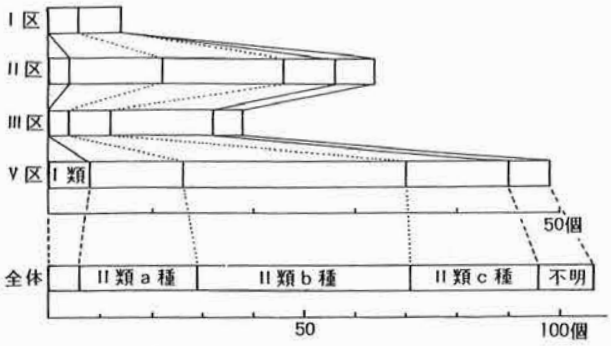
2．石鏃（図－57～59）

石鏃は107点で、基部の不明な11点（097～107）を除くと全て無茎鏃である。また、いずれも打製であるが、020には両面より局部磨製がなされている。基部の形状で2類される。

Ⅰ類　基部の直線的な平基無茎鏃（001～006）。
Ⅱ類　基部に抉入のある凹基無茎鏃（007～096）。

Ⅰ類6点、Ⅱ類90点、比率は1：15でⅡ類凹基無茎鏃が圧倒している。なお、そのⅡ類は基部の抉入の長短でさらに3種される。

Ⅱ類a種　全長に対する抉入の割合1/6以下（007～029）。
Ⅱ類b種　全長に対する抉入の割合1/4～1/5（030 ～071）。
Ⅱ類c種　全長に対する抉入の割合1/2以上～1/3（072～096）。



図－55　石鏃出土区一覧

Ⅱ類a種23点、同b種42点、同c種25点で、抉入が深く脚の長いc種が目立ち、分類上ではa種にひけをとらない占め方を見せる。そして、これらはまだ数値的に測れない抉入、側縁の形状でも細分される（図－56）。

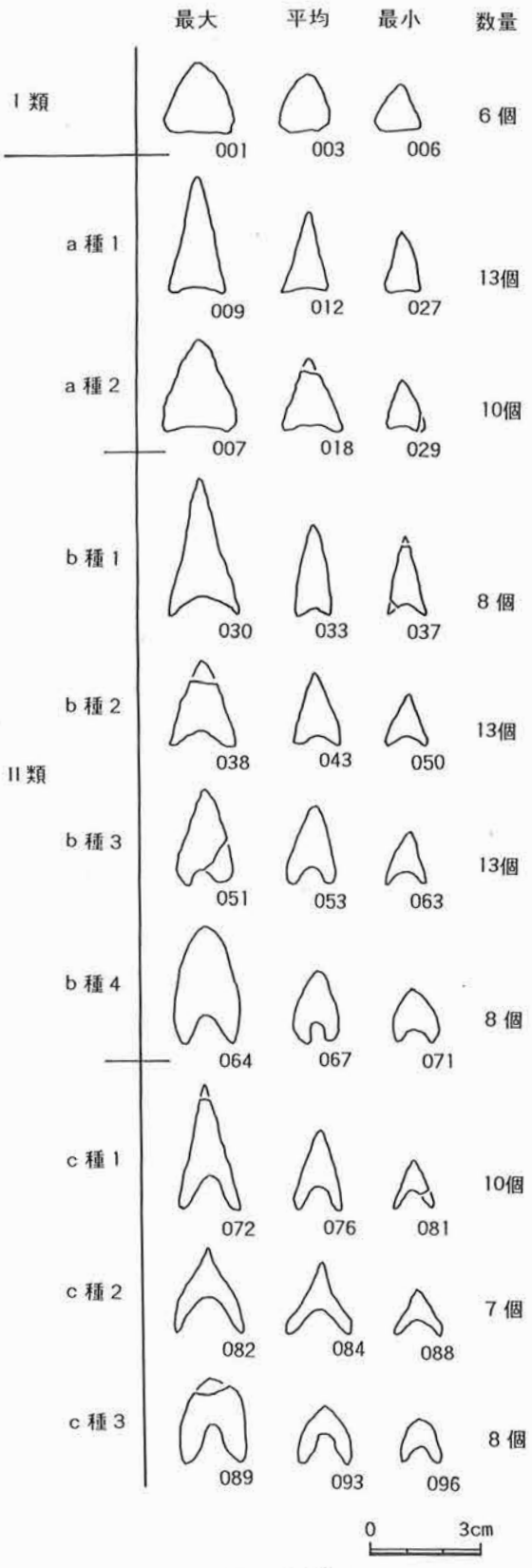
Ⅰ類は相変わらず長さのない正三角形状の分厚いボテッとした感じのものである。およそ「刺突」という感じに欠け、石鏃としてⅡ類の凹基式石鏃の普遍的なあり方を見ると、三角形状のスクレイパーの可能性を探る必要も出てこよう。なぜならこうしたⅠ類の断面形は往々にして片面の調整が粗く、左右が対象とならない例が多いのである。

ここで、厚さの平均値を示すと、Ⅰ類0.49cm、Ⅱ類a種0.38cm、Ⅱ類b種0.35cm、Ⅱ類c種0.29cmで、やはりⅠ類が極端に厚く、Ⅱ類は抉入の深度に従って徐々に薄い作りになっている。

Ⅱ類a種1は二等辺三角形状の長身のものである。Ⅱ類a種2は正三角形状のもので、前述の平均値が示すように比較的厚さをもつものが含まれている。大形品が頁岩製である。

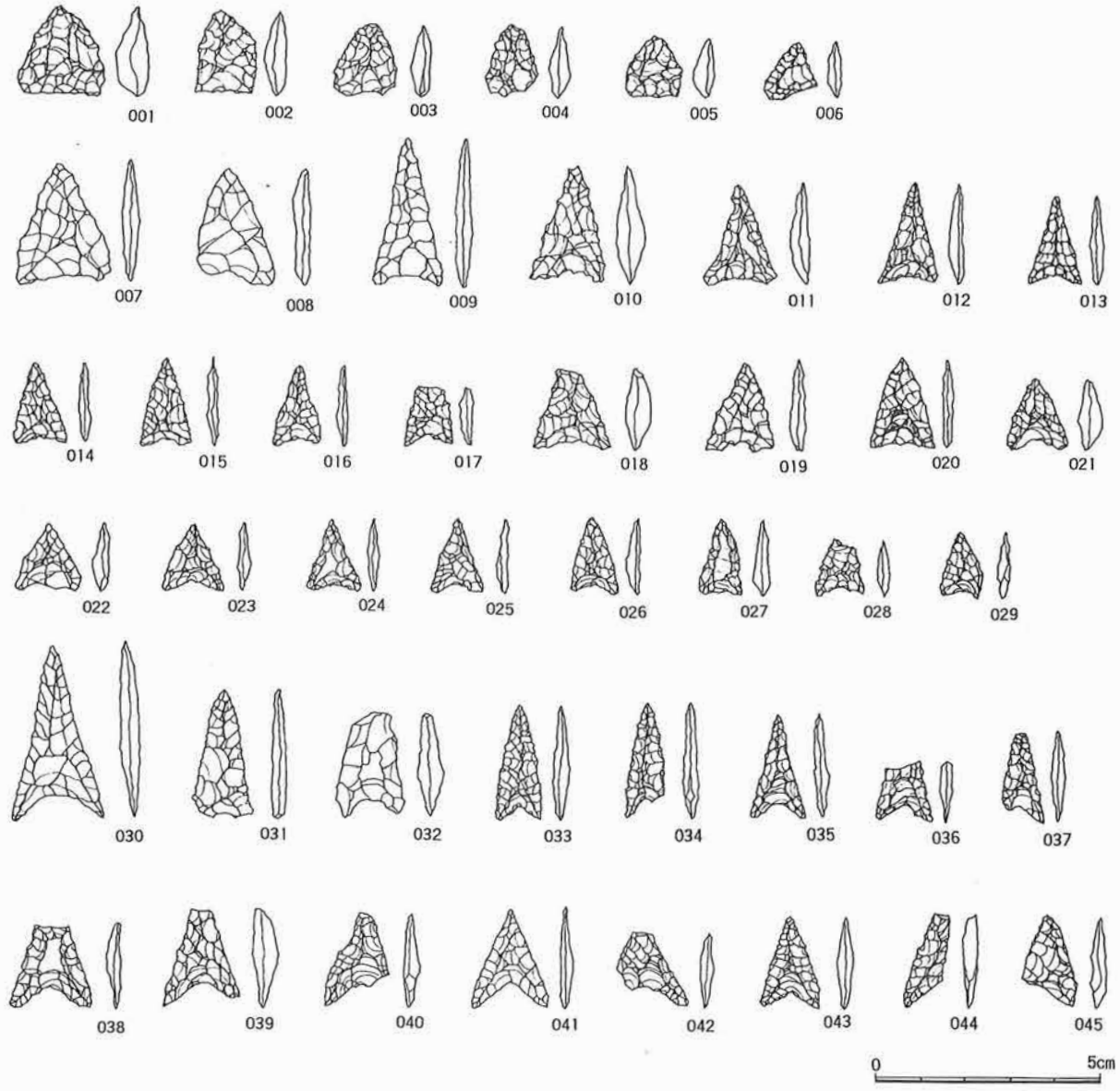
Ⅱ類b種は資料全体の43%を占め、量も多いこともあって形状の変化も多い。Ⅱ類b種1は長身で脚部を広げた安定した形である。大形から中形品に頁岩製を見るが、作りは丁寧である。Ⅱ類b種2は正三角形の抉りが深くなったもので、全体的には湾曲気味に抉られるものが主体であるが、なかには鋭角に切られているものもある。Ⅱ類b種3は幾分長身気味の身の部分から脚が内側に閉じた鍬形鏃風のものである。Ⅱ類b種4は064に代表されるように作りが非常に丁寧で、側辺が弧状となって丸味をもつが、断面は薄く鋭い。

Ⅱ類c種1は前述a種1、b種1の長身鏃のグループの脚が最も抉られているものでタワー風の形状がはっきりしてくる。大形品に頁岩が使用されるが頁岩製特有の粗雑感はなく、むしろ精巧さを感じる程である。Ⅱ類c種2は長身の身部の1／2程が抉り込まれ、「人」



図－56　石鏃分類図

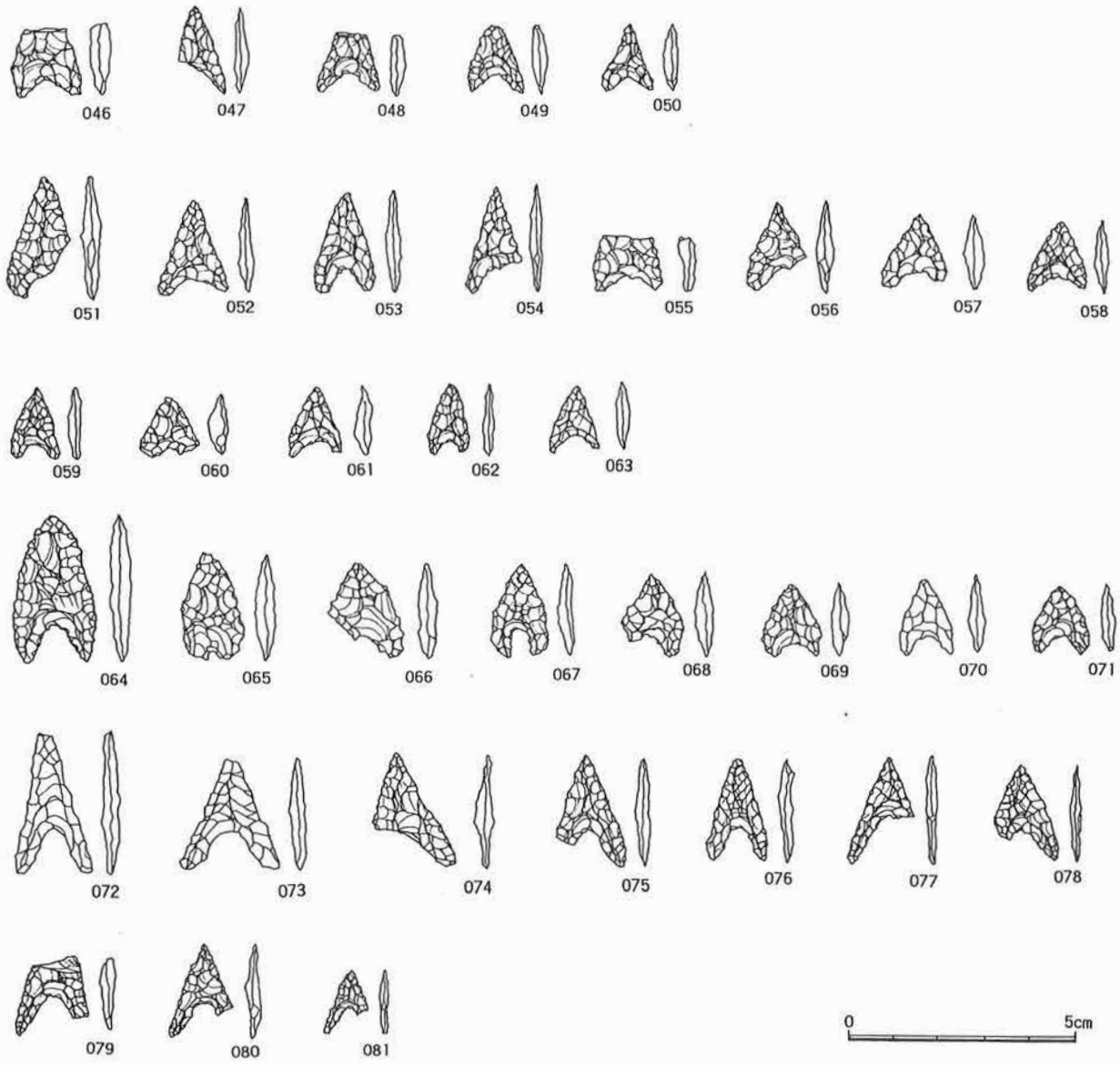
字状の形状となるものである。側縁は内側に湾曲するために尖端の鋭さがなお強調されて、最も精巧で特徴的である。全て黒曜石製である。Ⅱ類c種3も長身の身部の1／2近くが抉られるものであるが、c種2とは逆に側縁が丸くなるため円脚鏃風の形状となっている。これも黒曜石製で作りは精巧である。



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
001	V	I	黒曜石	1.9	1.8	0.75	2.1	
002	II	I	黒曜石	2.8	1.25	0.5	1.2	
003	II	I	黒曜石	(1.6)	(1.4)	(0.45)	(0.8)	
004	V	I	黒曜石	(1.5)	(1.1)	0.45	0.6	
005	V	I	黒曜石	1.3	1.2	0.5	0.7	
006	V	I	黒曜石	(1.3)	(1.2)	0.3	(0.3)	
007	II	IIc	頁岩	2.65	2.0	0.4	1.7	
008	I	IIa	頁岩	2.5	1.65	0.4	1.2	
009	V	IIa	頁岩	3.15	1.5	0.4	1.2	
010	II	IIa	黒曜石	3.0	1.65	0.7	1.6	
011	I	IIa	黒曜石	2.15	1.15	0.45	0.7	
012	II	IIa	黒曜石	2.2	1.3	0.35	0.4	
013	V	IIa	黒曜石	2.1	1.3	0.3	5.0	
014	II	IIa	黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.3	
015	V	IIa	黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.3	
016	II	IIa	黒曜石	1.7	1.0	0.3	0.3	
017	V	IIa	黒曜石	(1.5)	1.4	0.45	(0.8)	
018	II	IIa	黒曜石	(1.7)	1.7	0.6	(1.1)	
019	II	IIa	黒曜石	(1.9)	(1.45)	0.35	(0.6)	
020	V	IIa	黒曜石	2.0	1.5	0.35	0.5	
021	II	IIa	黒曜石	1.5	1.35	0.5	0.7	
022	III	IIa	黒曜石	1.4	1.4	0.4	0.5	
023	III	IIa	黒曜石	1.5	1.35	0.3	0.3	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
024	V	IIa	黒曜石	1.5	1.7	0.25	(0.2)	
025	I	IIa	黒曜石	1.6	1.2	0.25	0.3	
026	V	IIa	黒曜石	(1.7)	(1.1)	0.3	(0.3)	
027	V	IIa	黒曜石	1.65	0.9	0.4	0.4	
028	V	IIa	黒曜石	(1.1)	(1.1)	0.3	(0.3)	
029	II	IIa	黒曜石	(1.9)	(0.95)	(0.3)	(0.3)	
030	I	IIb	頁岩	4.3	2.0	0.45	1.8	
031	III	IIb	頁岩	1.75	1.75	0.3	0.6	
032	V	IIb	頁岩	(2.25)	1.5	0.55	(1.6)	
033	V	IIb	黒曜石	2.4	1.0	0.4	0.6	
034	II	IIb	黒曜石	(2.45)	(1.5)	0.4	(0.6)	
035	V	IIb	黒曜石	2.25	1.2	0.3	0.4	
036	V	IIb	黒曜石	(1.3)	(1.2)	0.3	(0.3)	
037	V	IIb	黒曜石	(2.0)	(1.85)	0.3	(0.4)	
038	I	IIb	黒曜石	1.8	1.8	0.3	0.7	
039	II	IIb	頁岩	(2.05)	(1.6)	0.55	(1.2)	
040	III	IIb	黒曜石	(2.0)	(1.8)	0.35	(0.5)	
041	II	IIb	チャート	1.15	1.6	0.3	0.5	
042	V	IIb	黒曜石	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.4)	
043	I	IIb	黒曜石	1.95	1.3	0.3	0.5	
044	V	IIb	黒曜石	(2.0)	(0.8)	0.3	(0.3)	
045	V	IIb	黒曜石	1.9	(1.2)	(0.35)	(0.6)	
046	V	IIb	黒曜石	(1.25)	1.0	0.3	(0.3)	

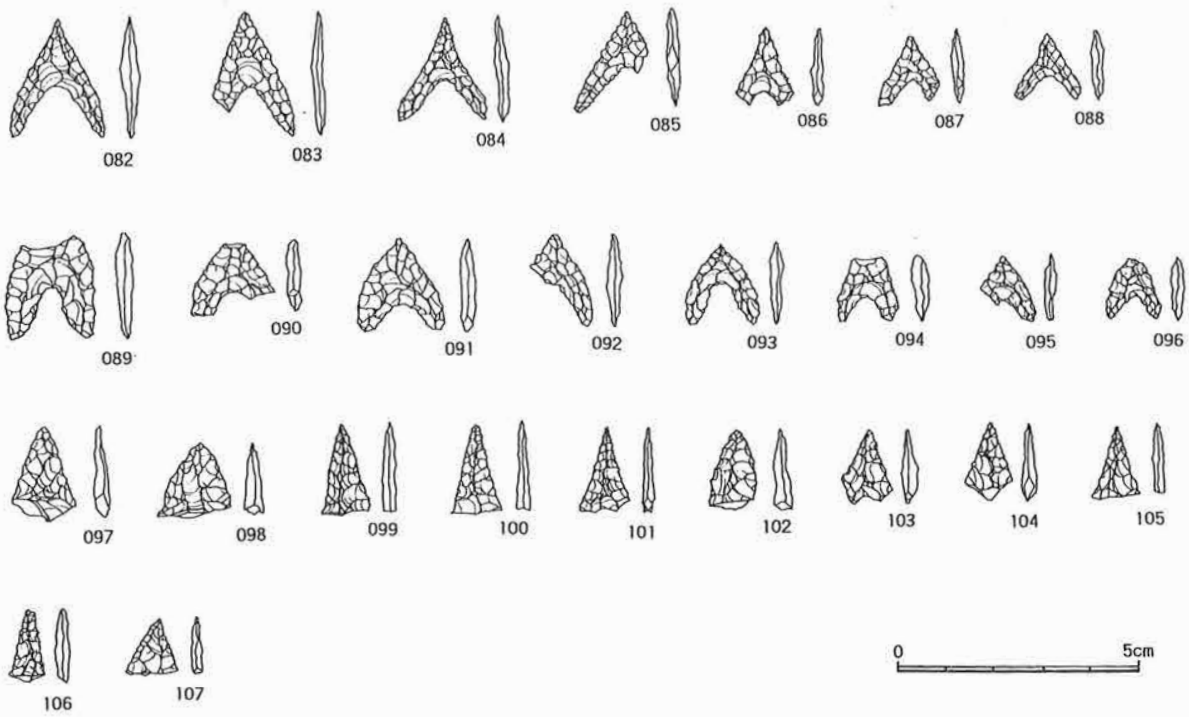
図－57　石鏃実測図－1



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
047	V	IIb	黒曜石	1.3	(0.9)	0.3	(0.3)	
048	V	IIb	黒曜石	1.3	1.4	0.35	0.4	
049	V	IIb	黒曜石	(1.4)	1.2	0.3	(0.3)	
050	V	IIb	黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.3	
051	II	IIb	黒曜石	2.6	(1.1)	0.3	(0.7)	
052	V	IIb	黒曜石	2.0	1.5	0.35	0.5	
053	V	IIb	黒曜石	1.9	1.15	0.3	0.4	
054	II	IIb	黒曜石	2.3	(1.15)	0.25	(0.3)	
055	II	IIb	黒曜石	1.25	1.5	0.3	0.5	
056	V	IIb	黒曜石	2.0	(1.2)	0.35	(0.7)	
057	II	IIb	黒曜石	(1.55)	(1.4)	0.4	(0.5)	
058	V	IIb	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.3	
059	V	IIb	黒曜石	1.55	1.05	0.2	0.3	
060	III	IIb	黒曜石	(1.35)	(1.25)	0.45	(0.5)	
061	III	IIb	黒曜石	(1.5)	(1.15)	0.4	(0.4)	
062	V	IIb	黒曜石	1.55	0.85	0.3	0.2	
063	II	IIb	頁岩	1.5	1.1	0.3	0.3	
064	II	IIb	黒曜石	3.2	1.8	0.45	2.1	
065	II	IIb	黒曜石	2.35	1.3	0.5	1.0	
066	I	IIb	黒曜石	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.9)	
067	V	IIb	黒曜石	2.5	1.2	0.3	0.5	
068	II	IIb	黒曜石	1.8	(1.3)	0.4	(0.6)	
069	V	IIb	黒曜石	1.55	1.3	0.4	0.5	
070	V	IIb	頁岩	1.7	1.65	0.35	(0.4)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
071	II	IIb	黒曜石	1.95	1.7	0.3	0.3	
072	V	IIc	頁岩	(3.1)	1.7	0.4	(1.2)	
073	V	IIc	頁岩	(2.35)	2.15	0.3	(0.8)	
074	II	IIc	黒曜石	(2.0)	1.8	0.35	(0.9)	
075	V	IIc	黒曜石	2.4	(1.5)	0.3	(0.6)	
076	V	IIc	黒曜石	2.2	1.35	0.3	0.5	
077	V	IIc	黒曜石	(2.3)	(1.2)	0.2	(0.3)	
078	III	IIc	黒曜石	(2.0)	(1.25)	0.25	(0.3)	
079	V	IIc	黒曜石	(1.55)	(1.6)	0.35	(0.4)	
080	V	IIc	黒曜石	(2.0)	(1.35)	0.3	(0.3)	
081	III	IIc	黒曜石	1.8	(0.95)	0.3	(0.3)	
082	III	IIc	頁岩	2.4	1.9	0.35	0.6	
083	III	IIc	黒曜石	(2.0)	(1.8)	0.35	(0.5)	
084	V	IIc	黒曜石	2.1	1.9	0.3	0.4	
085	II	IIc	黒曜石	(2.0)	(1.0)	(0.3)	(0.3)	
086	II	IIc	黒曜石	(1.5)	(1.15)	(0.25)	(0.2)	
087	III	IIc	黒曜石	(1.5)	(1.1)	0.25	(0.2)	
088	III	IIc	黒曜石	1.35	1.3	0.25	0.2	
089	II	IIc	黒曜石	(2.5)	(0.85)	0.35	(0.4)	
090	V	IIc	黒石	(1.4)	(1.6)	0.3	(0.5)	
091	III	IIc	頁岩	1.75	1.75	0.3	0.6	
092	III	IIc	黒曜石	(1.8)	(0.95)	0.3	(0.3)	
093	II	IIc	黒曜石	1.6	1.5	0.25	0.3	
094	III	IIc	頁岩	(2.75)	(1.2)	0.3	(1.0)	

図－58　石鏃実測図－2



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
095	V	IIc	黒曜石	1.3	(0.9)	0.2	(0.2)	
096	III	IIc	黒曜石	1.25	1.1	0.2	0.2	
097	II	IIc	黒曜石	(0.9)	(1.2)	(0.35)	(0.5)	
098	V	IIc	黒曜石	(1.45)	(1.5)	(0.45)	(0.6)	
099	III	IIc	黒曜石	(2.3)	(1.0)	(0.3)	(0.3)	
100	II	IIc	黒曜石	(1.8)	(1.05)	(0.3)	(0.3)	
101	III	IIc	黒曜石	(1.7)	(0.95	0.3	(0.2)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
102	II	IIc	黒曜石	(2.1)	(0.9)	(0.4)	(0.3)	
103	V	IIc	黒曜石	(1.45)	(1.0)	0.3	(0.3)	
104	V	IIc	黒曜石	(1.5)	(0.9)	0.3	(0.2)	
105	II	IIc	黒曜石	(1.4)	(1.1)	(0.2)	(0.2)	
106	V	IIc	黒曜石	(1.4)	(0.7)	0.3	(0.1)	
107	III	IIc	黒曜石	(1.15)	(1.0)	(0.2)	(0.2)	

図－59　石鏃実測図－3

以上、10種に分類される石鏃に気付くことは、それぞれの種別において法量の大小が殆ど同じで、また出土量においても6～13個とあまり差のないことである。つまり、それぞれの形状でそれぞれの法量を持ち合わせていて、この種が大形、この種が小形であるというような規則制は感じられないのである。時期的な帰属関係はもう捉えられないが、Ⅱ類c種の長脚系の石鏃が第Ⅲ調査区に集中する傾向が窺える時、そこが曽利式土器の卓越した調査区であったことを関連付けられるであろうか。また特に調査面積の狭い第Ⅲ調査区に目立つ出土量は異常であるし、その6倍もの調査面積をもつ第Ⅰ調査区のたった7点の出土数は縄文中期にありがちな石鏃の減少傾向を差し引いても、これもまた異常なことである。(図－55)。

3．石錘（図－63～65）

石錘は94点が出土している。これらは縄掛けの刻みによって2類される。

Ⅰ類　擦り切りによる切目石錘（01～25）。

Ⅱ類　打ち欠きによる礫石錘（26～94）。

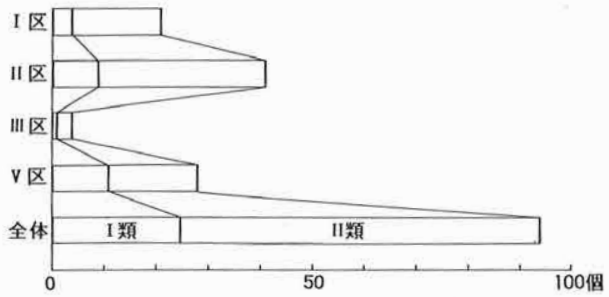
Ⅰ類25点、Ⅱ類69点で、Ⅰ類には打ち欠き後に擦り切りが施される02.17.20.24が含まれている。

石材はいずれも硬砂岩、砂岩、粘板岩など堆積岩系のいわゆる扁平な河原石が一般で、03.29など敲石の転用例もあるが、殆どそれらを直接に素材としている。縄掛けの方向はⅠ類がすべて長身の素材の長軸上に一対で施されるのに対して、Ⅱ類は基本的には長軸上に一対であるものの、80.81.88などの円形素材や、4方掛け？(39)、3方掛け(29.35.43.65)など特殊なものもあり、幾分統一感は薄れる。欠損は板状切離を特徴とする素材を用いることもあり製作課程上の敲打に起因するものが多く、明らかに使用による欠損を認めるものはごく稀である。

石錘の出土地区別状況は、以下のとおりである。

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
Ⅰ類	4	9	1	11	25
Ⅱ類	17	32	3	17	69
計	21	41	4	28	94

これを見ると第Ⅰ.Ⅱ調査区の全体的な出土量が目立ち、第Ⅴ調査区にⅠ類の占める割合が高いことが知



図－60　石錘出土区一覧

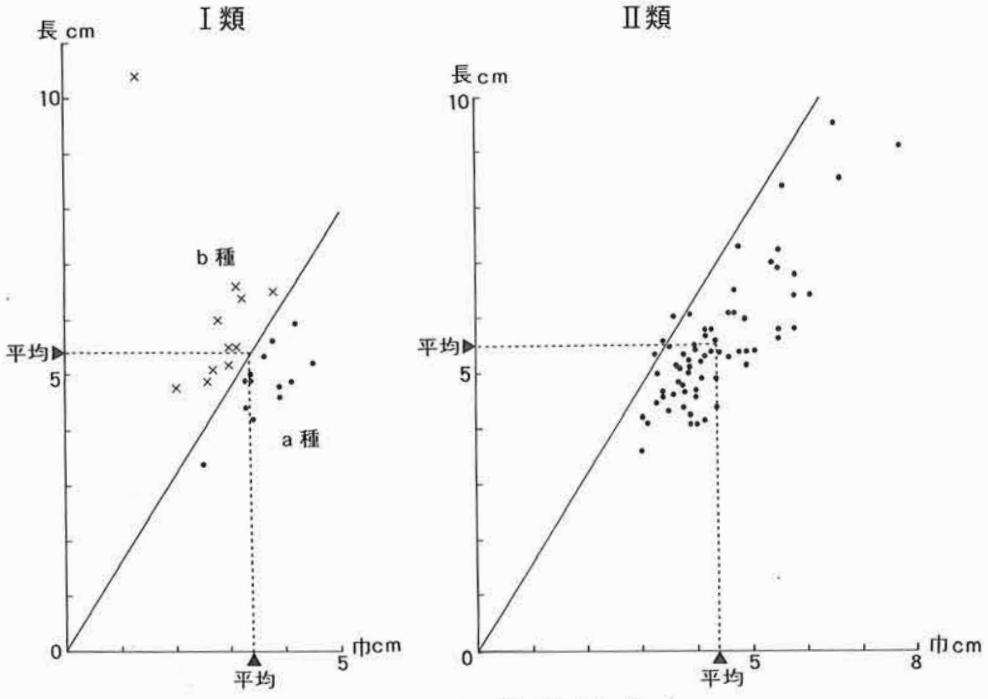
れる。単純に捉えれば第Ⅴ調査区が最も後期が優先される調査区であるから、Ⅰ類の切目石錘など、磨製によって作出される石錘類に転換が図られていく課程としても捉えられ、またこの出土地区別状況は各出土地区における中期土器群と堀之内式土器の出土比率（図－27）に符号しているとも言えるのである。

次に法量を比較すると、次のとおりである。

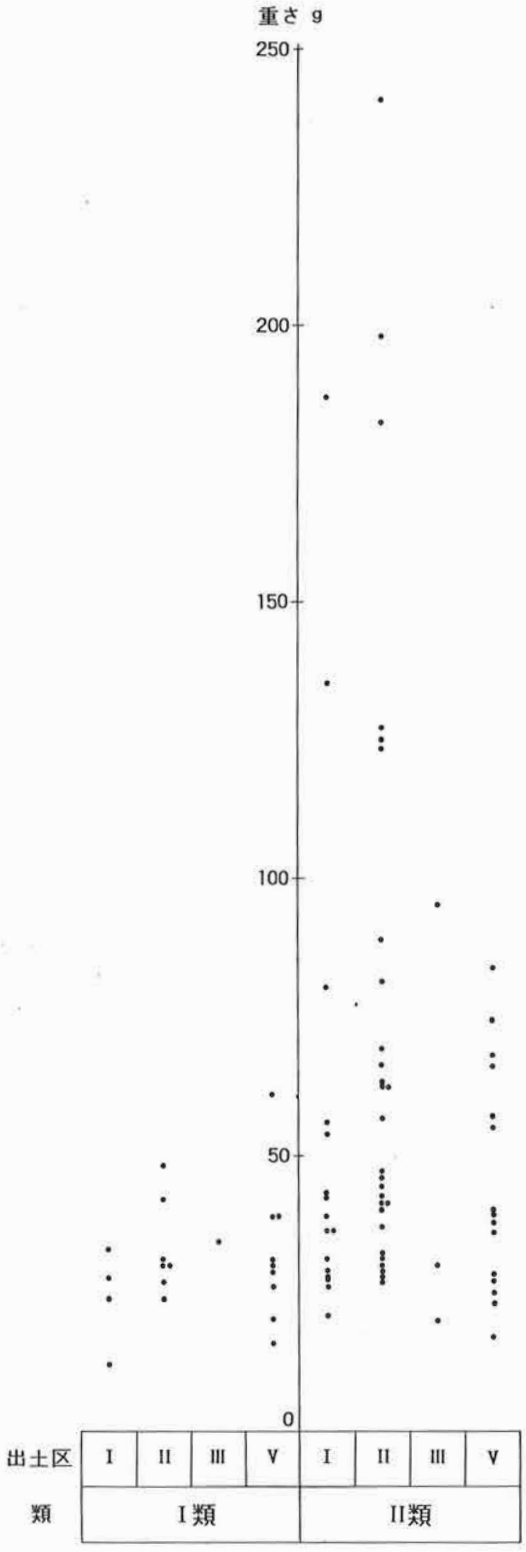
		長	幅	厚cm	重g
Ⅰ類	平均	5.4	3.4	1.1	31
	最大値	10.5	4.5	1.8	61
	最小値	3.2	1.8	0.8	12
Ⅱ類	平均	5.5	4.4	1.5	59
	最大値	9.5	7.7	2.6	241
	最小値	3.6	3.0	0.9	17

Ⅰ類は小振りで細長く、また最大、最小値の変動巾が大きい。Ⅱ類は長さでⅠ類と近いにも関わらず、幅が太く、厚く肥満した小判形で、法量は小から大へ正比例して膨らんでいく傾向にある。そこで変動巾の大きいⅠ類を図に落とすと（図－61）、平均値を境にⅡ類の小形品のあり方と殆ど差のないａ種と、より細長いことが強調されたｂ種に分けられる。こうした形状差が、機能差として論議を呼ぶ所以であるかも知れないが、重量分布（図－62）を見ると、Ⅰ類ｂ種もⅠ類ａ種ならびにⅡ類小形品（平均35g）と同じ分布を示し、形状差ほど重量に差をもつものではないことが知れる。つまり、それは錘として幅の欲しくない必然性が、擦り切り技術の進展によって細長い素材の縄掛けを可能にして行ったことの反映と見るべきで、ここではそのような小形品だけに擦り切り技術が施されて、切目石錘として残っていく事実を捉えるべきである。北陸地方で切目石錘は30g台が最も多く全体の約20％であり、10～60ｇが全体の約75％を占めると言う統計は（注１）、全国的に充分に共通するであろうし、本遺跡でも違いはない。これを大方が漁網用錘として認めるなか、そうした法量こそが漁網用錘に必要であったとするべきで、そこでは共通の法量を占めるⅡ類小形品が漁網用錘であった可能性も高いし、それ故に小形品に擦り切りが施されていったと考えることは妥当に思えるのである。

そうした時Ⅱ類大形品のあり方が常々問われる訳であるが、これについてはすでにもじり編み用の錘を唱える部分もある（注２）。しかし、その性格上明確な分類基準が設けられるはずはなく、錘として漁網用、編み物用の機能を内諾しながらその可能性を指摘するに留まっていることが多いようである。縄文前期に176点の礫石錘を出土する沼津市平沼吹上遺跡（注３）で



図－61　石錘法量分布



図－62　石錘重量分布

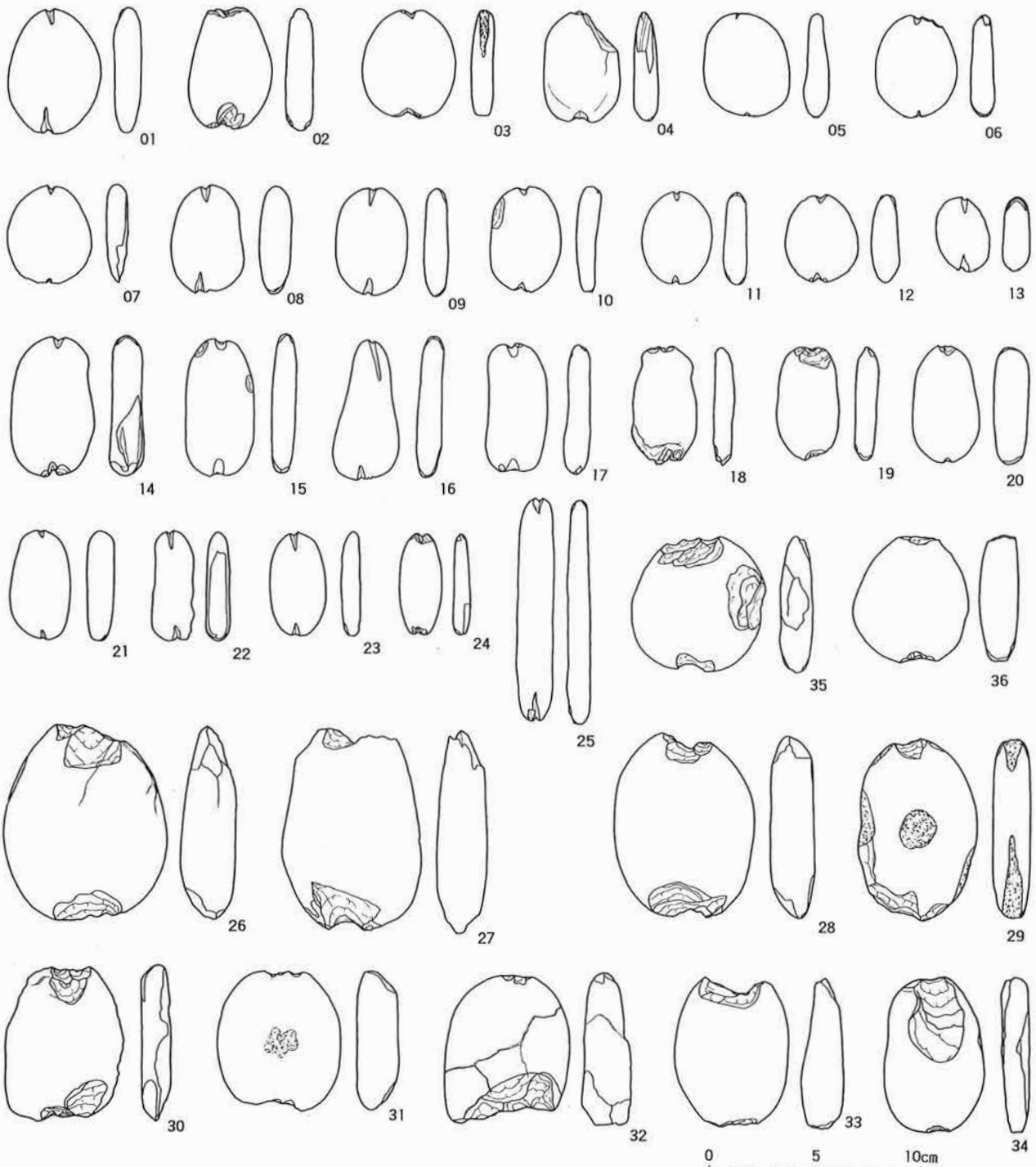
も200g前後の重量をもつものが数点含まれ、それらは他と異なり短軸両端の打ち欠けで、研磨や擦痕が看取されるという。つまり、それは使用に際して一度だけ縄が掛けられる漁網用錘と違い、縄をからげたりほどけないように木などで止めたり、再々、手に触れられる編物用錘の使用痕とも捉えられ、遺跡前面に広がる浮島沼における漁網の他、湖沼に自生するヨシ、アシの類をもじり編みしたウケ、エリ、ヤナ漁も予想されるし、それ以上に敷物とか遮断壁としてのスやゴザがもっと編まれていたとしても良いはずである。

本遺跡のⅡ類大形品にそうした痕跡を看取することはできないが、それでも眼下の滝戸渓谷やその向こうに広がる古大宮湖（注４）の存在は、平沼吹上遺跡に近い自然条件であるし同様の生産手段はあってしかるべきである。このような自然条件から狩野川上流の河岸段丘上の修善寺大塚遺跡の48点（法量の記述がなく不明であるが200g前後と思われる資料５.６点、注５）、狩野川支流の大見川段丘上の中伊豆町上白岩遺跡の８点（法量の記述がなく不明であるが200g前後と思われる資料１点、注６）、富士山より下る樹根状台地の末端で両側を小河川（天間沢・ジンゲン沢）が下る富士市天間沢遺跡の26点（最重量113gの１点、注７）、新富士火山の溶岩流をせき止めるような幅広い台地上に湧水源を有する千居遺跡に石錘が皆無である（注８）、というような事実を知ると、石錘のあり方はそうしたひとつひとつの遺跡が占有する自然条件、つまり生産エリアのなかでの「水産域」のあり方がそのまま、それらの出土状況に反映されているように思えるのである。

注1. 山本直人 1988「北陸地方の漁網錘」『季刊考古学』 25 雄山閣
注2. 渡辺 誠 1973 『縄文時代の漁業』 雄山閣
1976「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』26
1978『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告』勝山市文化財調査報告３
注3. 沼津市教育委員会他 1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』
注4. 植松章八 1993「富士宮市の遺跡と文化」『富士宮市の遺跡』富士宮市教育委員会
注5. 修善寺町教育委員会 1982 『修善寺大塚』
注6. 中伊豆町教育委員会 1979『上白岩遺跡発掘調査報告書』
注7. 富士市教育委員会 1984『天間沢遺跡Ⅰ』1985『天間沢遺跡Ⅱ』
注8. 加藤学園考古学研究所 1975 『千居』

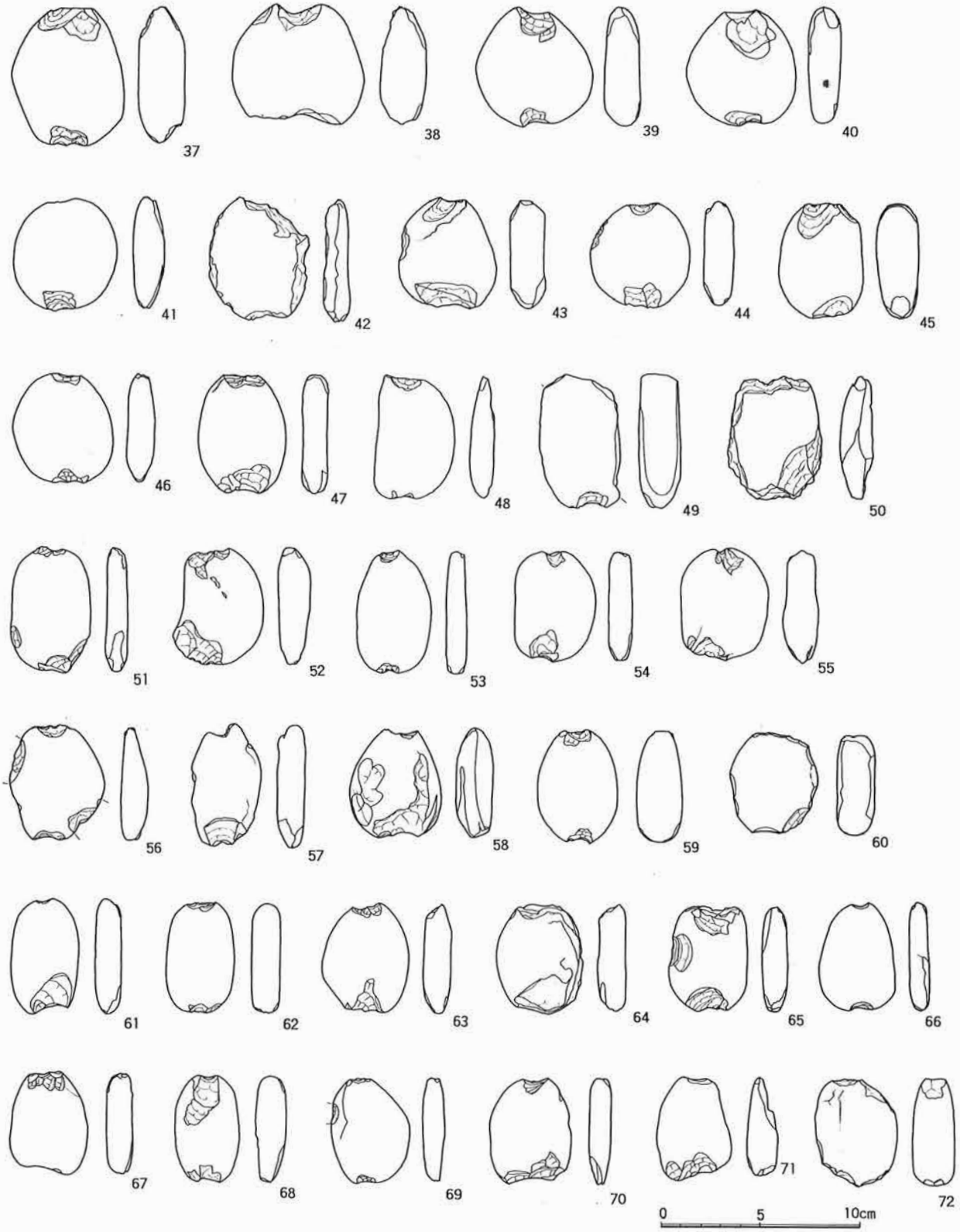
４．石皿（図－92～95）

石皿は明瞭な凹みをもつものと盤状のものがあり、早い段階では盤状のものが有利であるが、おそらく凹みをもつものも軌をひとつにしていたと思われ、その後、定型化しない盤状のものは凹みをもつものと用途の差をもっていたことを指摘するむきもある（注１）。確かに縄文時代早期の石器構成を備える若宮遺跡（注２）でも両方ははっきりと確立してなっており、縄文時代中・後期まで遺存が認められる特殊磨石とセット関係を取り沙汰される盤状のものに対して、今ここで敢えて石皿に分類しなくても、それは大きく台石の一部に置き（台石の項を参照）、ここでは通常言われる



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	II	Ia	硬砂岩	5.9	4.3	1.3	48	
02	II	Ia	硬砂岩	5.6	3.8	1.1	42	
03	III	Ia	硬砂岩	5.1	4.5	1.0	34	
04	V	Ia	硬砂岩	5.3	3.6	1.2	(29)	1/6欠
05	V	Ia	硬砂岩	4.9	4.1	1.1	31	
06	V	Ia	硬砂岩	4.8	3.9	1.1	30	略完形
07	II	Ia	硬砂岩	4.6	3.9	(1.0)	(24)	1/3 欠
08	V	Ia	硬砂岩	5.0	3.4	1.5	39	
09	V	Ia	硬砂岩	5.0	3.4	1.1	29	
10	V	Ia	硬砂岩	4.9	3.3	0.9	20	略完形
11	II	Ia	硬砂岩	4.4	3.3	1.1	24	
12	V	Ia	硬砂岩	4.2	3.4	1.3	26	
13	V	Ia	砂岩	3.4	2.5	1.3	16	
14	V	Ib	硬砂岩	6.5	3.8	1.6	61	略完形
15	II	Ib	硬砂岩	6.4	3.2	1.1	30	
16	II	Ib	硬砂岩	6.6	3.1	1.2	31	
17	II	Ib	砂岩	6.0	2.8	1.2	30	
18	II	Ib	硬砂岩	5.5	3.2	0.9	27	
19	I	Ib	硬砂岩	5.2	3.0	1.0	24	
20	V	Ib	砂岩	5.5	3.2	1.8	39	
21	I	Ib	硬砂岩	5.1	2.8	1.3	28	
22	II	Ib	硬砂岩	5.1	(2.0)	1.3	(17)	1/4欠
23	V	Ib	硬砂岩	4.9	2.6	0.9	(15)	1/6欠
24	I	Ib	硬砂岩	4.8	2.0	0.8	12	略完形
25	I	Ib	硬砂岩	10.5	1.8	1.1	33	
26	II	II	硬砂岩	9.1	7.7	2.6	241	
27	II	II	硬砂岩	9.5	6.5	2.4	198	
28	I	II	砂岩	8.5	6.6	2.1	187	
29	I	II	硬砂岩	8.4	5.6	1.8	135	3方擦切、敲
30	I	II	硬砂岩	7.2	5.6	1.3	80	
31	II	II	砂岩	6.4	5.8	2.0	125	
32	II	II	砂岩	6.8	5.8	2.4	(107)	1/5欠
33	III	II	砂岩	7.0	5.4	2.0	95	
34	II	II	硬砂岩	7.3	4.8	1.3	62	

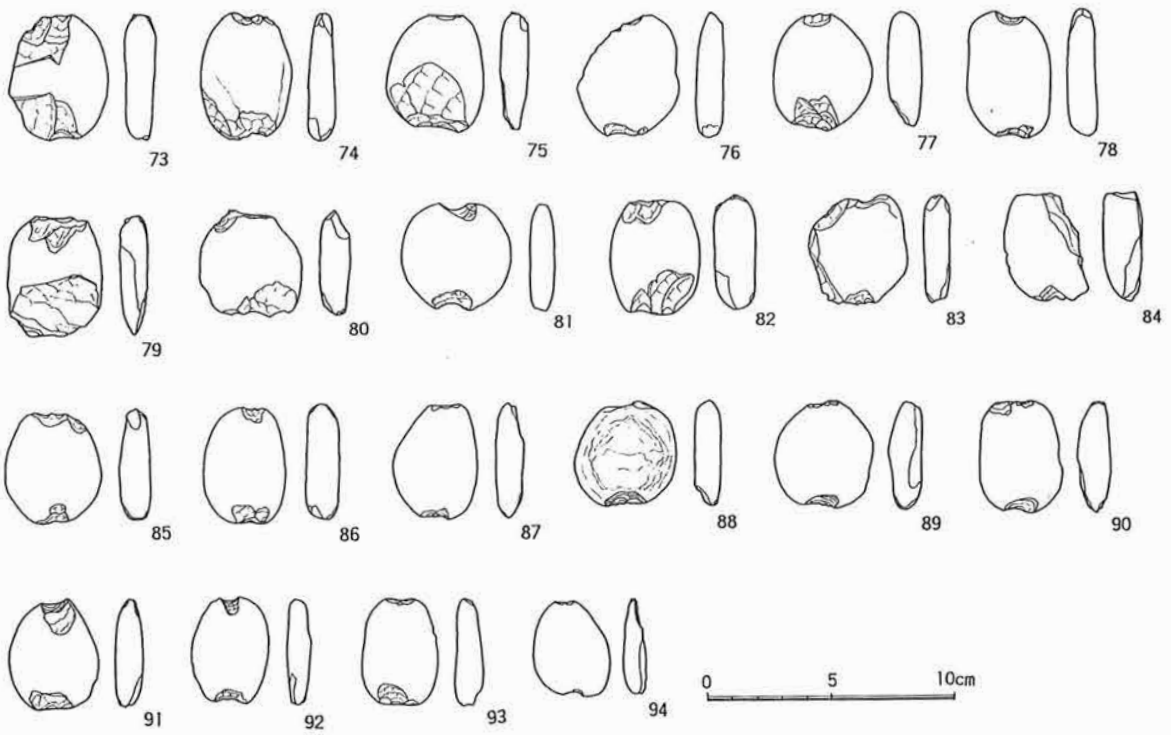
図－63　石錘実測図－1



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
35	II	II	硬砂岩	6.4	6.1	1.5	81	3方縄掛け
36	V	II	砂岩	5.8	5.5	1.9	89	
37	II	II	硬砂岩	6.9	5.5	2.3	127	
38	II	II	砂岩	6.5	5.7	2.4	124	
39	V	II	砂岩	5.8	5.7	1.8	84	
40	II	II	砂岩	5.6	5.5	1.6	69	
41	V	II	硬砂岩	5.5	5.2	1.6	66	
42	II	II	硬砂岩	6.0	4.9	1.2	47	3方縄掛け
43	II	II	砂岩	5.4	4.8	1.7	66	3方縄掛け
44	II	II	砂岩	5.2	4.9	1.6	62	
45	V	II	砂岩	5.7	4.2	2.1	74	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
46	II	II	硬砂岩	5.4	4.9	1.4	56	
47	II	II	硬砂岩	5.8	4.3	1.3	51	
48	II	II	砂岩	6.1	3.9	1.2	42	
49	I	不可	砂岩	(6.6)	(4.0)	2.1	(87)	1/3欠
50	I	II	砂岩	6.1	4.7	1.6	54	
51	I	II	粘板岩	6.1	3.9	1.1	42	
52	V	II	砂岩	5.8	4.2	1.7	57	
53	I	II	硬砂岩	5.1	3.7	1.0	36	
54	V	II	硬砂岩	5.4	4.0	1.2	39	
55	II	II	砂岩	5.6	4.4	1.8	63	
56	II	II	硬砂岩	6.1	4.6	1.4	44	

図－64　石錘実測図－2



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
57	I	II	硬砂岩	6.0	3.6	1.4	39	
58	V	II	砂岩	5.3	4.6	1.8	55	
59	V	II	砂岩	5.5	4.0	2.3	68	
60	I	II	礫岩	4.9	4.4	1.9	56	脆弱
61	V	II	砂岩	5.6	3.4	1.3	38	
62	I	II	砂岩	5.5	3.5	1.4	43	
63	II	II	硬砂岩	5.4	4.3	1.4	41	
64	II	II	粘板岩	5.4	4.4	1.8	40	剥落顕著
65	I	II	硬砂岩	5.2	3.9	1.1	36	3方縄掛け
66	I	II	硬砂岩	5.3	3.8	1.0	29	
67	V	II	硬砂岩	4.7	3.8	1.3	40	
68	II	II	硬砂岩	5.3	3.3	1.5	37	
69	II	II	硬砂岩	5.1	3.9	1.1	31	
70	II	II	硬砂岩	5.3	4.2	1.1	30	
71	V	II	砂岩	4.8	3.7	1.5	(37)	1/5欠
72	II	II	礫岩	5.2	4.1	2.1	57	脆弱
73	II	II	砂岩	5.0	3.9	1.2	(33)	1/5欠
74	V	II	硬砂岩	5.1	3.8	1.1	27	
75	V	II	硬砂岩	4.7	4.0	1.0	28	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
76	II	II	硬砂岩	4.9	4.0	1.1	(26)	1/3欠
77	II	II	硬砂岩	4.6	4.0	(1.5)	(36)	1/4欠
78	I	II	硬砂岩	5.0	3.3	1.1	31	
79	II	II	硬砂岩	4.8	3.7	1.1	(25)	1/4欠
80	II	II	硬砂岩	4.2	4.2	1.2	28	
81	III	II	硬砂岩	4.4	4.4	0.9	30	
82	V	II	砂岩	4.6	3.6	1.6	36	
83	V	II	硬砂岩	4.1	3.9	1.0	23	
84	I	不可	砂岩	(4.2)	3.0	1.5	(30)	1/2欠
85	II	II	凝灰岩	4.4	3.8	1.3	32	
86	II	II	礫岩	4.7	3.4	1.3	29	
87	V	II	砂岩	4.6	3.4	1.1	25	
88	I	II	粘板岩	4.1	4.0	1.1	26	脆弱
89	I	II	硬砂岩	4.3	3.9	1.4	28	
90	II	II	硬砂岩	4.5	3.3	1.4	27	
91	I	II	硬砂岩	4.3	3.5	1.1	21	
92	V	II	硬砂岩	4.1	3.1	0.9	17	
93	III	II	硬砂岩	4.2	3.0	1.1	20	
94	V	II	硬砂岩	3.6	3.0	(0.9)	(14)	1/3欠

図－65　石錘実測図－3

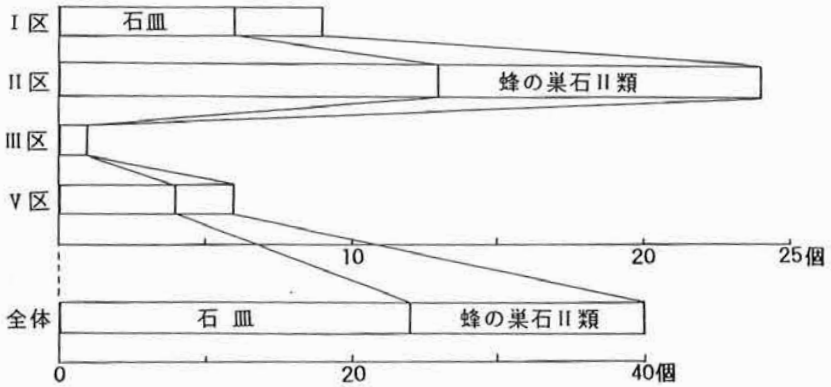
「扁平な礫の中央に浅い凹みのある大型の石器（注3）」を石皿にしている。なお、石皿を併用する蜂の巣石II類16点は省いている。

本遺跡で確認される石皿は24点である。そのうち完形（略も含める）は3点(01.04.05)で、他は全て欠損していて「石皿片」とする方が適切に思える程である。偶然の割礫を感じさせない程に小破片となった石皿のあり方から、故意破砕による祭祀儀礼が以前から指摘されているが（注4）、確かに異常なほど他の石器より欠損率は高い。特に蜂の巣石II類を合わせた欠損率は40点中37点で9割を楽に超え、完形でないことが通常とさえ言える。また台石もそうした性格を充分に追随している。

調査区毎の石皿と蜂の巣石II類の出土数を挙げると以下のとおりである。

	I区	II区	III区	V区	計
石皿	6	13	1	4	24
蜂の巣石II類	3	11	0	2	16
計	9	24	1	6	40

石皿と蜂の巣II類がいかに親密な相関関係を保っているかが知れ、数字的には石皿として使用された40点のうち、4割が蜂の巣石に併用されていたことになる。また、この両者を合わせた出土率は第I．II調査区が40点中33点と全体の80%強を占め、異常な程特徴的な



図－66　石皿と蜂の巣石Ⅱ類の出土区一覧

値を示す（図－66）。この要因については第Ⅱ次調査概報（注５）に若干触れられるが、第Ⅴ調査区終了時点で知れることは、第Ⅰ．Ⅱ調査区が曽利式前後の土器型式の優先地域で、石皿、蜂の巣石の出土の少ない第Ⅴ調査区は堀之内式土器の優先地域であることと、それに伴う集・配石の形態の違いが可能性として挙げられるが、他の要因も踏まえなくてはならない大きな問題も含み、多くを語れないのが残念である。なお追記するが、台石については出土状況に大きな異常は全くない。

以上の石皿は通例のように凹みの状況によって５類に分けられる。

Ⅰ類　凹みが浅いもの（01～04）。

Ⅱ類　縁を残して弓状に凹むもの（05～19）。

Ⅲ類　縁から直接に凹む小形のもの（20.21）。

Ⅳ類　縁が立ち上がり、凹みが深く平坦に近いもの（22.23）。

Ⅴ類　中央が高くなった、いわゆる「中高石皿」と思われるもの（24）。

その数はⅠ類４点、Ⅱ類15点、Ⅲ類２点、Ⅳ類２点、Ⅴ類１点で、Ⅱ類が60％以上を占めて、一般的な石皿のあり方を示している。そして、そのあり方は蜂の巣石も同調している。

Ⅰ類は安山岩や花崗岩などの硬質な素材が利用されることもあり、凹みが浅く一様に厚い。

Ⅱ類は量も多いことからさらに細分が可能である。

Ⅱ類ａ種（05～13）は使用面に沿った楕円形から卵形の薄く平たい素材が利用され、比較的多孔質の素材が選ばれている。これらが最もポピュラーなものである。

Ⅱ類ｂ種（14）は縁辺部が敲打による剥離痕で埋めつくされ、使用面の凹部も球形状で、厚さも極端であり他とは異質な感じを受ける。外縁の形状は楕円形である。

Ⅱ類ｃ種（15～17）は素材の外縁が角張って方形に近いものであるが、使用面は楕円にローリングされるⅡ類ａ種と同様のものである。

Ⅱ類ｄ種（18.19）は両面使用のものである。比較的硬質の素材で、当初より両面使用が意図されているのか、Ⅱ類ａ種などの縁部断面形が「く」字状であるのに対して、「コ」字状となり断面形ははっきりしている。凹みは緩く広くなり、表裏で影響しない範囲で凹みが作られている。なお、本種の出土率は１割に満たないものであり、縄文早期の若宮遺跡の凹みをもつ石皿25点のうち６点が両面使用であることからすると、その頻度は低い。中・後期に至って凹みの深い石皿の一般化がもたらしたものか、本種の担っていた機能が台石などの盤状のものに分散が可能になったためなのか、今後に注意を払っていたい。

Ⅲ類は小形のもので、20は掃き出し口が残っている。縦長の素材に溝状の凹みが施され、縦一辺からの磨りに対応するものである。21はローリングを目的としていて、使用目的に差があるかも知れない。

Ⅳ類は唯一周縁加工がなされるものである。（他の資料は全て凹み以外は原面を残す転石利用で、割礫を利用するものはない。）２点とも細片で全形を知り得ないが大形品ではなく、使用面は楕円形と思われる。なおその断面形は「凵」状である。蜂の巣石19も同様の資料である。

Ⅴ類はやはり小破片で全形がはっきりしないが、中央寄りの残存部が縁部より高くなっているため、「中高石皿」の可能性を認めたものである。後期以降にその存在感を示すものであるが、後期前半以後、文化のはっきりしない本地域では資料的に貧弱でも致し方ないないことであろう。

石材はⅡ類が量的に圧倒していて片寄りが多く、自々の特徴を掴むまでにはいかないが、全体的に安山岩、玄武岩が多く、また多孔質のものが好まれて、全く一

般的傾向からは逸脱していない。

石皿の用途については磨石をセットにして粉砕や製粉処理が考えられ、その対象は食物だけに留まらないことは周知される。従って凹みの深浅が用途の限定に手掛りを与えていることは確かなことでもあり、浅く縁のないものが堅果類のカラ割り、深いものが地下茎や球根を捏ねるためのもの（注６）を予想しても、それは大違いでもなく、中期の短冊形石斧の発達に合わせれば、なお説得力を増している。しかしいずれにしても石皿の果たしたであろう用途は複雑過ぎて、限定された用途は掴めないままが現状であり、またそれが石皿の本質であるとする方が良いかも知れないのである。

つまり石皿の用途に対する進展は全く見られないままであるが、本遺跡で台石とした砂岩製の円盤状で扁平な磨面をもつものは、磨ることに対して紛塵の混入が充分に予想され、そうした面から見るとそうした恐れが全く無いものを石皿とするべきなのかも知れないのである。

最後に周辺遺跡の石皿の欠損状況を挙げると以下である。

遺跡名	時　期	種 別	石皿数	欠損数
若　宮	縄文早期	集 落	25	21
滝　戸	中・後	配 石	24	21
滝ノ上(注7)	中・後	配 石	5	5
天間沢(注8)	中・後	集･配	13	12
千　居(注9)	中	集･配	1	1
上白岩(注10)	中・後	集･配	40	37
修善寺大塚(注11)	中・後	集･配	73	70
計　（欠損率92%）			181	167

いずれの遺跡も石皿の欠損率は高い。そしてそこで知れることは縄文早期集落跡の若宮遺跡のあり方も、中・後期の集落、配石遺構も全く状況が同じであると言う事である。遠く武蔵野丘陵の多聞寺前早期遺跡（注12）においても９点の石皿のうち７点が欠損している状況を加えると、一概にその行為が時期的な特殊行為、または配石と言う特殊遺構に関わるものとすることはまだまだ早急な判断であるように思われるのである。

注1. 齋藤基生 1982「食物調理用石器」『季刊考古学』創刊号 雄山閣
注2. 富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』
注3. 戸沢充則 1994 『縄文時代研究事典』 東京堂出版
注4. 安達厚三 1983「石皿」『縄文文化の研究』 7 雄山閣
注5. 富士宮市教育委員会 1978『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅱ次)概報』
注6. 渡辺 誠 1988「縄文時代の石器」『考古学ジャーナル』2 NO.287
注7. 富士宮市教育委員会 1981 『滝ノ上遺跡』
注8. 富士市教育委員会 『天間沢遺跡』
注9. 小野真一編 1975『千居』加藤学園考古学研究所
注10. 中伊豆町教育委員会 1979『上白岩遺跡発掘調査報告書』
注11. 修善寺町教育委員会 1982 『修善寺大塚』
注12. 戸沢充則他 1982『多聞寺前遺跡Ⅰ』多聞寺前遺跡調査会

５．蜂の巣石（図－67～70）

素材に多数の凹みが施されて蜂の巣に見えることから「蜂の巣石」と命名されている。雨垂石とも言われ、また凹み石に包括するものもあるが、「幾分扁平な片手で持てる位の石に一つか二つの小さい凹みがある。之を凹石という。それからモット大きい石に同様の凹みが蜂の巣のように沢山あいて、丁度軒滴の為に凹みが出来たかの如く見えるものがある。之を俗に蜂巣石だの雨垂石だのという。」として高橋健自の『考古学』（大正二年）を紹介して、石器の一器種に取り上げ（注１）、他も（注２）それに同調しているからそれに従う。

用途については、木の実などを凹みに固定して、殻や皮を割り取る台石であることで大方が認めるが、一部には発火具説を継承しているものもある（注３）。

本遺跡で認められる蜂の巣石は19点で、出土区別には第Ⅰ調査区３点、第Ⅱ調査区14点、第Ⅲ調査区０点、第Ⅴ調査区２点で、石皿の出土比率と同じように第Ⅱ調査区が特徴的に高い。そうした面でも石皿との関連が窺える。

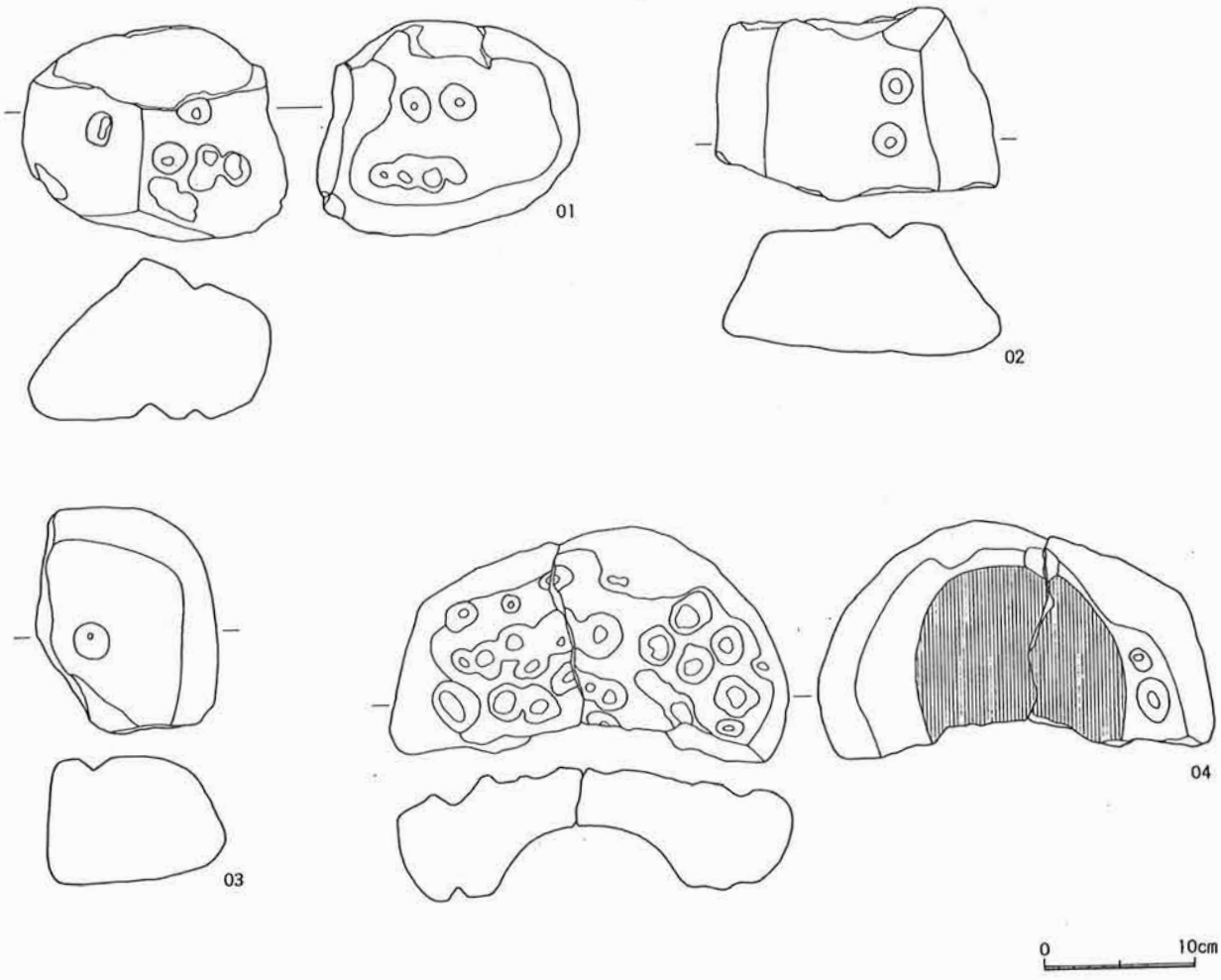
それらは素材の違いで大きく２類にされる。

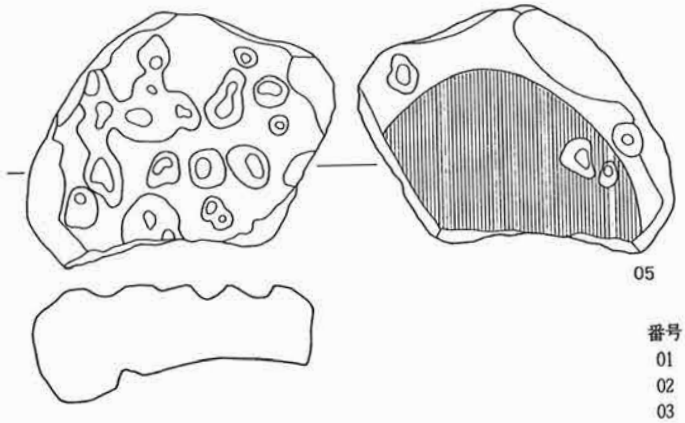
Ⅰ類　自然礫を素材とするもの（01～03）。

Ⅱ類　石皿の裏面などを素材とするもの（04～19）。

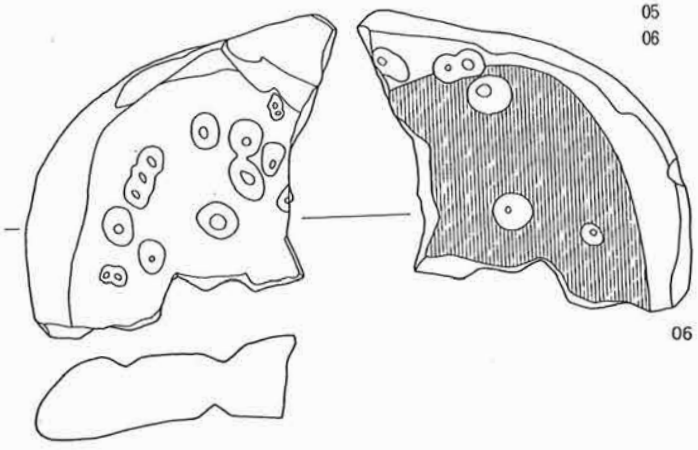
本遺跡の蜂の巣石はⅠ類３点、Ⅱ類16点で、それがこの器種の特徴ともされるように石皿の併用例が圧倒的に多い。そうしたことが堅果類の殻割り説を担う要因になっていることは周知される（注４）。

Ⅰ類の01がまったくの自然礫を素材としているために完形であるが、他は全て欠損品である。このことについて石皿の廃品利用が多いこと（注２に同じ）を特徴のひとつに挙げるむきも多いが、明らかに石皿の廃品を利用して新たな凹みが施されたものは11.18の２点に過ぎない。04.05.06.08.16や前述の解説に使用される千葉県貝の花遺跡例に見られるように凹みが切断されているものも多く、一概に石皿が廃品となった後に製品化されることが一般的であるとは言えないように

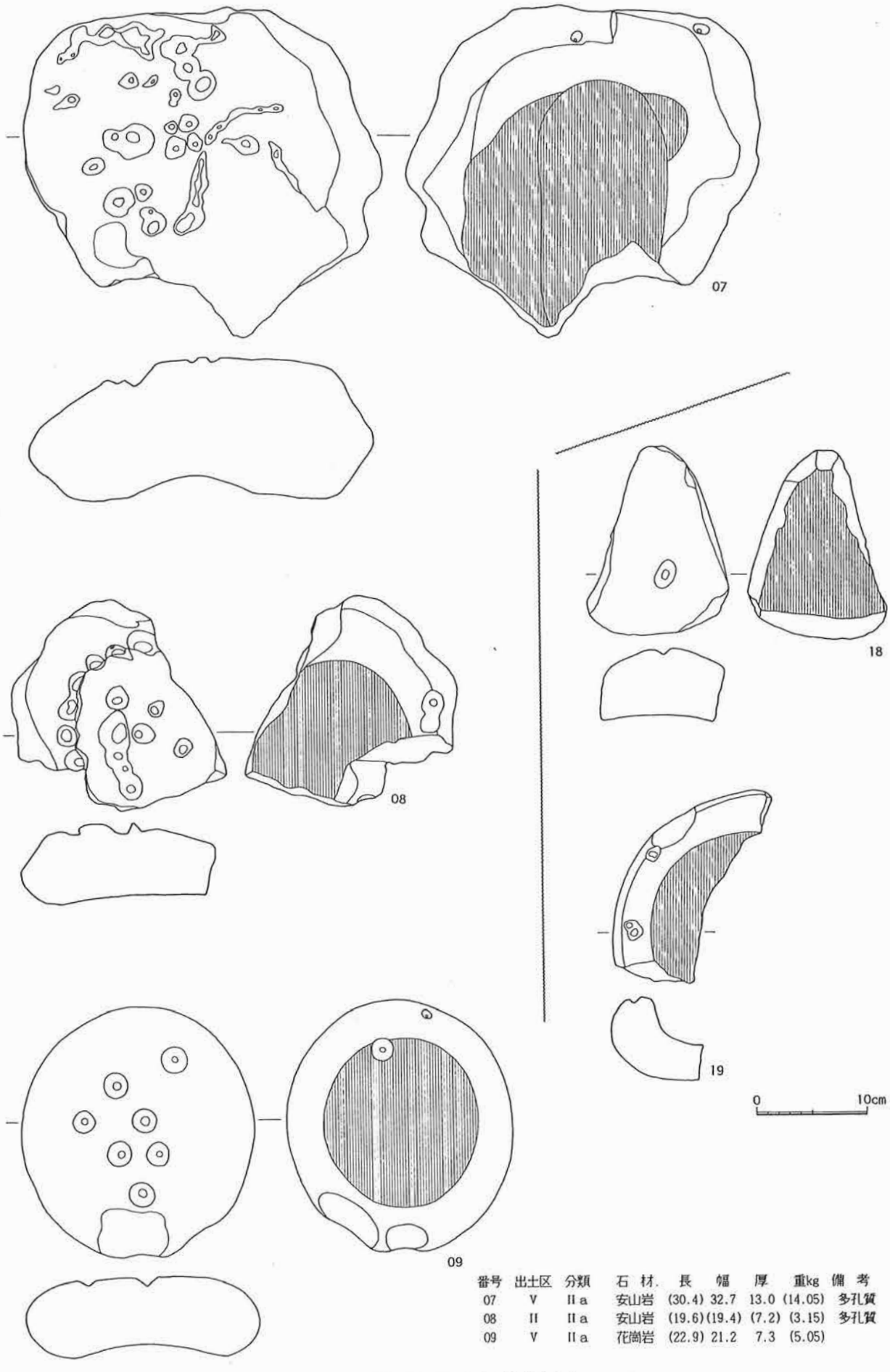




番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
01	II	I a	安山岩	17.7	14.4	10.7	3.15	
02	II	I b	安山岩	(18.8)	(12.8)	(8.8)	(3.35)	
03	II	I b	凝灰岩	(15.1)	(12.2)	(8.6)	(2.65)	
04	II	II a	玄武岩	(26.3)	(16.3)	(8.5)	(2.15)	多孔質
05	II	II a	安山岩	(20.7)	(16.5)	(7.6)	(3.05)	多孔質
06	II	II a	玄武岩	(21.3)	(20.5)	(5.5)	(2.55)	多孔質

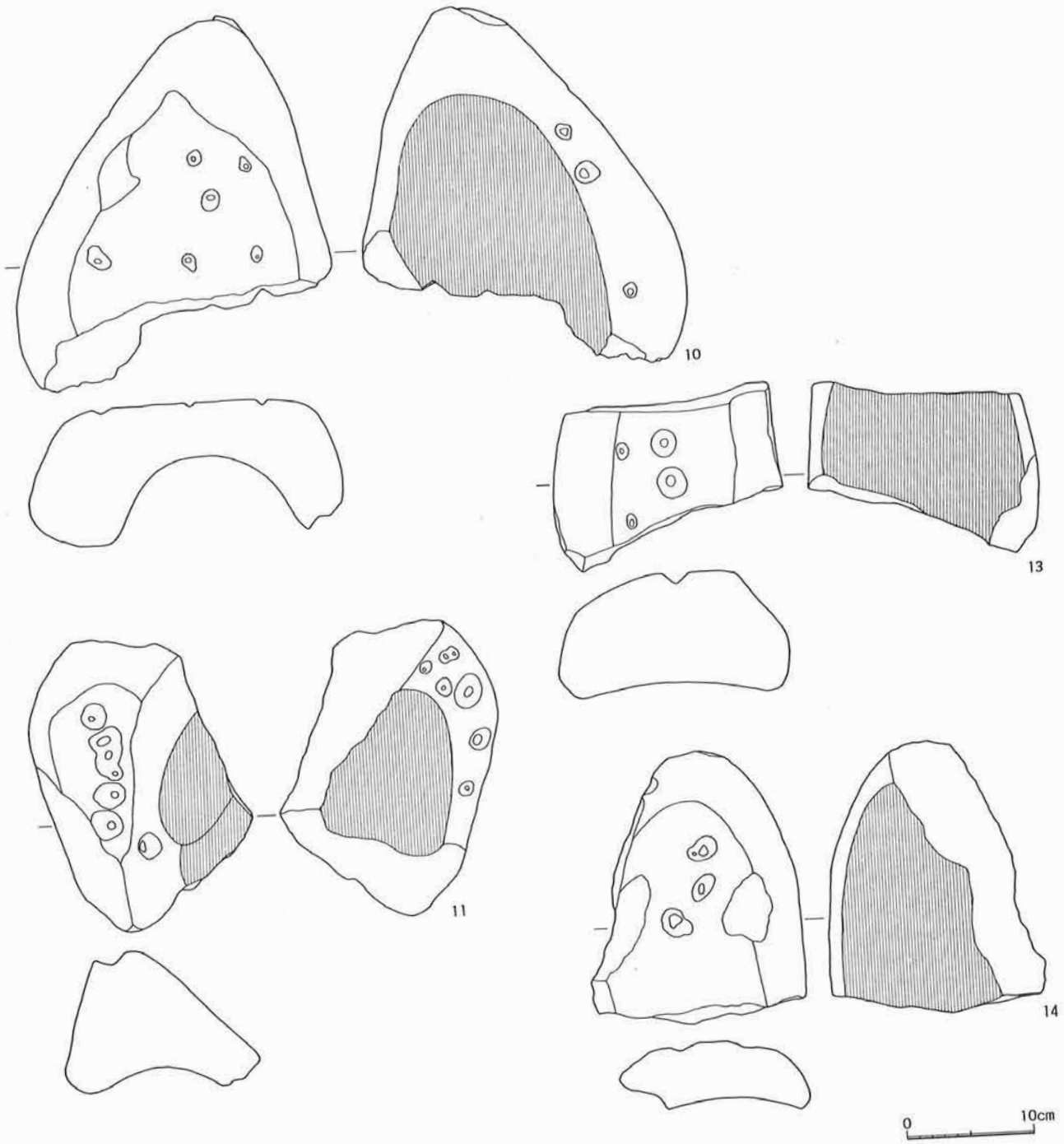


図－67　蜂の巣石実測図－1



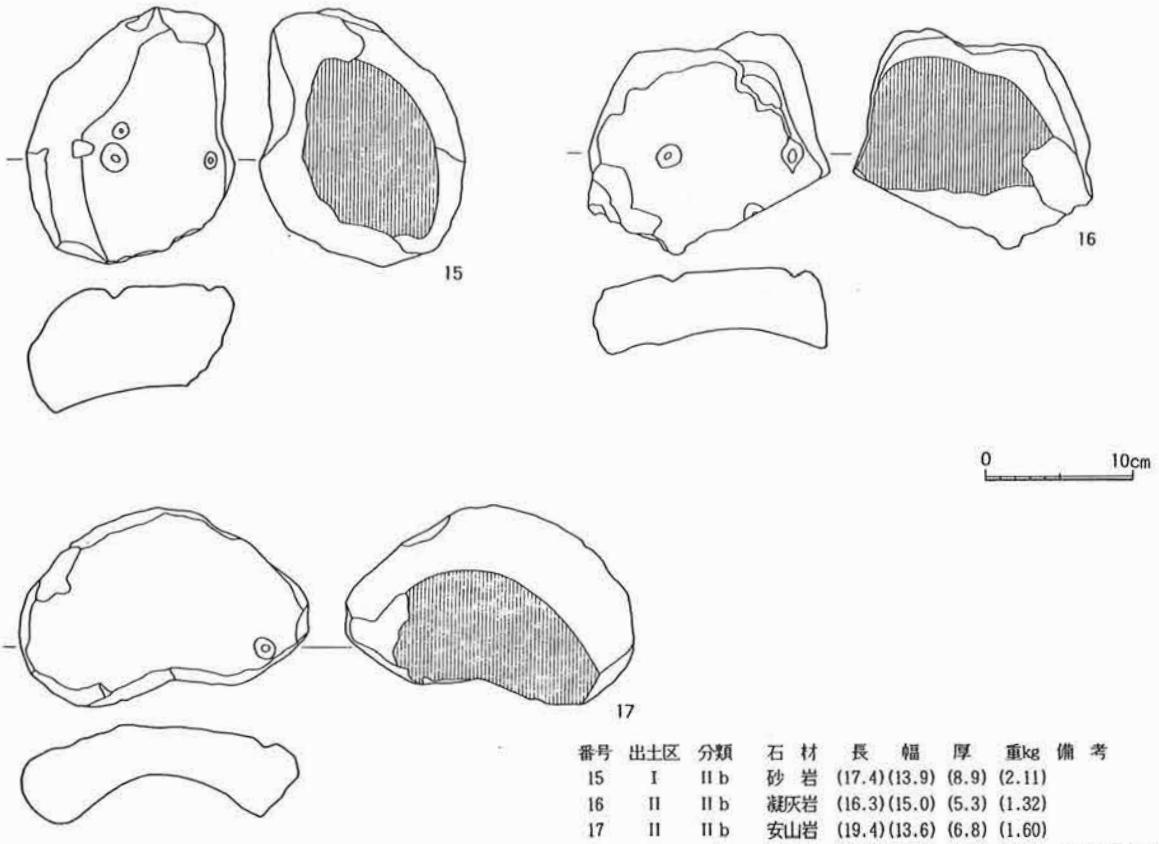
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
07	V	IIa	安山岩	(30.4)	32.7	13.0	(14.05)	多孔質
08	II	IIa	安山岩	(19.6)	(19.4)	(7.2)	(3.15)	多孔質
09	V	IIa	花崗岩	(22.9)	21.2	7.3	(5.05)	

図－68　蜂の巣石実測図－2



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
10	I	IIa	安山岩	(29.1)	(25.3)	(10.9)	(7.90)	
11	II	IIa	凝灰岩	23.3	17.9	11.0	4.20	石皿片再利用
12	II	IIb	玄武岩	(24.2)	(20.5)	(11.5)	(6.55)	多孔質
13	II	IIb	砂岩	(18.5)	(14.3)	(7.5)	(3.05)	
14	I	IIb	安山岩	(21.4)	(17.1)	(5.3)	(2.60)	

図－69　蜂の巣石実測図－3



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
15	I	IIb	砂岩	(17.4)	(13.9)	(8.9)	(2.11)	
16	II	IIb	凝灰岩	(16.3)	(15.0)	(5.3)	(1.32)	
17	II	IIb	安山岩	(19.4)	(13.6)	(6.8)	(1.60)	
18	II	IIb	安山岩	17.1	12.9	6.6	1.5	石皿片再利用
19	II	IIc	凝灰岩	(17.6)	(14.5)	(7.2)	(1.10)	

図－70　蜂の巣石実測図－4

思える。本遺跡はもとより、資料中に統一的な凹みの位置関係が見い出せないことが多いなか、それは石皿と一体化して果たしていた機能面が、石皿自身の被割礫行為に付随した遺存状況を見せているものと理解すべきではなかろうか。

石皿の廃品を再利用する2点のうち、11は表裏に凹みをもつ石皿の割礫後、安定した三角形状の頂部に新たな凹みを6穴連続して設けている。18は石皿の割面を研磨して整え、その中央に凹みを1穴設けている。

凹みの形状は多孔質の素材や、軟らかい素材のものに「U」字状のものが多く、硬質の素材は「V」字状に穿孔されているものが多い。従って「V」字状の凹みがはっきりとした円錐状になっているのに対して、多孔質の凹部を利用したものには円形をとらないものもある。このような孔に回転運動の軸受け的な用途を考えるには不向きで、球状のものの固定のための凹みと理解するのが妥当であり、それらは素材への穿孔方法の違いで良かろうと思われるのである。

その凹みが施される位置によって、さらに細分される。

Ⅰ類a種（01）は表裏に凹みをもつものである。

Ⅰ類b種（02.03）は表面だけに凹みをもつものである。

01は作業面が地表面と平行にならない部分をもち、球状の対象物の固定には不向きな面もある。07.09などの側縁部の曲面に凹みをもつ例もあるが、石皿と一体化していないⅠ類には、調理用石器のそれとは違った凹みの利用も考えねばならないヒントのひとつかも知れない。

Ⅱ類は石皿の表裏に凹みをもつもの（a種）、石皿の裏面に凹みをもつもの（b種）、石皿の表面だけに凹みをもつもの（c種）がある。

Ⅱ類a種（04～11）は04～08が多孔質の素材の特性を生かした、蜂の巣石そのものの例である。08のように剥離面の凸凹まで利用するなど、凹面を最大限に生かしている。05.06.09には石皿の作業面に凹みを見るが、09の凹みのあり方を見ると、石皿として機能している時点で凹みも併設されていたようである。他は幅のある縁部を利用してそこに凹みが穿たれている。なおそれは裏面ほど密集しない。11の凹みのあり方は前述するとおりである。

Ⅱ類b種（12～18）は石皿の縁部が狭いこと（12.17）

や無縁石皿が素材であるためか、石皿表面に凹みを見ないものである。12の裏面に蜂の巣状の凹みが見られる他は、4～1穴と凹みの数は少なく、大きさもあまりない。そのような凹みに堅果類の殻割りに効率が求められる筈はなく、無縁石皿故のことであれば、調理としての一連の作業から逸脱した性格を考えねばならないかも知れない。

Ⅱ類c種（19）は、はっきりとした有縁石皿の破片で、縁部頂部に凹みが穿たれている。このような石皿の資料は本遺跡では少なく、蜂の巣石としての資料も貧弱になるのは致仕方のないことである。破片自体が縁部に片寄っていることもあり、本来は裏面にも凹みがあるかも知れない。

注1. 斎藤 忠 1992『日本考古学用語辞典』学生社

注2. 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版

注3. 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識 縄文』柏書房

注4. 斎藤基生 1982「植物調理用石器」『季刊考古学』雄山閣

6．磨石類（図－96～100）

磨石類は一つの石器の中に磨石・敲石・凹石の各機能が複数で含まれている場合が多いことから、それを一括して呼称し、それぞれの観点から観察することが提唱されてきたものである（注1）。しかし、その観察方法が統一的に浸透しているとは言い難く、また現状では「類」という意味が、磨石に残る敲打痕、凹痕を有した「単独」の石器までを包括して、磨石類＝磨石・敲石・凹石に捉えるような誤解が生じていることも否めない。従って「磨石の基本的な特徴を一口で言えば、それは形態はどうあれ、研磨することによって機能を全うした石器であることに尽きよう。……従って一つの石器の中に凹孔あるいは敲打痕が認められても、磨痕が観察される場合は磨石として取り扱うことにしたい。」（注2）と言う指摘も尤ものことである。ここではそうした指摘を充分に踏まえ、また磨石類の提唱の原点に戻りそれに従うものである。

本遺跡で確認される磨石類は66点である。セット関係を取り沙汰される石皿は大半が破片となって24点、それに石皿の蜂の巣石併用例16点を加えると40点である。石皿の1個に対して1.7個の磨石類が相対する結果となるが、配石跡主体の出土状況にあって直接的に数値を捉える訳にはいかないように思われる。

法量は09が長さ13.9cm、幅11.4cm、厚さ7.9cm、重さ1.916gで最も大きく、06が（以下同じ）5.7cm、5.2cm、3.4cm、91gで最も小さい。欠損率60％で平均値を頼れないが、いずれにしても掌で握れる大きさを逸脱していない。このことは磨石類の使用法が掌と一体化していたことを示すものであって、法量と形状の差の大きい敲石の敲きとは異なった動きと働きが感じられるものである。

また石材はおよそ半分が砂岩、礫岩であるが、その他は花崗岩、安山岩、玄武岩などの硬質なものが目立つのに対して、敲石は4分の3が砂岩などの軟質の素材で占められ、ヒビ割れも著しい。つまり磨石類は硬くきめの細かいものが選ばれ、そうしたことが食物調理に適したものとされる所以なのであろう。しかし、このことは石対石における研磨の強度の度合をも示すものであり、石皿の凹みが『使用痕』でなく、機能面であるとすれば、石皿の凹みを作る工具は果たして何であったのか、常々疑問に感ずることである。果たして磨石類と石皿の使用面が一致することが、調理の道具としての一体化した機能を示しているのであろうか。現在まで言われる磨石類と石皿の関係の全てを御破算にするような大それたことまでは考えないが、石皿の凹みにぴったりと納まるクッキー状炭化物(注3)を見るにつけ、石皿に対する「手や木」の行為のあり方、つまり遺物として現れない行為があることをもっと認識しておくべきであると思うのである。

磨石類66点は前述したように併用される機能で5類に分けられる。

Ⅰ類　磨痕だけのもの（01～07）。

Ⅱ類　磨痕と敲打痕をもつもの（08～35）。

Ⅲ類　磨痕と周縁ならびに表裏面に敲打痕をもつもの（36～50）。

Ⅳ類　側面にも磨痕をもつもの（51～64）。

Ⅴ類　磨石類の半割された小口面に磨痕をもつもの（65.66）。

量的な分配はⅠ類7点、Ⅱ類28点、Ⅲ類15点、Ⅳ類14点、Ⅴ類2点である。やはり磨石類が唱えられるように、単純な磨りだけのⅠ類は7点でおよそ10％を占めるに過ぎない。しかも4点が欠損していて全体を観察できないからその割合はもっと低くなると思われる。またⅠ類には小形品が目立ち、しかも全面を研磨される07を見るように、単純な磨りだけの行為をもつことは他の類と異なった性格を持っている可能性もある。

Ⅱ類は磨石類のあり方では最もポピュラーなものと言え、本遺跡でも40％強を占める。それに周縁敲打だけを捉えてⅢ・Ⅳ類を加えると56点に達し、約85％の磨石類が周縁に敲打痕を持つことになり、これこそが

磨石類の機能と言っても過言ではない状況となる。

続いてⅢ・Ⅳ類が拮抗して続く。Ⅲ類はⅡ類に表裏面の敲打が加えられたもので、同様の敲打をⅣ類に捜すと11点で計26点、約40%が表裏面に敲打痕をもつが、Ⅲ・Ⅳ類を合わせても半数に達しないように、周縁敲打の高率の割にその比率は高くない。そうした表裏面の敲打痕を敲石Ⅱ類65点（扁円形で磨石類の形状に近いもの）に求めても16点、約25%にしか認められず、やはり表裏面で敲く作業は、周縁で敲く作業より少なかったことが知れる。

Ⅳ類はいわゆる石鹸状を呈する磨石と俗称されるように、側面に著しい敲打痕と磨り面が認められるもので使用前の石鹸に似る。詳細にはａ種の両側面が磨り面で敲打痕の全くないもの(51)、ｂ種の片側面が磨り面、もう片側面が敲打痕で表裏面に敲打痕のないもの(52.53)、ｃ種の片側面が磨り面、もう片側面が敲打痕、そして表裏面にも敲打痕があるもの（54～64）に分けられる。ｃ種が14点中11点、ほぼ80%を占めるから、これが先に言う石鹸状を呈する磨石の一般形状と言える。そしてこれらは表裏面の磨り面の長軸と短軸の曲面度合いが異なることが多く、Ⅰ～Ⅲ類に見られるようなローリング運動を一様に当てられないことが多い。そこでそうした機能面を石皿に当てると石皿Ⅳ類（縁が立ち上がり、凹みが深く平坦に近いもの）に近いが、24点中２点では充分に対応しているとは言い難い。そこで対応可能な石皿Ⅰ類（凹みが浅いもの）を４点加えると21%で、本類が磨石類の中で占める25%と一応近くなるが、それで関係がはっきりした訳ではない。

とくにⅣ類ｃ種の片側面が敲打、もう片側面が磨りというような機能分化がはっきりと統一されたものに対しては相当に特定した作業内容を想定しなければならないし、それが一つの対象物に一連で行われたものか、またそれぞれの対象物にそれぞれの機能面で対応したものかにしても、石皿Ⅰ・Ⅳ類だけでは相方を務められないほどの多彩なものであることは充分に承知されることである。そしてその補充には台石や砥石、さらに蜂の巣石などの設置型の大形石器を挙げざるを得なくなり、このことからしても短絡的に石皿＝磨石のセット関係を語るべきではないことを警鐘されているように思えるのである。

Ｖ類は65が磨石類Ⅰ類、66が磨石類Ⅲ類の半割後の小口面に石対石ではない磨り面、つまり油ぽっく濡れたようなソフトな感じの使用面をもつもので、さらに66の使用面の中央には径２～３㎝で浅い凹みが見られる。おそらく「底面の磨痕の状況からあまり固い物に直接ぶつかっていないようである。(注４)」と言うスタンプ形石器に似た使用面をもつものであろうが、出現時期の違い、また小口面が円形に近い形状の違いからそれを呼称しないでいる。むしろ飛騨白川村のトチむき石（注５）に似たもので、そうした視点で見ると、本遺跡出土の砥石や台石もトチむき用台石に似る。このような磨石類Ｖ類は滝戸遺跡第Ⅳ次調査地点（注６）より７点の出土を見ており、そこが滝戸渓谷に接した地点であり、最近特に注目されるトチの水さらし場状遺構（注７）のあり方を知ると、磨石類をはじめ、敲石、凹石などのはっきりしない用途の限定のためにも今一方から注意を払っておきたい石器の一つである。

最後に出土区別に見ると以下のとおりである。

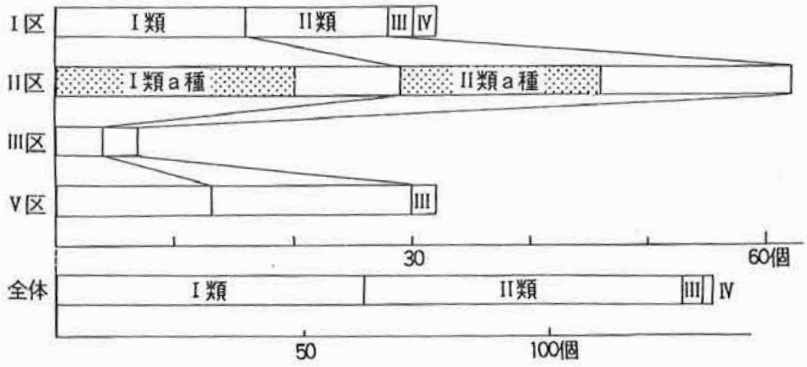
	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
Ⅰ類	1	5	0	1	7
Ⅱ類	7	11	0	10	28
Ⅲ類	7	5	0	3	15
Ⅳ類	3	7	0	4	14
Ⅴ類	0	2	0	0	2
計	18	30	0	18	66

第Ⅱ調査区がおよそ45%、第Ⅰ・Ⅴ調査区は同数であるが、第Ⅰ・Ⅱの隣接した調査区を合わせると48点、75%を占める。第Ⅲ調査区はいずれの石器の出土状況も貧少なものであるが、縄文時代における普遍的石器である磨石類において皆無の状況は、磨石類のあり方つまり第Ⅰ・Ⅱ調査区における一連の固定作業を行う石皿や台石、敲石と同様の高出土率に相反した「何か」を暗示しているかも知れないと思われるのである。

注1. 鈴木次郎 1977『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書13
注2. 小林康男 1978「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』長野県考古学会
注3. 駒形敏朗他 1981『岩野原遺跡』長岡市教育委員会
注4. 小田静夫 1983「スタンプ形石器」『縄文文化の研究』7 雄山閣
注5. 渡辺誠 1988「縄文中期の石器」『考古学ジャーナル』NO.287 ニューサイエンス社
注6. 富士宮市教育委員会 1983『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅳ次)概報』
注7. 田村秀雄 1995「貯蔵穴と水さらし場」『季刊考古学』50 雄山閣

7．敲石（図－101～107）

調理や工作などで敲くという行為に求められるのは硬質の物質であり、それに対して一番身近にある礫が頼られることはごく自然である。そしてそれに磨石を用いることが多々あり、磨り、敲くという一連の作業を基本にしながら凹石も含めて、昭和50年代以降より



図－71　敲石出土区一覧

「磨石類」が提唱されてきた（注１）。しかし、それは磨ることを第一義として敲石、凹石の機能の併用したものを指したものであって、磨石類＝磨石・敲石・凹石ではなかった訳である。

近年そうした分類による報告書記載例が目立ち、また磨石類と石皿をセットとして考える延長上に、あたかも石皿と敲石がセット関係を有しているような誤解を受けることさえある。確かに敲石の一部に食料調理の粉砕などに使用されたものもあろうが、調理の道具としての位置付け（注２）は絶対的なものではなく、磨りを除いた敲石には独立した呼称を残すべきで、工具としての可能性も追うべきであると思われるのである。

本遺跡で確認される敲石は133点で、打製石斧に次ぐ出土量をもち、磨石類を凌駕している。つまり、それは手頃な礫による敲打が工作をはじめとして、多岐に渡る作業の中でいかに駆使されていたかを如実に示していよう。まず、大きく分類すると以下に分けられる。

Ⅰ類　棒状のもの（001～062）。
Ⅱ類　扁円形のもの（063～127）。
Ⅲ類　球形のもの（128～131）。
Ⅳ類　三角柱の側面頂部を使用面とするもの（132.133）。

この量的な分配はⅠ類62点、Ⅱ類65点、Ⅲ類４点、Ⅳ類２点で、Ⅲ、Ⅳ類の特殊な形態のものを除けば、95％以上が棒状と扁円形のものである。また、それの出土量はほぼ互角である。Ⅰ類が強く荒い瞬間的な敲打、Ⅱ類が柔らかく細かい継続的な敲打が予想されていて（注３）、その作業内容もほぼ五分であったと思われる。

石材は133点中100点、約75％が砂岩ならびに硬砂岩で占められ、欠損品は81点で約60％に及ぶ。石材が硬質なためか硬砂岩に欠損率が高いが、全体的には使用方法による因果が表れていると言えよう。しかし、こうした敲石より圧倒的に高い石皿の欠損率はやはり異常で、過失だけで済まされない何らかの原因が説われることは充分にうなずける。

法量はⅠ類で014が、Ⅱ類で107が最大値を示すが、いずれも掌で握られる大きさに納まり、Ⅰ類の特殊なもの（054～062）を除けば、装着痕も見られず、素手で使用したものと言える。

出土区別に見ると、以下である。

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
Ⅰ類	16	29	4	13	62
Ⅱ類	12	33	3	17	65
Ⅲ類	2	0	0	2	4
Ⅳ類	2	0	0	0	2
計	32	62	7	32	133

第Ⅱ調査区が全体の46％を占めて、他を圧倒し、隣接の第Ⅰ調査区を含めると70％強の出土率を見る。そしてこの状況は石皿、台石、磨石などの固定作業を行う石器に共通した特徴でもある。

敲石は使用に即した自然礫が使用されるため、加工による分類はされないが、使用痕にそれぞれ差を認めることができる。

Ⅰａ種(001～041）は長軸の端部が敲打されるもので、量的には41点と最も多く、第Ⅱ調査区には20点が出土している。片側（001～013）と両側（014～041）があり、13：28で両側敲打が２倍を上回り、これが一般的と言える。Ⅰ類ｂ種（042～049）は側面に敲打を合わせ持ち、Ⅰ類ｃ種（050～053）はそれに加えて表面にも敲打痕が認められるものである。いずれの敲打痕も通常の磨石類における側面、表裏面における敲打とは違って、長身の素材を利用した振子的な敲打によるものである。

Ⅰ類ｄ種（054～062）は完全に「ハンマー」的な使用がされたもので、056.062に柄の装着痕が認められ

る。058～061は磨製石斧からの転用で、そのまま着柄が可能である。磨製石斧の欠損からの転用が示すように054～058もⅠ類のそれぞれのなかから小口面の広いものが選ばれている。その使用面は石対石の接触は感じられず、それより軟らかいものの敲打であり、木工用の使用の可能性が高い。

Ⅱ類ａ種（063～097）は扁円形の主に長軸端部が敲打されるもので、35点が認められⅠ類ａ種に次ぐ出土量をみる。この両者が敲石の一般的なものと言ってよく、第Ⅱ調査区に17点出土して、これもまたそれに追随している。１方向からのものが12点、対面のものが23点で、扁平形状から対面のものが圧倒し、これにⅡ類ｂ種（098～106）の３～４方向の敲打のもの９点を加えると、Ⅱ類65点中32点で、およそ半数が複数の方向から敲打されていることになる。

なお、Ⅰ・Ⅱ類に共通する非常に小形のものは直接に対象物を敲くことは不可能であり、むしろ間接的に働きかける「箭(や)・鏃(たがね)」的な使用を想定しておきたい。

Ⅱ類ｃ種（107～122）は前種よりは厚さをもって楕円形に近く、磨石類的な敲打がされるものである。おそらく対象物もそれが行ったものに近い筈であるが、磨石類に比べると砂岩質の軟質な素材が多く、粉塵の混入が充分に予想されて調理には全く不向きと考えられる。Ⅰ類ａ種、Ⅱ類ａ種に次ぐ16点の出土を見て、その使用頻度は高かったものと思われる。Ⅱ類ｄ種（123～127）はそれに角、つまり肩の部分に斜めからの敲打が追加されるもので５点が認められる。磨石類には殆ど認められないことから、こうした敲打こそが敲石の使用のヒントになるのかも知れないものである。

Ⅲ類は球形の素材の全周に著しい敲打が加えられるもの（128～130）と、俵状に敲打されるもの（131）である。安山岩、玄武岩、花崗岩など、他とは異なって硬質の素材が利用され、全て原形を保っている。数量も限られているから、前述した敲石とは異なった特殊な使用も予想され、今後の類例の増加を待ちたい。

Ⅳ類は三角柱状の素材の側面頂部に敲打痕が認められるものである。おそらく幅の狭い部分を対象としたものであり、使用面から考えると扁平の素材のⅡ類に通ずるものであるが、本類は直線的な使用面であることを考えると、それらとは相反して対象物の方が曲面を持ったものである可能性が高い。

注1. 鈴木次郎 1977『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告書 13

注2. 鈴木道之助 1981『石器の基礎知識Ⅲ』柏書房

注3. 富士宮市教育委員会 1983『若宮遺跡』

８．磨り面をもつ敲石（図－72）

基本的には長軸部に敲打痕をもつ敲石Ⅰａ類であるが、細長い素材に沿った平らな磨り面をもつもので、13点が認められる。使用面が平らであることを目的とするためか断面形状は全て四角を基本としている。素材は13点中８点が硬砂岩で占められるように硬質できめの細かいものが好まれている。従って使用面は平滑で湿り気を帯びたような光沢を見せ、磨る対象物は石対石に見せる粉化を伴うものではないことは容易に知れる。また敲打に関する使用は粘板岩に近い硬砂岩系の素材の特性にしても、板状に割れて激しい敲打の跡が窺える。

磨面のあり方で２類される。

Ⅰ類　長方形の素材の側面に磨り面をもつもの（01～10）。

Ⅱ類　正方形の素材の表裏面に磨り面をもつもの（11～13）。

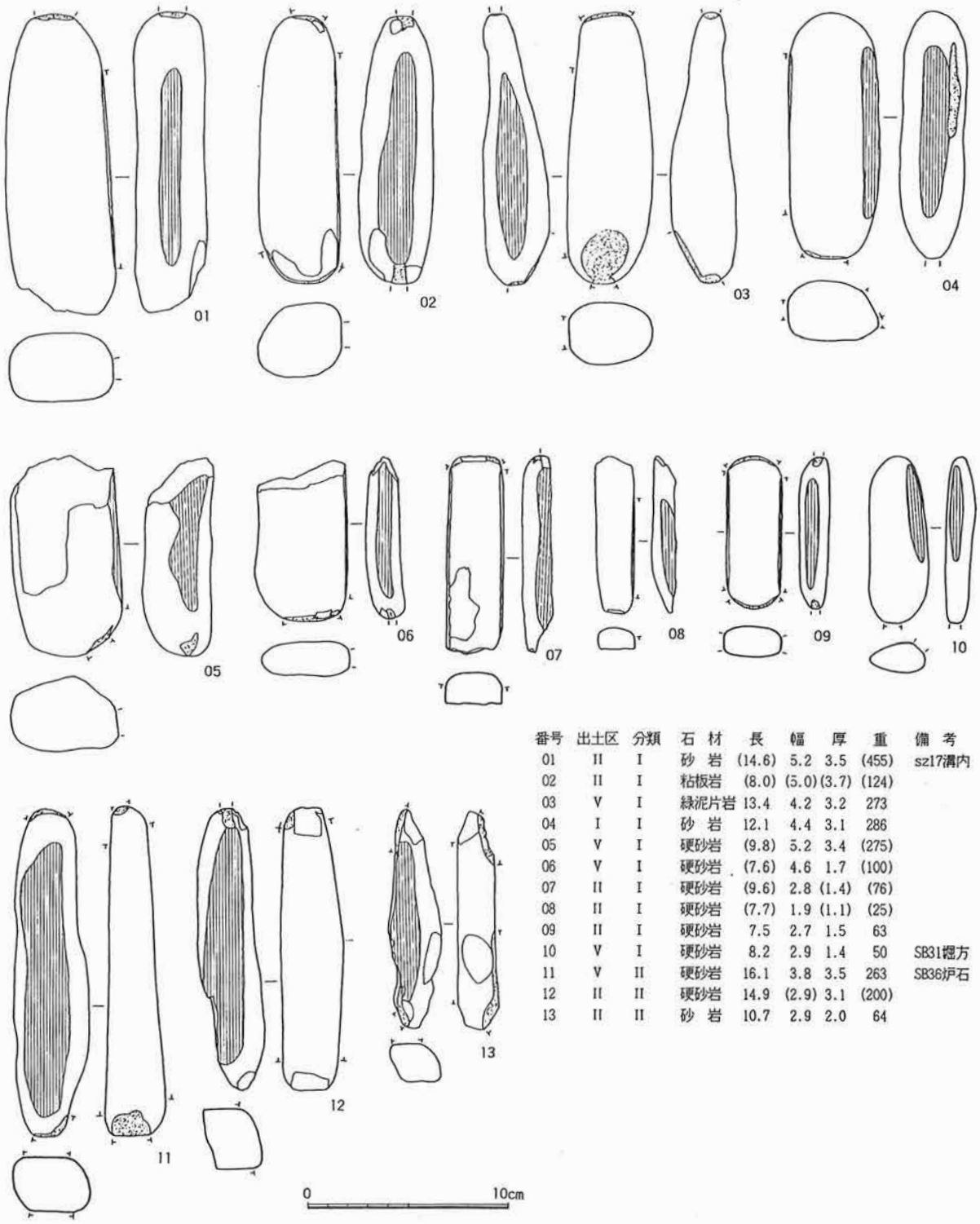
Ⅰ類10点、Ⅱ類３点である。Ⅰ類の大形品は敲石Ⅰ類に近い自然素材の１面に平坦磨面をもったものが多い（01～06.10）。07～09は小形であるが両側面の磨り面のあり方は強調される。全体的にⅠ類の磨り面は細長い。それに反してⅡ類の磨り面は、素材の広口面にあるためそれらより広い。磨る方向はⅠ類が縦、Ⅱ類が縦、横が可能である。しかし、両者とも広く大きな範囲を磨ることは無いように思える。油分が染み込んだような黒い光沢は、おそらく動、植物の２次的加工に用いられた痕跡と思われるが、骨や皮、または木を砕いたり、なめすにしては敲打による使用の激しさが気になる。

こうした同類の石器が弥生、古墳時代遺跡より出土することは知られている（注）。それらの多くは顕著な敲打痕を認めることはないから、敲打に関しては縄文時代石器的で、磨りなめすという作業に関しては同じ行為をもって対処したものと言えようが、複合遺跡の特徴か本遺跡では01がSZ17の溝内、10がSB31の掘り方内、11がSB36の炉石に使用されるなど、弥生、古墳時代遺構に関わりをもって出土している。

注. 富士宮市教育委員会 1985『上石敷遺跡』

９．台石（図－108～111）

いわゆる作業台で、敲きや磨りに対応されるものであるが、直接「磨り」と「磨り」が重なり合うことは



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	II	I	砂岩	(14.6)	5.2	3.5	(455)	sz17溝内
02	II	I	粘板岩	(8.0)	(5.0)	(3.7)	(124)	
03	V	I	緑泥片岩	13.4	4.2	3.2	273	
04	I	I	砂岩	12.1	4.4	3.1	286	
05	V	I	硬砂岩	(9.8)	5.2	3.4	(275)	
06	V	I	硬砂岩	(7.6)	4.6	1.7	(100)	
07	II	I	硬砂岩	(9.6)	2.8	(1.4)	(76)	
08	II	I	硬砂岩	(7.7)	1.9	(1.1)	(25)	
09	II	I	硬砂岩	7.5	2.7	1.5	63	
10	V	I	硬砂岩	8.2	2.9	1.4	50	SB31竈方
11	V	II	硬砂岩	16.1	3.8	3.5	263	SB36炉石
12	II	II	硬砂岩	14.9	(2.9)	3.1	(200)	
13	II	II	砂岩	10.7	2.9	2.0	64	

図－72　磨り面をもつ敲石実測図

少ないらしく、砥石や石皿のような磨耗面はもたないものである。つまりそこにはいろいろな対象物が乗せられ、敲かれ磨かれた面であり、広い意味の作業面としたほうが適切に思える。このように台石と判断したものは31点である。

31点の台石は作業面の違いによって大きく２類される。

Ⅰ類　凸面を作業面としたもの（01～04）。

Ⅱ類　平坦面を作業面としたもの（05～31）。

Ⅰ類４点、Ⅱ類27点で、Ⅱ類が特に前述した作業面をもつもので、台石としては一般的で、そのうちには特殊磨石（注）に対応されるものも含まれよう。

Ⅰ類は狭い作業面のもので、敲きと磨りの作業の内容によって2種される。

Ⅰ類a種（01.02)は半割された安定度の良い素材の三角形凸部を利用した敲打を行うもので、「かなとこ」風の使用が考えられる。Ⅱ類にも側面にこのような敲打痕を見る。

Ⅰ類b種（03.04）は弱い曲面部を作業面とするもので、03の肩部などの凸面はⅠ類a種同様の使用も兼ねている。

Ⅰ類a・b種とも対象物は接触面の少ないものであろう。また、04は欠損後の使用例であり、その形状によるものか、欠損例は少ないと言える。

Ⅱ類は作業面の広いことに起因するのか、05～09の5点以外は全て欠損しており、その率は高い。作業面は共通するが、使用される素材の形状で3種される。

Ⅱ類a種（05～20）は扁平面をもつ角礫であり、それは05.06に代表されるように作業面が地表面と並行にならず、斜めの場合が多い。このような形状に対して製粉作業に疑問を向け、石皿と区別するひとつの要因としている場合も多い（注に同じ)。厚いもの（05.06.11～15）と薄いもの（07～10.16～20）があるが、同じ様に両者とも作業面に薄い剥離痕をもつ例が多い。16の敲打痕が示すように弱い連続的な磨り敲きのような作業が行われたものと思われる。

Ⅱ類b種（21～27）は弱い曲面を作業面とした硬質な長円形の素材で、素材に沿った細長い作業面はいずれよりも磨耗度は高く滑らかである。作業面よりも広い対象物が予想される。

Ⅱ類c種（28～31）は円盤状の扁平の円礫で、粒子の粗い素材のものである。従来であれば石皿に扱われようが凹面がないこと、あまりに軟質であり製粉作業に粉塵の混入が危ぶまれること、周縁に敲打痕が著しく自らも敲石的機能も果していることなどから、それより省いたものである。またそれぞれの径の値も似ており、何かしら目的に応じた素材の選択も窺える特徴的なものである。

以上、台石として作業面をもつ礫を捉えてきたが、具体的な台石の定義が乏しいこともあって、各々の調査による取り上げ状況に片寄りがあることは否めない様に思える。

本調査においても調査者、調査年次の異なりを超えた統一的な取り上げ方がなされたかは不安である。一応、第Ⅰ調査区6点、第Ⅱ調査区13点、第Ⅲ調査区1点、第Ⅴ調査区11点の出土数を挙げ、第Ⅰ．Ⅱ調査区に出土率が高い傾向にあることを記しておく。

注．特殊磨石はかつて縄文早期の特徴的な石器として、製粉用の道具の可能性も指摘されたりしていたが、当該期にすでに石皿や磨石の一般的な普及が確認されたり、また、本遺跡をはじめ中、後期遺跡にも存在が知られるようになってきている。（財)長野県埋蔵文化財センター他　1994『県道中野豊野線バイパス滋賀中野有料道路埋蔵文化財報告書　栗林遺跡』

10．特殊磨石（図－73）

特殊磨石は略三角柱や四角柱状の角ばった長身の自然礫の角の部分に沿った細長い機能面をもつもので、その機能面は磨石類の表裏の磨り面と異なるややザラついた感触の磨り面であることを特徴の第一義としている。かつては縄文早期押型文系土器群の時期の特徴的な石器（注1）として挙げられていたが、最近では縄文中、後期にもその存在が確認され、それは時期的な産物ではなくして大きく地域的に捉えられた中部山岳文化圏の特徴的な石器としての把握が一般化しつつある。つまり、それは特殊磨石の発生以来、その機能が磨石類とある部分で同調できないまま中部山岳地方の文化の衰退まで続いたことであり、その意味で独立した呼称（注2）には賛同したい。

本遺跡の特殊磨石は8点である。それは併用される機能で3類にされる。

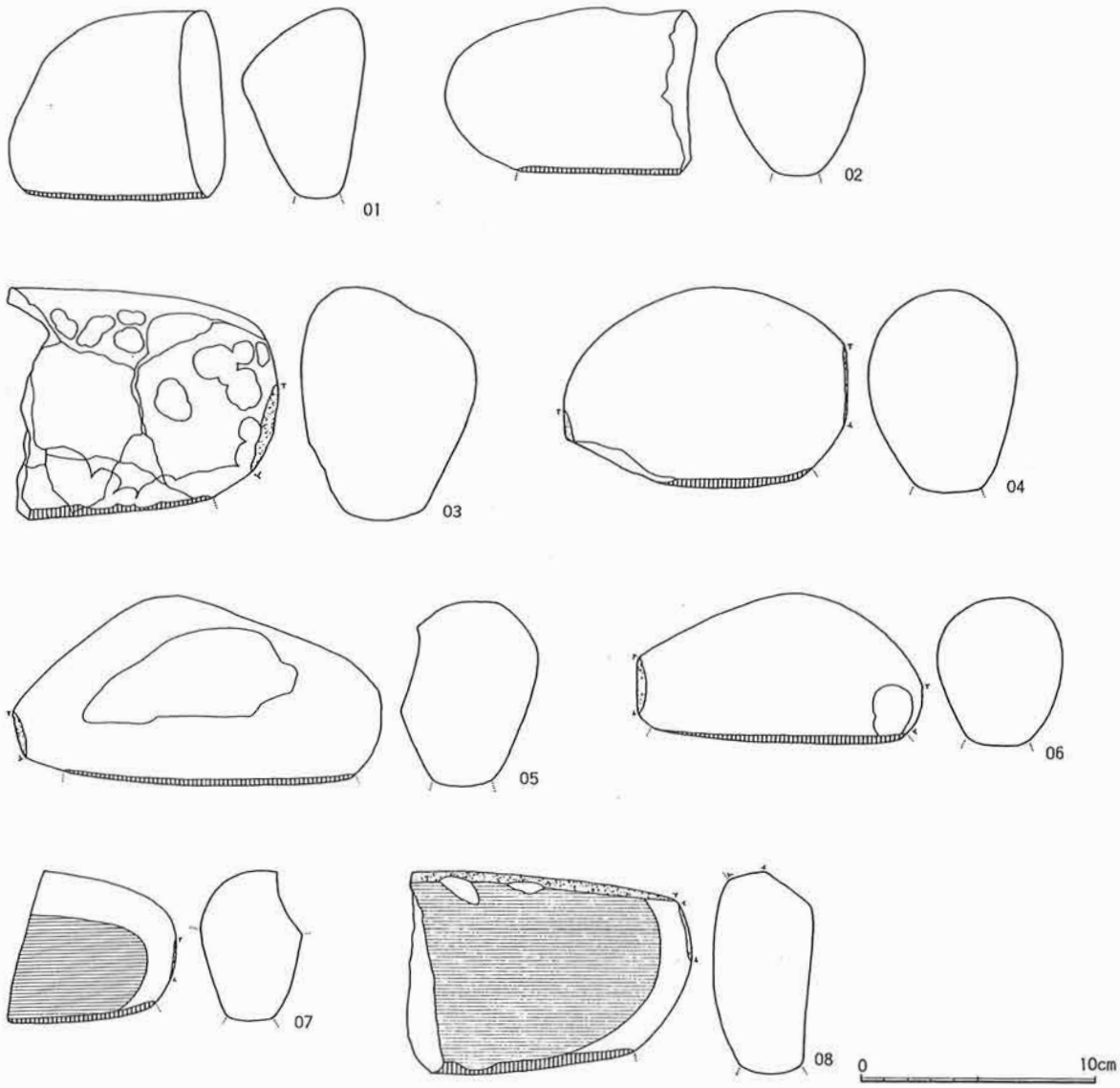
Ⅰ類　自然礫に磨り面だけをもつもの（01.02)。

Ⅱ類　長軸の端部に敲打痕をもつもの（03～06)。

Ⅲ類　敲打痕と側面に磨り面をもつもの（07.08)。

以上のように特殊磨石は7割以上が敲き、磨りを併用される。こうしたことが敲石、磨石類と同様の機能が想像される所以であるが、8点中5点が中央部より2分の1に欠損することは機能面に集中する大きな力が作用した結果であり、そうした機能の集中度合いは最も形状の近い磨石類Ⅳ類の機能面にも見出せないものである。とにかくⅢ類の側面の磨り面も示すように、それはローリングには対応できないものであり、対応される石器は台石などの平らな面をもったものと思われるのである。堅果類の皮むき（注2）を説くが、皮むき用には対応できる磨石類の確実な存在があり、敢えてそこに機能を求めるには細長い機能面はあまりにもふさわしくなく、皮なめし用の石器説も軽視することはできない筈である。今一度、磨石類のなかの一形態ではない、特殊磨石のあり方を検討して行く必要性を充分に感じるのである。

なお、出土区別点数は第Ⅱ調査区6点、第Ⅰ調査区1点、第Ⅴ調査区1点で、磨石類・敲石と同様に第Ⅱ



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	II	I	砂岩	(9.3)	8.0	5.1	(532)	
02	II	I	砂岩	(10.5)	(7.1)	6.4	(760)	
03	I	II	礫岩	(11.8)	(10.2)	(7.7)	(1123)	
04	V	II	凝灰岩	12.4	8.6	6.5	985	
05	II	II	砂岩	15.8	8.0	(5.6)	(975)	
06	II	II	玄武岩	12.4	6.4	5.4	630	
07	II	III	玄武岩	(6.8)	6.6	4.3	(274)	
08	II	III	安山岩	(12.2)	8.8	4.6	(880)	

図－73　特殊磨石実測図

調査区の出土率が圧倒的に高い。

注1. 八木光則 1976「いわゆる『特殊磨石』について」信濃28-4

注2. 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版

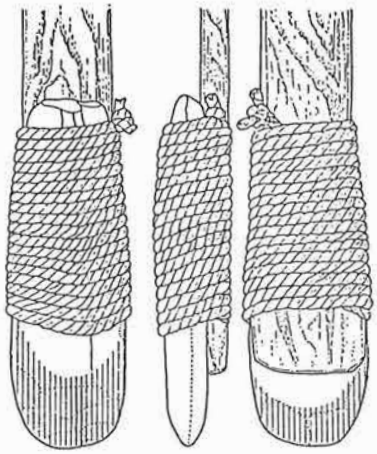
11. 打製石斧（図－75.112～122）

打製石斧は271点が出土して、本遺跡石器資料中もっとも多いものである。縄文時代を代表する石器として従来よりその機能について多くの人々に語られるものであるが、近年では農具としての支持が一般的で、「打製土掘具」の名称の提唱さえある（注１）。なお、その名称についてはそこで言う両刃石斧を指すものであり、片刃石斧は省いている。本遺跡ではその分類法はとらないで、先ず、通例に従い短冊形・撥形・分銅形の基本形とその他の５類に分けて進めたい。

Ⅰ類　短冊形のものである（001～196）。これらは形状、刃部などの違いで３類にされる。

a種　もっとも短冊状のもの（001～160）。

b種　尖頭状のもの（161～172）。



図－74　両刃石斧の着柄想定図(注より転載)

c種　小形で篦状のもの（173～196)。

Ⅱ類　撥形のものである（197～258)。これらは刃部の違いで２類にされる。

a種　刃部が弧状のもの（197～237)。

b種　刃部が直線状のもの（238～258)。

Ⅲ類　分銅形のものである（259～266)。

Ⅳ類　分銅形に近い形状をした特殊①で、頭部に複数の凸部を見るものである（267)。

Ⅴ類　刃部に鋭利な感じを受けず、むしろハンマー的要素の強い特殊②である（268～271)。

これらの出土比率はⅠ類196点、Ⅱ類62点、Ⅲ類８点、Ⅳ類１点、Ⅴ類４点で、Ⅰ類がおよそ72％、Ⅱ類がおよそ23％を占め、この両者で大半を占める。この出土比率は殆どの遺跡と変わりないものであるが、Ⅲ類の分銅形のものが３％では少な過ぎるように思える。

次に出土地区別状況は以下のとおりである。

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
Ⅰ類	33	78	25	60	196
Ⅱ類	8	29	10	15	62
Ⅲ類	2	5	－	1	8
Ⅳ類	－	－	－	1	1
Ⅴ類	－	2	－	2	4
計	43	114	35	79	271

いずれの石器と同様に第Ⅱ調査区より全体のおよそ42％の打製石斧が出土しているが、第Ⅲ調査区にも他調査区に劣ることのない出土量があり、そこが曽利式土器の優勢地域であるとするとその因果関係は興味深い。このような例は石鏃の出土量にも共通したものがあるらしい。

以上の状況にある打製石斧の石材は砂岩122点、頁岩71点、硬砂岩58点、安山岩６点、粘板岩５点、凝灰岩５点、緑泥片岩２点、チャート２点である。この上位３種で251点、およそ93％を占め、石器の種類による素材の特定を充分に知れる。

そして打製石斧が農具であれ、工具であれ、その使用による欠損の頻度も大方予想されるものであるが、本遺跡における完形品は38点、それに略完形品43点を加えても81点、およそ30％に過ぎない。残り70％に達する欠損品の出土状況を第Ⅱ次調査概報では配石遺構に関連するものと示唆しているが、石皿などの欠損率の高さからしても特徴的である。なお、これに反して頁岩を素材とするものの完形率は異常に高く、71点中36点でおよそ半数、そして略完形品を含めると81点中46点、およそ57％を占めることから、その他の石材のもの、特に砂岩製のものに欠損率がさらに上乗せされることを付け加えておかなければならない。

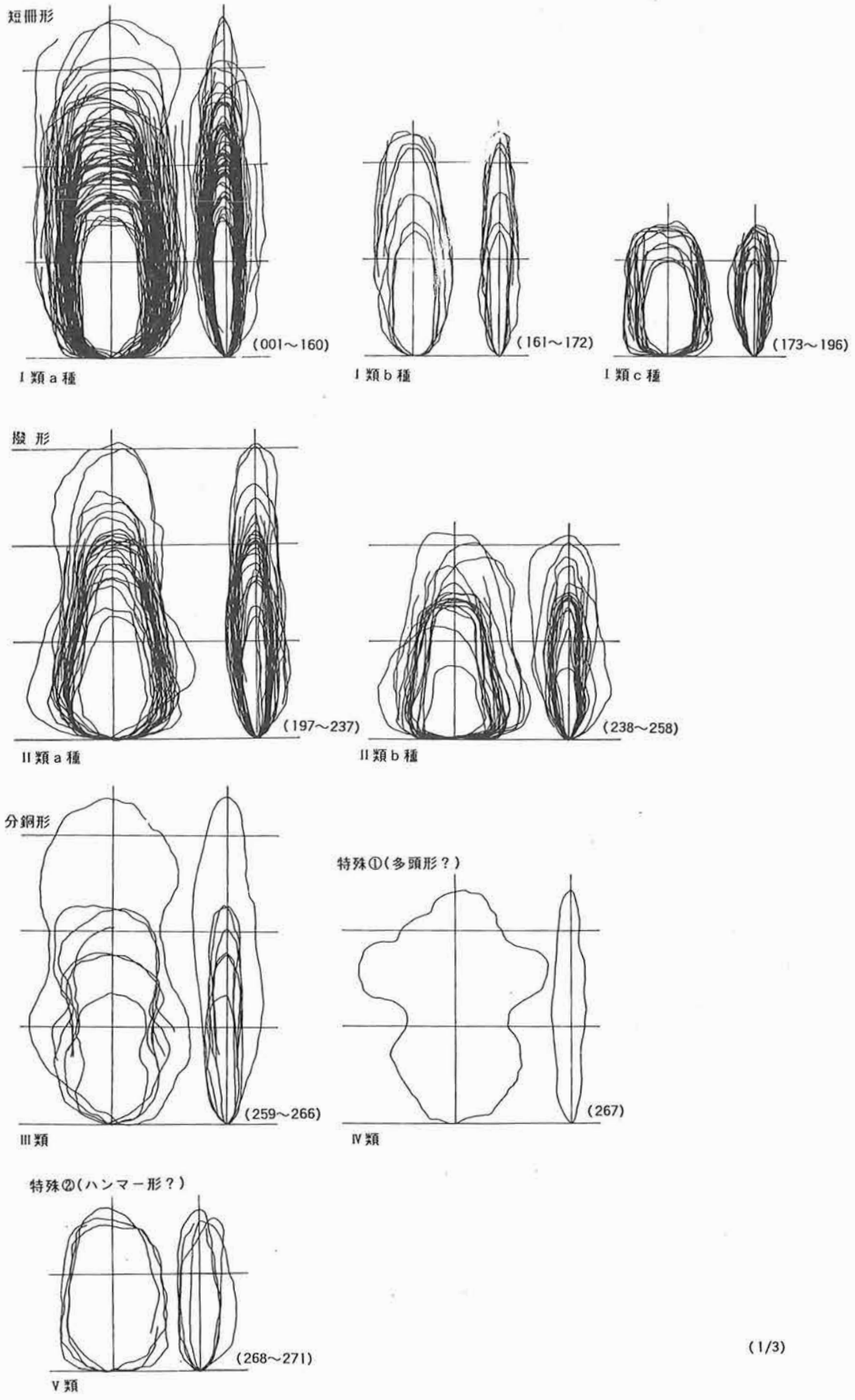
このように欠損率の高い資料で数値に頼ることは不安であり、資料の投影によって特徴を探って見たい。なお、図の横線は5cm幅、３分の１の縮尺である。

先ず、Ⅰ類が形状に統一性があり、直線的で刃部も鋭利である。Ⅰ類ａ種は断面の片寄りが少ない、いわゆる身の反りの少ないもので図－74のような着柄が想定されるものである。「突き鍬」と呼ばれる「山イモ掘り」の掘り棒に似ており、縄文中期の球根類や根茎類などの食料依存度の高さをその出土量からしても窺い知れるものである。Ⅰ類ｂ種は尖頭状の刃部をもって更に突くことに関しては有利である。Ⅰ類ｃ種は長さが7cmを超えない小形のもので、身の反りが目立つ。前述の片刃石斧の特徴に近いが、そこで言う30～60°の角度の片刃には及ばず、木工具としての手斧に当てはめられないでいる。24点中18点、およそ75％が頁岩を素材としており、Ⅱ類ｂ種のような小形の打製石斧や石匙などの特徴と共通している。

Ⅱ類は撥形のものを刃部の状況で分けたものである。

Ⅱ類ａ種はその形容の如く小さな頭部から幅広い刃部を特徴とするものであるが、刃部形状と刃部幅はⅠ類ａ種と変わらないでいる。身の反りは資料中もっとも大きく、柄に対して直角、つまり「Γ」形に刃部を付けた現在の鍬のような使用は納得されるところである。

Ⅱ類ｂ種は直線状の刃部をもち、身長も短く断面も厚いボッテリした感じを受けるもので、Ⅰ類ｃ種よりさらに片刃石斧に近い特徴をもつものである。前述するように21点中16点、およそ76％で頁岩が素材とされ、Ⅰ類ｃ種のあり方に全く近く、また石匙の石材率と同



(1/3)

図－75　打製石斧集成図

様であるように、その形状分類に関してもⅠ類ｃ種、つまり横型石匙でつまみ部が太く、刃部幅の狭いものと違いを見つけるのにも苦労するものである。

Ⅲ類の分銅形のものは資料数も基本３形では10％を超えることなく、縄文時代中期後半から後期にかけて存在感を見せるものであると言う。本地域では隣接する福伝遺跡で堀之内式併行の付加条縄文の施された深鉢形土器と共に、長さ23.2cm、幅11.3cmを測る大形の逸品が出土しており盛行時期を当てている（注２）。

Ⅳ類の特殊①は分銅形石斧に近い形状をして、頭部に３方に向けて凸部が付くものである。刃部（？）は先端を欠損するが、本来は三角形状に突き出していたものと思われる。この石器の天地も不安で、石斧であることは尚更不安であるが、胴部のくびれ部には非常にはっきりとした摩滅痕が見られ、それは単に柄に着装した時の紐による「しばり痕」ではなく、木の棒が直接そこに当てがわれたと思われる程である。つまり、分銅形石斧の着柄法ではなく、多頭石斧や、環状石斧のように傘状に両側から挟んで着柄していたと思われるのである。造作は打製石斧のようで粗雑な感じを受けるが「第２の道具」の可能性もある。

Ⅴ類は刃部のはっきりしないもので、対象物に対して割り入る機能より、敲く機能に重きが置かれていたものと思われる。敲石Ⅰ類ｄ種にも磨製石斧の欠損品を敲きに再利用したものがあり、刃部の磨耗度合によると新たな機能が果たされていたであろうことは充分に承知されるものである。

注1. 鈴木次郎 1983「打製石斧」『縄文文化の研究』7 雄山閣
注2. 富士宮市教育委員会 1993「福伝遺跡」『富士宮の遺跡』

12. 磨製石斧（図－76.77）

磨製石斧は29点が出土している。近年では打製石斧と完全に分離され「斧」としての地位を確立している。本調査で得た磨製石斧は３類にされる。

Ⅰ類　乳棒状のもの(01～10)。
Ⅱ類　定角状のもの(11～19)。
Ⅲ類　局部磨製のもの(20～29)。

これら磨製石斧は後期に至ると定角式磨製石斧の定着化が図られてくる傾向にあるらしいが（注１）、県西部地方における遠州式石斧の発達など地域の独自性もかなり発揮されるらしく、本遺跡における出土比率もⅠ類10点、Ⅱ類９点、Ⅲ類10点と殆ど同率である。出土区別では第Ⅰ調査区６点、第Ⅱ調査区16点、第Ⅲ調査区１点、第Ⅴ調査区６点で、第Ⅱ調査区が全体のおよそ55％を占めて他の石器の出土比率と大過なく、そこでいう中期、後期といったそれぞれの時期的な優勢地域と比較しても、その出土比率と比例した特徴的な数値を示すまでには至らず、一様な出土をみている。また、これらは石斧の特質なのか欠損品が多く、完形品は11.25.29の３点で完形率はおよそ10％に過ぎない。

Ⅰ類の乳棒状磨製石斧は01にその典型を見て、側面には整形のための敲打痕が若干残っている。他は02～07までが胴部で欠損し、この類に欠損例が多い。使用法の違いも考えられるが、素材も砂岩や凝灰岩などの軟質なものが多いことにもよるようである。

Ⅱ類の定角状のものはⅠ類に比べて、蛇紋岩など硬質なものが圧倒して鋭利な感じを受ける。撥形が一般的で14が胴張りのものである。11は敲打痕と顕著な研磨痕が残り、鈍重な感じから製作途上品と思われる。16にも同様の粗い研磨痕を見る。18.19は著しく小形の頭部破片である。堀之内式期の注口土器内より小形石斧が出土した例などから儀器や装飾品の性格が考えられているが（注２）、非実用的な小形品でありながら欠損していることは意図的な破砕も考えねばならないと思われる。

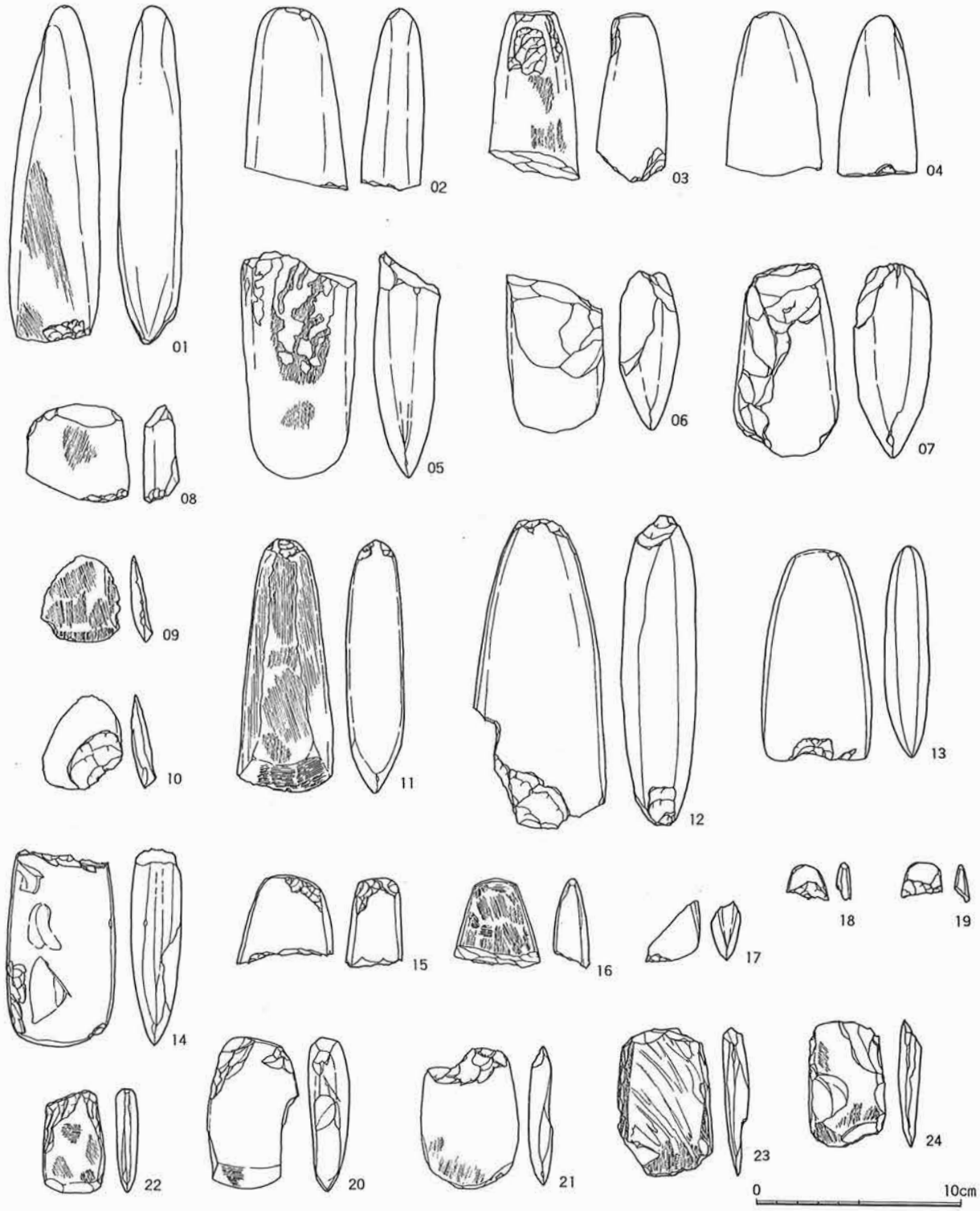
Ⅲ類は石斧をより鋭利にしたいと言う磨製の原点で、その発生以来、不変的なものである。20～22が手頃の扁平礫の側面を簡単な敲打や研磨で整えて刃部を作るものである。23.24は剥片を同様に使用している。25.26は殆ど打製石斧であるものに対して研磨を施すもので、刃部の研ぎ出しを見るとこれで完成品と思われる。27～29は小形の細長い素材の側面を整えて薄く鋭利な刃部を作るもので、完全に鑿を彷彿させる。他はいわゆる横斧で、手斧として使用したものであろう。

なお、Ⅰ類、Ⅱ類の刃部資料には極端な片刃例はなく、おそらくそれは縦斧で斧として使用されたものと思われる（注３）。

注1. 早川正一 1983「磨製石斧」『縄文文化の研究』7 雄山閣
注2. 鈴木道之助 1981 『石器の基礎知識』Ⅲ柏書房
注3. 佐原 真 1994 『斧の文化史』 東京大学出版会

13. スクレイパー類（図－78）

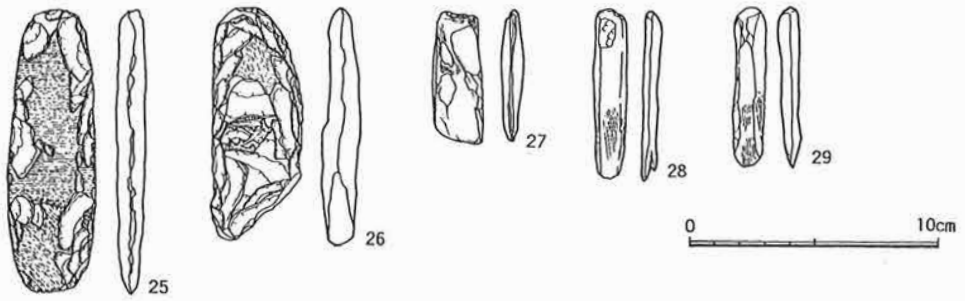
粗雑な剥片の薄い側に刃部を施すもので、掻器、削器を含めてスクレイパー類を呼称している。本遺跡では15点が認められる。前時代的な遺物であるが、縄文時代に至っても石匙や石篦の一部と共に皮剥ぎなどに使用されていたらしい。それらは刃部の施される位置によって２類に分けられる。



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	I	I	砂岩	16.4	4.4	3.2	(360.0)	略完形
02	II	I	砂岩	(9.0)	(5.0)	(3.0)	(200.0)	
03	V	I	砂岩	(8.4)	(4.5)	(3.5)	(186.8)	
04	I	I	砂岩	(8.1)	(4.8)	(3.9)	(20.0)	
05	II	I	砂岩	(11.1)	(5.6)	(3.0)	(300.0)	
06	II	I	硬砂岩	(7.7)	(4.7)	(2.9)	(156.8)	
07	II	I	緑泥片岩	(9.5)	5.0	3.9	(230.0)	
08	II	I	硬砂岩	(4.9)	(4.9)	(1.8)	(61.9)	
09	V	I	砂岩	(4.3)	(3.7)	(0.7)	(13.4)	
10	II	I	砂岩	(5.6)	(3.8)	(0.8)	(16.9)	
11	II	II	緑泥片岩	12.4	4.6	2.9	270.0	
12	II	II	砂岩	(15.1)	(6.5)	3.8	(590.0)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
13	II	II	蛇紋岩	(10.4)	5.5	2.1	(190.0)	
14	I	II	蛇紋岩	(9.3)	5.3	2.5	(200.0)	
15	V	II	蛇紋岩	(4.4)	(4.7)	(2.8)	(84.5)	
16	III	II	蛇紋岩	(4.3)	(4.3)	(1.8)	(45.3)	
17	II	II	蛇紋岩	(2.9)	(2.5)	(1.5)	(8.4)	
18	II	II	蛇紋岩	(2.1)	(2.0)	(0.8)	(2.9)	
19	II	II	蛇紋岩	(1.8)	(2.0)	(0.7)	(2.5)	
20	V	III	硬砂岩	7.6	(4.3)	2.0	(90.3)	
21	I	III	砂岩	(6.0)	4.8	(1.2)	(40.0)	
22	V	III	硬砂岩	(5.0)	3.0	1.0	(27.3)	
23	II	III	粘板岩	(7.7)	(4.6)	1.2	(50.9)	
24	II	III	粘板岩	(6.3)	3.8	1.1	(33.3)	

図－76　磨製石斧実測図－1



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
25	I	III	硬砂岩	11.6	3.5	1.1	67.2	
26	I	III	硬砂岩	(9.6)	3.7	1.4	(66.4)	
27	V	III	粘板岩	(5.3)	2.0	0.9	(12.8)	
28	II	III	硬砂岩	(6.8)	1.4	0.7	(10.7)	
29	II	III	砂岩	6.5	1.2	0.9	10.2	

図－77　磨製石斧実測図－2

Ⅰ類　横長の剥片の下部に刃部をもつもの(01～08)。

Ⅱ類　縦長の剥片の側面に刃部をもつもの(09～15)。

刃部の位置からするとⅠ類が掻器的なもの、Ⅱ類が削器的なものに大別できる。石材は15点中11点、およそ73%が頁岩で占められ、小形石器のあり方に追随している。また作業は皮剥ぎなどが予想されるように硬質のものを対象としたものではなく、欠損率は20%の低率である。これらは形状ならびに刃部の細かい部分でのあり方でさらに細分される。

Ⅰ類ａ種（01～07）は横刃形石器や粗製の石匙的なもので、幅広い刃部を有効的に利用したものと思われる。07は黒曜石の大形剥片を使用したもので刃部は鋭い。

Ⅰ類ｂ種（08）は円形掻器である。砂岩製で軟質のためか刃部の損傷が著しい。

Ⅱ類ａ種（09～11）は尖頭形の剥片の側面に弧状の刃部をもったいわゆる前時代のナイフ形石器に最も近いものである。

Ⅱ類ｂ種は（12～15）も同じく削器、いわゆるサイド・スクレイパーで、角張った縦長の剥片の側面に細かく連続する刃部が作出されている。

以上、それぞれの刃部のあり方を見ると、Ⅰ類が横型石匙、Ⅱ類が縦型石匙に機能的な発展を重ねていったための消長であろうことは充分に納得されるところである。

14. 石　錐（図－79.80）

石錐は50点が認められ、一般の遺跡のなかでは比較的その出土数は多いと言える。調査区別では第Ⅰ調査区９点、第Ⅱ調査区27点、第Ⅲ調査区０点、第Ⅴ調査区19点で、第Ⅰ.Ⅱ調査区を合わせると36点、約７割を占め、石皿などの高出土率と同様にこれも又興味深い。石錐はその名称が示す通り「錐」であり、対象物を穿孔することを目的としているため石材は硬質なものに限られて、大形のものに頁岩、小形のものに黒曜石が使用されている。なお、後者には石鏃と区別が付きにくい場合が多いが、片面加工、湾曲気味の素材など、穿孔に有利と判断できるものを石錐として、石鏃より区別した。

欠損について見ると23点と約半数近くが錐部を欠き、容易ではない穿孔作業が窺い知れる。

近隣遺跡に適当な石錐の分類資料もないことから、先学の分類に基ずき（注）、それに大方従っておきたい。

Ⅰ類　全体の形状が棒状をなすもの（01～06）。

Ⅱ類　明瞭なつまみ状の頭部をもつもので錐部が長いもの（07～16）。

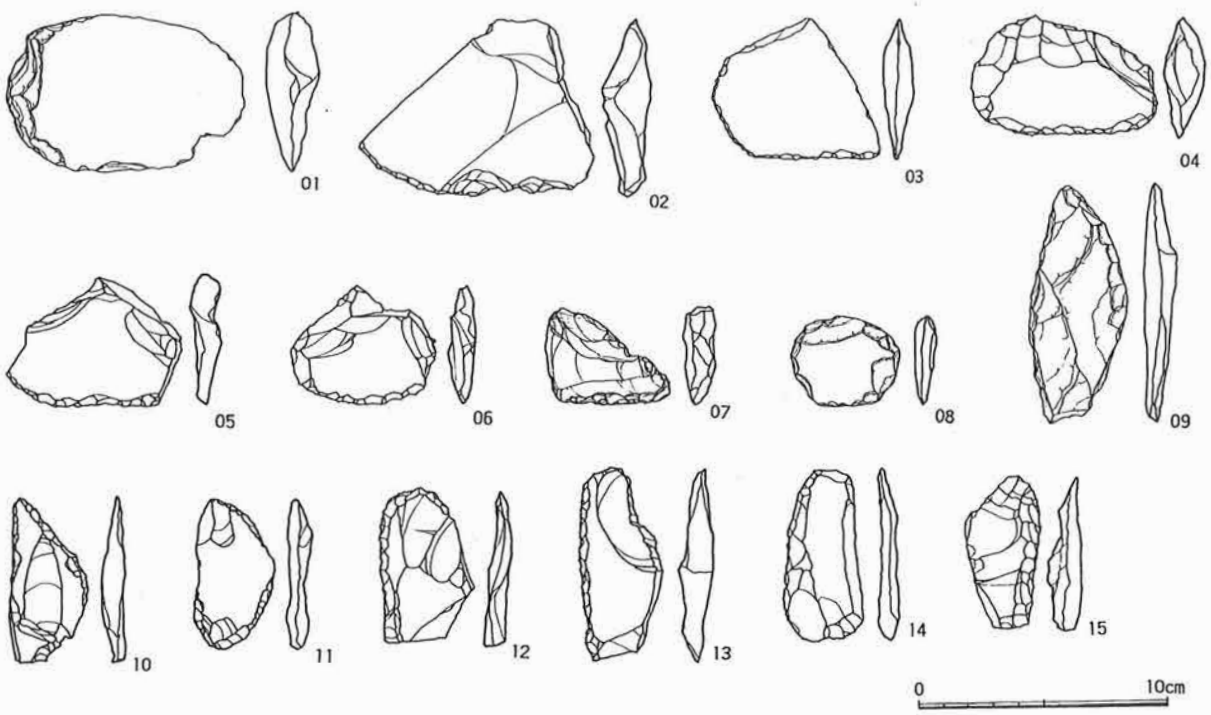
Ⅲ類　明瞭なつまみ状の頭部をもつもので錐部が(著しく）短いもの（17～25）。

Ⅳ類　錐部が次第に太く広がり、頭部との区分が不明瞭なもの（26～47）。

Ⅴ類　棒状あるいは長三角形の剥片の先端に微弱な調整加工を加え、そのまま石錐として用いたもの（48～50）。

以上の分類にあてられた石錐はⅠ類６点、Ⅱ類10点、Ⅲ類９点、Ⅳ類22点、Ⅴ類３点である。Ⅳ類が44%を占め、以下Ⅱ.Ⅲ類と続く。

Ⅰ類は全体量の１割を若干超えるだけで、その占める割合は比較的少ない。しかし縄文草創期の断面三角鑽と呼ばれる石器を含めて本類は早い段階からその存在を示し、以後そうした特徴的な石器は消滅していっても、なお縄文時代全般を通じて安定した器種となっ



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	I	Ia	硬砂岩	6.4	9.5	2.2	(127.7)	略完形
02	I	Ia	頁岩	7.2	(9.3)	2.0	(88.3)	
03	V	Ia	頁岩	5.7	6.0	1.2	42.2	
04	V	Ia	頁岩	4.8	7.5	1.7	63.6	
05	II	Ia	頁岩	5.2	(5.5)	1.2	(30.7)	
06	II	Ia	頁岩	4.8	5.8	1.1	30.3	
07	I	Ia	黒曜石	4.1	4.7	1.3	20.1	
08	V	Ib	砂岩	3.6	4.3	0.9	17.0	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
09	I	IIa	安山岩	9.6	3.9	1.3	44.1	
10	V	IIa	頁岩	6.6	3.0	1.0	17.4	
11	V	IIa	頁岩	6.1	3.1	1.0	18.8	
12	I	IIb	頁岩	(6.2)	3.7	1.8	(21.1)	
13	I	IIb	頁岩	7.8	3.4	1.4	30.3	
14	II	IIb	頁岩	7.0	3.0	0.9	20.0	
15	V	IIb	頁岩	6.2	3.0	1.4	22.0	

図－78　スクレイパー類実測図

ているらしい。つまりその形状から着柄しての手揉み状での使用が考えられ、つまみ部をもつ錐との使用方法の差もあり、前述文献に挙げられる長野県阿久遺跡、北海道末広遺跡で占める出土量も本遺跡例と殆ど同じであるから、Ⅰ類の石錐全体のなかで占める仕事量もその程度であったことを示しているのかも知れない。

素材は全て頁岩が使用され、04を除くと錐部は両面より調整が施されている。04は断面三角形の素材で側面と頭部に簡単な調整がされるものである。頭部に舌状部分が残るが､有舌尖頭器には判断されないものである。

詳細な細分はされないが錐部断面を見ると、01～03.05.06が菱形で、04が三角形（図面標示▲以下同じ）である。06の錐部が頭部より若干の独立を感じるからｂ種として分類すべきであったかも知れない。

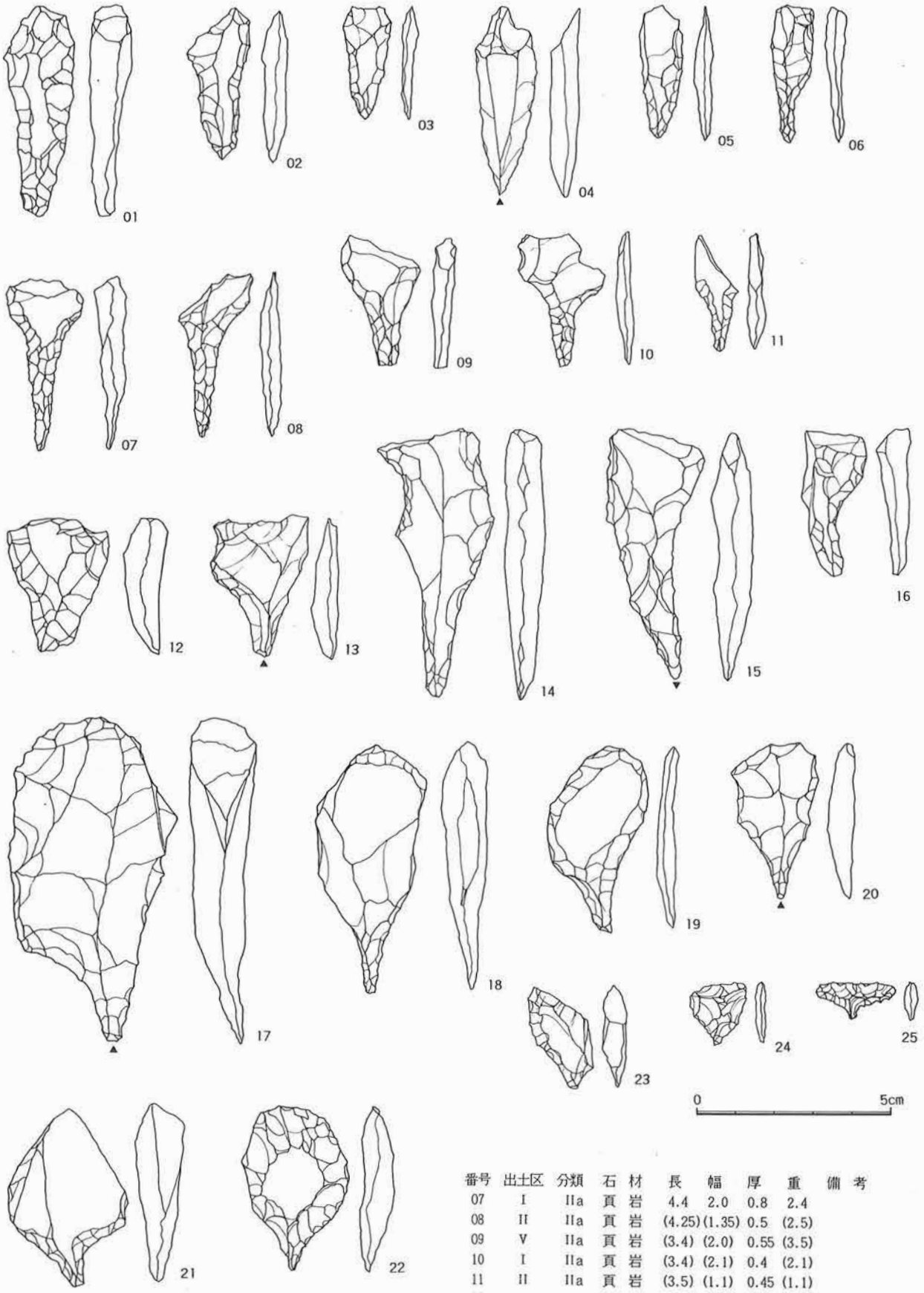
Ⅱ類はつまみ状の頭部に付けられる長い錐部のあり方で細分される。なお、頭部の調整は07.08に可能性もあるが、他は剥片時のままであるものが多い。

Ⅱ類ａ種（07～11)は錐部が長くはっきりとしていて、まっすぐ垂直に作られているものである。いずれも頁岩製で両面より丁寧な調整がされ、最も形状が整っている。錐断面は菱形である。つまみ状の頭部は親指と人差指でつまむのに適当な大きさである。

Ⅱ類ｂ種（12.13）は若干大振りの厚手でボテッとした感じを受けるものである。両者とも錐先端を欠くためはっきりしないが石錐全体の断面が湾曲した「Ｃ」状のもので、表面からの調整が裏面を上回るため錐自体の断面形も三角形となっている。12は欠損部分が根元のため確認は不可能であるがおそらく同じように三角形と思われる。

Ⅱ類ｃ種（14～16）は大形で錐部が太いため、頭部との差もあまり無い。これらは平面から見て、錐部が「Ｃ」字状に湾曲しているものである。錐部の調整も比較的丁寧であり、断面は15が三角形、14.16が菱形である。

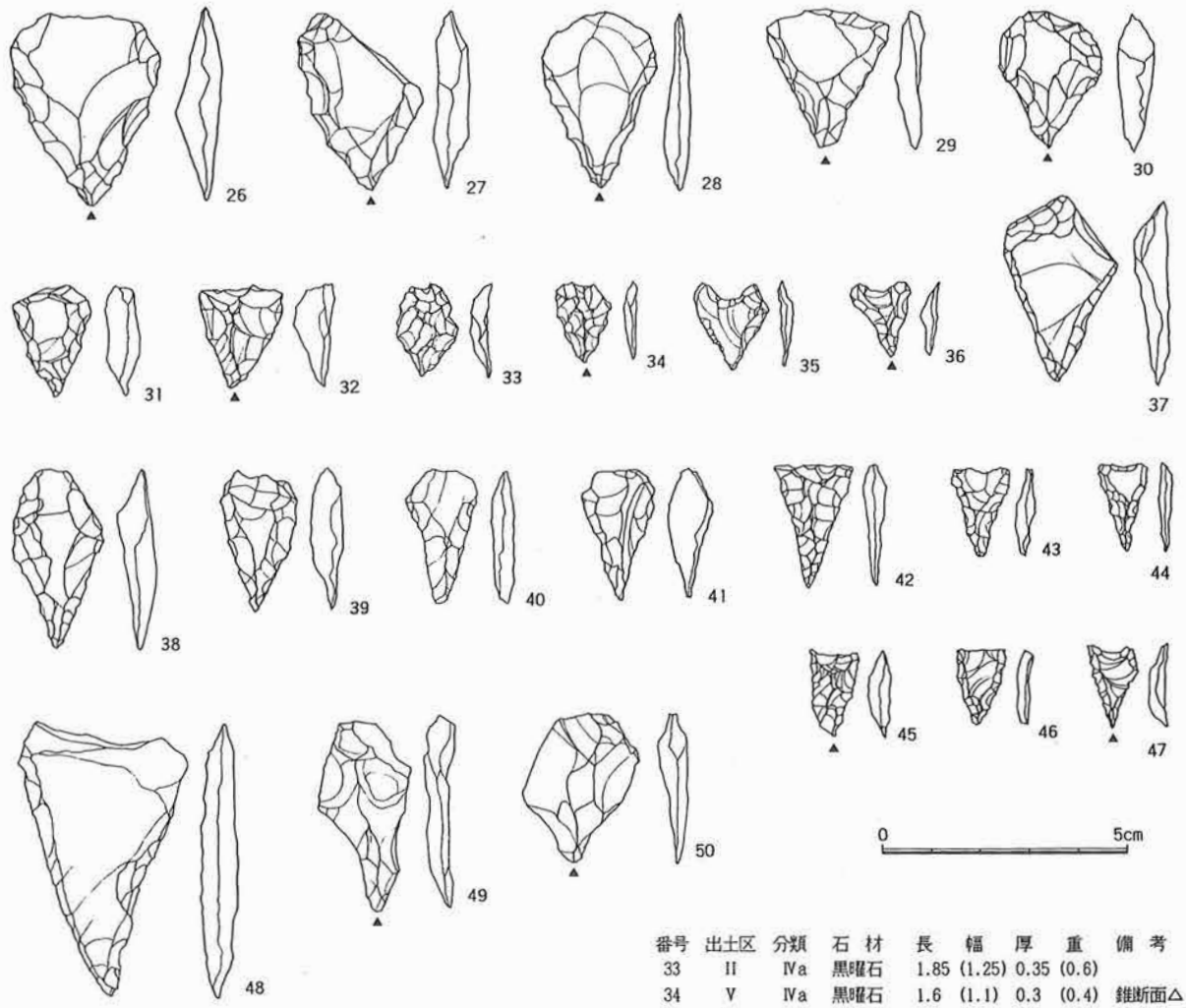
このⅡ類ｂ種、同ｃ種のように断面が「Ｃ」字状となり、中心軸が一定しないものに対して、宮城県上深沢遺跡では「回転軸と錐部中心軸が一定せず偏った角



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	I	Ia	頁岩	(4.9)	1.8	1.1	(10.1)	
02	V	Ia	頁岩	(3.35)	1.55	0.7	(3.6)	
03	II	Ia	頁岩	2.9	1.2	0.4	1.3	
04	II	Ia	頁岩	4.9	1.5	0.8	5.9	錐断面△
05	II	Ia	頁岩	3.5	1.15	0.45	1.8	
06	II	Ib	頁岩	3.55	1.1	0.5	1.6	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
07	I	IIa	頁岩	4.4	2.0	0.8	2.4	
08	II	IIa	頁岩	(4.25)	(1.35)	0.5	(2.5)	
09	V	IIa	頁岩	(3.4)	(2.0)	0.55	(3.5)	
10	I	IIa	頁岩	(3.4)	(2.1)	0.4	(2.1)	
11	II	IIa	頁岩	(3.5)	(1.1)	0.45	(1.1)	
12	V	IIb	頁岩	(3.0)	2.55	1.0	(8.9)	
13	II	IIb	頁岩	(3.95)	(2.4)	0.6	(5.5)	錐断面△
14	I	IIc	頁岩	(7.0)	(2.7)	1.0	(15.1)	
15	I	IIc	頁岩	6.4	2.5	1.1	12.7	錐断面△
16	I	IIc	頁岩	(3.7)	(1.5)	0.9	(4.6)	
17	II	IIIa	頁岩	5.45	4.1	1.7	46.1	錐断面△
18	II	IIIa	頁岩	(6.3)	2.75	1.2	(19.9)	
19	I	IIIa	頁岩	(4.9)	2.4	0.5	(5.6)	

図－79　石錐実測図－1



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
20	II	IIIa	頁岩	4.1	2.15	0.7	5.0	錐断面△
21	II	IIIa	頁岩	(4.6)	4.1	1.25	(12.8)	
22	II	IIIa	頁岩	4.25	2.75	0.8	8.2	
23	V	IIIa	頁岩	(2.6)	(1.5)	(0.7)	(2.9)	
24	V	IIIb	黒曜石	(1.6)	1.5	0.3	(0.6)	
25	II	IIIb	黒曜石	(0.9)	2.0	0.4	(0.4)	
26	II	IVa	頁岩	3.95	3.0	0.9	8.2	錐断面△
27	II	IVa	頁岩	(3.5)	(2.2)	0.7	(5.8)	錐断面△
28	II	IVa	頁岩	3.6	2.35	0.55	3.2	錐断面△
29	II	IVa	頁岩	(2.8)	2.5	0.5	(2.7)	錐断面△
30	II	IVa	頁岩	(2.8)	2.1	0.75	(3.4)	錐断面△
31	I	IVa	頁岩	(2.2)	(1.5)	0.7	(2.3)	
32	II	IVa	黒曜石	2.1	1.65	0.7	1.7	錐断面△

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
33	II	IVa	黒曜石	1.85	(1.25)	0.35	(0.6)	
34	V	IVa	黒曜石	1.6	(1.1)	0.3	(0.4)	錐断面△
35	V	IVa	黒曜石	1.7	(1.5)	0.2	(0.4)	
36	V	IVa	黒曜石	(1.5)	1.2	0.3	(0.3)	錐断面△
37	II	IVb	頁岩	4.2	(2.4)	0.65	(4.4)	
38	V	IVb	頁岩	3.65	1.8	0.65	4.2	
39	II	IVb	頁岩	2.9	(1.5)	0.7	(2.9)	
40	II	IVb	頁岩	2.8	1.5	0.5	1.8	
41	II	IVb	頁岩	2.45	1.9	0.95	2.20	
42	V	IVb	黒曜石	2.55	1.6	0.5	1.0	
43	V	IVb	黒曜石	(1.75)	1.25	0.4	(0.5)	
44	V	IVb	黒曜石	1.8	1.0	0.25	0.3	
45	II	IVb	黒曜石	1.7	1.0	0.45	0.6	錐断面△
46	V	IVb	黒曜石	(1.5)	(1.0)	2.5	(5.0)	
47	V	IVb	黒曜石	1.65	1.0	0.35	0.4	錐断面△
48	I	V	頁岩	5.6	3.4	0.7	11.6	
49	II	V	頁岩	3.95	1.8	0.55	2.8	錐断面△
50	II	V	頁岩	3.0	2.2	0.6	2.7	錐断面△

図－80　石錐実測図－2

度で回転運動が行われた」もので、「孔を拡大しながら徐々に深くする働きをしたもの」とする観察結果がある（前掲文献）。

Ⅲ類は大きな頭部に短い錐部をもつもので、石錐全体の形状の大小で2種にされる。

Ⅲ類a種（17～23）は17に代表されるように錐部に比べて異常に大きい頭部をもつものである。素材は全て頁岩で、調整も錐部に集中することから全体的には粗く見える。石錐全体の断面湾曲例が目立ち、17.20の錐部が三角形の他は菱形である。17.18の頭部は掌のなかに納まり、19～23は指でしっかりと固定することができ、穿孔に対してより力を加えられる形状をしている。これについてはハンドドリルとして穿孔の初段階に使用したものと推測されている。

Ⅲ類ｂ種（24.25）は黒曜石製の小形のものである。作りは非常に精巧で細い錐部も作出されるが、それ故に欠損していて全体を知り得ないのが残念である。24は長野県阿久遺跡で特徴的なものであり、25は頭部と錐部が異常にはっきりとしている。つまり裁縫針のような錐部で回転穿孔に不向きであることから、皮革などの穿孔を対象とする「突き錐」の可能性も指摘されている。

Ⅳ類は正三角形に近いもの（ａ種）と二等辺三角形に近いもの（ｂ種）に分けられる。穿孔に対して三角形の頂部を有するという単純な構造のためか、出土量は他を抜きん出ている。

Ⅳ類ａ種（26～36）は頁岩、32～36黒曜石製である。素材を表面一方から調整することが普通で、石錐自体の断面も台形から三角形状を呈するものが多く、また錐の断面も三角形のものが11点中９点で、圧倒的に多い。三角形の錐部のあり方から、いわばハンドリーマーの機能をもつ錐器で、穿孔部をさらに拡大する機能をもったものとする予想がされている。

Ⅳ類ｂ種（37～47）は37～41が頁岩、42～47が黒曜石製で、その割合は同ａ種とほぼ同じである。しかし、それらが三角形に趣が置かれているのに対し、錐部は両面より調整されて断面が菱形であることが普通で、断面が三角形のものは45.47の２点だけである。こうした特徴はⅠ類に通ずるものがあり、全体的には細長い形状であるから、着柄しての手揉み状の使用が考えられなくもない。

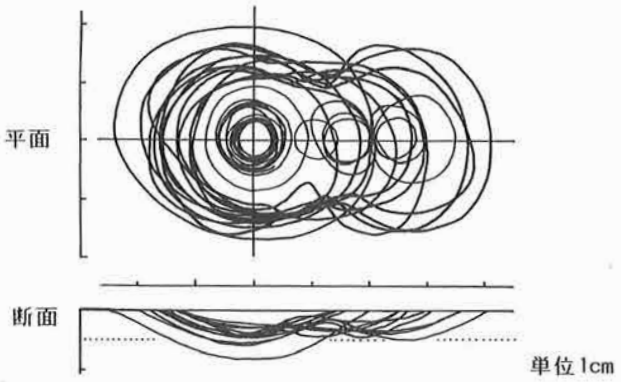
Ⅴ類（48～50）は剥片の先端に簡単な調整を施し、48がⅣ類、49がⅡ類、50がⅢ類に近い構造を見せている。いずれも鋭利感は全くなく、直接の穿孔よりは「孔」の拡大に用いられたものと思われる。

以上、再々述べられることであるが、石錐は穿孔に対して一個で対処するのではなく、複数で対処していったであろうことは充分に納得されることである。また、その手段も弓錐や手揉みなどの回転穿孔、手指でのキリモミ穿孔などいろいろであろう。しかし、それ以上に骨や木に対する穿孔行為は現在、我々が想像するよりずっと多岐にわたっていたであろうことを再認識すべきと思うのである。

注．矢島國夫.前山精明 1983「石錐」『縄文文化の研究』7 雄山閣

15. 凹 石（図－81.82）

凹石は13点が認められる。それは明らかに使用目的をもって凹みが作られたもので、敲きなどの行為によって生じた凹みのものは省いてある。従って凹みは表面と同様に滑らかで、椀状を呈して深くはっきりした輪郭をもっている。径の平均値は2.80cm、深さのそれは0.44cmである（図－81）。素材は03.13を除くと全て砂岩でヒビ割れが著しい。軟質の素材ゆえに凹みの加工が容易であったとしても、側面の敲き使用には耐え難いものを想像させる。なお通常言われる凹みを利用した敲打痕は全く看取されず、磨石との併用例もない。つまり磨るには粉塵の発生が予想され、また敲くには軟質すぎて、蜂の巣石の凹みを利用する堅果類の殻むきにはあまりにも不向きに見える。また発火具の軸押えにはなお不向きである。



図－81　凹石（凹部）集成図

凹みは表裏の片面に１、ないしは２個が穿たれて、両面で１～４個を数える。一応、片面の凹み数で２類にしておく。

Ⅰ類　片面の凹みが１個のもの（01～05）。

Ⅱ類　片面の凹みが２個のもの（06～13）。

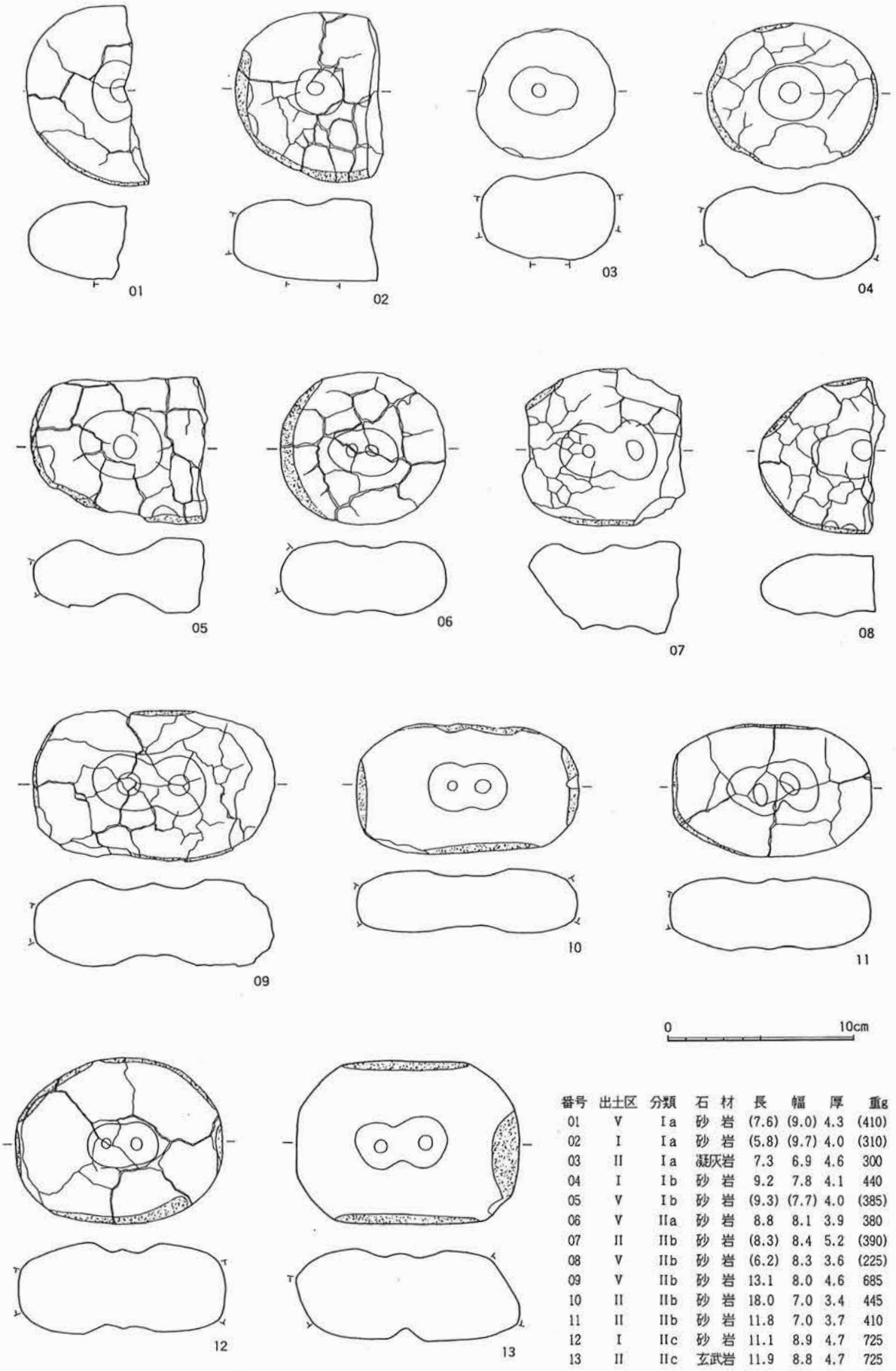
これらは裏面のあり方で、なお細分される。

Ⅰ類ａ種（01～03）は表面に凹み、裏面に敲打痕をもつものである。01.02は偏平状で形状も似るが、側面に著しい敲打を受けてボロボロである。03も周縁を敲打されるが、唯一凝灰岩製で硬くヒビ割れもない。

凹みと敲打痕は背中合わせの位置にあり殆どズレておらず、対象物を凹みで挟んだ後、本種を仲介にして間接的な敲打を行った痕かとも言えるかも知れない。

Ⅰ類ｂ種（04.05）は表裏の両面に同じ大きさの大きく深い凹みをもつものである。04は03と同じく偏球状のもので周縁に著しい敲打痕を見る。05は素材の半割後に再利用して凹みを穿ったものと思える。側面はやはり敲打されて傷みが激しい。凹みは滑らかであり凹石同志で対象物を挟み、ローリングしてそれを球状に整えたような痕跡にも見える。凹石の機能の再検討に重要な凹みのあり方で注意しておきたい。

Ⅱ類の凹みは全てが「○」が連結する「∞」状のも



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重g
01	V	Ia	砂岩	(7.6)	(9.0)	4.3	(410)
02	I	Ia	砂岩	(5.8)	(9.7)	4.0	(310)
03	II	Ia	凝灰岩	7.3	6.9	4.6	300
04	I	Ib	砂岩	9.2	7.8	4.1	440
05	V	Ib	砂岩	(9.3)	(7.7)	4.0	(385)
06	V	IIa	砂岩	8.8	8.1	3.9	380
07	II	IIb	砂岩	(8.3)	8.4	5.2	(390)
08	V	IIb	砂岩	(6.2)	8.3	3.6	(225)
09	V	IIb	砂岩	13.1	8.0	4.6	685
10	II	IIb	砂岩	18.0	7.0	3.4	445
11	II	IIb	砂岩	11.8	7.0	3.7	410
12	I	IIc	砂岩	11.1	8.9	4.7	725
13	II	IIc	玄武岩	11.9	8.8	4.7	725

図－82　凹石実測図

のである。

Ⅱ類ａ種（06）は素材が平たい円形であるためか、凹みの「∞」がつまって「だるま」状である。しかし意識は２つの穴である。片側側面に敲打痕を見る。

Ⅱ類ｂ種（07～11）は楕円形の素材に沿って「∞」状に凹みが穿たれている。側面が薄くなっていることもあり敲石Ⅱ類様の著しい使用痕が見られ、09などは剥離してボロボロで、粉塵の発生は止めようが無いように思える。資料数も多いから凹石のあり方としては優位にあると思われるが、連続する「∞」状の凹みの意図は想像されない。凹みはⅠ類ｂ種ほど滑らかではないが、敲きの使用痕は認められない、しかしローリングには不向きである。Ⅰ類でもそうであったように「∞」状の凹みは表裏背中合わせでズレはなく、球状の対象物を挟んで重ねることはできる。とにかく手持ちの道具として作動しなければ機能は果たせないと思われるものである。

Ⅱ類ｃ種（12.13）は側面に平坦な機能面をもつ、いわゆる「石鹸」状の素材に小さめの「∞」状の凹みが穿たれるものであるが、13の裏面の凹みは１孔であるなど、形状と並んでこの両者は前種とは違いが感じられる。つまり、敲石Ⅱ類の機能の優先機種に凹みが併設されたと見るべきで、敲くことと凹みの因果関係を知るものではあるが、凹み自体の敲石への普及度合いを考えると、それ程両者が併存しなくても果たせた機能に思える。

つまり敲石の圧倒的な量と敲石の果たす多種多彩な機能からすると、凹みをもつもの、つまり凹石の絶対量はあまりに少ないのである。逆に言えば手に持って凹みを利用する凹石にはそれだけの量でまかなえる程の作業対象しかなかったものと思われるのである。そして、またそれは手で敲くことに関して凹みはあまり必要ではなかったとも言え、もし堅果の殻むきであれば、蜂の巣石の凹みと、硬質の素材が選択された敲石や磨石で充分にまかなえることは誰でも想像が付くことである。

凹石については対象物を挟んで押しつける、押しながらローリングするなど、直接的な敲打を伴わないものである可能性に注意を払っておき、広義の磨石類の機能とは分離しておきたい。

16. 砥 石（図－83）

台石の機能面より明らかに研磨痕の著しいものを砥石とした。９点が認められて、そのうち完形品は01の１点だけである。磨るだけに留まらない激しい力によるものか、こうした砥石に限らず磨る機能をもつ石皿、台石などの欠損率は高い。03.05の接合資料を見ると、その場で人為的な割礫行為などを考えなければならないかも知れない。石材は砂岩の使用率が高い。

Ⅰ類　置砥石（01～08）。

Ⅱ類　手持ち砥石（09）。

でⅠ類が圧倒的に多い。

Ⅰ類はさらに形状、砥面のあり方などで４種にされる。

Ⅰ類ａ種（01.02）は円柱状の素材に細長い弱く窪んだ砥面をもつものである。

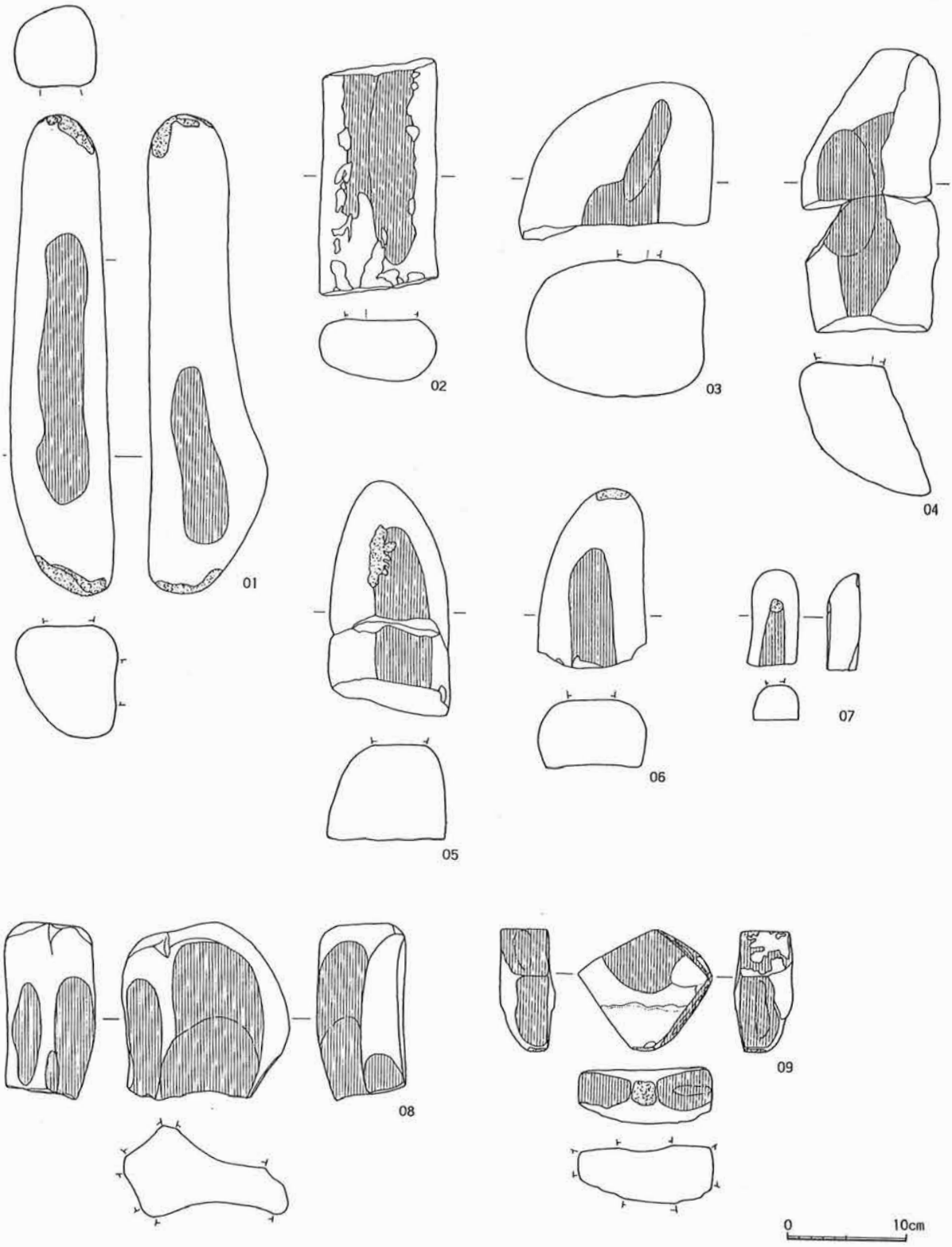
01が立石に用いられた可能性もあり、02は石棒の転用例である。01は長軸方向の敲打痕から大形のハンマー様の使用も兼ねている。使用面から見ると接する面の少ない対象物の縦一方の研磨が予想される。

Ⅰ類ｂ種（03.04）は厚さをもった団子状の素材に、石皿風の球状の砥面をもつもので、比較的接する面の多い対象物をローリングする研磨が行われたものと思われる。両者とも２面の異なった磨耗面をもち、03は溝状に弱い窪みが見られる。

Ⅰ類ｃ種（05～07）は「蒲鉾」または「靴」状に半割された素材が用いられ、安定感は抜群で置砥石そのものと言える。砥面は球形の頂部を細長く使い、対象物は砥面より接する面の広いものを縦に研磨することと、Ⅰ類ａ種同様の使用が併用されたものと思われる。つまり、棒状の対象物の側面と端部の研磨が予想されるものである。砥面の端部に弱い敲打痕が見られ、ここで形状が整えられ磨かれたものであろうか。なお06の端部の敲打痕は素材を半割する時のものと思われる。

Ⅰ類ｄ種（08）は複雑で、三角錐状の側面のすべてが使用され、７面が数えられる。表裏面は石皿風の球形の砥面でローリングする研磨が行われたであろう。側面は細長い砥面で、その使用はⅠ類ａ～ｃ種のすべてを合わせ持っているものと言える。

Ⅱ類（09）は丁度掌のなかに納まる大きさのもので、全ての面に砥面を見て、菱形の頂点には敲打痕もある。つまり握り方によって全ての機能面に対応されるものである。表面が石皿風の球形の砥面以外は平らな砥面をもち、側面には対の位置に浅い溝状の凹部がある。有溝砥石（注）のように溝が貫通しておらず、凸面のある対象物を縦に研磨したものと思われる。石皿片の再利用でもあり、さらに時代を超えて弥生時代ＳＢ36の炉石にも使用されて、器面の半分が炭化して黒ずん



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
01	II	Ia	砂岩	40.5	10.5	9.4	4.65	立石?
02	I	Ia	凝灰岩	(20.3)	10.3	5.4	(2.65)	石棒転用
03	II	Ib	安山岩	(13.4)	(16.7)	(12.0)	(4.05)	
04	V	Ib	砂岩	(24.3)	(11.8)	(10.3)	(4.3)	
05	II	Ic	砂岩	(19.9)	10.4	8.0	(2.55)	
06	II	Ic	安山岩	(15.4)	9.2	5.9	(1.6)	
07	I	Ic	砂岩	(8.2)	4.0	2.7	(0.15)	
08	II	Id	砂岩	(15.3)	14.8	7.7	(1.7)	
09	V	II	砂岩	10.5	11.2	5.1	(0.65)	8号住炉石

図－83　砥石実測図

でいる。

このように縄文時代の石器が弥生時代の炉石に使われている例は、他に敲石などにも認められ比較的多い。住居跡構築の際に掘り出されたであろう下層の縄文時代配石使用礫（地山礫）には目もくれず、そうした選択がなされる時、弥生～古墳時代の竪穴住居跡の炉石に、比較的砂岩などの河原石と称されるきめの細かい石材が使用されることが多い故のことか興味深い再利用の仕方でもある。

注. 宮下健司 1983「有溝砥石」『縄文文化の研究』7 雄山閣

17. 石　鋸（図－84）

石鋸という用語は現在、ふたとおりの意味で用いられているらしい（注）。その一方が「擦切石斧を作るとき原石を引き切る道具と呼ばれる扁平な磨製石器である。砥石という場合は後者（このこと）であるが、正確には砥石に含めるべきものではない。後世の鋸とは異なり、むし切断用のヤスリと言うべきかもしれない。」というもので、これに従う。第Ⅰ調査区より１点の出土を見る。擦切りを行う機能面を5.5cmの長さで残し、それ以外の全縁を欠くために全形は知れないが、おそらく長方形の板状のものと思われる。残存する法量は長さ6.8cm、幅6.4cm、厚さは0.8cmを測る。硬砂岩を素材として縁部にＶ字に近いＵ字状の機能面をもっている。この部分を接点とし、媒材として金剛砂を用いて石斧などの原石を擦切ったと推測されるもので、横位に細かい擦痕が著しく認められる。

注. 鈴木道之助 1981 『石器の基礎知識』Ⅲ 柏書房

18. 石　匙（図－85～87）

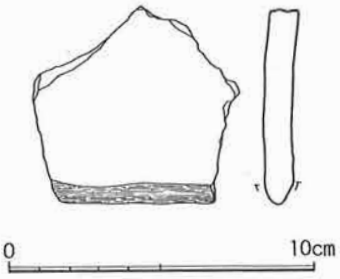
石匙は72点が出土している。これらは通常言われる横型と縦型に分けられる。

Ⅰ類　横型のもの（01～60）。

Ⅱ類　縦型のもの（61～72）。

Ⅰ類60点、Ⅱ類12点で、Ⅰ類がおよそ83％を占める。石材は頁岩63点、砂岩３点、硬砂岩３点、粘板岩２点、チャート２点で、およそ88％の高率で頁岩が素材とされる。このように石器の種類に片寄った選材がなされることは石斧や磨石などからも知れる。欠損の状況は略完形品も含めて完形品が49点およそ68％で、完形率は他に比べて圧倒的に高い。つまり使用による欠損が少ないことは硬対硬の接触の少ない使用方法がとられていたものと思われる。

石匙の出土地区別状況は以下のとおりである。



図－84　石鋸実測図

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
Ⅰ類	15	38	1	6	60
Ⅱ類	6	4	0	2	12
計	21	42	1	8	72

第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区を合わせた出土率はおよそ86％にも及び、完全に第Ⅴ調査区を圧倒している。石斧、石錘など、多くの石器が同様の傾向にあり、第Ⅰ・Ⅱ調査区と第Ⅴ調査区の間に何らかの占地条件の差も考えねばならないものと思われる。

Ⅰ類の横型のものはつまみ部や刃部の状況によってさらに細分される。

a種　つまみ部が上部に付くもの。

1．刃部が極端に長いもの（01～03）。

2．刃部が弧状のもの（03～18）。

3．刃部が直線状のもの（19～26）。

b種　つまみ部が片寄って付くもの。

1．刃部が極端に長いもの（27～31）。

2．刃部が弧状のもの（32～49）。

3．刃部が直線状のもの（50～56）。

c種　つまみ部が太く、刃部の幅が狭いもの。

1．刃部が弧状のもの（57～59）。

2．刃部が直線状のもの（60）。

これらの量はⅠ類b種２が18点、Ⅰ類a種２が16点を数える。つまりこれは刃部が弧状のものであり、直線状のものと対比すると34：15でおよそ２倍強を占める。

Ⅰ類a種で最も大形品は03で長さ6.3cm、幅8.5cm、厚さ2.0cm、長さ77.6g（以下同じ）、Ⅰ類b種で最も大形品は32で、7.5cm、(7.5cm)、1.3cm、(55.8g）を測る。これらの大形品も中部山岳地方でいう大形粗製石匙の大きさには全く及ぶことなく全体的に小振りである。最も小形品は26で、2.6cm、3.1cm、0.7cm、3.7gを測り、チャート製の精巧品である。Ⅰ類a種が作りは丁寧で、Ⅰ類b種が粗雑な感じを受ける。

Ⅰ類c種は縦長で刃部を横位にもつものである。「ヘラ」状の石斧を彷彿させるが、つまみ部の作出が石匙的であることからこれに含めた。刃部が横にスラ

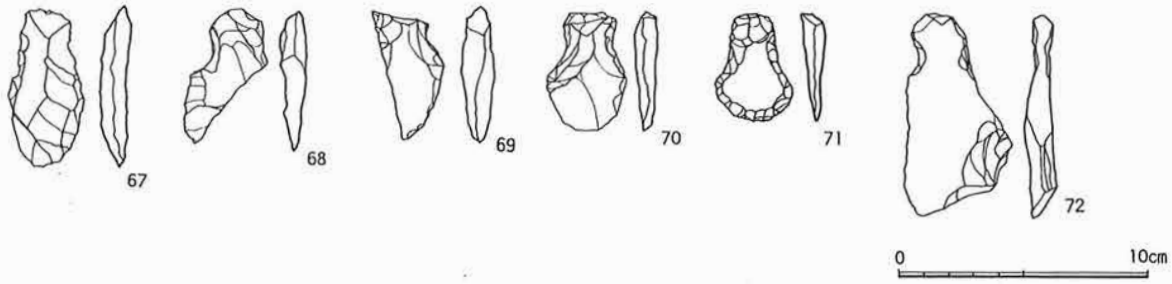
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	II	Ia1	頁岩	3.6	12.4	1.1	29.5	
02	V	Ia1	頁岩	3.6	6.6	0.9	14.3	
03	I	Ia2	頁岩	6.3	8.5	2.0	77.6	
04	II	Ia2	頁岩	5.8	7.7	1.1	45.8	
05	II	Ia2	頁岩	6.2	6.6	1.0	37.4	接合資料
06	V	Ia2	頁岩	5.3	(6.6)	1.1	(35.1)	
07	I	Ia2	砂岩	(5.0)	(3.2)	(1.4)	(13.8)	
08	I	Ia2	砂岩	5.1	5.0	1.1	29.4	
09	II	Ia2	頁岩	4.4	5.1	1.4	27.5	
10	II	Ia2	頁岩	4.1	5.9	1.2	19.6	
11	I	Ia2	頁岩	4.3	5.1	0.7	(13.7)	略完形
12	II	Ia2	頁岩	4.1	(4.8)	0.8	(12.7)	
13	II	Ia2	頁岩	4.1	4.5	0.9	12.5	
14	II	Ia2	頁岩	3.6	5.0	0.6	8.2	
15	II	Ia2	頁岩	3.7	5.3	0.7	9.8	
16	II	Ia2	頁岩	3.6	4.9	0.8	12.5	
17	II	Ia2	頁岩	3.3	4.6	0.9	10.1	
18	II	Ia2	頁岩	3.2	4.5	0.6	5.4	
19	II	Ia3	頁岩	6.0	(5.8)	1.4	(53.1)	
20	II	Ia3	頁岩	4.4	6.5	0.8	15.2	
21	II	Ia3	粘板岩	5.0	(5.0)	0.9	(15.3)	
22	I	Ia3	頁岩	3.7	5.5	1.0	15.5	
23	II	Ia3	頁岩	3.9	5.9	0.7	13.7	
24	II	Ia3	頁岩	3.3	4.2	0.6	8.1	
25	V	Ia3	頁岩	3.5	(3.7)	1.0	(10.1)	略完形
26	II	Ia3	チャート	2.6	3.1	0.7	3.7	精巧品
27	II	Ib1	頁岩	4.9	(7.8)	1.4	(33.4)	
28	I	Ib1	硬砂岩	4.8	7.2	1.5	32.7	
29	II	Ib1	頁岩	4.2	(6.1)	1.2	(31.0)	
30	II	Ib1	頁岩	3.4	6.5	0.7	12.5	

図－85　石匙実測図－1

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
31	II	Ib1	頁岩	3.7	(6.3)	1.1	(26.1)	
32	I	Ib2	頁岩	7.5	(7.5)	1.3	(55.8)	略完形
33	II	Ib2	粘板岩	(5.6)	(7.6)	0.9	(34.1)	
34	V	Ib2	頁岩	6.9	7.1	1.6	65.7	
35	I	Ib2	頁岩	(5.3)	(5.6)	1.2	(33.3)	
36	I	Ib2	頁岩	5.0	6.8	1.2	41.0	
37	II	Ib2	頁岩	6.3	6.8	1.4	30.0	接合資料
38	II	Ib2	頁岩	5.6	6.8	1.4	29.4	
39	I	Ib2	頁岩	(5.0)	(5.4)	1.0	(25.1)	
40	II	Ib2	頁岩	4.2	5.9	1.3	36.4	
41	V	Ib2	頁岩	4.7	6.0	1.3	24.5	
42	II	Ib2	頁岩	(4.5)	(4.4)	1.1	(18.4)	
43	II	Ib2	頁岩	4.8	(4.0)	1.1	(17.5)	
44	I	Ib2	頁岩	4.6	(5.7)	1.3	(21.6)	略完形
45	II	Ib2	頁岩	(3.8)	(5.2)	0.7	(14.1)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
46	I	Ib2	硬砂岩	(4.0)	(5.3)	0.8	(15.1)	
47	II	Ib2	頁岩	3.2	5.2	0.8	12.6	
48	II	Ib2	頁岩	(2.9)	(3.1)	(0.7)	(7.1)	刃部
49	II	Ib2	頁岩	(2.9)	(3.5)	(0.5)	(4.0)	刃部
50	V	Ib3	頁岩	5.8	7.9	1.6	57.0	
51	II	Ib3	頁岩	5.9	7.8	1.4	44.7	
52	I	Ib3	頁岩	6.4	(9.8)	1.1	(35.7)	
53	III	Ib3	チャート	5.8	(5.7)	1.3	(48.0)	
54	II	Ib3	頁岩	3.9	(5.4)	0.4	(8.5)	
55	II	Ib3	頁岩	3.3	5.1	0.7	8.4	
56	I	Ib3	頁岩	3.7	5.6	1.0	18.9	
57	I	Ic1	頁岩	8.0	(6.9)	1.7	(88.9)	略完形
58	II	Ic1	頁岩	7.5	4.7	1.5	43.7	
59	II	Ic1	頁岩	6.2	4.7	1.7	43.1	
60	II	Ic2	頁岩	5.5	4.2	0.9	18.0	

図－86　石匙実測図－2



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
61	II	II－1	砂岩	(10.4)	5.9	1.2	(60.8)	略完形
62	I	II－1	硬砂岩	10.1	4.4	1.1	45.0	
63	V	II－1	頁岩	9.0	4.5	1.4	2.8	
64	I	II－1	頁岩	(7.0)	4.3	1.2	(26.6)	略完形
65	I	II－1	頁岩	6.7	3.1	1.1	26.3	
66	I	II－1	頁岩	6.4	3.5	1.5	31.1	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
67	II	II－1	頁岩	6.4	3.0	1.1	21.3	
68	I	II－1	頁岩	(4.8)	(3.2)	0.9	(12.9)	
69	II	II－1	頁岩	(5.2)	(2.4)	1.3	(16.4)	
70	V	II－1	頁岩	5.4	3.0	1.1	13.8	
71	I	II－1	頁岩	3.8	3.1	1.0	9.0	
72	II	II－2	頁岩	4.3	(8.1)	1.3	(34.4)	

図－87　石匙実測図－3

イドして機能するよりは掻き出す感じが強い。

Ⅱ類の縦型のものは刃部の状況で2つに分けられる。

1．刃部が弧状のもの（61～71）。

2．刃部が直線状のもの（72）。

刃部が直線状のものは72の1点だけであるから、縦型の石匙は弧状の刃部が一般的と言える。刃部は片側側面を機能面としており、71は刃部のあり方からするとⅠ類c種に含めるべきかも知れない。最も大形品が61で（10.4cm）5.6cm、1.2cm、（60.8g）を測る。大きさはⅠ類と同様である。小形品は71で3.8cm、3.1cm、1.0cm、9.0gで、全体的な大きさはⅠ類より若干大振りの感じを受ける。

石匙の用途については動物の皮を剥いだり、物を切ったりするナイフ的な使用法が一般で、その使用方法は多彩であったことも予想されている。そしてつまみ部は柄に付けられたり、紐を結ぶためのくびれで携帯用としていたらしい。本遺跡においてもⅠ類・Ⅱ類を問わず、つまみ部が抉れて紐の着装の可能なものには確かにその痕跡は残っている。しかし、その作出が未熟のものはその痕跡を見ないから、指でつまんだ手持ちのものもあったように思われる。

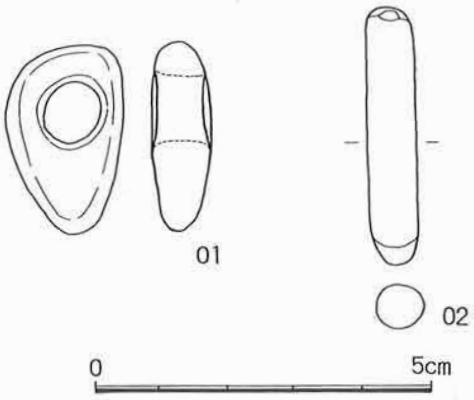
19. 硬玉製大珠（図－88）

硬玉製、いわゆる翡翠製の大珠（01）が1点出土している。こうした硬玉製大珠を出土する遺跡はごく稀で、しかも1遺跡で1点程度に限り、またそれは例外なく地域の拠点集落に当るらしい。そうした意味ではこの地域における滝戸遺跡の位地付けをはっきりさせる遺物と言ってよい。

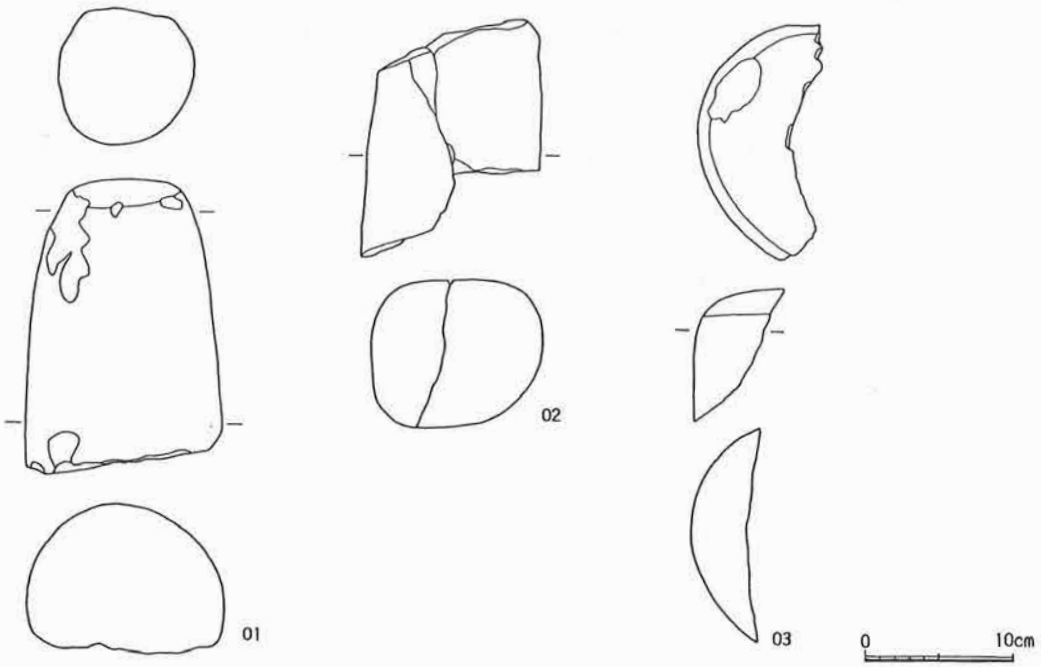
硬玉製大珠は長さ10cm前後の鰹節型、緒締型などが一般で、その殆どが一方向穿孔という特徴をもって縄文中期全般に新潟、富山県を中心とした玉作り遺跡より波及されたものとされる。後期に至ると3cm程に小形化して二方向穿孔が多くなることも特徴のひとつらしい（注）。本遺跡出土の硬玉製大珠は長さ2.8cm、幅1.7cm、厚さ0.9cm、重さ5.5gの小形のもので、径0.8cmの孔をもつ。孔は二方向より穿孔され、後期の特徴を呈していると言える。第Ⅴ調査区より出土し、そこは堀之内式土器の優先地域であるから、そうした事柄から逸脱していないようである。

また、硬玉製大珠の穿孔においては管錐、棒錐の使用を見るが、滑石製の棒錐と思われる円棒の（02）の出土を第Ⅴ調査区に見る。長さ3.7cm、径0.7cm、重さ3.5gで、片側に研磨痕が見られ、硬玉製大珠の孔に合う。しかし、硬玉製大珠の製作は限られた玉作り遺跡によることが一般であるから、直接の因果は問えないでいる。

注．安藤文一 1983「翡翠大珠」『縄文文化の研究』 9 雄山閣



図－88　硬玉製大珠及び石製品実測図



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
01	II	—	砂岩	(20.0)	(13.4)	(10.0)	(3.25)	配石02
02	I	—	凝灰岩	(14.2)	(6.3)	(9.4)	(0.95)	
03	V	—	凝灰岩	(10.0)	(8.3)	(9.2)	(0.75)	

図－89　石棒実測図

20. 石　棒（図－89）

石棒は3点で全て欠損している。第Ⅰ調査区に欠損後、砥石に転用された砥石02を見る。01が砂岩、02.03が凝灰岩で、いずれも軟質の石材が利用され、丁寧な敲打から形状が整えられ磨かれている。03は特に丁寧であるが、頭部の1／2弱の破片で全形が知れないのが残念である。なぜなら散見される石棒のどれよりも、磨きと形状がはっきりしており、石棒の範疇から外れる可能性もあるからである。01.02とも円柱状で男根状に整形された有頭のものは見られない。

本遺跡の石棒の出土数は、ある程度限られた器種とは言え、他の石器の出土率からすれば特に少ない。石棒の出現については未だ不明な点も多いが、縄文中期中葉頃から屋内祭祀のひとつの形態に組み込まれ、中期末から称名寺式期には屋外にもその進出が見られている(注1)。つまり、配石遺構に関わりを持ってくるのであり、本地域でも千居遺跡第1号配石に1点（注2）、滝ノ上遺跡第3号配石に4点（注3）を見る。前者が3m、後者が4.5mの円形配石で、時期的に敷石住居跡の可能性も不安視されているが、両者とも積極的に住居跡に関わる物証を得ていない。特に滝ノ上遺跡では東西南北の方位に沿った配置が見られ、屋外祭祀の例としては興味深い。周辺遺跡がこのような状況にある時、配石遺構を主体に語られている本遺跡における「第2の道具」の石棒のあり方はあまりに少ないと思われるのである。

注1. 山本暉久 1983「石棒」『縄文文化の研究』9 雄山閣

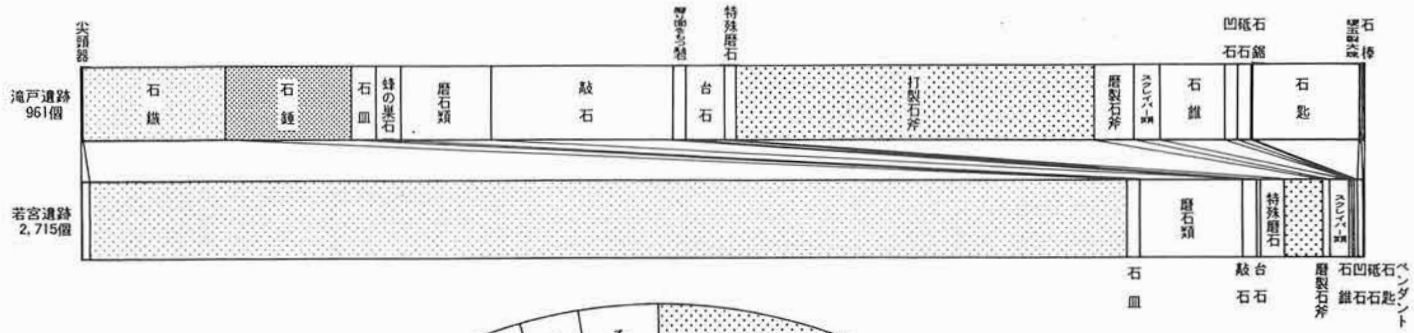
注2. 小野真一 1975 『千居』 加藤学園考古学研究所

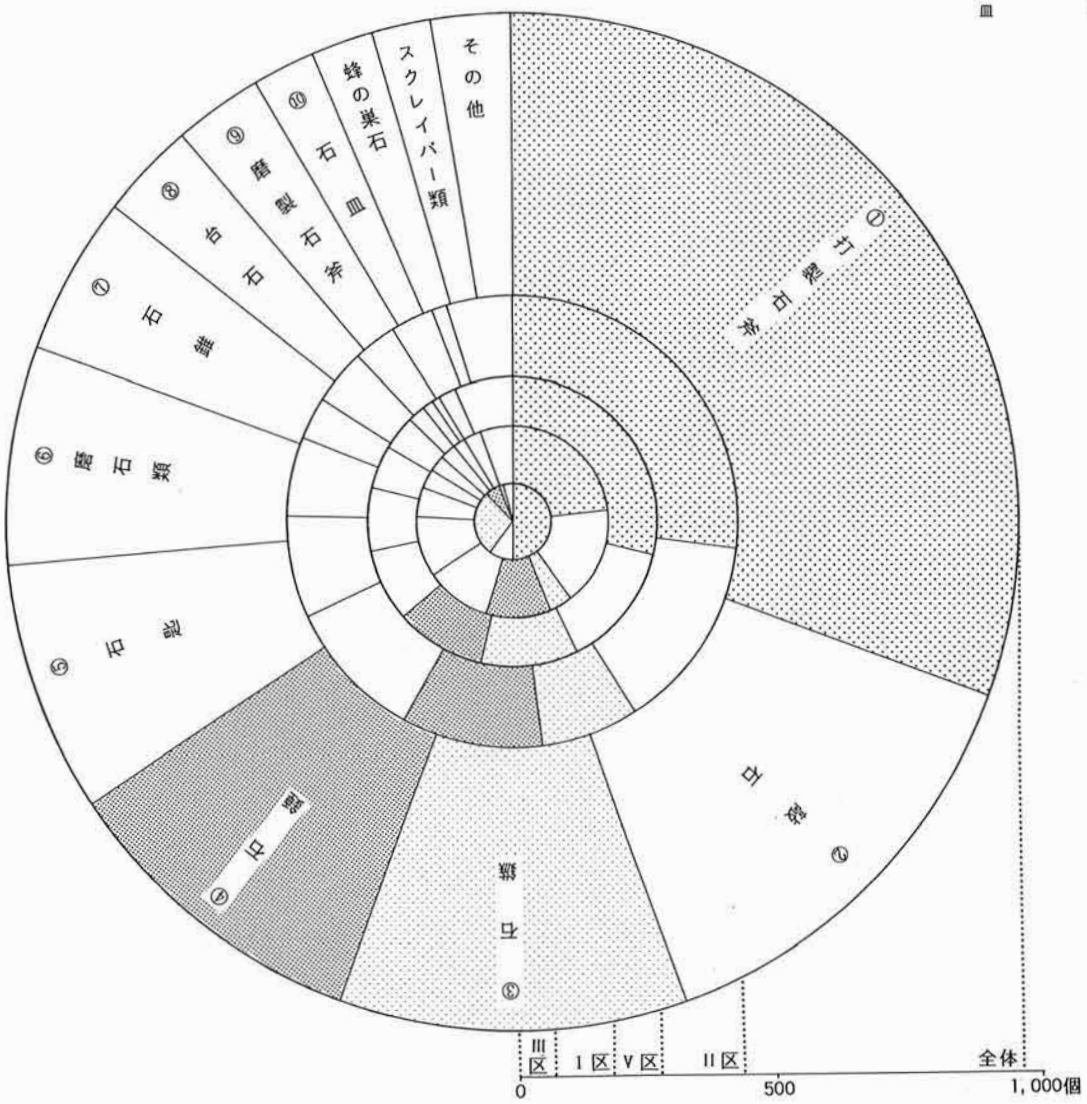
注3. 渡井一信他 1981『滝ノ上遺跡』富士宮市教育委員会

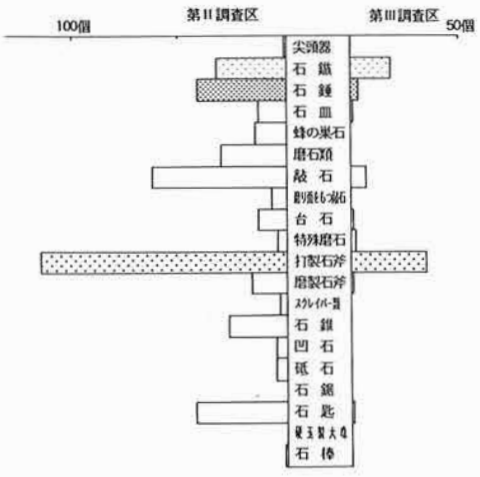
21. 剥　片

本調査より以下の剥片が出土している。

	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計kg
黒曜石	0.5	0.67	0.12	1.14	2.43
頁　岩	10.9	24.35	2.25	9.7	47.20
砂岩等	4.25	13.9	1.4	9.0	28.55
チャート等	0.01	0.01	—	0.01	0.03
計	15.66	38.93	3.77	19.85	78.21







図－90　石器地区別出土比率

22. 石器の出土について（図－90）

本調査で得た石器は20種類、961点である。

種別	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅴ区	計
1．尖頭器		1		1	2
2．石　鏃	7	32	19	49	107
3．石　錘	21	41	4	28	94
4．石　皿	6	13	1	4	24
5．蜂の巣石	3	14		2	19
6．磨石類	18	30		18	66
7．敲　石	32	62	7	32	133
8．磨り面をもつ敲石	1	7		5	13
9．台　石	6	13	1	11	31
10．特殊磨石	2	4	2		8
11．打製石斧	43	114	35	79	271
12．磨製石斧	6	16	1	6	29
13．スクレイパー類	6	3		6	15
14．石　錐	9	27		14	50
15．凹　石	3	5		5	13
16．砥　石	2	5		2	9
17．石　鋸	1				1
18．石　匙	21	42	1	8	72
19．硬玉製大珠				1	1
20．石　棒	1	1		1	3
計	188	430	71	272	961

以上、調査区毎に並べるが、これも当然のようにそれぞれの調査区の発掘容量の差が内在していることを知っておかなければならない。しかし土器の項で検討するように、その実数は発掘された容量のなかではそれぞれの消長を如実に表しているはずであり、下表に示すように土器と石器の出土比率が殆ど同じであると言う事は、それぞれの発掘容量のなかにおける土器の主張は充分に石器のあり方にも反映されているものとして良いと思われるのである。

	土器出土数(%)	石器出土数(%)
Ⅰ区	1,435 (19)	188 (19)
Ⅱ区	3,509 (47)	430 (45)
Ⅲ区	553 (8)	71 (7)
Ⅴ区	1,969 (26)	272 (29)
計	7,416 (100)	961 (100)

これを踏まえて、先ず全体的な出土比率を縄文早期若宮遺跡（注１）の石器構成と順位を付けながら見てみたい。若宮遺跡は集落の全容が明らかにされているから、その組成は当該期の全般に通じるものと判断して良いと思われる。

なお、若宮遺跡の石皿、石斧、磨石は滝戸遺跡の分類に従っている。

滝戸遺跡	(%)	若宮遺跡	(%)
① 打製石斧	271(28)	石　鏃	2,168(79)
② 敲　石	133(14)	磨石類	225(8)
③ 石　鏃	107(11)	打製石斧	83(3)
④ 石　錘	94(10)	特殊石斧	57(2)
⑤ 石　匙	72(8)	敲　石	36(1)
⑥ 磨石類	66(7)	横刃型石器	27(1)
⑦ 石　錐	50(5)	石　皿	25(1)
⑧ 台　石	31(3)	スクレイパー類	20(－)
⑨ 磨製石斧	29(3)	磨製石斧	18(－)
⑩ 石　皿	24(2)	尖頭器	13(－)
⑪ 蜂の巣石	19(2)	台　石	10(－)
⑫ ｽｸﾚｲﾊﾟｰ類	15(2)	凹　石	10(－)
⑬ 磨り面をもつ敲石	13(1)	砥　石	8(－)
⑭ 凹　石	13(1)	石　錐	6(－)
⑮ 砥　石	9(1)	石　匙	5(－)
⑯ 特殊磨石	8(1)	ペンダント	1(－)
⑰ 石　棒	3(－)		
⑱ 尖頭器	2(－)		
⑲ 石　鋸	1(－)		
⑳ 硬玉製大珠	1(－)		
計	961(100)		2,715(100)

ここでは通常言われるように（注２）、縄文早期に石鏃が、中～後期に打製石斧が優勢を占めることが再度確認される。しかし、ここで示される石鏃の数値は複数であることを性格の第一義とする弓矢の付属品を個々の石器と同様に扱うため、異常なパーセンテージとして表れてしまうが、基本的な石器構成は両遺跡とも変わらないことを確認しておきたいところである。

ここで注目すべきは蜂の巣石と石錘が滝戸遺跡の段階で新たに登場していることである。

蜂の巣石が石皿と併用されることは前述するが、若宮遺跡の石皿に凹みの併用は全くないのである。つまり蜂の巣石や石皿の凹みが堅果類のカラ割りのためのものであれば、そこには新たな植生環境や食糧依存が生じていたことになり、縄文時代の気候変動に応じた植生の変化をも追随したものとなるのである。

また、石錘は滝戸遺跡の石器構成のなかで第４位、およそ10%を占めるものである。その出土状況は堀之内式土器の優勢地域と一体化したものであるから、おそらく当該期を主体にして使用頻度が増したと思われるものである。石錘の項で前述するが、若宮遺跡のよ

うに河川や湖沼などの水産域を生活領域に組み入れない山間依存型の遺跡に石錘がなかったり、少ない場合が多く、また、それらの多くの遺跡が縄文中期と後期を境に衰退して行くなか、滝戸遺跡が当該期まで隆盛を続けられたのは、丘陵を取り巻く滝戸渓谷や前面に広がる古大宮湖を以前より生活領域に取り入れていた生活環境にあったためとも思われるのである。しかしこの漁撈への依存も何らかの原因をもってすぐに限界を迎えたことはその後の急激な衰退現象からも知られていることである。

この他に両遺跡間で特徴的に異なる現象に打製石斧の欠損状況がある。

	完形(%)	欠損(%)	計
若宮遺跡	59 (71)	24(29)	83
滝戸遺跡	81 (30)	190(70)	271
滝戸Ⅲ区	4 (11)	31(89)	35

これらが同じ「土掘り具」として同様の使用目的と使用頻度にあったとすると滝戸遺跡のそれは異常で、まして曽利式土器を伴う埋甕とその配石域である第Ⅲ調査区で更に高率となる事実は、若宮遺跡の住居空間にはない祭祀的な遺構、つまり配石遺構などに対して、欠損した打製石斧を混じえる行為があった可能性もあながち否定できないものとなるのである。

最後にそれぞれの調査区の出土状況を見ると、第Ⅰ.Ⅱ.Ⅴ調査区に大きな変動は認められないが、第Ⅲ調査区の極端な違いに気付く。つまり打製石斧と石鏃で出土石器のおよそ80%を占め、第Ⅱ調査区に目立つような調理や加工用の定置形の石器類が全く見られないのである。要するにこのことは第Ⅱ調査区が曽利式期のなかで住居空間から祭祀空間に変わって行ったのに対して、第Ⅲ調査区は当初より埋甕や配石による祭祀空間であったことを示すものであり、その祭祀行為に際して限られた器種の選定は曽利式期の象徴石器であったためのものか、また食糧調達に直接関わる石器であった故のことか、欠損した打製石斧のあり方と共に興味深い事柄である。いずれにしても第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区の包蔵内容はその積み重ねられた生活の跡が歴然とした差となって残っているのである。

注1. 富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』

注2. 植松章八 1993 『富士宮市の遺跡』 富士宮市教育委員会

E. ドングリ類

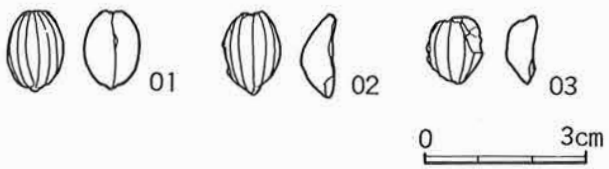
第Ⅰ調査区中央集石より南へ5m程のところにある小規模な焼土内よりドングリ類3粒が出土している(図−91)。1粒は完形であるが、他の2粒は半割してスミの状態である。

01が長さ1.4cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm、重さ0.4g(以下同じ)、02が1.5cm、1.1cm、(0.6cm)、(0.2g)、03が1.2cm、1.1cm、(0.6cm)、(0.2g)である。

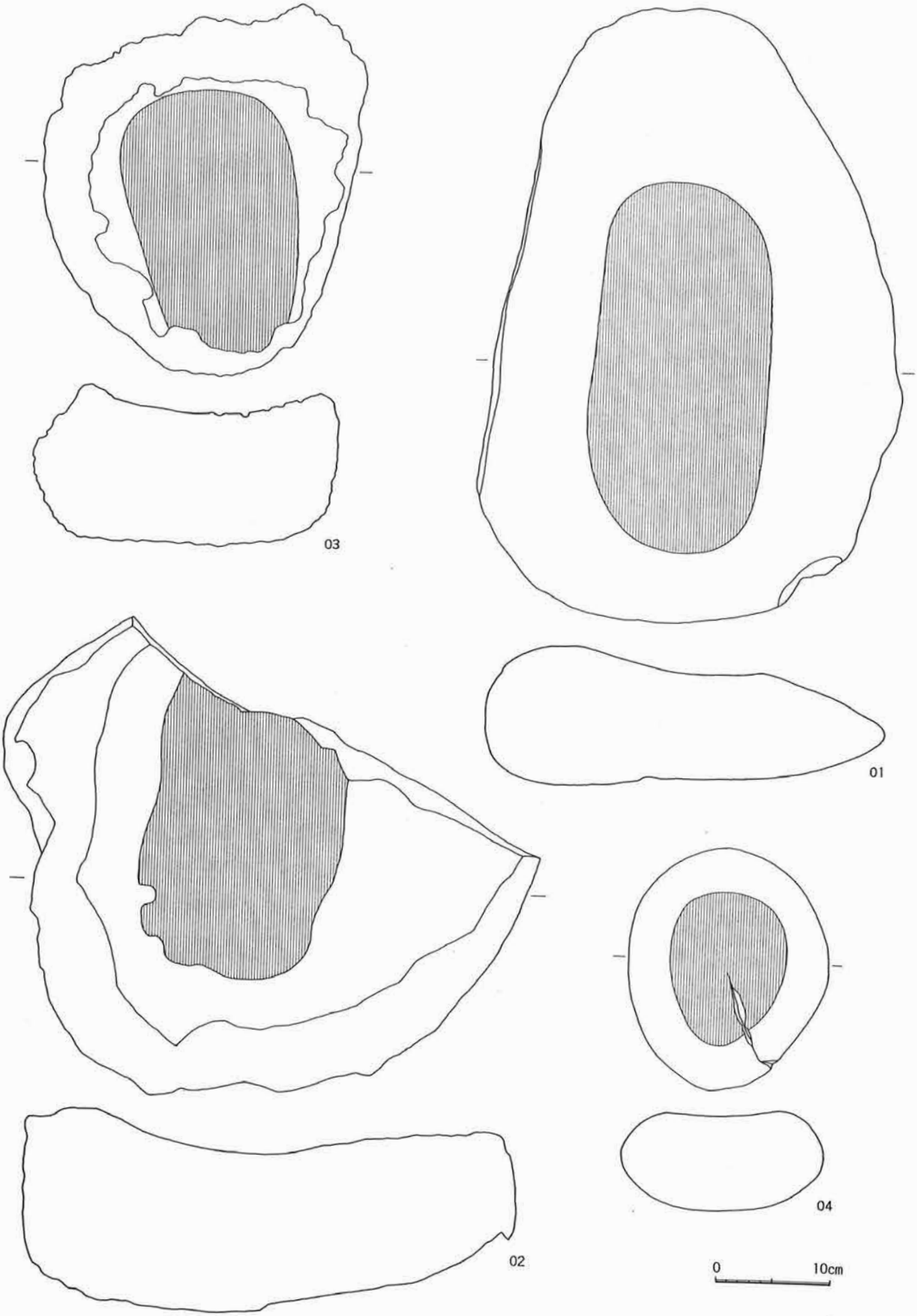
ドングリはナラ、カシ、シイの実の俗称で、それにはアク抜きを必要とする種類と不要な種類があり、このことから近年アク抜き施設として、水サラシ遺構など水場に関する遺構の追求にも著しいものがある(注1)。本地域の植生は照葉樹林に含まれるから(注2)、カシ類のドングリと思われ、これにはアクやタンニンもあるが、水さらしのみで加熱工程がないと言う。眼下の滝戸渓谷や古大宮湖など水利条件は良いが、岐阜県カクシクレ遺跡(注1同)などを見ると狭い開折谷の谷頭の湧水地点が好まれているから、本遺跡南側に深く入り込んだ同様の谷頭、つまり、現本光寺の背後に興味が注がれるのである。

注1. 渡辺 誠 1996『考古ジャーナル7』405 ニューサイエンス社

注2. 渡辺 誠 1982 『考古学』 創刊号 雄山閣

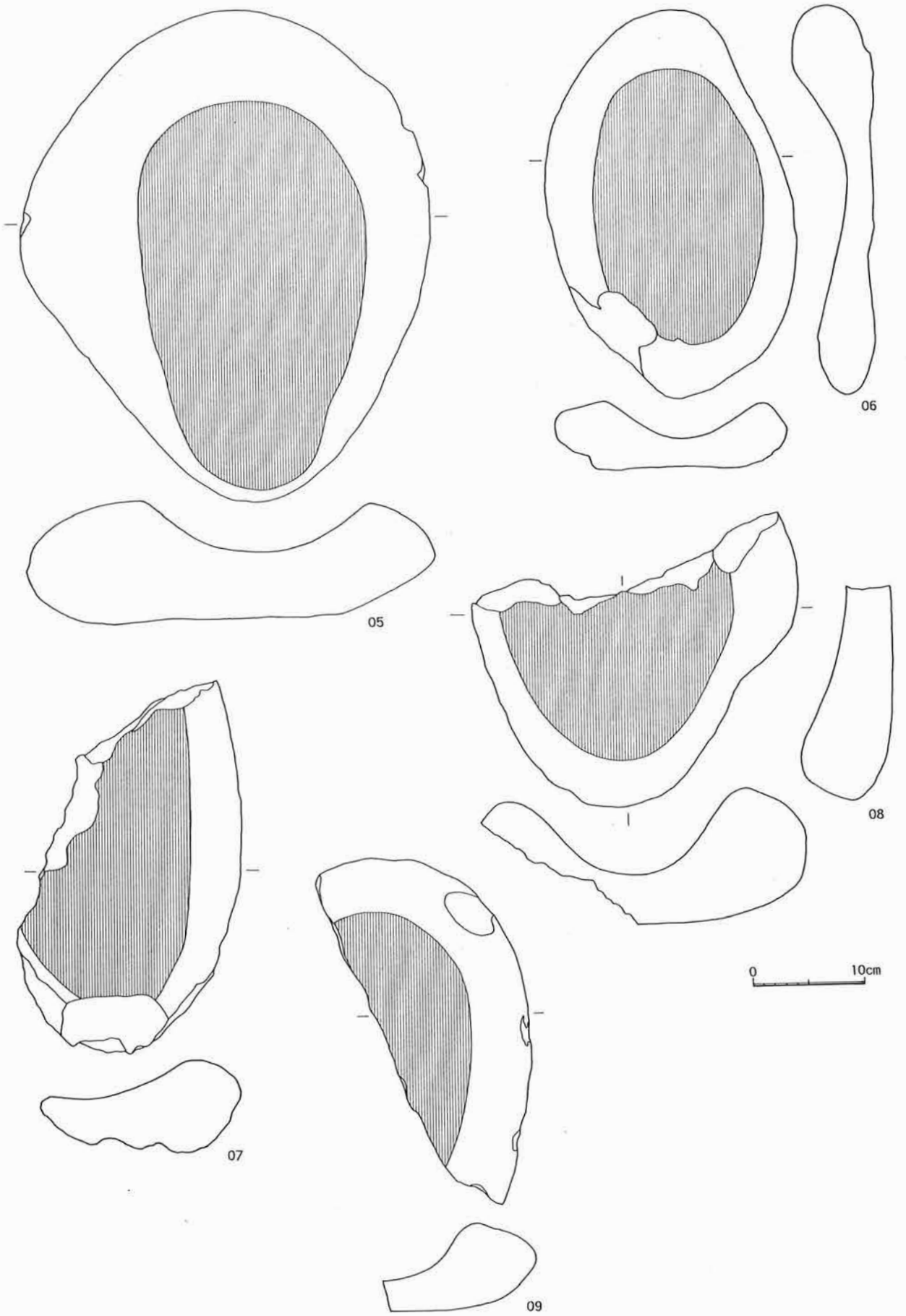


図−91 ドングリ類実測図



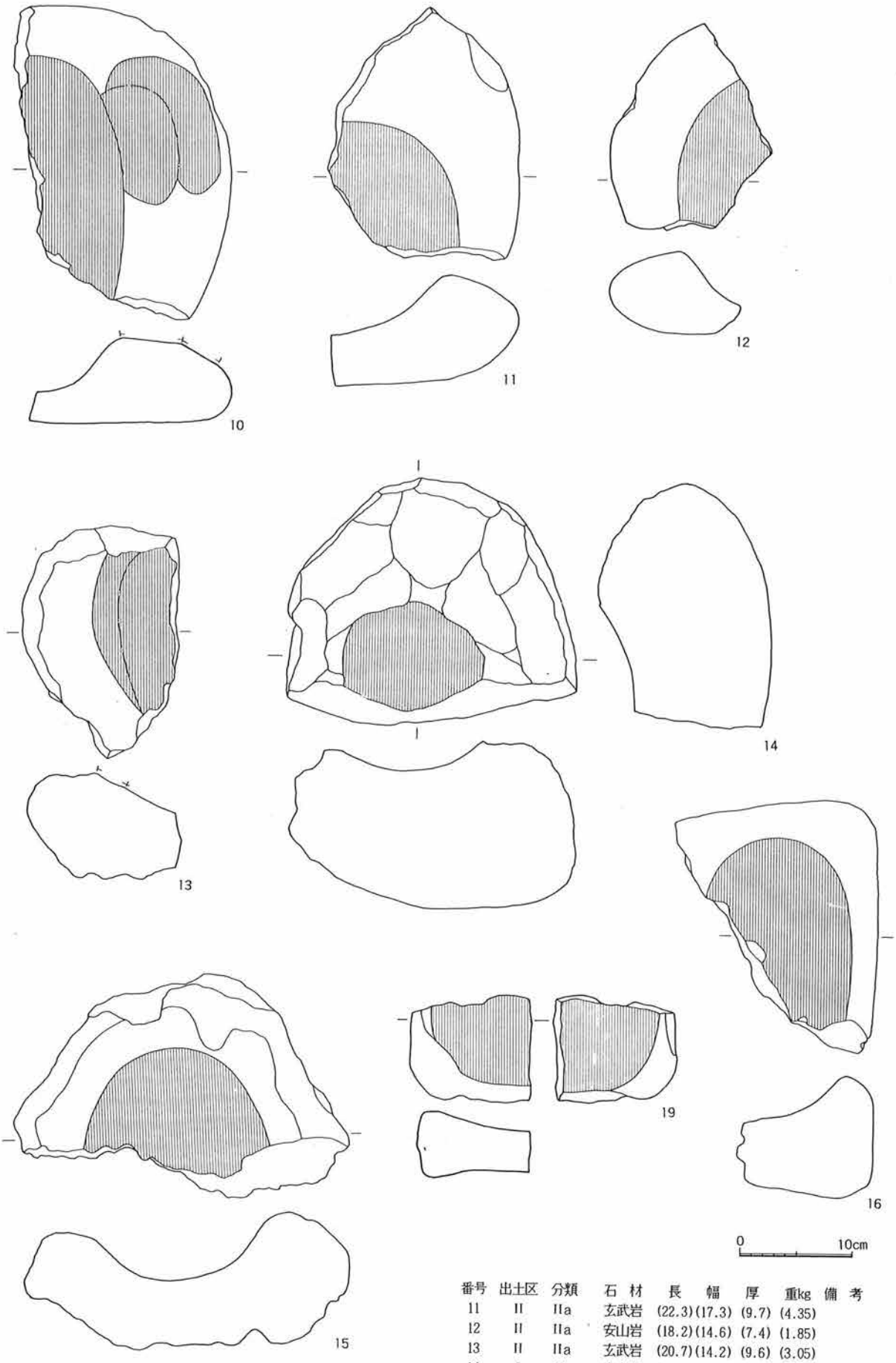
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
01	II	I	安山岩	55.0	36.8	12.4	30.6	
02	I	I	安山岩	(42.3)	(48.0)	(17.5)	(33.15)	
03	II	I	玄武岩	(32.8)	(22.5)	(14.2)	(14.35)	多孔質
04	V	I	花崗岩	21.6	17.7	8.9	4.70	

図－92　石皿実測図－1



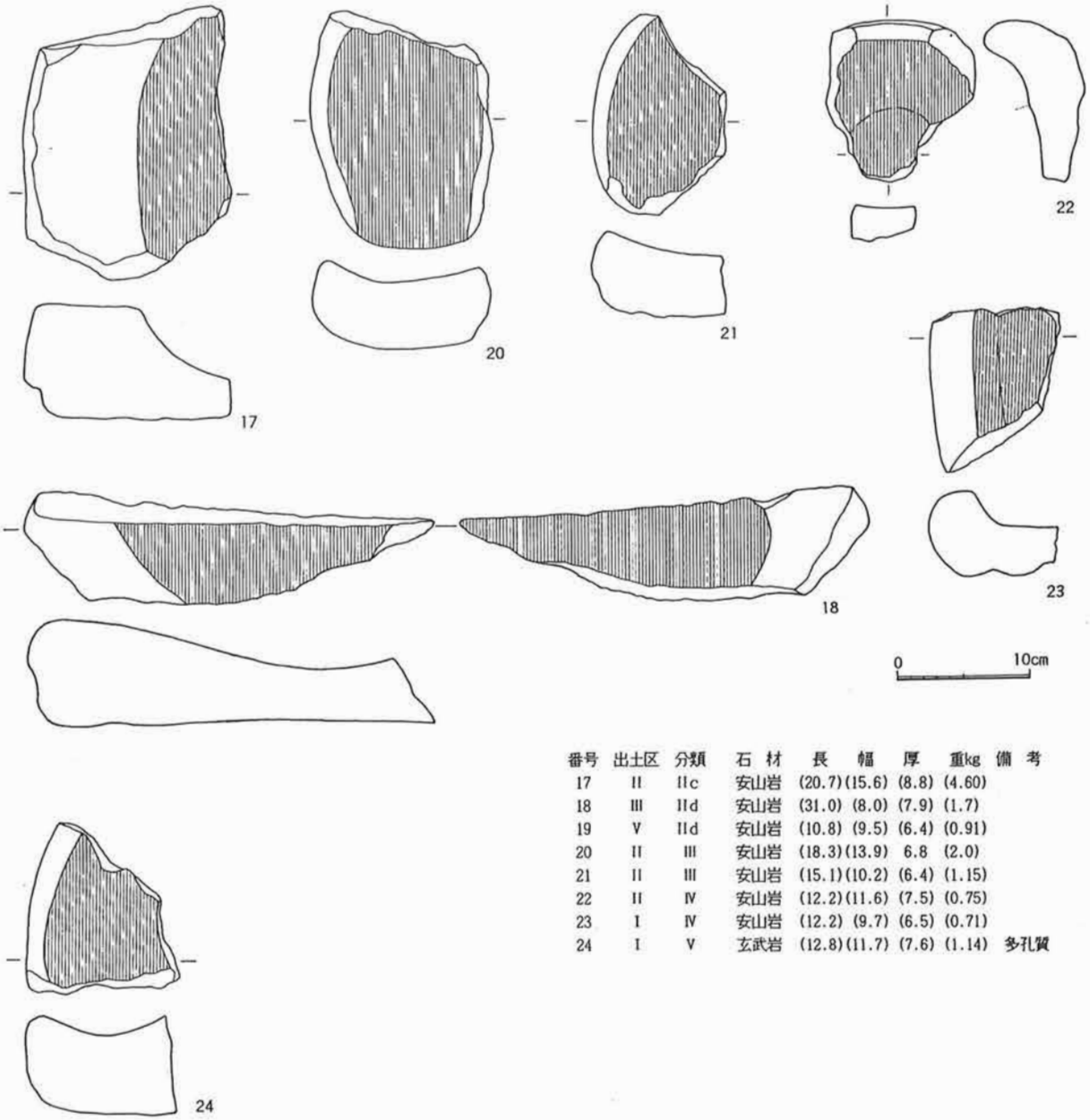
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
05	V	IIa	安山岩	44.4	36.8	11.2	20.75	
06	I	IIa	玄武岩	(34.9)	(22.2)	(6.4)	5.12)	多孔質
07	II	IIa	玄武岩	(33.4)	(20.3)	(8.3)	(2.50)	多孔質
08	I	IIa	玄武岩	(26.0)	29.2	(12.0)	(7.12)	多孔質
09	II	IIa	安山岩	(30.8)	(18.9)	(6.9)	(4.20)	
10	II	IIa	安山岩	(27.6)	(19.4)	(7.5)	(5.95)	

図－93　石皿実測図－2



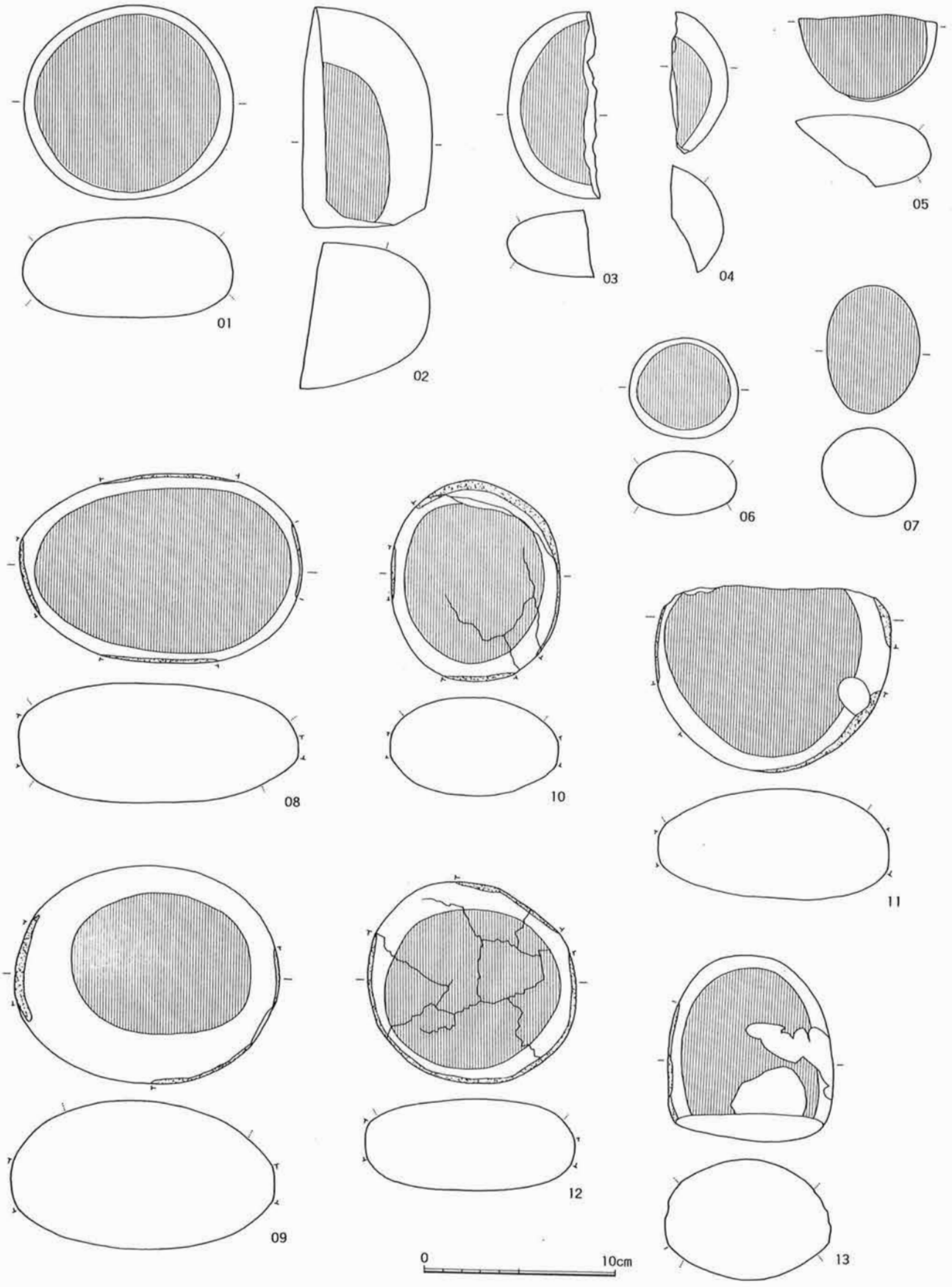
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
11	II	IIa	玄武岩	(22.3)	(17.3)	(9.7)	(4.35)	
12	II	IIa	安山岩	(18.2)	(14.6)	(7.4)	(1.85)	
13	II	IIa	玄武岩	(20.7)	(14.2)	(9.6)	(3.05)	
14	I	IIb	安山岩	(22.1)	(26.2)	(14.9)	(11.75)	
15	II	IIc	玄武岩	(29.8)	(20.3)	(11.6)	(5.65)	
16	V	IIc	玄武岩	(22.3)	(18.6)	(10.9)	(4.85)	
17	II	IIc	安山岩	(20.7)	(15.6)	(8.8)	(4.60)	

図－94　石皿実測図－3



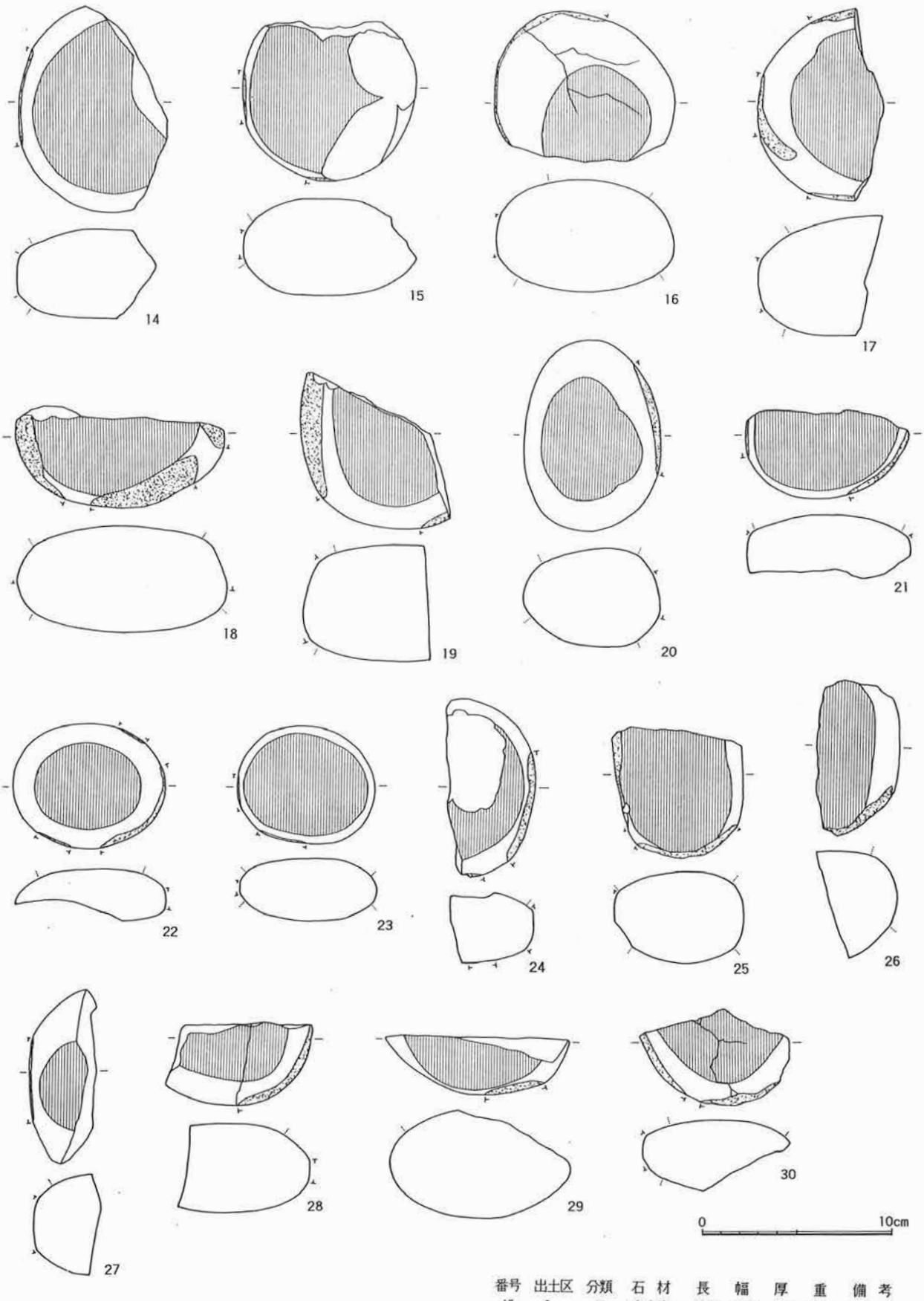
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
17	II	IIc	安山岩	(20.7)	(15.6)	(8.8)	(4.60)	
18	III	IId	安山岩	(31.0)	(8.0)	(7.9)	(1.7)	
19	V	IId	安山岩	(10.8)	(9.5)	(6.4)	(0.91)	
20	II	III	安山岩	(18.3)	(13.9)	6.8	(2.0)	
21	II	III	安山岩	(15.1)	(10.2)	(6.4)	(1.15)	
22	II	IV	安山岩	(12.2)	(11.6)	(7.5)	(0.75)	
23	I	IV	安山岩	(12.2)	(9.7)	(6.5)	(0.71)	
24	I	V	玄武岩	(12.8)	(11.7)	(7.6)	(1.14)	多孔質

図－95　石 皿 実 測 図 － 4



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
01	V	I	礫岩	11.0	10.1	5.2	919	
02	II	I	砂岩	(10.7)	(6.9)	(7.7)	(842)	
03	I	I	凝灰岩	(9.7)	(4.6)	(3.6)	(225)	
04	II	I	砂岩	(7.3)	(2.8)	(2.6)	(112)	
05	II	I	凝灰岩	(7.3)	(4.5)	(3.6)	(108)	
06	II	I	砂岩	5.7	5.2	3.4	91	
07	II	I	砂岩	6.8	4.9	4.8	205	
08	V	II	砂岩	14.8	9.9	6.3	1368	
09	II	II	凝灰岩	13.9	11.4	7.9	1916	
10	II	II	凝灰岩	10.5	8.9	5.2	654	

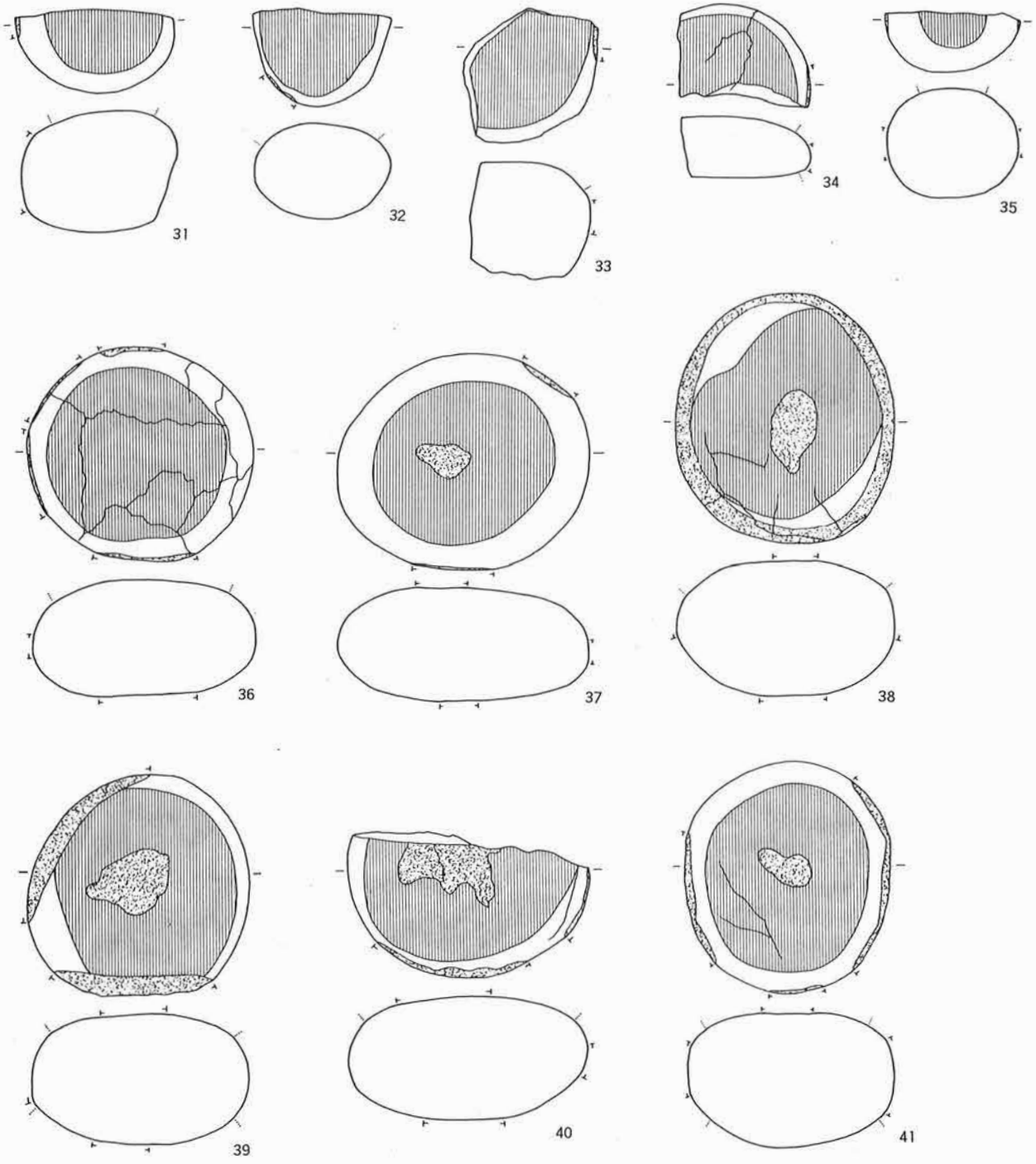
図－96　磨石類実測図－1



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
11	II	II	礫岩	12.5	(9.7)	5.8	(1037)	
12	I	II	礫岩	11.1	10.4	4.7	755	
13	II	II	砂岩	(10.2)	8.5	5.2	(719)	
14	II	II	砂岩	(6.8)	9.3	5.1	(483)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
15	I	II	安山岩	(8.2)	9.3	5.2	(612)	
16	I	II	砂岩	9.8	7.6	5.9	615	
17	I	II	花崗岩	(7.1)	10.2	6.3	(497)	
18	V	II	砂岩	11.0	(5.2)	5.6	(420)	
19	II	II	花崗岩	(10.6)	(6.2)	6.2	(513)	
20	V	II	砂岩	10.1	7.2	5.3	618	

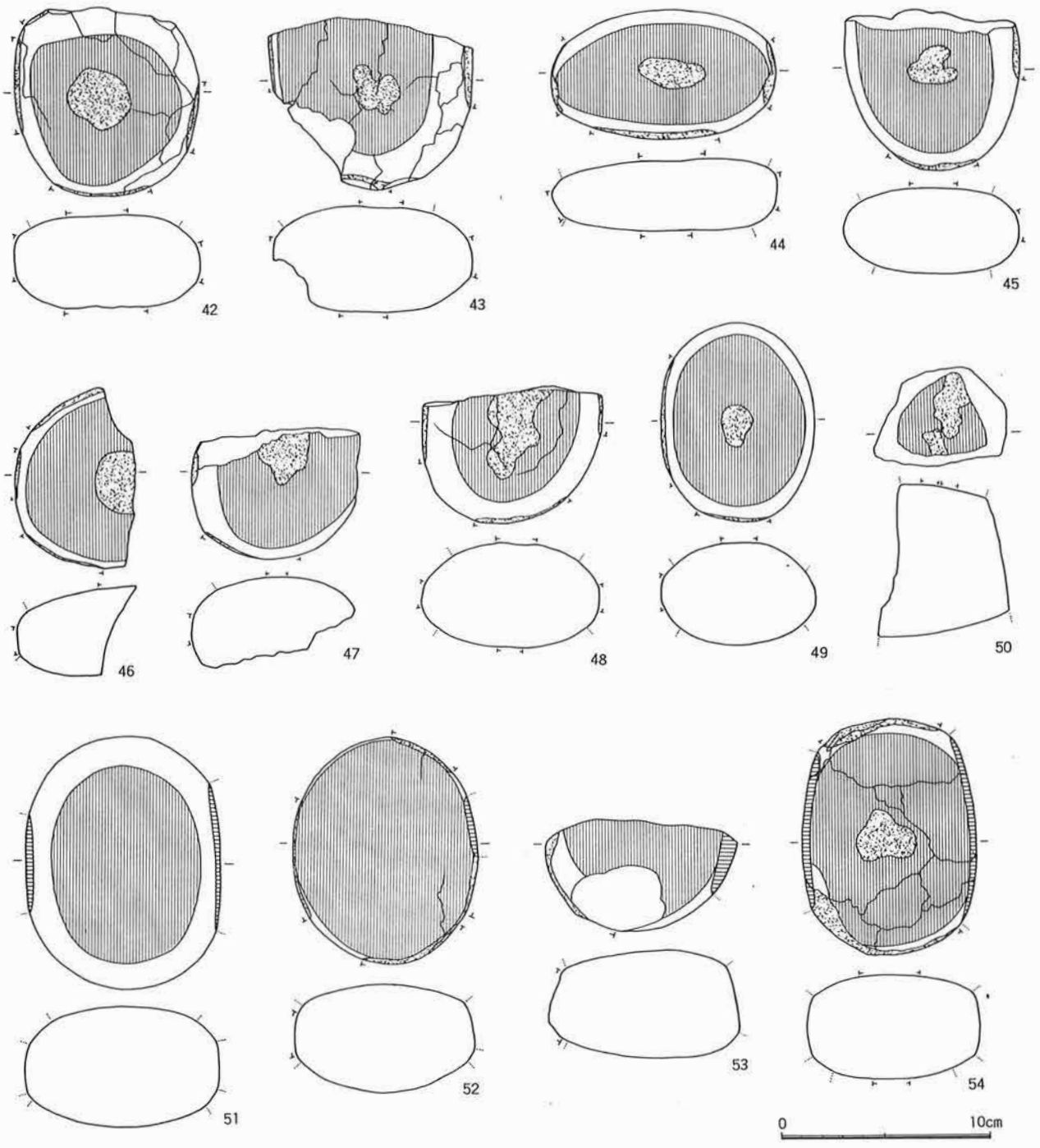
図－97　磨石類実測図－2



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
21	V	II	砂岩	(8.7)	(4.5)	(3.7)	(161)	
22	V	II	硬砂岩	8.0	7.6	(2.5)	(150)	
23	II	II	砂岩	7.3	6.2	3.2	218	
24	V	II	玄武岩	9.4	(4.6)	4.4	(230)	
25	II	II	安山岩	(6.7)	7.0	4.9	(339)	
26	I	II	花崗岩	(8.2)	(4.4)	5.7	(244)	
27	II	II	玄武岩	(8.3)	(3.5)	(5.4)	(210)	
28	V	II	砂岩	(7.0)	(4.3)	4.7	(203)	
29	V	II	花崗岩	(9.6)	(3.1)	(5.7)	(215)	
30	II	II	礫岩	(8.0)	(5.0)	(3.7)	(126)	
31	I	II	砂岩	(7.5)	(3.9)	5.9	(217)	
32	V	II	花崗岩	(4.5)	6.6	4.6	(154)	
33	I	II	砂岩	(6.4)	(4.8)	(3.0)	(120)	
34	V	II	花崗岩	(6.3)	(6.2)	(5.5)	(288)	
35	II	II	砂岩	6.5	(2.8)	5.2	113	

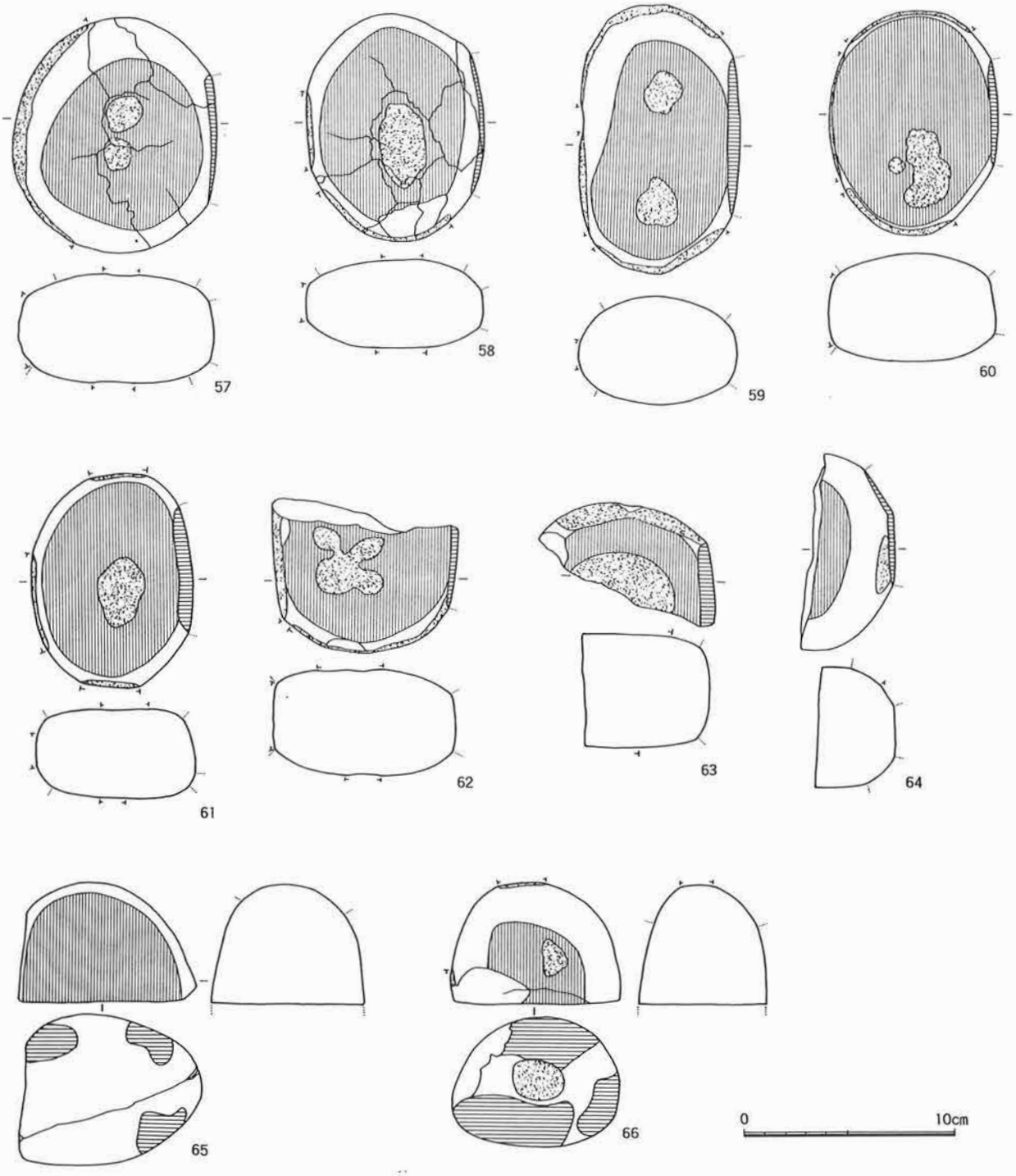
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
36	I	III	砂岩	10.8	10.1	5.4	874	
37	I	III	砂岩	12.1	10.2	5.3	952	
38	I	III	安山岩	11.9	10.5	6.4	1189	
39	I	III	礫岩	(10.4)	10.5	6.3	(1016)	
40	I	III	砂岩	(6.7)	11.6	5.9	(603)	
41	II	III	安山岩	10.2	9.7	6.5	1014	
42	I	III	礫岩	(9.9)	9.9	4.7	(528)	
43	II	III	砂岩	(8.0)	(9.9)	5.2	(465)	
44	V	III	砂岩	10.8	6.2	3.4	307	
45	V	III	砂岩	(7.7)	8.5	4.5	(413)	
46	I	III	凝灰岩	(5.7)	8.6	(4.2)	(240)	
47	II	III	凝灰岩	(6.2)	(8.0)	(4.1)	(276)	
48	II	III	砂岩	(6.2)	8.7	4.9	(352)	
49	II	III	凝灰岩	9.6	7.4	4.9	525	
50	V	III	花崗岩	(6.2)	(4.5)	(7.2)	(290)	

図－98　磨石類実測図－3

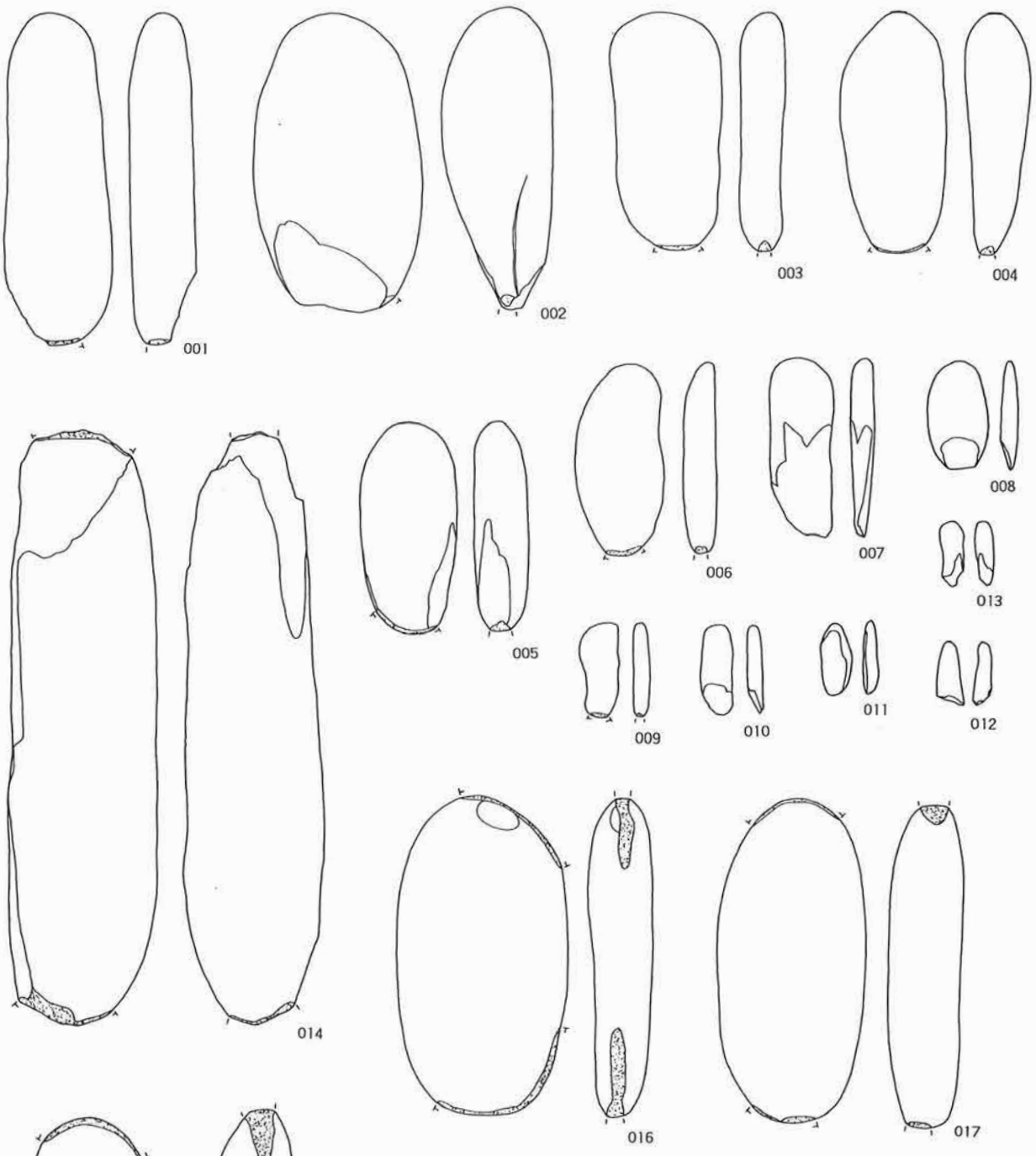


番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
51	II	IVa	玄武岩	12.1	9.4	5.8	1092	
52	V	IVb	砂岩	10.8	9.0	5.1	730	
53	V	IVb	安山岩	(9.1)	(5.2)	5.1	(313)	
54	I	IVc	安山岩	13.0	7.7	5.3	948	
55	II	IVc	花崗岩	11.5	10.1	4.7	1064	
56	II	IVc	砂岩	10.8	(9.5)	(5.5)	(795)	
57	II	IVc	礫岩	11.2	9.6	5.2	807	
58	I	IVc	緑泥片岩	11.9	8.6	4.2	575	
59	I	IVc	安山岩	13.0	7.7	5.3	946	
60	V	IVc	玄武岩	10.7	9.1	5.2	695	
61	V	IVc	緑泥片岩	10.3	7.6	4.3	593	
62	II	IVc	礫岩	11.0	(7.5)	4.5	(540)	
63	II	IVc	砂岩	(8.7)	(4.9)	(5.3)	(277)	
64	II	IVc	緑泥片岩	9.6	(4.0)	5.6	(285)	
65	II	V	砂岩	(8.5)	(5.7)	(7.6)	(471)	
66	II	V	緑泥片岩	(5.8)	8.2	6.0	(415)	

図－99　磨石類実測図－4

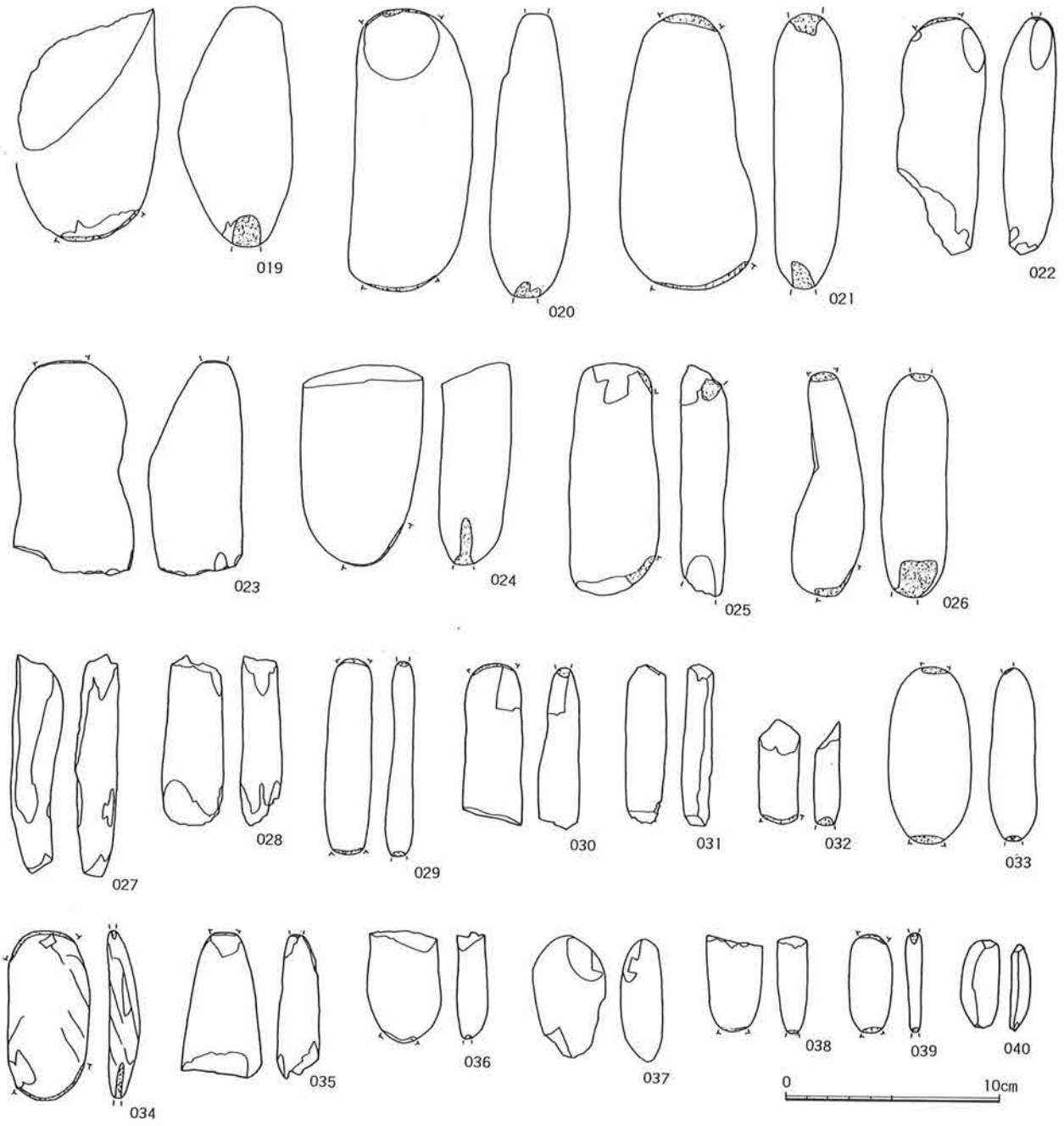


図－100　磨石類実測図－5



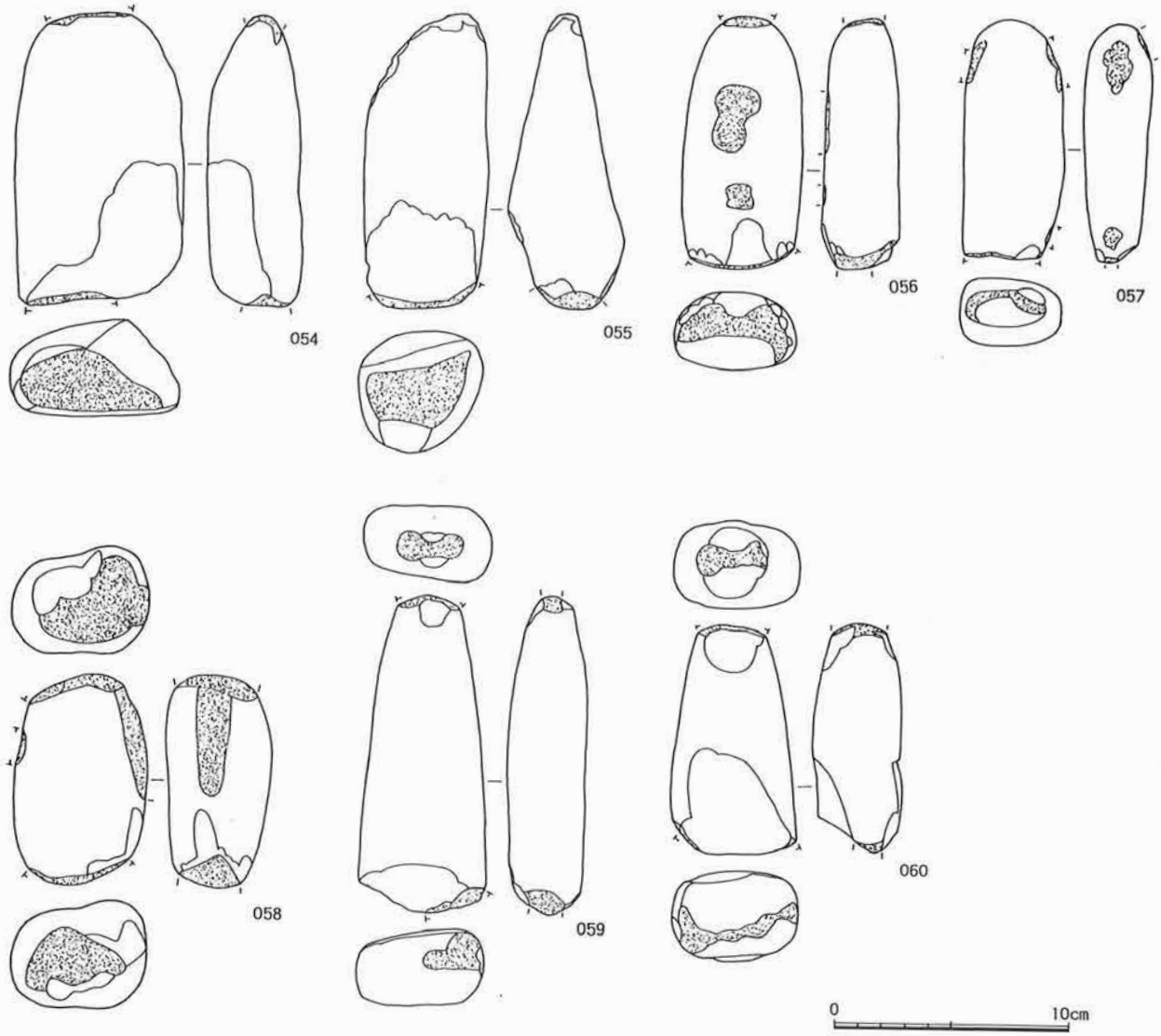
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
001	I	Ia	粘板岩	15.6	5.1	3.0	410	
002	I	Ia	砂岩	(14.0)	7.9	5.1	(800)	
003	V	Ia	砂岩	11.2	5.2	2.0	200	
004	III	Ia	砂岩	8.8	3.9	2.4	100	
005	II	Ia	緑泥片岩	9.9	4.6	2.5	175	
006	II	Ia	硬砂岩	9.0	4.2	1.5	80	
007	II	Ia	砂岩	(8.2)	3.1	(1.1)	(35)	
008	II	Ia	砂岩	5.1	2.8	0.8	15	
009	I	Ia	硬砂岩	4.4	1.8	0.7	10	
010	II	Ia	砂岩	(4.2)	1.5	0.7	(6)	
011	II	Ia	硬砂岩	2.4	1.4	(0.7)	(3)	
012	V	Ia	砂岩	(3.1)	1.1	0.8	(5)	
013	II	Ia	砂岩	(2.8)	1.2	0.8	(3)	
014	I	Ia	砂岩	(28.0)	(7.1)	(6.9)	(1925)	
015	I	Ia	砂岩	19.9	8.4	5.1	1010	
016	I	Ia	砂岩	14.9	8.1	3.0	580	

図－101　敲石実測図－1



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
017	I	Ia	砂岩	15.2	6.7	3.4	559	
018	II	Ia	緑泥片岩	11.5	4.2	1.5	120	
019	V	Ia	砂岩	(10.3)	6.5	5.1	(362)	
020	II	Ia	砂岩	13.2	5.5	3.6	368	
021	I	Ia	凝灰岩	13.3	6.3	3.2	405	
022	II	Ia	硬砂岩	11.1	3.9	2.5	(150)	
023	II	Ia	砂岩	(9.9)	8.5	4.4	(347)	
024	V	Ia	砂岩	(9.3)	5.6	3.2	(243)	
025	II	Ia	硬砂岩	10.9	4.2	2.2	150	
026	II	Ia	硬砂岩	10.4	3.2	3.1	(152)	
027	V	Ia	硬砂岩	(10.2)	2.2	(1.9)	(55)	
028	II	Ia	砂岩	7.8	2.9	2.0	(63)	
029	II	Ia	砂岩	6.9	2.1	1.3	40	
030	II	Ia	砂岩	(7.2)	2.7	1.9	(45)	
031	III	Ia	硬砂岩	(5.7)	(1.4)	(1.0)	(11)	
032	III	Ia	チャート	(3.8)	1.4	0.9	(7)	
033	V	Ia	砂岩	8.2	3.7	2.1	96	
034	I	Ia	硬砂岩	(7.5)	7.0	3.5	(231)	
035	II	Ia	砂岩	(6.5)	(3.7)	(2.0)	(59)	
036	V	Ia	砂岩	(5.2)	3.3	1.3	(30)	

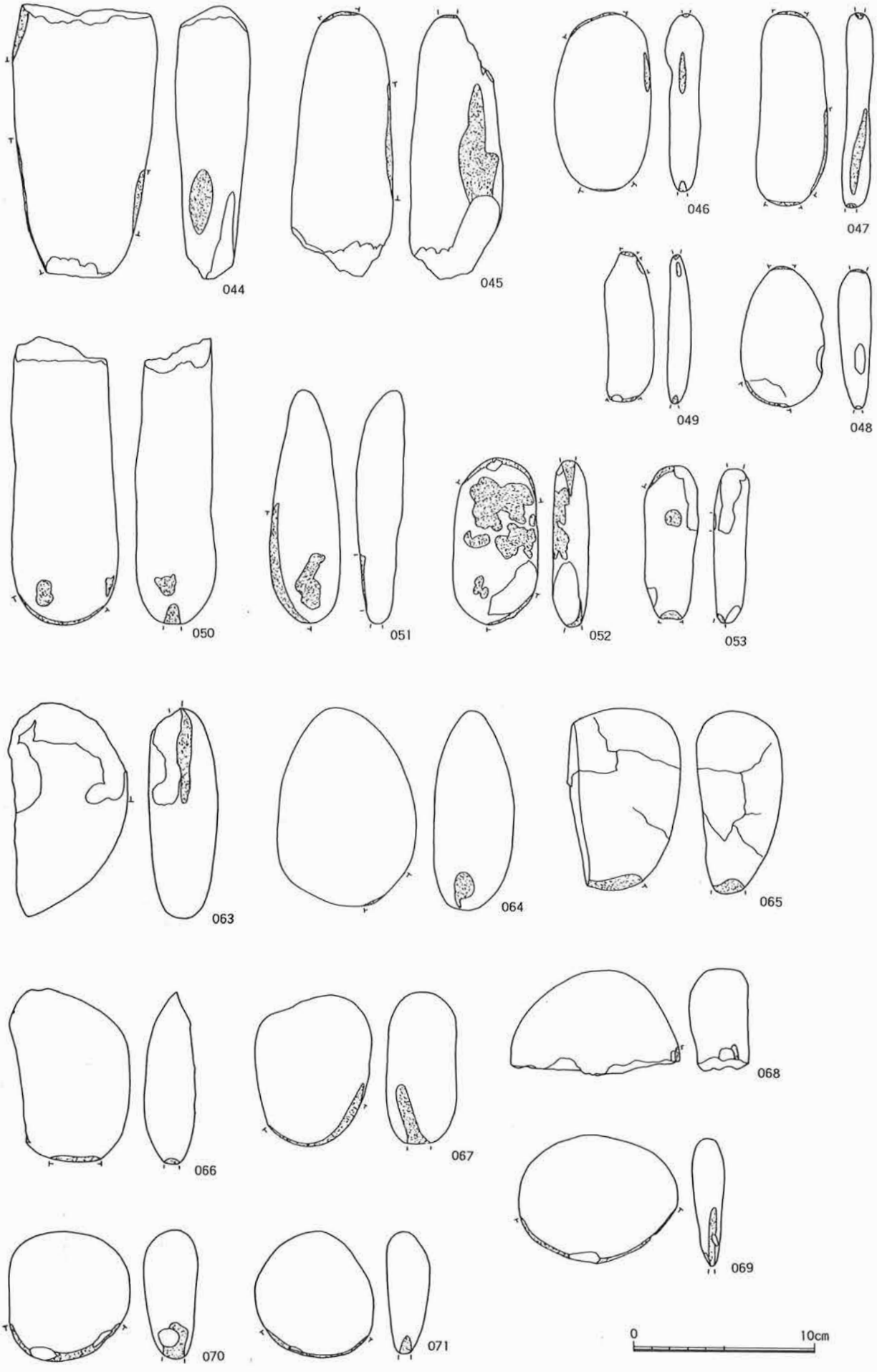
図－102　敲石実測図－2



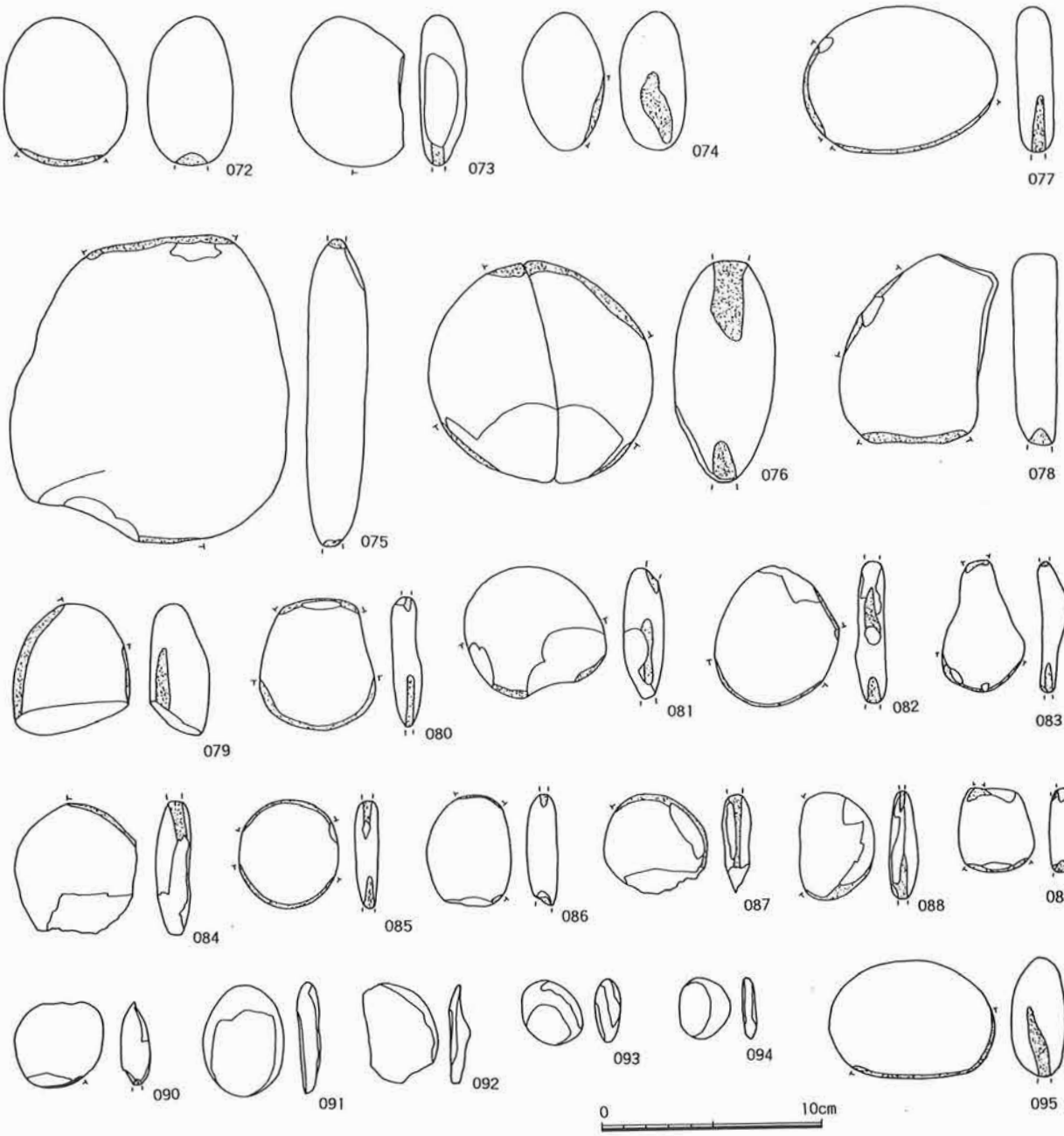
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
037	V	Ia	砂岩	5.6	3.4	1.9	(42)	
038	II	Ia	砂岩	(4.2)	2.6	1.4	(20)	
039	II	Ia	砂岩	4.6	2.0	7.0	11	
040	II	Ia	砂岩	(4.1)	(1.7)	(0.9)	(8)	
041	V	Ia	チャート	(2.4)	(1.5)	(0.9)	(10)	
042	I	Ib	蛇紋岩	16.6	7.1	4.3	804	
043	I	Ib	砂岩	12.5	3.9	2.2	149	
044	I	Ib	砂岩	(14.7)	8.0	4.1	(742)	
045	II	Ib	砂岩	(14.2)	5.6	5.0	(470)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
046	II	Ib	砂岩	9.8	5.4	2.1	150	
047	V	Ib	硬砂岩	(7.0)	(4.3)	4.7	(203)	
048	II	Ib	硬砂岩	7.7	4.5	1.8	80	
049	II	Ib	硬砂岩	8.2	2.6	1.2	30	
050	I	Ic	砂岩	(15.4)	5.8	4.4	(681)	
051	I	Ic	砂岩	12.8	3.8	2.6	160	
052	V	Ic	硬砂岩	9.6	4.6	2.0	128	
053	II	Ic	硬砂岩	8.5	3.1	1.8	(60)	
054	II	Id	粘板岩	(12.1)	7.0	4.0	(502)	
055	III	Id	砂岩	(12.4)	(5.2)	(4.5)	(330)	
056	I	Id	砂岩	(10.8)	5.0	3.2	(291)	
057	II	Id	安山岩	(10.2)	4.3	2.8	(190)	
058	V	Id	砂岩	8.7	5.6	4.5	320	
059	I	Id	砂岩	13.3	5.3	3.3	395	
060	II	Id	緑泥片岩	9.7	5.0	3.8	304	
061	V	Id	砂岩	(9.3)	(5.5)	(4.4)	(280)	
062	II	Id	安山岩	9.8	5.7	3.7	267	
063	I	IIa	砂岩	(11.7)	(6.6)	4.0	(365)	
064	II	IIa	玄武岩	10.8	7.7	2.4	537	
065	II	IIa	凝灰岩	10.1	(6.2)	4.7	(423)	
066	II	IIa	硬砂岩	(9.1)	(6.2)	(2.7)	(230)	
067	V	IIa	安山岩	8.4	6.3	3.9	296	
068	II	IIa	砂岩	(5.7)	(9.4)	(3.3)	(230)	
069	II	IIa	緑泥片岩	8.8	7.0	1.8	153	
070	II	IIa	砂岩	7.1	6.6	3.0	190	
071	I	IIa	砂岩	6.8	6.4	2.3	149	
072	III	IIa	花崗岩	7.6	5.3	3.8	216	

図－103　敲石実測図－3


044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
063
064
065
066
067
068
069
070
071
0
10cm

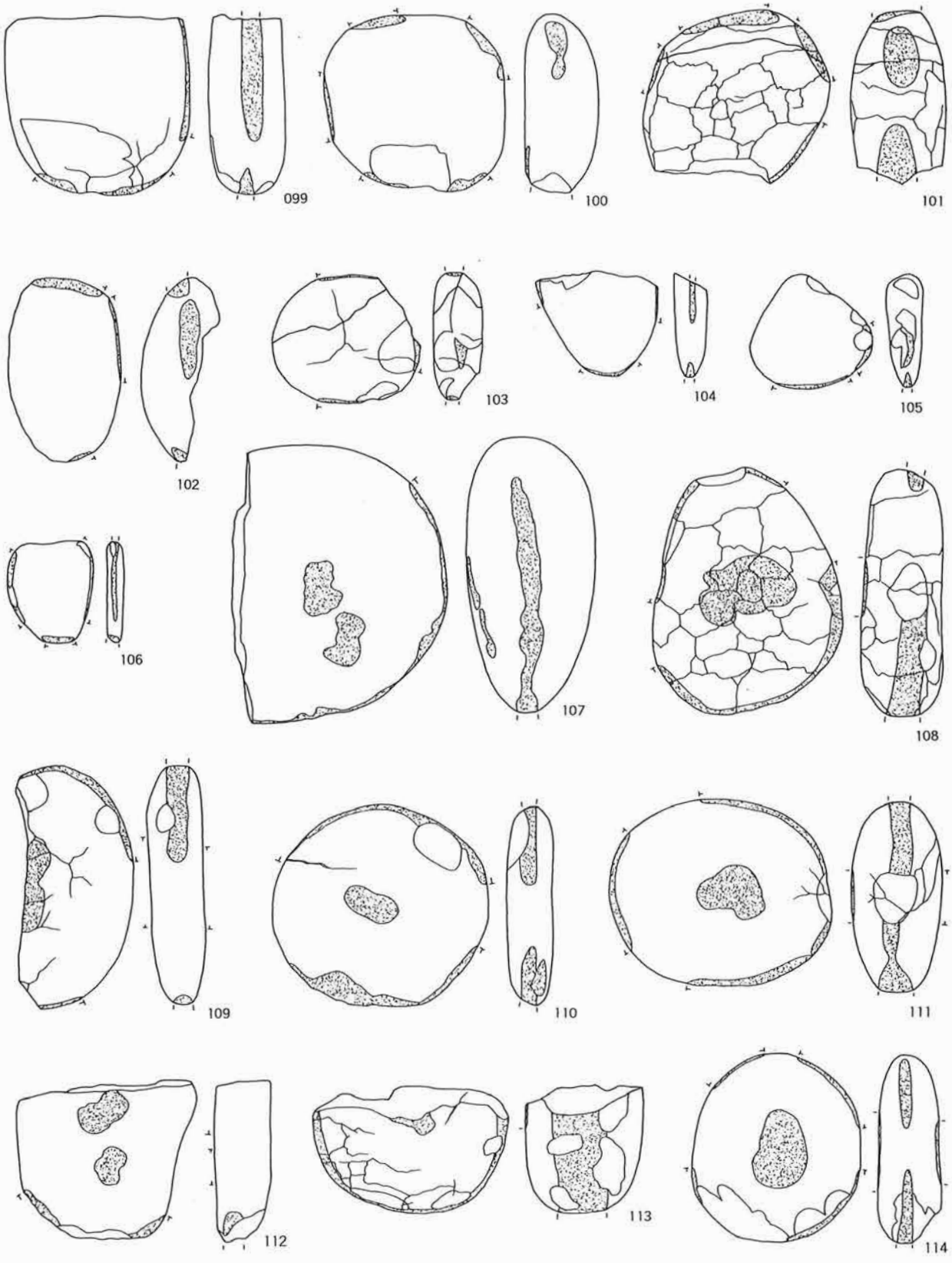
図－104　敲石実測図－4



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
073	I	IIa	硬砂岩	6.6	(5.0)	2.1	(102)	
074	V	IIa	砂岩	6.1	3.5	2.9	90	
075	I	IIa	緑泥片岩	13.8	12.4	2.6	813	
076	I	IIa	礫岩	10.1	9.9	4.4	480	
077	II	IIa	砂岩	8.7	6.5	1.7	145	
078	II	IIa	砂岩	(8.5)	6.2	2.0	(146)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
079	II	IIa	砂岩	(5.7)	(5.2)	2.7	(102)	
080	II	IIa	硬砂岩	5.8	5.2	1.2	50	
081	V	IIa	砂岩	6.4	5.9	1.7	(78)	
082	II	IIa	硬砂岩	6.3	5.4	1.4	62	
083	II	IIa	硬砂岩	5.9	3.6	1.2	30	
084	V	IIa	硬砂岩	4.7	4.4	1.2	25	
085	II	IIa	硬砂岩	4.9	4.5	1.0	29	
086	V	IIa	砂岩	4.9	3.7	1.3	30	
087	V	IIa	砂岩	4.7	4.4	1.2	27	
088	V	IIa	硬砂岩	4.8	3.4	1.3	25	
089	II	IIa	硬砂岩	3.8	3.4	1.2	20	
090	II	IIa	硬砂岩	4.9	4.5	1.0	32	
091	II	IIa	硬砂岩	5.0	(3.6)	(0.9)	(16)	
092	V	IIa	硬砂岩	(4.6)	(3.9)	5.7	(11)	
093	V	IIa	砂岩	2.9	2.4	1.2	10	
094	II	IIa	チャート	2.7	2.3	0.6	3	
095	I	IIa	砂岩	7.5	5.4	2.4	149	
096	I	IIa	砂岩	4.9	4.4	1.3	42	
097	I	IIa	硬砂岩	5.0	3.8	1.0	30	
098	I	IIb	砂岩	(14.1)	(7.0)	(5.7)	(696)	
099	II	IIb	砂岩	(9.1)	9.5	(3.7)	(505)	

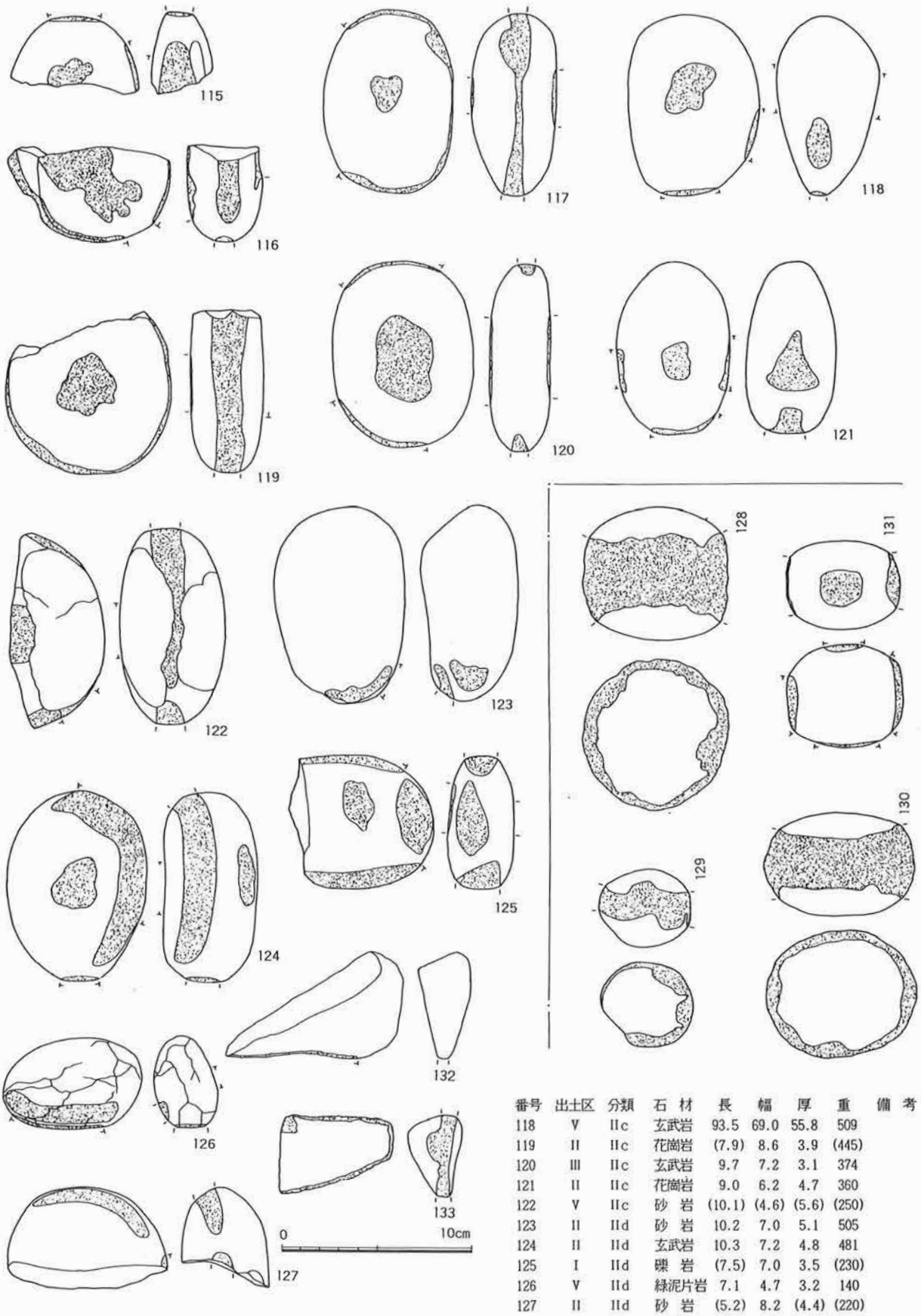
図－105　敲石実測図－5



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
100	II	IIb	花崗岩	9.3	9.1	3.7	510	
101	II	IIb	礫岩	(7.5)	9.4	5.2	(545)	
102	II	IIb	砂岩	(9.5)	(5.8)	(3.8)	(248)	
103	V	IIb	砂岩	(5.0)	(8.3)	(3.9)	(193)	
104	V	IIb	砂岩	(5.3)	(6.2)	(1.7)	(60)	
105	V	IIb	硬砂岩	6.2	5.8	2.0	85	
106	I	IIb	硬砂岩	5.1	4.4	9.0	42	
107	II	IIc	砂岩	(11.2)	14.3	6.6	(1480)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
108	II	IIc	砂岩	12.3	9.8	4.2	721	
109	II	IIc	砂岩	11.4	9.5	4.6	680	
110	I	IIc	砂岩	11.2	10.3	2.7	425	
111	II	IIc	砂岩	11.4	9.5	4.6	680	
112	II	IIc	砂岩	(8.3)	8.5	2.8	(317)	
113	II	IIc	砂岩	(6.5)	10.1	6.1	(462)	

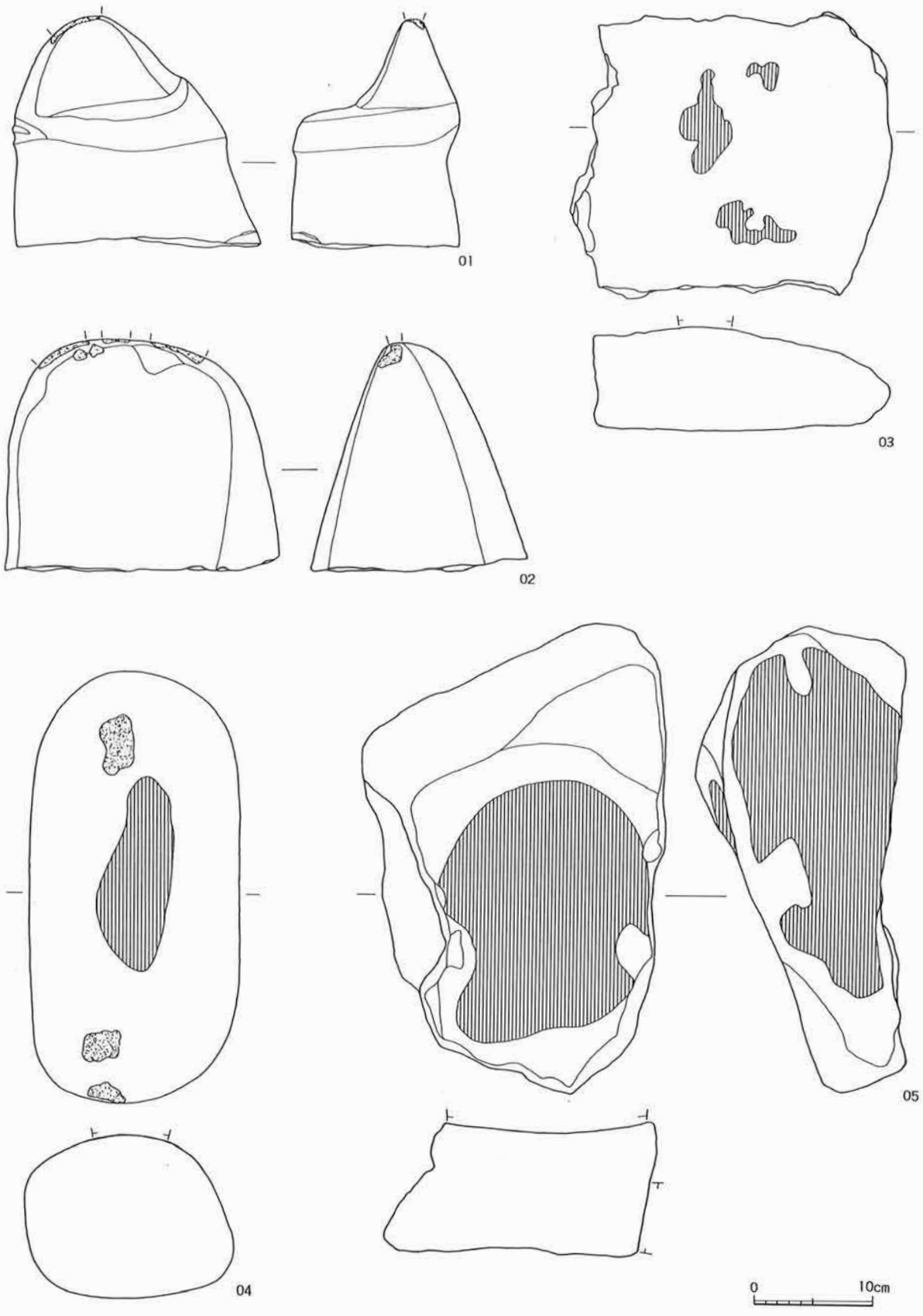
図－106　敲石実測図－6



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
114	III	IIc	砂岩	9.5	9.1	3.3	455	
115	V	IIc	凝灰岩	(3.5)	(6.6)	(3.5)	(93)	
116	V	IIc	砂岩	(5.0)	(8.3)	(3.9)	(190)	
117	II	IIc	花崗岩	9.5	6.8	4.4	442	

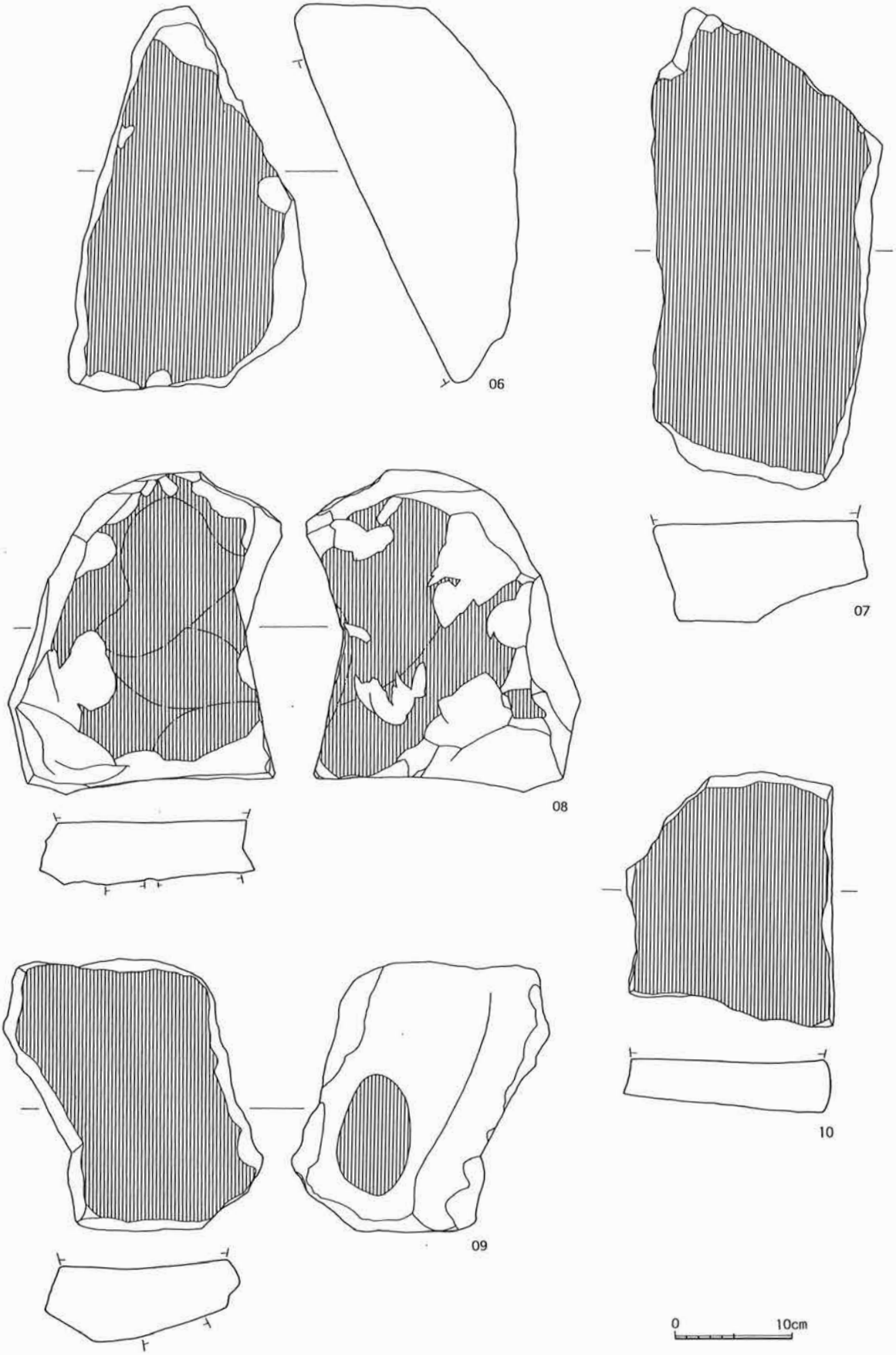
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
118	V	IIc	玄武岩	93.5	69.0	55.8	509	
119	II	IIc	花崗岩	(7.9)	8.6	3.9	(445)	
120	III	IIc	玄武岩	9.7	7.2	3.1	374	
121	II	IIc	花崗岩	9.0	6.2	4.7	360	
122	V	IIc	砂岩	(10.1)	(4.6)	(5.6)	(250)	
123	II	IId	砂岩	10.2	7.0	5.1	505	
124	II	IId	玄武岩	10.3	7.2	4.8	481	
125	I	IId	礫岩	(7.5)	7.0	3.5	(230)	
126	V	IId	緑泥片岩	7.1	4.7	3.2	140	
127	II	IId	砂岩	(5.2)	8.2	(4.4)	(220)	
128	V	III	安山岩	7.8	7.6	6.7	530	
129	V	III	砂岩	4.8	4.3	4.0	213	
130	I	III	玄武岩	7.9	6.5	5.1	370	
131	I	III	花崗岩	6.0	5.3	4.6	210	
132	I	IV	砂岩	(8.3)	(5.5)	(2.7)	(112)	
133	I	IV	砂岩	(6.0)	4.1	2.5	(75)	

図－107　敲石実測図－7



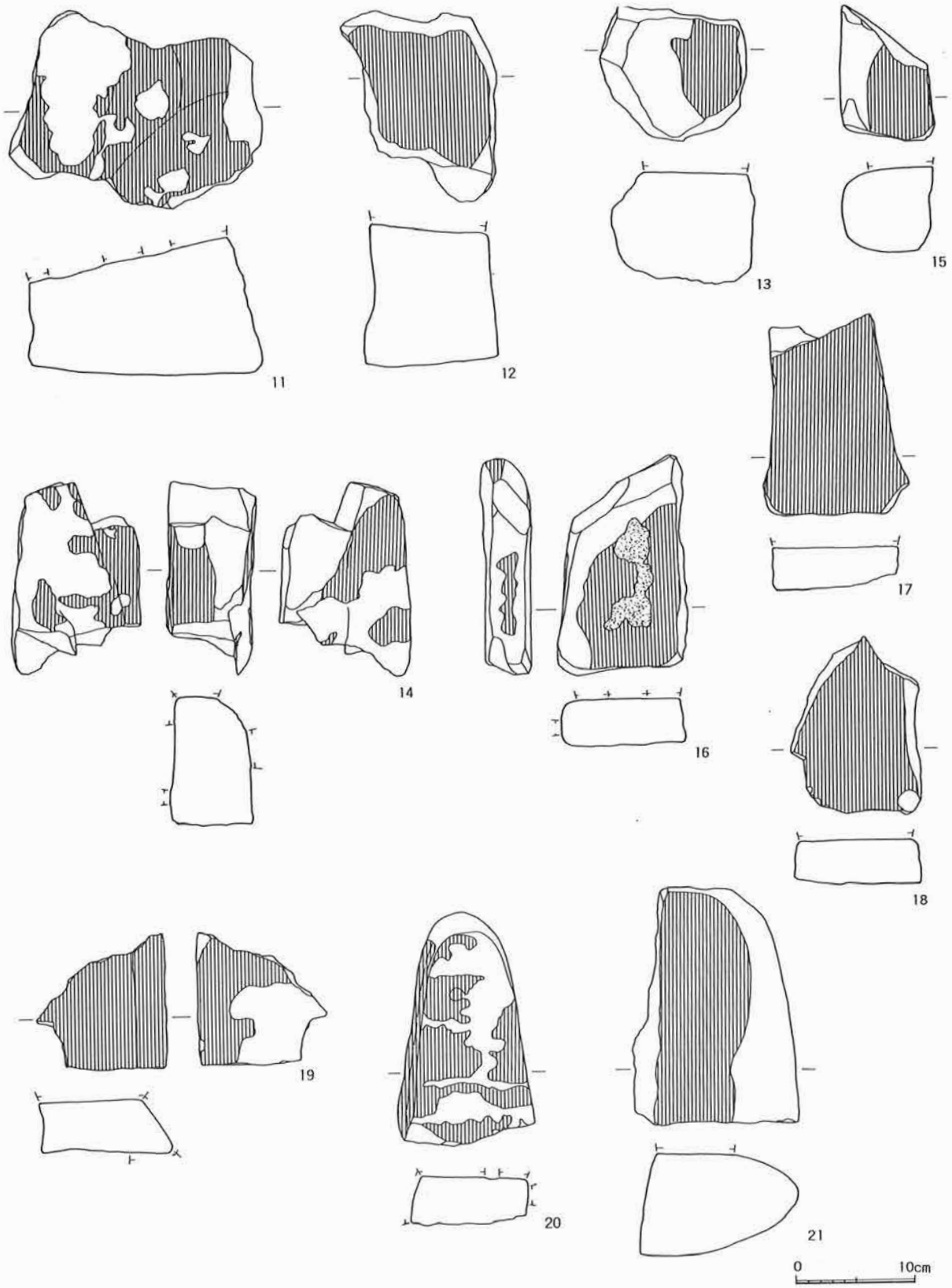
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
01	II	Ia	砂岩	19.8	21.1	14.5	6.55	
02	V	Ia	安山岩	20.0	24.5	19.1	11.05	
03	V	Ib	砂岩	37.0	18.1	15.3	15.55	
04	V	Ib	安山岩	24.8	27.7	8.8	10.15	
05	II	IIa	安山岩	40.8	26.1	18.0	21.5	
06	II	IIa	安山岩	32.9	20.6	15.5(11.75)		

図－108　台石実測図－1



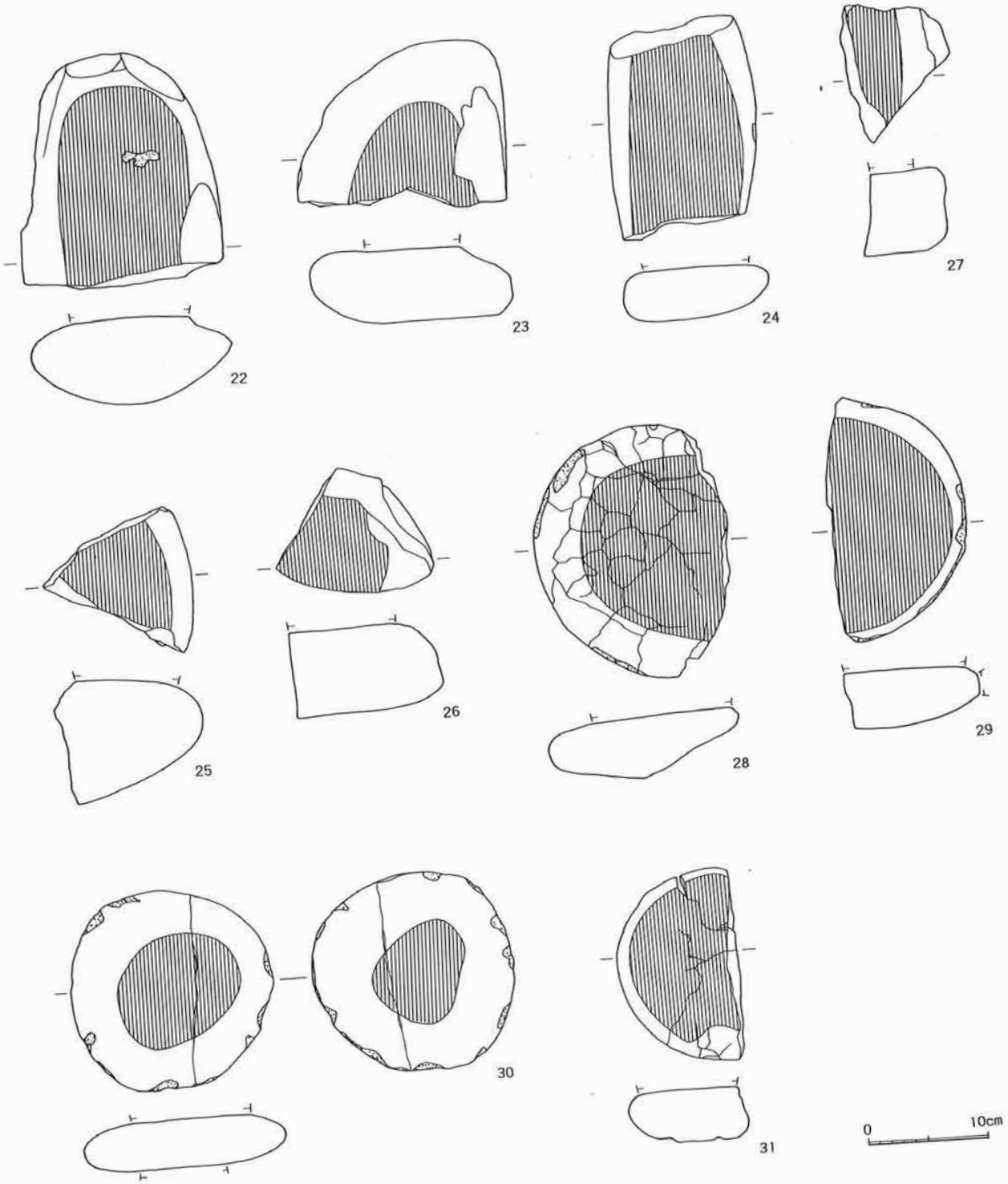
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
07	V	IIa	安山岩	40.8	19.9	8.8	10.7	
08	II	IIa	安山岩	(27.3)	(22.9)	5.4	(6.05)	
09	II	IIa	安山岩	23.0	22.3	6.4	4.5	
10	V	IIa	安山岩	(22.0)	(17.7)	(4.5)	(3.15)	

図－109　台石実測図－2



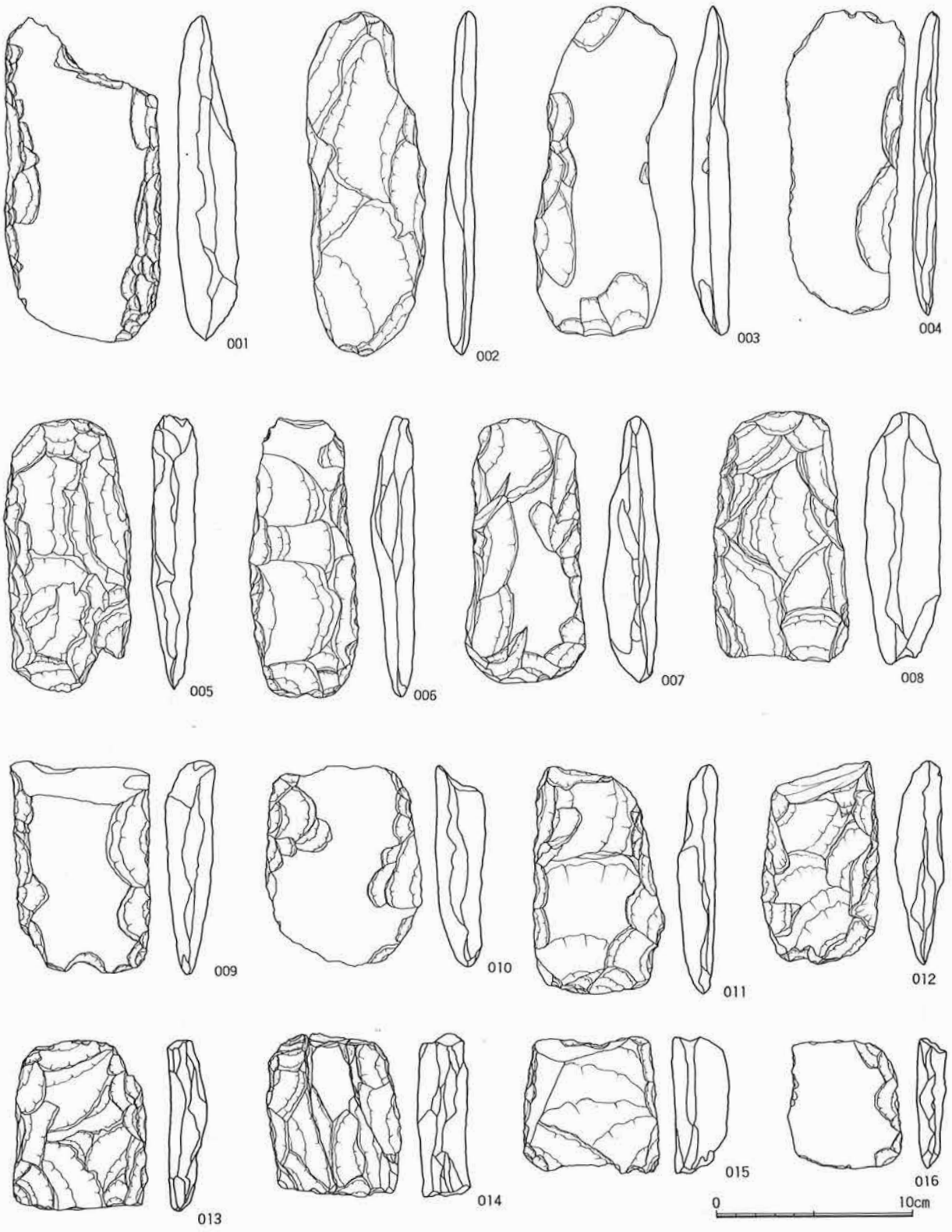
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
11	I	IIa	安山岩	(16.8)	(21.3)	(11.6)	(5.95)	
12	II	IIa	安山岩	(15.9)	(13.2)	(12.1)	(3.45)	
13	II	IIa	玄武岩	(11.3)	(12.4)	(9.4)	(1.5)	多孔質
14	II	IIa	花崗岩	(16.2)	(11.6)	(6.9)	(1.6)	
15	III	IIa	凝灰岩	(10.4)	(7.8)	(7.2)	(0.97)	
16	II	IIa	砂岩	(18.4)	(11.1)	(4.2)	(1.2)	
17	V	IIa	安山岩	(16.7)	(12.3)	(3.6)	(1.0)	
18	V	IIa	凝灰岩	(15.0)	(11.1)	(3.9)	(1.0)	

図－110　台石実測図－3



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重kg	備考
19	V	IIa	安山岩	(11.3)	(11.1)	(4.6)	(0.8)	
20	I	IIa	砂岩	(19.7)	11.6	4.1	(1.25)	
21	V	IIb	安山岩	(19.5)	(14.0)	(8.7)	(3.7)	
22	II	IIb	砂岩	(19.0)	(16.9)	(7.3)	(3.5)	
23	I	IIb	凝灰岩	(13.8)	17.3	6.0	(1.90)	
24	I	IIb	凝灰岩	(17.9)	12.3	4.5	(1.75)	
25	II	IIb	安山岩	(12.1)	(12.2)	(10.0)	(1.5)	
26	V	IIb	凝灰岩	(10.5)	(12.7)	(7.1)	(1.3)	
27	V	IIb	砂岩	(11.5)	(9.1)	(7.2)	(0.65)	
28	II	IIc	凝灰岩	(21.0)	(16.3)	(5.3)	(2.0)	
29	II	IIc	砂岩	(20.1)	(11.5)	(4.8)	(1.5)	
30	I	IIc	砂岩	16.9	16.7	9.0	1.6	
31	II	IIc	礫岩	(16.2)	(10.1)	(4.4)	(0.9)	

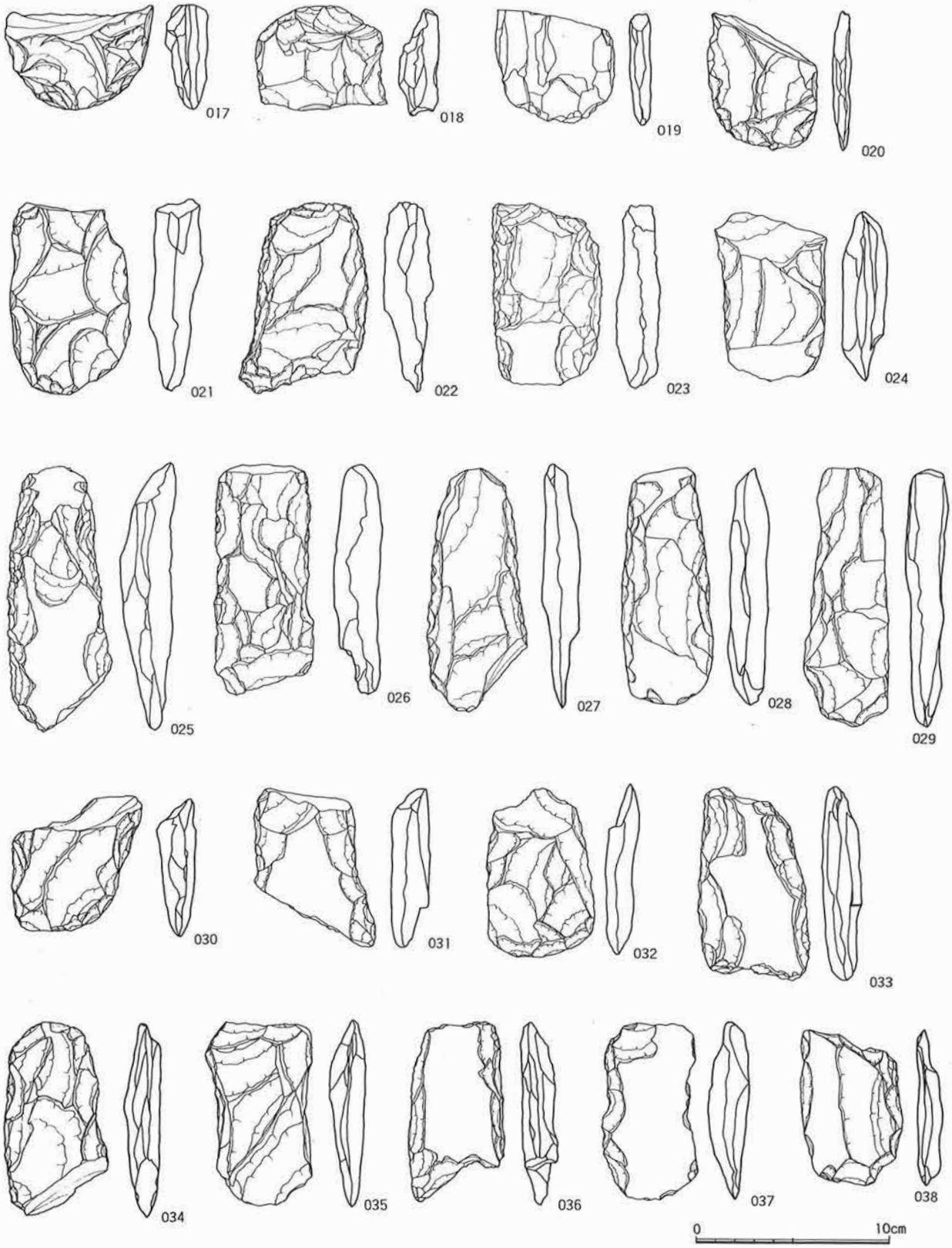
図－111　台石実測図－4



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
001	I	Ia	砂岩	(15.3)	7.8	3.0	(540)	
002	V	Ia	粘板岩	17.3	6.0	1.7	(172)	略完形
003	V	Ia	砂岩	(16.7)	6.4	2.0	(272)	
004	I	Ia	凝灰岩	(15.4)	6.1	1.3	(138)	
005	II	Ia	砂岩	(13.8)	6.4	2.1	(260)	
006	II	Ia	砂岩	(14.1)	5.4	2.2	(130)	略完形
007	V	Ia	硬砂岩	13.4	6.2	2.8	260	
008	II	Ia	砂岩	(12.6)	7.0	3.8	(446)	
009	II	Ia	砂岩	(10.4)	7.0	2.4	(219)	010同一
010	II	Ia	砂岩	(10.2)	8.0	2.5	(259)	009同一

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
011	II	Ia	砂岩	(11.2)	6.6	1.9	(181)	
012	II	Ia	硬砂岩	(9.7)	6.0	1.3	(169)	
013	II	Ia	硬砂岩	(8.6)	7.0	1.9	(140)	
014	II	Ia	砂岩	(8.1)	6.7	2.5	(200)	
015	II	Ia	砂岩	(6.9)	(6.9)	2.9	(180)	
016	II	Ia	砂岩	(6.5)	(5.6)	1.5	(60)	
017	III	Ia	砂岩	(4.9)	(7.4)	(2.1)	(68)	
018	II	Ia	砂岩	(5.3)	(6.4)	(2.1)	(82)	
019	II	Ia	粘板岩	(5.5)	(6.1)	(1.1)	(49)	
020	II	Ia	安山岩	(6.3)	(5.6)	(0.9)	(42)	

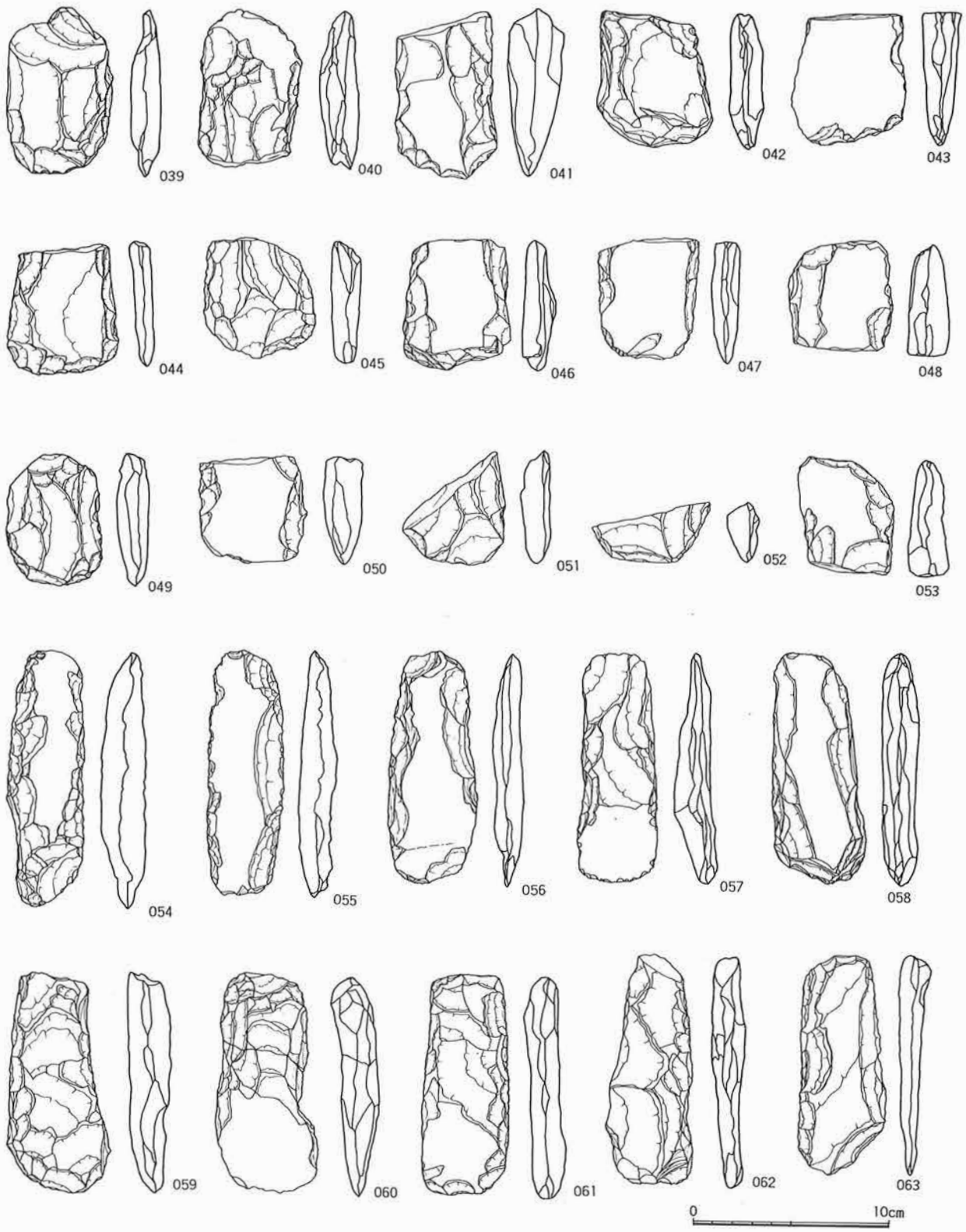
図－112　打製石斧実測図－1



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
021	V	Ia	砂岩	(14.8)	6.1	2.5	(160)	
022	I	Ia	硬砂岩	(9.3)	5.5	2.1	(132)	
023	I	Ia	砂岩	(8.4)	5.7	2.6	(148)	
024	V	Ia	砂岩	(8.4)	5.6	2.4	(124)	
025	I	Ia	砂岩	(13.6)	5.2	2.6	(200)	
026	I	Ia	砂岩	(11.6)	4.9	2.2	(165)	
027	V	Ia	粘板岩	(12.7)	5.1	1.9	(103)	
028	V	Ia	砂岩	12.1	4.7	2.0	109	
029	V	Ia	砂岩	(13.1)	(4.4)	2.1	(130)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
030	I	Ia	砂岩	(6.4)	(6.1)	2.0	(87)	
031	V	Ia	砂岩	(7.7)	(5.5)	2.0	(97)	
032	V	Ia	砂岩	(8.6)	6.6	1.6	(78)	
033	I	Ia	砂岩	(9.6)	5.6	1.9	(101)	
034	II	Ia	安山岩	(9.7)	5.2	1.8	(110)	
035	V	Ia	砂岩	(9.5)	5.4	2.0	(81)	
036	II	Ia	硬砂岩	(8.7)	5.0	1.8	(83)	
037	II	Ia	頁岩	9.0	4.7	2.1	93	
038	V	Ia	砂岩	(7.5)	5.2	1.3	(53)	

図－113　打製石斧実測図－2



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
039	V	Ⅰa	砂岩	(8.1)	5.1	3.0	(118)	
040	II	Ⅰa	硬砂岩	(7.9)	5.1.	2.0	(98)	
041	V	Ⅰa	砂岩	(10.3)	5.2	1.6	(70)	
042	II	Ⅰa	砂岩	(6.6)	10.8	1.7	(88)	
043	II	Ⅰa	砂岩	(6.5)	5.8	2.0	(78)	
044	I	Ⅰa	安山岩	(6.2)	5.8	0.9	(43)	
045	I	Ⅰa	砂岩	(6.1)	(5.7)	(1.6)	(60)	
046	V	Ⅰa	砂岩	(6.6)	(5.5)	(2.7)	(60)	
047	I	Ⅰa	砂岩	(6.2)	5.0	1.4	(61)	
048	II	Ⅰa	砂岩	(5.6)	5.3	2.1	(88)	
049	I	Ⅰa	硬砂岩	(6.6)	4.8	1.7	(59)	

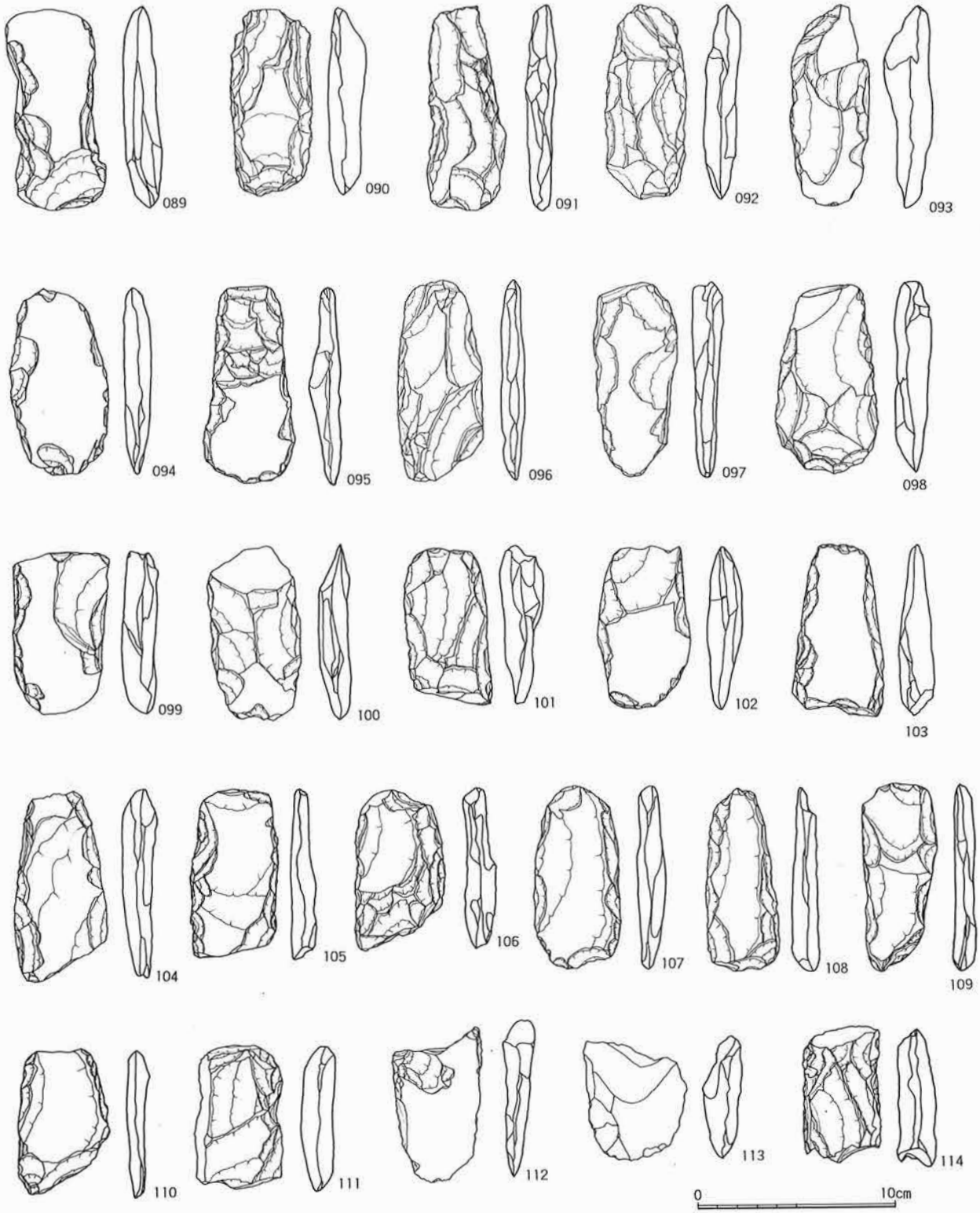
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
050	I	Ⅰa	砂岩	(5.4)	(5.3)	(2.1)	(73)	
051	III	Ⅰa	砂岩	(5.5)	(5.2)	(1.5)	(38)	
052	III	Ⅰa	硬砂岩	(2.5)	(5.8)	(1.6)	(23)	
053	II	Ⅰa	砂岩	(5.7)	(4.8)	(2.0)	(68)	
054	I	Ⅰa	砂岩	(12.9)	3.8	2.3	(90)	略完形
055	I	Ⅰa	砂岩	(12.5)	3.9	1.9	(104)	略完形
056	II	Ⅰa	安山岩	(11.7)	4.5	1.5	(90)	略完形
057	II	Ⅰa	硬砂岩	11.6	4.0	1.9	100	
058	II	Ⅰa	硬砂岩	(11.7)	4.7	2.0	(121)	略完形
059	II	Ⅰa	硬砂岩	(10.9)	5.1	2.1	(141)	
060	II	Ⅰa	頁岩	10.9	4.1	2.1	152	接合資料

図－114　打製石斧実測図－3

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
061	II	Ia	硬砂岩	11.1	4.3	1.7	90	
062	II	Ia	砂岩	(11.6)	4.2	1.7	(75)	略完形
063	I	Ia	砂岩	(10.9)	4.4	1.5	(52)	略完形
064	I	Ia	硬砂岩	10.3	5.3	1.8	120	
065	II	Ia	砂岩	(9.7)	4.6	2.1	(90)	
066	II	Ia	粘板岩	(9.6)	4.6	1.6	(64)	略完形
067	II	Ia	砂岩	(9.4)	4.5	1.2	(60)	略完形
068	I	Ia	砂岩	(9.6)	4.2	2.0	(98)	略完形
069	I	Ia	砂岩	(9.1)	4.8	1.8	(63)	
070	II	Ia	砂岩	(10.4)	(4.0)	1.8	(79)	
071	III	Ia	硬砂岩	(9.0)	(4.6)	1.8	(62)	
072	III	Ia	砂岩	(9.0)	4.6	1.8	(94)	
073	II	Ia	硬砂岩	(8.7)	4.4	1.5	(103)	
074	V	Ia	砂岩	(5.6)	(4.7)	2.4	(61)	
075	III	Ia	砂岩	(8.6)	4.6	2.1	(88)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
076	III	Ia	砂岩	(8.8)	4.4	1.6	(60)	
077	II	Ia	硬砂岩	(8.2)	(4.9)	1.9	(31)	
078	V	Ia	硬砂岩	(7.6)	(5.2)	2.4	(112)	
079	V	Ia	硬砂岩	(8.1)	4.6	2.2	(84)	
080	III	Ia	砂岩	(6.6)	(5.0)	2.7	(64)	
081	V	Ia	安山岩	(5.5)	(5.1)	(1.3)	(35)	
082	I	Ia	砂岩	(5.9)	(4.6)	(1.4)	(34)	
083	III	Ia	硬砂岩	(4.8)	(5.2)	(1.9)	(40)	
084	I	Ia	砂岩	(5.0)	(4.5)	(1.2)	(24)	
085	V	Ia	砂岩	(3.8)	(5.8)	(1.7)	(38)	
086	I	Ia	硬砂岩	(3.9)	(4.9)	(1.2)	(26)	
087	V	Ia	砂岩	(3.8)	(4.3)	(1.3)	(20)	
088	V	Ia	安山岩	(3.6)	(4.8)	(1.3)	(16)	
089	V	Ia	硬砂岩	10.0	4.5	1.8	104	
090	II	Ia	硬砂岩	(9.4)	4.1	1.9	(78)	
091	II	Ia	硬砂岩	(10.3)	3.7	1.5	(60)	
092	II	Ia	砂岩	(9.8)	4.1	1.7	(88)	略完形
093	V	Ia	砂岩	(10.1)	3.9	2.1	(73)	

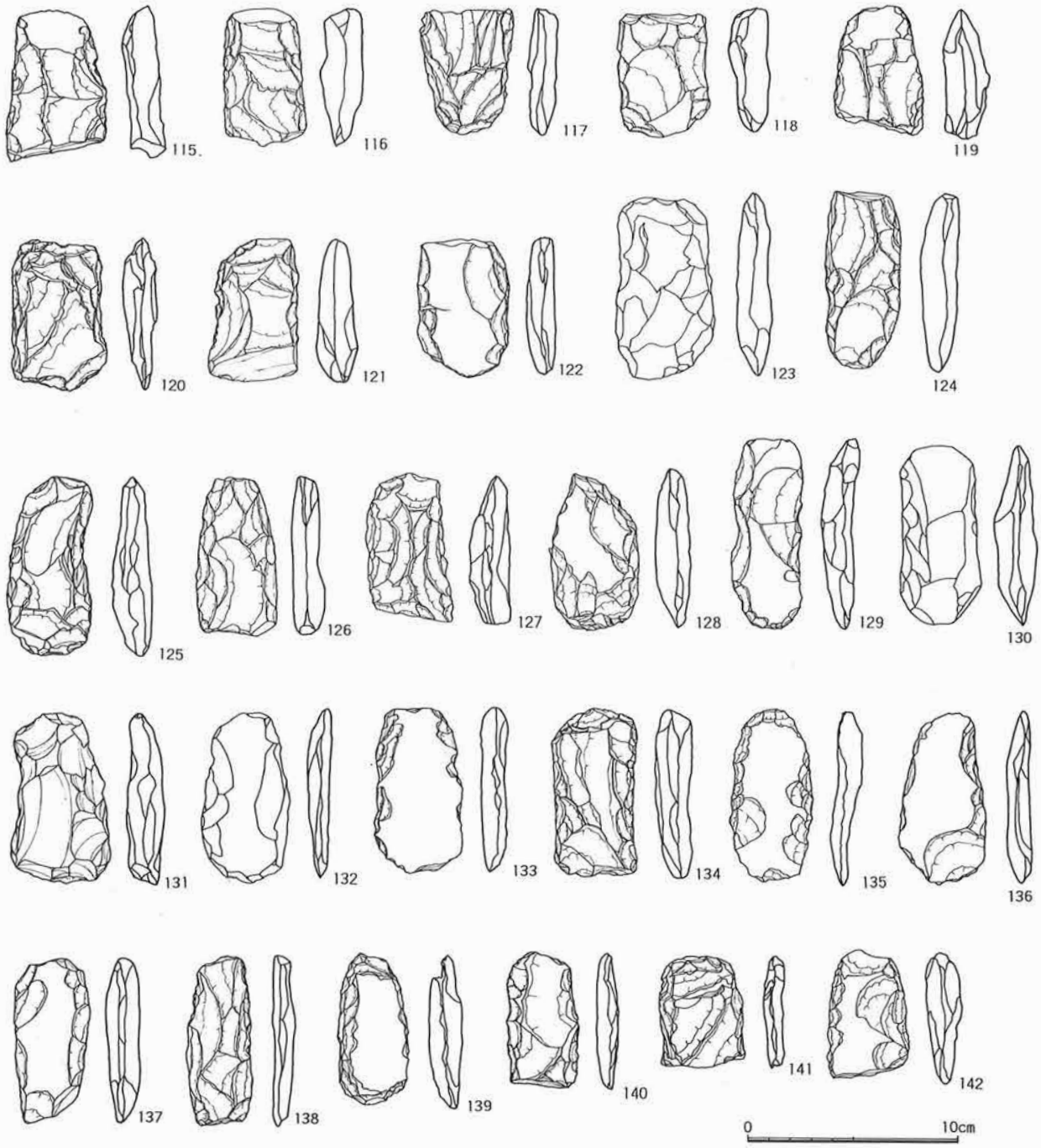
図－115　打製石斧実測図－4



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
094	II	Ia	砂岩	(9.2)	4.9	1.4	(79)	略完形
095	II	Ia	硬砂岩	9.8	4.6	1.6	79	
096	I	Ia	凝灰岩	(10.0)	4.3	1.2	(50)	
097	II	Ia	砂岩	(9.7)	4.2	1.6	(73)	
098	I	Ia	砂岩	(9.6)	5.2	1.8	(95)	略完形
099	V	Ia	粘板岩	(8.1)	4.8	1.8	(81)	
100	V	Ia	砂岩	(8.8)	4.5	1.5	(62)	
101	III	Ia	砂岩	(8.1)	(4.1)	2.1	(60)	
102	V	Ia	砂岩	(8.0)	4.6	1.8	(50)	
103	III	Ia	凝灰岩	(8.4)	(4.5)	1.7	(72)	
104	I	Ia	砂岩	(9.2)	4.6	1.8	(79)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
105	III	Ia	砂岩	(6.4)	4.4	1.3	(58)	
106	II	Ia	砂岩	(7.5)	(4.5)	1.5	(65)	
107	V	Ia	砂岩	(9.4)	4.4	1.5	(52)	略完形
108	V	Ia	硬砂岩	(9.2)	3.7	1.3	(48)	
109	V	Ia	硬砂岩	(9.5)	3.8	1.2	(33)	
110	V	Ia	硬砂岩	(7.1)	(4.6)	1.1	(32)	
111	V	Ia	砂岩	(7.1)	4.3	1.7	(70)	
112	I	Ia	砂岩	(6.7)	(4.5)	1.4	(40)	
113	II	Ia	頁岩	(5.9)	5.0	2.0	(51)	
114	III	Ia	砂岩	(6.7)	3.8	1.9	(52)	
115	III	Ia	砂岩	(6.7)	(4.8)	1.6	(52)	

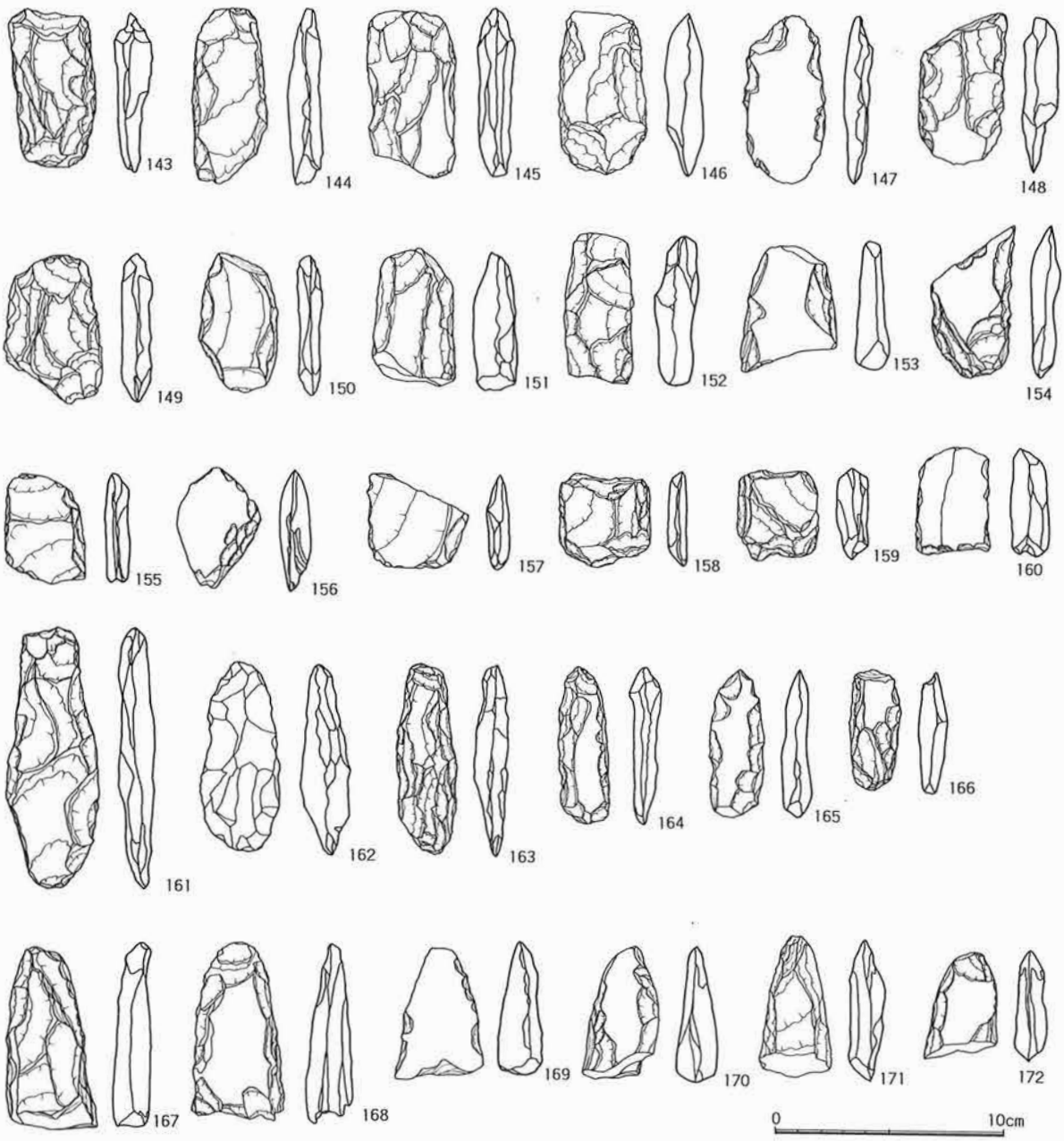
図－116　打製石斧実測図－5



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
116	V	Ia	砂岩	(6.4)	3.8	2.1	(52)	
117	V	Ia	硬砂岩	(5.9)	(4.3)	1.3	(40)	
118	V	Ia	硬砂岩	(6.7)	4.3	2.0	(49)	
119	II	Ia	砂岩	(7.8)	(4.2)	2.0	(55)	
120	II	Ia	硬砂岩	(6.9)	4.5	1.5	(62)	
121	V	Ia	砂岩	(6.6)	(4.2)	2.0	(50)	
122	V	Ia	砂岩	(6.5)	4.3	1.4	(50)	
123	II	Ia	頁岩	8.5	4.6	1.6	90	
124	III	Ia	凝灰岩	(8.1)	3.6	1.8	(50)	
125	III	Ia	頁岩	8.3	3.9	2.9	59	
126	V	Ia	硬砂岩	(7.4)	3.9	1.6	(54)	
127	II	Ia	頁岩	(6.7)	4.8	1.9	(60)	
128	II	Ia	硬砂岩	(7.3)	(4.2)	2.7	(52)	
129	II	Ia	頁岩	8.9	3.2	1.4	52	
130	II	Ia	頁岩	8.4	3.8	1.9	(60)	略完形
131	II	Ia	頁岩	8.0	4.6	1.8	60	
132	II	Ia	頁岩	8.0	4.1	1.1	42	
133	II	Ia	頁岩	7.7	4.1	1.3	60	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
134	I	Ia	頁岩	7.9	4.0	1.8	64	
135	I	Ia	頁岩	8.1	3.8	1.2	38	
136	III	Ia	砂岩	(8.0)	(4.1)	1.1	(39)	
137	II	Ia	砂岩	(7.5)	(3.6)	1.7	(49)	
138	III	Ia	硬砂岩	(7.7)	3.0	1.1	(30)	
139	II	Ia	砂岩	(6.9)	3.4	1.5	(38)	
140	III	Ia	頁岩	(6.2)	3.4	1.0	(27)	
141	II	Ia	硬砂岩	(5.2)	3.9	0.9	(21)	
142	I	Ia	砂岩	(5.9)	(3.8)	1.5	(41)	
143	II	Ia	硬砂岩	(6.8)	3.6	1.7	(45)	
144	II	Ia	砂岩	(7.7)	3.3	1.4	(40)	
145	II	Ia	砂岩	(7.3)	4.9	1.6	(52)	
146	III	Ia	硬砂岩	(7.1)	3.8	1.6	(45)	
147	II	Ia	凝灰岩	(7.4)	3.6	1.1	(31)	
148	II	Ia	砂岩	(6.5)	3.8	1.5	(40)	
149	II	Ia	砂岩	(6.4)	(4.4)	1.3	(39)	
150	II	Ia	砂岩	(5.7)	3.5	1.0	(22)	
151	V	Ia	砂岩	(6.0)	(3.7)	1.8	(50)	

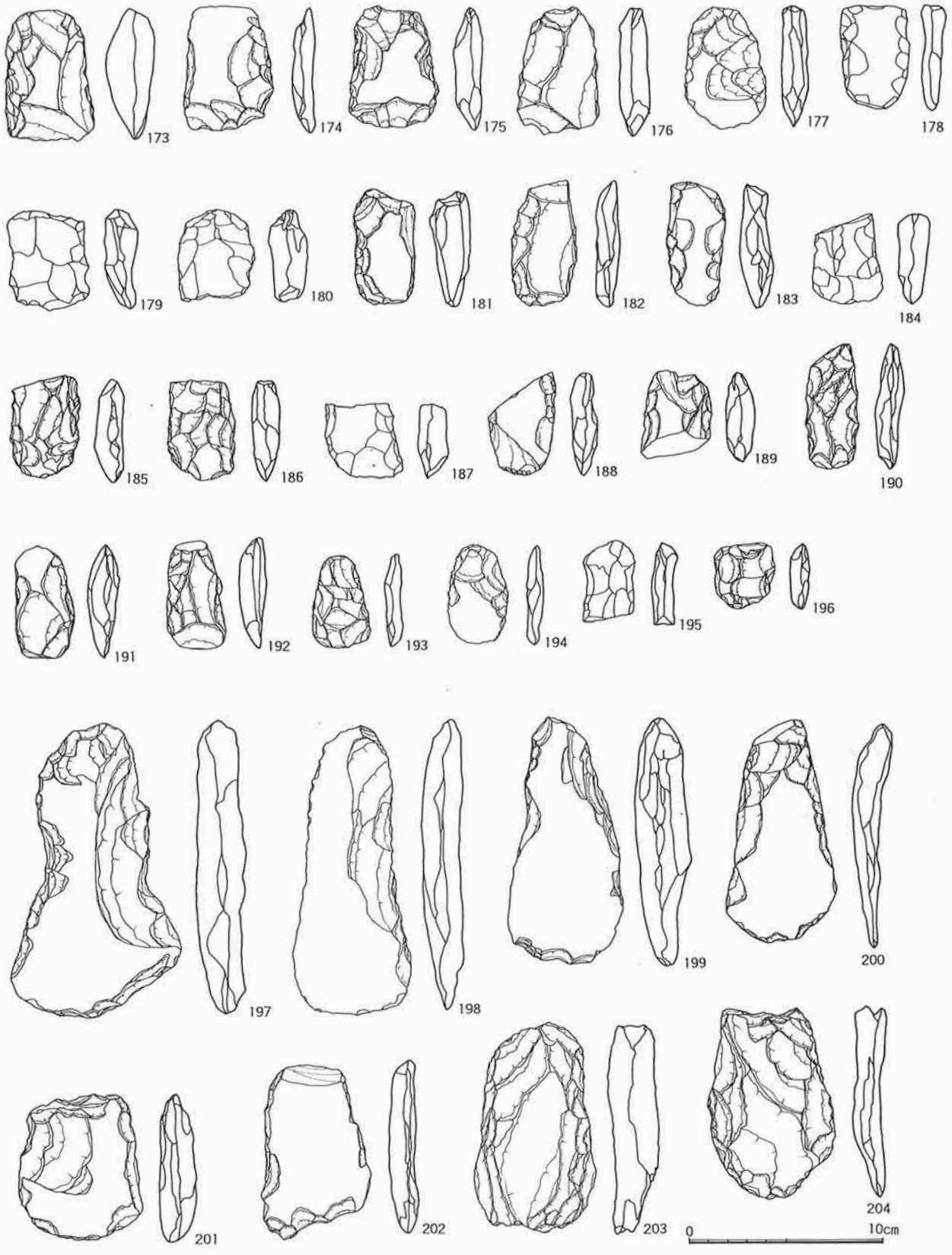
図－117　打製石斧実測図－6



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
152	V	Ia	砂岩	(6.5)	3.0	2.0	(38)	
153	V	Ia	砂岩	(5.6)	(4.3)	(1.5)	(31)	
154	V	Ia	硬砂岩	(6.4)	(3.6)	(1.3)	(21)	
155	V	Ia	砂岩	(4.7)	(3.5)	(1.1)	(20)	
156	V	Ia	砂岩	(5.3)	(3.8)	(1.4)	(29)	
157	V	Ia	砂岩	(4.2)	(4.4)	(1.1)	(10)	
158	V	Ia	砂岩	(4.1)	(4.0)	(0.9)	(12)	
159	V	Ia	砂岩	(4.0)	(3.7)	(1.4)	(18)	
160	V	Ia	砂岩	(4.6)	(3.1)	(1.6)	(29)	
161	II	Ib	砂岩	(11.4)	4.4	1.6	(78)	
162	II	Ib	頁岩	8.3	3.6	2.1	55	
163	II	Ib	硬砂岩	(8.3)	2.6	1.5	(20)	略完形
164	I	Ib	頁岩	6.9	2.2	1.5	18	
165	V	Ib	頁岩	6.5	2.5	1.4	20	
166	II	Ib	砂岩	(5.3)	1.3	2.2	(13)	
167	V	Ib	緑泥片岩	(8.1)	(3.9)	1.7	(51)	
168	II	Ib	砂岩	(7.7)	(4.0)	2.1	(68)	
169	II	Ib	砂岩	(5.6)	(3.8)	2.0	(38)	
170	V	Ib	砂岩	(5.8)	(3.0)	1.9	(30)	
171	I	Ib	砂岩	(6.2)	(3.3)	1.6	(24)	
172	V	Ib	硬砂岩	(4.9)	(3.2)	1.4	(20)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
173	V	Ic	頁岩	6.8	4.6	2.5	76	
174	V	Ic	頁岩	6.2	4.6	1.2	41	
175	I	Ic	砂岩	(6.3)	4.6	1.9	(48)	
176	V	Ic	頁岩	(6.6)	4.3	1.6	(42)	
177	II	Ic	頁岩	(6.3)	4.4	1.3	(33)	略完形
178	II	Ic	頁岩	(5.3)	3.6	1.2	(21)	
179	II	Ic	頁岩	(5.1)	4.0	1.7	(32)	
180	II	Ic	頁岩	(4.6)	4.1	2.0	(38)	
181	II	Ic	硬砂岩	(5.9)	(3.1)	2.0	(49)	
182	V	Ic	頁岩	(6.6)	(3.4)	1.2	(23)	
183	III	Ic	頁岩	(6.3)	3.0	1.6	(25)	
184	II	Ic	頁岩	(4.5)	3.7	1.6	(22)	
185	III	Ic	頁岩	(5.1)	3.5	1.5	(30)	
186	III	Ic	頁岩	(5.1)	3.4	1.4	(22)	
187	II	Ic	砂岩	(3.8)	(3.6)	1.6	(29)	
188	II	Ic	チャート	(4.8)	(3.5)	1.3	(20)	
189	V	Ic	頁岩	(4.6)	(3.6)	2.6	(22)	
190	V	Ic	頁岩	(6.7)	2.8	1.4	(27)	
191	V	Ic	頁岩	5.9	(3.1)	2.6	(28)	略完形
192	V	Ic	砂岩	(5.6)	(3.0)	1.6	(24)	
193	III	Ic	頁岩	4.7	3.0	0.8	10	

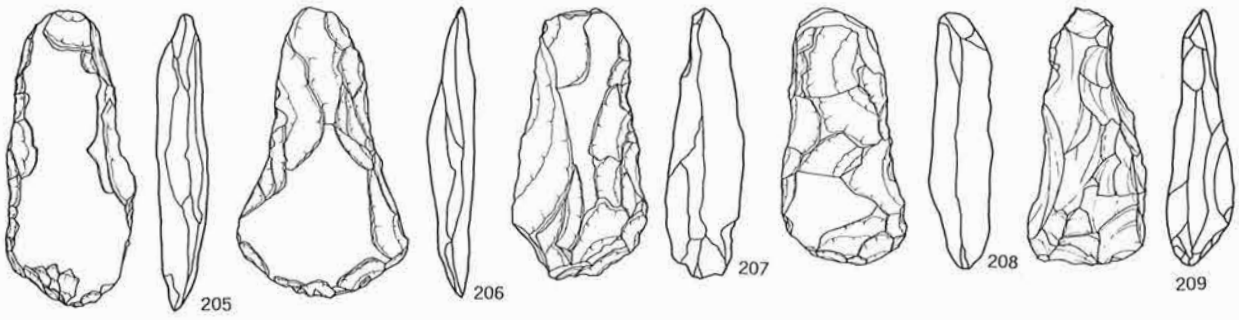
図－118　打製石斧実測図－7

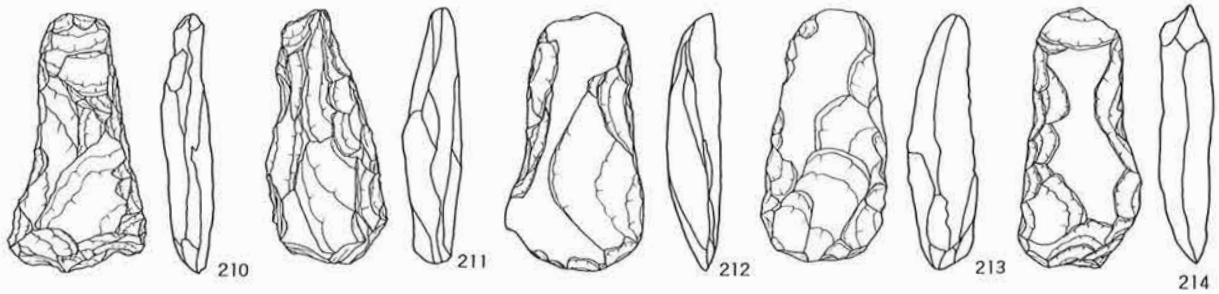


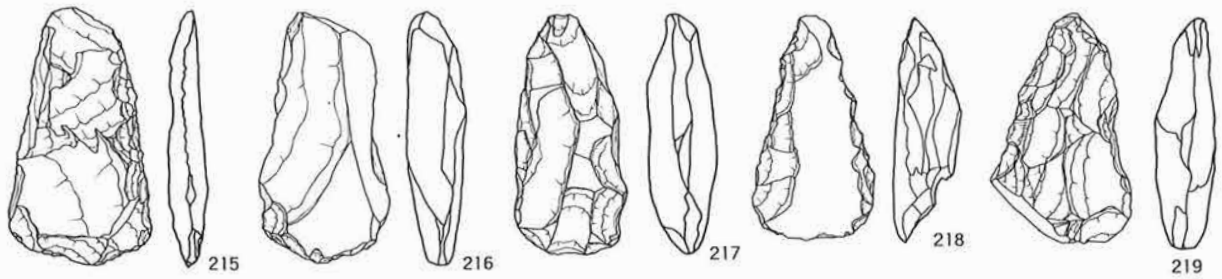
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
194	I	Ic	硬砂岩	5.1	3.1	0.9	19	
195	II	Ic	頁岩	(4.0)	(2.6)	1.1	(14)	
196	III	Ic	頁岩	(3.3)	3.1	1.0	(10)	
197	II	IIa	硬砂岩	(14.8)	8.5	2.6	(327)	略完形
198	II	IIa	硬砂岩	(14.9)	6.1	2.1	(194)	略完形
199	II	IIa	頁岩	(12.6)	5.8	2.7	(202)	略完形
200	III	IIa	砂岩	(11.5)	5.5	1.7	(95)	略完形

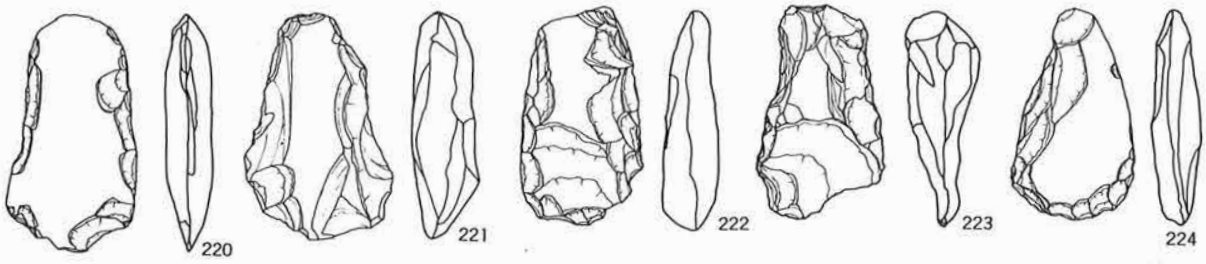
番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
201	II	IIa	砂岩	(7.5)	6.3	2.0	(102)	
202	V	IIa	砂岩	(8.8)	(5.6)	1.5	(75)	
203	I	IIa	硬砂岩	(10.8)	(6.8)	2.4	(203)	
204	II	IIa	砂岩	(9.6)	6.5	1.5	(92)	
205	II	IIa	砂岩	(11.7)	5.0	2.0	(143)	略完形
206	V	IIa	砂岩	(11.4)	(6.9)	2.0	(110)	略完形
207	V	IIa	硬砂岩	(10.6)	(5.4)	3.0	(145)	

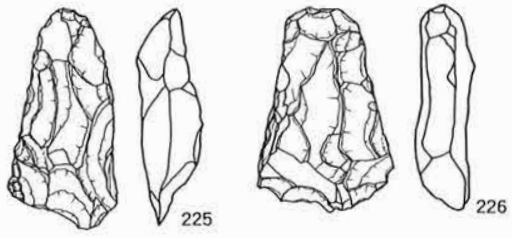
図－119　打製石斧実測図－8







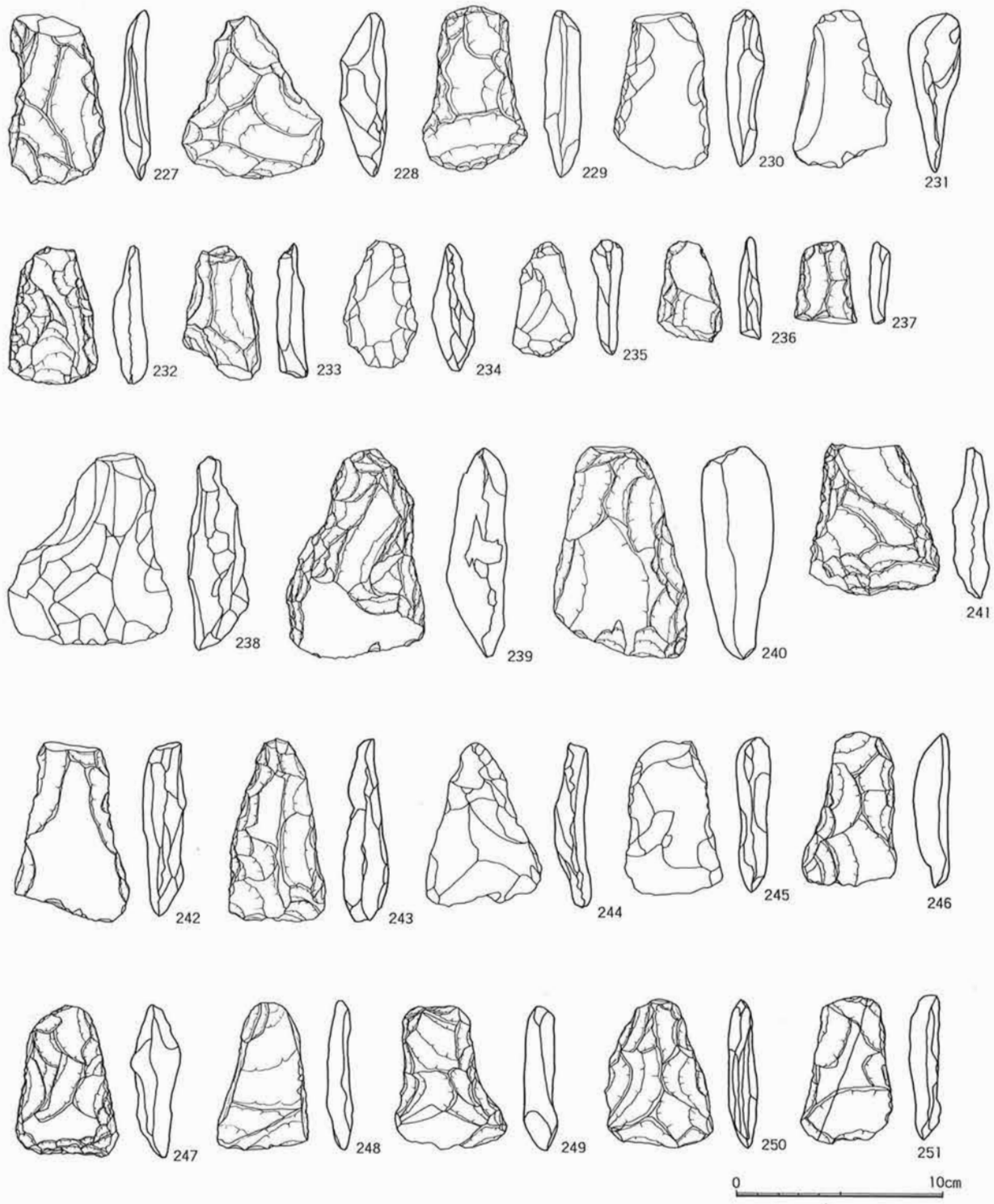




番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
208	II	IIa	硬砂岩	(9.8)	4.9	2.4	(123)	略完形
209	II	IIa	頁岩	10.1	(4.6)	2.6	(104)	
210	III	IIa	頁岩	(10.2)	5.0	1.8	(103)	
211	II	IIa	硬砂岩	(10.1)	(4.5)	2.3	(108)	
212	V	IIa	砂岩	10.2	5.5	2.2	(103)	略完形
213	II	IIa	頁岩	(10.0)	4.9	2.7	(113)	略完形
214	III	IIa	砂岩	(10.0)	4.6	2.0	(101)	

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
215	I	IIa	硬砂岩	10.1	(5.6)	1.5	(88)	略完形
216	I	IIa	砂岩	(9.7)	(5.2)	2.4	(70)	
217	III	IIa	砂岩	9.4	4.4	2.7	(100)	略完形
218	II	IIa	チャート	8.8	4.9	2.5	89	
219	I	IIa	頁岩	9.0	(5.7)	2.4	(102)	
220	V	IIa	砂岩	(9.4)	5.1	1.9	(92)	
221	II	IIa	頁岩	(8.9)	5.7	2.6	(138)	
222	III	IIa	頁岩	(8.6)	4.9	2.1	(94)	
223	II	IIa	頁岩	(8.4)	(5.1)	3.8	(90)	
224	II	IIa	頁岩	8.4	4.9	1.9	71	
225	V	IIa	硬砂岩	(8.4)	(4.4)	2.5	(79)	
226	III	IIa	頁岩	(8.2)	5.2	2.1	(90)	
227	V	IIa	硬砂岩	(8.3)	(4.6)	1.4	(52)	
228	III	IIa	頁岩	8.0	6.9	2.4	(102)	略完形
229	II	IIa	砂岩	(8.0)	5.1	1.8	(68)	略完形
230	II	IIa	頁岩	(7.6)	4.7	1.8	(70)	

図－120　打製石斧実測図－9



番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
231	II	IIa	頁岩	(7.7)	(4.5)	2.6	(70)	
232	I	IIa	頁岩	6.7	4.1	1.5	42	
233	I	IIa	硬砂岩	(6.5)	(3.6)	1.3	(20)	
234	II	IIa	頁岩	(6.1)	3.6	2.1	(35)	略完形
235	II	IIa	頁岩	5.5	(2.9)	1.5	(21)	
236	II	IIa	砂岩	(4.8)	(3.0)	1.2	(16)	
237	V	IIa	頁岩	(4.0)	(3.0)	1.0	(11)	
238	III	IIb	頁岩	9.3	7.9	2.7	203	
239	I	IIb	砂岩	(10.4)	6.5	2.8	(209)	略完形
240	V	IIb	緑泥片岩	(10.2)	6.6	3.5	(200)	略完形
241	I	IIb	頁岩	(7.3)	6.3	1.8	(81)	
242	II	IIb	頁岩	(8.4)	5.4	2.5	(81)	
243	V	IIb	頁岩	(8.9)	4.7	2.3	(36)	
244	II	IIb	頁岩	(7.5)	5.6	1.5	(60)	略完形

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
245	II	IIb	頁岩	7.5	4.6	1.7	60	
246	V	IIb	頁岩	(7.5)	4.6	1.7	(50)	
247	III	IIb	頁岩	7.2	5.0	2.4	76	
248	II	IIb	頁岩	7.1	4.4	1.2	38	
249	V	IIb	頁岩	7.0	5.4	1.6	48	
250	V	IIb	砂岩	7.3	5.2	1.5	(45)	略完形
251	III	IIb	頁岩	(7.0)	4.5	1.4	(50)	略完形
252	II	IIb	頁岩	(6.9)	4.2	1.4	(39)	略完形
253	II	IIb	砂岩	(6.6)	3.9	1.4	(38)	略完形
254	II	IIb	硬砂岩	6.7	3.3	1.5	39	
255	V	IIb	頁岩	(6.3)	4.5	1.8	(44)	
256	II	IIb	頁岩	(6.0)	(4.2)	1.8	(48)	
257	II	IIb	頁岩	5.5	4.5	1.4	32	
258	V	IIb	頁岩	3.7	3.4	1.2	10	

図－121　打製石斧実測図－10

番号	出土区	分類	石材	長	幅	厚	重	備考
259	II	III	硬砂岩	(16.7)	8.4	3.3	(421)	略完形
260	V	III	硬砂岩	(11.0)	5.6	1.6	(109)	略完形
261	I	III	砂岩	(10.2)	(4.9)	1.5	(79)	
262	II	III	硬砂岩	(8.2)	(5.5)	1.5	(66)	
263	II	III	砂岩	(5.2)	(6.4)	(1.7)	(57)	
264	I	III	硬砂岩	(5.8)	(5.4)	1.4	(49)	
265	II	III	頁岩	(5.9)	(4.9)	2.5	(40)	
266	II	III	頁岩	6.6	4.7	1.5	88	
267	V	IV	硬砂岩	(12.1)	9.9	1.8	(162)	略完形
268	V	V	頁岩	7.6	5.6	2.4	129	
269	V	V	砂岩	8.5	5.5	2.3	104	
270	II	V	砂岩	(8.2)	4.8	2.4	(93)	
271	II	V	硬砂岩	(7.9)	(4.8)	2.0	(70)	

図－122　打製石斧実測図－11

Ⅱ. 遺　　構

滝戸遺跡の縄文時代（以下、縄文）包含層は第Ⅱ次発掘調査（第Ⅱ調査区)で３層が確認されている。それによれば、以下にされている（図－124)。

縄文第１面　早期前半～前期　ｇ層富士黒土層を中心に分布する。

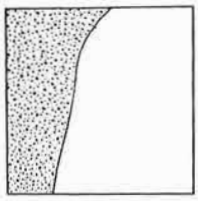
縄文第２面　中期前半　ｅ層栗色下層面を中心に分布する。

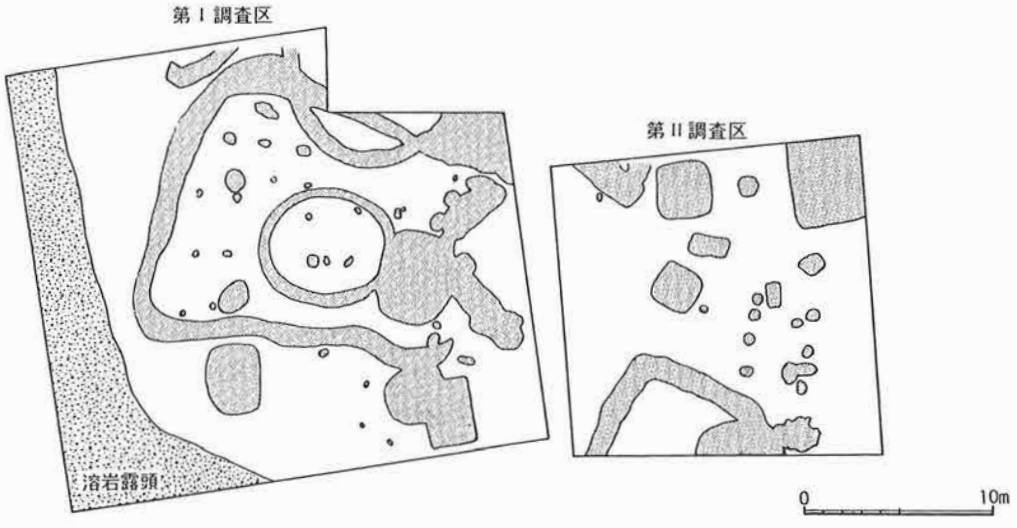
縄文第３面　中期後半～後期前半　ｄ層栗色上層面を中心に分布する。

しかし、それらの包含層は弥生時代（以下、弥生）遺構（SZ21など）の構築がｅ層栗色下層面まで及ぶこと、第Ⅰ．第Ⅲ調査区では包含層が薄い上に、開墾や校舎造成の掘削が深く及んでｃ層まで除去されること、さらに本調査のきっかけとなった塵芥処理用のピット（攪乱抗）が無数に掘削されていることなどから(図－123)、その全容をはっきりと表している訳ではないことを確認して遺構の記述を進めていきたい。

この状況下で確認される遺構は以下である。

配石01～03　　３基
配石土壙01.02　２基
土壙01～09　　９基
焼土を内包する土壙01.02　　２基
埋甕　01～13　　13基
炉（竪穴住居）01～04　４基
焼土　　23ヶ所





図－123　縄文包含層掘削状況図

A．縄文第１面の遺構

縄文第１面は包含層の厚い第Ⅱ．第Ⅴ調査区に認められるが、遺構が確認される部分は第Ⅱ調査区の東側部分に過ぎない。なお便宜上北側発掘区をA区、南側発掘区をB区と呼称する（図－126）。

A区でははっきりした配石状況を認められなかったが、それでも径1.8m程の環状の配石の可能性を指摘するむきもあった。

B区では土器の出土も目立ち、遺構との関連を認めている。

縄文第１面で確認される遺構

配石01

配石01（図－126）

配石01はB区中央に、0.3m前後の礫をもって径１m前後の半円形状に配された礫群である。南側に開口した「C」状の奥の部分に土器0201があたかも敷かれたかのように置かれ、１部の礫はそれを覆っていた。土壙状のものではなく、面的な拡がりのなかで構築された遺構のようである。

伴出土器から縄文早期前半の配石とされる。また配石01から西側に１m程のところで縄文尖底土器の底部(0101)が出土したり、尖頭器01がこの層より出土しているから、部分的ではあるが縄文早期の生活領域が及んでいたものと思われる。

本配石を検出した時期には縄文早期の配石遺構の類例に乏しく、その位置付けに躊躇も見られるが、昭和60年に沼久保坂上遺跡(注)で同時期の配石も確認され、そうした遺跡より伴出遺物の少ない配石遺構の特徴を得ると、A区の環状に並ぶ礫群も人為的遺構である可能性は充分なのである。

注．富士宮市教育委員会 1985 『沼久保坂上遺跡』

B．縄文第２面の遺構

縄文第２面は第Ⅲ．第Ⅴ調査区にも及んでいると思われるが、遺構が確認される部分は第Ⅰ調査区の東寄りの部分から第Ⅱ調査区の全区域で、その中央付近に濃密な部分を見る（図－127)。配石の多くは2×3m程の規模で、径0.1～0.3m前後の比較的小さな礫を用いたものであり、そうした小石組が10数基数えられるようである。またそのうちには径0.5～0.9m前後の大礫３個を中心に径0.1～0.2m前後の小礫をケルン状に積み上げた「ケルン状石組」と称する特徴的な配石も２～３ヶ所に見られている。全体的な配石の特徴はそうした小単位の組み合わせにあるようである。

縄文第２面で確認される遺構

ケルン状石組

環状配石

土壙01～04.08.09

埋甕01.02

配石土壙01

一括土器集合部

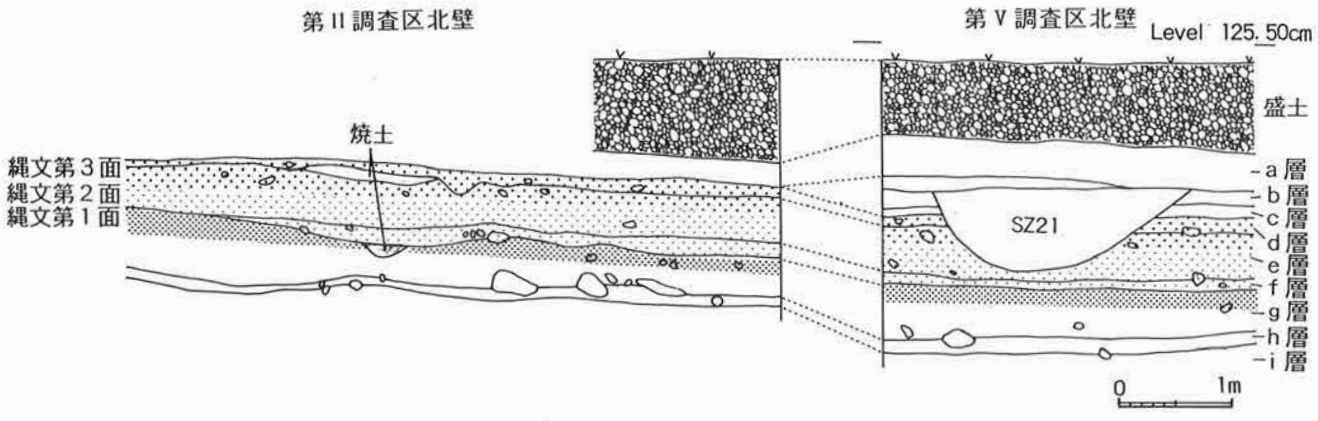
焼土跡

土壙01～04.08.09（図－127）

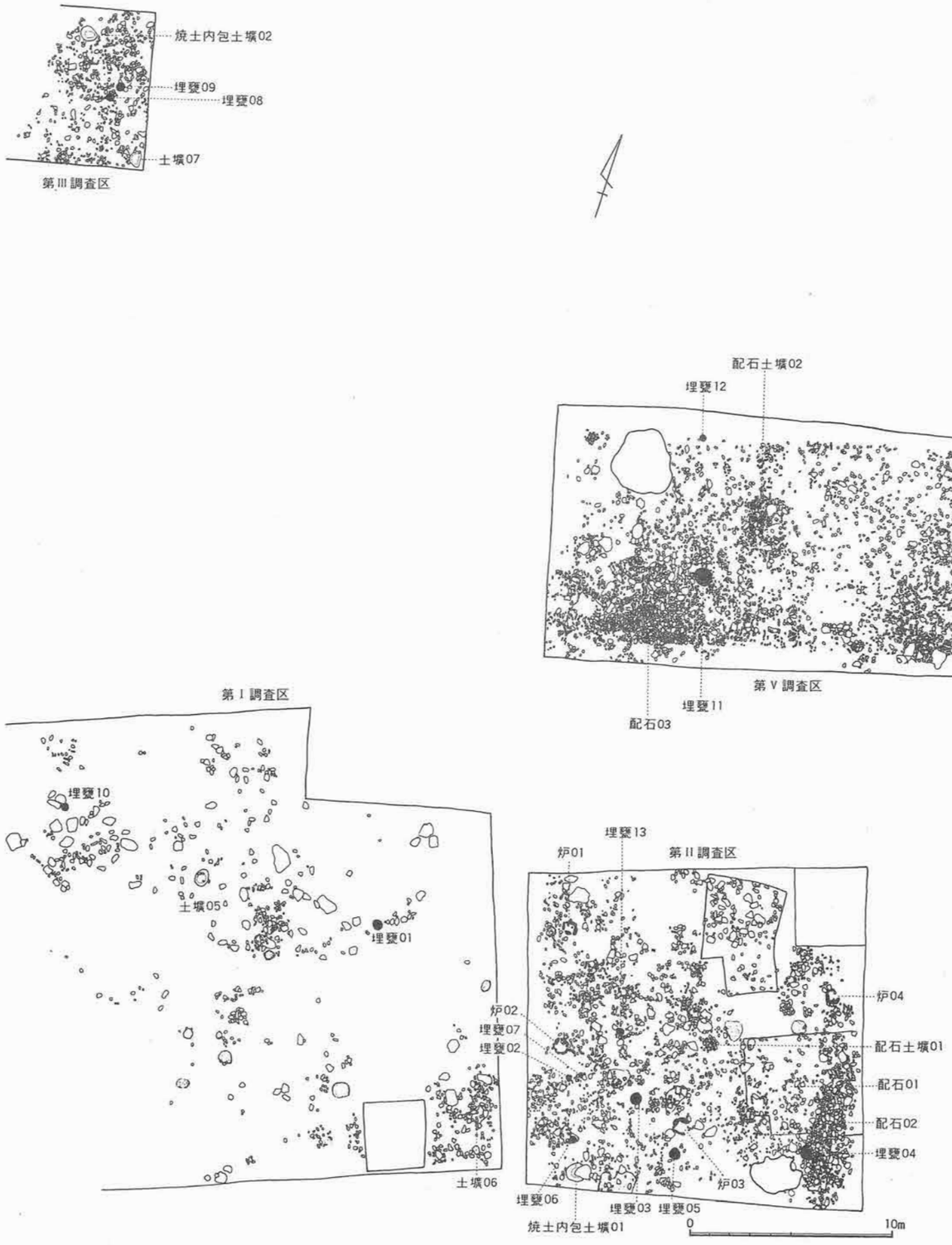
第Ⅱ調査区の中央にある密度の濃い配石の南側部分を5×4.5m程発掘して、土壙６基を確認している。

土壙01は長径1.7m、短径1.2mの南北に長い楕円形で、深さは0.15mの浅い皿状のものである。壙内には径0.4m前後の比較的大きな礫を集積して、それにまた大形土器片も伴い他の土壙と異なった状況が観察されている。焼土塊も見られて後述する焼土を内包する土壙に近い性格を持ったものかも知れない。

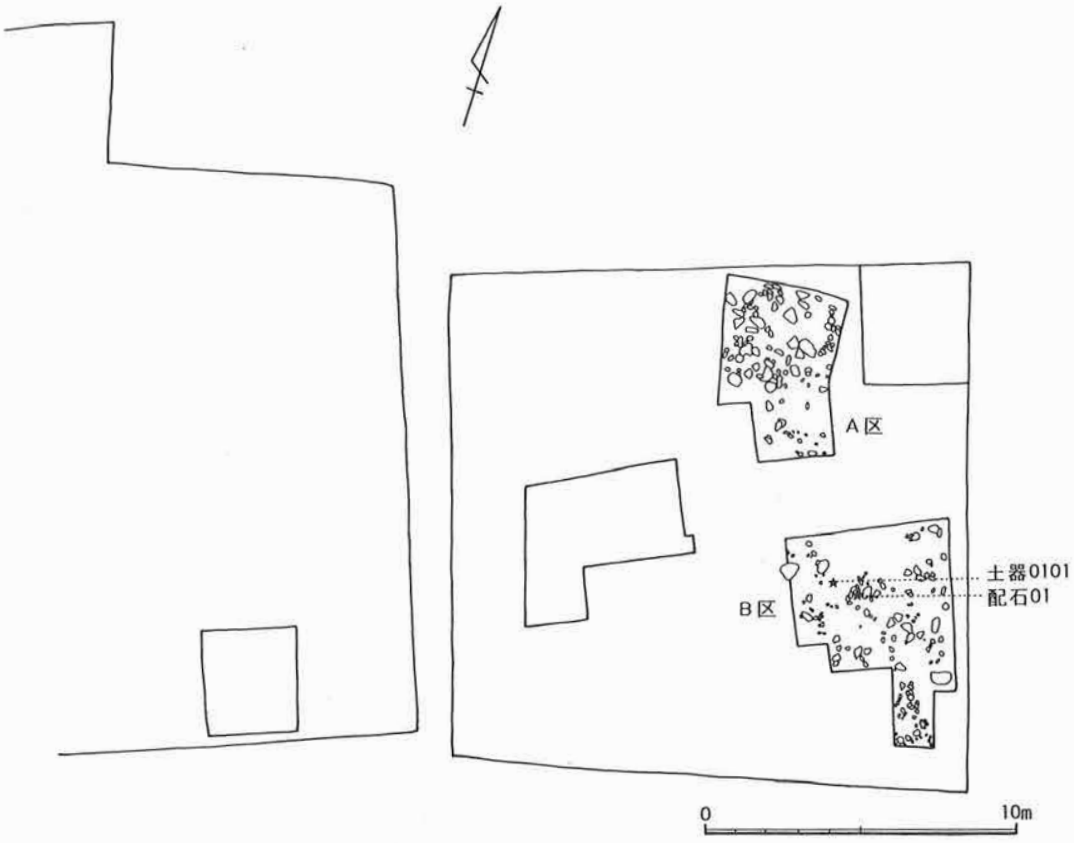
土壙02は長径1.3m、短径1.0mの東西に長い不整の達磨形状のものである。0.4mの深さをもつ椀状の底面をもち、その上部を拳大の礫数個で覆うものである。



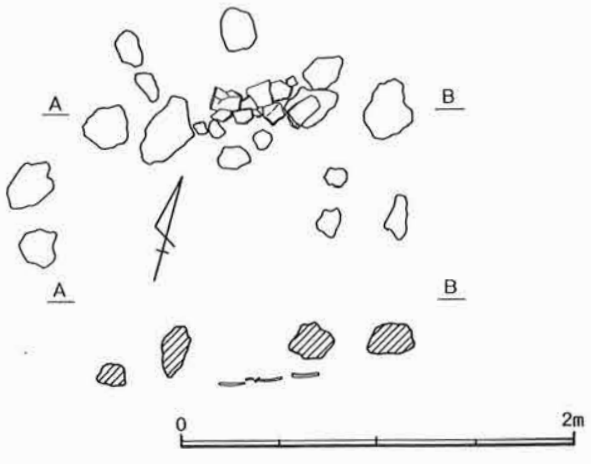
図－124　調査区別土層堆積状況図



図－125　縄文時代遺構全体図



縄文第1面全体図



配石01

図－126　縄文第1面遺構実測図

特別な埋納状況はないようである。

土壙03は1.3×1.1mの歪んだ台形状のもので、深さは0.2mの皿状の底面である。径0.5mを超える大形礫1個と拳大の礫11個が上部を覆い、その状況は配石土壙に近いものである。

土壙04はトレンチによって半面を欠く。残存する部分は楕円形で、おそらく1.2m×1.0m程の卵形で、断面形も椀状で0.4mの深さをもつものと思われる。

土壙08.09は重複して土壙09が新しい。前者が径1.8m、深さ0.6m、後者が径1.6m、深さ0.8mの略円形が予想され、土壙08は上部を厚さ0.1m程の砂礫層で被い、そこには大形の打製石斧が含まれていた。

第Ⅱ次調査概報（注1）ではこれらの土壙と上部の配石のあり方を次のように述べている。

「以上の状況からすれば、本配石遺構は種々の形状を呈する小礫が、厚い栗色土層（e層）の堆積によって当初の形状を比較的良好に残したといい得るものであって、あるいは一般に平面形で発見される配石遺構の多くは本来こうした主体構造をもつものとみて良いかも知れない。それはともかく本配石遺構がその下部に重複しあう土壙群を伴ったことは確実で、配石遺構の性格の検討についても重要な意義をもつものと言えよう。」

埋甕01（図－128）

埋甕01は第Ⅰ調査区の東寄り中央に位置する。配石域の外縁にあたるらしく付近には目立った礫群の並びはないが、唯一0.2m程の礫が列状に数個並べられた先端に位置するものである。径0.4m前後の円形で深さ0.2m程の掘り方に土器1001(勝坂3式)が破片状となって埋納されており、破片の中心には0.1m程の拳大の礫が1個納められていた。破片状となって出土した埋甕の唯一の例である。詳細な状況は違うが大形の土器破片と数個の礫を伴った土壙01と共通の意識をもったものであるか、時期的な手法とすべきか今後の判断を待ちたい。

埋甕02（図－128）

埋甕02は第Ⅱ調査区の中央配石群の南西側5m付近に位置し、下部には土壙01が重複している。土器型式に大きな時期差はないから極短い間の重なり合いであろう。また西側に0.5mと接して埋甕07が構築されるが、これは曽利4式土器を使用するもので明らかに上層より掘り込まれたものである。埋甕02は土器1110(曽利1式)を使用するもので、径0.35m、深さ0.2mの埋納土器の大きさとあまり変わらない掘り方に底部を欠いた土器1110を逆位に置いている。この底部の欠損部分の割れ口は丁寧に磨かれており、逆位に対する意識は埋納当初より意識されていたものであろう。壙上部には径0.3mの大きな礫が半分程で覆っており、小礫も数個見られることから壙自体礫で覆われていた可能性はある。

配石土壙01（図－128）

配石土壙01は第Ⅱ調査区の中央に位置し、そこは濃密な配石群の南東隅にあたり、それ以東は配石もまばらとなっている。径0.8m、深さ0.2mの円形、椀状の掘り方内には拳大の礫58個が隙間なく詰まり、また礫は赤色化していて他とは全く異質である。1m程東側に接して1m四方の範囲で大規模な焼土跡が存在していてそれとの関連も窺える。早期の集石土壙に類似したものであるが、中期の祭祀遺構のなかの存在であるため新ためて配石土壙を呼称したが、遺構を語るには適切ではないかも知れない。

一括土器集合部（図－128.129）

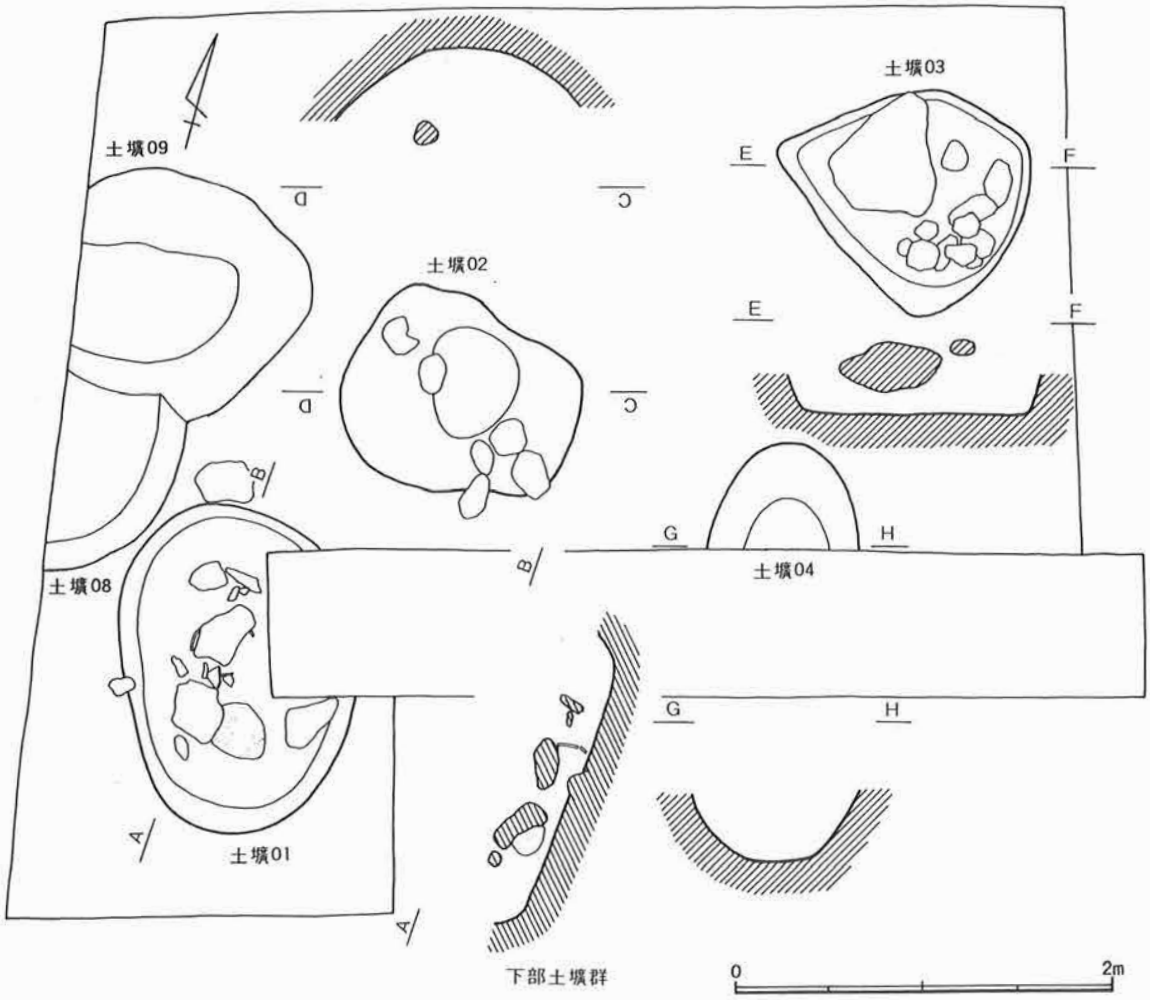
縄文第2面は一括土器の集合が特徴である。それらは縄文第3面にも当然のように存在するものであるが、この層の土器群は集、配石の及ばない部分にあって目立つものである（注2）。それは第Ⅰ調査区の東側の隅を南から北に向かって帯状に6ヶ所程で数えられ、部分的には土器1114.1119.1122のように重なり合う。掘り方のような凹みに存在するものではなく平面的な配置であることが確認されている。

以上、縄文第2面の遺構配置を見ると、「極めて限定された範囲の調査しか成し得なかったが、小単位配石の空白部に土壙が存在する関係は、配石遺構が墓地である証拠と言えると共に、石組そのもののもつ意味を検討する上で注意すべき内容と言えよう。」とするように、ケルン状石組や、径2～3mの環状列石などの小石組の集中部分の外側に土壙群、更にその外側に存在する土器群や埋甕のあり方はこの時期のひとつの祭祀遺構のあり方として注目しておきたい。

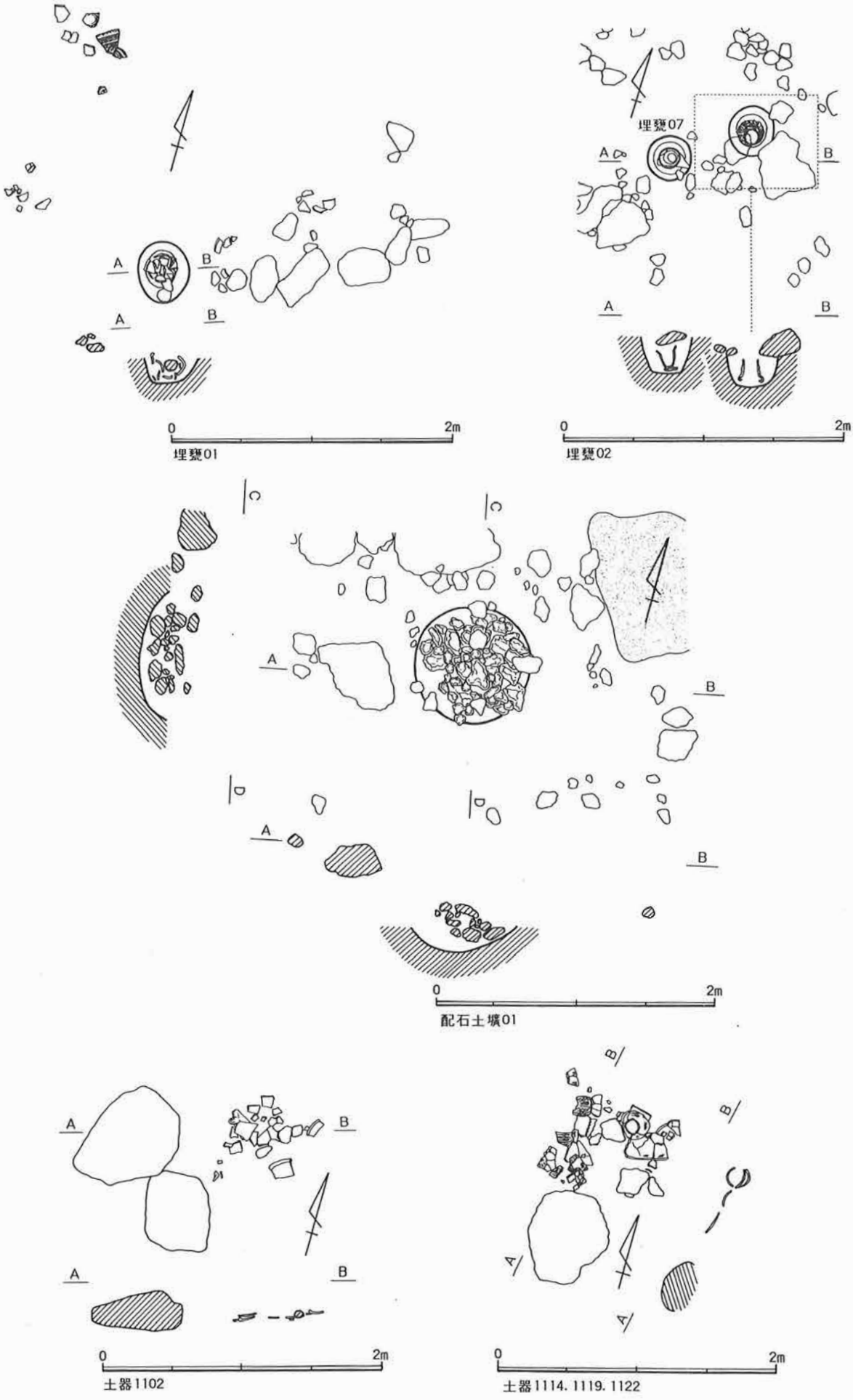
注1. 富士宮市教育委員会 1978『滝戸遺跡発掘調(第Ⅱ次)概報』

注2. 富士宮市教育委員会 1977『滝戸遺跡発掘調(第Ⅰ次)概報』
滝戸遺跡第Ⅰ次発掘調査時の下層面の発掘調査の不足は認めるものであるが、縄文第2面における土器群出土面での遺構の有無については信頼できるものと言える。

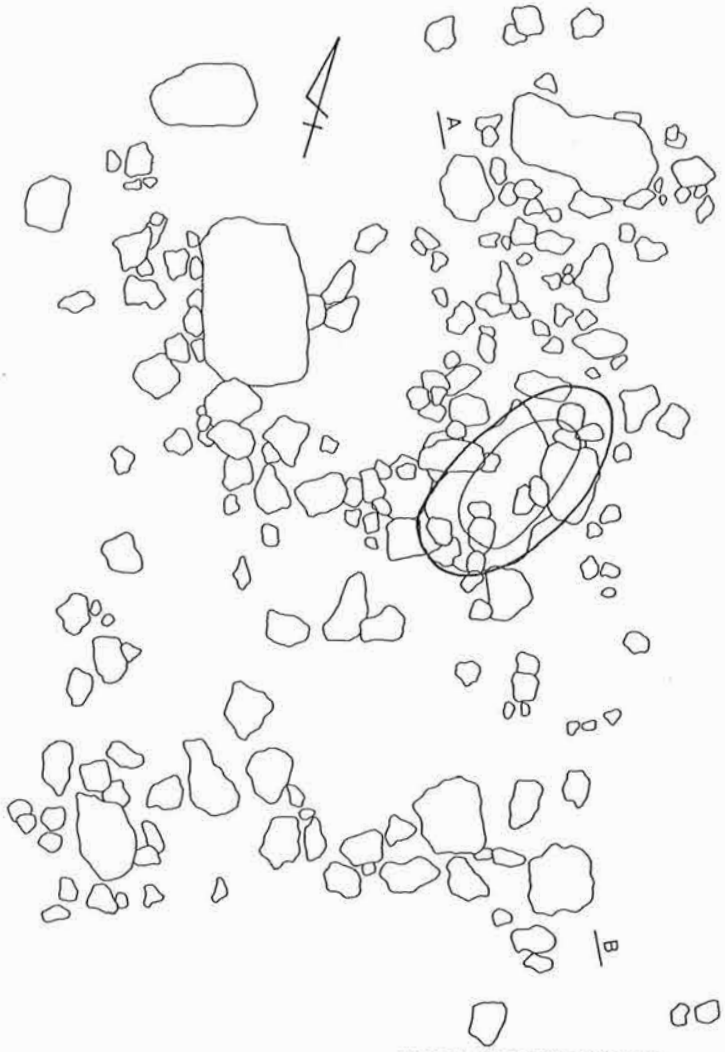
縄文第2面全体図



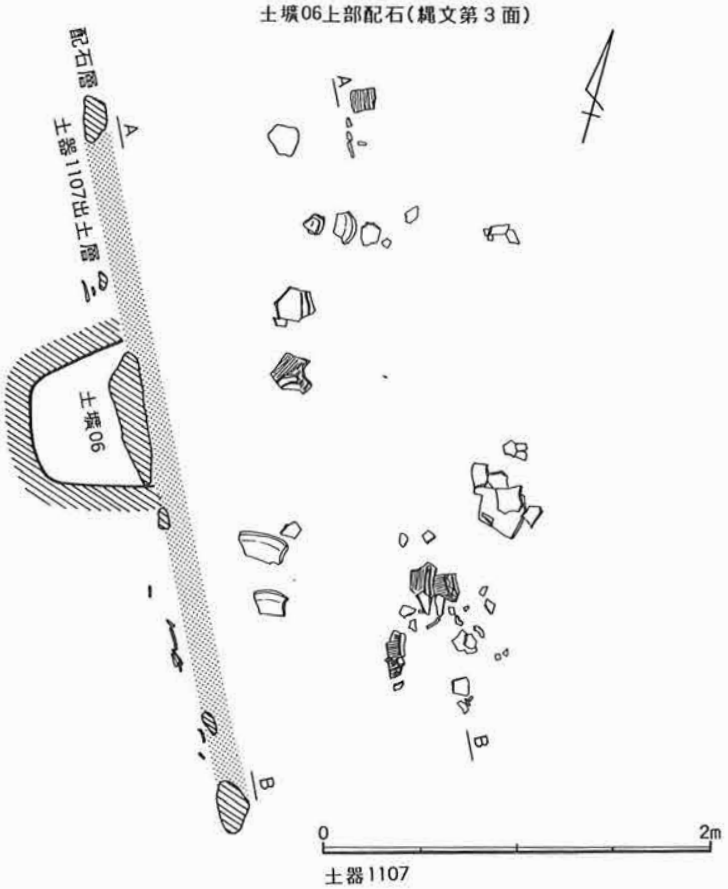
図－127　縄文第2面遺構実測図－1



図－128　縄文第２面遺構実測図－２



土壙06上部配石(縄文第３面)



土器1107

図－129　縄文第２面遺構実測図－３

C．縄文第３面の遺構

縄文第３面は縄文遺構の最終構築面であることから、縄文中期後半から後期前半の遺構が著しく重複して検出される。

縄文第３面で確認される遺構
炉（竪穴住居）01～04
埋甕03～13
焼土を内包する土壙01.02
土壙05～07
配石土壙02
配石02.03
焼土21ヶ所
この重複関係はａ～ｃの３段階に分けられる。

１．縄文第３面ａの遺構（図－130）

縄文第３面は炉（竪穴住居）４基が認められる。前後に配石遺構が重複したため、竪穴住居のプランの確認は困難であったが、それぞれの炉を中心に径４ｍ程の円形プランを描き、その４基の円形プランが円弧に配置して作る径10m程の広場の景観は縄文中期集落の一単位集団のあり方にふさわしいものであり、そこにそうした単位を認めても不自然ではないと思われるのである。その時期であるが、炉03と埋甕05（図－132）の重複関係でおおよその見当が付いている。それによれば炉03内の焼土とそれがかき出されて配石と共に0.15m程埋没した後に、曽利３式期の埋甕05（土器1128）が構築されており、その下層に存在する曽利１式期の配石のあり方を踏まえると曽利２式期の経営であることが妥当に思える。

縄文第３面－ａで確認される遺構
炉（竪穴住居）01～04
焼土

炉01（図－131.132）

炉01は第Ⅱ調査区北西隅に位置する。径1.0×0.8m、深さ0.3mの東西に若干長い楕円形の掘り方に、安山岩の割石（ヘギ石）を三方に配置し、開口する南面を小礫３個で塞いでいる。長さ0.5mに及ぼうとする板状ヘギ石で作る炉坑は幅0.5mのはっきりとした枡状となり、その炉内には撹拌されたような焼土が充満し、北側には溢れ出た部分もある。床面と思われるレベルには径0.15m程の小礫が散在している。

炉02（図－131.132）

炉02は第Ⅱ調査区の西側で炉01の南側６ｍ程のところに位置する。径1.0m、深さ0.3mの円形掘り方に８個の角礫を円形に配したもので、それは径0.15～0.3m程の小礫であり、また東側に組まれる炉石は溶岩そのものであるなど、炉01をはじめとする他の炉構成礫とは異質である。径0.6mの円形炉坑には炉01同様に焼土が充満しているがそれ程撹拌されたような様子はなく、また周辺に焼土の存在がないなど、他に見られるような炉に関する行為は希薄に感じられる。床面と思われるレベルの配石はさほど目立たないでいる。また予想される円形プラン内には曽利１式期の埋甕02と曽利４式期の埋甕07が位置するが、それらとはっきりした重複関係は捉えられていない。

炉03（図－131.132）

炉03は第Ⅱ調査区の南側で、炉01より７ｍ、炉04より10m程のところに位置する。径1.5m、深さ0.4mの円形で皿状の断面をもった大形の掘り方に、安山岩の割礫５個をコの字状に配して幅0.6mの炉坑を築いている。南東側に向く開口部には当初より炉石の配置はなかったものと思われる。炉坑の焼土は炉01同様に撹拌されたような状況であり、また炉周辺や床面と思われるレベルは他に比して焼土の散在が目立つ。この焼土層の上部より曽利３式期の埋甕05が築かれ、時期判断のひとつの事象となっているのである。

炉04（図－131.132）

炉04は第Ⅱ調査区の東側で、炉01より13m、炉03より10m程のところに位置する。径0.9m、深さ0.3mの円形で椀状の断面をもった掘り方に、安山岩の割礫４個を炉03と同様にコの字状に配している。長さ0.5mの大形角礫２個を主体にして、一面を小礫２個で補うもので、幅0.4mに築かれた炉坑の東側に開口部をもつ。ここも当初より炉石の配置はなかったものと思われる。炉坑の焼土は0.25mの厚さで炉01.03と同様に撹拌されたような状況にあり、北面の炉石に接する２個の角礫は火を受けた痕跡が、また南西に２ｍ程したところには広範囲の焼土の存在があり、やはり火に関係する部分は多い。

以上、４基の炉の詳細を見てくるとふたつの違いに気付くのである。

先ず、炉の構造の違いである。炉01.03.04が板状の大形礫を主体にして「コ」字状の炉坑を築くのに対し

図－130　縄文第３面ａ・ｂ遺構全体図

て、炉02は拳大を少し大きくしたあまり角のはっきりしない角礫を円形に並べ、それは坑底まで及ぶことなく炉の輪郭を縁取るように築いているのである。こうしたことがかつて長野県与助尾根遺跡などで語られた集団の特性のようなものであるとすれば、極短い時間のなかでの前3者の同時性と、炉02をもった竪穴住居の営まれた時間差も考えに入れておかなければならないことである。

次はこれら同時性を知られた炉01.03.04の炉坑に残る焼土のあり方である。いずれも同じように撹拌されたフカフカの状態であり、これに気付いた第Ⅱ次調査団（注1）は単純な竪穴住居の炉跡ではなくして、これを祭祀行為のひとつとして配石遺構のなかに組み入れておいたのである。この視点は確かであり、周辺に散在する焼土数ヶ所の存在は火に関係する祭祀行為があったことは想像に堅く、床面レベルに散乱する焼土塊や礫群はこれら消失家屋に対する廃屋祭祀の一形態と見做すこともできるのである。そしてこの行為と並行するように埋甕変遷第Ⅱ期の埋甕を伴う配石が築かれていったことは千居遺跡（注2）や、中伊豆町上白岩遺跡（注3）などの例からも充分に知れることである。

このように極短い間での竪穴住居群から配石遺構への転換が日常的な行為であったことを前提として、本調査区の竪穴住居群の消長を見ると、炉02による竪穴住居の営みは曽利2式期のなかでも前述3者より幾分早く始まり、一時はそのうちのどれかと併存した可能性もあり、また残る3基の竪穴住居の廃絶は曽利3式期に最も近かったか、曽利3式期のなかで行われた可能性もあると思われるのである。

2．縄文第3面bの遺構（図－130）

縄文第3面bの遺構は第Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ調査区に濃密な分布を見る。第Ⅴ調査区ははっきりとした遺構が認められないため空白域であるが、曽利式後半の遺物も尋常に見られるので分布域から完全に除外されている訳ではない。しかしこの面に特徴的な火に関する行為、つまり焼土の残存が第Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ調査区で20ヶ所以上に及ぶのに対して、焼土の分布の認められない第Ⅴ調査区への意識の希薄は当然のようにあったと思われる。またこのような火に関連する行為と配石の構築は縄文第3面aの竪穴住居群廃絶と同時に行われたもので、その延長上にこの遺構面があることは先に述べてあるとおりである。

縄文第3面bで確認される遺構

配石
埋甕03～10
焼土を内包する土壙01.02
土壙05～07
焼土

配石（図－130）

縄文第3面bの配石は縄文第2面の配石より規模が小さくなるが、その反面密度が高くなっている。具体的には下層配石は2×3m前後の規模であったものが、第Ⅱ次概報によると「0.4m前後を測る大礫（多くは1個あるいは数個）に人頭大から拳大の礫数10個を組み合わせて1.5×1.5m前後を1単位とする小石組を主体にした配石」となり、そうした配石を20前後数えている。このなかで特に密集度の高い部分は第Ⅰ調査区南東隅から第Ⅱ調査区西側にかけての15×15m程の範囲と、第Ⅲ調査区の東側半分である。しかしこの第Ⅲ調査区と第Ⅰ調査区の西側一帯は先に述べるように校舎造成の際の掘削が著しく直接溶岩流の露出を見るなど、人工的な配石の濃淡を認めることは不可能に近く、調査範囲の極限られた第Ⅲ調査区などでは殆ど語ることはできない状況にある。

このような状況のなかであるが第Ⅰ調査区では溶岩露出部分の末端転石のなかに築かれている埋甕10と東側へ8m程のところにある土壙05の間に認められる配石の空白部は信頼できるものである。そしてこの東側を土壙05を組み入れるなどして薄いながらも配石の集合体が5ヶ所程で南北に連なり、これを追うと同じような配石が第Ⅱ調査区の東端まで認められるのである。そしてこれをまとめると第Ⅰ.Ⅱ調査区のなかで、中央に径15m前後の密集した円形配石と、それを取り巻く幅6～7m程で径35m前後に及ぼうとする大円形配石が想定されるのである。この配石が曽利3式期に構築されたものであることは後述する埋甕の使用土器から知れるのである。

埋甕03（図－133）

埋甕03は第Ⅱ調査区の中央より若干南西側に向かったところで、炉02と炉03の中間に位置する。長径0.85m、短径0.7mの卵形の形状で、深さは0.5mの「U」字状の断面形をもつ掘り方に、土器1124（曽利3式）の大形深鉢形土器を正立して埋めている。残存状況は土圧によって著しくヒビ割れている。甕内部に特別な埋納品はないが、壙上部には火を受けたのか当初より赤

化した溶岩であるのか判断はできないが、いずれにしても他とは違った赤色礫が安置されている。また北面の壙上端を覆うように焼土が接し、その向こう側には広範囲に焼土が存在するなど、円形配石の中心部に近いためか礫の集中も著しい。

埋甕04（図－133）

埋甕04は第Ⅱ調査区の南東隅に位置し、上部を堀之内式期の配石02に厚く覆われている。そのためか壙と埋甕の上部は圧縮されたように欠けていて、残存する土壙は径0.75mの円形で、深さは0.2m程でしかない。使用される土器1125（曽利３式）は埋甕03使用土器と

縄文第３面第Ⅱ調査区全体図

図－131　縄文第３面遺構実測図－１

同様に大形の深鉢形土器で正立して置かれるが、やはり上部からの圧迫でヒビ割れしている。配石02の密度の濃い構築礫を除くと、土壙上面レベルに散在的ながら小規模な石組も見られるから、これを中央の円形配石を囲む大円形配石の一部として、そのなかに組み入れられた唯一の埋甕となっている。

埋甕05（図－133）

埋甕05は第Ⅱ調査区の南側で、炉03に１ｍ程で隣接して位置することは先に述べている。炉03を中心に焼土や礫が混在しながら0.15m程埋没した後に、径0.5m、深さ0.15mの円形で皿状の断面をもった小規模な掘り方を築いていることによって炉と埋甕の重複関係が知れたものである。使用された土器1128（曽利３式）は底部を欠いた穿孔土器で横位に埋納されている。浅い皿状の壙底はあたかも当初より横位で埋納することを意図したように見えるが、壙中央に正立していたものが南側に倒れた状況にも見て取れて、はっきりした状況は知られない。なお、当該期の埋甕は全て正立して安置され、埋甕13基中２基が逆位の他は、横位のものはこの１基だけである。

埋甕06（図－133）

埋甕06は第Ⅱ調査区の南西隅に位置する。南側に１ｍ程で焼土を内包する土壙01に隣接したり、その向う側には３ｍの範囲に亘る大規模焼土跡が存在するなど他に比しても、焼土や配石が最も集中している部分にあたる。事実、本埋甕も1.0×0.6m程の範囲に広がる焼土に厚く覆われて、その一部は埋甕内部まで侵入している。掘り方は径0.35m、深さ0.2mの小円形で土器1129（曽利３式）の法量に合わせたように無駄はない。この土器1129も底部を欠きながら正立するものであるが、土壙の掘り方の埋土には焼土の混入が全くなく、また穿孔された底部よりこぼれる焼土も見られないことから、土器埋納後に焼土が積められたと判断されるものである。この状況で炉の一形態でもある「埋甕炉」の存在も浮かぶが、炉に表裏一体の炭化物や灰などが目立つことなく、この土器によって焼成行為があったことは到底考えられないことである。

この埋甕内部の焼土とそれを覆う焼土の内容に視感的差は認められなかったようであるが、その位置関係からすれば本埋甕の横で焼成された焼土を埋甕に詰め、その後それを埋甕に被せたとすることが妥当に思え、そこで何かを焼いてそれを焼土と共に埋甕に詰めたのか、単なる焼土だけを詰めたのかを当時の発掘技術では判断できなかったことは致し方ないことにしても、今後の検出機会には科学的な調査が望まれる部分である。何故ならば、この埋甕に詰められる焼土のあり方、つまり他で焼かれた焼土を移して詰める行為は前述した炉01.03.04などと共通したものであり、このように火に関わることを抜きに語ることはできない曽利３式期の円形配石のあり方を究明するためにもその第一歩として、どうしても必要なことと思われるのである。

埋甕07（図－133）

埋甕07は第Ⅱ調査区の西側中央付近で炉02の南東側２ｍ程のところに位置する。東側に0.4mで隣り合わせて埋甕02を見る。この両者と炉02の作る竪穴住居プランが重複するがその関係ははっきり求められなかった。しかし本埋甕は埋甕02より0.2m程上面より構築されていることや、使用する土器1133が曽利４式期のものであることなどから、埋甕02（曽利１式期）→炉02（竪穴住居．曽利２式期）→埋甕07の変遷を予想している。詳細に戻るが、本埋甕は径0.3mの円形で深さは0.2mの「U」字状の掘り方をもち、これもまた小形の埋納土器に合わせるように無駄なく壙が穿たれている。そしてそこに正立して置かれる土器の底部には一辺0.1mの扁平三角礫が敷かれ、また上部には蓋とも思われる一辺0.2m強の同じような扁平三角礫が置かれている。この状況は埋甕と礫の一体感が見られるもので、他の埋甕の埋納方法にはないものである。この曽利４式期の埋甕はこの１基だけで、全体的な消長として捉えてもこの時期の土器片量も少なくそのあり方を象徴している。

埋甕08（図－134）

埋甕08は第Ⅲ調査区の東側中央で埋甕09が北東側に0.3m程で隣り合わせている。曽利５式期にほぼ同じく構築されたものと思われる。掘り方は径0.4mの円形で、深さは0.3mの「V」字状で、埋納する土器1136に合わせたようであり、正立して置かれる底部は穿孔されている。壙上面には小石組が築かれ、このような状況がセット関係として普遍的なものとして感じるが、現実にはこのような作りは珍しくこの１例に過ぎない。

埋甕09（図－134）

埋甕09は第Ⅲ調査区の東側中央で埋甕08と0.3mの間

で並んで位置する。埋甕08が壙上部を小石組で覆われていたのに対して、壙上部は全くと言って良い程礫の集まりはなく、礫密集度の濃い第Ⅲ調査区のなかにあって対照的である。掘り方は長径0.5m、短径0.35mの東西に長い楕円形で深さは0.25m、断面形は平らな底面から「V」字状に立ち上がったもので、やはり使用される土器1142（曽利５式）の形状に合わせるようである。土器は底部をもって正立しているが上半部を乱雑に欠き、土壙上部と共に何かの事柄によって削取されたような形跡も窺える。

以上、埋甕08.09は曽利５式期のものであるが、曽利３式期の埋甕で見られた焼土などを埋納する火に関わることは一切無く、焼土を内包する土壙02が存在することもあるが、配石内に点散する焼土は全く見られないことから、若干の性格の違いはあるとしても良いと思われる。

埋甕10（図－135）

埋甕10は第Ⅰ調査区の北西隅で溶岩の露頭部分の末端に穿たれているものである。周囲には一定の配石のように礫が並ぶが、このことについて第Ⅰ次概報（注４）では「北西部は自然に流出した転石とも、集石とも観察されるものであったが、この部分にも倒立する完形土器が置かれた状況であって一定の遺構的意味をもつものと言えた。」と敢えてそれを関連付けようとしているが、このことは以後の調査で知られるように、配石内に埋甕が穿たれてはいるが、その埋甕を意識した小石組などの集・配石が築かれる例は埋甕08に認められるに過ぎず、直接の関連を求めなくても良いように思えるのである。

本埋甕は実測図に見るように地山より露出する0.5m～1mに及ぼうとする溶岩礫を縫うように構築されており、この部分より地形の傾斜によってこぼれるように礫が散乱しているのである。掘り方は径0.6mの若干楕円形で、深さは0.25mを測る「U」字状の断面をもつもので、その壙底に土器1202（加曽利Ｅ４式）を逆位にして口縁部を隙間ないように納めるが、それは全周の３分の１程を欠いているものである。従って欠損する側を壙側面に押しやるようにするため、埋甕の位置は壙の中心よりそちら側へズレている。またこの使用土器は胴下半を欠くが、この割れ口には磨かれた痕跡も認められ、逆位に対する意識は埋納当初より意識されていたようである。このような例は曽利１式土器を使用した埋甕02にも認められるもので、時期・型式差を超えた共通行為として知れているものである。

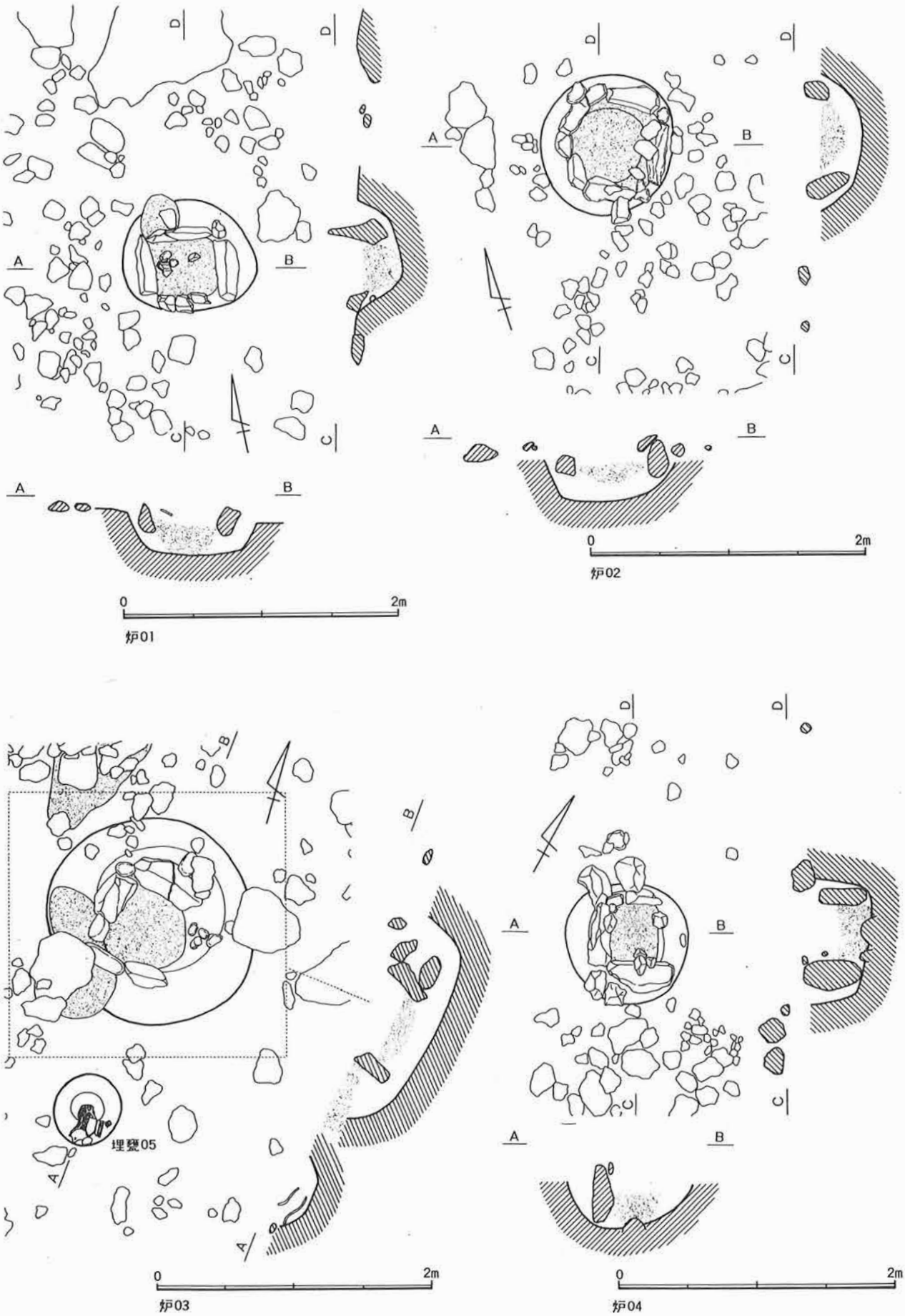
焼土を内包する土壙01（図－135）

焼土を内包する土壙01は第Ⅱ調査区の南西隅に位置し、東側に１m程すると３mを超える大規模な焼土跡が存在し、北側に１m程するとやはり焼土に覆われた埋甕06が存在している。先に述べたように埋甕や配石だけでなく焼土の跡も異常に密集している部分である。土壙の規模は長径1.0m、短径0.9mの南西～北西に長い楕円形で、深さは0.4mを測り断面は「U」字状で容量に富むものとなっている。壙内の３分の２程に黒色系有機質土層で占められるが、その上部は0.15mの厚さで焼土が乗り、それには拳大の礫も10数個含まれている。そしてそれを覆うように0.7×0.6mの扁平巨礫が置かれているものである。この状況を見ると壙と焼土、そしてこの巨礫は完全に相互関係をもつものと理解される。つまり、このことはこの土壙を穿って何らかを埋納するために焼土や礫が準備されていたことであり、こうした行為のあり方は隣接する埋甕06にも共通したものでもあり、ひいては曽利３式期に配された遺構全体に及ぶ共通性とも言えよう。

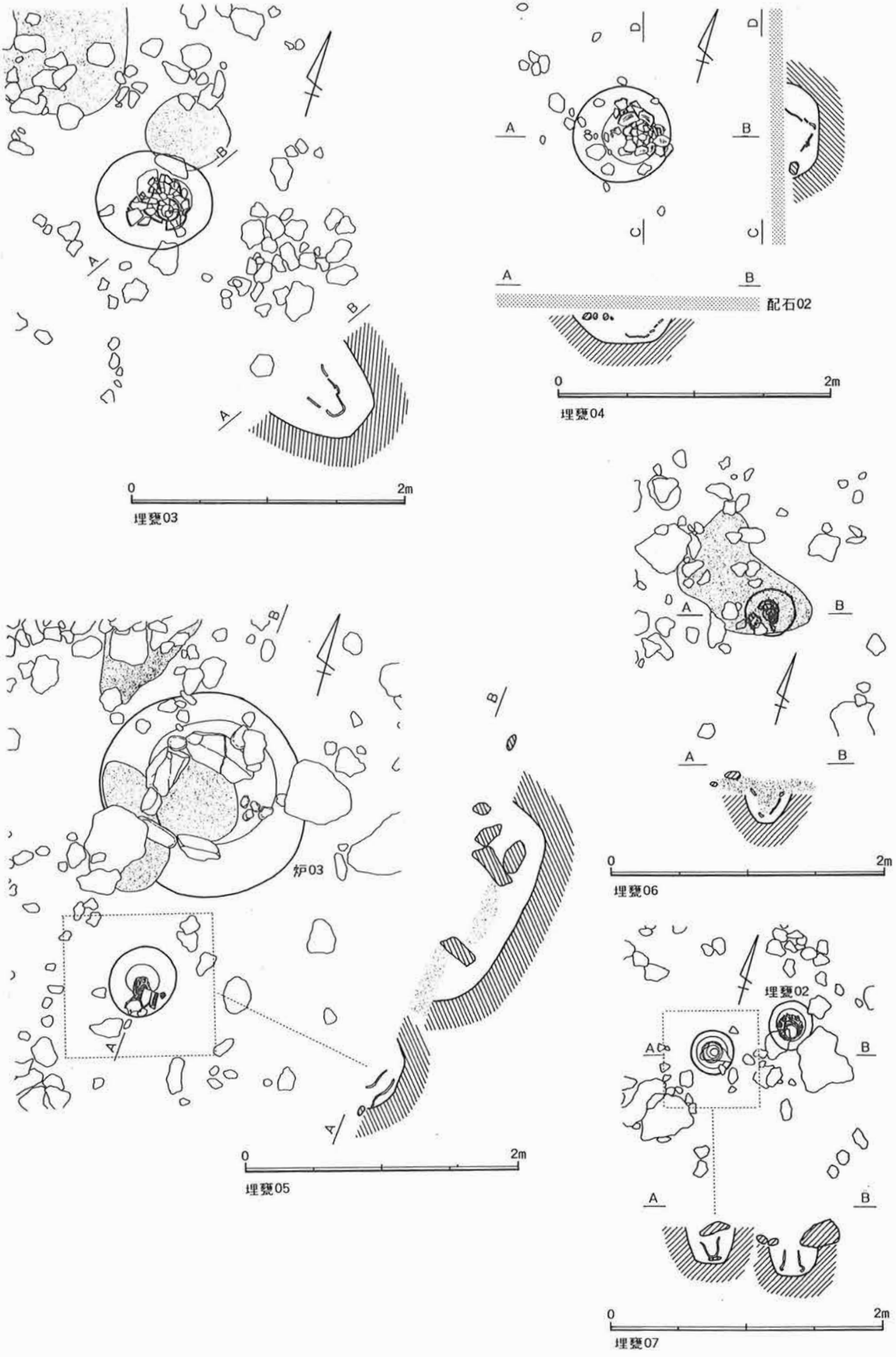
焼土を内包する土壙02（図－135）

焼土を内包する土壙02は第Ⅲ調査区の中央北寄りの位置にあり、南東側へ３m程向かうと埋甕08.09が存在するが、その関係は知られていない。土壙の規模は長径0.85m、短径0.6mの不整の楕円形状で、深さは0.25mで断面は椀状を呈している。この土壙の焼土は検出時より壙内から溢れ出たように充満しており、その範囲は0.9×0.7m程であった。そしてそれは土壙の底面近くまで及び、またそれは拳大程の礫を20個以上含んでおり、焼土を内包する土壙01と同様の性格を判断するに至ったものである。その01に混在する礫の観察はなかったが、本土壙の焼土に混在する礫には火を受けた痕跡はなく、土壙壁面も同様であったとし、調査区内に焼土の存在が全くないことから他所からの移設の可能性を説いている（注５）。

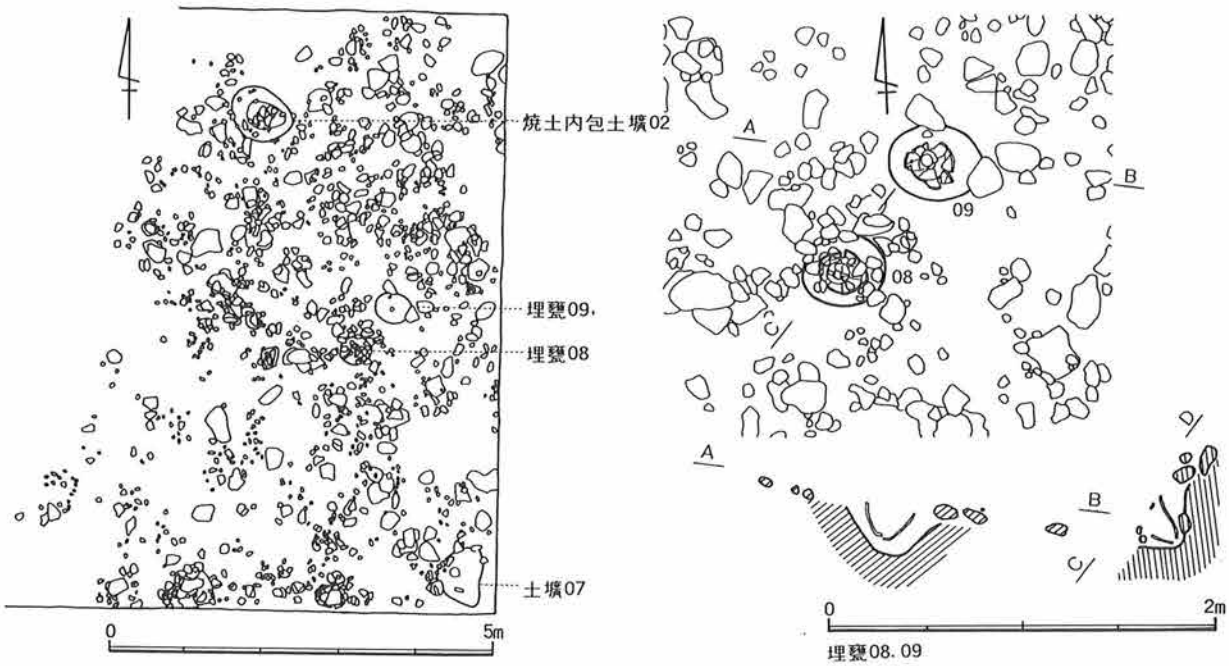
とにかく調査区が狭いため判断される部分は少ないが、確かに周辺や隣接する埋甕08.09に火の影響を見ることは出来ず、それを曽利３式期と５式期の埋甕や配石全体の性格の差とすれば、焼土を内包する土壙02はその構築上の類似性から、曽利３式期の構築であった可能性も高く、その付近に新たな曽利３式期の配石の存在も予想されるのである。



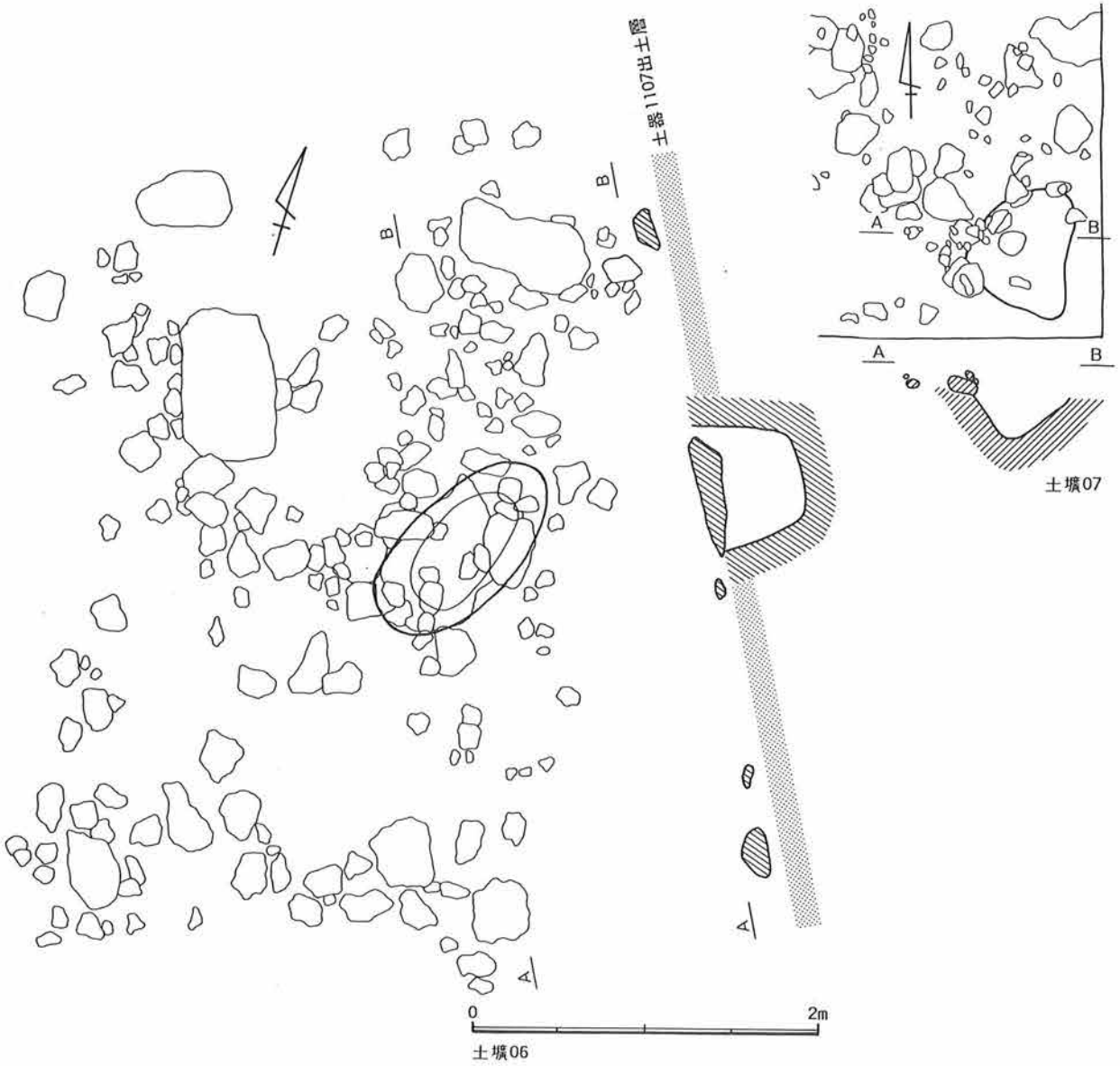
図－132　縄文第３面遺構実測図－２



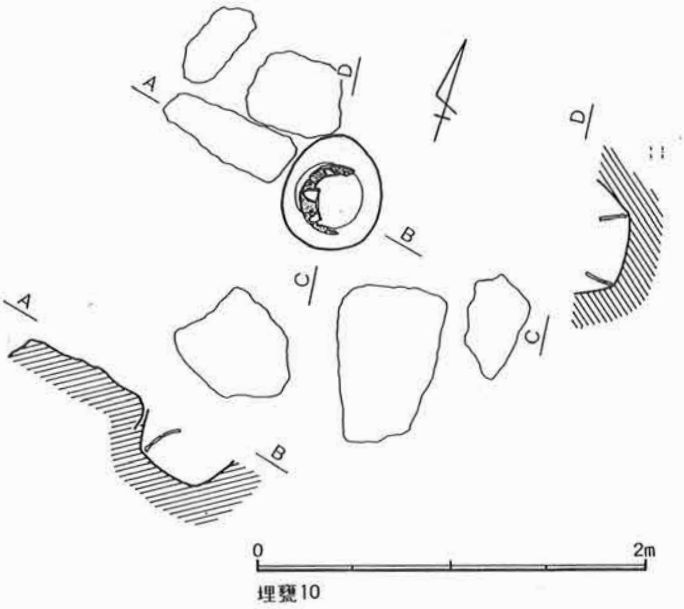
図－133　縄文第３面遺構実測図－３



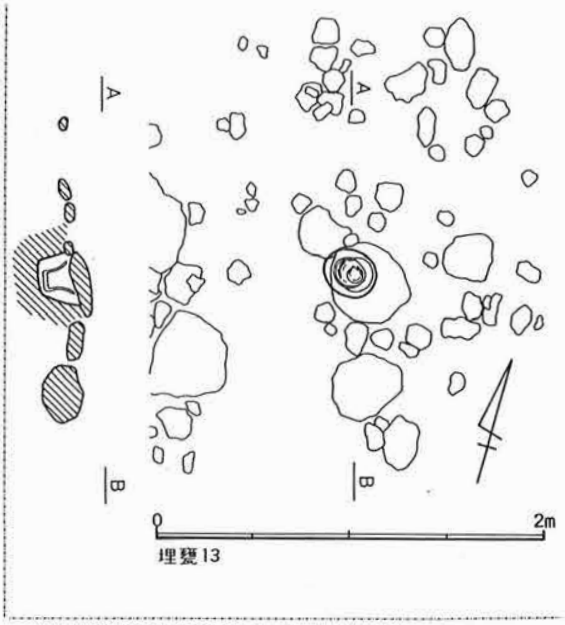
縄文第３面第Ⅲ調査区全体図



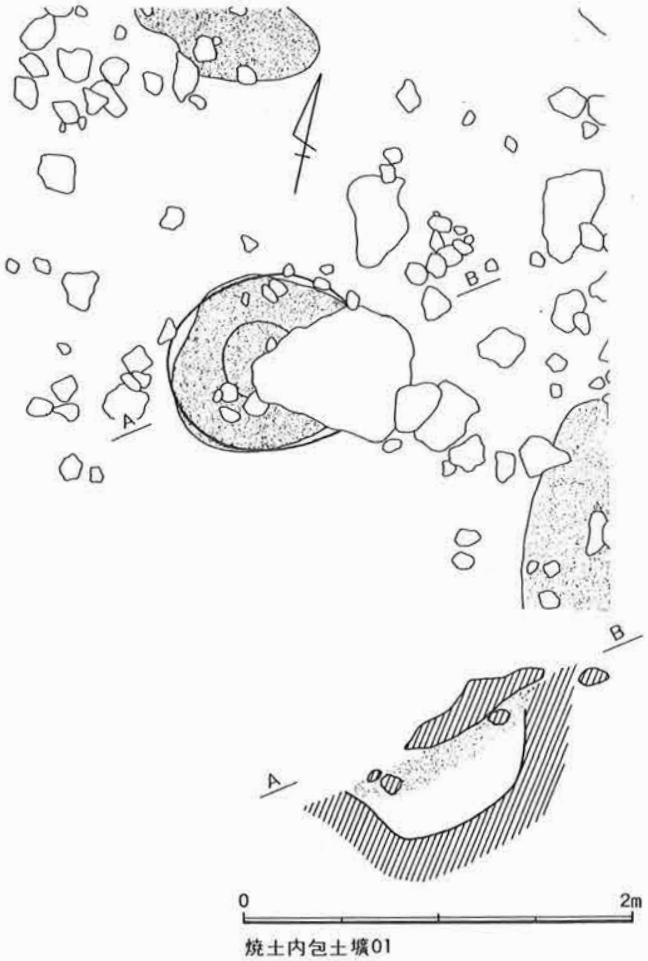
図－134　縄文第３面遺構実測図－４



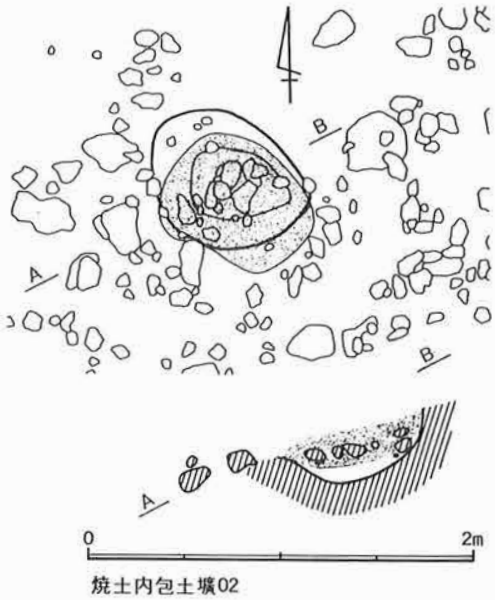
埋甕10



埋甕13



焼土内包土壙01



焼土内包土壙02

図－135　縄文第３面遺構実測図－５

土壙05（図－130）

土壙05は第Ⅰ調査区の中央北寄りに位置し、南東側に3m程向かうと中央に位置する密度の濃い集石域に接するが、それとの因果関係はなく、むしろ第Ⅱ調査区を中心とした大円形配石の外輪を形成する配石のなかの一部と判断することが可能と思われる。先に述べたように埋甕10の付近の礫が自然の転石であるとして、それを除去するとその外輪がなおはっきりすることも確かである。規模は長径0.85m、短径0.7m、深さ0.3mの楕円形土壙で、その法量は焼土を内包する土壙に近い。つまり壙としての大きさを踏まえていることであり、こうした土壙が外輪の配石内に配置されることに意義をもっておきたい。

土壙06（図－134）

土壙06は第Ⅰ調査区の南東隅で最も第Ⅱ調査区に接し、遺構も関連したものとなっている。つまり第Ⅱ調査区中央の密度の濃い円形配石に組み入れられたもので、土壙上部から北西側に向けて「C」状とも見てとれる小単位の配石が存在している。この配石下には曽利2式土器が散乱していたが、この出土層を切って構築されているので曽利3式期の土壙として認められるものである。長径1.2m、短径0.65mの長円形土壙で、深さは0.5m、断面は「U」字状で容量に富んでいる。壙上面には長さ0.8mにも及ぶ大形の扁平礫が蓋のように置かれている。壙内には焼土は認められないが焼土を内包する土壙01の構造に類似性がある。

以上のように、これらの土壙のあり方はそれぞれに類似点を持ちながら連鎖するようであり、これを並べると、焼土を内包して蓋石を伴う土壙→蓋石だけを伴う土壙→何も不設のない土壙となり、これが中央円形配石からの外輪の大円形配石に至る間に順を追って配置されることになれば、配石の密→粗、土壙の付設内容の重→軽と言うような『差』を認めることになり、今後に注意すべき重要な事柄となろう。

土壙07（図－134）

土壙07は第Ⅲ調査区の南東隅に位置し、中央に位置する埋甕08.09などとは4m程のところにあるがその関係は不明のものである。一辺が0.7mの不整な三角形状で、壙断面も深さ0.25mで「V」字状となり、歪んだ逆三角錐が適切な表現である。しかし現実的には遺物も認められないなど、このような形状の土壙の存在が一般的であるにはかなり困難な判断が伴うものであり、遺構としての認知には不安がつきまとうものである。

焼土（図－130.131）

縄文第3面bの段階に関わる焼土のあり方はそれぞれの遺構の記述のなかで充分過ぎる程述べてきた。しかしそれでも足りない程この面で焚れた「火」が果たした行為と、それぞれの遺構の関わり合いは我々が気付かない幾つもの残影を残しているに違いないのである。それを知れないもどかしさもあるが、一応ここでその残影としての焼土のあり方を追うと、その配置は全く単純である。つまり配石や埋甕などの遺構と表裏一体の行為をもつことで、中央円形配石に大きな広がりをもつ焼土が集中しており、外輪を形成する大円形配石のなかでは配石規模と同じように小規模な焼土が点在するに過ぎないのである。裏返して言うと、これ程までにこの円形ならびに大円形配石と関わりをもつ焼土は、その性格を裏付けるようにこの遺構の外域には全く存在していないのである。

3．縄文第3面cの遺構（図－136）

縄文第3面cの遺構は第Ⅴ調査区の全域から第Ⅱ調査区の東側に及ぶ出土状況を見るが、この遺構面を主体的に形成する堀之内式期の土器分布は第Ⅰ調査区にも尋常な頻度で出土しているから、そこに限られたものではないことは確認しておきたい。つまり、これはこの下層面に重複する縄文第3面bの遺構の主体も配石であるために、それを分離するためには困難を伴い、ここでは一応埋甕の位置的な掌握と配石の違い、さらにそこに特徴的であった焼土が配置されない部分を拾って、上記の分布を描いているのである。

縄文第3面cで確認される遺構
埋甕11～13
配石土壙02
配石02.03

埋甕11（図－137）

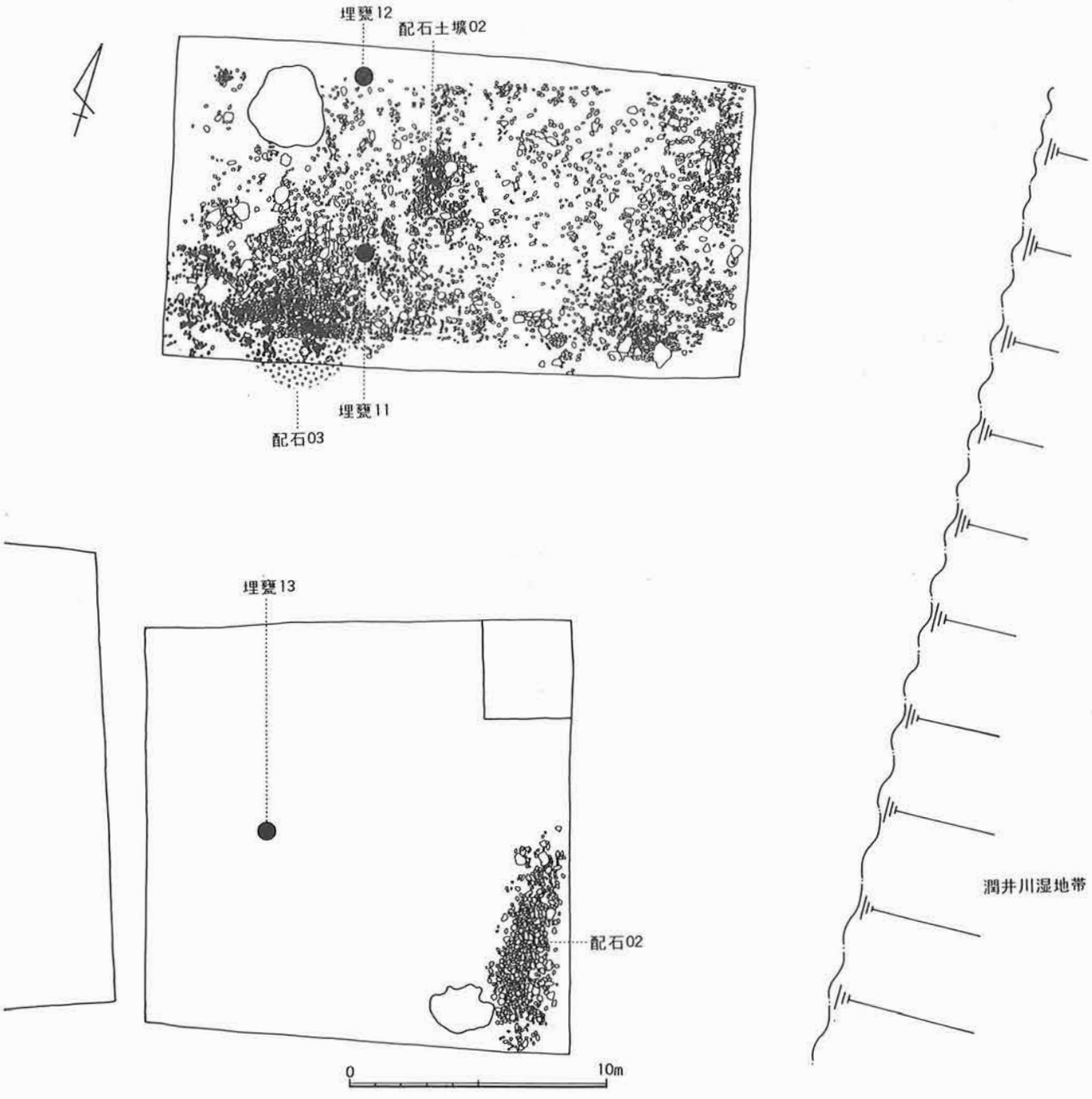
埋甕11は第Ⅴ調査区中央南寄りで、配石土壙02と配石03の間に位置している。埋甕12とは北側に7m離れている。掘り方は長径1.0m、短径0.8mの卵形で、深さは0.4mの少し角張った「U」字状である。埋設される土器（1501）は堀之内1式の大型鉢形土器で、壙底面に底部を接するように正立して置かれている。北東側の4分の1程を欠くが、その部分は径0.2m程の礫で

補修するように塞ぎ、また口縁部も同様の礫が置かれている。土器内には黒色の有機質土と白色の粉粒（人骨？）が混在し、その礫のあり方は土壙上部に置かれていたものが内部の黒色土の収縮と共に土器の枠内に侵入してきたものと思われる。また土器内部と欠損部分には曽利５式土器が補修するように重ねられており、このことは埋甕11の構築時における周囲の遺構の重複の激しさを知ると同時に、それに使われた土器片など過去の遺物に対する使用意識も今後の検討次第では興味深いものとなろう。

この埋甕11も先に述べたように上部にはこれを意識したような配石行為は見られない。しかし西側に位置する礫の集中部分には赤色礫や石皿片などが目立ち、さらに1.5m西側のところには硬玉製大珠も出土するなど祭祀的な行為に同調していたであろうことは知ることができる。

埋甕12（図－137）

埋甕12は第Ⅴ調査区の北側調査区境の中央付近で埋甕11の北側７mのところに位置する。弥生時代遺構が深く重複している部分でもあるが、礫の集中度合いは当初より薄い一帯であったと思える。径0.3m、深さ0.25mの円形で「U」字状の、埋設土器1535（堀之内１式）に隙間なく合わせたような掘り方を穿っている。



図－136　縄文第３面ｃ遺構全体図

無文土器を使用するが、土器内部の黒色有機質土（やはり白色粒子を含む）に堀之内１式土器1512の破片が混じっていたものである。いわゆる無文の粗製土器を使用する埋甕の実体とそうしたものが配石外縁に位置るあり方に注意を払っておきたいものである。

埋甕13（図－135）

埋甕13は第Ⅱ調査区の中央西寄りで、縄文第３面ｂの炉02、埋甕02.07、さらに配石の最も密集する部分に重複して検出されるものである。使用される土器1538は堀之内２式の小型鉢形土器で、直接第Ⅴ調査区の埋甕群とは併存しないものであり、また近隣には後述する堀之内１式期の特徴的な密度濃く集石されるような配石は見当らず単独的な出土位置にある。縄文第３面ｂの配石の間に径0.3m、深さ0.15mの円形、「Ｖ」字状の断面をもって穿たれた掘り方は埋甕12と同様に埋納土器の法量を合わせたようでもある。そこに正立して置かれる土器の上部には土壙を完全に覆ってしまう程の長さ0.4m強の扁平礫が置かれ、口縁部と礫は接しているようであるから埋納時よりそうした形で置かれたものと思われる。このように埋甕と封鎖する礫が一体化しているものには埋甕07（曽利４式）があり、共通した意識が感じられる。なお、埋甕07には土壙底部にも扁平礫が敷かれている。

配石土壙02（図－138）

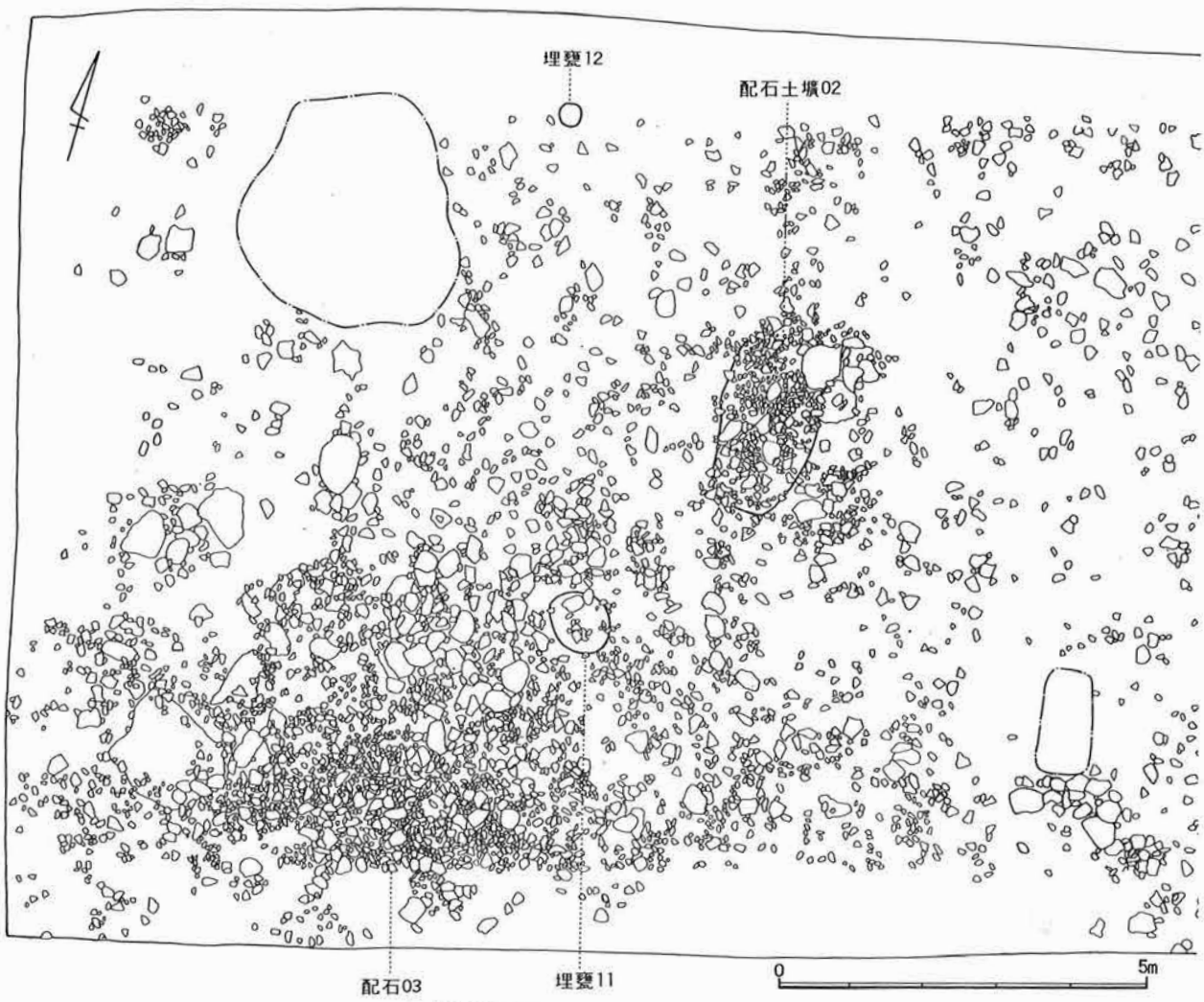
配石土壙02は第Ⅴ調査区の中央で配石03の６ｍ程北側に位置している。その間の３ｍ程のところに埋甕11が、北西側にはやはり３ｍ程したところに埋甕12が位置しており、その中間にあると言えるが、直接的な関係は把握されていない。南北に軸をもつ4×2m程の拳大の礫を主体にした密度の濃い集石状の配石下に長径2.4m、短径1.3mの若干不整の長方形土壙が穿たれている。土壙内には上部配石によりさらに小振りな礫が集中して詰まっており、礫内には少量の炭化物と２ヶ所に0.15m程の焼土塊も認められる。これは無論この土壙内で焼成されたものではなく、他所から移されたものである。そうした点では縄文第３面ｂの土壙に似るが、焼土の量が完全に違っており、それを焼土を内包する土壙と称すれば、本土壙は礫群を内包する土壙と称するのが適切な程である。また遺構番号は02であるが縄文第２面の配石土壙01とは全く性格の違うものである。この上部配石と下部の土壙に積まる礫を詳細に観察すると、上層から下層に従って西側から東側にズレ落ちるように流れ込んだ形跡が窺え、このことはおそらく土壙構築当初には壙内に礫以外の空間があり、それが収縮したことによって、上部に積まれた配石が傾斜に沿って壙内に沈み込んだものと捉えることができるようである。

配石02（図－131）

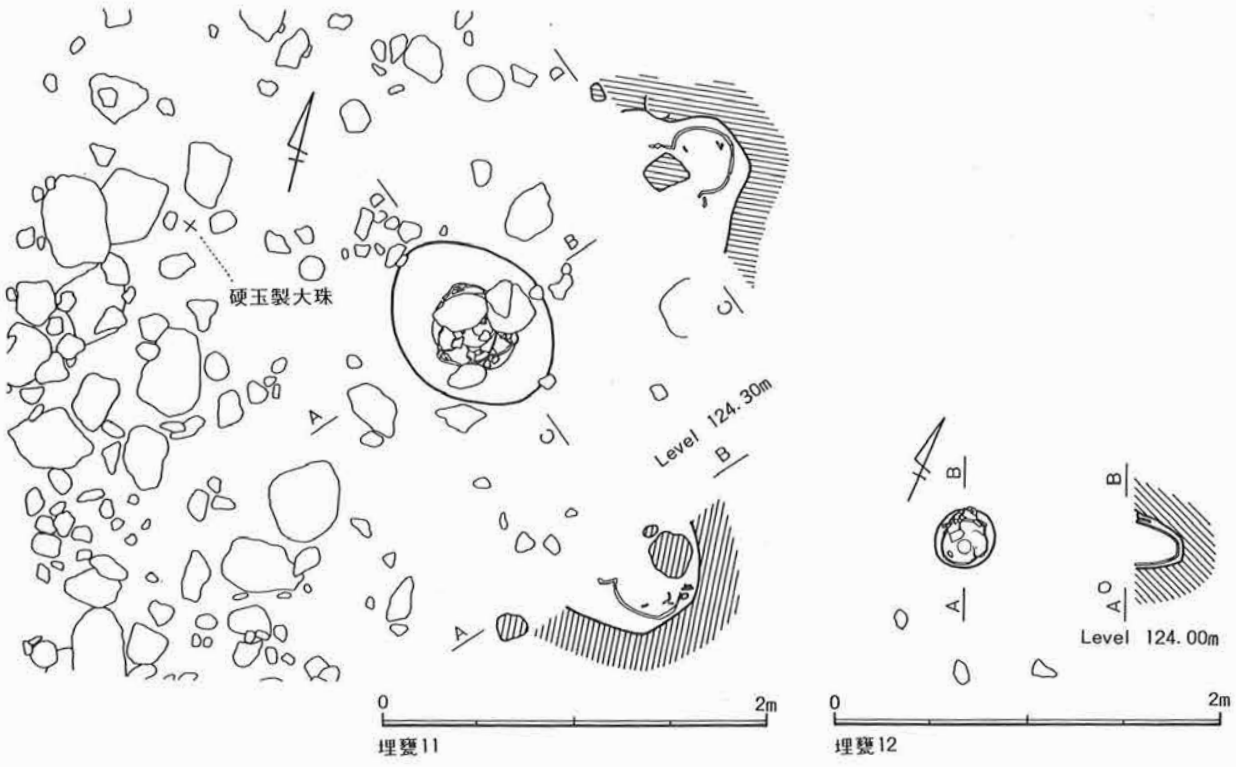
配石02は第Ⅱ調査区の東隅に南北に軸をもって長さ７ｍ、幅2.5m程の範囲で集石された列状配石である。人頭大を少し小振りにした礫から拳大を主体にして密度濃く集石する状況は配石03、配石土壙02に共通している。第Ⅱ次調査時に検出されたものであり、それによれば「それは比較的大きさの揃った人頭大礫を、上下２段に築成して、伴出する土器、石器類の量も少なく、西側の小石組の集合部とは明らかに違った様相が目立つものであった。」として、すでに形態の違いを指摘している。ここではやはり堀之内１式期の配石形態と共通するものを認めることができるし、上下２段の築成という観察は積み重なる集石のあり方を示すもので、配石土壙02にも通ずる可能性もある。何故ならば下層遺構（縄文第１面）の追求のために発掘された部分にも他所に比して上層より連続すると思われる若干の密度ある配石が認められるからである。

配石03（図－139）

配石03は第Ⅴ調査区の南側調査区境の西寄りに円形を予想される遺構の半円部が検出されるものである。これより西側は溶岩流が露出し１ｍを超すような大形礫の周囲にはそれからこぼれる転石が配石状となって見られるが、これは自然現象として理解され遺構の絶断として考えて良いものと思われる。本配石に隣接する遺構は北東側外縁部に埋甕11が存在し、その横には硬玉製大珠の出土もあって、これらの遺構的なつながりも興味が持てる。それより外方は確実に礫の分布は粗になって５ｍ程北東側に向かって配石02に達する。配石は東西４ｍ、南北1.5m程の半円状で確認され、その構造は内部を拳大の礫で0.3m以上に積み上げ、その外面を人頭大の扁平礫で覆うものである。現状では自然崩壊のためか、この大形扁平礫が縁部側に崩れ落ち、外側に0.5m程円形の法量を足している様子が断面状況から見てとれる。そしてこの配石最下層には上層配石と全く異なった滑らかな偏球状の河原石が列状に配置され、可能な限り拡張した2×1m程の発掘区のなかでは６個が「冂」状に並んで、それらは上面のレ



縄文第３面第Ⅴ調査区西側全体図



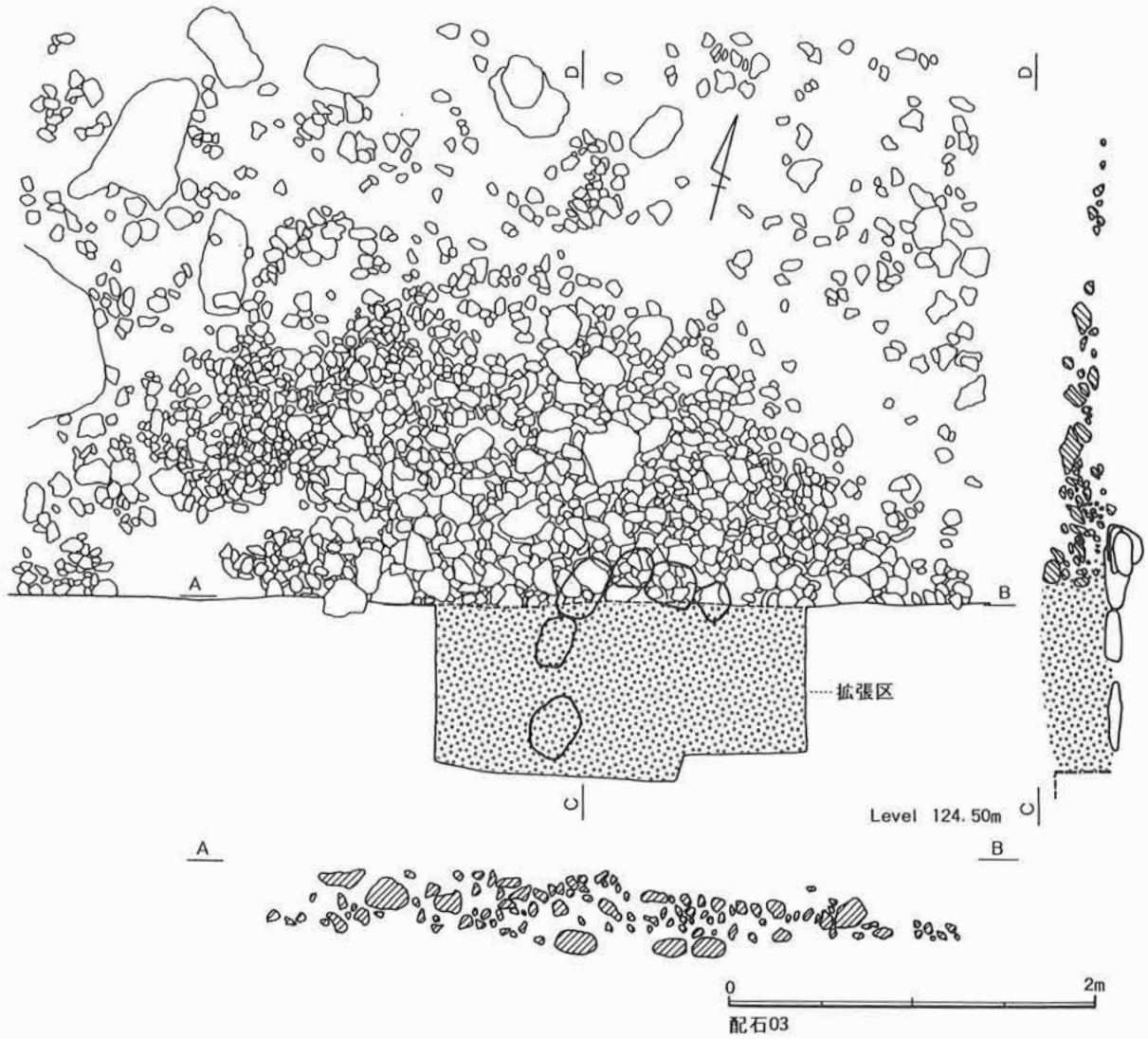
図－137　縄文第３面遺構実測図－６

図－138　縄文第３面遺構実測図－７

ベルを合わされるなど、その配置にはかなりの意識を感じ取れるものであった。その囲まれた内部は土壙状に窪むものではなく平面的であるが、この配石プラン外側より上層配石の最下面が上がっていることから、配石プランで土壙状の窪みが施されていた可能性は高いものと思われる。つまり、これをまとめると先ず、1.5m程の方形土壙が穿たれ、それに扁平河原石を「冂」状に配し（確認される中で）、それを小礫から徐々に大きさを増す礫で覆って行き、最終的には積石塚様の配石となったものと思われる。この最下層の配石のあり方は修善寺大塚遺跡（注６）などの配石囲繞方形竪穴家屋址に並ぶ河原石を彷彿させるものであり、同様の礫の配置をもつ土壙も富士市天間沢遺跡（注７）で確認されている。

以上、滝戸遺跡における市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う一連の調査で知れた縄文時代の遺構の記述を終える。それにはまだまだ小単位の石組の分析も必要であったと思われるが、再々記述するように激しい重複関係のなか配石の性格もあって、その帰属を追求することは困難なことが多く、限られた情報のなかで滝戸縄文時代の変遷を紐解くためには、面的な拡がりを求めることのできる確実な遺構を把握しておきたかったためである。

注1. 富士宮市教育委員会 1978 『滝戸遺跡(第Ⅱ次)概報』
注2. 加藤学園考古学研究所 1975 『千居』
注3. 中伊豆町教育委員会 1979 『上白岩遺跡発掘調査報告書』
注4. 富士宮市教育委員会 1977 『滝戸遺跡(第Ⅰ次)概報』
注5. 富士宮市教育委員会 1980 『滝戸遺跡(第Ⅲ次)概報』
注6. 修善寺町教育委員会 1982 『修善寺大塚』
注7. 富士市教育委員会 1981 『天間沢遺跡Ⅰ』



図－139　縄文第３面遺構実測図－８

Ⅲ. まとめにかえて

－縄文時代の変遷を追って－

滝戸遺跡が有力歴代遺跡（中核遺跡）として本地域の縄文時代形成に重要な役割を果たしてきたことは幾多の文献によって語られてきている（注１）。この長期間に及ぶ継続の様子を本調査における土器の出土状況（口縁部破片数）から時期別に拾ってみると以下のとおりである。　　（胴部）

時　期		型式名	出土数	%
早期	前半	縄文土器	(2)	－
		無文土器	15	
	後半	－－－－	－	－
前期	前半	清水ノ上	8	－
		木島	(1)	－
		関山	(2)	－
	後半	諸磯	2	－
中期	前半	五領ヶ台	141	4
		北裏Ｃ１	45	1
		勝坂	364	10
		北屋敷	37	1
	後半	曽利	710	19
		加曽利Ｅ	181	5
後期	前半	称名寺	106	3
		三十稲場	3	－
		堀之内	1,016	43
		縁帯文系	23	－
		付加条縄文	493	13
		加曽利Ｂ	36	1
	後半	沈線文系	1	－

先ず、これを概観すると、早期前半の撚糸文系土器群後半に併行する縄文施文の尖底土器の出現から始まり、高山寺式土器併行の無文土器の段階では一定の生活空間をもったようである。地域的には若宮遺跡（注２）が初現となった後、富士根地域や羽鮒・星山丘陵にポイント的に出現する遺跡と歩みを同じくしたようであるが、その後の条痕文系土器群の段階では遺跡を無くしている。つまりこの段階では比較的斜面が好まれた占地条件のなかで、滝戸遺跡の解放的な舌状台地は時期的に不利な条件にあったためのことと思われるが、これが逆に中期の発展を生む１つの条件になったことは言うまでもないことであろう。

前期前半になるとこの地域一帯は木島式や清水ノ上式土器が発展的となり、潤井川対岸の出水遺跡、箕輪遺跡、滝の上遺跡（注３）などと共に活発な活動を展開して、それは滝戸渓谷沿岸の第Ⅳ調査区まで広域的な分布を見る。しかしこれ以降関山式から後半の諸磯式土器の段階には富士根地区に代官屋敷遺跡（注４）がその後半に貧弱な姿を見せるだけで文化は停滞してしまい、滝戸遺跡も殆ど動きは見られなくなってしまっている。

そして中期に至り、この地域の新しい成長の先駆として五領ヶ台式土器が急速に力を付け、滝戸遺跡でも前期後半までの停滞を脱したかのように活発な活動が開始され、確実に以後の繁栄への基礎が作られている。対岸の上石敷遺跡（注５）でも五領ヶ台式土器の豊富な出土がありそのエネルギーを感じ取ることができるが、そこも前期前半に途絶えた文化が再燃焼したものであり、この断絶と継続はこの地域の特色か興味の持たれるところである。五領ヶ台式土器の後を受け継いだ勝坂式土器は早い段階のものはあまり目立たないが最終段階になると曽利１式土器と共に勢力を拡大して、滝戸遺跡にもはっきりとした生活領域を形作ってくる。この後における曽利式土器の段階的な発展は言うに及ばず、この時に中核遺跡から発展拡散していった遺跡の姿は市内の縄文遺跡の時期別分布からも見て取れるのである（重複遺跡も含む）。

時　期	遺跡数	%
早　期	21	15
前　期	15	11
中　期	69	48
後　期	34	24
晩　期	3	2
計	142	100

この数字は先に述べるように早期に発生した遺跡が以後の文化の地形条件に合わずに消滅していった事実が前期の遺跡数として表れ、そしてその前期前半に足跡を残す遺跡に中期初頭の文化が再発生することが本地域の中核遺跡の成り立ちのひとつの過程であるとすると、大まかにはその数が発展拡散以前の中期遺跡の数と言うことになり、１遺跡より4.6遺跡が拡散していたことになるのである。しかし、この拡散も終末期には千居遺跡（注６）で見せるような撤退を余儀なくされたらしく、この状況を曽利遺跡を擁する長野県諏訪地方の縄文遺跡時期別分布（注７）に照らし合わせるとすると、なおはっきりする。

時　期	遺跡数	%
早　期	70	9
前　期	132	18

中 期	431	58
後 期	90	12
晩 期	22	3
計	745	100

つまり、そこでは後期の減少幅はなおも大きく完全に曽利式土器によって築かれてきた文化は終焉を迎えた状況が見て取れるのである。

この退化現象を滝戸遺跡が被ったことは当然のことであり、後期初頭の称名寺式土器の段階の収縮はそれを如実に表している。しかし、本地域の後期における遺跡の減少は中部山岳地方程ではなく2遺跡中1遺跡、つまり2分の1の遺跡は継続されているのである。このことは称名寺式土器の収縮が退化によるものではなく、新たな遺跡の再編成としての布石として考えるべきで、次の堀之内式土器への形式的な繋がりを持って爆発的な繁栄を生むエネルギーの温床となっていることは確かであろう。それが中部山岳地方で完全に途絶えた文化の移行によって、この地域に新たな文化を創造しようとする活力ある数字として表れているかは判断しようにもないが、ともかく中部山岳地方の過疎化に反するような堀之内式土器の段階のこの地域の発展の様子は滝戸遺跡より出土する土器の50%にも及ぼうとする出土量からも充分に知れるのである。

そしてその数はおよそ曽利式土器の占める割合の2倍であり、これが先に拡散して消滅していった2遺跡のうちの1遺跡の足された部分であるとすると、そこには単純に考えて2倍に拡散したものが2分の1に凝縮しようとする意識を感じない訳でもないのである。つまり、これは繁栄を外に向かって拡散させようとする遺跡経営から繁栄を内に留めようとする遺跡経営の変革が中期から後期の間で行われたためのことであったかも知れず、またそれ故に後者の遺跡経営が機動力を失ったものとなり、堀之内2式から加曽利B1式土器の段階で発生した『有事』に対応できないまま、この地域の文化の終焉を迎えざるを得なかったと言えるかも知れないのである。

以上、出土土器から知れる滝戸遺跡の概観を終えて、次に本調査で知れた遺構の変遷を重ねて行きたいと思う。

遺構は第Ⅱ次調査で明らかにされた富士黒土層、栗色下層、栗色上層の3面に亘る検出面を基本にして、縄文第1.2.3面、さらに縄文第3面a～cに細分されて、計5面の詳細について述べてきたものである。これをまとめると本調査における縄文遺構の変遷は以下の流れを見ることができる（図－140）。

遺構面	時期	遺構
縄文第1	早期前半	配石
↓	－	
縄文第2	勝坂3･曽利1	配石・埋甕・土壙
縄文第3a	曽利2	竪穴住居群
縄文第3b	曽利3	配石・埋甕・土壙
	曽利4	埋甕
	曽利5	埋甕
↓	－	
縄文第3c	堀之内1	配石・埋甕
	堀之内2	埋甕
↓		
↓	B.P2700年大沢ラピリ層(富士火山灰)降下	

そしてこの後弥生中期の断絶を経て、後期に至り竪穴住居群、方形周溝墓群、さらに古墳時代中期に古墳群が築かれて行った滝戸遺跡の変遷は先に述べる弥生時代以降編で詳しい。

縄文第1面（早期前半）

縄文第1面は高山寺式土器に併行する無文土器0201を「C」状に配した石組のなかに置いた配石01によって形成されるものである。第Ⅱ調査区の南東寄りにあって、北側の環状に続く配石を人為的な遺構として認めても10mに満たない範囲でのポイント的な占地形態にあるもので、これは黒田向林遺跡（注8）や、小松原A遺跡（注9）などにも認められる当該期特有の占地形態によるものであろう。また同様の配石は沼久保坂上遺跡（注10）にも認められるなど遺跡相互の共通性を知ることもできるが、羽鮒丘陵側だけでなく、潤井川対岸の若宮遺跡・代官屋敷遺跡など、富士宮市を代表する早期遺跡などを含めた当該期の大半の遺跡が、標高120m前後の等高線上に並ぶ占地形態の特殊なあり方が小松原A遺跡で指摘されている。

他に縄文施文の尖底土器や有舌尖頭器の出土もあり、配石01を構築する以前の生活の跡も窺えるが、先に挙げた遺跡と同様に土層堆積状況を見ても旧石器時代まで遡れる条件は整っていないようである。

縄文第2面（勝坂3式・曽利1式期）

縄文第2面は勝坂3式と曽利1式の深鉢形土器を使用した埋甕と配石、さらに土壙によって形成されるものである。第Ⅱ調査区の東側を除いた全域と第Ⅰ調査区の東側部分のおよそ20mの範囲にそれらの遺構を見

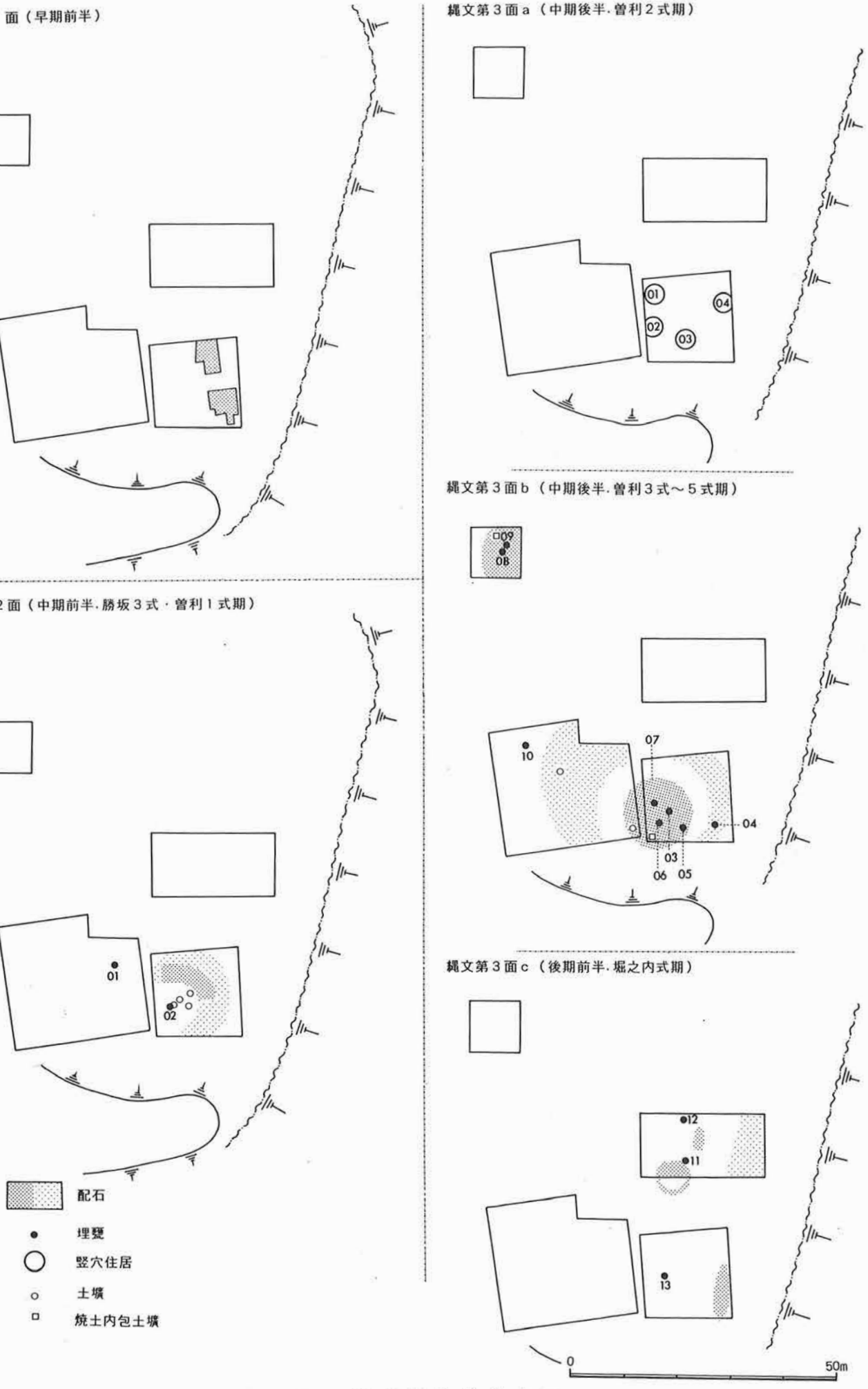
縄文第１面（早期前半）

縄文第３面ａ（中期後半.曽利２式期）

縄文第３面ｂ（中期後半.曽利３式～５式期）

縄文第２面（中期前半.勝坂３式・曽利１式期）

縄文第３面ｃ（後期前半.堀之内式期）



図－140　縄文時代遺構変遷図

I 期 勝坂3式
曽利1式

01(1001)

02(1110)

II 期 曽利3式

03(1124)

04(1125)

05(1128)

06(1129)

III 期 曽利4式

07(1133)

IV 期 曽利5式
加曽利E4式

08(1136)

09(1142)

10(1202)

V 期 堀之内1式

11(1501)

12(1535)

VI 期 堀之内2式

13(1538)

図－141　埋甕変遷図

るが、第Ⅲ．第Ⅴ調査区にも当該期の土器の出土はあり、外縁部として遺構との関わりはあったものと思われる。

全体的な配石の状況は第Ⅱ調査区の中央北東側に10m程の長さで弧状となった密度の濃い配石が位置し、その外域を極薄い配石が20m程で点在する。しかしこれは意識をもったものかはっきりせず、配石の外縁も同じように曖昧である。むしろ密度の濃い弧状の配石は南西側の地山の高まりと対峙するようであり、その間の礫の点在は考えなくても良いように思える。これら中央の密度の濃い配石を詳細に見ると0.1～0.3m程の比較的小さな礫を2×3m程の規模に配したものが多く、こうした小石組が10数基確認されるようである。またそのうちには径0.5～0.9m前後の大礫３個を中心に径0.1～0.2m前後の小礫をケルン状に積み上げた「ケルン状石組」と称する特徴的な配石も２～３ヶ所に見られ、このような小単位の配石の組み合わせがこの面の配石の特色と言えるらしい。

そして、この弧状配石の内側にできる空白を利用して６基の土壙が築かれているのである。この土壙の詳細は遺構編を参照されたいが、それらは長径1.2～1.7mの規模で深さも充分に持った容量に富むもので「壙」と呼ぶにふさわしく、第Ⅱ次概報においてもはっきりと「小単位配石の空白部に土壙が存在する関係は配石遺構が墓地である証拠と言える。」とするものである。また、この土壙埋没後には殆ど時間を置くことなく埋甕02が穿たれるが、このような埋葬方法の違いを超えてまでこの場所に壙を穿とうとする行為はかなり墓域に対する意識が高かった故のことと思われ、上記の墓域の指摘は的を得たものと言えよう。

この埋甕02の北西側に15m程離れて埋甕01が穿たれている。この埋甕01は拳大の礫１個と土器1001が完全な破片の状態で埋納されているもので、それは土器の中に何かを入れて埋納しようとするよりは、土壙自体にそれらを埋納したものとする方が適切な表現であり、距離的な位置関係から見てもこの両者の性格的な併存の可能性は少なかったように思える。むしろこの状況は埋甕01が位置するところより南東側に向けて６ヶ所程で並ぶ一括土器群の破片状況に似たものであり、これらが掘り方をもたないものであっても協調性は充分に感じ取れるものである。とすれば、これら被破壊土器とも言える一連の土器の並びが、配石や土壙の作る墓域と関連したものであるかどうかが問題として浮上するが、現段階では配石の空白部分の北西側を塞ぐ様な形を取っているようであるとして、今後に注意を払っておきたい事柄のひとつにおきたい。

なお、このように土壙を持たず平面的ななかに土器が単独で破片となって出土する例が猪之頭養鱒場内遺跡の勝坂３式土器（注11）、勝坂３式土器と曽利１式土器が集合されていた箕輪Ａ遺跡（注12）などにあり、このような土器の遺存状況がこの時期の特殊な土器の廃棄行為につながるものかこれもまた興味がもたれるところである。

縄文第３面ａ（曽利２式期）

縄文第３面ａは第Ⅱ調査区の竪穴住居４棟によって形成されるものである。前後に配石遺構が重複したため竪穴住居のプランの確認は不可能であったが、それぞれの炉を中心に径４m程の円形プランを描き、その４基の円形プランが円弧に配置して作る径10m程の広場の景観は縄文中期集落の一単位集団のあり方にふさわしいものと思われる。

そしてこの４棟のうち、炉02による竪穴住居の営みが他の３棟より若干早く開始されていたであろうことが炉構造の違いなどから知れ、そのひとつに炉坑に残る焼土のあり方がある。つまり残る３基の炉坑の焼土はいずれも同じように撹拌されたようなフカフカの状態にあり、竪穴住居のなかで通常に使用されて残る焼土のあり方とは異なり、その状況は他所からの移入を予想するに充分なもので、事実第Ⅱ次調査ではこれをすでに祭祀行為のひとつとして配石遺構のなかに組み入れているのである。

それは周辺に散在する焼土数ヶ所の存在からも火に関する祭祀行為が行われていたであろうことは想像に堅く、床面レベルで散乱する焼土塊や礫群はこれら消失家屋に対する一種の廃屋祭祀としても考えられ、この行為と併行するように埋甕第Ⅱ期（図－141）を伴う縄文第３面ｂの配石が築かれて行っているのである。

縄文第３面ｂ（曽利３式期）

竪穴住居の廃絶後、極短い間で配石遺構が築かれることは当該期の日常的な行為であり、本遺跡も例外ではない。この連続した出来事と行為に共通していることは「火」であり、縄文第３面ｂのあり方はこれに尽きると言っても過言ではない。つまりこの面は20ヶ所以上に及ぶ焼土の跡と焼土を内包する土壙、埋甕を伴う配石、それに土壙からなり、その埋甕にも埋甕03を覆う赤色礫や埋甕06に炉と同様の移入された焼土が詰

まるなど火に関連した行為はあらゆる部分に浸透して、配石の範囲もそれによって知れる程である。

先ず、配石は第Ⅱ調査区中央南西寄りを中心に径15m程の円形配石を見る。この詳細は「0.4m前後を測る大礫（多くは1個あるいは数個）に人頭大から拳大の礫10個を積み合わせて、1.5×1.5m前後を1単位とする小石組を主体にした配石」で20基前後が数えられるらしい。そしてこの配石の間を埋め尽くすかのように広範囲で焼土が散在してなり、前述するようにこのなかに位置する埋甕3基(03.05.06)の焼土による影響も測り知れず、また焼土を内包する土壙01の存在もこの遺構面の特徴をさらに意味付けるものとなっている。

それからこの中央円形配石の外側には幅5m程の空白部分を置いて、外輪を形成するように幅6～7mで径35mにも及ぶ大円形配石が築かれているのである。これは小規模な配石と小範囲の焼土の点在から成るもので、そのなかにはいわゆる何の付設もない一般的な土壙05が穿たれている。ここでこの土壙のあり方に観点を置くと、中央円形配石の中心に近い部分に蓋石を伴って焼土を内包する土壙01が、その外寄りに蓋石だけを伴った土壙05が穿たれ、最も外側に何も付設のない一般土壙05が並ぶ位置関係となり、このことは中央円形配石から外輪の大円形配石に至る配石が「密」から「粗」に、またそれに付随する焼土も「密」から「粗」になるように、土壙の付設内容も配石と比例して「丁重」から「粗末」になって行くことが知れることとなり、この配置の状況をもって第Ⅱ次調査では「採集文化の発展は少なくとも墓地において一定の区別をする必要がある社会を作り出していたらしい（注13)」としているのである。

縄文第3面b　（曽利4式期）

曽利3式期に形成された中央円形配石のなかに埋甕07が穿たれている。位置的にはそれらの配石が機能していた時点での構築と思われるが、出土量全体を捉えても当該期の土器は少なく文化全体に翳りが感じられる時でもある。埋甕は底の部分に扁平礫を敷き、同じく扁平礫で上部を覆うなど他に比べて丁寧な埋納行為が見て取れるものである。

縄文第3面b　（曽利5式期.加曽利E 4式期）

縄文第3面bの最終段階では先の円形配石への関わりは終えたのか、その外輪北西側から5m程外側に穿された埋甕10、さらにそこから北側へ35m程向かった第Ⅲ調査区の埋甕08.09で構成されている。しかしこの埋甕10は転石中に穿たれ、また埋甕08.09は調査区が主体地域より遠く離れている上に調査範囲が狭いなど、広域な配石形状を捉えることは不可能に近い事であった。

従って第Ⅲ調査区のなかの限られた観察しか許されないが、そのなかで見る配石は第Ⅱ調査区の中央円形配石の内容に近いものと言える。しかし焼土の散在はなく、埋甕にもそうした「火」の行為は感じられないなど、そこには時間的な差による配石の内容にも若干の差があることを意識しながら以下のことについて検討してみたい。

滝戸遺跡の校舎増改築による調査区、つまり本報告における石器の出土率は先に再々述べてきたように滝戸渓谷河岸の第Ⅳ調査区（注14）と比べても異常に高い。

（1㎡あたり）

調査区	調査面積㎡	石器出土数	面積別出土比
Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅴ	1,170	961	0.82
Ⅳ	2,000	136	0.07

この原因は両者の配石の集中度にもあろうが、本報告における配石が石器に対して特別な意識をもっていたであろうことは疑いようもなく、特に埋甕08.09の位置する第Ⅲ調査区が71点の石器中35点約49％が打製石斧であり、またそのうちの31点約88％が欠損品である事実はなお特異なこととして受け取れるのである。このような傾向は第Ⅱ調査区の中央円形配石にも言えることであるが、特にこのように欠損した打製石斧が意図的に曽利5式期の配石のなかに組み入れられたものであるとするならば、曽利式文化に忍び寄る衰退の影のなかで、その文化の象徴でもあったとも言える打製石斧による再生への祈りがその配石行為のなかにあったと言えるかも知れないのである。

なぜなら、これを境にして堀之内式期に至ると石錘の出土量が増加してくるなど食料生産に対する変化が事実として捉えられてくるからである。

縄文第3面c　（堀之内1式期）

縄文第3面cの遺構は埋甕と配石、それに配石土壙が挙げられるが、それは下層の縄文第3面bの配石との分離が容易ではなく確実な配石状況の違いをもって抽出したものである。従って抽出されたそれらの遺構が第Ⅴ調査区の全域から第Ⅱ調査区の東側に及ぶような片寄りを見せるが、第Ⅰ調査区にも堀之内1式土器の尋常な出土があるからその部分も範囲に含んだ配石

空間を考えておかなければならないであろう。しかし現実に遺構は急峻な崖の肩の部分に近付こうとしてなっており、また前述するようにその部分に石錘の出土が多くなる事実もあり、崖下の滝戸渓谷やその向こうに拡がる古大宮湖などの水産域へ向けられる意識の高い占地の傾向にあったことは確かなことであろう。

そしてこの縄文第３面ｃの配石や配石土壙は、それ以前の配石が小単位の石組を「並べる」ことで拡がりを求めるのに対して、集中的な礫の密集で「積む」ことに意義をもつようであり、配石土壙02はともかく、配石02.03にも壙が穿たれていた可能性が高いとすれば、それらが単独的な位置関係をもって『特定の人物に対する厚葬(注15)』とする後期の配石のあり方に準じようとしていることは充分に感じ取れるのである。

つまり、配石03の底面に「冂」状に並ぶ滑らかな河原石は周囲に散在する溶岩礫のなかにあって全く異質な輝きをもって成り、それは特定な配石墓としても何ら遜色のないものであり、それを拳大の礫で丁寧に0.3m以上の高さに積み上げ、さらにその外面を人頭大の扁平礫で覆い被せて径４ｍに達しようとする積石塚様の配石の構築に対して、特定なもの以外何も感じ取れないのである。そしてさらに、北側の縁部より出土する硬玉製大珠はその意味付けをさらに強調しようとしているのであり、またその逆に配石03に規模及び埋葬内容が及ばない配石土壙02や配石02のあり方は特定のなかにもそれに及ばない段階のあり方を示唆しているのかも知れないのである。

このようななかにあって埋甕は直接配石には関わりをもたないようであるが、それでもこの配石の及ぶ範囲内にあって埋甕11が大形の典型的な堀之内１式の深鉢形土器を使用しているのに対し、遥か外方で配石域よりはずれた埋甕12が無文粗製土器を使用していることを、配石同様に「特定なもの」と「特定でないもの」とするにはあまりにも偶然過ぎ､そうした可能性もあるとしておこう。

縄文第３面ｃ　（堀之内２式期）

前述の埋甕12と同様に埋甕13が第Ⅱ調査区の中央に単独で穿たれている。周囲には適当な配石は見当らず、その占地のあり方も埋甕12に似たものと思われるが、それ故にこれを「特定でないもの」とするにはあまりにも短絡的で、そこには配石墓として葬られるものと、埋甕によるものに埋納内容の差があった可能性が高く、それは前述の埋甕11.12のあり方にも言えることであろう。

この時期は滝戸遺跡の経営に翳りが見え始める時で、当該期の出土土器も堀之内１式土器の14％程に過ぎなくなってくる。そしてこれに反比例するかのように注口土器が破片の状況となって30点中27点（注口部）が第Ⅱ調査区の埋甕13と配石02の間に集中して出土するのである。この時に配石02の存在が意識されていたかは知れないが、いずれにしても注口土器の被破壊行為がここにあったことは確かで、この行為が遺跡の行き詰まりへの焦燥感によるものであったとするならば、すでに新たな遺構の作出もおぼつかない終末期の状況を呈していたことは確かなことである。

以上、滝戸遺跡における市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う一連の調査で知れた縄文時代の遺構の変遷を辿ってきて見た。しかし、それは戦後の校舎造成、中・近世の開墾、さらに古墳・弥生時代の集落や墓地の構築など、時代を超えてくり返されてきた開発による破壊を免れた配石群とそれに関連した遺構に過ぎず、なおそこに３層から４層に重なる配石もまた古い配石の破壊の上に成り立つものであった。つまり、このような原始の時代より現在に至る開発の歴史が重なり合うなかで、どれ程の遺構がその時々の状況に合わせて記録できたか不安も残るが、校舎増改築事業のみならず、広く滝戸遺跡のなかで今後も計画されるであろう開発に対して、止むなき記録保存のためにもその指標となることを旨に可能な限りその変遷の抽出に努めたものである。これをもって滝戸遺跡の縄文時代の複原の端緒として戴けたら幸いである。

注１．植松章八 1993「富士宮市の遺跡と文化」『富士宮市の遺跡』同教育委員会
注２．富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』
注３．富士宮市教育委員会 1981 『滝の上遺跡』
注４．富士宮市教育委員会 1982 『代官屋敷遺跡』
注５．富士宮市教育委員会 1985 『上石敷遺跡』
注６．小野真一編 1975『千居』加藤学園考古学研究所
注７．戸沢充則 1990『縄文時代史研究序説』名著出版
注８．富士宮市教育委員会 1986『黒田向林遺跡』
注９．富士宮市教育委員会 1989『小松原Ａ遺跡』
注10．富士宮市教育委員会 1985『沼久保坂上遺跡』
注11．富士宮市教育委員会 1994『猪之頭養鱒場内遺跡』
注12．注1に同じ
注13．植松章八 1978 『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅱ次)概報』富士宮市教育委員会
注14．富士宮市教育委員会 1983『滝戸遺跡発掘調査(第Ⅳ次)概報』
注15．塚原正典 1987『配石遺構』考古学ライブラリー49 ニュー・サイエンス社

滝戸遺跡発掘調査関係者一覧

滝戸遺跡第Ⅰ次発掘調査（昭和51年度）

昭和51年７月23日～８月19日

滝戸遺跡発掘調査団

調査団長　若林淳之（静岡大学教授、現.静岡学園短期大学長）

主任調査員　植松章八（県立吉原高校教諭、現.静岡中央高校副校長）

調査員　野村昭光（駿豆考古学会幹事、県文化財保護指導員）

佐藤政次（富士市立岩松中学校教諭、現.富士市立須津中学校教諭）

渡井一信（静岡県考古学会会員、現.富士宮市教育委員会）

湯川悦夫（神奈川県小田原市立鴨之宮中学校教諭、現.同県立大井高校教諭）

加納俊介（東京教育大学大学院、現愛知大学講師）

調査参加者　中西道行（現.清水市教育委員会）.足立順司（現.〈財〉静岡県埋蔵文化財調査研究所）.幡野博之.渡辺康弘（現.清水市教育委員会）.望月茂昭.小豆川裕男.監物京子.佐野篤子.塩川浩正.石川安夫.福島裕.山田繁治

調査協力者　小川賢之輔（富士宮市域自然調査研究会特別研究員.昭和59年～）

市立富士宮第三中学校教職員、生徒

市立富士宮第三中学校ＰＴＡ

県立富士宮東高郷土研究部他生徒

県立富士宮北高郷土研究部

県立吉原高校社会部

事務局　富士宮市教育委員会社会教育課

塩川隆司（富士宮市教育長）

上杉六郎（社会教育課長）

佐野久雄（社会教育課課長補佐）

前島範由（社会教育係長）

杉浦秀実.清欽爾（～昭和51年９月）

後藤章（昭和51年10月～）

滝戸遺跡第Ⅱ次発掘調査（昭和52年度）

昭和52年７月24日～８月30日

滝戸遺跡発掘調査団

調査団長　若林淳之（静岡大学教授、現.静岡学園短期大学長）

主任調査員　植松章八（県立吉原高校教諭、現.静岡中央高校副校長）

調査員　野村昭光（駿豆考古学会幹事、県文化財保護指導員）

佐藤政次（富士市立岩松中学校教諭、現.富士市立須津中学校教諭）

渡井一信（静岡県考古学会会員、現.富士宮市教育委員会）

湯川悦夫（神奈川県小田原市立鴨之宮中学校教諭、現.同県立大井高校教諭）

加納俊介（東京教育大学大学院、現.愛知大学講師）

調査参加者　足立順司（現.〈財〉静岡県埋蔵文化財調査研究所）.幡野博之.渡辺康弘（現.

清水市教育委員会). 小豆川裕男. 伊藤昌光(現.富士宮市教育委員会). 久松義昭 (現.富士市教育委員会). 監物京子. 湯生詠子. 清久子. 島居いすず. 塩川浩正. 福島裕. 山田繁治

調査協力者　小川賢之輔(富士宮市域自然調査研究会特別研究員.昭和59年～)
市立富士宮第三中学校教職員、生徒
市立富士宮第三中学校ＰＴＡ
県立富士宮東高郷土研究部他生徒
県立富士宮北高郷土研究部
県立吉原高校社会部

事務局　富士宮市教育委員会社会教育課
塩川隆司 (富士宮市教育長)
上杉六郎 (社会教育課長)
佐野久雄 (社会教育課課長補佐)
前島範由 (社会教育係長)
杉浦秀実. 後藤章

滝戸遺跡第Ⅲ次発掘調査 (昭和54年度)

昭和54年７月21日～８月11日

富士宮市教育委員会

調査主体者　塩川隆司 (富士宮市教育長)
調査員　石川篤 (静岡県考古学会員)
調査指導　馬飼野行雄 (富士宮市教育委員会技術員)
渡井一信　(富士宮市教育委員会技術員)

作業員　赤池克美. 赤池金弥. 伊藤斉. 井上君夫. 岩見文義. 長田昌行. 小沢貴美. 小野晴敏. 笠井桂司. 笠井宇. 梶原邦明. 久保田邦治. 神山伊吹. 後藤和秀. 佐野克己. 佐野正和. 佐野昌史. 塩川浩正. 小豆川裕男. 須藤和彦. 鈴木達仁. 鈴木豊秀. 鈴木誠. 諏訪幸宏. 竹川暢昭. 坪井常章. 旗持章敏. 深沢恒臣. 深沢宏住. 深沢正志. 深沢行夫. 村松貴彰. 森井尚. 山本哲也. 吉野和史. 吉野公彦. 渡辺悟. 赤池美里. 竹川円

事務局　富士宮市教育委員会社会教育課
諏訪重夫 (社会教育課長)
佐野久雄 (社会教育課課長補佐)
後藤　章 (社会教育課係長)
渡辺孝秀. 四條悦子. 桝田辰男

滝戸遺跡第Ⅳ次発掘調査 (昭和57年度)

昭和57年６月２日～８月31日

富士宮市教育委員会

調査主体者　塩川隆司 (富士宮市教育長)

調　査　員　　渡井一信（富士宮市教育委員会技師）
調査補助　　馬飼野行雄（富士宮市教育委員会技師）
伊藤昌光（富士宮市教育委員会学芸員）
作　業　員　　望月秀雄．佐野秋男．勝亦英雄．小林七造．佐野一．佐藤幸司．依田孝郷．上原博光．杉沢正敏．塩川浩正．友野勝．山上英誉．渡井久嘉．滝口たけ子渋谷里江．大豆生田律子．大原初江．渡辺はる江．佐野克子．市川よし子．吉野ふみ子．辻井秀子．渡辺房子．土井萬里子．二間瀬篤子．大川勝代．小野田芳恵．小室初枝．伊藤陽子．渡辺規子．吉野順子．田中徳代．高橋優子佐野節子．望月幸子．風岡なかえ．佐野ヤヨイ．望月たみ子．深沢光枝．深沢幸路．深沢善江．服部秋子．赤池晴美．勝又麻里．渡辺直美
事　務　局　　富士宮市教育委員会社会教育課
諏訪重夫（社会教育課長．～昭和57年６月）
中村　達（社会教育課長．昭和57年７月～）
成瀬正光（文化振興係長）
渡辺孝秀（文化振興係主事）

滝戸遺跡第Ⅴ次発掘調査（昭和62年度）

昭和62年５月11日～８月27日

富士宮市教育委員会

調査主体者　　塩川隆司（富士宮市教育長）
調　査　員　　馬飼野行雄（富士宮市教育委員会主査）
渡井一信（富士宮市教育委員会主査）
調査補助　　山上英誉（富士宮市教育委員会臨時職員）
作　業　員　　望月秀雄．福田聡．深沢謙一．渡辺進．小林導治．金森基次．土井萬里子．川合美枝子．山田さと子．吉野ふみ子．木内俊子．大平美奈子．山崎芙美子戸塚英子．速水俊子．中野敏子．小長谷恭子．服部秋子．中瀬小夜子．
事　務　局　　塩川哲章（社会教育課長）
松井健二（社会教育課課長補佐）
鈴木治彦（文化振興係長．～昭和62年５月）
小川隆造（文化振興係長．昭和62年５月～）
井出泰弘（文化振興係事務員）

滝戸遺跡発掘調査報告書刊行事業

平成５年度～平成８年度

調　査　員　　馬飼野行雄（富士宮市教育委員会学芸員）
渡井英誉（富士宮市教育委員会学芸員）
整理作業員　　芦川美智子．渡辺麻里．望月利恵．藤巻千代子．佐藤節子．川合美枝子．中山民子．山崎芙美子．望月秀雄．内藤裕之
事　務　局　　田口　哲（富士宮市教育長．～平成６年３月）

藤井國利（富士宮市教育長．平成６年４月～）
遠藤勝己（文化課長．～平成７年３月）
塩川哲章（文化課長．平成７年４月～平成８年３月）
富士真一郎（文化課長．平成８年４月～）
井出千歳（文化課課長補佐兼文化財係長）
渡井一信（富士宮市教育委員会学芸員）
伊藤昌光（富士宮市教育委員会学芸員）
渡井正二（富士宮市社会教育指導員）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たきどいせき
書名	滝戸遺跡
副書名	市立富士宮第３中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２３集
編著者名	植松章八．馬飼野行雄．渡井英誉
編集機関	富士宮市教育委員会
所在地	〒418静岡県富士宮市弓沢町150　TEL0544-22-1187
発行年月日	西暦　1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
滝戸遺跡	富士宮市 野中658	22207	市番号 １０８ 県番号 富士宮市 ４４	35° 12′ 55″	138° 35′ 29″	第Ⅰ次調査 19760723 19760819 第Ⅱ次調査 19770724 19770830 第Ⅲ次調査 19790721 19790811 第Ⅴ次調査 19870511 19870827	５４０ ２５０ １００ ２８０	校舎増改築事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
滝戸遺跡	墓地	縄文時代	配石　４面 竪穴住居　４棟 埋甕　１３基	縄文土器、石器 硬玉製大珠	縄文早期から後期前半にかけて４面に重複する配石
		弥生時代(後期)～古墳時代(前期)	竪穴住居　３４軒 掘立柱建物　２棟 方形周溝墓　１６基 土壙　９基	弥生土器、土師器	弥生時代(後期)～古墳時代(前期)の居住域と墓域
		古墳時代(後期)	古墳　２基	土師器、須恵器 石製模造品	

写　真　図　版

図　版　目　次

図版－1　滝戸遺跡（昭和44年撮影）
図版－2　A．滝戸遺跡と富士宮市街地（同上）
B．市立富士宮第三中学校全景（同上）
図版－3　A．第Ⅰ次．第Ⅱ次発掘調査区前景
B．第Ⅲ次．第Ⅴ次発掘調査区前景
図版－4　A．弥生･古墳時代（第Ⅰ次調査区）全景
B．ＳＺ０２
図版－5　A．ＳＺ０２遺物出土状況
B．ＳＺ１７・ＳＢ１９
図版－6　A．ＳＢ２０
B．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－１
図版－7　A．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－２（部分）
B．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－３(部分)
図版－8　A．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－４(部分)
B．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－５（部分）
図版－9　A．ＳＺ２１
B．ＳＺ２１遺物出土状況－１
図版－10　A．ＳＺ２１遺物出土状況－２
B．ＳＢ２２
図版－11　A．ＳＢ２２（掘り方）
B．ＳＢ２３（掘り方）
図版－12　A．ＳＢ２５（掘り方）
B．ＳＢ２６
図版－13　A．ＳＢ２６遺物出土状況－１
B．ＳＢ２６遺物出土状況－２
図版－14　A．ＳＢ２６（掘り方）
B．ＳＢ２８
図版－15　A．ＳＢ２８（掘り方）
B．ＳＢ３０（掘り方）
図版－16　A．ＳＢ３１.ＳＢ３２（掘り方）
B．ＳＢ３６（掘り方）
図版－17　A．ＳＢ３６．ＳＢ３９（掘り方）
B．ＳＢ４１
図版－18　A．ＳＺ４２
B．ＳＺ４４
図版－19　A．ＳＺ４４南溝
B．ＳＺ４４遺物出土状況－１
図版－20　A．ＳＺ４４遺物出土状況－２
B．ＳＺ４７．ＳＺ４８．ＳＺ４９．ＳＺ５０
図版－21　A．ＳＺ４７．ＳＺ４８
B．ＳＺ５２
図版－22　A．ＳＺ５２遺物出土状況
B．ＳＺ５３．ＳＢ６１
図版－23　A．ＳＺ５３遺物出土状況
B．ＳＢ５４．ＳＢ５５
図版－24　A．ＳＢ５４（掘り方）
B．ＳＢ５５（掘り方）
図版－25　A．ＳＢ５７（掘り方）
B．ＳＢ６１（掘り方）
図版－26　A．縄文時代上層面配石（第Ⅰ次調査区）全景
B．縄文時代上層面配石（第Ⅱ次調査区）全景
図版－27　A．縄文時代下層面配石（第Ⅱ次調査区）全景
B．縄文時代上層面配石（第Ⅲ次調査区）全景
図版－28　A．縄文時代上層面配石（第Ⅴ次調査区）全景
B．縄文時代上層面配石（第Ⅴ次調査区）近景
図版－29　A．縄文時代配石と弥生時代住居跡（第Ⅴ次調査区）
B．弥生時代住居跡の下部より出土する縄文時代配石
図版－30　A．配石０１
B．配石０２
図版－31　A．ケルン状石組（１）
B．配石０３(手前)と配石土壙０２(右奥)
図版－32　A．配石０３（南より）
B．配石０３（北より）
図版－33　A．配石０３下部配石と上部礫層の断面
B．配石０３下部配石
図版－34　A．配石土壙０１
B．配石土壙０２の上部配石
図版－35　A．ケルン状石組（２）
B．石皿を囲む環状石組
図版－36　A．土壙０１～０４．０８．０９
B．土壙０５

図版－37　A．焼土を内包する土壙０２（断面）
B．焼土を内包する土壙０２
図版－38　A．埋甕０１
B．埋甕０２
図版－39　A．埋甕０３
B．埋甕０４
図版－40　A．埋甕０６
B．埋甕０７
図版－41　A．埋甕０８
B．埋甕０９
図版－42　A．埋甕１０
B．埋甕１１
図版－43　A．埋甕１２
B．埋甕１３
図版－44　A．炉０１
B．炉０２
図版－45　A．炉０３
B．炉０４
図版－46　A．土器出土状況－１
B．土器出土状況－２
図版－47　A．土器出土状況－３
B．土器出土状況－４
図版－48　A．土器出土状況－５
B．土器出土状況－６
図版－49　A．土器出土状況－７
B．土器出土状況－８
図版－50　A．土器出土状況－９
B．土器出土状況－10
図版－51　A．土器出土状況－11
B．土器出土状況－12
図版－52　出土遺物（１）
土器０３．土器１１．土器４６．土器４８．
土器６４．土器６５．
図版－53　出土遺物（２）
土器６９．土器７２．土器７５．土器７６．
土器７７．土器１１４．
図版－54　出土遺物（３）
土器１４２．土器１４４．土器１４６．
土器１５９．土器１６０．土器１６６．
図版－55　出土遺物（４）
土器０２０１．土器１００１．土器１００２．
土器１００３．土器１００４．土器１００５．
図版－56　出土遺物（５）
土器１０２５．土器１１０１．土器１１０７．
土器１１０５．土器１１０２．土器１１０９．
図版－57　出土遺物（６）
土器１１１０．土器１１１２．土器１１１４．
土器１１１９．土器１１２２．土器１１２３．
図版－58　出土遺物（７）
土器１１２４．土器１１２９．土器１１２８．
土器１１２５．土器１１３３．土器１１３６．
図版－59　出土遺物（８）
土器１１３７．土器１１４２．土器１１４３．
土器１２０１．土器１２０２．土器１３０１．
図版－60　出土遺物（９）
土器１３０５．土器１３０６．土器１４０１．
土器１５０１．土器１５０２．土器１５１１．
図版－61　出土遺物（10）
土器１５２０．土器１５３７．土器１５３８．
土器１５２８．土器１５３５．土器１５４０．
図版－62　出土遺物（11）
A．土器片円盤
B．土器片錘
図版－63　出土遺物（12）
A．石錘（磨製）
B．石錘（打製）
図版－64　出土遺物（13）
A．石皿
B．石皿（表面）
C．石皿（裏面－蜂の巣石）
図版－65　出土遺物（14）
A．台石（平坦面使用）
B．台石（凸面使用）
図版－66　出土遺物（15）
A．磨石類
B．特殊磨石
図版－67　出土遺物（16）
A．敲石
B．磨り面をもつ敲石
図版－68　出土遺物（17）
A．石鏃
B．石錐
図版－69　出土遺物（18）
A．石匙
B．スクレイパー類
図版－70　出土遺物（19）
A．凹石
B．砥石

図版—71　出土遺物（20）
　　A．石鋸（右）と尖頭器（左２）
　　B．磨製石斧
図版—72　出土遺物（21）
　　A．打製石斧－１
　　B．打製石斧－２
図版—73　出土遺物（22）
　　A．打製石斧－３
　　B．打製石斧－４
図版—74　出土遺物（23）
　　A．石製模造品出土状況（古墳時代）
　　B．装身具類（弥生・古墳時代）
　　C．硬玉製大珠
　　D．ドングリ類
図版—75　出土遺物（24）
　　A．曽利式土器把手（昭和24年出土）
　　B．勝坂式土器の人面意匠（同上）

滝　戸　遺　跡（昭和44年撮影）

図版－2

A．滝戸遺跡と富士宮市街地（昭和44年撮影）

B．市立富士宮第三中学校全景（昭和44年撮影）

A．第Ⅰ次．第Ⅱ次発掘調査区前景

B．第Ⅲ次．第Ⅴ次発掘調査区前景

図版－4

A．弥生・古墳時代（第Ⅰ次調査区）全景

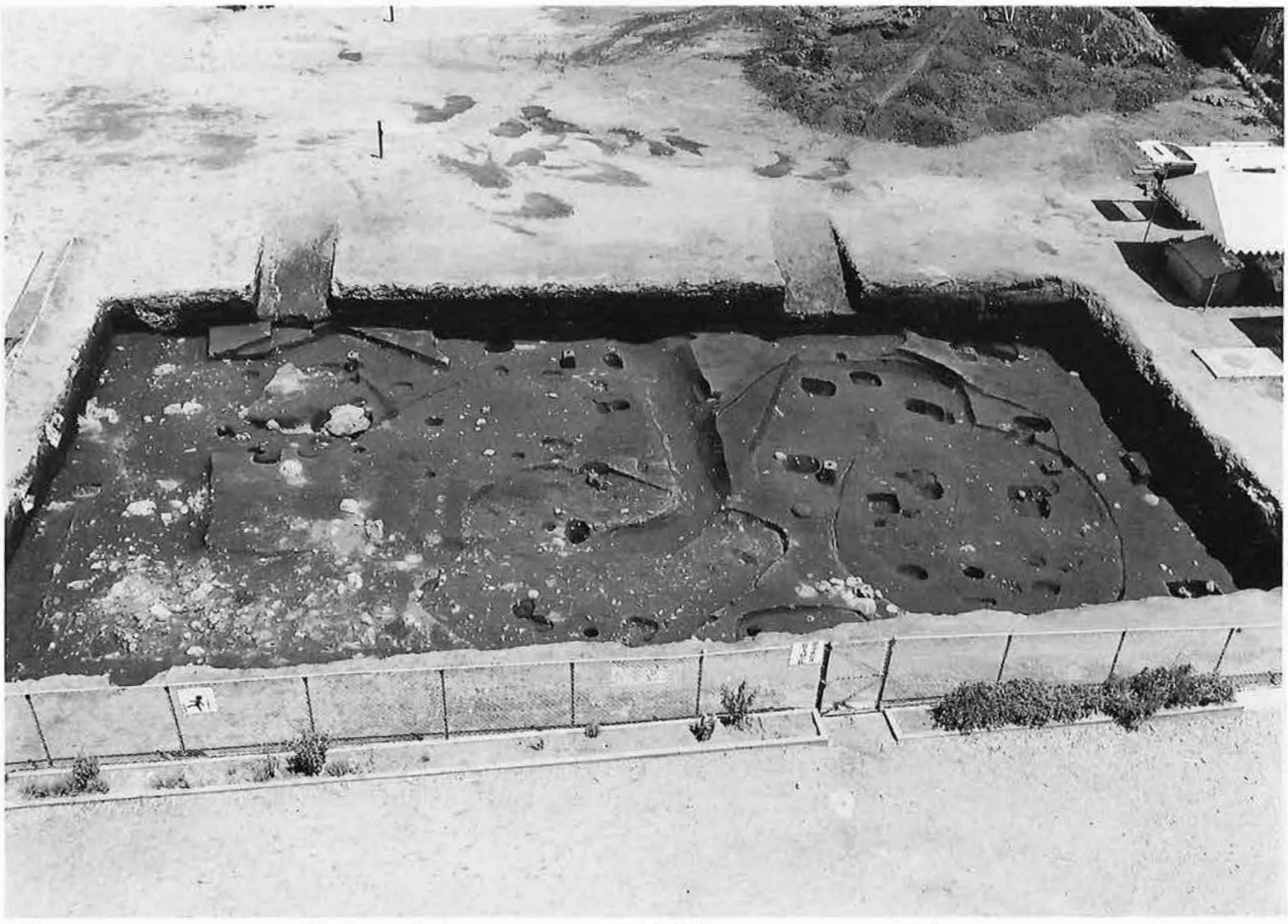
B．ＳＺ０２

A．ＳＺ０２遺物出土状況

B．ＳＺ１７・ＳＢ１９

図版－6

A．SB20



B．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－1

A．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－2（部分）

B．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－3（部分）

図版－8

A．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－4（部分）

B．弥生・古墳時代（第Ⅴ次調査区）全景－5（部分）

A．ＳＺ２１

B．ＳＺ２１遺物出土状況－１

A．ＳＺ２１遺物出土状況－２

B．ＳＢ２２

A．ＳＢ２２（掘り方）

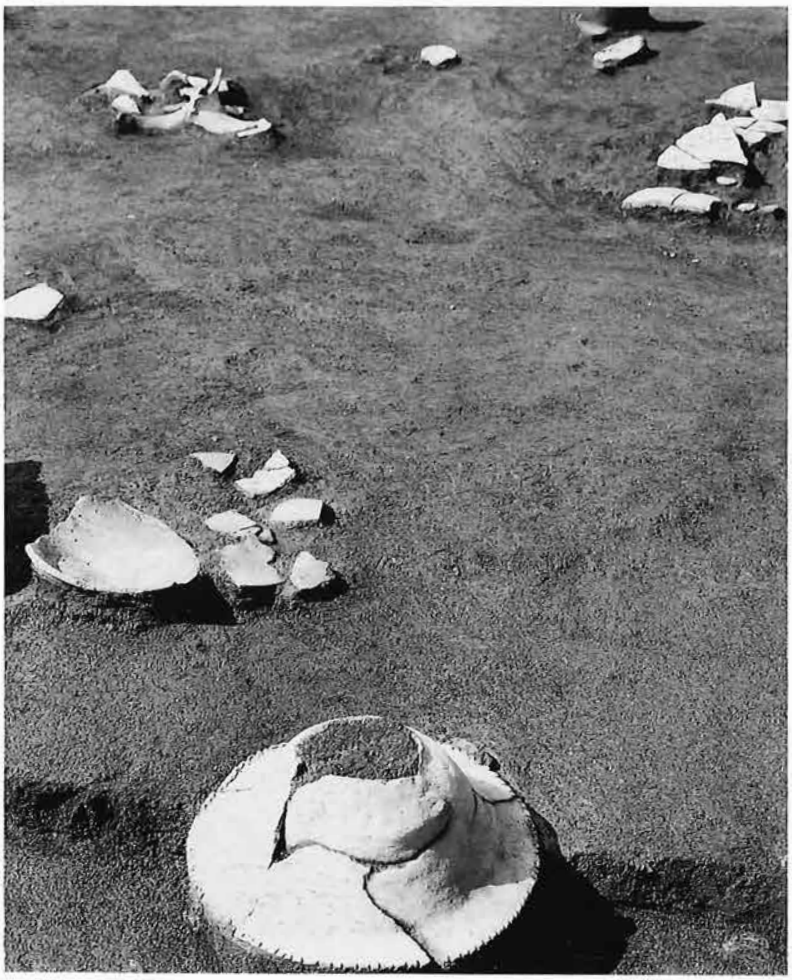
B．ＳＢ２３（掘り方）

図版－12

A．ＳＢ２５（掘り方）

B．ＳＢ２６

A．ＳＢ２６遺物出土状況－１

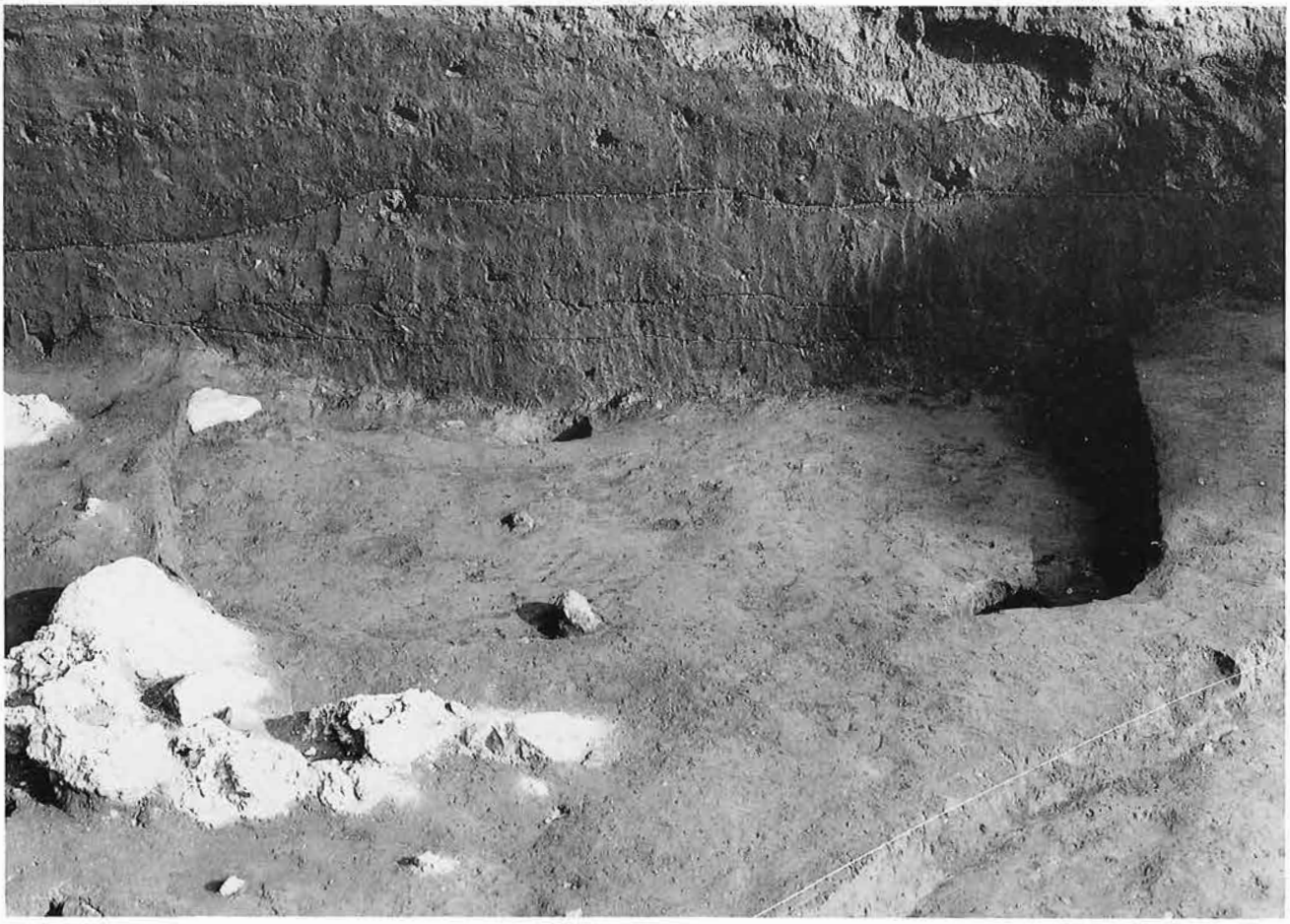


B．ＳＢ２６遺物出土状況
－２

A．ＳＢ２６（掘り方）

B．ＳＢ２８

A．ＳＢ２８（掘り方）

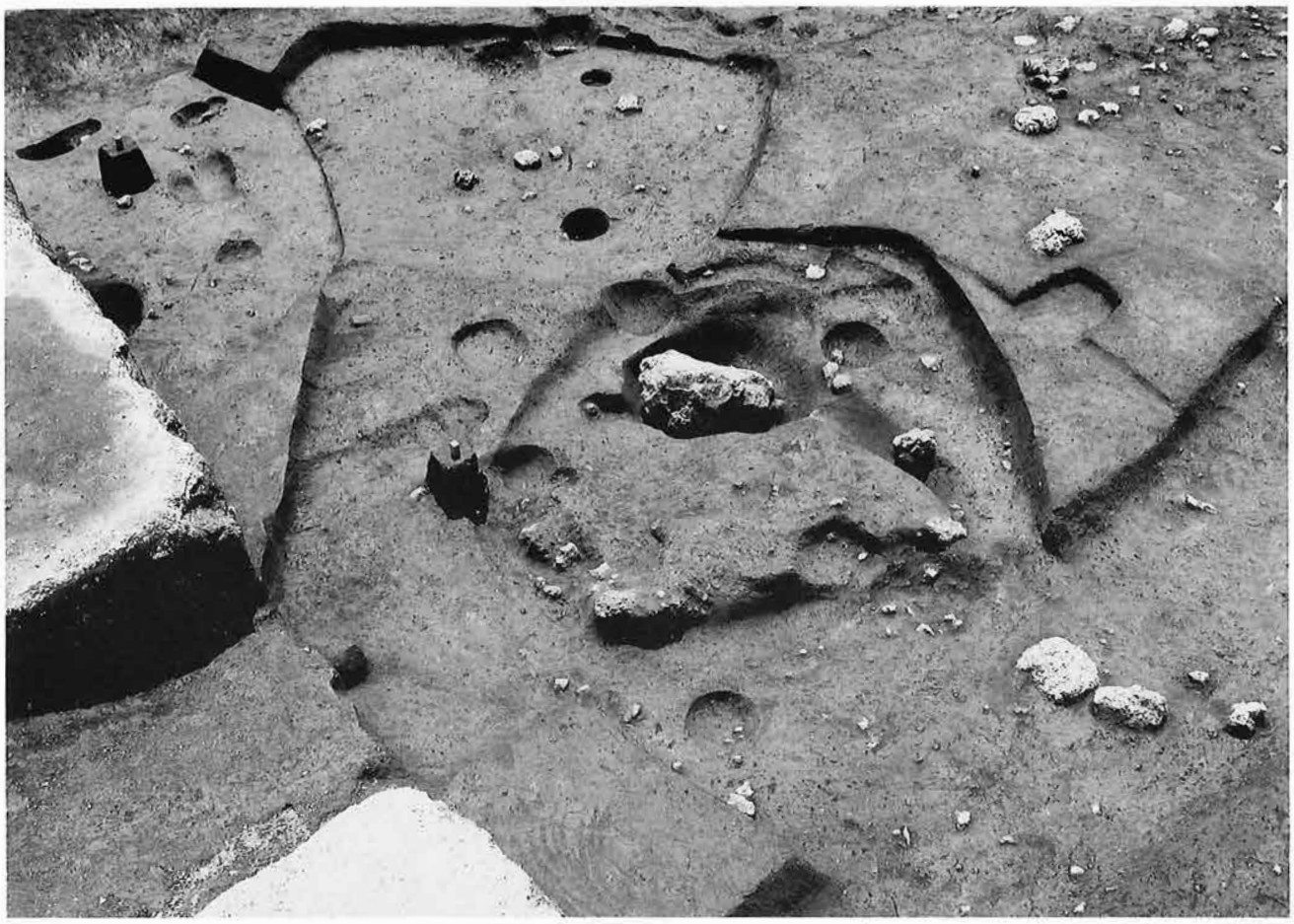


B．ＳＢ３０（掘り方）

図版－16

A．ＳＢ３１．ＳＢ３２（掘り方）

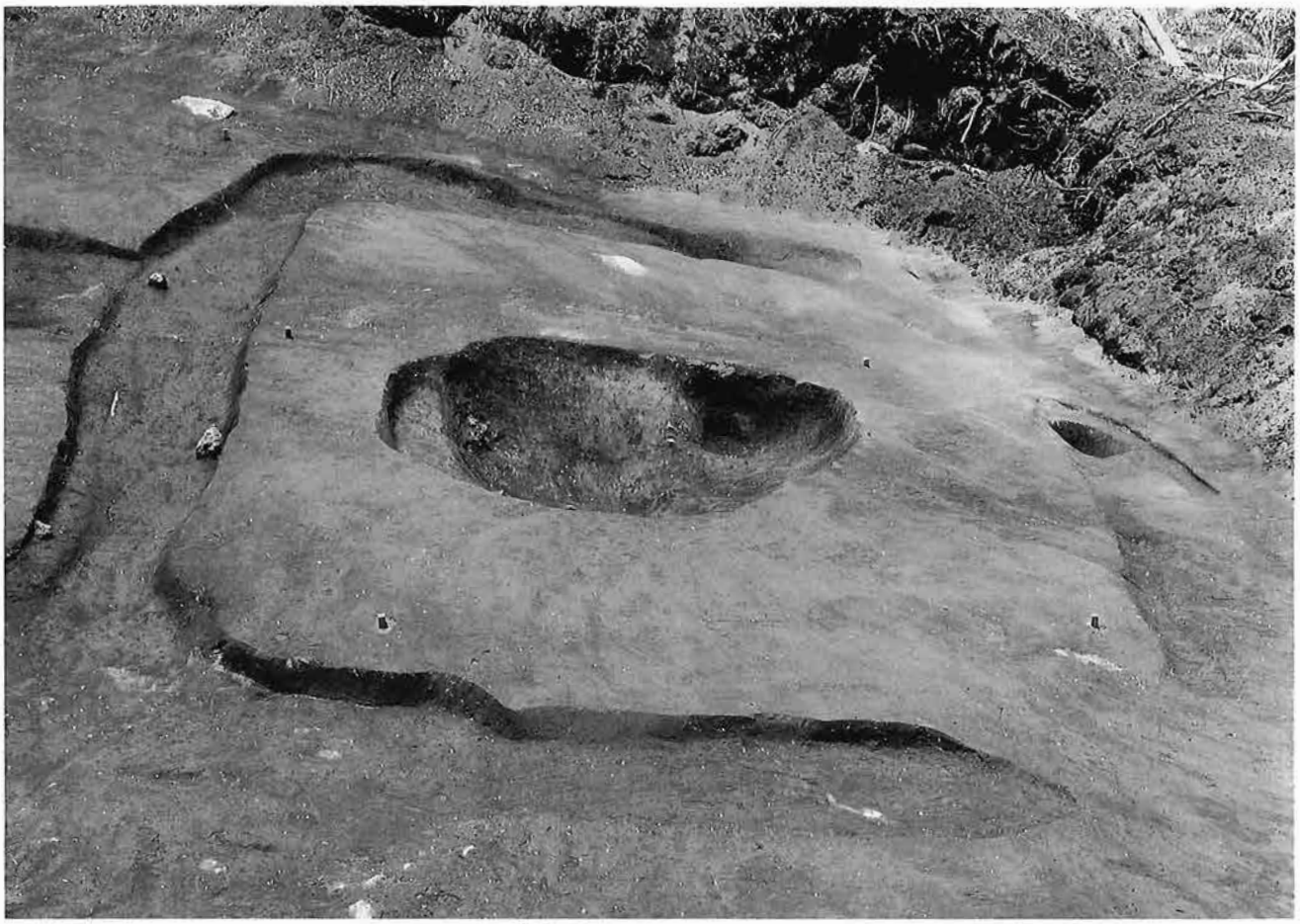
B．ＳＢ３６（掘り方）



A．ＳＢ３６．ＳＢ３９（掘り方）

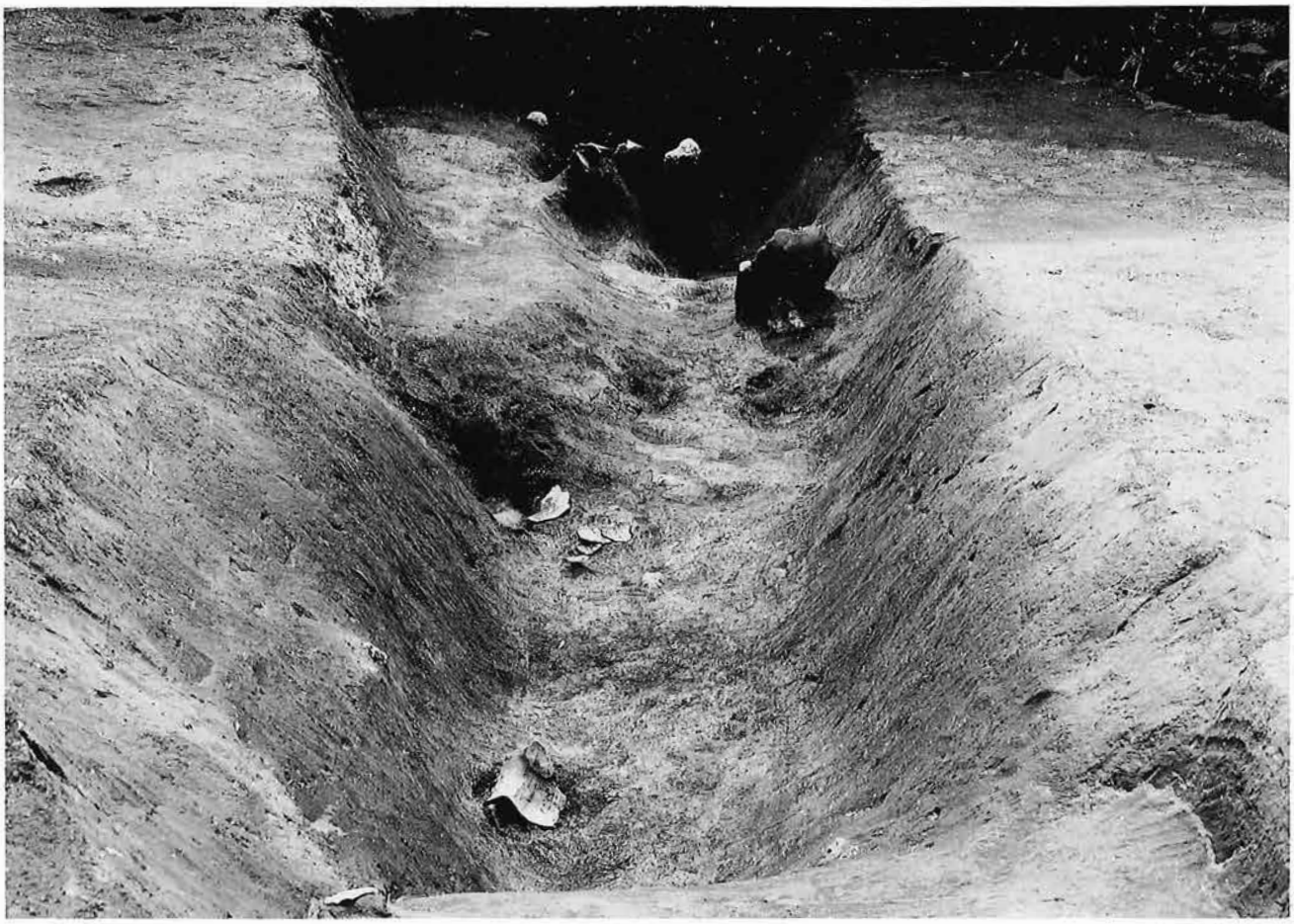
B．ＳＢ４１

図版－18



A．SZ42

B．SZ44



A．ＳＺ４４南溝

B．ＳＺ４４遺物出土状況－１

図版－20

A．ＳＺ４４遺物出土状況－２

B．SZ47．SZ48．SZ49．SZ50

A．SZ47．SZ48

B．SZ52

図版－22

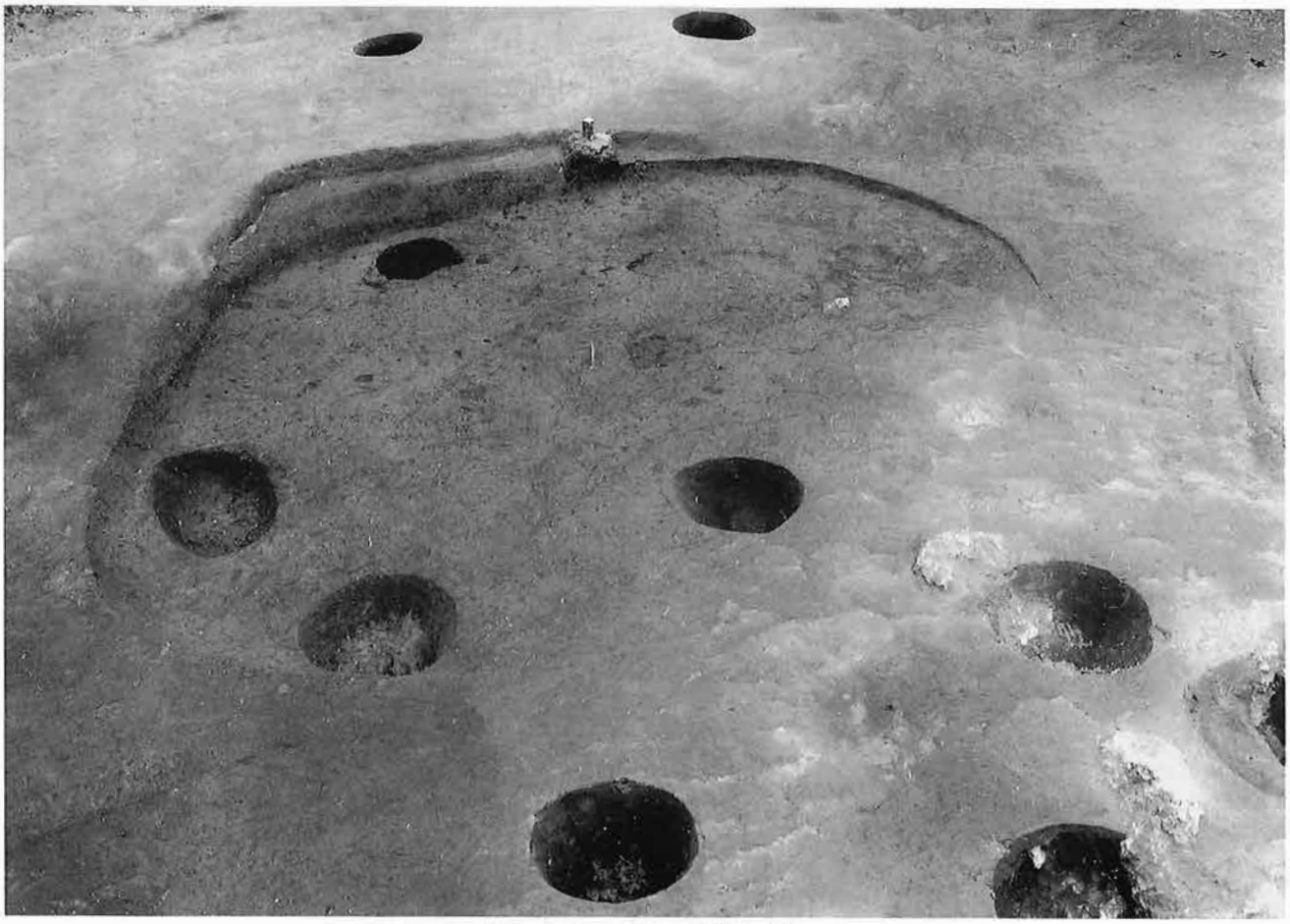
A．ＳＺ５２遺物出土状況

B．ＳＺ５３．ＳＢ６１

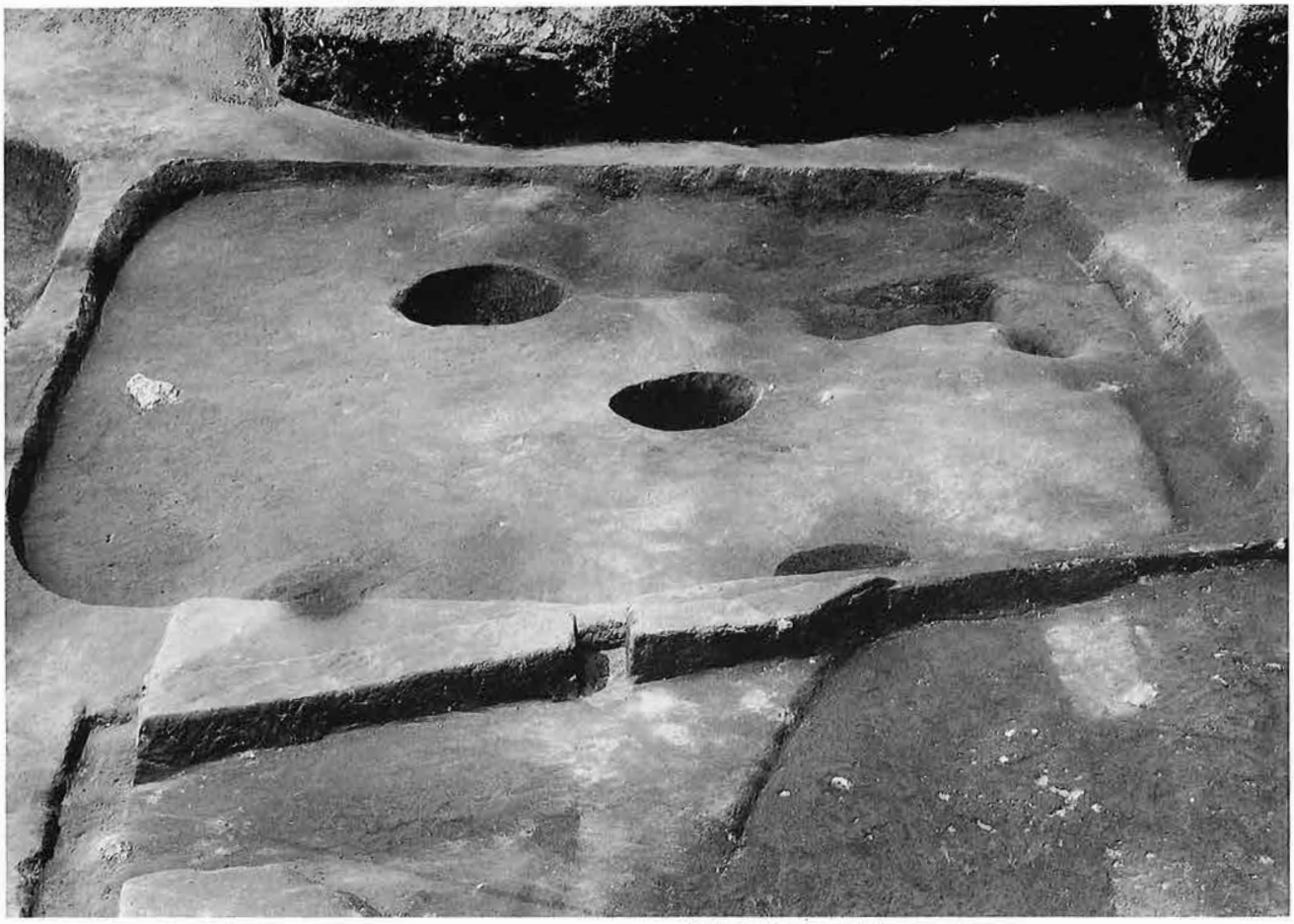
A．ＳＺ５３遺物出土状況

B．ＳＢ５４．ＳＢ５５

A．ＳＢ５４（掘り方）



B．ＳＢ５５（掘り方）

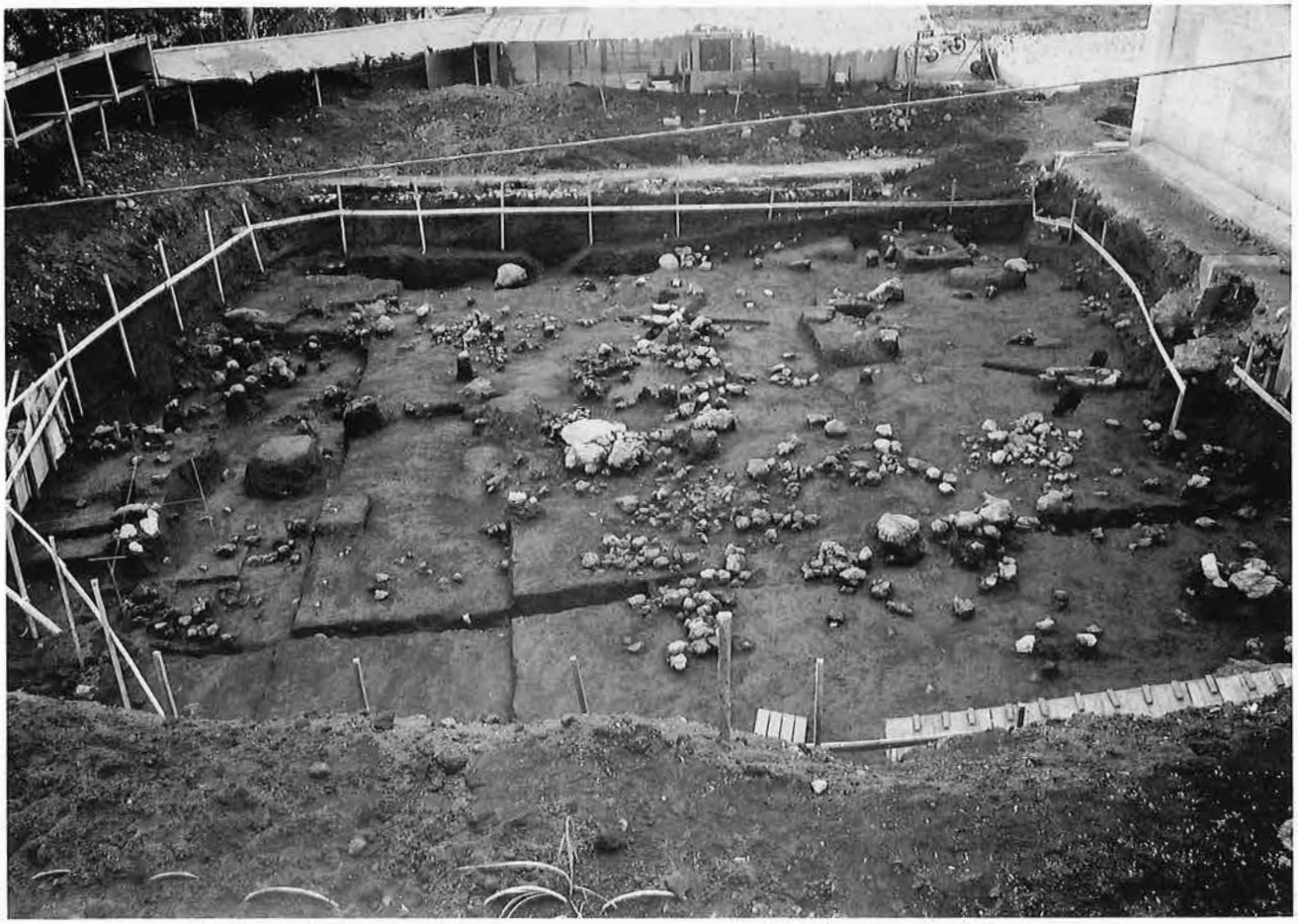


A．ＳＢ５７（掘り方）

B．ＳＢ６１（掘り方）

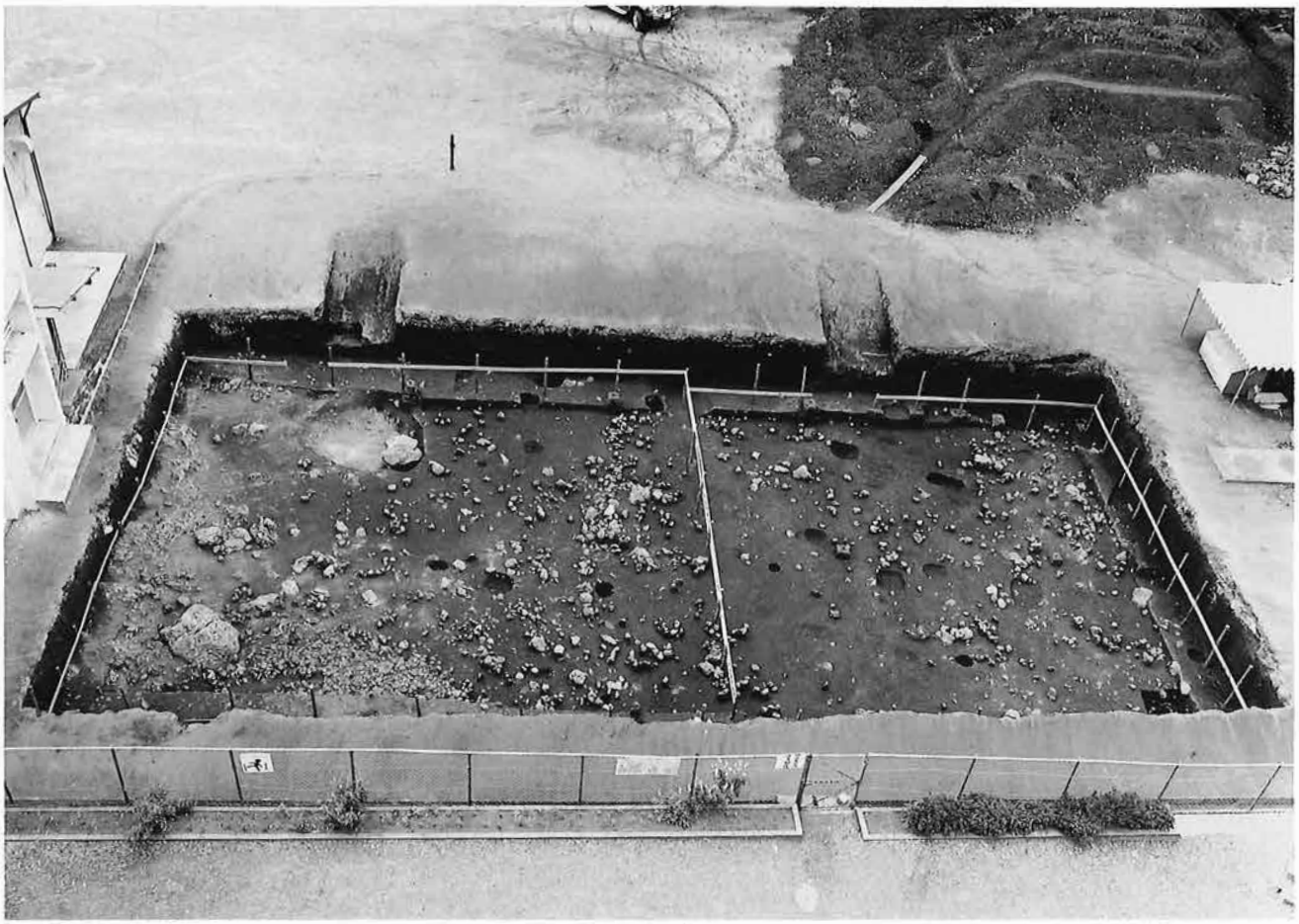
A．縄文時代上層面配石（第Ⅰ次調査区）全景

B．縄文時代上層面配石（第Ⅱ次調査区）全景



A．縄文時代下層面配石（第Ⅱ次調査区）全景

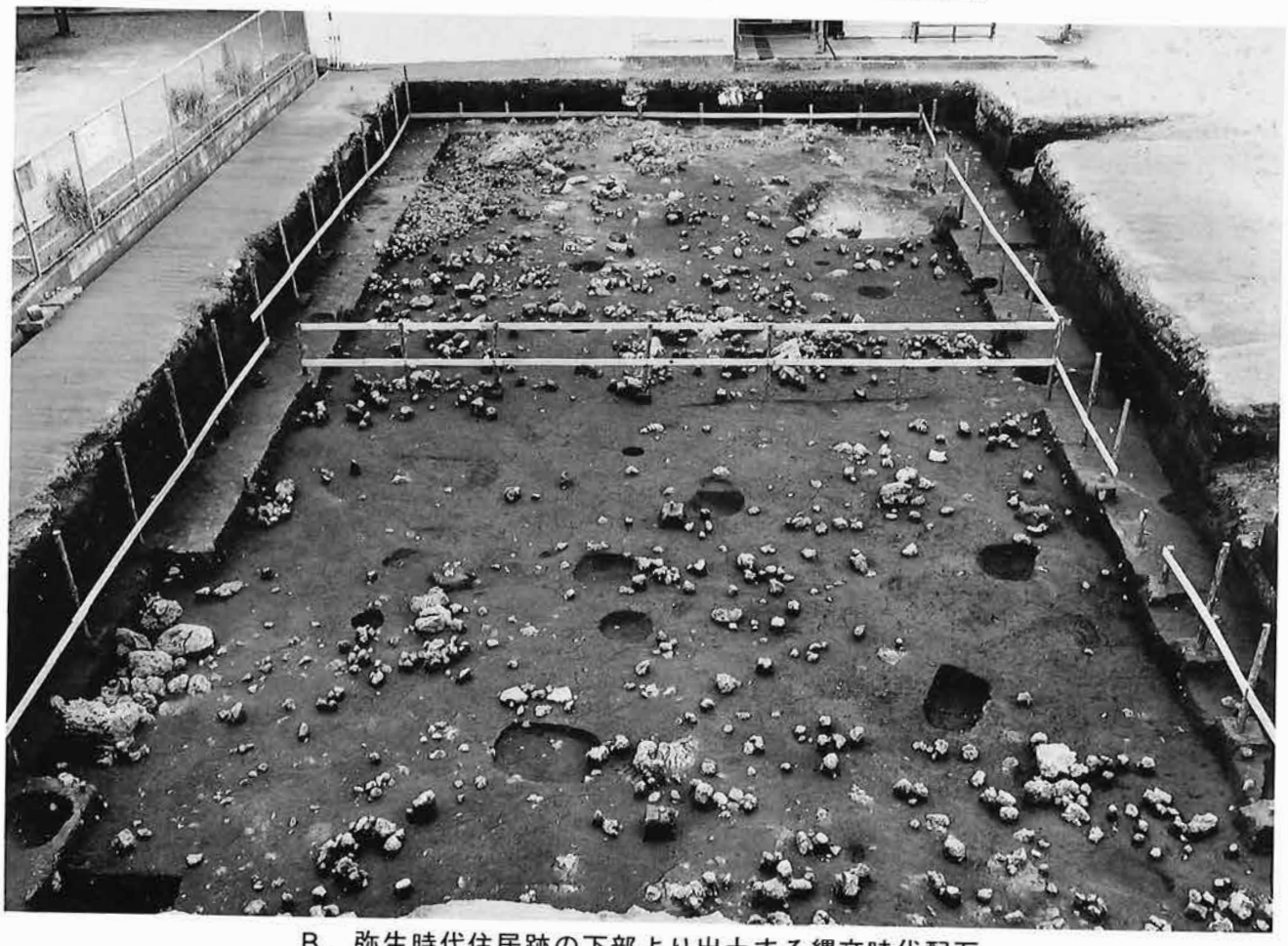
B．縄文時代上層面配石（第Ⅲ次調査区）全景



A．縄文時代上層面配石（第Ⅴ次調査区）全景

B．縄文時代上層面配石（第Ⅴ次調査区）近景

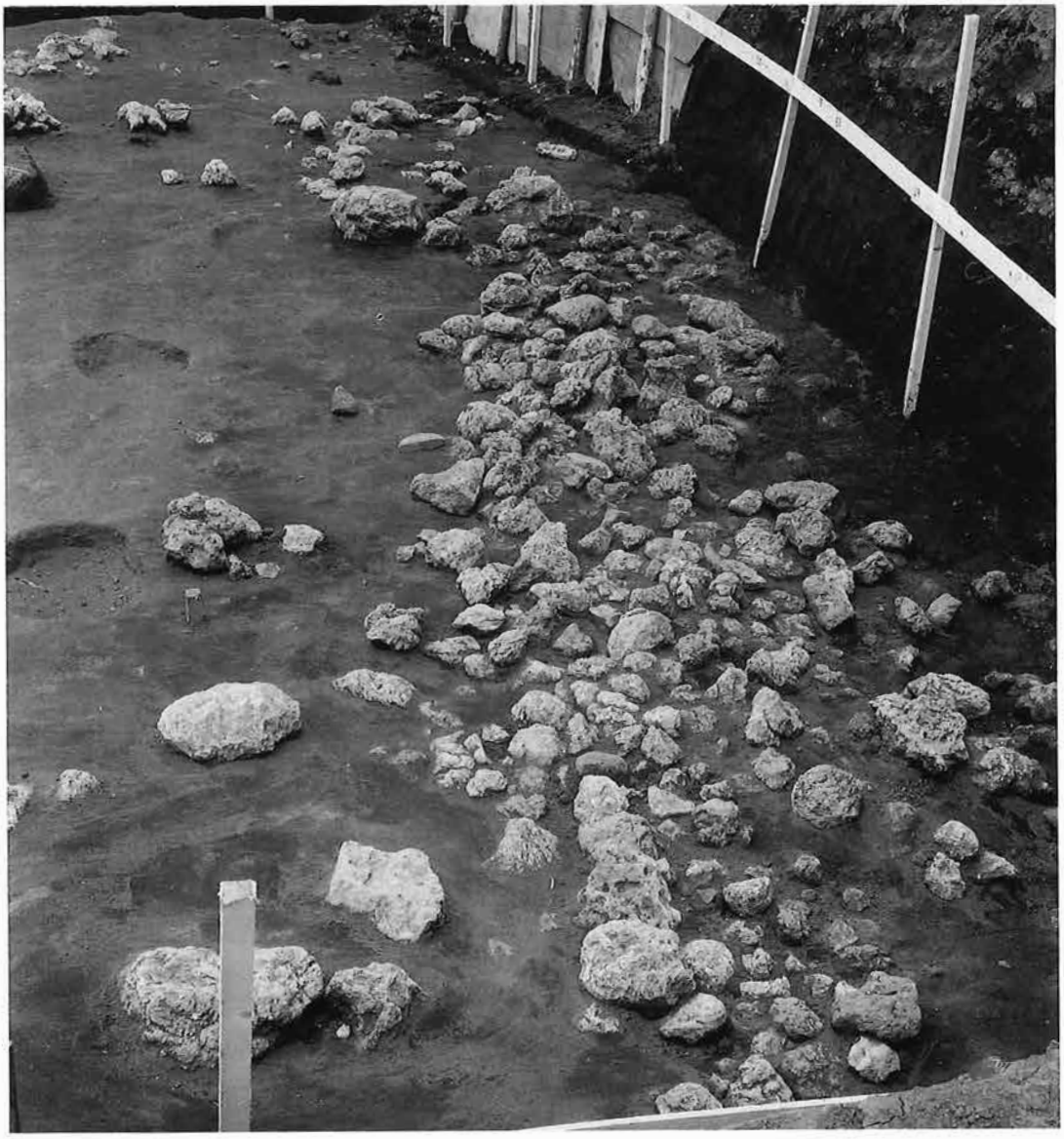
A．縄文時代配石と弥生時代住居跡（第Ⅴ次調査区）



B．弥生時代住居跡の下部より出土する縄文時代配石

図版－30

A．配石０１



B．配石０２

A．ケルン状石組（1）

B．配石０３(手前)と配石土壙０２(右奥)

A．配石０３（南より）

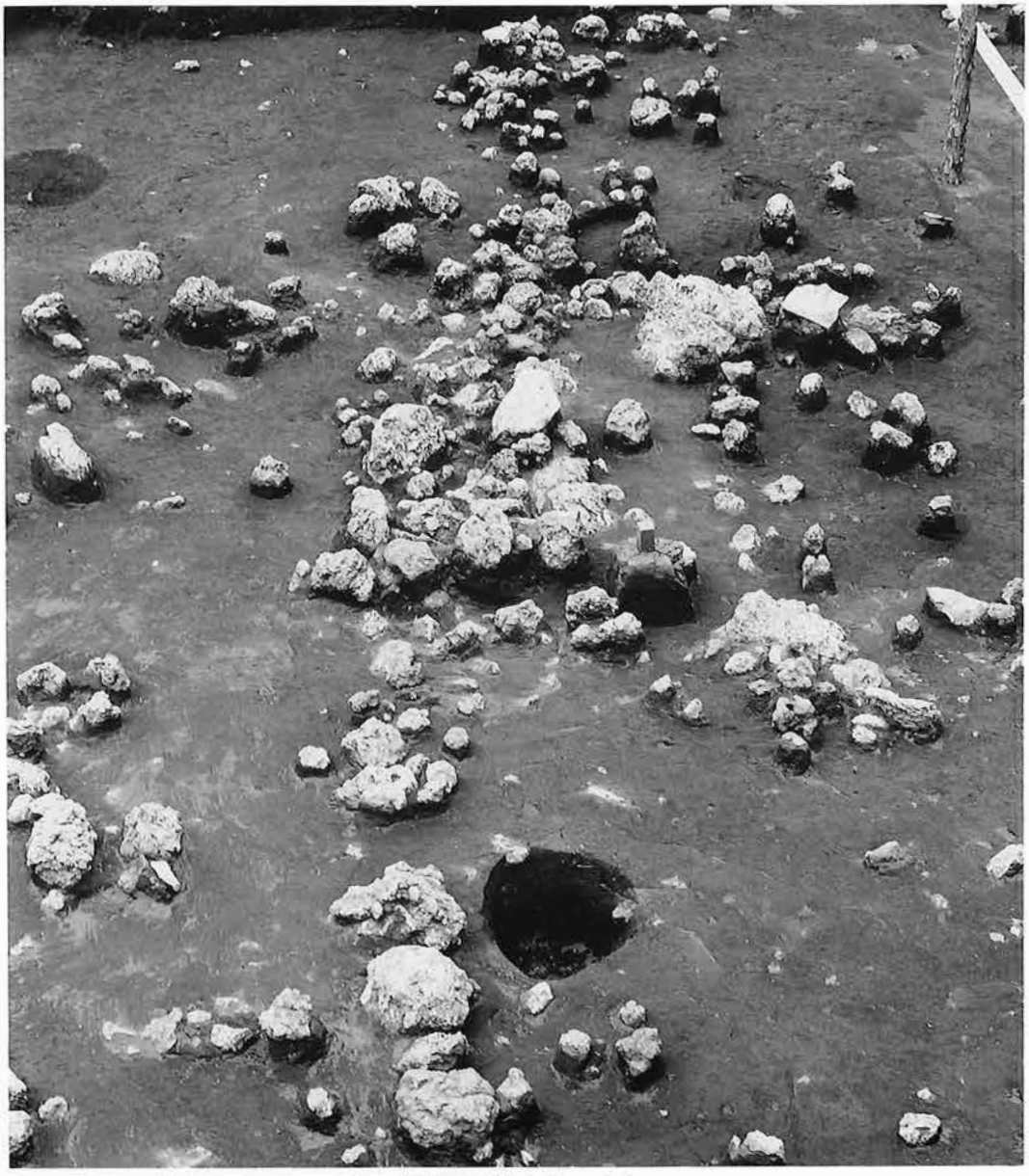
B．配石０３（北より）

A．配石03下部配石と上部礫層の断面

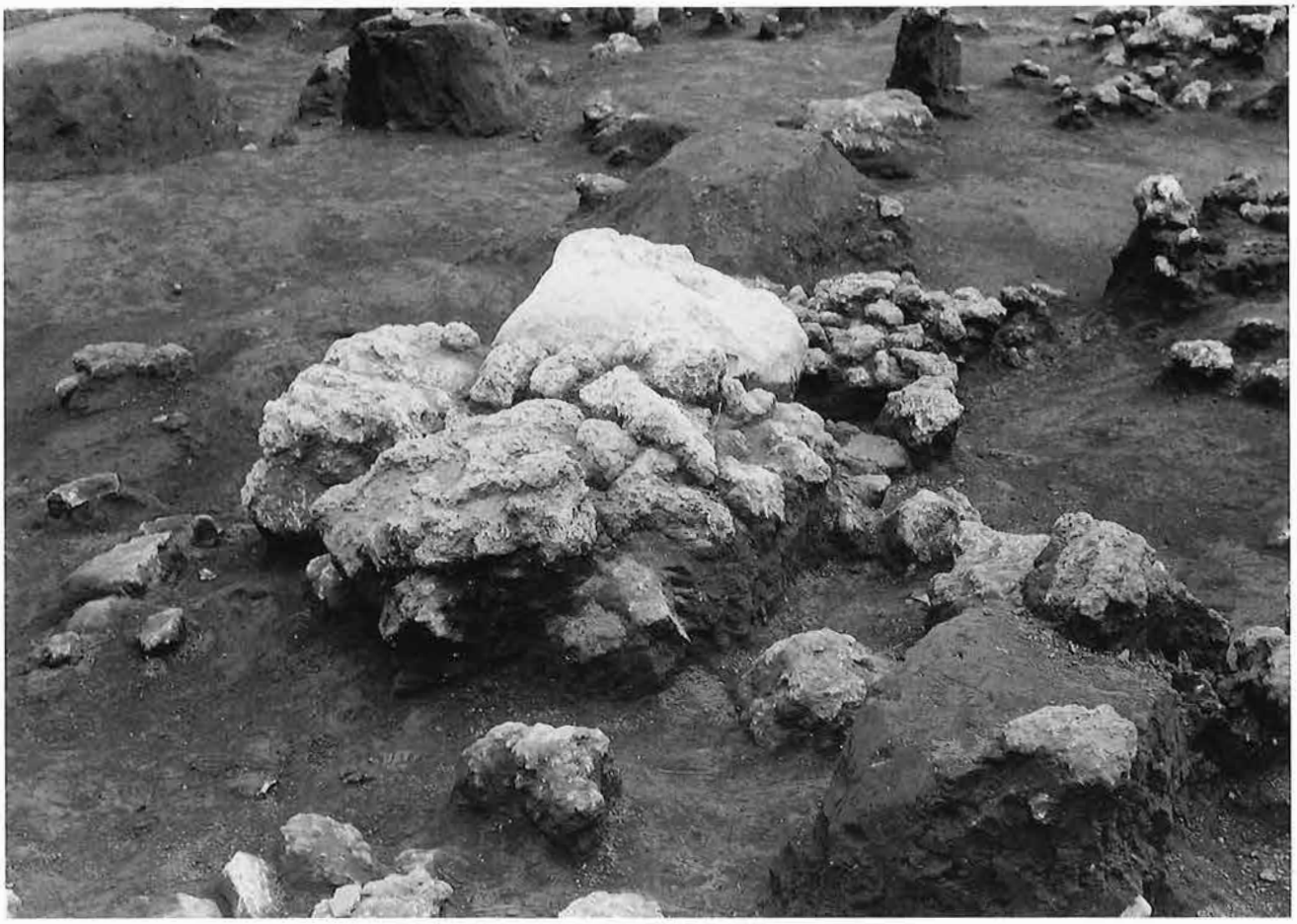
B．配石03下部配石

図版－34

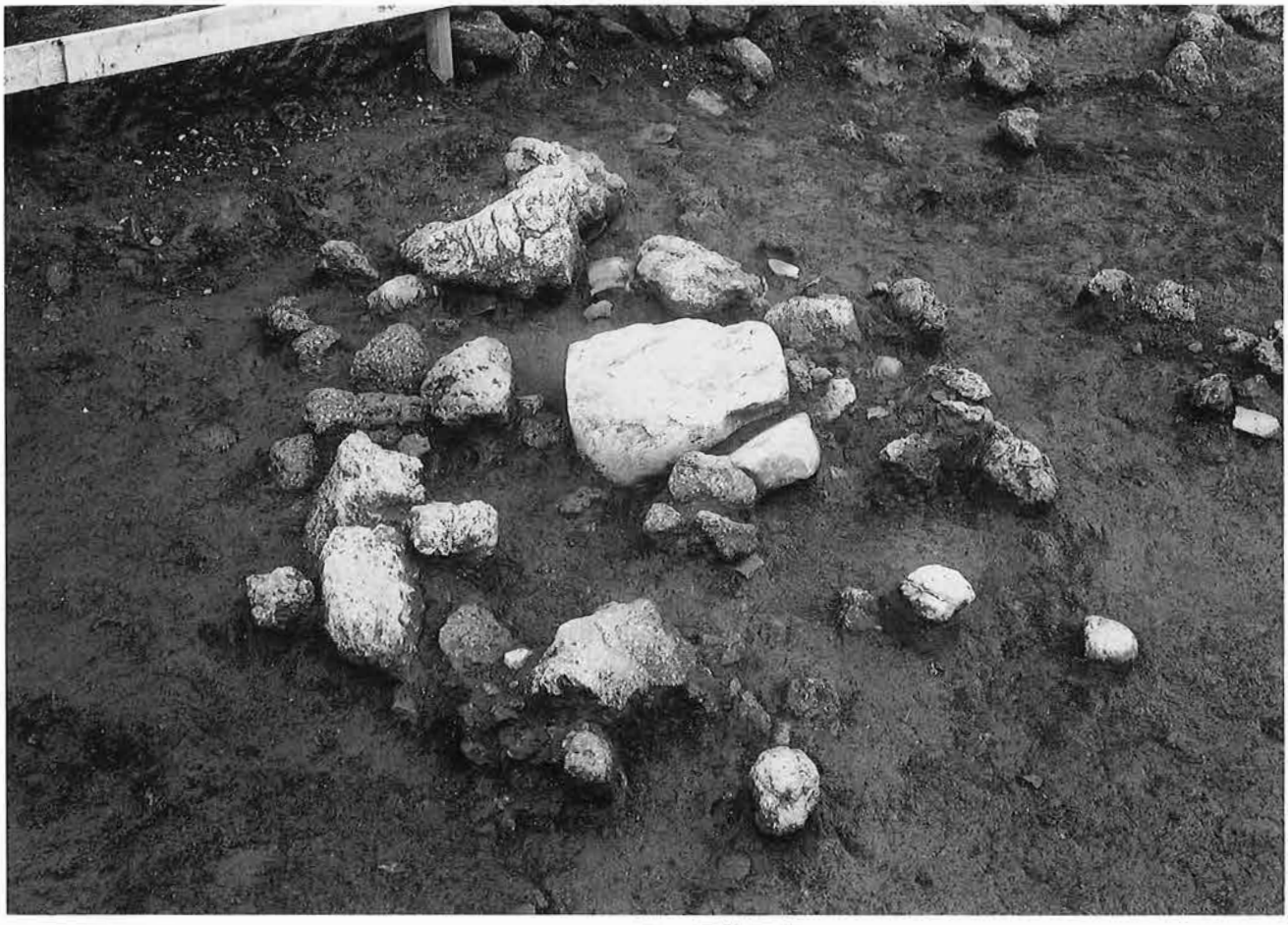
A．配石土壙01



B．配石土壙02の上部配石



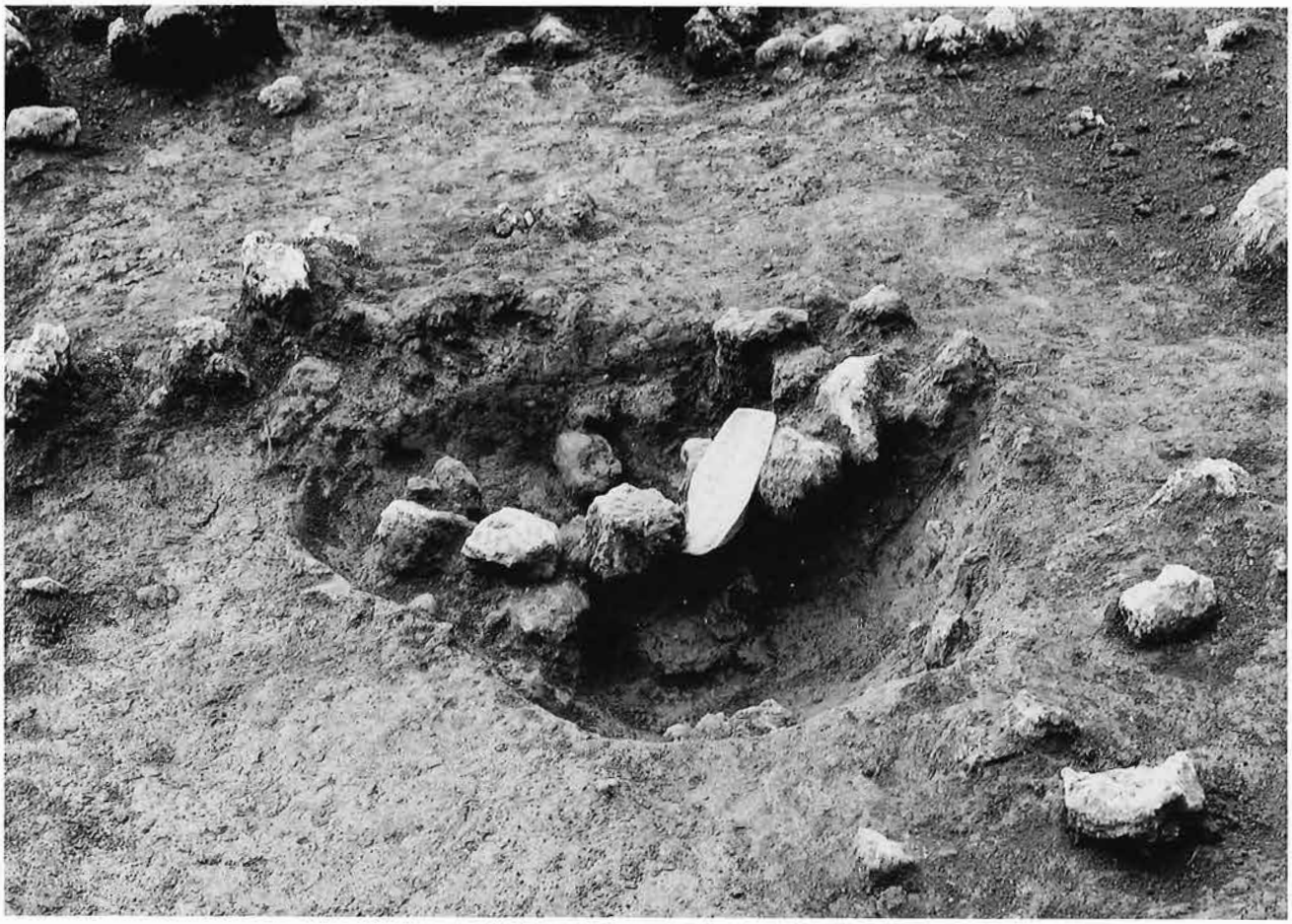
A．ケルン状石組（2）



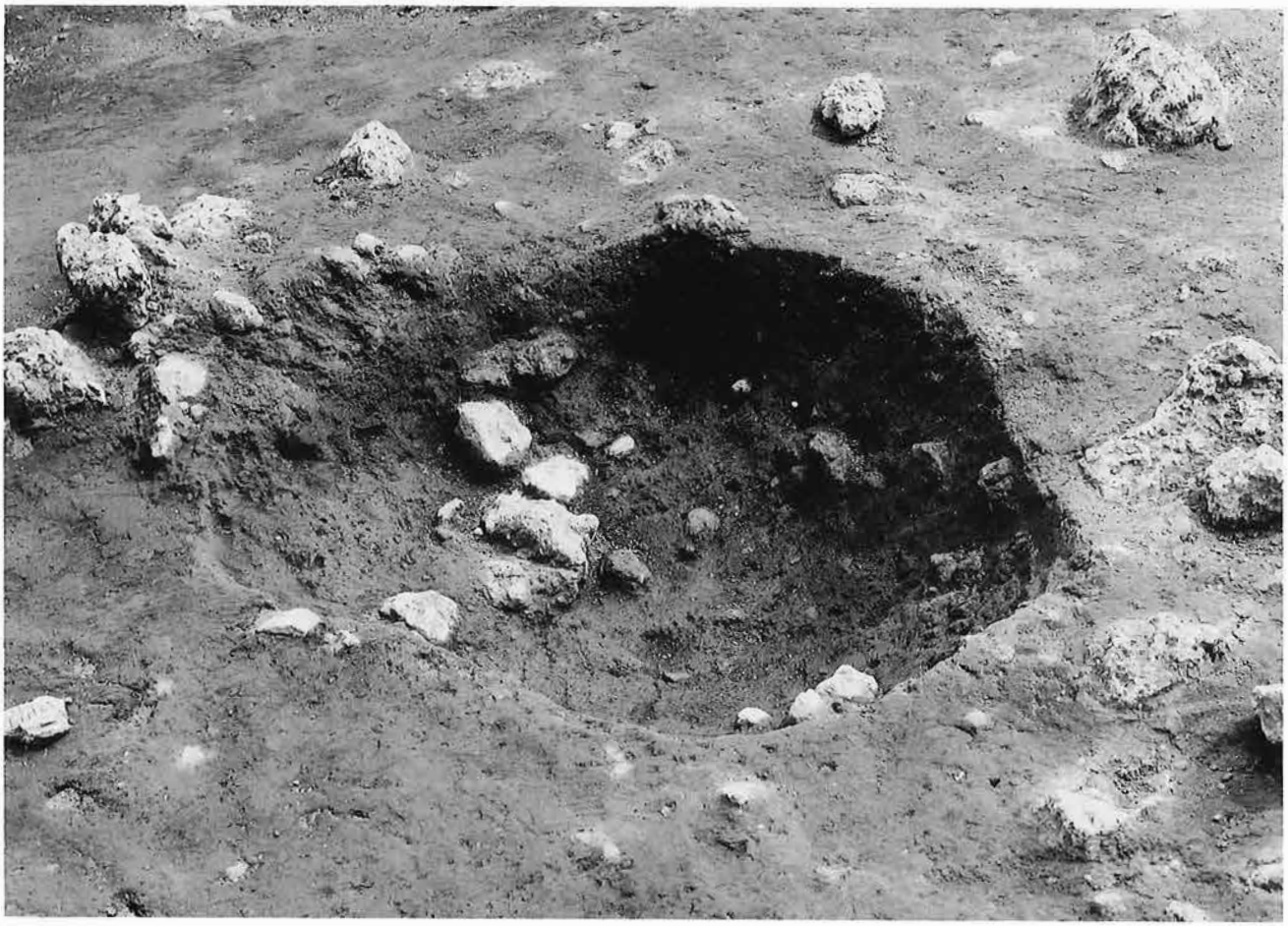
B．石皿を囲む環状石組

A．土壙01～04．08．09

B．土壙05



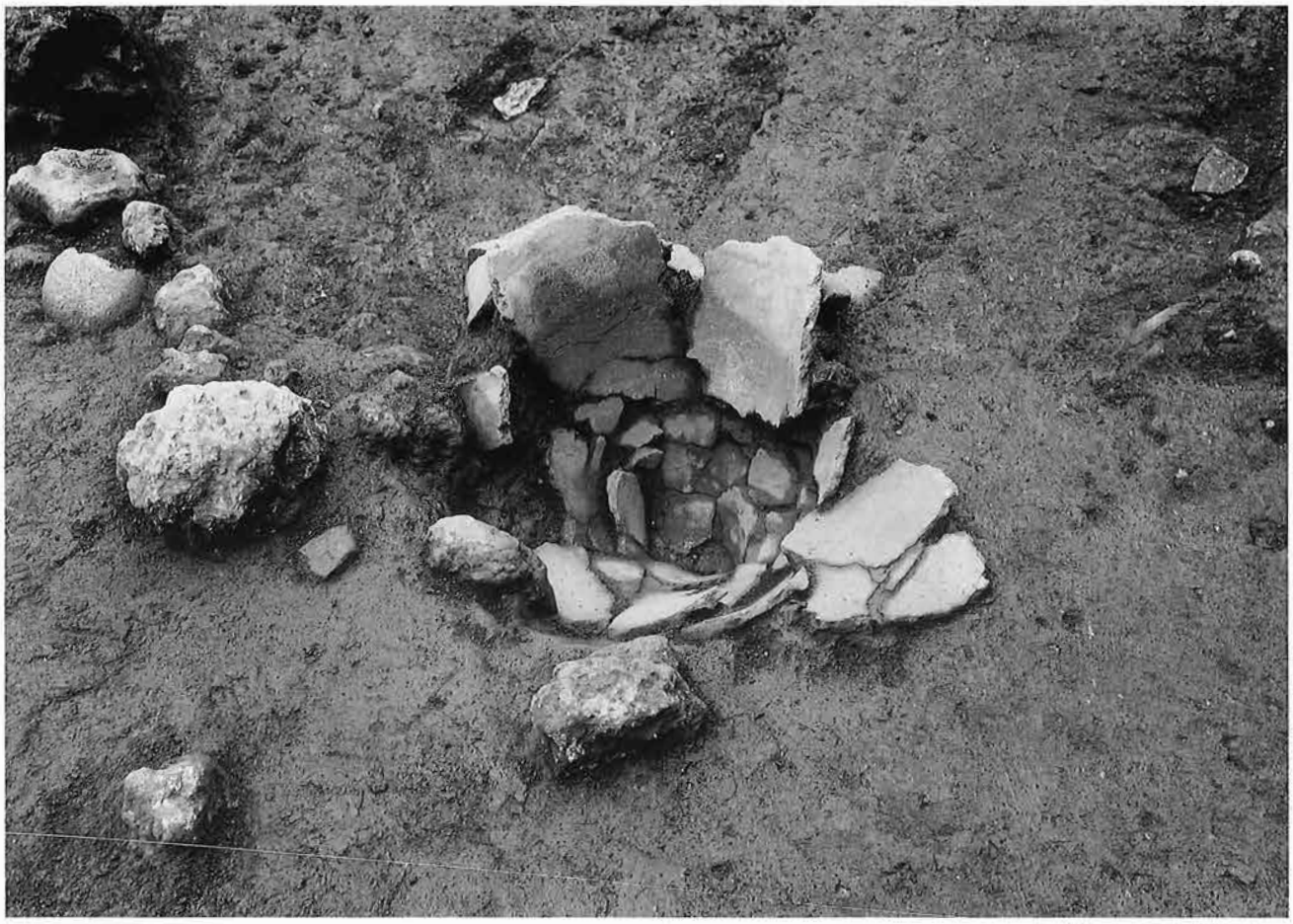
A．焼土を内包する土壙02（断面）



B．焼土を内包する土壙02

A．埋甕01

B．埋甕02



A．埋甕03

B．埋甕04

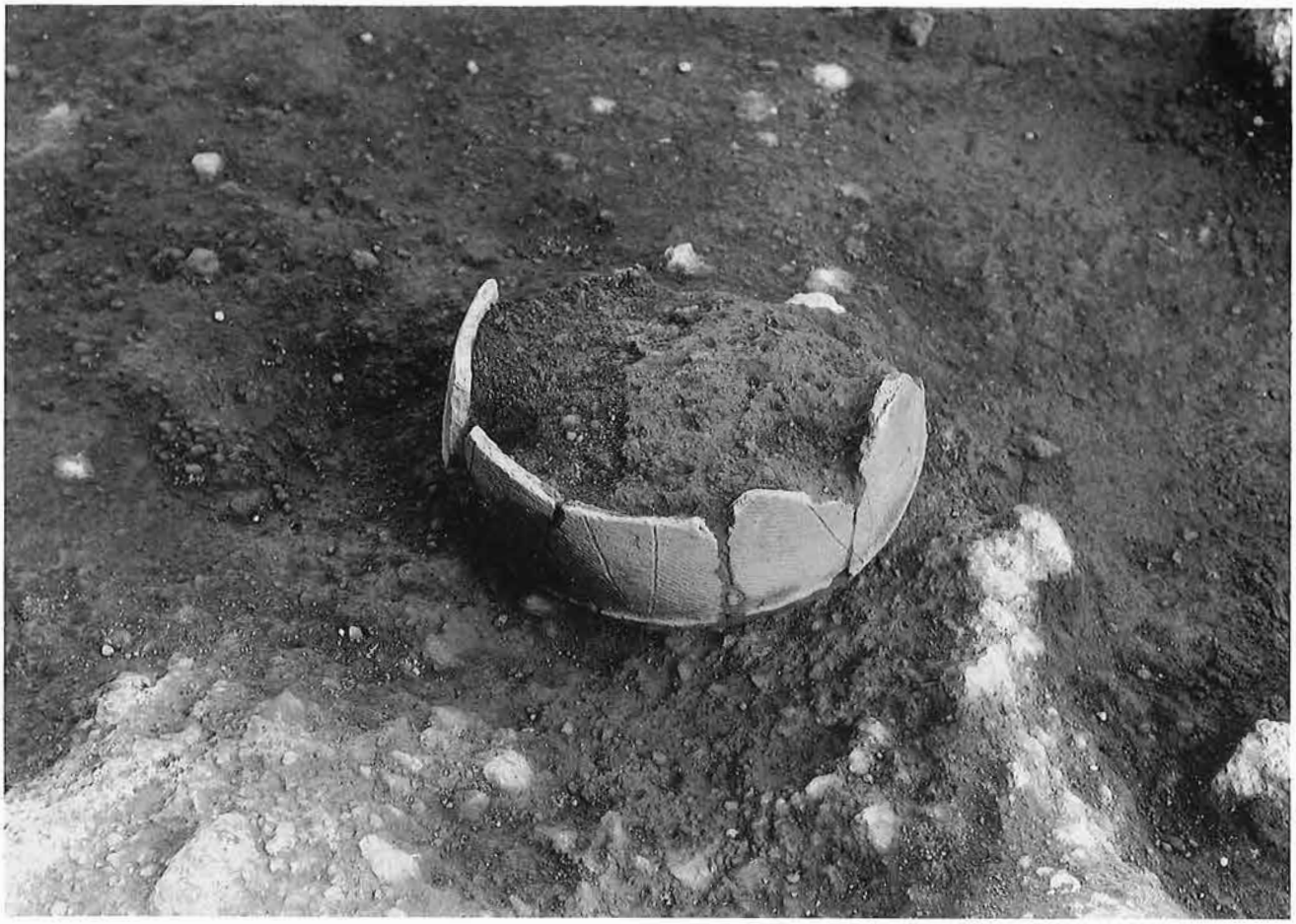
図版－40

A．埋甕06

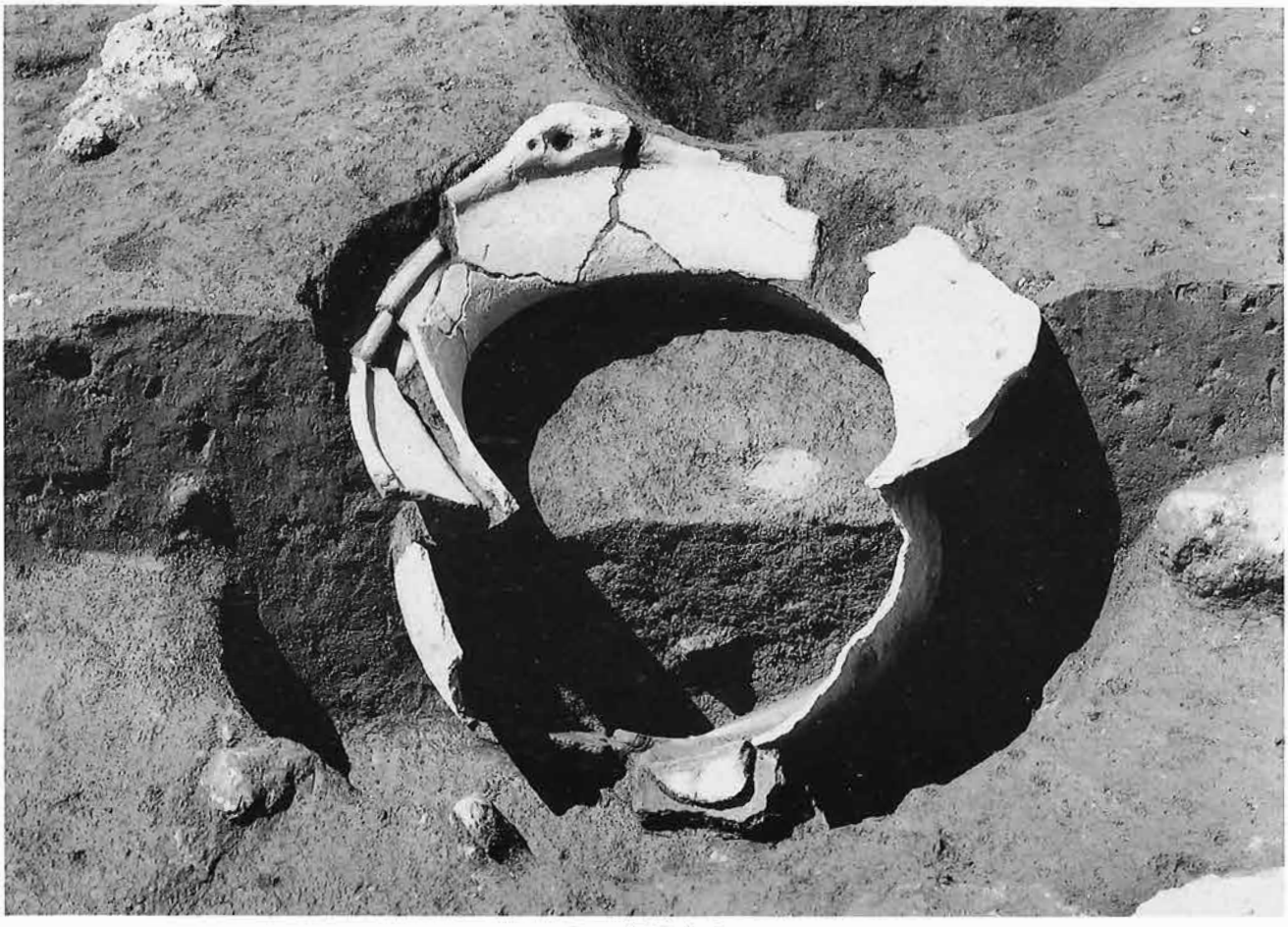
B．埋甕07

A．埋甕08

B．埋甕09

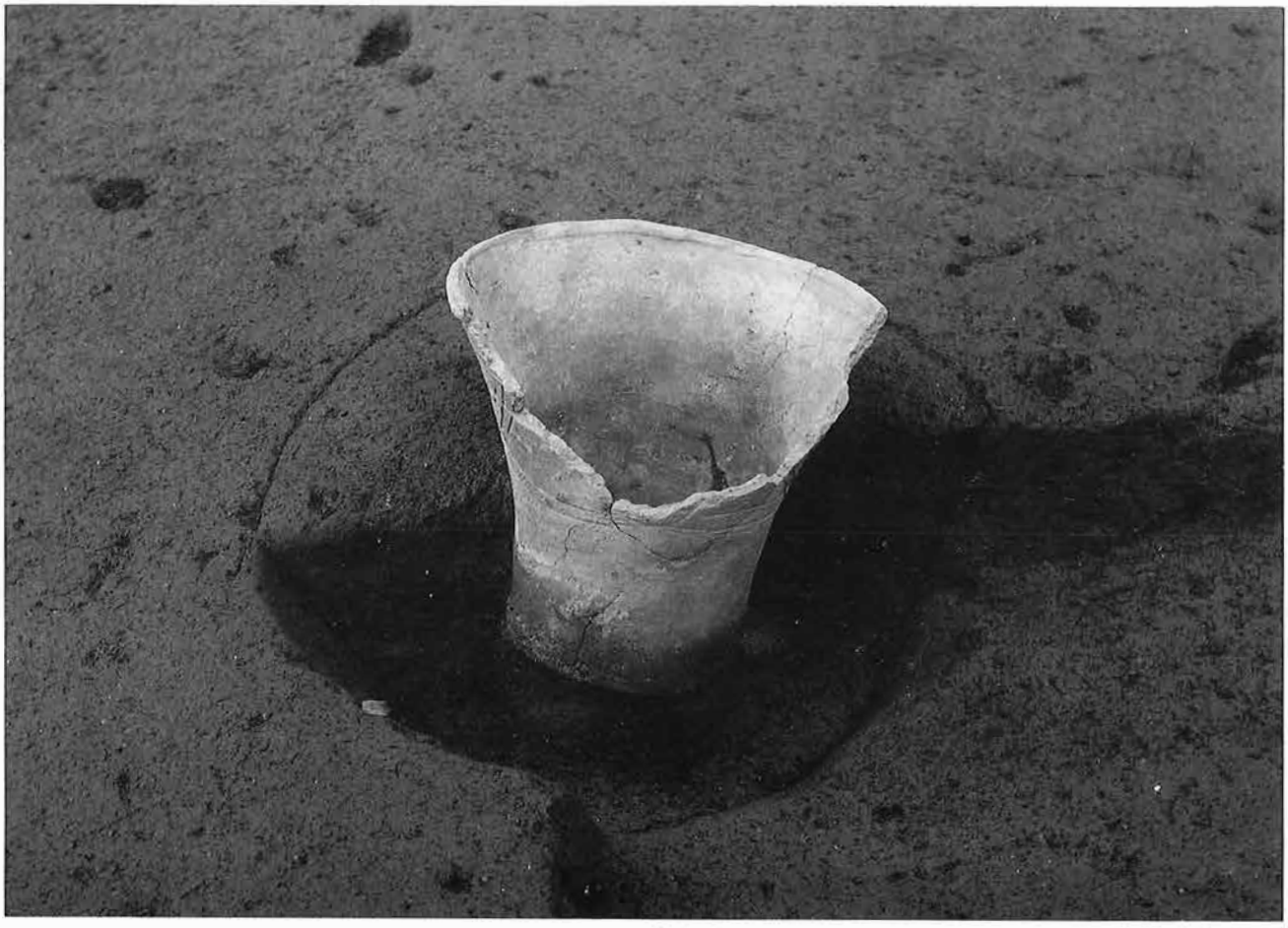


A．埋甕10



B．埋甕11

A．埋甕12



B．埋甕13

A．炉01

B．炉02

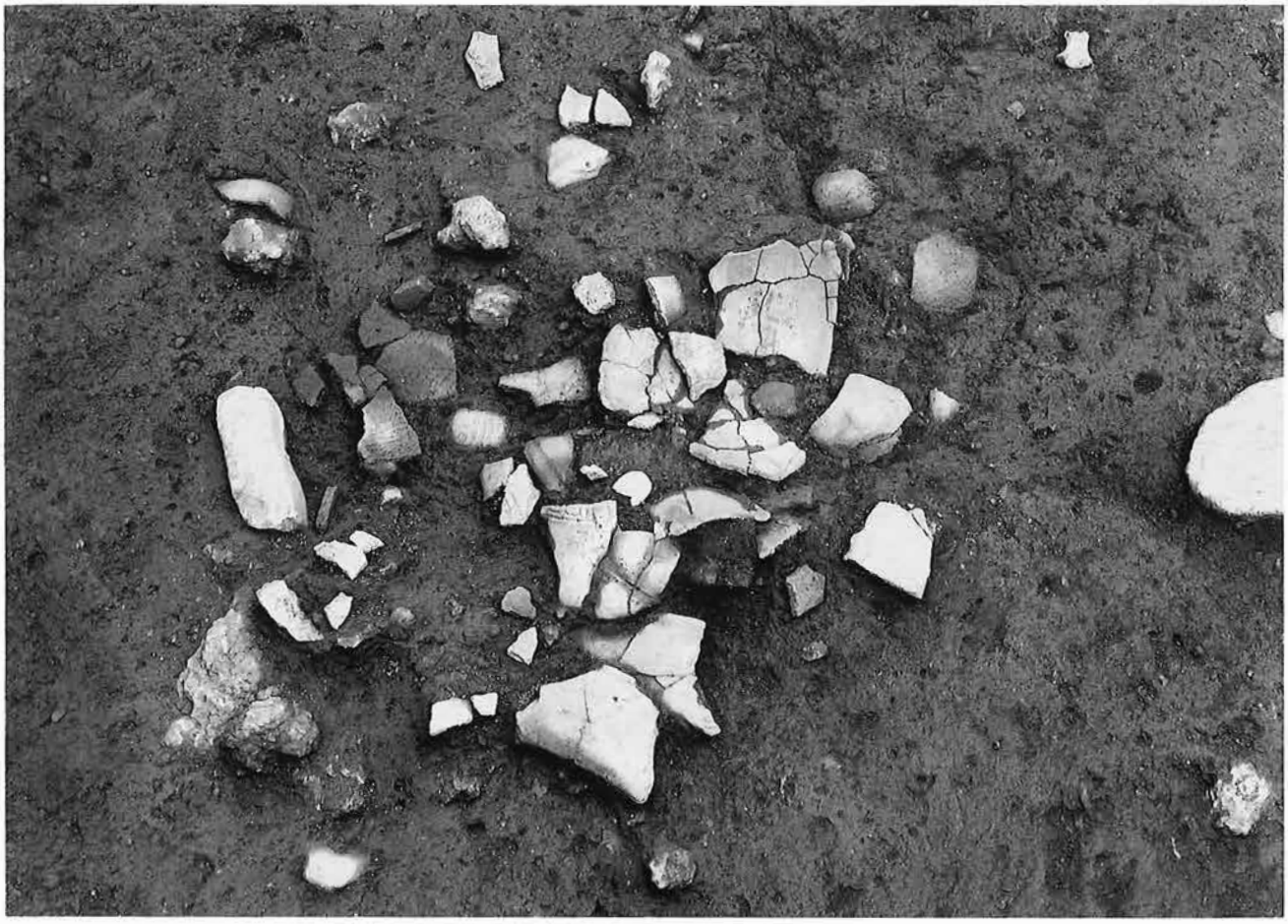
A．炉03

B．炉04

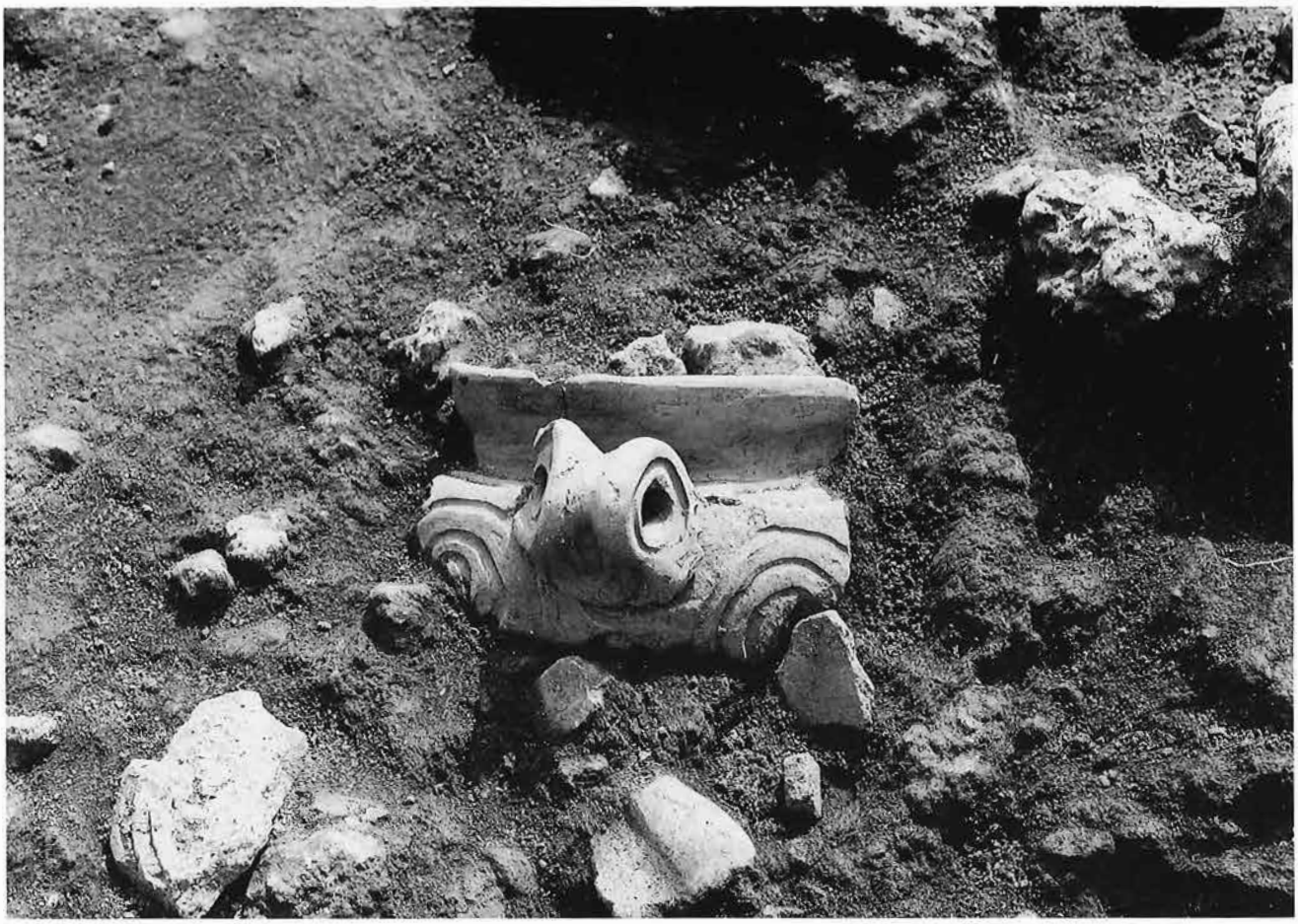
A．土器出土状況－1

B．土器出土状況－2

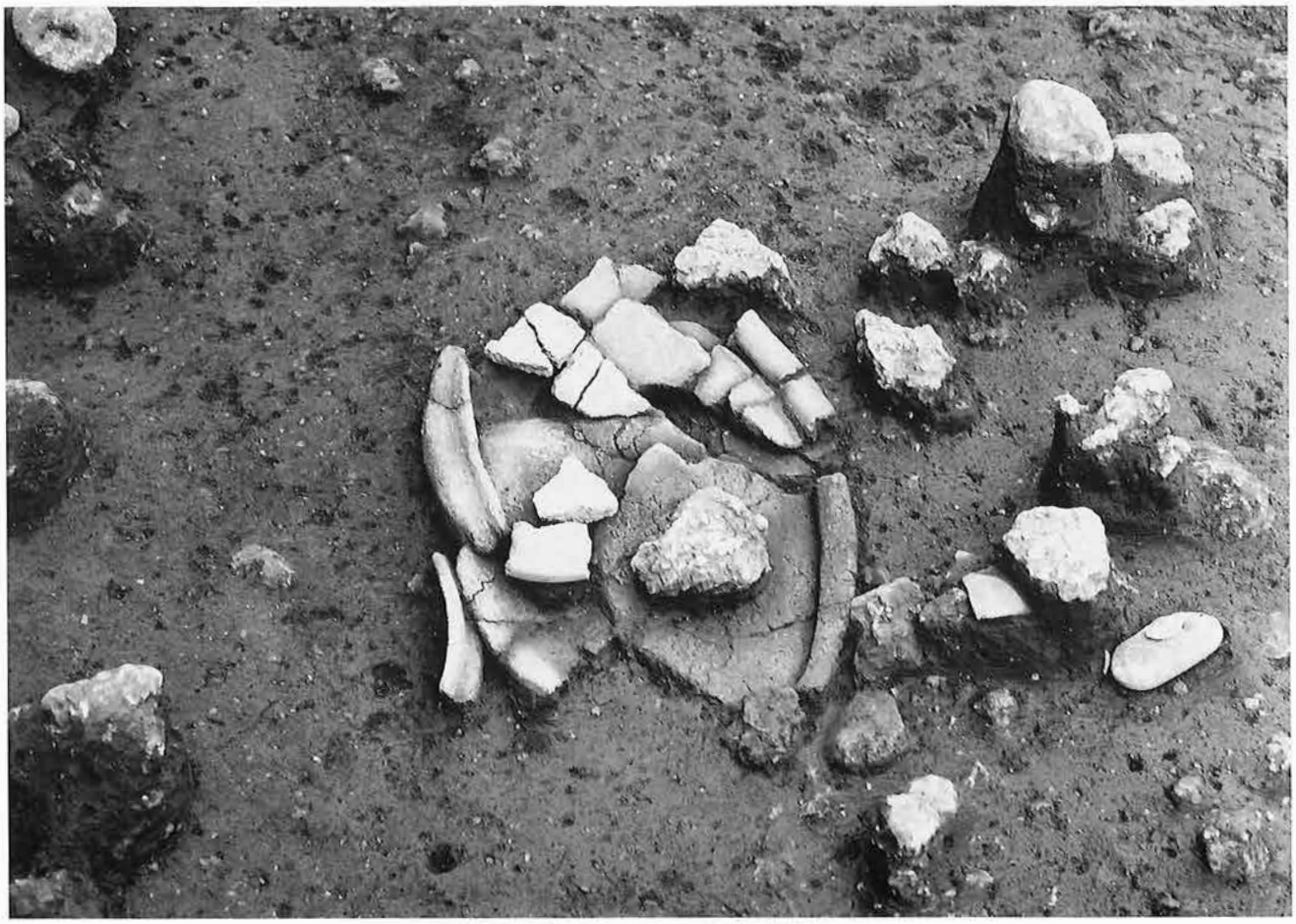
A．土器出土状況－3



B．土器出土状況－4



A．土器出土状況－5

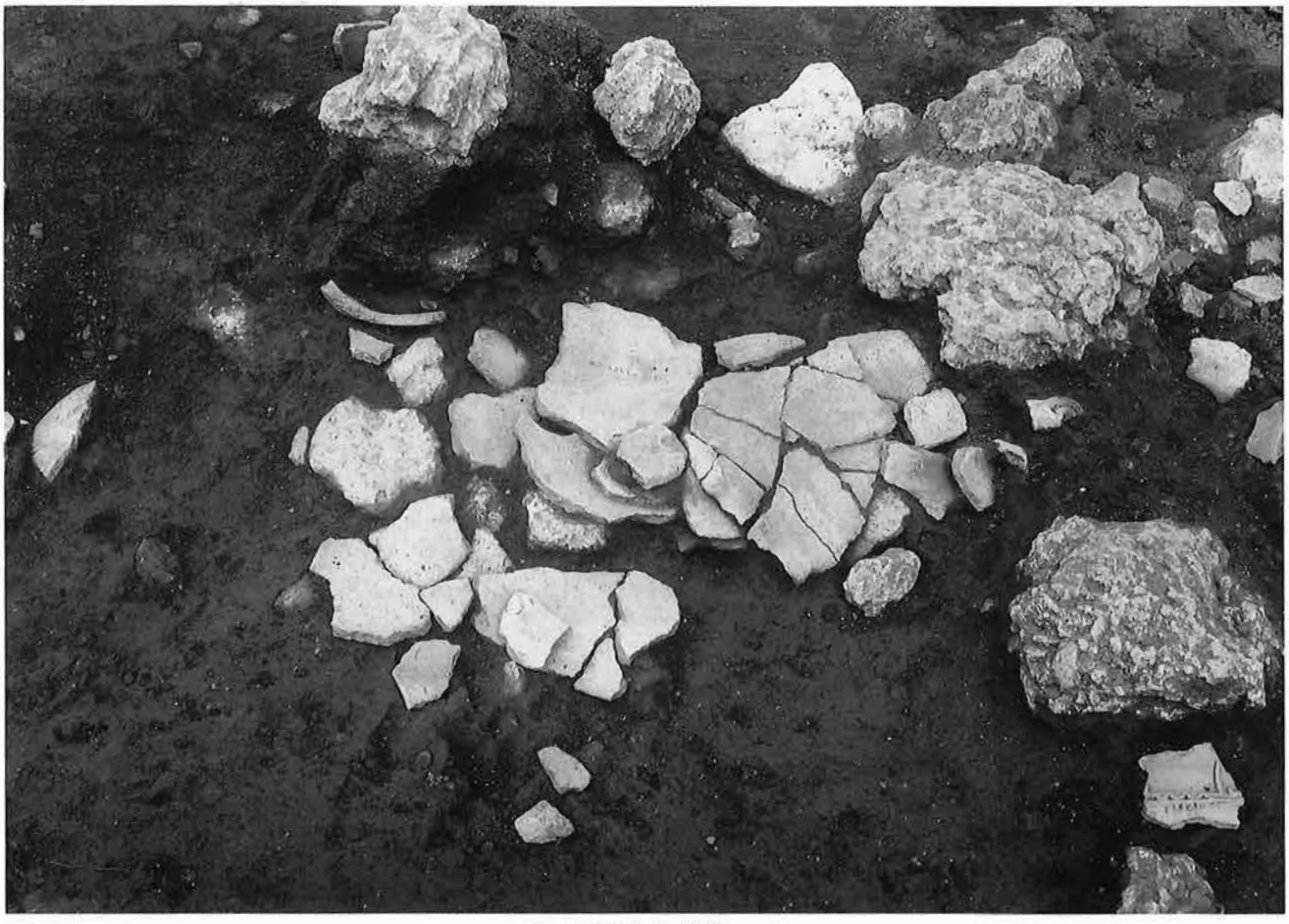


B．土器出土状況－6

A．土器出土状況－7

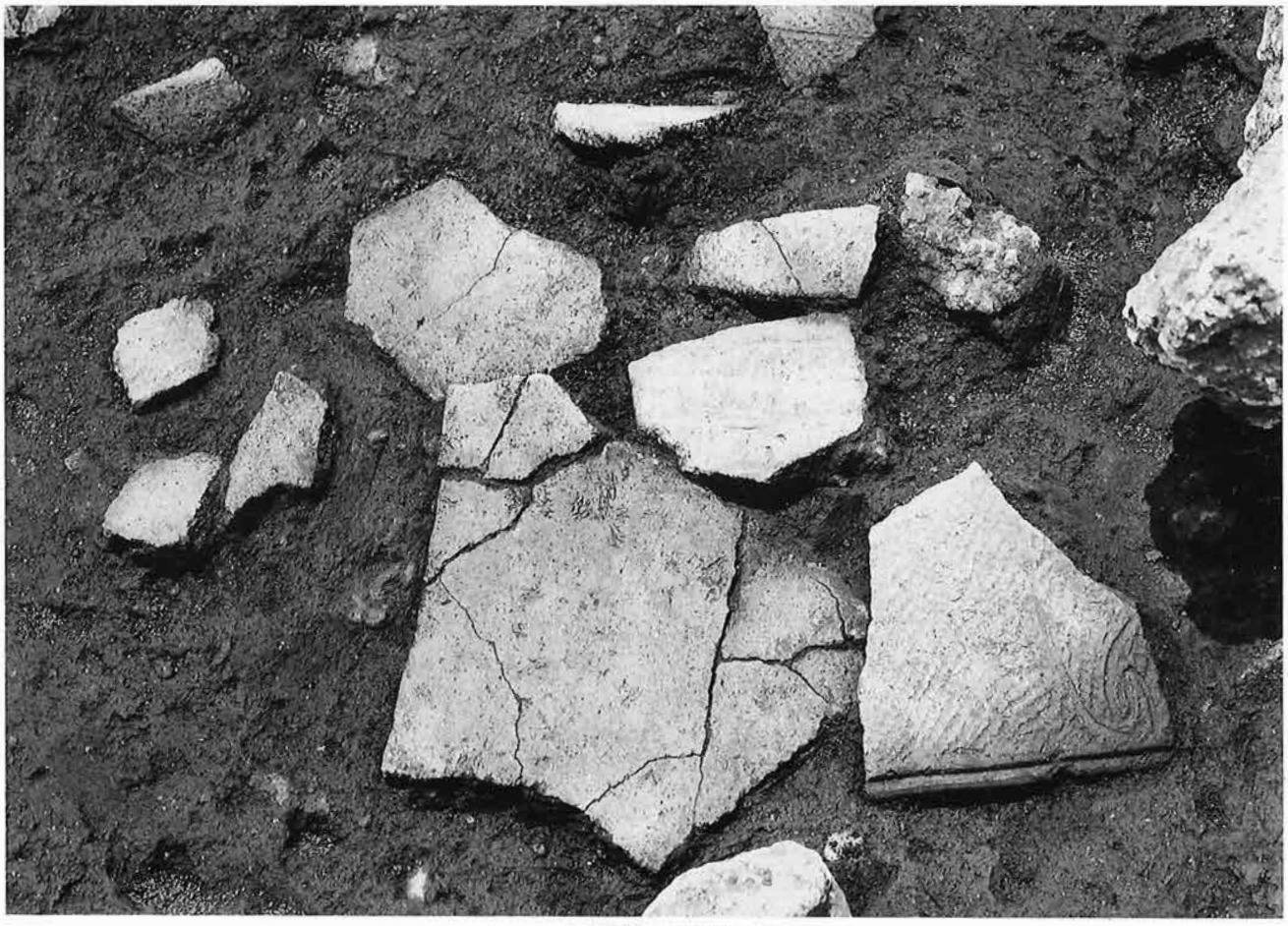
B．土器出土状況－8

A．土器出土状況－9



B．土器出土状況－10

A．土器出土状況－11



B．土器出土状況－12

図版－52 出土遺物(1)

土器０３

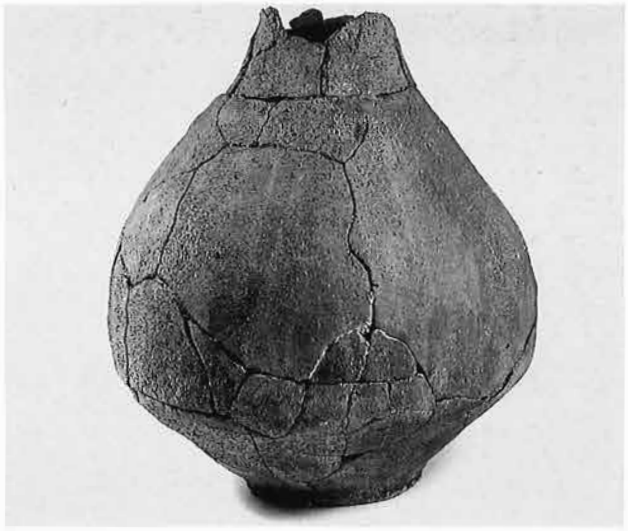
土器４８

土器１１

土器６４

土器４６

土器６５



土器69

土器76

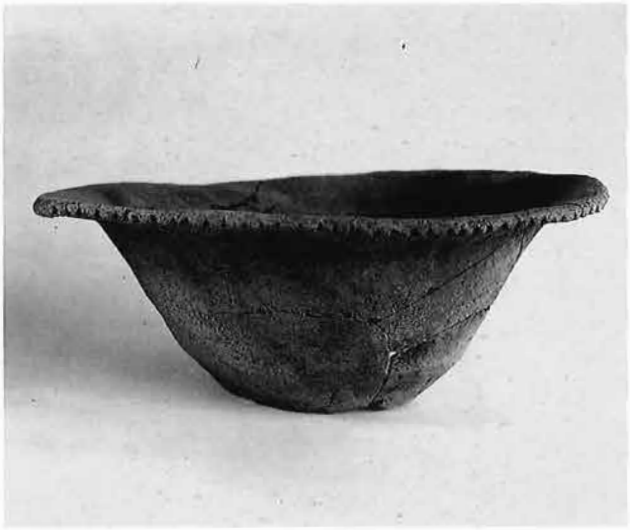
土器72

土器77

土器75

土器114

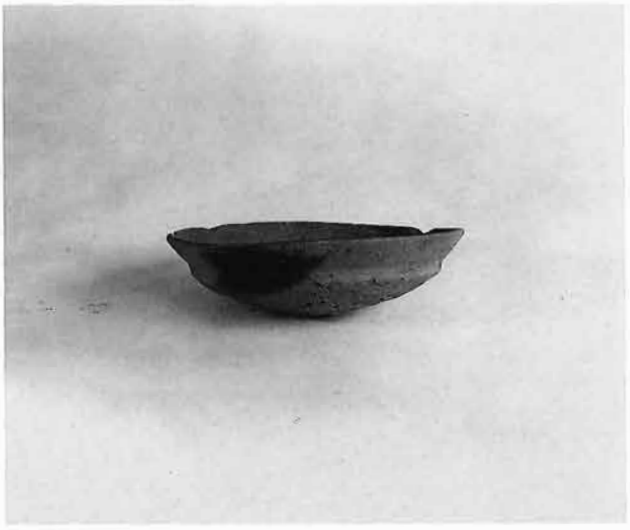
図版－54 出土遺物(3)



土器142

土器159

土器144



土器160

土器146

土器166

土器0201

土器1003

土器1001

土器1004

土器1002

土器1005

図版－56 出土遺物(5)

土器1025

土器1105

土器1101(正面)

土器1101(横)

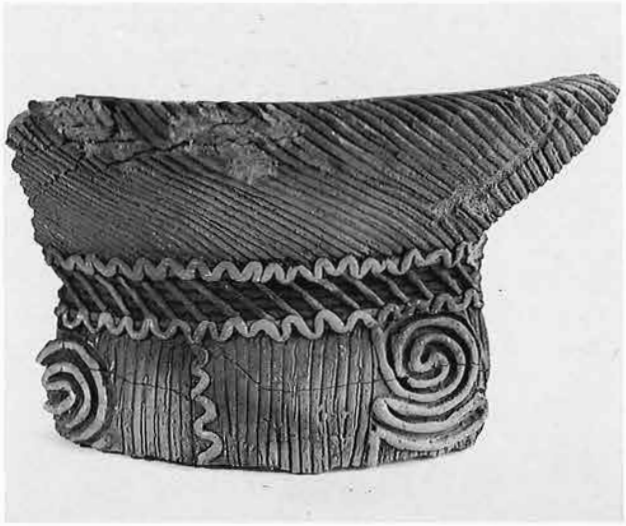
土器1102

土器1107

土器1109

土器1110

土器1119



土器1112

土器1122

土器1114

土器1123

図版－58 出土遺物(7)

土器1124

土器1125

土器1129

土器1133

土器1128

土器1136

土器1137

土器1201

土器1142

土器1202

土器1143

土器1301

図版－60 出土遺物(9)

土器1305

土器1501

土器1306

土器1502

土器1401

土器1511

土器1520

土器1528

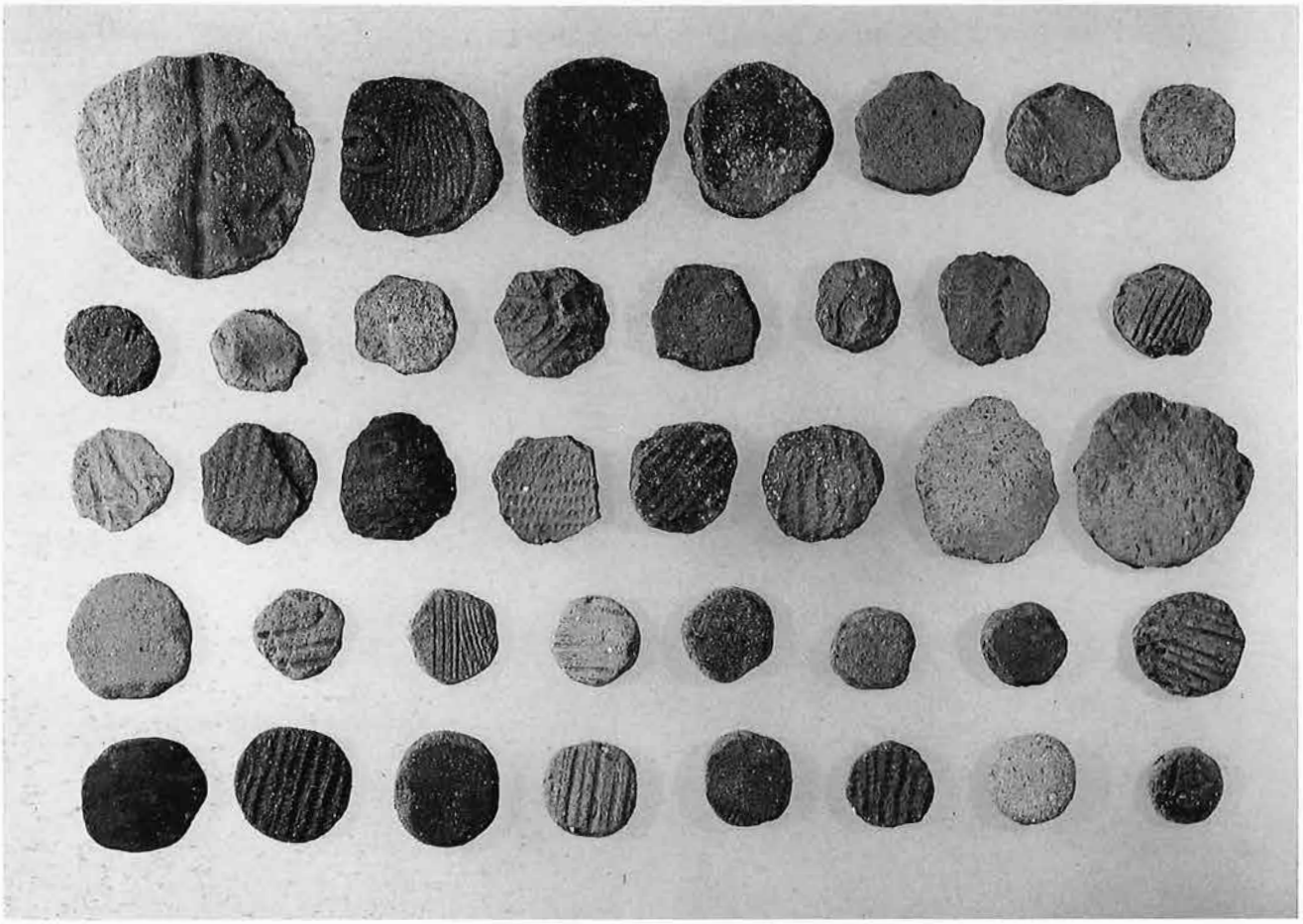
土器1537

土器1535

土器1538

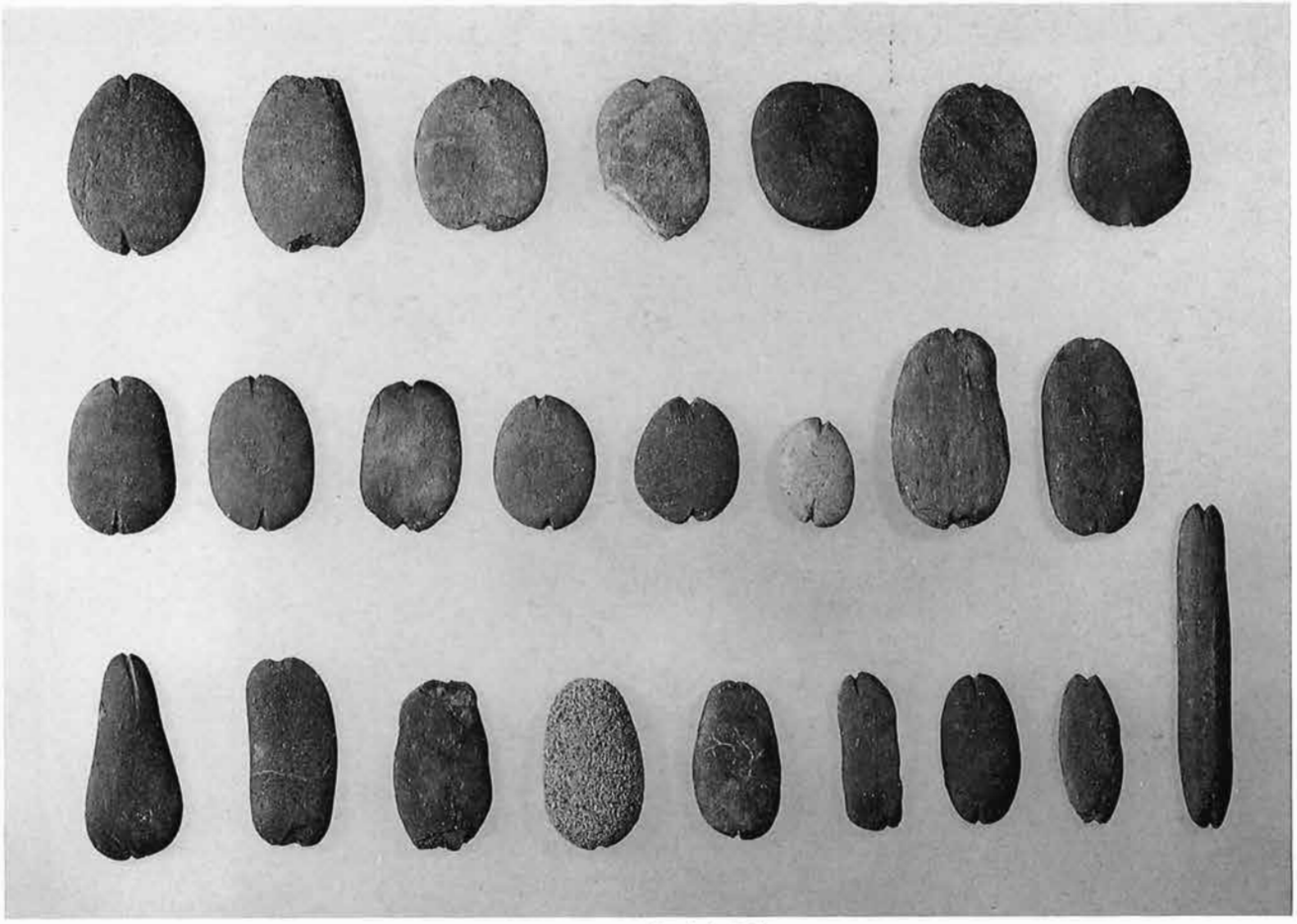
土器1540

図版－62 出土遺物(11)

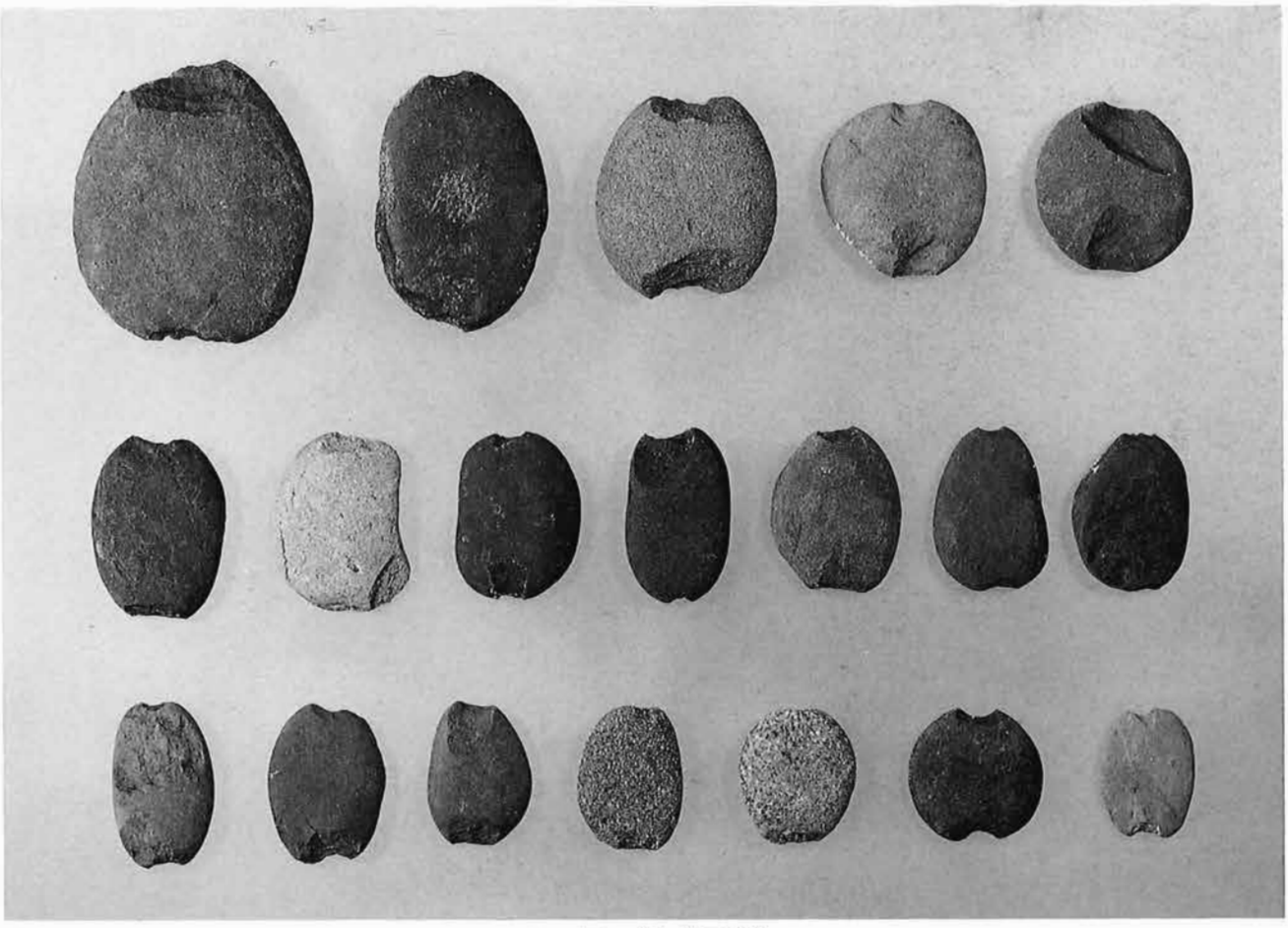


A．土器片円盤

B．土器片錘



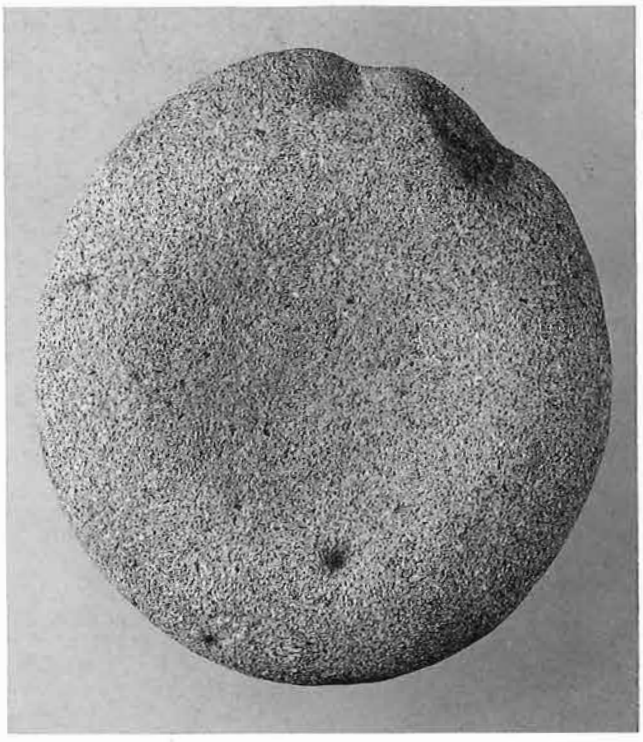
A．石　錘（磨製）



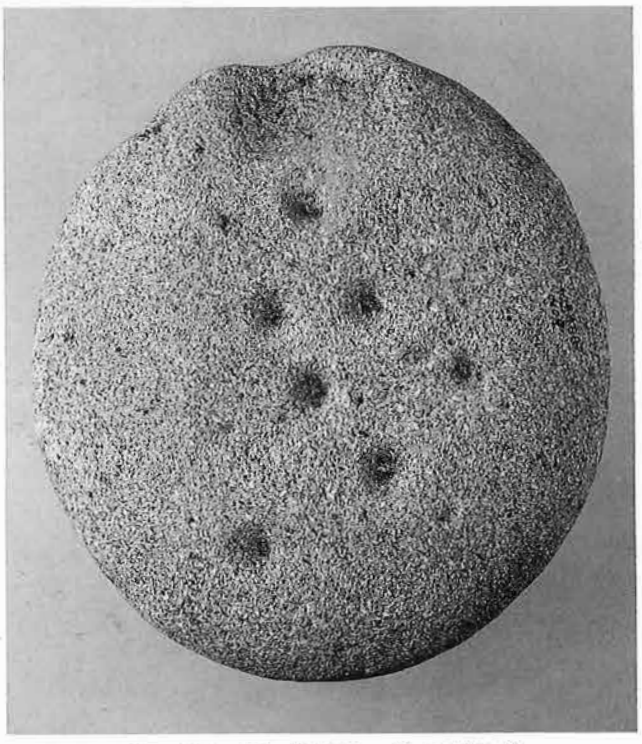
B．石　錘（打製）

図版－64 出土遺物(13)

A．石　皿



B．石　皿（表面）

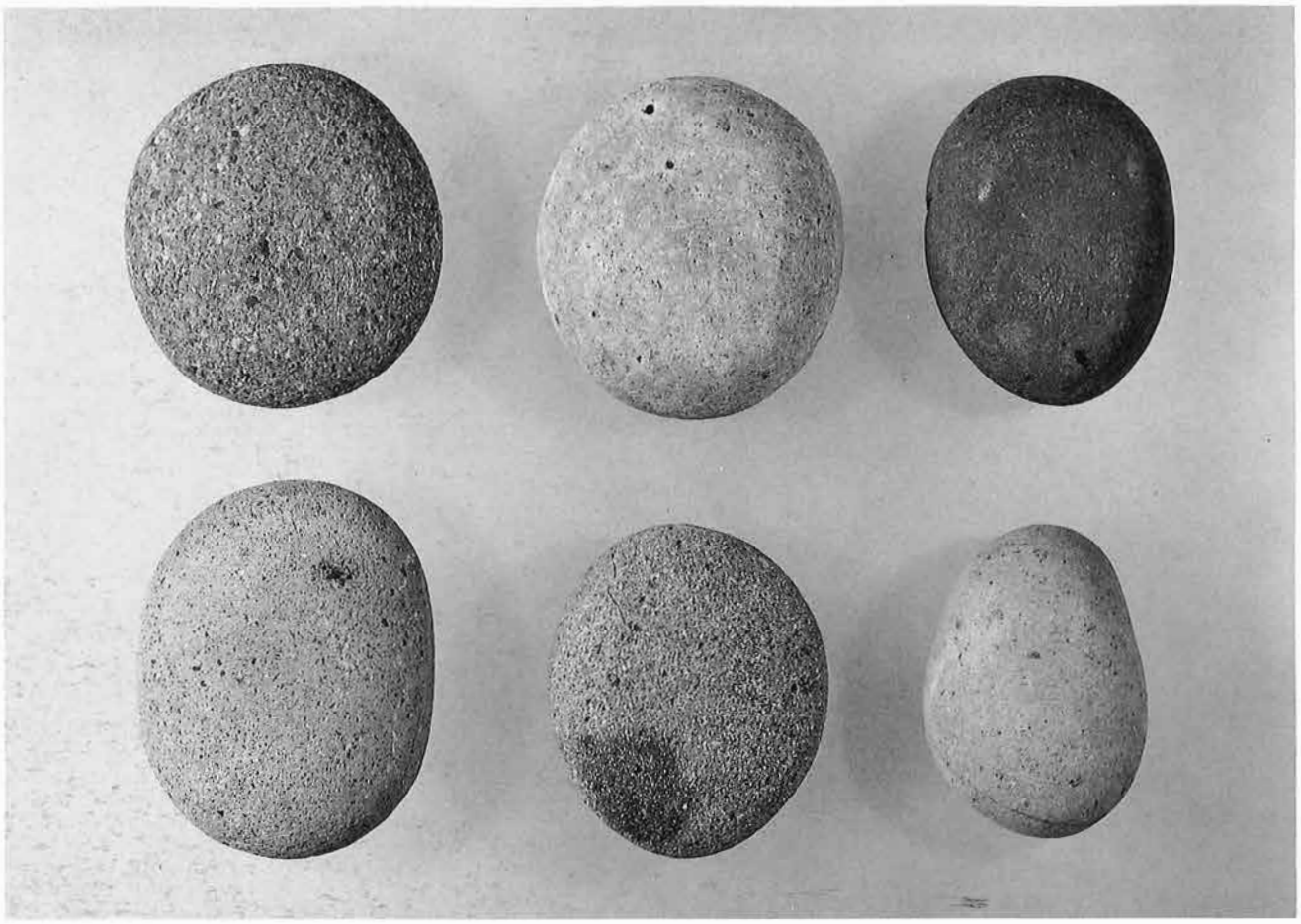


C．石　皿（裏面－蜂の巣石）

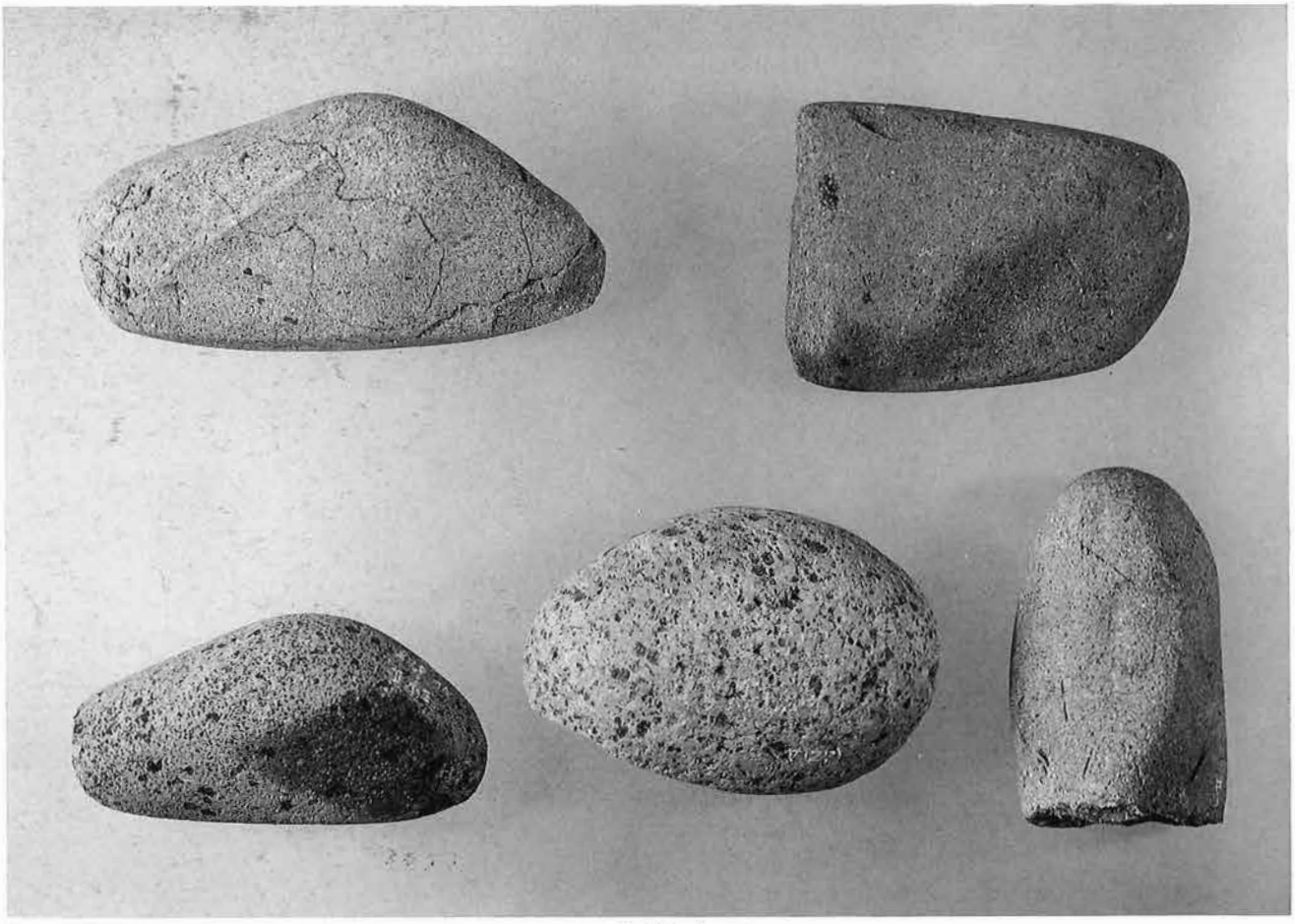
A．台　石（平坦面使用）

B．台　石（凸面使用）

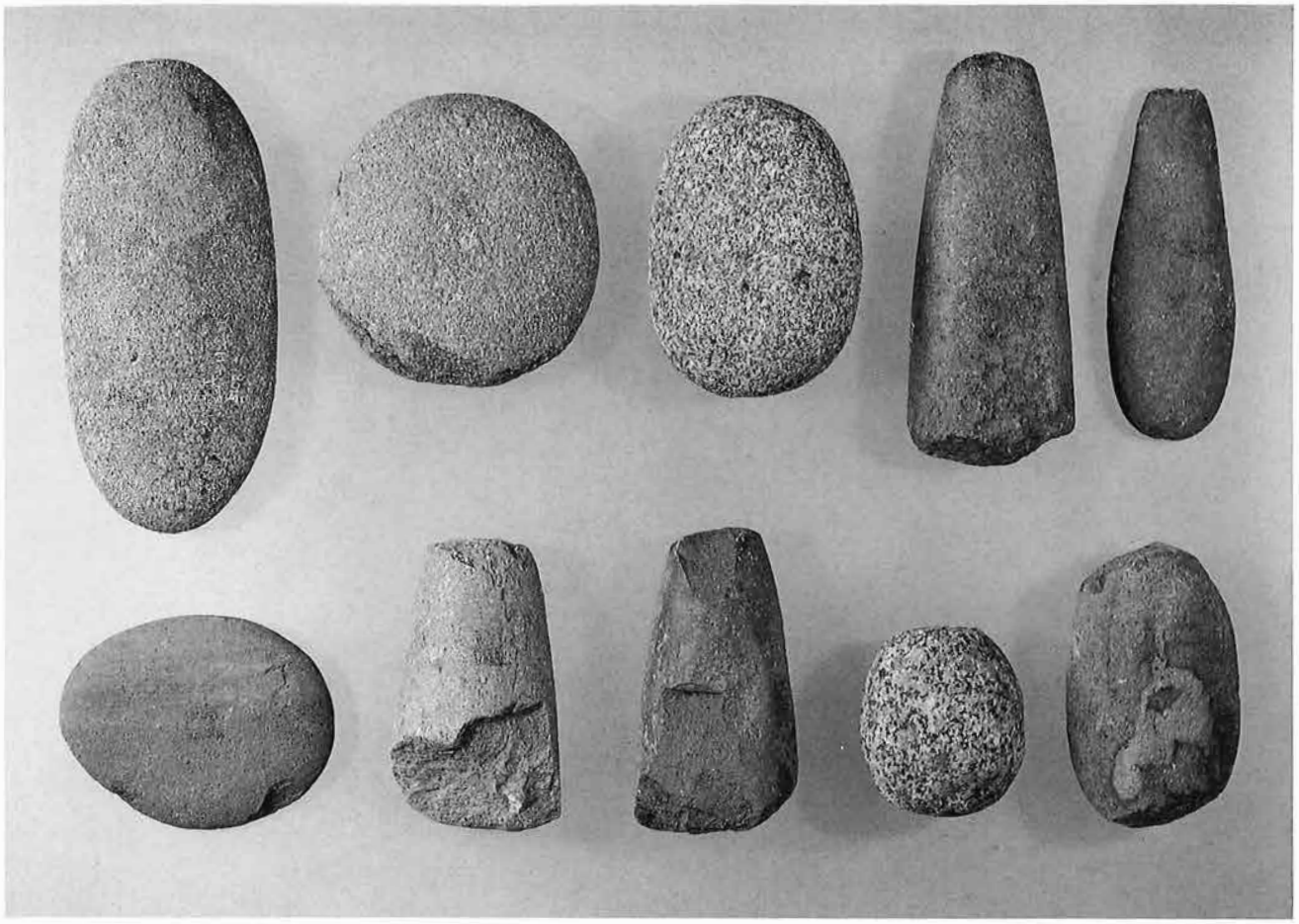
図版－66 出土遺物(15)



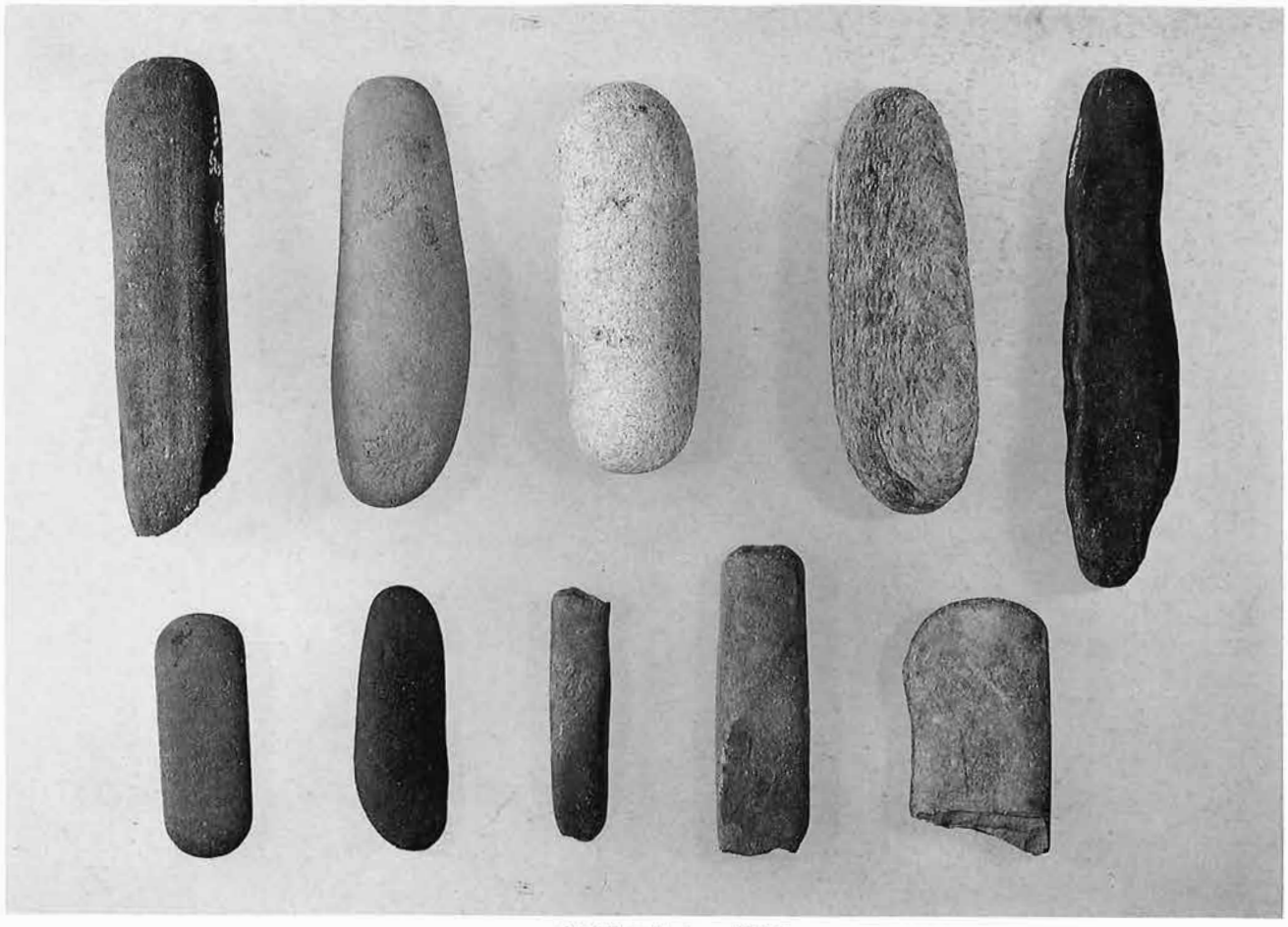
A．磨　石　類



B．特殊磨石

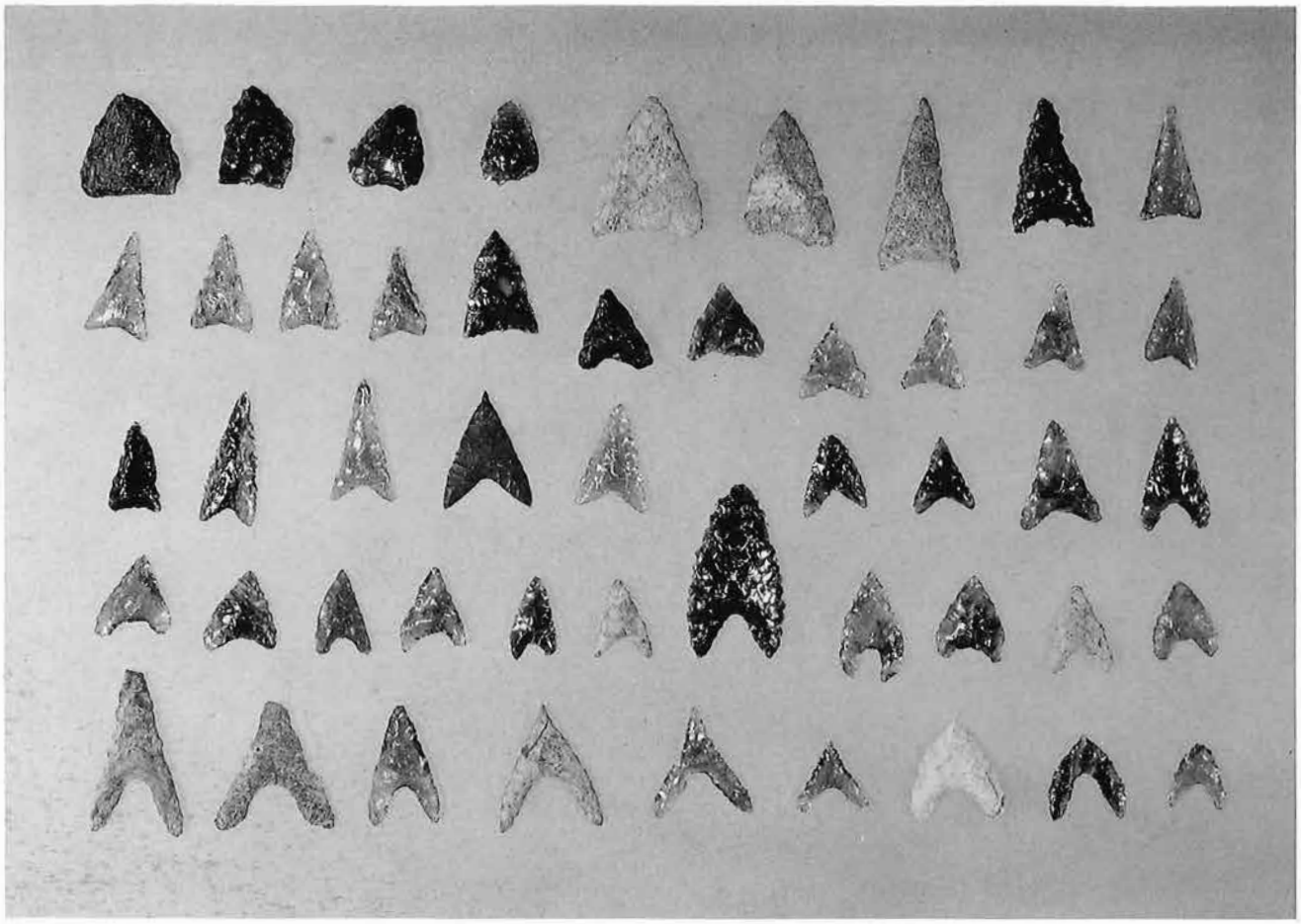


A．敲　石

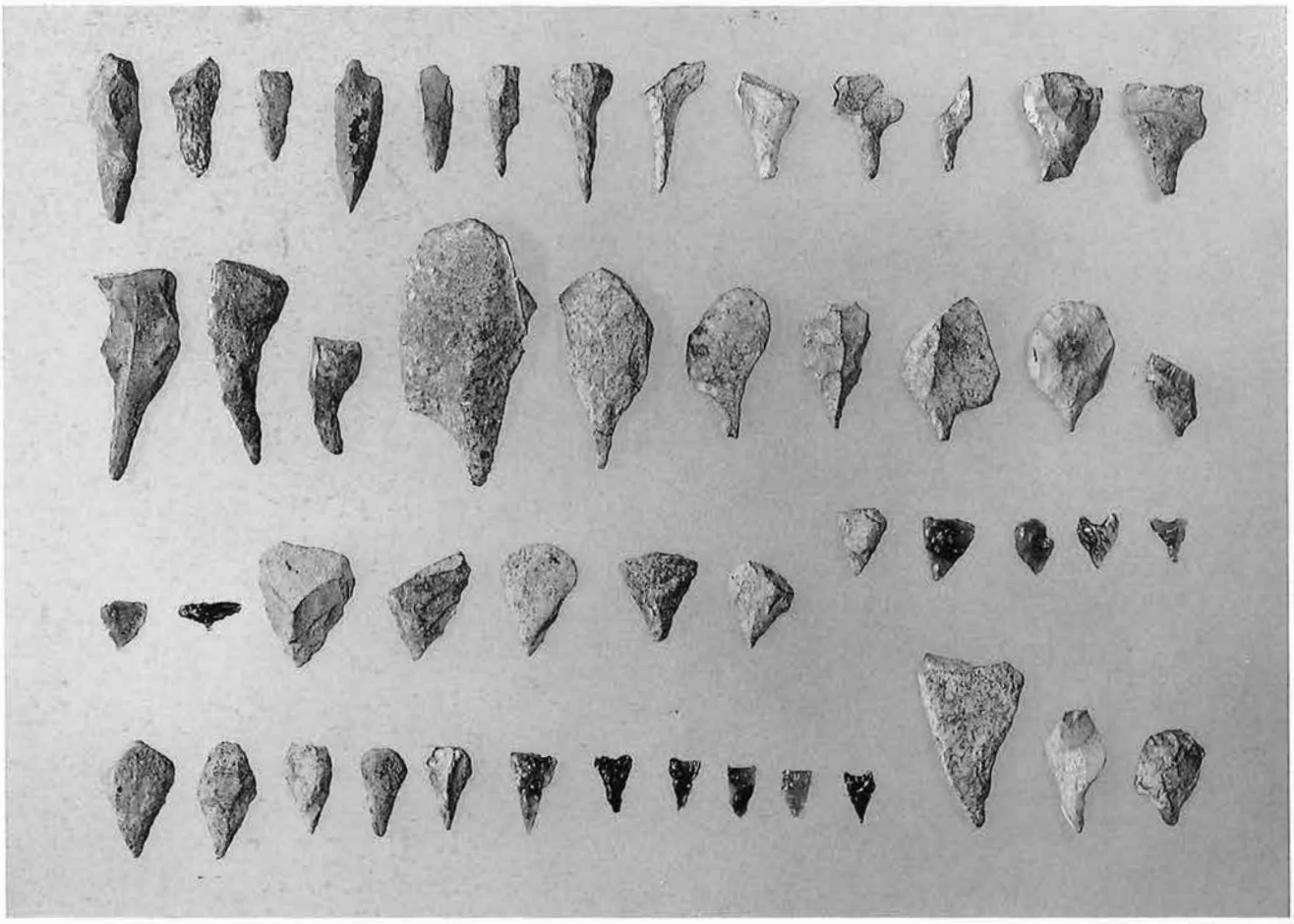


B．磨り面をもつ敲石

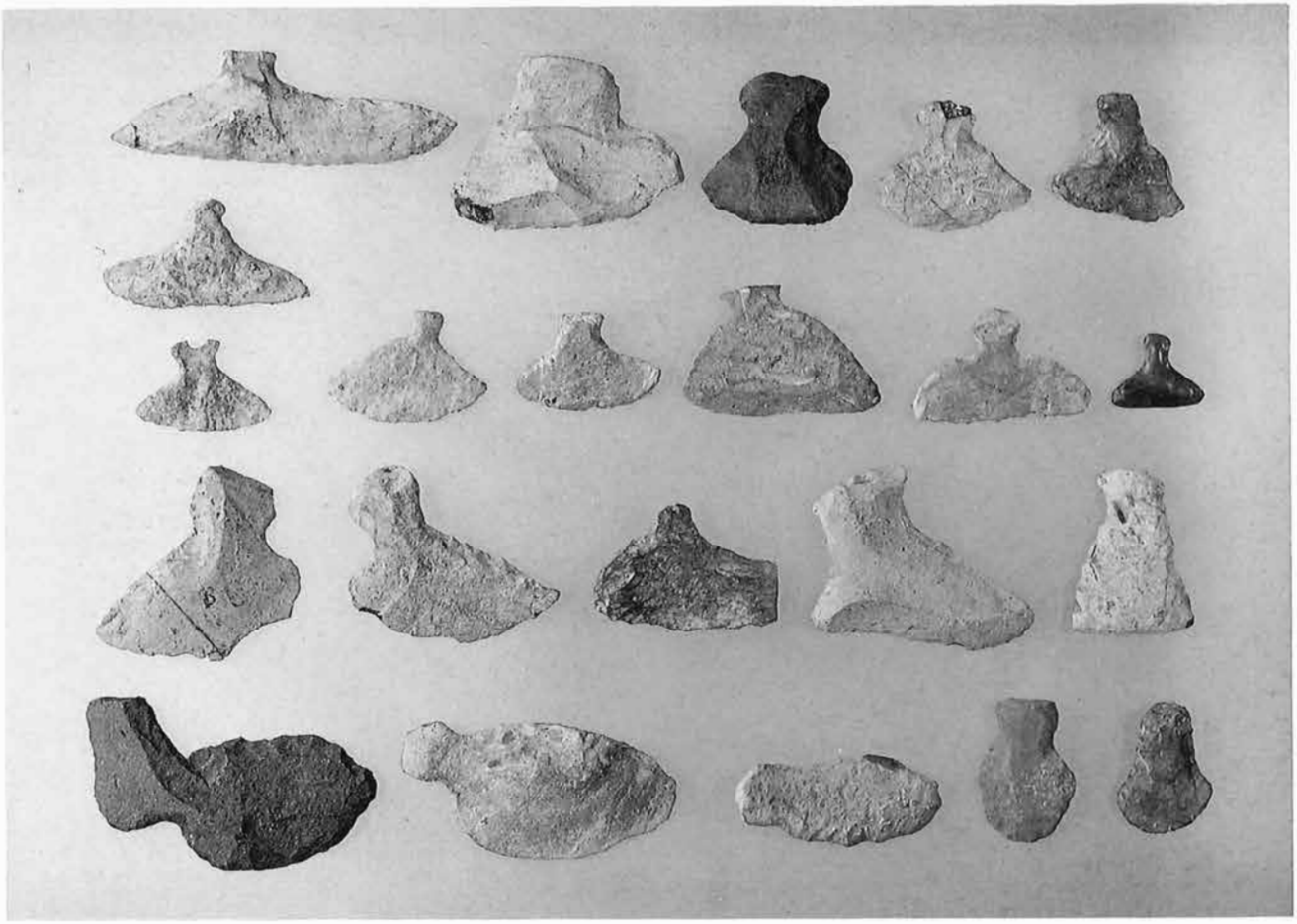
図版－68 出土遺物(17)



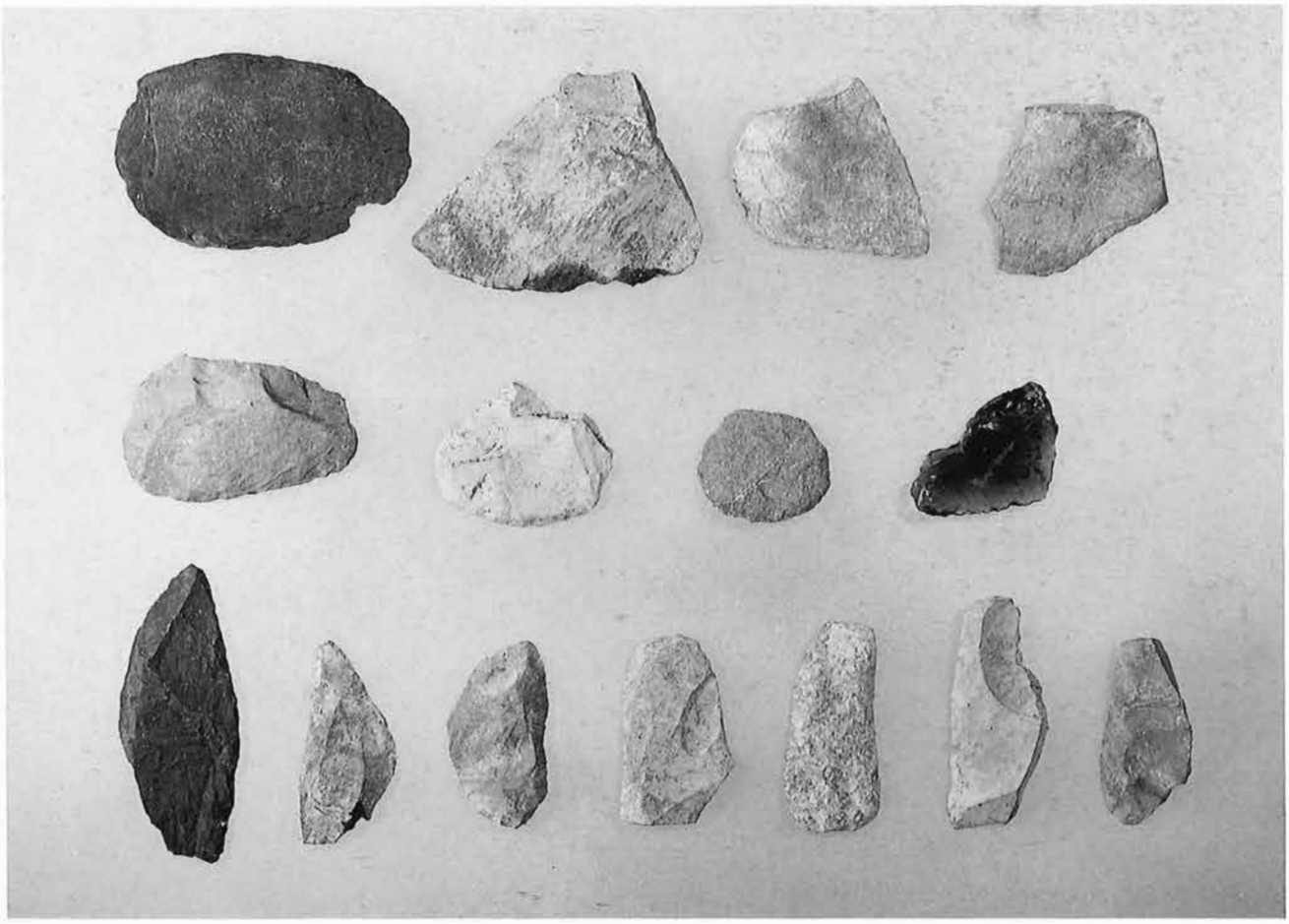
A．石　鏃



B．石　錐

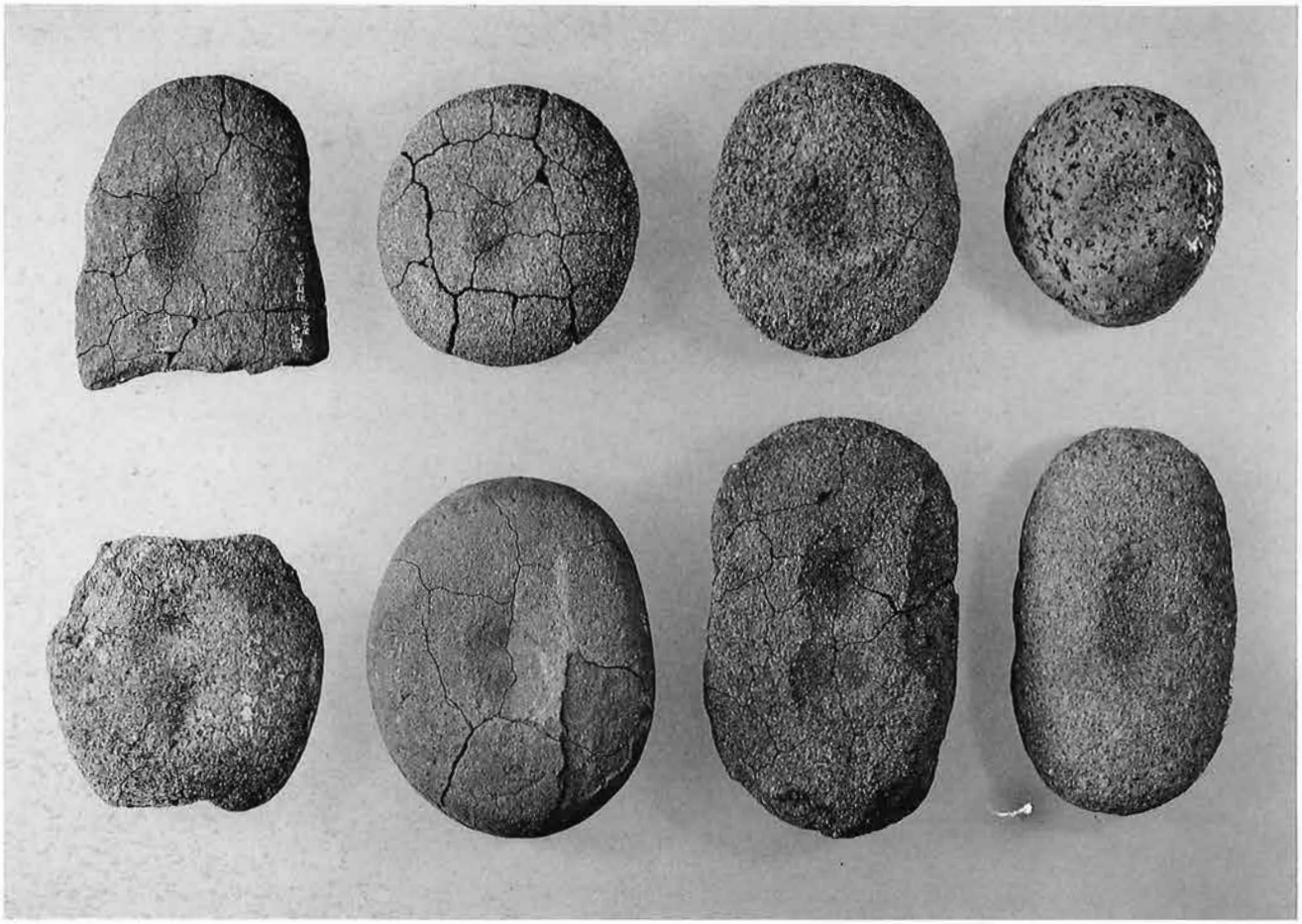


A．石　匙



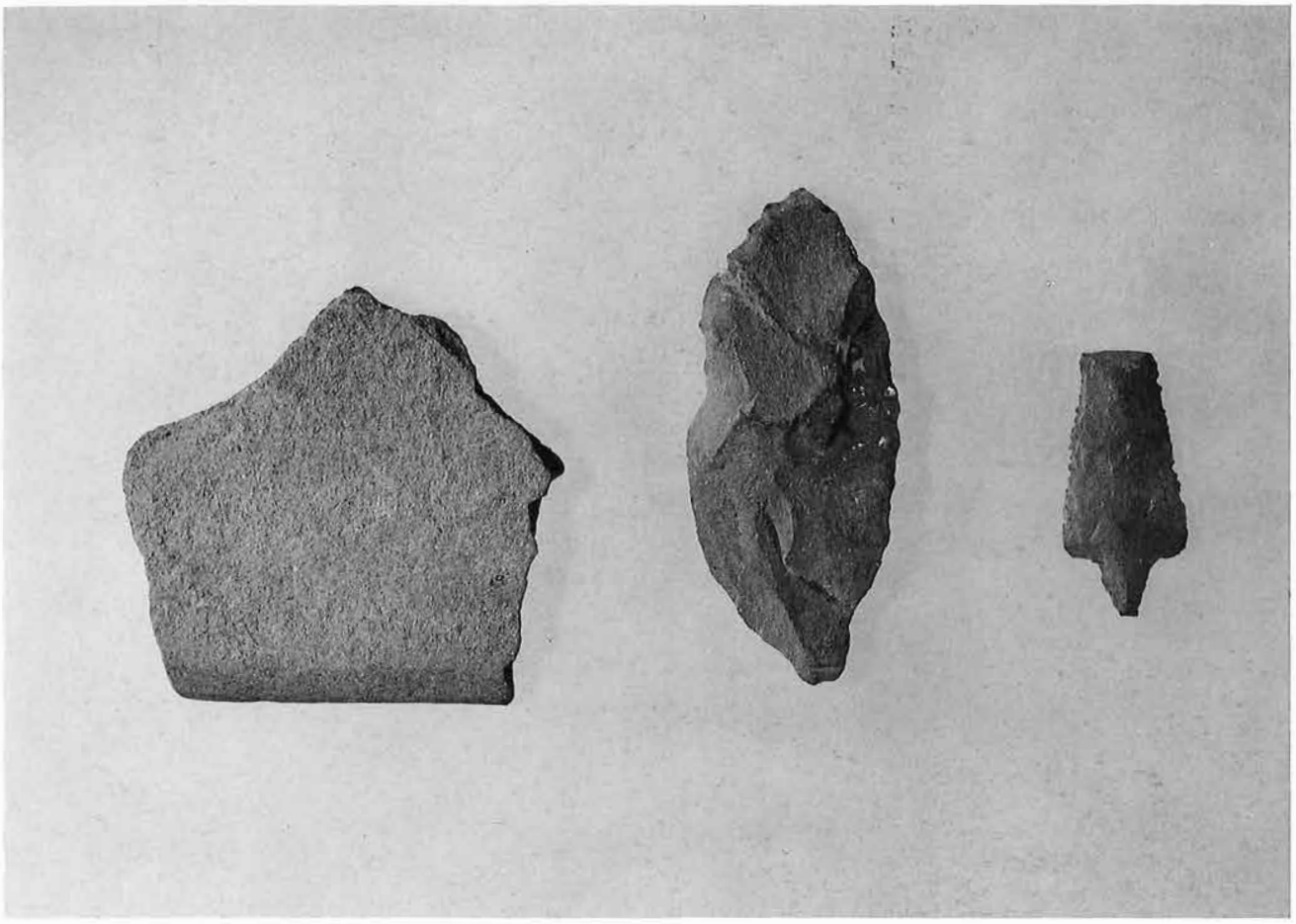
B．スクレイパー類

図版－70 出土遺物(19)

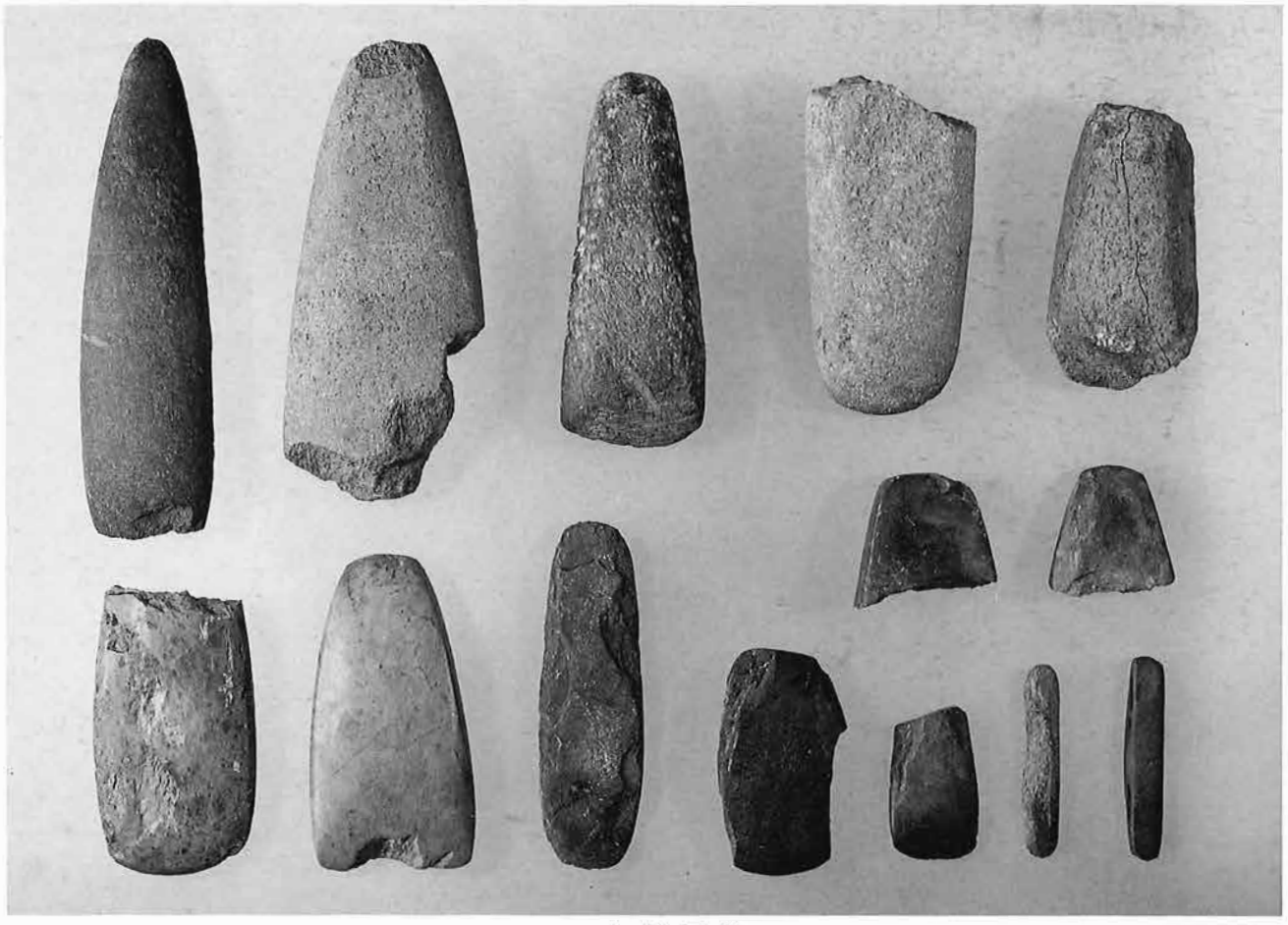


A．凹　石

B．砥　石

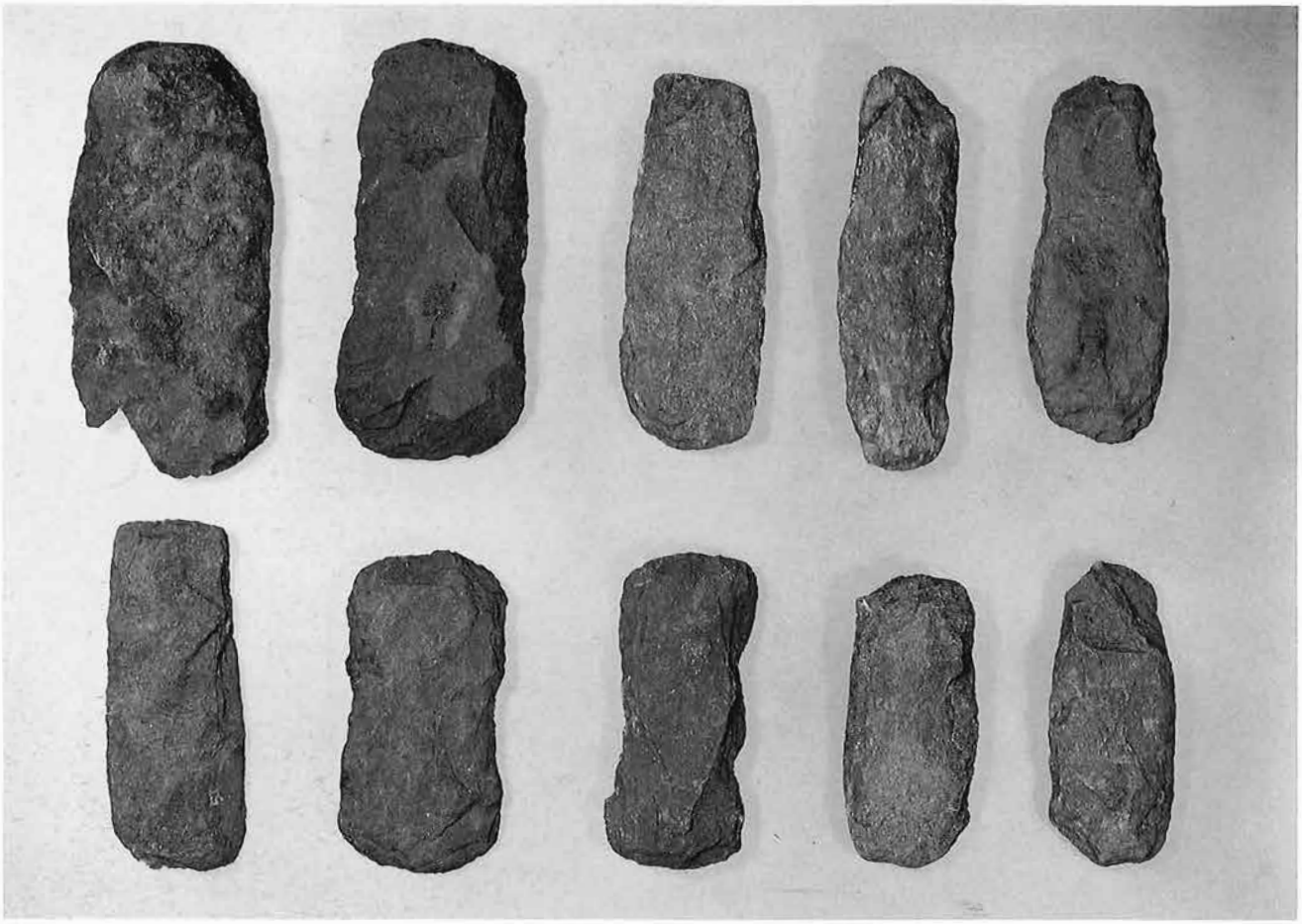


A．石鋸（右）と尖頭器（左２）

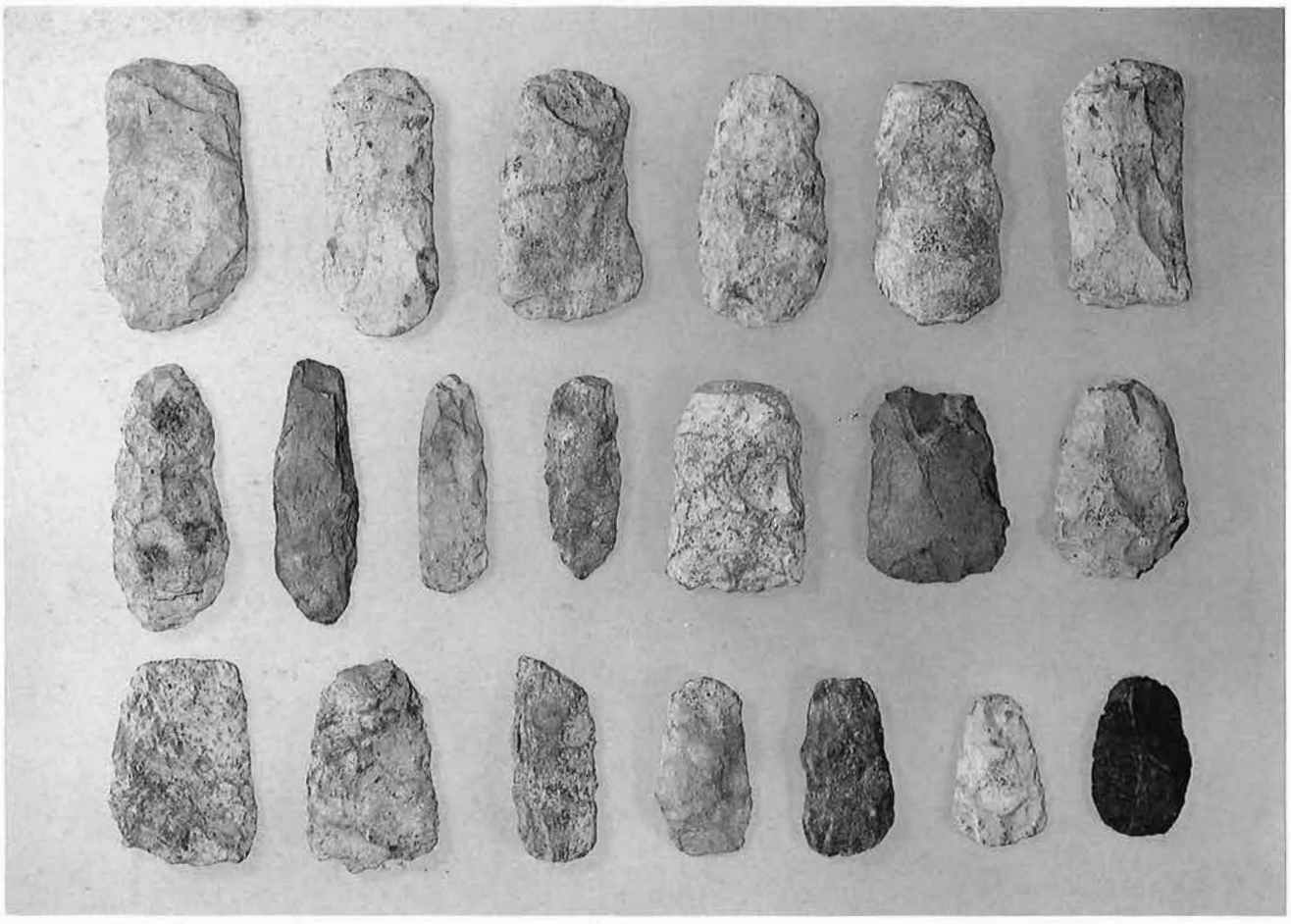


B．磨製石斧

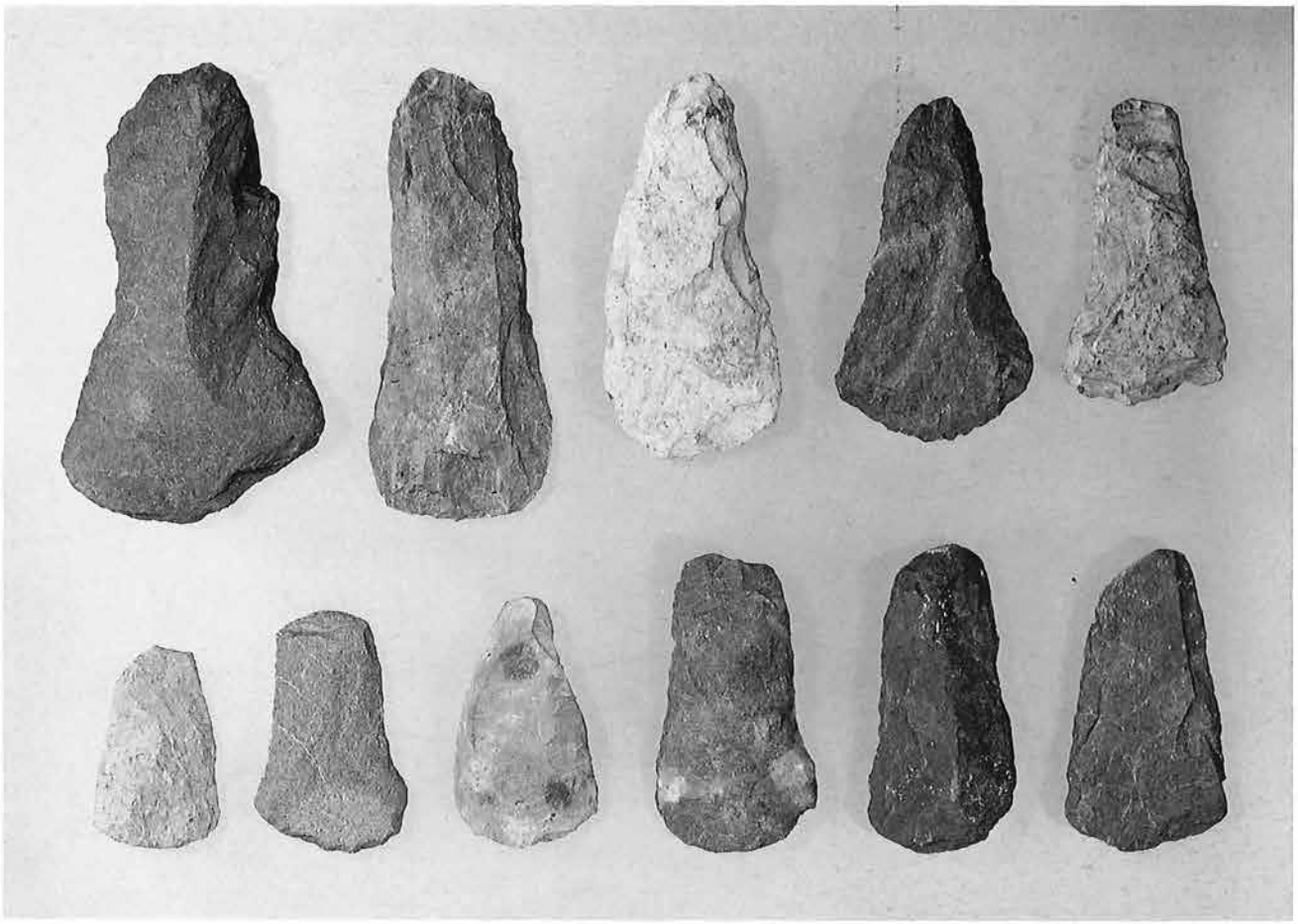
図版－72 出土遺物(21)



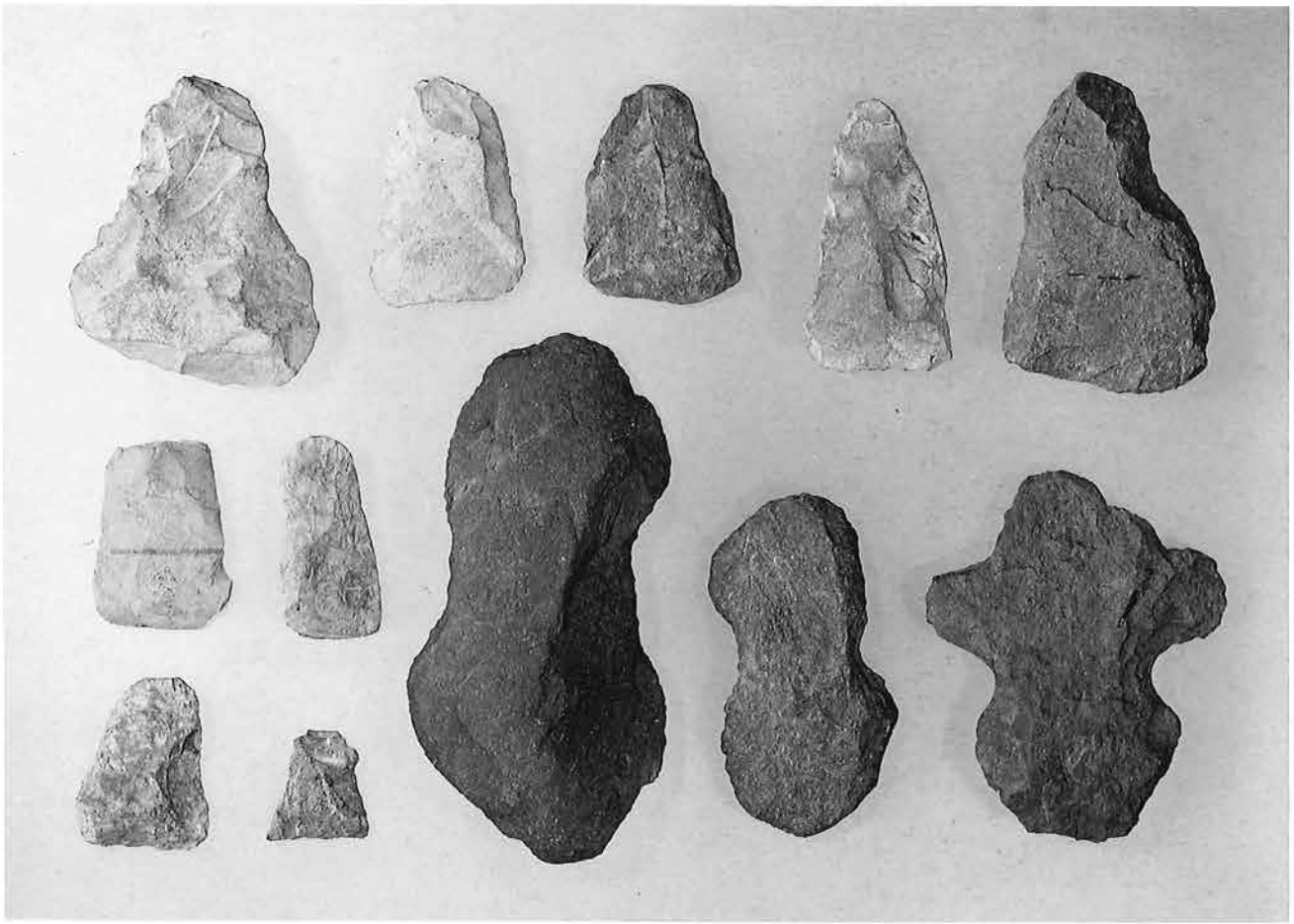
A．打製石斧－1



B．打製石斧－2



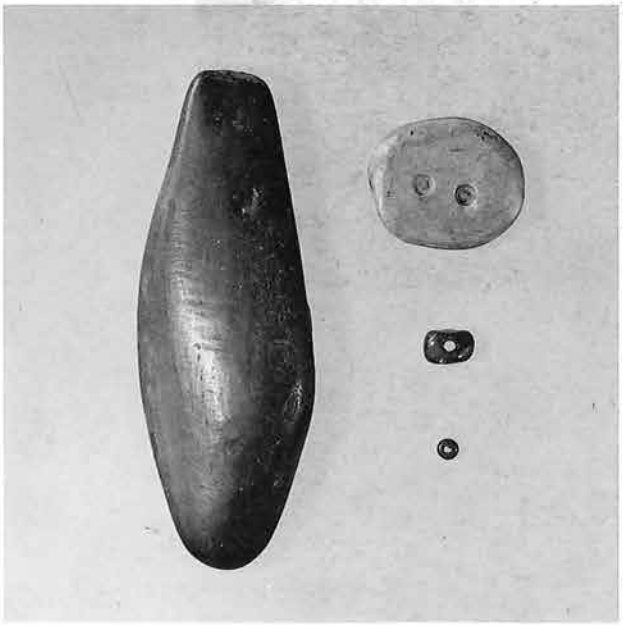
A．打製石斧－3



B．打製石斧－4

図版－74 出土遺物(23)

A．石製模造品出土状況（古墳時代）



B．装身具類（弥生・古墳時代）

C．硬玉製大珠

D．ドングリ類

A．曽利式土器把手（昭和24年出土）

B．勝坂式土器の人面意匠（昭和24年出土）

富士宮市文化財調査報告書　第23集

滝　戸　遺　跡

平成９年３月31日

編集　富士宮市教育委員会

発行　富士宮市教育委員会

〒418 静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22－1111(代)

印刷　フジ印刷(有)

〒418 静岡県富士宮市三園平752

(0544) 23－3040(代)